鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（177）

一般国道220号古江バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅳ）

稲荷山遺跡・宇都上遺跡
早山遺跡・鎮守山遺跡

（鹿屋市花岡町・古里町）

２０１３年２月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

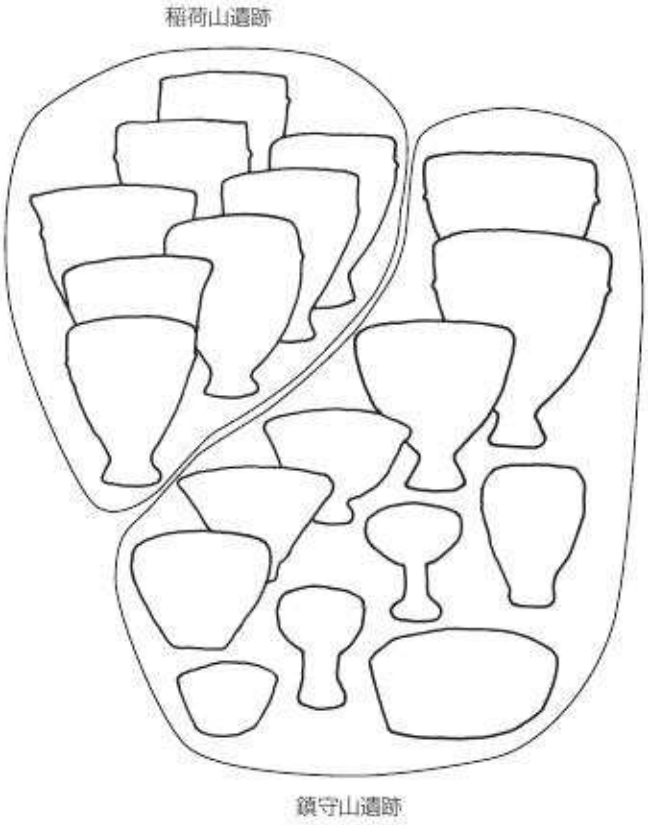
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
（177）
稲荷山遺跡・宇都上遺跡
早山遺跡・鎮守山遺跡

二〇一三年二月　鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県

遺跡遠景（南東から北西を望む）

古墳時代の土器（稲荷山遺跡・鎮守山遺跡）


稲荷山遺跡
鎮守山遺跡

序　　文

この報告書は，一般国道220号古江バイパス建設に伴って，平成20年度から平成22年度にかけて実施した鹿屋市花岡町に所在する稲荷山遺跡と宇都上遺跡，早山遺跡及び同市古里町に所在する鎮守山遺跡の発掘調査の記録です。

これらの遺跡は標高約130ｍの台地上にあり，縄文時代早期から古代・中世の遺構・遺物が発見されました。

特に注目されるものは，古墳時代の竪穴住居跡が稲荷山遺跡で５軒，鎮守山遺跡では20軒も見つかったことです。

なかでも，鎮守山遺跡では多くの竪穴住居跡が重なって発見されました。このことから，当時の人々が繰り返し住居を建て直し，長い年月にわたり集落を営んでいたことがわかりました。

今回の成果は，南九州における当該期の研究を進める上で貴重な資料を提供したものと考えています。

本報告書が，県民の皆様はじめ多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助として大いに活用されることになれば幸いです。

最後に，調査にあたり御協力をいただいた国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿屋市教育委員会，関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼を申し上げます。

平成25年２月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　　長　　寺　田　仁　志

報告書抄録

ふりがな	いなりやまいせき　うとうえいせき　はやまいせき　ちんじゅやまいせき
書名	稲荷山遺跡　宇都上遺跡　早山遺跡　鎮守山遺跡
副書名	一般国道220号古江バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第Ⅳ集
シリーズ	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	177
編集者名	國師　洋之
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4461 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番地1号 TEL 0995-48-5811
発行年月日	西暦2013年2月28日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査起因
稲荷山遺跡	鹿児島県	46203	12-486	31°24′00	130°46′48	分布調査 2006.03.03 試掘調査 2007.12.17 本調査 2008.10.02-2009.03.19 2009.05.08-2009.11.27	15,448㎡	一般国道220号古江バイパス建設
宇都上遺跡	鹿屋市		12-485	31°24′12	130°46′50	分布調査 2006.03.03 本調査 2009.06.15-2009.07.24 2010.05.06-2010.05.28	4,480㎡	
早山遺跡	花岡町		12-027	31°24′07	130°46′49	分布調査 2006.03.03 本調査 2008.12.01-2009.03.06 2009.06.08-2009.07.03	920㎡	
鎮守山遺跡	〃 古里町		12-487	31°23′44	130°47′03	分布調査 2006.03.03 本調査 2008.11.04-2009.03.19 2009.09.14-2010.03.19 2010.06.01-2010.07.27 2010.10.14-2010.11.12	6,910㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
稲荷山遺跡	集落跡	縄文早期 縄文晩期 ～弥生前期 弥生前期 ～弥生後期	集石遺構2基 竪穴住居跡3軒 土坑3基	磨石・敲石，石皿，礫器 黒川式土器，突帯文土器，石鏃，掻器，削器，打製石斧，磨石・敲石等 甕，壺	
		古墳	竪穴住居跡5軒 竪穴遺構1基 土坑2基	成川式土器，土製紡錘車，ミニチュア土器，土製品，須恵器，軽石製品等	
		古代・中世	溝状遺構4条	須恵器，土師質土器，青磁，鉄製品等	
宇都上遺跡	散布地	縄文早期 縄文前期 縄文後期		石京西式土器 深浦式土器 市来式土器，丸尾式土器，西平式土器，土製品	
		縄文晩期 古墳 中世以降	溝状遺構1条 道路状遺構1条	黒川式土器，石鏃，打製石斧等 成川式土器	
早山遺跡	散布地	－	なし	なし	
鎮守山遺跡	集落跡	縄文早期 縄文前期 縄文晩期	集石遺構2基	押型文土器，石鏃 轟A式土器 黒川式土器，石鏃，打製石斧，敲石等	
		古墳	竪穴住居跡20軒 土坑1基 溝状遺構2条	成川式土器，土製品，鞴の羽口，砥石，石製紡錘車，鉄製品	
		古代		土師器，須恵器	

遺跡の概要

稲荷山遺跡で注目されるのは，縄文時代晩期及び古墳時代の竪穴住居跡である。古墳時代の竪穴住居跡は5軒検出され，3軒は切り合い関係をもち，帰属時期は東原式土器段階であった。また，この住居跡周辺では多量の成川式土器（東原式土器段階及び笹貫式土器段階）が集中して出土した。

宇都上遺跡では，少量ではあるが縄文時代の各時期の土器が出土した。遺構は古墳時代の溝状遺構1条と中世以降の道路状遺構が検出された。

早山遺跡は調査の結果，表土下がシラスまたは大隅降下軽石の堆積層であることが確認され，遺構・遺物は発見されなかった。

鎮守山遺跡で注目されるのは，古墳時代の竪穴住居跡が20軒検出されたことである。中でも笹貫式土器段階の時期の住居跡が多く検出された。切り合い関係をもつ住居跡も多いことから，当時の人々がこの地で繰り返し住居を建て直していたことがわかった。

例　　言

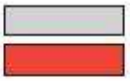
1　本報告書は，一般国道220号古江バイパス建設に伴う稲荷山遺跡・宇都上遺跡・早山遺跡・鎮守山遺跡の発掘調査報告書である。
2　稲荷山遺跡・宇都上遺跡・早山遺跡は鹿屋市花岡町に，鎮守山遺跡は同市古里町に所在する。
3　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
4　発掘調査事業は，平成20年度から平成22年度に実施し，整理・報告書作成事業は，平成22年度から平成24年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
5　掲載遺物番号は遺跡ごとに通し番号であり，本文・挿図・表・図版の遺物番号は一致する。
6　遺物注記等で用いた遺跡記号は，稲荷山遺跡が「イナリ山」，宇都上遺跡が「ウトウエ」，鎮守山遺跡が「チン」である。
7　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。
8　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高である。
9　本書で使用した方位は，すべて磁北である。
10　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，調査担当者が行った。また，基準点の杭設置業務作業は株式会社パスコ，空中写真の撮影は有限会社スカイサーベイ九州，有限会社ふじた及び九州航空株式会社に委託した。
11　遺構図，遺構分布図及び出土遺物の実測・トレースは，國師洋之・市村哲二・原栄子が整理作業員の協力を得て行った。鉄製品は，川口雅之の指導のもと実測・トレースを行い，石器実測の一部は，株式会社九州文化財研究所，（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託し，冨田逸郎の指導のもと國師が監修した。
12　出土遺物の写真撮影は，吉岡康弘・西園勝彦が行った。
13　本報告書の係る自然科学分析は，放射性炭素年代測定及び種実同定を株式会社加速器分析研究所，放射性炭素年代測定及び樹種同定を株式会社パレオ・ラボに委託し，その結果を第８章に掲載した。
14　本書の執筆は次のように分担し，編集は國師が行った。

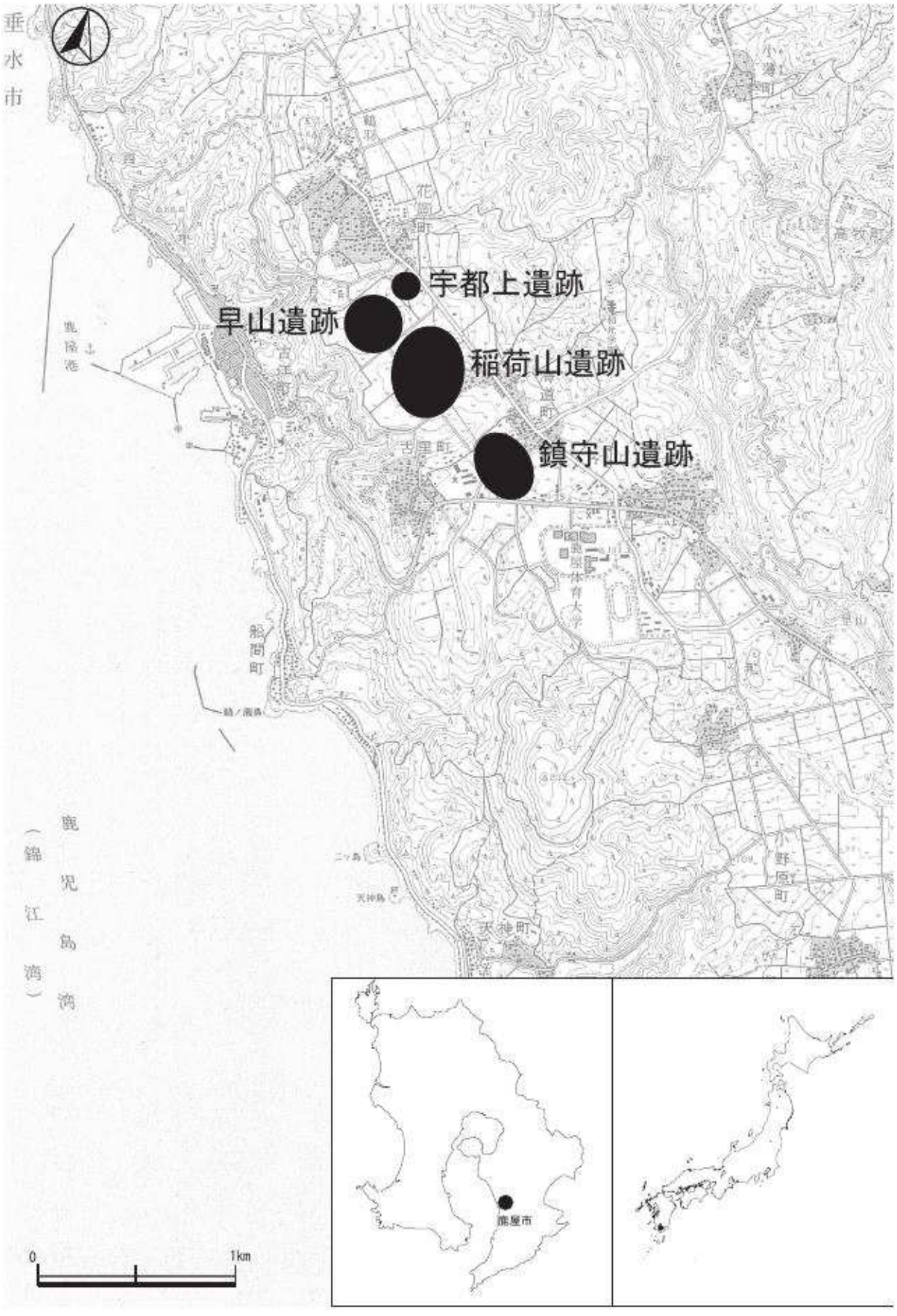
第１章	國師
第２章	
第１節・第２節	國師
第３節	市村
第３章	國師
第４章	
第１節～第３節	市村・國師
第４節	市村・國師・原
第５節～第７節	市村・國師
第５章	
第１節・第２節	原
第３節～第５節	原・國師
第６章	國師
第７章	國師
第８章	國師・市村
第９章	國師・原

15　本報告遺跡に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用を図る予定である。

凡　　例

1　使用した土色は『新版標準土色帖2004年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。
2　本書の土器・土師器の観察表における「胎土」の項目については，肉眼観察を行い，特に多く含まれる鉱物に「○」をつけた。観察表中の「長」は長石，「石」は石英，「角」は角閃石を表す。
3　土器の表現については次のとおりである。


黒色土器の黒色の範囲
赤色顔料の範囲


宇都上遺跡
早山遺跡
稲荷山遺跡
鎮守山遺跡
垂水市
鹿児島湾
（錦江湾）
0
1km
熊屋市

序　　文
報告書抄録
例言・凡例

本文目次

第１章　発掘調査の経過
　第１節　調査に至るまでの経緯…… 1
　第２節　事前調査…… 1
　第３節　本調査…… 1
　第４節　整理・報告書作成作業…… 5
第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境…… 7
　第２節　歴史的環境…… 7
　第３節　一般国道 220 号古江バイパス建設
　　に伴う各遺跡の概要……11
第３章　調査の方法
　第１節　調査の方法……13
　第２節　層序……14
第４章　稲荷山遺跡の調査の方法と成果
　第１節　発掘調査の方法と成果……15
　第２節　遺跡の層序……15
　第３節　縄文時代早期の調査
　　１　遺構……22
　　２　遺物……22
　第４節　縄文時代晩期～弥生時代前期の調査
　　１　遺構……24
　　２　遺物……29
　第５節　弥生時代前期～後期の調査
　　遺物……54
　第６節　古墳時代の調査
　　１　遺構……56
　　２　遺物……74
　第７節　古代・中世の調査
　　１　遺構……89
　　２　遺物……92
第５章　宇都上遺跡の調査の方法と成果
　第１節　発掘調査の方法と成果…… 101
　第２節　遺跡の層序…… 101
　第３節　縄文時代の調査
　　遺物…… 104
　第４節　古墳時代の調査
　　１　遺構…… 110
　　２　遺物…… 111
　第５節　中世以降の調査
　　遺構…… 116
第６章　早山遺跡の調査の方法と成果
　第１節　発掘調査の方法と成果…… 119
　第２節　遺跡の層序…… 119
第７章　鎮守山遺跡の調査の方法と成果
　第１節　発掘調査の方法と成果…… 121
　第２節　遺跡の層序…… 121
　第３節　縄文時代早期の調査
　　１　遺構…… 126
　　２　遺物…… 126
　第４節　縄文時代前期及び晩期の調査
　　遺物…… 128
　第５節　古墳時代の調査
　　１　遺構…… 136
　　２　遺物…… 172
　第６節　古代の調査
　　遺物…… 190
第８章　自然科学分析…… 197
第９章　総括…… 211
写真図版…… 217

挿図目次

第１図　年度別調査範囲図…… 6
第２図　周辺遺跡位置図……10
第３図　基本土層模式図……14

【稲荷山遺跡】
第１図　調査範囲図……15
第２図　土層図①……16
第３図　土層図②……17
第４図　土層図③……18
第５図　土層図④……19
第６図　土層図⑤……20
第７図　土層図⑥……21
第８図　遺構位置図，遺物出土状況図，
　　１号・２号集石……22
第９図　縄文時代早期の石器……23
第10図　遺構位置図……24
第11図　１号・２号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物…25
第12図　３号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物……26

第 13 図　１号～３号土坑 ……27
第 14 図　遺物出土状況図（土器）……28
第 15 図　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器① ……29
第 16 図　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器② ……30
第 17 図　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器③ ……31
第 18 図　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器④ ……32
第 19 図　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器⑤ ……33
第 20 図　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器⑥ ……34
第 21 図　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器⑦ ……35
第 22 図　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器⑧ ……36
第 23 図　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器⑨ ……37
第 24 図　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器⑩ ……38
第 25 図　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器⑪ ……39
第 26 図　遺物出土状況図（石器）……41
第 27 図　縄文時代晩期の石器① ……42
第 28 図　縄文時代晩期の石器② ……43
第 29 図　縄文時代晩期の石器③ ……44
第 30 図　縄文時代晩期の石器④ ……45
第 31 図　縄文時代晩期の石器⑤ ……46
第 32 図　縄文時代晩期の石器⑥ ……47
第 33 図　縄文時代晩期の石器⑦ ……48
第 34 図　縄文時代晩期の石器⑧ ……49
第 35 図　縄文時代晩期の石器⑨ ……50
第 36 図　縄文時代晩期の石器⑩ ……51
第 37 図　縄文時代晩期の石器⑪ ……52
第 38 図　縄文時代晩期の石器⑫ ……53
第 39 図　遺物出土状況図 ……54
第 40 図　弥生時代前期～後期の土器 ……55
第 41 図　遺構位置図，１号竪穴住居跡 ……56
第 42 図　２号竪穴住居跡内出土遺物状況図① ……58
第 43 図　２号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物① ……59
第 44 図　住居跡内出土遺物② ……60
第 45 図　２号竪穴住居跡内出土遺物状況図② ……61
第 46 図　２号竪穴住居跡内出土遺物状況図③ ……62
第 47 図　住居跡内出土遺物③ ……63
第 48 図　住居跡内出土遺物④ ……64
第 49 図　３号・４号竪穴住居跡，３号竪穴住居跡内出土遺物 ……65
第 50 図　４号竪穴住居跡内出土遺物 ……66
第 51 図　２号～４号竪穴住居跡周辺出土遺物状況図 …67
第 52 図　２号～４号竪穴住居跡周辺出土遺物① ……68
第 53 図　２号～４号竪穴住居跡周辺出土遺物② ……69
第 54 図　２号～４号竪穴住居跡周辺出土遺物③ ……70
第 55 図　２号～４号竪穴住居跡出土周辺遺物④ ……71
第 56 図　５号竪穴住居跡，竪穴遺構 ……72
第 57 図　１号・２号土坑 ……73
第 58 図　遺物出土状況図（甕）……75
第 59 図　古墳時代の土器① ……76
第 60 図　古墳時代の土器② ……77
第 61 図　古墳時代の土器③ ……78
第 62 図　古墳時代の土器④ ……79
第 63 図　古墳時代の土器⑤ ……80
第 64 図　古墳時代の土器⑥ ……81
第 65 図　遺物出土状況図（壺ほか）……82
第 66 図　古墳時代の土器⑦ ……83
第 67 図　古墳時代の土器⑧ ……84
第 68 図　古墳時代の土器⑨ ……85
第 69 図　古墳時代の土器⑩ ……86
第 70 図　古墳時代の土器⑪ ……87
第 71 図　軽石製品出土状況図 ……87
第 72 図　軽石製品 ……88
第 73 図　遺構位置図 ……89
第 74 図　１号溝状遺構，遺構内出土遺物 ……90
第 75 図　２号～４号溝状遺構，遺構内出土遺物 ……91
第 76 図　遺物出土状況図 ……92
第 77 図　古代・中世の土器，鉄製品 ……93

【宇都上遺跡】
第 1 図　調査範囲図 …… 101
第 2 図　土層図① …… 102
第 3 図　土層図② …… 103
第 4 図　遺物出土状況図（土器，土製品） …… 106
第 5 図　遺物出土状況図（石器） …… 106
第 6 図　縄文時代の土器，土製品 …… 107
第 7 図　縄文時代晩期の石器① …… 108
第 8 図　縄文時代晩期の石器② …… 109
第 9 図　遺構位置図，溝状遺構，遺構内出土遺物 110
第 10 図　遺物出土状況図 …… 112
第 11 図　古墳時代の土器① …… 113
第 12 図　古墳時代の土器② …… 114
第 13 図　古墳時代の土器③ …… 115
第 14 図　遺構位置図，道路状遺構 …… 116

【早山遺跡】
第 1 図　調査範囲図…… 119
第 2 図　土層図，調査区完掘状況…… 120

【鎮守山遺跡】
第 1 図　調査範囲図…… 121
第 2 図　土層図①…… 122
第 3 図　土層図②…… 123
第 4 図　土層図③…… 124
第 5 図　土層図④…… 125
第 6 図　遺構位置図，遺物出土状況図…… 126
第 7 図　１号・２号集石，縄文時代早期の遺物…… 127
第 8 図　遺物出土状況図…… 128

第 9 図　縄文時代前期の土器，
　　縄文時代晩期の土器① …… 129
第 10 図　縄文時代晩期の土器② …… 130
第 11 図　縄文時代晩期の土器③ …… 131
第 12 図　縄文時代晩期の石器① …… 132
第 13 図　縄文時代晩期の石器② …… 133
第 14 図　縄文時代晩期の石器③ …… 134
第 15 図　縄文時代晩期の石器④ …… 135
第 16 図　遺構位置図① …… 136
第 17 図　遺構位置図② …… 137
第 18 図　1 号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物 …… 139
第 19 図　2 号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物 …… 140
第 20 図　3 号竪穴住居跡 …… 141
第 21 図　3 号竪穴住居跡内出土遺物 …… 142
第 22 図　4 号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物 …… 144
第 23 図　5 号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物 …… 145
第 24 図　6 号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物 …… 146
第 25 図　7 号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物 …… 147
第 26 図　8 号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物 …… 149
第 27 図　9 号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物 …… 150
第 28 図　10 号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物 …… 151
第 29 図　11 号竪穴住居跡 …… 152
第 30 図　11 号竪穴住居跡内出土遺物 …… 153
第 31 図　12 号竪穴住居跡 …… 154
第 32 図　13 号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物 …… 156
第 33 図　14 号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物 …… 157
第 34 図　15 号竪穴住居跡 …… 158
第 35 図　15 号竪穴住居跡内出土遺物 …… 159
第 36 図　16 号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物 …… 160
第 37 図　17 号竪穴住居跡 …… 161
第 38 図　17 号竪穴住居跡内出土遺物 …… 162
第 39 図　18 号竪穴住居跡 …… 163
第 40 図　18 号竪穴住居跡内出土遺物① …… 164
第 41 図　18 号竪穴住居跡内出土遺物② …… 165
第 42 図　19 号竪穴住居跡 …… 166
第 43 図　19 号竪穴住居跡内出土遺物 …… 167
第 44 図　20 号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物 …… 168
第 45 図　土坑，1 号溝状遺構 …… 169
第 46 図　2 号溝状遺構 …… 170
第 47 図　2 号溝状遺構内出土遺物 …… 171
第 48 図　遺物出土状況図（甕）…… 174
第 49 図　古墳時代の土器① …… 175
第 50 図　古墳時代の土器② …… 176
第 51 図　古墳時代の土器③ …… 177
第 52 図　古墳時代の土器④ …… 178
第 53 図　古墳時代の土器⑤ …… 179
第 54 図　古墳時代の土器⑥ …… 180
第 55 図　遺物出土状況図（壺ほか，石器）…… 181
第 56 図　古墳時代の土器⑦ …… 182
第 57 図　古墳時代の土器⑧ …… 183
第 58 図　古墳時代の土器⑨ …… 184
第 59 図　古墳時代の土器⑩ …… 185
第 60 図　古墳時代の土器⑪ …… 186
第 61 図　古墳時代の土器⑫ …… 187
第 62 図　古墳時代の石器① …… 188
第 63 図　古墳時代の石器②，鉄製品 …… 189
第 64 図　遺物出土状況図 …… 190
第 65 図　古代の遺物 …… 190

表　目　次

表 1　周辺遺跡一覧表…… 9
表 2　一般国道 220 号古江バイパス建設に伴う
　　埋蔵文化財調査遺跡一覧表……12

【稲荷山遺跡】
表 1　縄文時代早期の石器観察表 ……23
表 2　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器観察表① 94
表 3　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器観察表② 95
表 4　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器観察表③ 96
表 5　弥生時代前期～後期の土器観察表 ……96
表 6　古墳時代の土器観察表（土製品を含む）① …96
表 7　古墳時代の土器観察表（土製品を含む）② …97
表 8　古墳時代の土器観察表（土製品を含む）③ …98
表 9　古代・中世の土器観察表① ……98
表 10　古代・中世の土器観察表② ……99
表 11　縄文時代晩期の石器観察表① ……99
表 12　縄文時代晩期の石器観察表② …… 100
表 13　古墳時代，古代・中世の石器観察表 …… 100
表 14　古代・中世の鉄製品観察表 …… 100

【宇都上遺跡】
表 1　縄文時代の土器観察表 …… 117
表 2　古墳時代の土器観察表① …… 117
表 3　古墳時代の土器観察表② …… 118
表 4　縄文時代晩期の石器観察表 …… 118

【鎖守山遺跡】
表 1　縄文時代早期の土器観察表 …… 191
表 2　縄文時代前期の土器観察表 …… 191
表 3　縄文時代晩期の土器観察表 …… 191
表 4　古墳時代の土器観察表（土製品を含む）① … 191
表 5　古墳時代の土器観察表（土製品を含む）② … 192

表6　古墳時代の土器観察表（土製品を含む）③… 193
表7　古墳時代の土器観察表（土製品を含む）④… 194
表8　古墳時代の土器観察表（土製品を含む）⑤… 195
表9　古代の土器観察表…… 195
表10　縄文時代早期の石器観察表 …… 196
表11　縄文時代晩期の石器観察表 …… 196
表12　古墳時代の石器等観察表 …… 196
表13　古墳時代の鉄製品観察表 …… 196

図版目次

【稲荷山遺跡】
図版1　遠景1（南東から北西方向を望む）…… 217
図版2　遠景2（東から西方向を望む）…… 218
図版3　土層，作業風景 …… 219
図版4　1号・2号集石遺構，1号～3号住居跡（縄文時代晩期）検出状況，完掘状況…… 220
図版5　2号住居跡（古墳時代）検出状況，住居跡内及び周辺の遺物出土状況，1号・2号住居跡（古墳時代）完掘状況 …… 221
図版6　3号～5号住居跡（古墳時代）完掘状況，竪穴遺構完掘状況ほか …… 222
図版7　縄文時代晩期の土器1 …… 223
図版8　縄文時代晩期の土器2 …… 224
図版9　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器1 … 225
図版10　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器2，弥生時代前期～後期の土器 …… 226
図版11　古墳時代の土器1 …… 227
図版12　古墳時代の土器2 …… 228
図版13　古墳時代の土器3 …… 229
図版14　縄文時代晩期の石器1・2ほか …… 230
図版15　縄文時代晩期の石器3 …… 231
図版16　古墳時代の軽石製品，古代・中世の遺物 … 232

【宇都上遺跡】
図版17　遠景（南から北方向を望む）…… 233
図版18　Ⅳ層遺物出土状況，作業風景，溝状遺構（古墳時代）完掘状況ほか…… 234
図版19　縄文時代の土器・土製品，縄文時代晩期の石器 …… 235
図版20　古墳時代の土器 …… 236

【鎖守山遺跡】
図版21　遠景1（南東から北西方向を望む）…… 237
図版22　遠景2（北東から南西方向を望む）…… 238
図版23　遠景3（北から南方向を望む），土層 …… 239
図版24　1号・2号集石（縄文時代早期）検出状況 …… 240
図版25　1号～4号，17号～20号住居跡（古墳時代）遠景ほか …… 241
図版26　作業風景，1号～4号住居跡（古墳時代）完掘状況 …… 242
図版27　8号・10号・11号住居跡（古墳時代）完掘状況 …… 243
図版28　16号住居跡（古墳時代）完掘状況ほか … 244
図版29　17号～20号住居跡（古墳時代）検出状況，完掘状況 …… 245
図版30　Ⅳ層出土土器，1号溝状遺構完掘状況 … 246
図版31　縄文時代の土器 …… 247
図版32　縄文時代晩期の石器 …… 248
図版33　古墳時代の土器1 …… 249
図版34　古墳時代の土器2 …… 250
図版35　古墳時代の土器3 …… 251
図版36　古墳時代の土器4 …… 252
図版37　古墳時代の土器5 …… 253
図版38　古墳時代の土器6 …… 254
図版39　古墳時代の土器7 …… 255
図版40　古墳時代・古代の遺物 …… 256

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区内における文化財の有無及びその取り扱いについて事前に協議し，諸開発との調整を図っている。この事前協議制に基づき，国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所（以下，大隅河川国道事務所）は，一般国道220号古江バイパス建設の計画に関し，事業区間内の一部（鹿屋市古里町～鹿屋市花岡町）における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会文化財課（以下，県文化財課）に照会した。

これを受け，県文化財課及び県立埋蔵文化財センター（以下，埋文センター）が平成17年度に分布調査したところ，遺物散布地が確認された。また，平成19年度には県文化財課が稲荷山遺跡の一部箇所の試掘調査を実施した。

この結果をもとに，事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては，大隅河川国道事務所，県文化財課，埋文センターの三者で協議を重ねて対応を検討してきた。

その後，大隅河川国道事務所と鹿児島県との間で委託契約が結ばれ，埋蔵文化財の保護と事業推進の調整を図るため，事業着手前に発掘調査を実施することとなった。

これを受けて，平成20年度から計画的かつ継続的に埋文センターが発掘調査を実施し，埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。

本書で報告する遺跡は，稲荷山遺跡・宇都上遺跡・早山遺跡・鎮守山遺跡の４遺跡である。

第２節　事前調査

１　分布調査

分布調査は平成18年３月３日に一般国道220号古江バイパス建設予定地の一部箇所（鹿屋市古里町～鹿屋市花岡町）を実施した。その結果，遺物散布地が認められ，稲荷山遺跡・宇都上遺跡・早山遺跡・鎮守山遺跡の４遺跡の存在を確認した。

調査体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　上今　常雄
調査企画　鹿児島県立埋蔵文化財センター
次長兼総務課長　有川　昭人
次長兼調査第一課長　新東　晃一
調査第二課長　立神　次郎
主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長　牛ノ濵　修
調査担当　鹿児島県教育庁文化財課
文化財主事　堂込　秀人
鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事　東　和幸
〃　高岡　和也
事務担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
主幹総務係長　平野　浩二
主査　寄井田正秀

２　試掘調査

試掘調査は平成19年12月17日に稲荷山遺跡の一部箇所（第１図参照）を任意に重機で掘り下げを行った。その結果，遺物包含層を確認し，縄文時代晩期及び古墳時代の土器片が出土した。

調査体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　宮原　景信
調査企画　鹿児島県立埋蔵文化財センター
次長兼総務課長　平山　章
次長　新東　晃一
調査第二課長　立神　次郎
主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長　牛ノ濵　修
調査担当　鹿児島県教育庁文化財課
文化財主事　堂込　秀人
事務担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
主幹総務係長　寄井田正秀
主査　蒲池　俊一

第３節　本調査

平成20年度は計画路線内の2,702㎡を対象にして平成20年10月２日から平成21年３月19日にかけて，稲荷山遺跡・早山遺跡・鎮守山遺跡の本調査を実施した。

また，平成21年度は15,714㎡を対象にして平成21年５月８日から平成22年３月19日にかけて，稲荷山遺跡・宇都上遺跡・早山遺跡・鎮守山遺跡の本調査を実施した。

平成22年度は4,092㎡を対象にして５月６日から５月28日にかけて宇都上遺跡の本調査を，６月１日から７月27日及び10月14日から11月12日にかけて鎮守山遺跡の本調査を実施した。

これらの調査の結果，主に縄文時代晩期及び古墳時代の遺構・遺物が発見された。

1　平成20年度の調査

(1) 調査体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査責任　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　宮原　景信
調査企画　鹿児島県立埋蔵文化財センター
次長兼総務課長　平山　章
次長兼南の縄文調査室長　池畑　耕一
調査第二課長　彌榮　久志
主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長　冨田　逸郎
調査担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事　廣　栄次
文化財調査員　橋口　拓也
事務担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
総務係長　紙屋　伸一
主査　鳥越　寛晴
現地指導
鹿児島県考古学会員　立神　次郎
鹿児島大学埋蔵文化財調査室准教授　中村　直子
鹿児島国際大学国際文化学部准教授　中園　聡
鹿児島大学法文学部准教授　本田　道輝

(2) 調査の経過（日誌抄より）※T＝トレンチ

【稲荷山遺跡】

10月

調査を開始。遺跡内の環境整備（草刈り，縄張り，杭打ち等）。遺跡の層序，遺構・遺物の広がりを確認するため，G－11・15～20区を掘り下げる。縄文時代晩期土器及び成川式土器や石器等が出土，遺物取り上げ。G－16～20区の土層図作成及び写真撮影，平板測量（Ⅳ層上面のコンター図作成）。

11月

調査区南端部の草払いの後，表土剥ぎ，ベルトコンベアーを設置。G－13・14区及びE～G－22～24区の掘り下げ開始。H－14区の検出ピット写真撮影及び半裁，G－11～13区の掘り下げ及び遺物取り上げ，F－23区の出土遺物取り上げ。

12月

H－13・14区，FG－13・14・22・23区の掘り下げ及び遺物取り上げ。H－13・14区のピット半裁。G－13区の遺物出土状況の写真撮影。ベルトコンベアーの設置。G－13区の土層図作成，遺物の取り上げ，写真撮影。G－22区の遺物出土状況の写真撮影。G－11区の分層。排土の処理，調査区の安全柵を設置。

1月

H－13区の南側掘り下げ。G－11～13・16区の掘り下げ。HG－13区の遺物取り上げ。安全柵設置。G－15・16区の掘り下げ。G－13区の土層図作成，写真撮影及びⅣa層下面のコンター図作成。G－15区のシラス，G－16区の薩摩火山灰層の掘り下げ及び土層図作成。

2月

G－14区の表土剥ぎ，掘り下げ。G－16区の掘り下げ，土層図作成。G－13区の掘り下げ，平板測量及び遺物取り上げ。G－15・16区の掘り下げ，平板測量，遺物取り上げ。G－17・18区の掘り下げ。

※現地指導

立神次郎氏（鹿児島県考古学会員）
中村直子氏（鹿児島大学埋蔵文化財調査室准教授）

3月

G－18～20区の埋め戻し。G－13･16区の掘り下げ。D～G－22～24区の表土剥ぎ。19日をもって，平成20年度の調査を終了。

※現地指導

中園　聡氏（鹿児島国際大学国際文化学部准教授）
本田　道輝氏（鹿児島大学法文学部准教授）

【早山遺跡】

12月

C－26区の表土剥ぎ。

1月

C－26区の表土剥ぎ。

2月

C－26区の表土剥ぎ，掘り下げ。

3月

C－26区の土層図作成，写真撮影。

【鎮守山遺跡】

11月

H－2～5区，G－10区のⅢ層掘り下げ，出土遺物取り上げ及び出土状況写真撮影。Ⅳ層上面遺構等の検出状況写真撮影。

12月

H－2・4区のⅢ・Ⅳ層掘り下げ，出土遺物取り上げ。H－4区及びG－10区内の土層図作成，土層写真撮影。Ⅳ層ピット検出状況写真撮影及び実測。

1月

H－2区のⅢ～Ⅴa層掘り下げ。

2月

H－2区のⅢ～Ⅴa層掘り下げ，出土遺物取り上げ。

※現地指導
中村直子氏（鹿児島大学埋蔵文化財調査室准教授）
3月
H－2区のⅢ～Ⅴa層掘り下げ。土層図作成，土層写真撮影。

2　平成21年度の調査

(1) 調査体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査責任　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　山下　吉美
調査企画　鹿児島県立埋蔵文化財センター
次長兼総務課長　齊藤　守重
次長兼南の縄文調査室長　青崎　和憲
調査第二課長　彌榮　久志
主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長　冨田　逸郎
調査担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事　鶴田　靜彦
文化財主事　國師　洋之
文化財調査員　原　栄子
事務担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
総務係長　紙屋　伸一
主査　鳥越　寛晴
現地指導
鹿児島国際大学国際文化学部教授　上村　俊雄
鹿児島大学法文学部准教授　本田　道輝
鹿児島大学埋蔵文化財調査室准教授　中村　直子
南九州考古学研究所所長　新東　晃一

(2) 調査の経過（日誌抄より）※T＝トレンチ

【稲荷山遺跡】

5月
調査開始。オリエンテーションの実施後，発掘機材及び道具の搬入，遺跡内の環境整備。重機による表土剥ぎとダンプによる廃土の運搬の後，人力による掘り下げ開始。D－25区の表土剥ぎ，FG－22区のⅡ～Ⅳ層の掘り下げ，出土遺物取り上げ。F－22区周辺の表土剥ぎ，G－19・20区の表土剥ぎ，G－19区のⅢ・Ⅳ層の掘り下げ，Ⅲ・Ⅳa層出土遺物取り上げ。GH－19区において，10ｍピッチの杭打ち。
6月
FG－22区のⅣ層の掘り下げ，出土遺物取り上げ。C－24区の重機による表土剥ぎ，C－25区のⅣ層掘り下げ。D－25区の表土剥ぎ，掘り下げの結果，横転の部分を確認。G－19区のⅣ層の出土遺物を写真撮影，土層図と10cmコンター図の作成。G－21区の竪穴状遺構完掘及び実測終了。G－22区のⅣ層の掘り下げ終了，セクションベルトの掘り下げ，出土遺物取り上げ，下層確認のための深掘り終了（Ⅴa～X層まで掘り下げ），10cmコンター図の作成。
7月
FG－21・22区の東壁土層図作成終了。C－25区のⅣ層掘り下げ，土器集中の検出・実測，セクションベルトの土層図作成終了。G－21区の竪穴状遺構写真撮影。G－20区のⅣ層掘り下げ，出土遺物取り上げ。H－18区の重機による表土剥ぎ終了。H－19区のⅤ・Ⅵ層掘り下げ(下層確認)。H－15～17区のⅥ･Ⅶ層掘り下げ。
8月
H－15・16区の下層確認のための深掘り（X層まで），現道下の写真撮影。H－17～19区の土層図作成のための深掘り終了，写真撮影，土層図作成。G－20・21区のⅢ・Ⅳ層掘り下げ，出土遺物取り上げ。G－21区出土の甕の写真撮影及び実測終了。G－20区検出の住居跡の写真撮影及び実測。
※鹿屋市教育委員会主催の発掘体験実施のため，児童25人，引率者5人が来跡。
9月
GH－15～19区の現道及び拡幅部分を国土交通省へ引き渡し。GH－13・14区の現道下の掘り下げ開始，Ⅳ層掘り下げ，出土遺物取り上げ。G－20・21区のⅣ層掘り下げ，出土遺物取り上げ，コンター図作成。G－20区の竪穴住居跡の実測，柱穴及び土坑の検出，柱穴の半掘，床面の精査，写真撮影。土坑の実測及び写真撮影。G－21区の住居跡の検出及び精査，下層確認掘り下げ。
10月
GH－13・14区の竪穴住居跡の検出，検出状況写真撮影，完掘後実測及び写真撮影。竪穴住居跡のピット精査，土坑の検出状況写真撮影。H－13区の集石遺構検出。H－14区の土坑実測及び完掘写真撮影。H－12区の溝状遺構の完堀写真撮影，実測。GH－12・13区のⅣ層掘り下げ終了，出土遺物取り上げ，下層確認のための掘り下げ。G－20区の竪穴住居跡の実測及び完掘状況写真撮影。竪穴住居跡の土層図作成及び土壌サンプリング。G－21区の竪穴住居跡実測，精査及びピットの検出，写真撮影。下層確認掘り下げ（Ⅴa～X層まで）。
11月
G－20・21区の下層確認トレンチ完堀状況写真撮影。GH－11・12区のⅣ層掘り下げ，下層確認のための掘り下げ終了，集石遺構の実測，土坑の完掘写真撮影及び実測。GH－13・14区の完掘状況の写真撮影。H－13区の土坑精査及び完堀，写真撮影。27日をもって調査を終了。

【宇都上遺跡】
6月
環境整備，ＡＢ－26区の表土剥ぎ及びⅢ・Ⅳ層の掘り下げ。
7月
ＡＢ－26区のⅣ層の掘り下げ，出土遺物状況の写真撮影及び取り上げ，コンター図の作成，下層確認のための深掘り及び土層図作成。

【早山遺跡】
6月
ＣＤ－25・26区表土剥ぎ，掘り下げ，写真撮影，埋め戻し，調査終了。

【鎮守山遺跡】
9月
環境整備を行った後，ＧＨ－5－8区の表土剥ぎ。
10月
排土置き場の整地及び調査区内の表土剥ぎ。
11月
ＧＨ－5・6区のⅢ・Ⅳ層掘り下げ。Ⅳ層出土遺物の取り上げ。撹乱箇所の除去を行う。Ⅳ層で竪穴住居跡5軒検出。Ｈ－8区下層確認掘り下げ（Va層～Ⅵ層）。
12月
ＧＨ－6区のⅣ層検出の竪穴住居跡群の検出状況写真撮影。溝状遺構の検出及び断面写真撮影，実測（溝は竪穴住居跡を切りＨ－7区へ延びていることが判明）。竪穴住居跡の切り合い状況，床着遺物の写真撮影。Ｈ－8区下層確認掘り下げ終了。
※現地指導
中村　直子氏（鹿児島大学埋蔵文化財調査室准教授）
本田　道輝氏（鹿児島大学法文学部准教授）
1月
Ｈ－1区表土剥ぎ及び盛土の除去。ＧＨ－2・3区のⅣ層掘り下げ，出土遺物の写真撮影。ＧＨ－6区のⅣ層検出の竪穴住居跡の実測。竪穴住居跡の完掘写真撮影及びピット精査。溝状遺構の実測。遺構配置図の作成。空撮準備。Ｈ－8区撹乱部分の除去。ＧＨ－7・8区下層確認掘り下げ終了（Ⅵ層～ⅩⅡ層）。
※現地指導
上村　俊雄氏（鹿児島国際大学国際文化学部教授）
2月
Ｈ－1区のⅡ・Ⅲ層掘り下げ，出土遺物取り上げ，完掘状況写真撮影，埋め戻し。Ｇ－2区のⅣ層検出土坑の実測，Ⅳ層掘り下げ終了。ＧＨ－6区のⅣ層検出の竪穴住居跡の床面・ピット精査。
3月
Ｈ－3区仮設道路下を調査。道路を剥いだところ，シラスが出てきた為この箇所は削平されたと判断。写真撮影の為の掘り下げを行う。ＧＨ－6・7区の一部箇所のⅣ～Ⅶ層掘り下げ，出土遺物取り上げ。
※現地指導
新東　晃一氏（南九州考古学研究所所長）

2　平成22年度の調査

(1) 調査体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査責任　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　山下　吉美
調査企画　鹿児島県立埋蔵文化財センター
次長兼総務課長　田中　明成
次長兼南の縄文調査室長　中村　耕治
調査第二課長　井ノ上秀文
主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長　鶴田　静彦
調査担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事　國師　洋之
文化財主事　市村　哲二
文化財調査員　原　栄子（～7月）
事務担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
総務係長　大園　祥子
主事　田之上美佳（～7月）

(2) 調査の経過（日誌抄より）

【宇都上遺跡】
5月
遺跡内の環境整備。Ａ－28区の表土剥ぎ，Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ。Ⅲ層上面で道路状遺構，Ⅳ層で溝状遺構を各1条検出。Ⅲ・Ⅳ層出土遺物写真撮影及び取り上げ。溝状遺構実測及び完掘状況写真撮影，実測。Ⅳ層掘り下げ終了，完掘状況写真撮影。下層確認の掘り下げ（Ｖａ層～Ⅷ層まで）終了。土層図作成，土層写真撮影。調査範囲図及びコンター図作成。

【鎮守山遺跡】
6月
調査区内の環境整備。Ｈ－3～5区表土剥ぎ，Ⅲ～Ｖａ層掘り下げ，出土遺物取り上げ。Ⅳ層検出の溝状遺構の完掘，写真撮影，実測。Ⅳ層検出の竪穴住居跡を調査中。ＧＨ－7区表土剥ぎ，Ⅲ・Ⅳ層掘り下げ。
7月
Ｈ－5区のⅣ層検出の竪穴住居跡を完掘後，完掘状況

写真撮影，実測。下層確認掘り下げ(ＸⅠ層上面まで)。農道下を調査。Ⅳ層で成川式土器集中部を検出。写真撮影の後，実測。ＧＨ－７区のⅣ層検出の竪穴住居跡を完掘後，完掘状況写真撮影，実測。

10月

Ｇ－４～６区の表土剥ぎ。Ｇ－４区は遺物包含層のⅢ・Ⅳ層が削平を受けていることが判明。Ｇ－５区のVa層コンター図作成。Ｇ－４～６区の下層確認掘り下げ開始。Ｇ－５区の農道側で集石遺構を検出，写真撮影。

11月

Ｇ－５区の農道側及び市道側の土層写真撮影。市道側Ⅷ～ⅩⅡ層掘り下げ終了。市道側土層図作成。Ｇ－５区完掘状況写真撮影。集石遺構実測終了。調査終了。

第４節　整理・報告書作成作業

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，平成22年４月～平成23年３月，平成23年４月～６月，平成24年４月～12月に鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。

出土遺物の水洗い，注記，遺構内遺物と包含層遺物の仕分け，石器や一般礫の仕分け等の基礎作業及び石器実測の委託，遺物の実測・拓本，遺構・遺物のトレース，レイアウト，原稿執筆等の編集作業を行った。また，鹿児島国際大学国際文化学部大西智和教授と鹿児島大学埋蔵文化財調査室（平成24年度から同大学埋蔵文化財調査センターに改称）中村直子准教授に古墳時代の竪穴住居跡，遺構内遺物，包含層遺物に関する指導をいただいた。

整理・報告書作成作業に関する体制は，以下のとおりである。

１　平成22年度の作成体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成責任　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　山下　吉美
作成企画　鹿児島県立埋蔵文化財センター
次長兼総務課長　田中　明成
次長兼南の縄文調査室長　中村　耕治
調査第二課長　井ノ上秀文
主任文化財主事兼調査第二課第二調査係長　鶴田　静彦
作成担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事　國師　洋之
文化財主事　市村　哲二
文化財調査員　原　栄子
事務担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
総務係長　大園　祥子
主事　田之上美佳
（～７月）
作成指導
鹿児島国際大学国際文化学部教授　大西　智和
鹿児島大学埋蔵文化財調査室准教授　中村　直子

２　平成23年度の作成体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成責任　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　寺田　仁志
作成企画　鹿児島県立埋蔵文化財センター
次長兼総務課長　田中　明成
次長兼南の縄文調査室長　井ノ上秀文
調査第二課長　冨田　逸郎
調査第二課第一調査係長　八木澤一郎
作成担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事　市村　哲二
事務担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
総務係長　大園　祥子
主査　高崎　智博

３　平成24年度の作成体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
作成責任　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　寺田　仁志
作成企画　鹿児島県立埋蔵文化財センター
次長兼総務課長　新小田　穣
次長兼南の縄文調査室長　井ノ上秀文
調査第二課長　冨田　逸郎
調査第二課第一調査係長　八木澤一郎
作成担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事　國師　洋之
事務担当　鹿児島県立埋蔵文化財センター
総務係長　大園　祥子
主査　岡村　信吾
作成指導
鹿児島大学埋蔵文化財調査センター准教授　中村　直子

報告書作成検討委員会　平成24年11月２日
寺田所長ほか９名
報告書作成指導委員会　平成24年11月１日
井ノ上次長ほか６名

第1図　年度別調査範囲図

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

稲荷山遺跡・宇都上遺跡・早山遺跡は鹿児島県鹿屋市花岡町に所在し，鎮守山遺跡は同市古里町に所在する。これらの場所は標高約 130 mの台地上に位置している。

鹿屋市は大隅半島のほぼ中央部に位置し，平成 18 年１月には周辺地域（輝北町･串良町･吾平町）と合併して，総面積 448.33㎢，人口約 10 万６千人を有する市となり，大隅地域の交通・産業・経済・文化の中心地である。

市街地北部には大篦柄岳・横岳・御岳等の 1,000 m級の山系が連なって高隈山を形成し，本城・高須・高隈の各河川等の源をなしている。地質は中生層の砂岩･泥岩･粘板岩が主で，西部には花崗岩がみられる。東部から北部には，標高 50 ～ 170 mの広大な笠之原台地が広がっている。この台地は，姶良カルデラから噴出したといわれる入戸火砕流堆積物（シラス，約 24,000 年前）により形成された。また，高隈山系を源とする高隈川が串良川・肝属川と名称を変えながら，笠之原台地を解析し志布志湾に注ぐ。市の西側は肝属川同様，高隈山系を源とする高須川がほぼ南へ流れ，鹿児島湾に注いでいる。

本遺跡が位置する場所は，標高約 130 mの台地上に位置すると先述したが，東側には高隈山系がありその扇状地にあたる。本遺跡周辺の堆積物は入戸火砕流堆積物を基盤として，厚さ約７mに及ぶ。入戸火砕流の上に乗る一般的な堆積物と違って，このように厚いのは遺跡周辺の地形が丘陵に囲まれた凹地状をなし，ここに周囲の丘陵から土石流として堆積物が供給されてきたことによる。このため現在のここの台地表面は扇状地または麓屑面と呼ばれる地形からなり，扇状地に緩く傾斜する。このような堆積環境下にあるため，角礫と有機質の粘土・シルトの混在した堆積物がここの地層の大部分を占めている。

また，本遺跡からは，北側に桜島，西側には錦江湾及び開聞岳を展望することができる。

第２節　歴史的環境

鹿屋という地名は「和名抄」に記されており，平安時代初期には「かのや」と呼ばれていたことがわかる。中世（鎌倉期～戦国期）には，鹿屋院と称され建久８年の「大隅国図田帳」には「鹿屋院八十五丁九段」と記され島津荘寄郡であり，院内に大隅正八幡宮領「恒見八丁」が設定されている。近世（江戸時代）には鹿屋郷と称される。遺跡が立地している花岡町は，花岡郷と称され，1724 年（享保９）に島津家の庶家である花岡島津氏の私領地となった。

鹿屋市では，昭和 60 年代の鹿屋バイパスや古江バイパスの建設に伴う発掘調査の結果，市内に所在する遺跡数は，昭和 59 年当時の 173 から 245 に増えた。また，平成 18 年度の合併により，旧輝北町・旧串良町・旧吾平町の遺跡が鹿屋市の遺跡に統合され，遺跡数は 550 箇所に増加した。

本遺跡の所在する花岡町の台地では昭和 60 年代の圃場整備に伴い，狩俣遺跡･鶴羽遺跡･俣刈遺跡･早山遺跡･宮の脇遺跡の発掘調査が行われた。また，古江バイパス建設に伴って，中野西遺跡･松山田西遺跡･ 鷲ヶ迫遺跡･北原中遺跡・領家西遺跡・天神平溝下遺跡・宇都上遺跡・早山遺跡・稲荷山遺跡・鎮守山遺跡の発掘調査が行われた。これらの遺跡から旧石器時代，縄文時代（草創期～晩期），弥生時代，古墳時代，古代・中世の遺構及び遺物が発見された。このように，鹿屋市には旧石器時代から縄文時代，弥生時代，古墳時代，歴史時代と数多くの遺跡が所在している。以下に周辺遺跡と併せて，主な遺跡を時代別に記載した。

旧石器時代

鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査により，榎崎Ａ遺跡では細石器文化期の遺物が，榎崎Ｂ遺跡では細石器と局部磨製石斧などが出土した。西丸尾遺跡では細石器文化期及びナイフ形石器文化期の遺構・遺物が発見された。なかでも水晶製の細石刃，細石刃核が注目される。また，古江バイパス建設に伴う中野西遺跡・松山田西遺跡（根木原遺跡Ａ地点）・鷲ヶ迫遺跡（根木原遺跡Ｂ地点）の発掘調査では，細石器文化期及びナイフ形石器文化期の遺物が多数出土し，礫群も４基検出された。

縄文時代

鹿屋市には縄文時代の重要な遺跡が数多く存在する。草創期の遺跡としては，南町の伊敷遺跡が著名で，薩摩火山灰下部の層から隆帯文土器と石斧が出土した。松山田西遺跡では草創期に該当する土器，早期の岩本式土器や中期の春日式土器等が出土した。本遺跡の所在する，花岡地区でも多数の縄文時代の遺跡が報告されている。昭和 57 年発行の大隅地区埋蔵文化財分布調査概報において，後期の貝殻条痕文土器の表採が報告された。昭和 61 年の柿窪遺跡の発掘調査によると早期及び晩期の土器が出土している。また，近年報告された領家西遺跡からは，集石遺構２基と土坑１基が検出された。遺物は塞ノ神式土器，指宿式土器，黒川式土器等，早期から晩期まで多数出土した。さらに，天神平溝下遺跡からは後期の市来式土器や磨消縄文土器が出土した。

弥生時代

水ノ谷遺跡・榎木原遺跡では，前期から中期にかけての資料が報告されている。特に板付Ⅱ式の壺及び甕が出土したことや，榎木原遺跡で出土した西瀬戸内の影響を思わせる縦位突帯を持つ壺等は，当時の大隅半島の状況を知る上で貴重な資料となっている。また，王子遺跡では中期から後期初頭の住居跡が27軒検出された。なかでも花弁状住居跡，棟持柱付の掘立柱建物及び土坑を伴う住居跡は，九州地方の弥生時代の集落構成を知る上で，考古学及び建築学に大きな指針を与えた。住居跡内からは在地の山ノ口式土器，瀬戸内系及び北九州の土器が共伴した。これは当時の文化圏や交流状況を知る上で，重要な資料となっている。さらに，中ノ丸遺跡では中期末から後期初頭の竪穴住居跡や円形周溝遺構が検出された。中牧遺跡では竪穴住居跡3軒と土坑1基が検出され，名主原遺跡では後期後半の石庖丁31本と角柱状の小型砥石が出土した。前畑遺跡では竪穴住居跡4軒，掘立柱建物跡9棟が検出され，遺物は山之口式土器，須玖式土器などが出土した。

古墳時代

大隅半島志布志湾沿岸や肝属平野は，本県における畿内型高塚古墳や地下式横穴墓の分布の中心となっている。串良町の岡崎古墳群では古墳11基と地下式横穴墓3基が，上小原古墳群では古墳5基が，供養の上古墳群では古墳2基がそれぞれ確認されている。また，祓川地下式横穴墓群では地下式横穴墓33基が検出された。さらに，領家西遺跡では竪穴住居跡が63軒，天神平溝下遺跡では同2軒が検出され，名主原遺跡では竪穴住居跡54軒と地下式横穴墓6基が検出された。

南九州の古墳時代の土器は地域色が強く，一般に「成川式土器」と呼ばれている。甕に突帯と脚部が作られる器形は，弥生時代以降，型式は変化するものの「土師器化」することなく，古墳時代全時期をとおして存在し続けた土器である。この成川式土器が大隅半島では数多く出土しており，古墳時代の活動拠点の範囲の広大さが窺える。

古代～中・近世

鹿屋市内で確認されている奈良時代から平安時代の遺跡として，飯盛ヶ岡遺跡・榎崎A・B遺跡・宮の脇遺跡が挙げられる。宮の脇遺跡では青銅器の帯金具が出土しており，古代官位制がこの地域に導入されていたことを示す貴重な資料として注目されている。中ノ原・中の丸遺跡からは，中世から近世にかけての遺構・遺物が発見されている。花岡地区では宮の脇遺跡・鶴羽遺跡等，古代から近世にかけての遺跡が所在する。近世の花岡地区は外城の一つであり，花岡島津氏の所領として古くから栄え，同家の居城として鶴羽城が残る。領家西遺跡では，中世の掘立柱建物跡9棟や土坑墓11基が検出された。

〈参考・引用文献〉

鹿屋市史編集委員会　1967『鹿屋市史』

『角川日本地名大辞典』編集委員会　1983『角川日本地名大辞典46鹿児島県』

鹿児島県教育委員会　1985『王子遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（34）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　1990『前畑遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(52)

鹿児島県教育委員会　1992『榎崎A遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（63）

鹿児島県鹿屋市教育委員会　2007『岡崎古墳群・上小原古墳群・供養の上古墳群墳丘測量図・岡崎15号墳』鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(81)

鹿児島県鹿屋市教育委員会　2007『中牧遺跡』鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(82)

鹿児島県鹿屋市教育委員会　2007『薬師堂の古墳・祓川地下式横穴墓群』鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(83)

鹿児島県鹿屋市教育委員会　2008『名主原遺跡』鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(84)

鹿児島県鹿屋市教育委員会　2008『早山遺跡』鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(85)

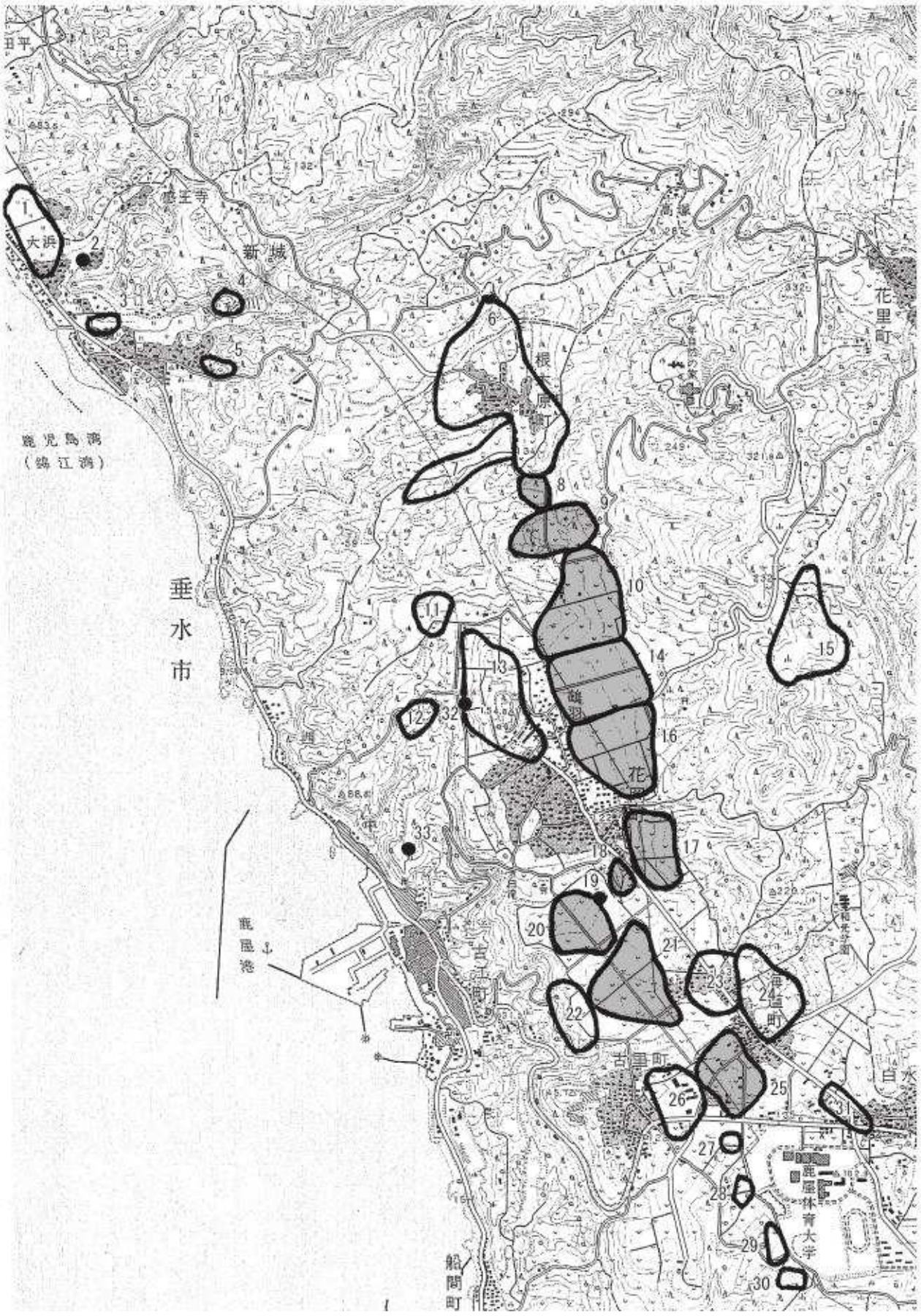
鹿児島県立埋蔵文化財センター　2008『鷲ヶ迫遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(132)

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2008『前畑遺跡Ⅱ』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(133)

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2009『領家西遺跡・天神平溝下遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(141)

表1　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	主な時代	遺構・遺物	備考
1	宮下	垂水市新城大浜	縄文・弥生・古墳	黒川式・成川式等	垂水市埋蔵文化財報告書5
2	新城農協	垂水市新城農協製粉工場	弥生	甕・壺・高坏等	県市町村別遺跡地名表
3	佃	垂水市新城	古墳	成川式等	県市町村別遺跡地名表
4	井ノ尾	垂水市新城	古墳	成川式等	県市町村別遺跡地名表
5	新城跡	垂水市新城籠字中原	縄文・弥生	縄文・弥生土器等	県埋文報40
6	根木原	鹿屋市花岡町	縄文・古墳	成川式等	鹿屋市埋文報7
7	柿窪	鹿屋市根木原町柿窪	縄文・古墳・古代	黒川式・刻目突帯文・成川式等	鹿屋市埋文報7・37
8	中野西	鹿屋市花岡町	旧石器・古墳・古代	礫群・ナイフ形石器・成川式・鉄鏃等	県埋文報76
9	松山田西	鹿屋市花岡町	縄文・古墳	集石・竪穴住居跡等	県埋文報76
10	鷲ヶ迫	鹿屋市花岡町	旧石器・縄文・古墳	落とし穴・成川式等	県埋文報132
11	城ヶ崎	鹿屋市花岡町城ヶ崎	縄文・古墳	前平式・成川式等	鹿屋市埋文報7
12	大久保	鹿屋市古江町大久保	古墳	成川式等	鹿屋市埋文報7
13	鶴羽城跡	鹿屋市花岡町鶴羽	縄文・古墳・中世	石坂式・成川式等	県埋文報23，鹿屋市埋文報3
14	北原中	鹿屋市花岡町	縄文・古墳・中世	集石・円形土坑等	県埋文報132
15	榮立	鹿屋市花岡町榮立	縄文・古墳	条痕文・沈線文等	県埋文報23
16	領家西	鹿屋市花岡町	縄文・古墳・中世	竪穴住居跡・配石遺構等	県埋文報141
17	天神平溝下	鹿屋市花岡町	縄文・古墳・古代	集石・竪穴住居跡等	県埋文報141
18	宇都上	鹿屋市花岡町	縄文・古墳・古代	成川式・溝等	県埋文報132，本報告書
19	円覚山真如院法界寺跡	鹿屋市古江町木谷	近世		「鹿屋市史」
20	早山	鹿屋市花岡町早山・宮ノ脇	縄文・弥生・古墳	山之口式・竪穴住居跡・成川式等	鹿屋市埋文報4・85 本報告書
21	稲荷山	鹿屋市花岡町	縄文・弥生・古墳	刻目突帯文・竪穴住居跡・成川式等	本報告書
22	枯木ヶ尾	鹿屋市小里町枯木ノ尾	弥生・古墳	成川式・須恵器等	県埋文報13
23	本戸口	鹿屋市海道町本戸口	縄文・古墳		県埋文報23
24	俣刈	鹿屋市海道町俣刈道	縄文・古墳	成川式等	県埋文報13，鹿屋市埋文報3
25	鎮守山	鹿屋市古里町	縄文・古墳	晩期土器・竪穴住居跡・成川式等	本報告書
26	古里	鹿屋市古里町	縄文・弥生・古墳	成川式等	県埋文報23
27	古里B	鹿屋市古里町	古墳・中世	成川式・土師器等	県市町村別遺跡地名表
28	古里A	鹿屋市古里町	古墳・中世	成川式・土師器等	県市町村別遺跡地名表
29	石鉢谷B	鹿屋市白水町	古墳・中世	成川式・土師器等	県市町村別遺跡地名表
30	石鉢谷A	鹿屋市白水町	古墳・中世	成川式・土師器等	県市町村別遺跡地名表
31	千場	鹿屋市白水町	縄文・弥生		
32	木谷城跡	鹿屋市花岡町	中世		県埋文報43
33	古江城跡	鹿屋市古江町古江	中世		県埋文報43



第2図　周辺遺跡位置図　(1：25,000)

第３節　一般国道 220 号古江バイパス建設に伴う各遺跡の概要

１　中野西遺跡（位置図 No. 8）

鹿屋市根木原町の標高約 120 ｍのシラス台地から丘陵地へと変化する場所に位置する。主な遺構は旧石器時代の礫群，古墳時代の土坑が検出された。また，主な遺物は旧石器時代のナイフ形石器・細石刃核，古墳時代の成川式土器，古代の鉄剣･鉄鏃･須恵器･土師器が出土した。

２　松山田西遺跡（位置図 No. 9）

鹿屋市根木原町の標高約 120 ｍの丘陵地に位置する。主な遺構は，縄文時代の集石遺構，古墳時代の竪穴住居跡・土坑が検出された。また，主な遺物は縄文時代の石鏃，古墳時代の成川式土器が出土した。

３　鷲ヶ迫遺跡（位置図 No.10）

鹿屋市花岡町の標高約 130 ｍの丘陵地に位置する。主な遺構は，旧石器時代及び縄文時代の落とし穴，古墳時代の竪穴住居跡・溝状遺構が検出された。また，主な遺物は旧石器時代の三稜尖頭器，縄文時代中期の春日式土器，晩期の黒川式土器・石鏃，古墳時代の成川式土器・軽石製品が出土した。

４　北原中遺跡（位置図 No.14）

鹿屋市花岡町の標高約 130 ｍの丘陵地に位置する。主な遺構は，縄文時代の集石遺構，古墳時代の竪穴住居跡，中世の溝状遺構・円形土坑が検出された。また，主な遺物は縄文時代早期の塞ノ神式土器，晩期の黒川式土器・石鏃，古墳時代の成川式土器，中世の須恵器・土師器・石帯が出土した。

５　領家西遺跡（位置図 No.16）

鹿屋市花岡町の標高約 130 ｍの台地上に位置する。主な遺構は，縄文時代の集石遺構・土坑，古墳時代の竪穴住居跡・溝状遺構，中世の掘立柱建物跡・配石遺構・竪穴遺構・円形周溝が検出された。また，主な遺物は縄文時代晩期の入佐式土器・黒川式土器，古墳時代の成川式土器・石庖丁・鉄器，中世の石鍋・陶磁器・古銭が出土した。

６　天神平溝下遺跡（位置図 No.17）

鹿屋市花岡町の標高約 130 ｍの台地上に位置する。主な遺構は，縄文時代の集石遺構・土坑，古墳時代の竪穴住居跡・道跡，古代～近世にかけての溝状遺構・畠畝が検出された。また，主な遺物は縄文時代後期の市来式土器，古墳時代の成川式土器・勾玉，古代の土師器，近世の陶磁器が出土した。

７　宇都上遺跡（位置図 No.18）

鹿屋市花岡町の標高約 120 ｍに位置する。主な遺構は，縄文時代の集石遺構，古墳時代の溝状遺構，古代～中世にかけての土坑・溝状遺構・道路状遺構が検出された。また，主な遺物は縄文時代後期の市来式土器・丸尾式土器，晩期の黒川式土器・組織痕土器・突帯文土器，古墳時代の成川式土器・軽石製品，古代～中世にかけての土師器・陶磁器が出土した。（本報告）

８　早山遺跡（位置図 No.20）

鹿屋市花岡町の標高約 130m の傾斜地に位置する。昭和 60 年度に鹿屋市教育委員会が実施した調査では，主な遺構として，古墳時代の竪穴住居跡・土坑が検出された。遺物は，縄文時代晩期の黒川式土器，古墳時代の成川式土器等が出土した。また，同じく鹿屋市教育委員会が平成 18・19 年度に実施した調査では，遺構は縄文時代の集石遺構・土坑・石器制作場が検出された。遺物は縄文時代晩期及び古墳時代の土器片が出土した。今回の調査では，調査範囲内の遺物包含層は削平を受けており，遺構・遺物は発見されなかった。（本報告）

９　稲荷山遺跡（位置図 No.21）

鹿屋市花岡町の標高約 135 ｍの平坦地に位置する。主な遺構は，縄文時代早期の集石遺構，晩期の竪穴住居跡・土坑，古墳時代の竪穴住居跡・竪穴遺構・土坑，古代～中世の溝状遺構などが検出された。また，主な遺物は縄文時代晩期の黒川式土器・組織痕土器・突帯文土器・打製石鏃・打製石斧・磨製石斧，弥生時代の土器，古墳時代の成川式土器･軽石製品，古代～中世にかけての鉄鏃･鉄製品等が出土した。（本報告）

10　鎮守山遺跡（位置図 No.25）

鹿屋市古里町の標高約 130 ｍの平坦地及び下り傾斜の谷部に位置する。主な遺構は，古墳時代の竪穴住居跡・土坑・溝である。竪穴住居跡の多くは重複しており，住居跡の主な内部構造は，貼り床・地床炉・柱穴を伴っていることが特徴的である。また，主な遺物は縄文時代晩期の黒川式土器・打製石鏃，打製石斧・磨石・敲石・鉄製品，古墳時代の成川式土器・ガラス小玉・軽石製品等が出土した。（本報告）

表2　一般国道220号古江バイパス建設に伴う埋蔵文化財調査遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査面積(㎡)	調査期間	調査担当	時　代	主な遺構・遺物
1	中野西	鹿屋市根木原町	11,200㎡	H9.10～H10.3	前迫・今村・前田	旧石器 古墳 古代	礫群・ナイフ形石器・細石刃核 土坑・成川式 鉄剣・鉄鏃・須恵器・土師器
2	松山田西			H10.10～H11.3	寺師・元田	縄文 古墳	集石・石鏃 竪穴住居跡・土坑・成川式
3	鷲ヶ迫	鹿屋市花岡町	26,500㎡	H11.5～H12.3 H12.5～H13.3 H17.1～H17.3 H18.5～H19.3	寺原・元田 野邊・寺原 高岡・吉井・佐藤 野間口・木之下・相美	旧石器 縄文 古墳	落とし穴・三稜尖頭器等 落とし穴・春日式・黒川式等 竪穴住居跡・溝・成川式・軽石製品等
4	北原中	鹿屋市花岡町	7,950㎡	H11.5～H12.3 H12.5～H13.3 H13.5～H14.3 H14.5～H14.8 H15.11～H16.1	寺原・元田 野邊・寺原 高岡・西園 高岡・立神 高岡・坂本	縄文 古墳 中世	集石・塞ノ神式・黒川式等 竪穴住居跡・成川式 円形土坑・溝，須恵器・土師器・石帯
5	領家西	鹿屋市花岡町	19,010㎡	H12.5～H13.3 H13.5～H14.3 H14.5～H14.8 H16.5～H17.3 H17.5～H17.10 H18.8～H18.9	野邊・寺原 高岡・西園 高岡・立神 宗岡・日高 日高・平・松ヶ野 野間口・木之下・相美	縄文 古墳 中世	集石・土坑・入佐式・黒川式等 竪穴住居跡・溝・成川式・石庖丁・鉄器等 掘立柱建物跡・配石遺構・竪穴遺構・円形周溝，石鍋・陶磁器・古銭
6	天神平溝下	鹿屋市花岡町	740㎡	H15.11～H16.1 H16.5～H17.3	高岡・坂本 宗岡・日高	縄文 古墳 古代～近世	集石・土坑・市来式・石鏃 竪穴住居跡・成川式・勾玉等 溝・畠畝，土師器・陶磁器等
7	宇都上	鹿屋市花岡町	2,700㎡ 1,780㎡	H17.5～H17.10 H18.5～H18.10 ※註　報告書刊行済 H21.6～H21.7 H22.5	日高・平・松ヶ野 三垣・松ヶ野 鶴田・國師・原 國師・市村・原	縄文 古墳 古代～中世	集石，市来式・丸尾式・黒川式等 溝，成川式等 土坑・溝・道跡・土師器・陶磁器等
8	早山	鹿屋市花岡町	920㎡	H20.12～H21.3 H21.6	廣・橋口 鶴田・國師・原	－	今回の調査では，遺構，遺物なし
9	稲荷山	鹿屋市花岡町	15,448㎡	H20.10～H21.3 H21.5～H21.11	廣・橋口 鶴田・國師・原	縄文～弥生 古墳 古代～中世	竪穴住居跡・土坑・黒川式・組織痕・突帯文・打製石鏃・石核・打製石斧・磨石・敲石等 竪穴住居跡・竪穴遺構・土坑・成川式・軽石製品 溝・鉄鏃，鉄製品
10	鎮守山	鹿屋市古里町	6,910㎡	H20.10～H21.3 H21.11～H22.3 H22.6～H22.7 H22.10～H22.11	廣・橋口 鶴田・國師・原 國師・市村・原 國師・市村	縄文 古墳 古代	黒川式・組織痕・打製石斧・磨石・敲石・凹石・石皿等 竪穴住居跡・土坑・溝・成川式・軽石製品・鉄製品 土師器

※註『鷲ヶ迫遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター2008年　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(132)，『領家西遺跡・天神平溝下遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター2009年　鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(141)を参考

第３章　調査の方法

第１節　調査の方法

本節では，発掘調査の方法，遺構の認定と検出方法，整理・報告書作成作業の方法，出土遺物の分類について簡潔に述べる。

１　発掘調査の方法

平成 20 年度は，2,702㎡を対象にして稲荷山遺跡・早山遺跡・鎮守山遺跡の３遺跡の一部本調査を実施した。また，平成 21 年度は，15,714㎡を対象にして稲荷山遺跡・宇都上遺跡・早山遺跡・鎮守山遺跡の本調査を，平成 22 年度は，4,092㎡を対象にして宇都上遺跡・鎮守山遺跡の本調査を実施した。調査対象面積は，合計 22,508㎡となる。

発掘調査を進めるにあたり，バイパス建設予定地の工事用基準杭 No.137 と No.151 を結ぶ線を基軸とし，北東から南西へＡ・Ｂ・Ｃ…，東南から北西へ１・２・３…とする 40 m× 40 mのグリッドを用いて調査区を設定した（第１図）。

調査は，基本的には人力（主に山鍬・鋤簾を使用）で掘り下げを行い，表土剥ぎ，無遺物層，火山灰ブロック等の硬い地層は重機を使用した。

２　遺構の認定と検出方法

遺構の認定については，検出面の精査及び埋土の状況，規模等を総合的に判断して行った。

鎮守山遺跡で検出された竪穴住居跡は，攪乱が多い箇所での検出であったため，遺構の輪郭や重複する遺構の先後関係の把握が困難であった。そこで，移植ゴテ等で丁寧な精査を行ったり，攪乱箇所の土を除去した後の断面状況を手がかりにしたりして，遺構の輪郭や先後関係を推定して掘り下げを行った。

３　整理・報告書作成作業の方法

稲荷山遺跡・宇都上遺跡・早山遺跡・鎮守山遺跡の整理・報告書作成作業は，平成 22 年度～平成 24 年度に県立埋蔵文化財センター東九州整理作業所で行った。

(1)　平成 22 年度

５月～７月，10 月･11 月は発掘作業と並行して行った。主な作業内容は，水洗い，注記，分類，接合，遺跡周辺地形図のデジタルトレース，遺物のドット図作成のためのデータ処理，土層図トレース，遺構分類，遺構トレース，遺物実測である。また，外部指導者による遺物指導等を行った。

遺物の水洗いについては，未洗い遺物を中心に洗浄ブラシで軽く叩くようにして付着物を流し落とした。剥片石器類等の洗いは，超音波洗浄器を使用した。

注記は，記号を稲荷山遺跡は「イナリ山」，宇都上遺跡は「ウトウエ」，鎮守山遺跡は「チン」を頭に，包含層資料は続けて「区」，「層」，「遺物番号」の順番で記入した。遺構内資料は記号に続けて，「●号住」，「●号集石」などで記入した。なお，爪先上の小破片に関しては注記を省略した。

遺物の分類・接合は，土器については，同一出土層及び同一区内を中心に行った。また，石器についてはまず，剥片石器と礫石器に大別し，石鏃，石斧，敲石，石皿等の器種ごとに分類し，その後接合を行った。

遺物ドット図作成のためのデータ処理は，遺物を平板とトータルステーションで取り上げたためデータの統合を行った。

遺構の認定・分類は，発掘調査時のものをもとに，実測図や写真等を用いて再検討し確定した。

土層図及び遺構図のトレースは，はじめに鉛筆トレースを行い，点検・修正後に本トレースを行った。

(2)　平成 23 年度

４月～６月に，遺物の実測・トレース後，遺物のレイアウト及び原稿執筆を行った。また，データ処理等は昨年度と同様の方法で行った。

(3)　平成 24 年度

４月～ 12 月に，報告書刊行に向けて作業を進めた。平成 22･23 年度の整理作業の成果をもとに，レイアウト，遺物写真撮影，現場写真選別，原稿執筆，編集作業等を行った。また，石器実測委託は稲荷山遺跡と鎮守山遺跡で出土した石鏃，楔形石器等の剥片石器を中心に行った。

４　出土遺物の分類について

(1)　土器，土製品

鬼界カルデラ起源の火山灰層（Vb 層）の下層と上層に大きく分けることができる。Ⅵ層出土は縄文時代早期，Ⅳ層・Ⅲ層出土は，型式及び時期が混在している。Ⅳ層は主に縄文時代晩期～古墳時代，Ⅲ層は古墳時代～中世の遺物とした。既存の型式名が明らかな土器については，様式ごとあるいは型式ごとに分類し，さらに器種で細分できる場合は深鉢，浅鉢…とした。なお，器種間の並行関係については確実に押さえることができないので，時間順に並んでいない場合もある。

(2)　石器，石製品

Ⅵ層出土は縄文時代早期，Ⅳ層・Ⅲ層出土は縄文時代晩期～古墳時代相当期のものが混在している。そこで，古墳時代相当と判断できる遺物は古墳時代に掲載した。従って，縄文時代晩期として報告したものの中には，弥

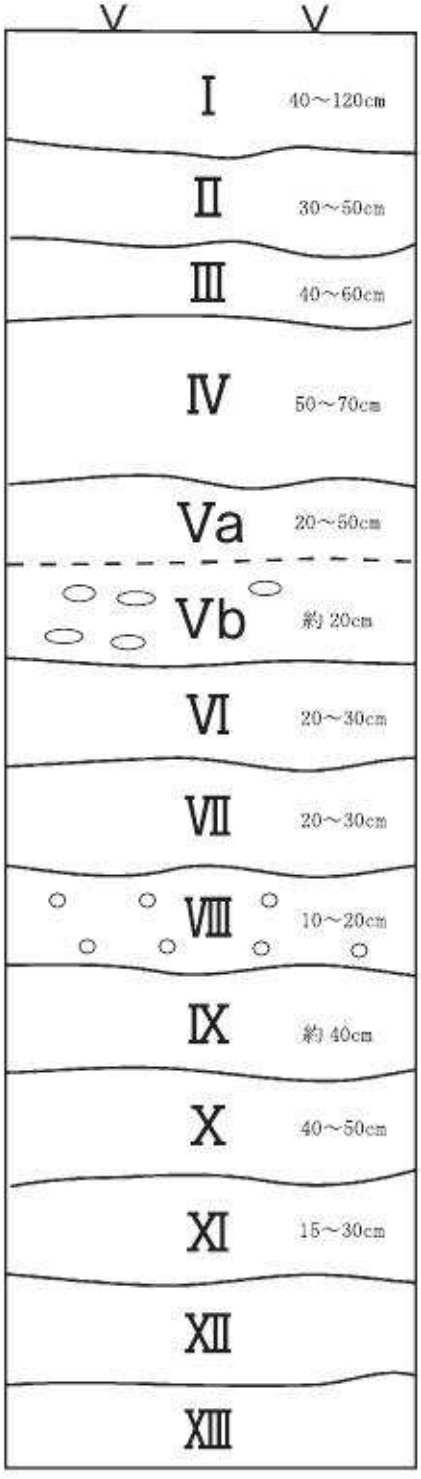
生時代以降相当の資料が混在している可能性がある。

第2節　層序

稲荷山遺跡・宇都上遺跡・早山遺跡・鎮守山遺跡の基本土層，遺物包含層，火山灰の堆積状況は，以下のとおりである。

遺跡範囲が非常に長いため，場所によって層の堆積状況は異なる。耕作等によって上層が削平されている部分が多いのが特徴で，Ⅰ層の下はほぼⅢ～Ⅳ層であった。

また，Ⅲ～Ⅳ層が削平を受けている部分も多く，堆積が良好でない場所もある。



第3図　基本土層模式図

Ⅰ層：現代の黒褐色耕作土。

Ⅱ層：暗灰黒褐色土。

Ⅲ層：黒褐色土。古墳時代から中世にかけての遺物が包含されている。

Ⅳ層：下部は暗茶褐色土で，上部は茶褐色土である。主に，縄文時代晩期から古墳時代の遺物が包含されている。

Va層：明橙色土。Vb層の腐食土で，上部に約5,500年前の池田カルデラ起源の池田軽石が部分的にみられる。

Vb層：黄褐色火山灰層。約6,400年前の鬼界カルデラ起源の火山灰層。

Ⅵ層：灰褐色粘土。灰色を帯びた硬質の火山灰で，比較的細粒である。縄文時代早期の遺物が包含されている。

Ⅶ層：黒褐色粘土。

Ⅷ層：黄色軽石の層で，この層は約11,500年前の桜島起源の軽石（薩摩火山灰）である。

Ⅸ層：茶褐色粘土。極めて微粒で粘質が強く，通称チョコ層とも呼ばれている。

Ⅹ層：暗茶褐色硬質土。

Ⅺ層：明褐色硬質土。

Ⅻ層：淡黄白色火山灰土でシラスと呼ばれているものであり，約25,000年前の姶良カルデラ起源の噴出物である。

XIII層：黄橙色軽石で大隅降下軽石と呼ばれているものである。

稲　荷　山　遺　跡

第４章　稲荷山遺跡の調査の方法と成果

第１節　発掘調査の方法と成果

本遺跡の調査範囲は，Ｃ～Ｊ－11～25区である。調査は，平成20年度から平成21年度にかけて実施した（第１図）。

調査の基本的な方法は，まず草払いや竹藪の伐採等を行った後，重機（バックホー）によって表土を除去した。そして，遺物包含層（Ⅲ層・Ⅳ層）及びその可能性がある層については，人力（山鍬・ジョレン・移植ゴテ等を利用）により掘り下げを行った。

具体的には，Ⅲ層→Ⅳ層→Va層上面の順に，段階的に調査を進めた。また，一部箇所ではⅫ層（シラス）上面まで掘り下げ，遺構及び遺物の確認を行った。

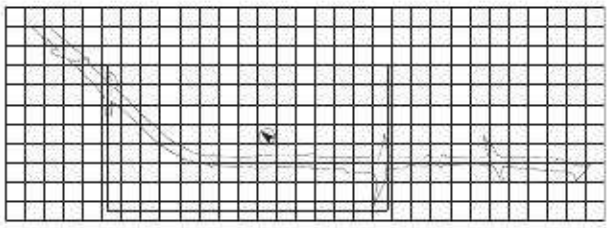
検出遺構及び出土遺物は，写真撮影，位置の記録及び実測作業を行い，遺構内で出土した炭化物等は自然科学分析を行った。

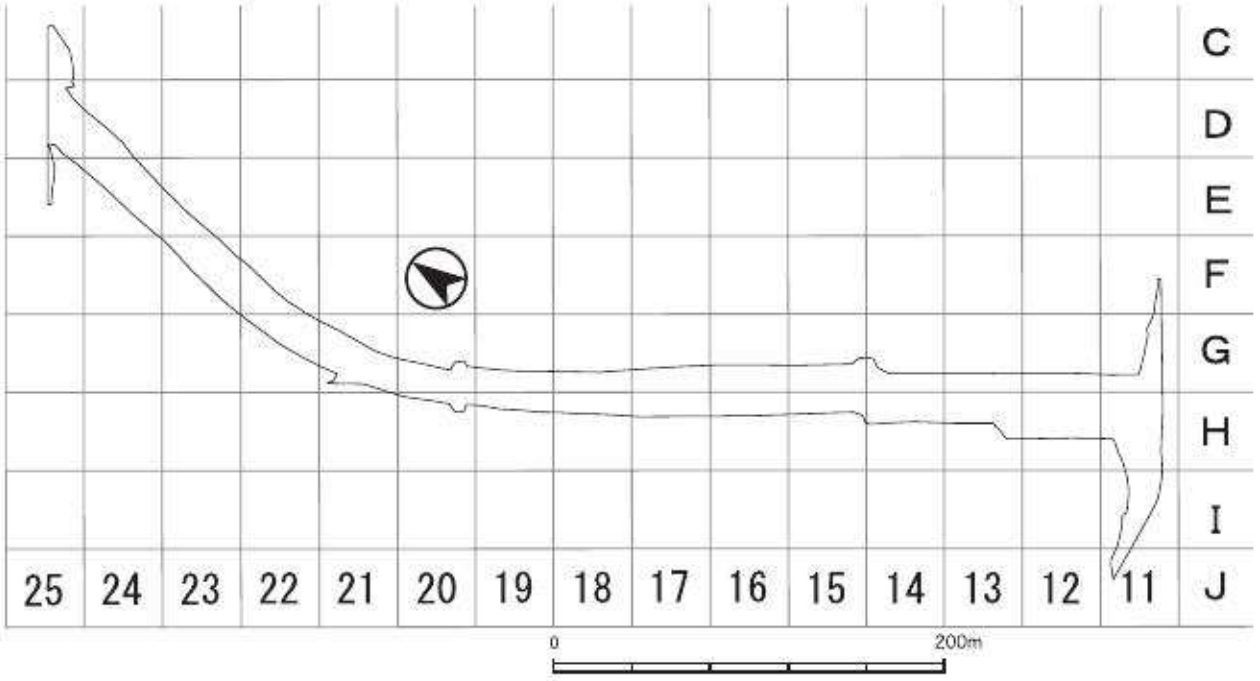
平成20年度の調査は，Ｇ－11～19区及びＤ～Ｆ－23～25区，Ｈ－13・14区の一部箇所の本調査を実施した。調査の結果，遺構は縄文時代晩期の土坑１基が検出され，遺物は主に縄文時代晩期の土器及び石器，古墳時代の土器及び軽石製品，古代・中世の鉄製品等が出土した。

平成21年度は平成20年度の調査結果に基づき，ＧＨ－11～21区，ＦＧ－22・23区及びＣＤ－24・25区の未調査箇所の本調査を実施した。調査の結果，遺構は縄文時代早期の集石遺構２基，縄文時代晩期～弥生時代の竪穴住居跡３軒及び土坑２基，古墳時代の竪穴住居跡５軒，竪穴遺構１基及び土坑２基，古代・中世の溝状遺構４条が検出された。遺物は主に縄文時代晩期～弥生時代の土器及び石器，古墳時代の土器及び軽石製品等が出土した。

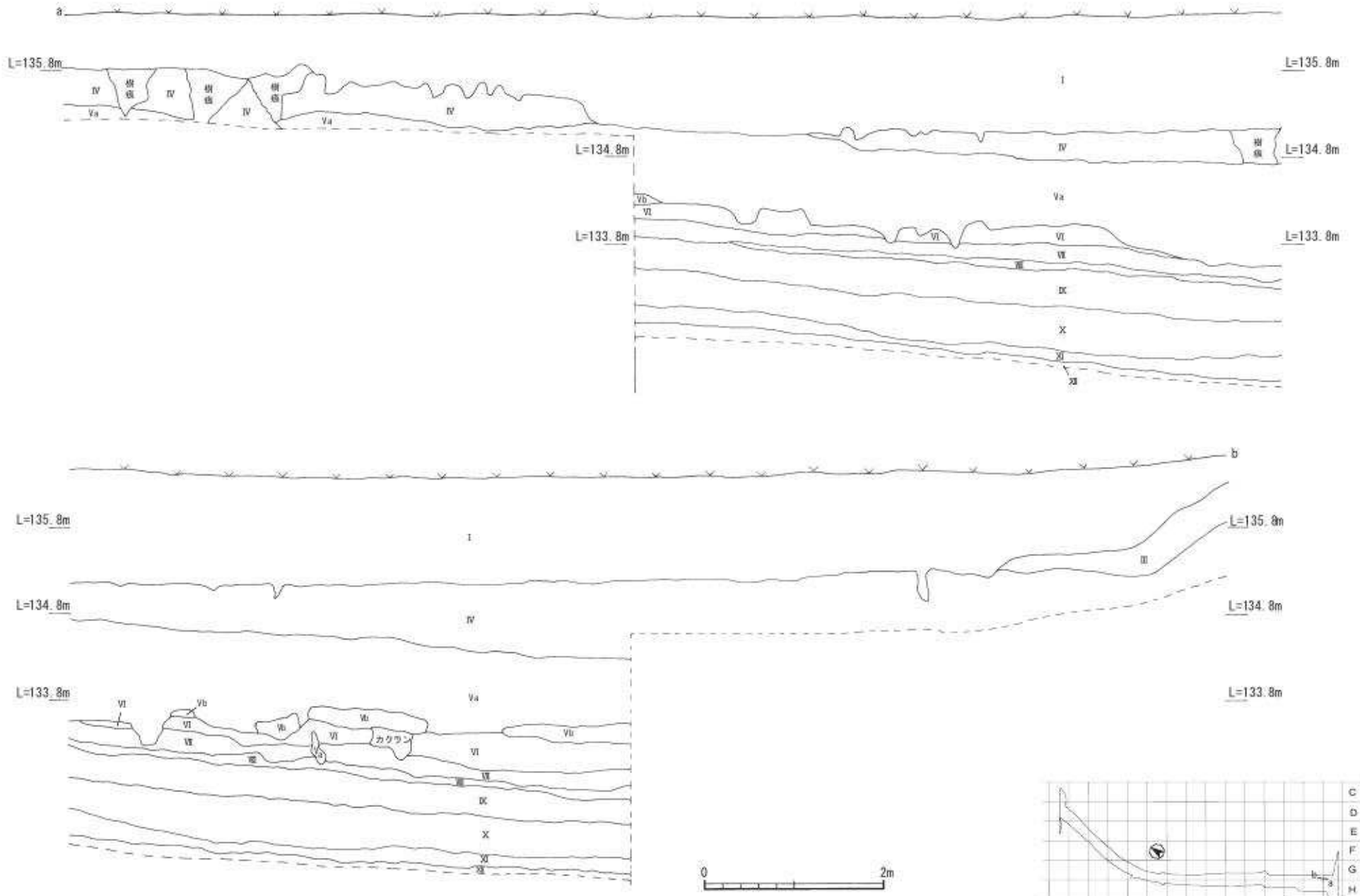
第２節　遺跡の層序

基本的な層序については，第３章第２節と同様である。ここでは稲荷山遺跡の具体的な層序を第２～７図に示した。

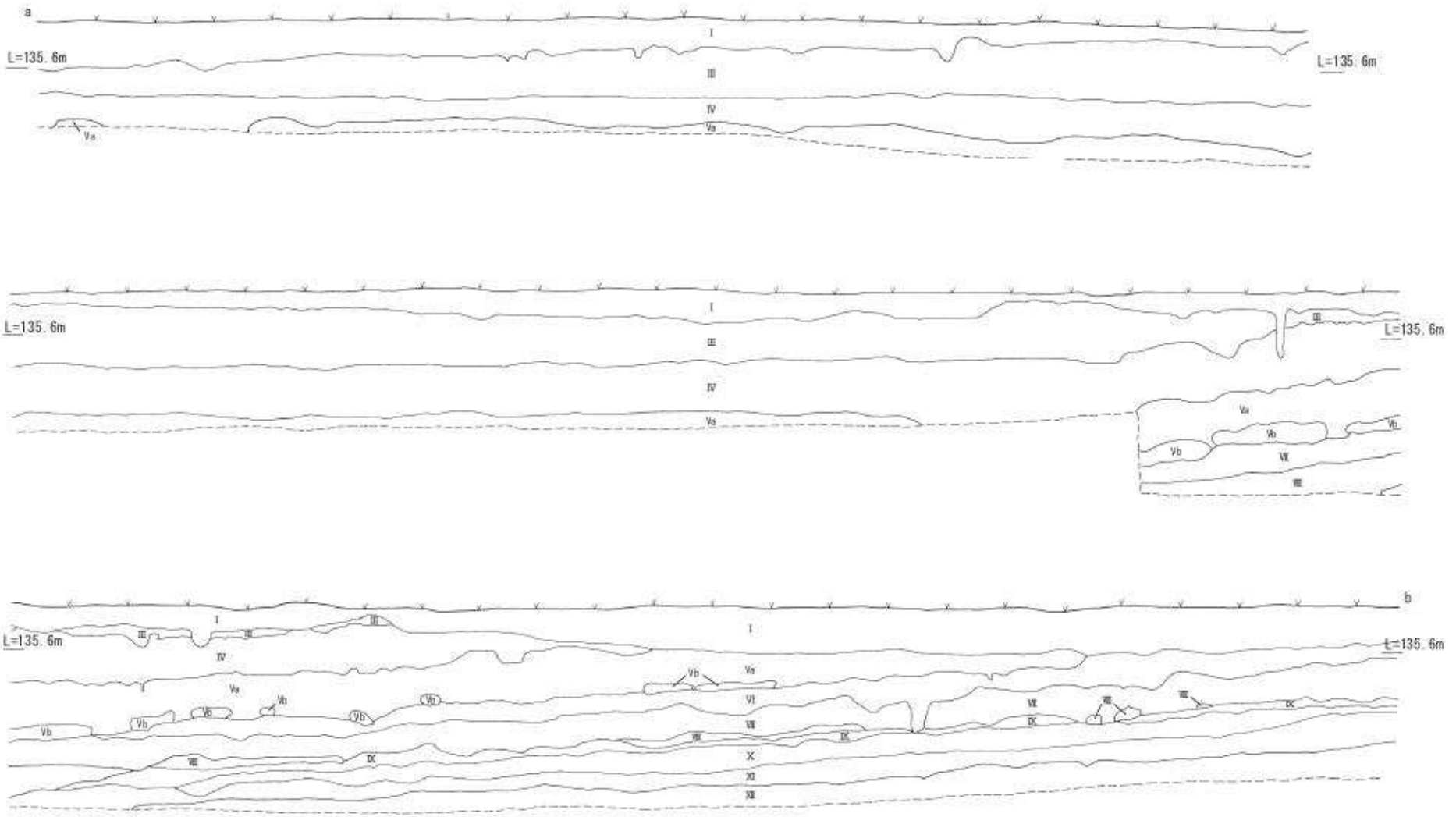




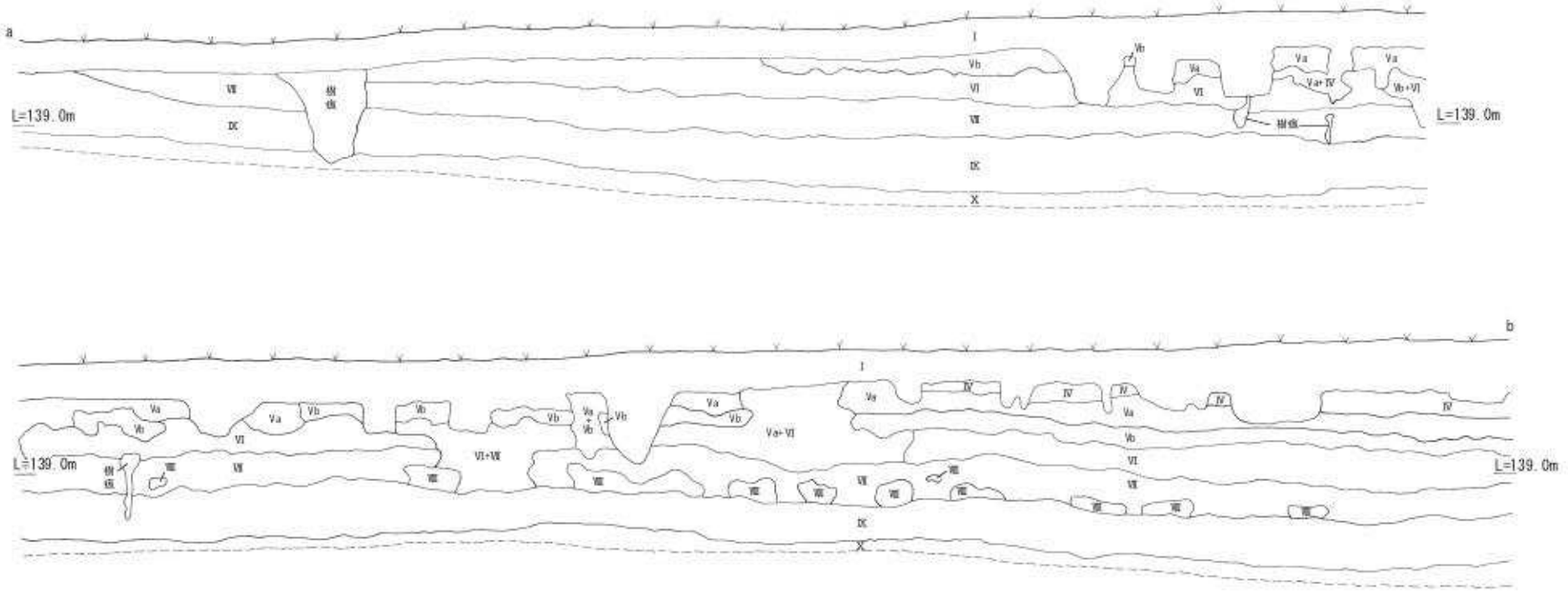
第１図　調査範囲図


a
L=135.8m
L=134.8m
L=133.8m
L=135.8m
L=134.8m
L=133.8m
b
L=135.8m
L=134.8m
L=133.8m
L=135.8m
L=134.8m
L=133.8m
カクラン
0
2m

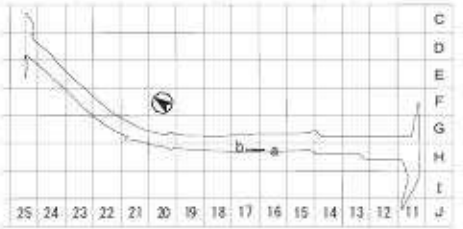
第2図　土層図①


a
L=135.6m
L=135.6m
I
III
IV
Va
L=135.6m
L=135.6m
I
III
IV
Va
Vb
VI
VII
VIII
b
L=135.6m
L=135.6m
I
III
IV
Va
Vb
VI
VII
VIII
IX
X
XI
XII
0
2m
C
D
E
F
G
H
I
J
25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11

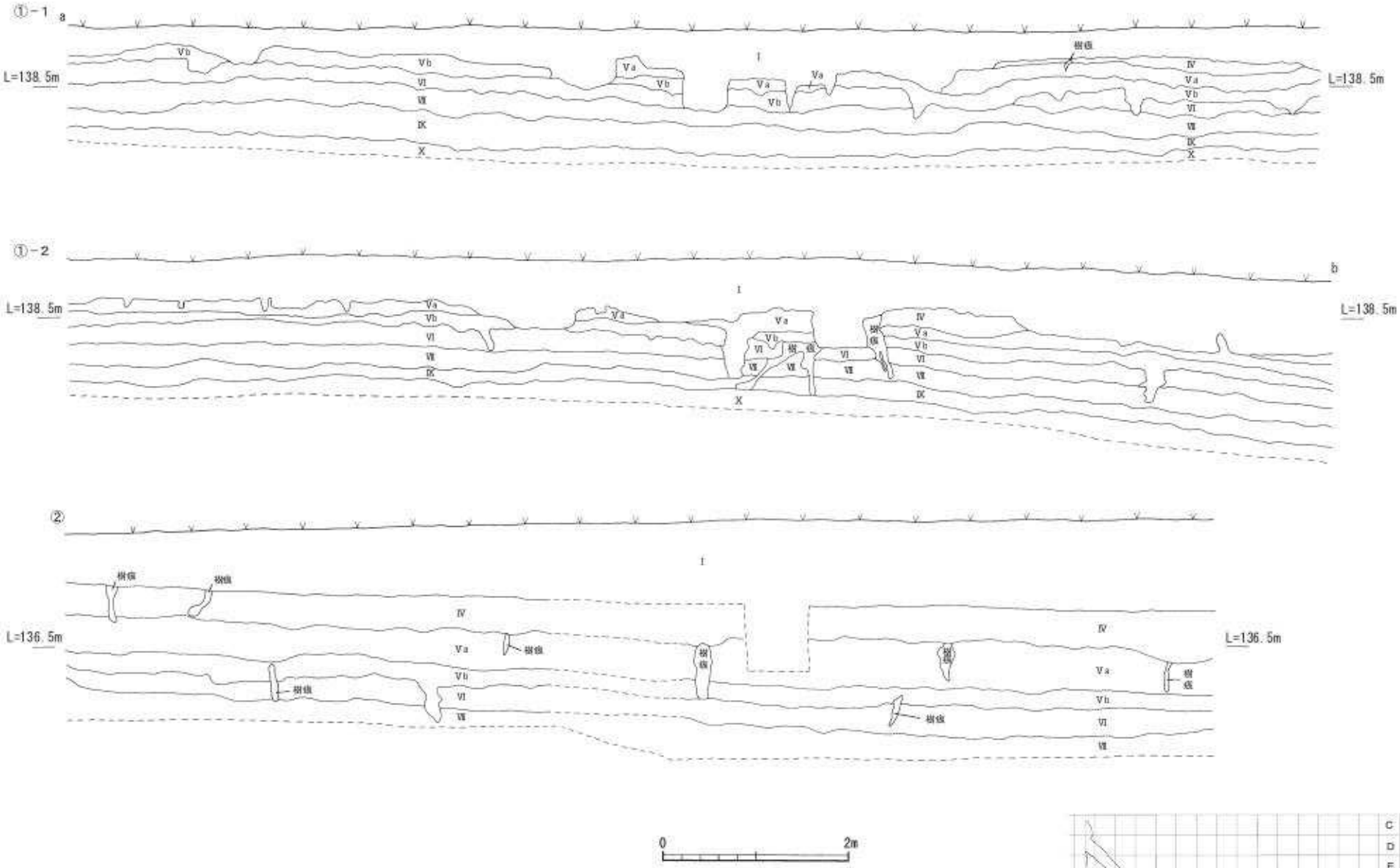
第３図　土層図②


a
L=139.0m
I
Vb
VI
VII
IX
X
Va
Va+IV
Vb+VI
L=139.0m
b
L=139.0m
Va
Vb
VI
VI+VII
Va+VI
IV
VII
VIII
IX
X
L=139.0m

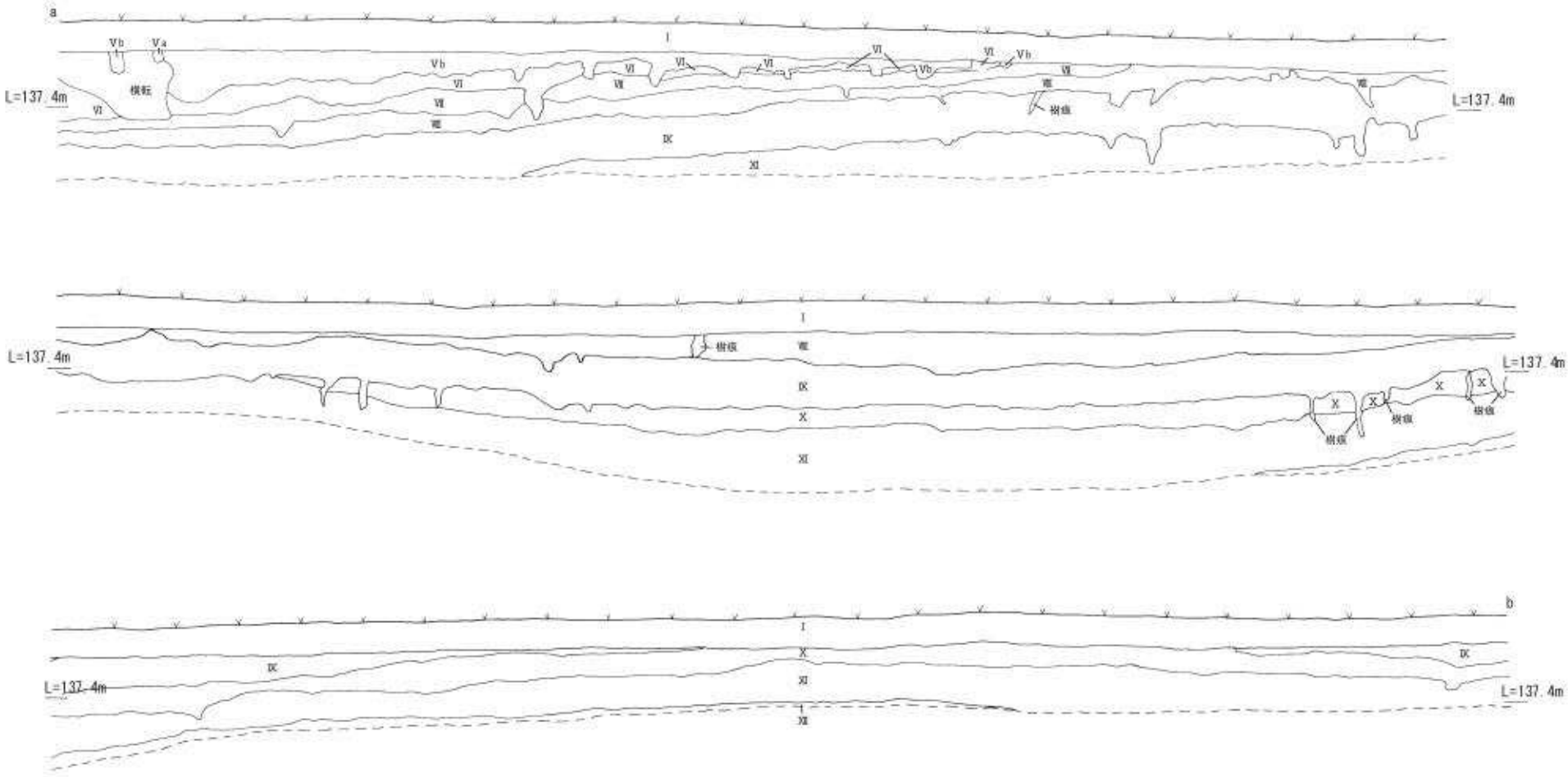
0 2m


C
D
E
F
G
H
I
J
25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11
b
a

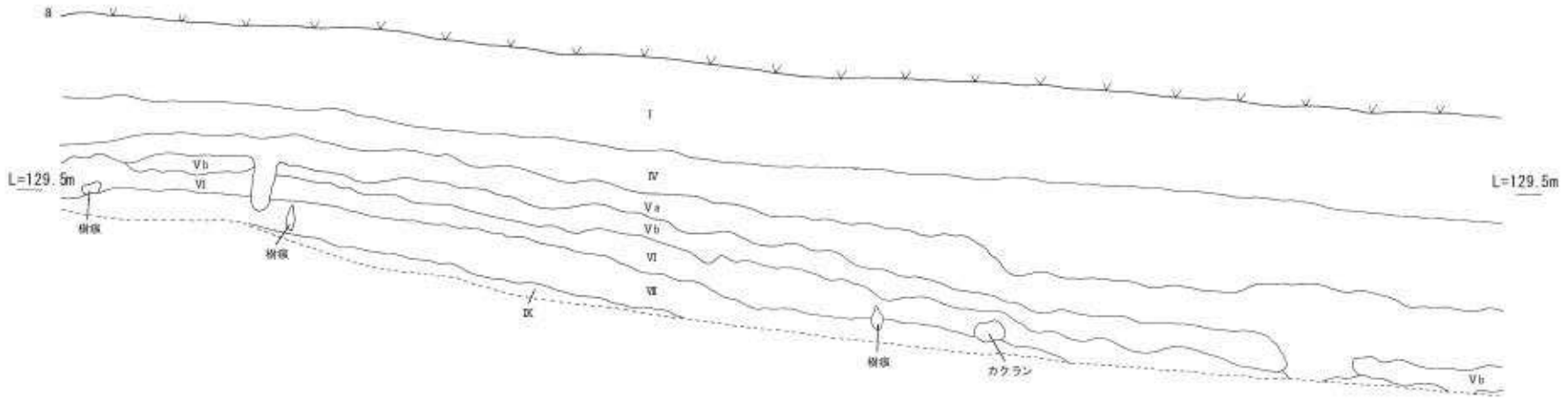
第4図　土層図③

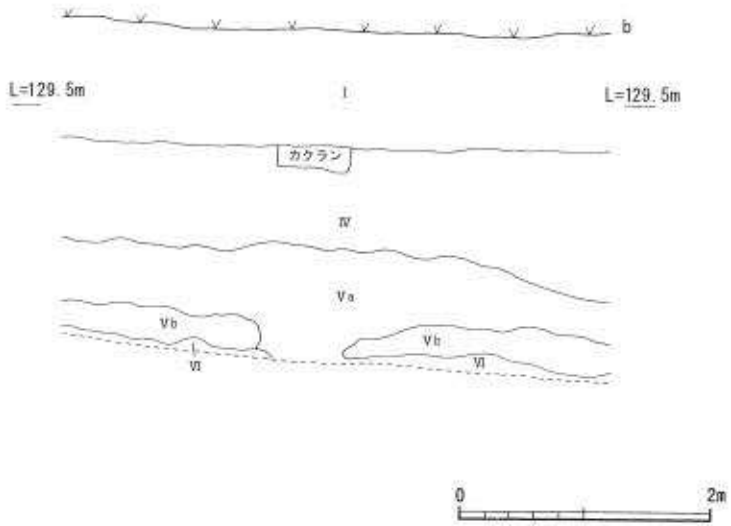


第５図　土層図④

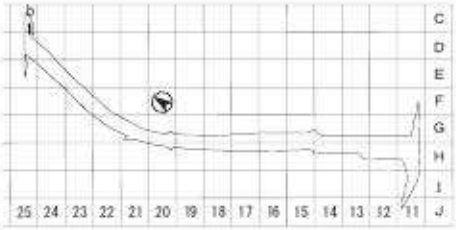


第６図　土層図⑤


a
L=129.5m
L=129.5m
Ⅰ
Ⅳ
Ⅴa
Ⅴb
Ⅵ
Ⅶ
Ⅸ
樹痕
樹痕
樹痕
カクラン
Ⅴb
Ⅵ


b
L=129.5m
L=129.5m
Ⅰ
カクラン
Ⅳ
Ⅴa
Ⅴb
Ⅵ
Ⅴb
Ⅵ
0
2m

第７図　土層図⑥


b
C
D
E
F
G
H
I
J
25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11

第３節　縄文時代早期の調査

中心となる包含層はⅥ層である。調査の結果，遺構は集石遺構２基を検出し，遺物は石器が３点出土した。

１　遺構

１号集石遺構（第８図）

Ｇ－12区のⅥ層で検出した。約120cm×約100cmの範囲に被熱した礫が緩やかな傾斜地に散在していた。礫数は36個で，石材は全て安山岩である。

なお，掘り込みは確認できず，遺物及び炭化物も出土しなかった。

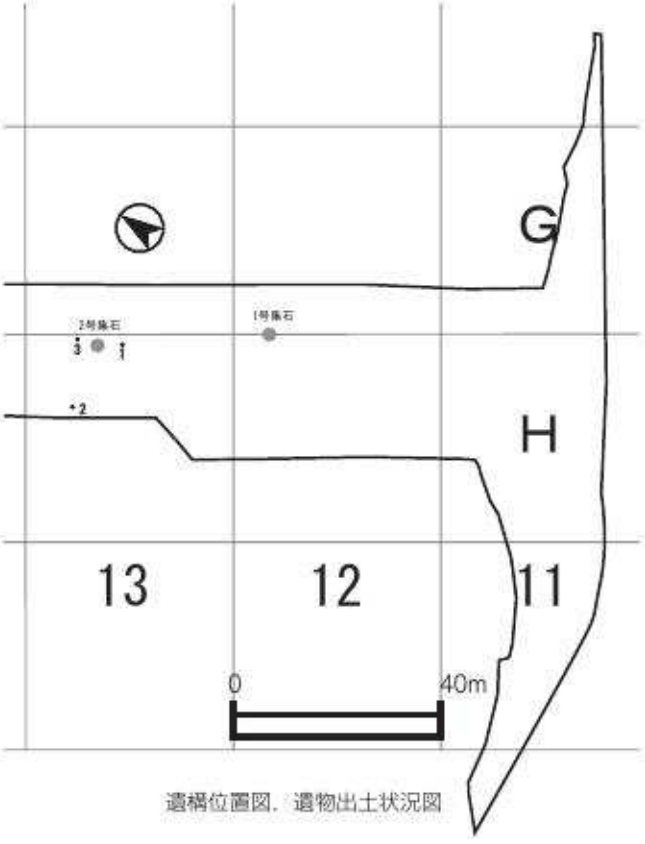
２号集石遺構（第８図）

Ｈ－13区のⅥ層で検出した。約170cm×約110cmの範囲に被熱した礫96個が比較的集中していた。礫の石材の内訳は，安山岩93個，頁岩２個，軽石１個である。

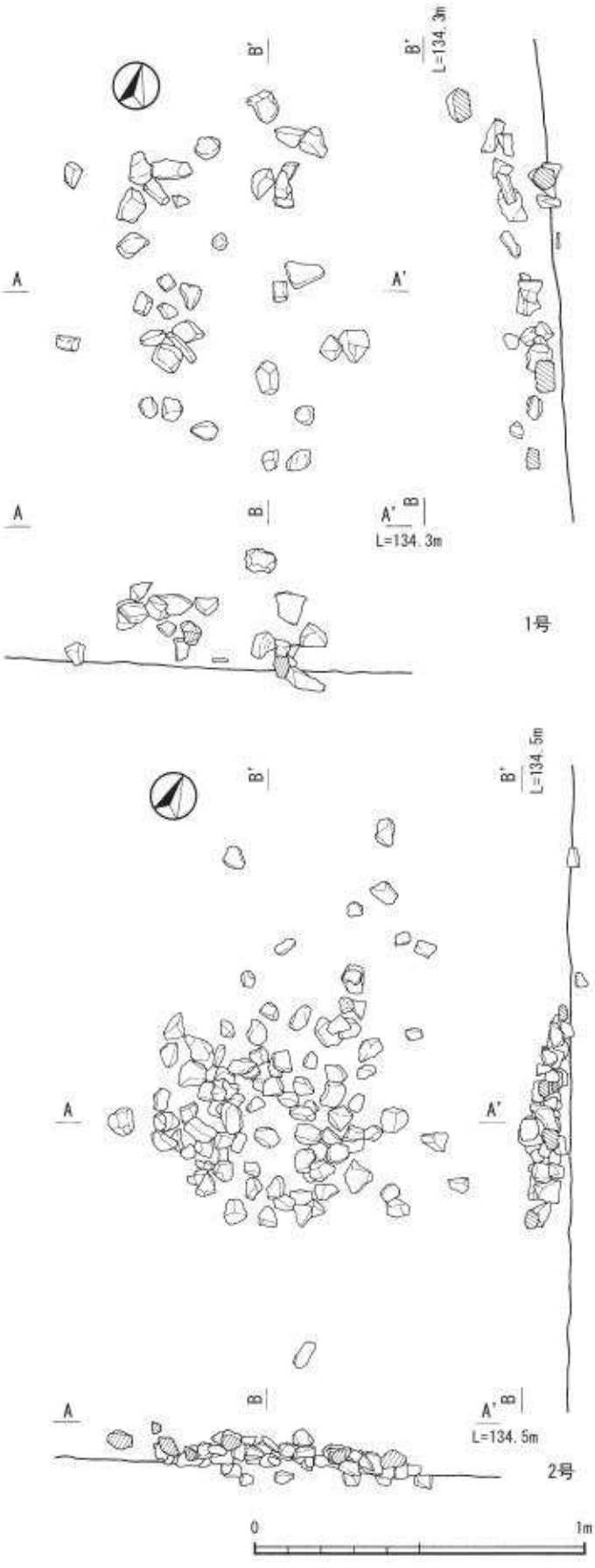
なお，掘り込みは確認できず，遺物及び炭化物等も出土しなかった。

２　遺物（第９図：１～３）

３点ともＨ－13区Ⅵ層から出土した。１は磨石・敲石である。表面に磨面，下面に敲打痕が見られる。２は石皿の破片である。表面には顕著な磨面が見られる。３は礫器である。表裏面に磨面が見られることから石皿を転用した可能性がある。



遺構位置図，遺物出土状況図



第８図　遺構位置図，遺物出土状況図，１号・２号集石

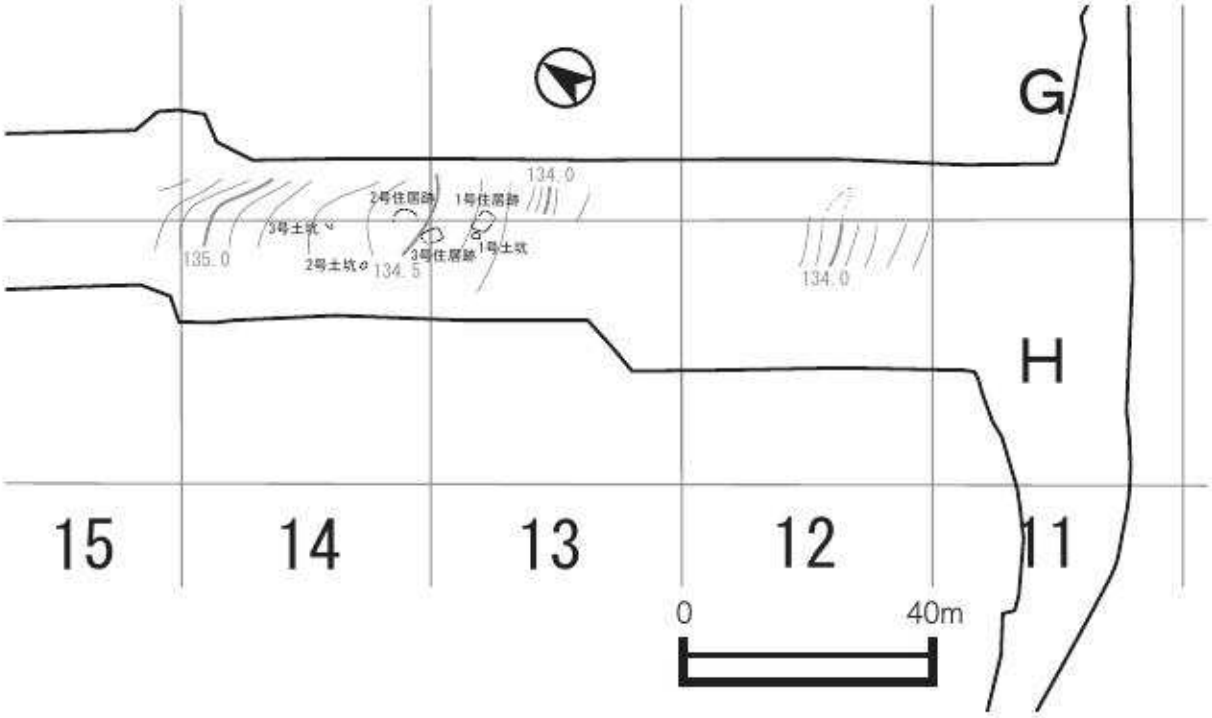
第９図　縄文時代早期の石器

表１　縄文時代早期の石器観察表

挿図番号	掲載番号	器　種	石　材	出土区	層	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重　量 g	備　考
9	1	磨石・敲石	安山岩	H-13	Ⅵ	12.30	9.30	5.20	860.00	
	2	石皿	安山岩	H-13	Ⅵ	11.60	9.80	10.40	1700.00	
	3	礫器	安山岩	H-13	Ⅵ	11.10	11.80	5.30	920.00	

第４節　縄文時代晩期～弥生時代前期の調査

中心となる包含層はⅣ層である。調査の結果，遺構はⅣ～Ⅴａ層で竪穴住居跡３軒，竪穴遺構１基及び土坑３基が検出され，遺物は土器及び石器等が出土した。遺構の時期認定は，埋土内の出土遺物から判断したが，埋土遺物がなかったものについては，周辺の遺構の状況を勘案して判断した。



第 10 図　遺構位置図

１　遺構

(1)　竪穴住居跡

縄文時代晩期～弥生時代に該当すると考えられる竪穴住居跡は，ＧＨ－13区で１軒（１号），Ｇ－14区で１軒（２号），Ｈ－13･14区で１軒（３号）を検出した。また，住居跡内の埋土中から突帯文土器等が出土した。

１号竪穴住居跡（第 11 図）

［位置と確認］ＧＨ－13区に位置し，Ⅳ層精査中に隅丸方形の暗褐色土の落ち込みを確認した。
［重複］なし
［平面形・規模］隅丸方形で，規模は長軸 260cm，短軸 260cmである。長軸方向はほぼ東西である。北西から南東にかけての部分が畑灌パイプに切られている。
［床面］床面はほぼ平坦で，Vb 層まで掘り込まれている。検出面から床面までの深さは約 20 cmである。
［柱穴等］検出されなかった。
［炉］検出されなかった。
［埋土］暗茶褐色土で，ほぼ一様である。

１号竪穴住居跡出土遺物（第 11 図：４）

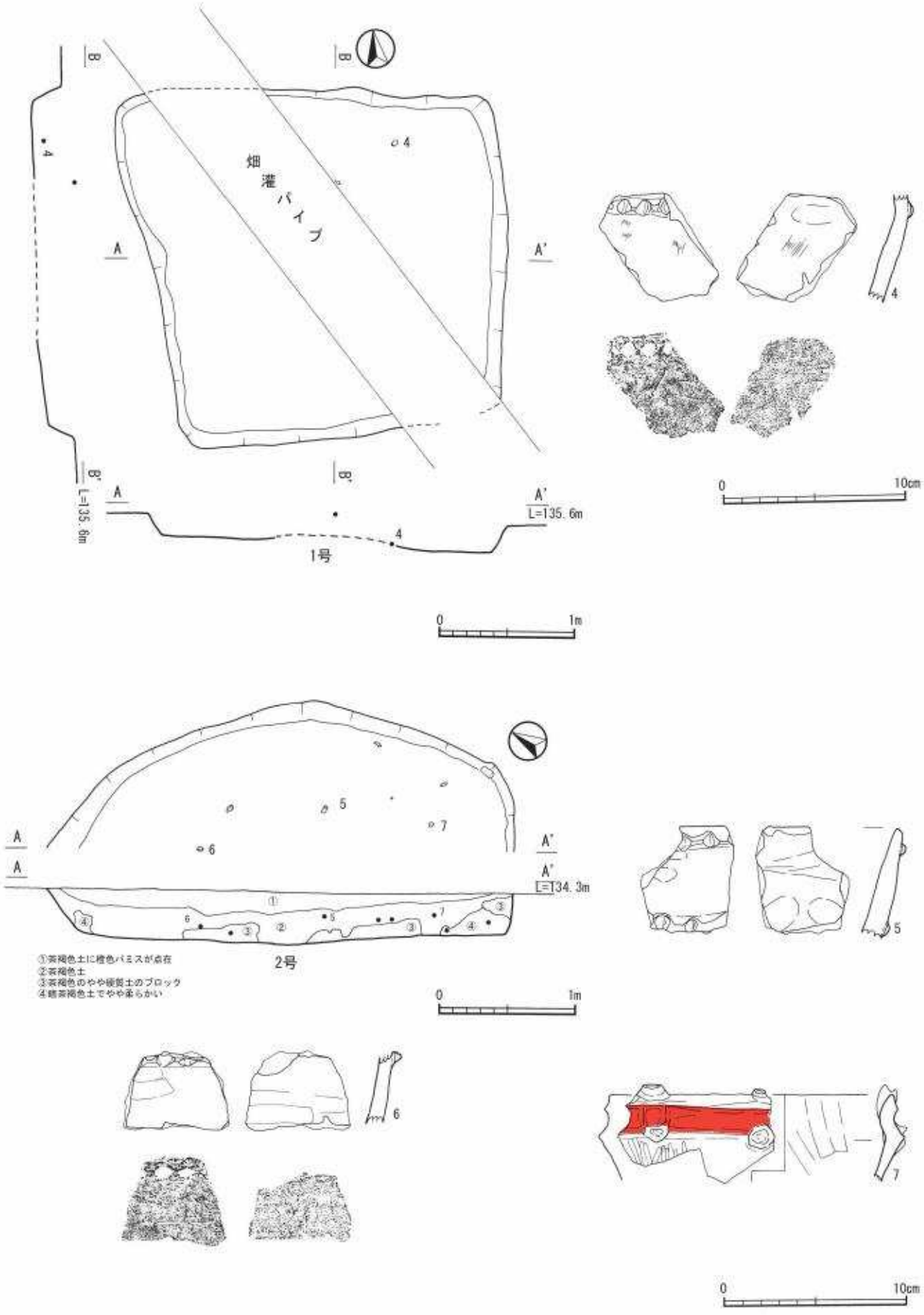
４は内弯した器形の胴部である。突帯に円形の刻目を施し，調整は内外面共にナデである。

２号竪穴住居跡（第 11 図）

［位置と確認］Ｇ－14区に位置し，Ⅳ層精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。
［重複］なし
［平面形・規模］住居跡南西側が畑灌による攪乱のため，全体の平面プランは不明である。
［床面］床面はほぼ平坦であり，検出面から床面までの最深部は約 40cm である。
［柱穴等］検出されなかった。
［炉］検出されなかった。
［埋土］茶褐色土で，パミスを含む層と含まない層に分層される。柔らかめの暗茶褐色土や硬質土のブロックなども含まれる。

２号竪穴住居跡出土遺物（第 11 図：５～７）

遺物は３点出土した。５は外開きする器形の口縁部である。文様は，口縁部の下位と肩部の突帯に楕円形の刻目を施し，調整は内外面共に指頭痕が認められる。６はやや外開きする器形の胴部である。文様は，細めの突帯に大きく開いた刻目を施し，調整は内外面共にナデである。７は浅鉢の口縁部である。口縁部から頸部にかけての部分が「く」字状に屈曲しており，ボタン状の突起が施されている。また，外面の口縁部下位には赤色顔料の塗布も認められる。



第11図　1号・2号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物

3号竪穴住居跡（第12図）

［位置と確認］H－13・14区に位置し，Ⅳ層精査中に隅丸方形の暗褐色土の落ち込みを確認した。

［重複］なし

［平面形・規模］隅丸方形であるが，南西隅の部分が仮道路によって切られている。規模は長軸約290cm，短軸約220cmである。長軸方向は，N-50° -Wである。

［床面］床面はほぼ平坦である。検出面から床面までの最深部は約30cmである。

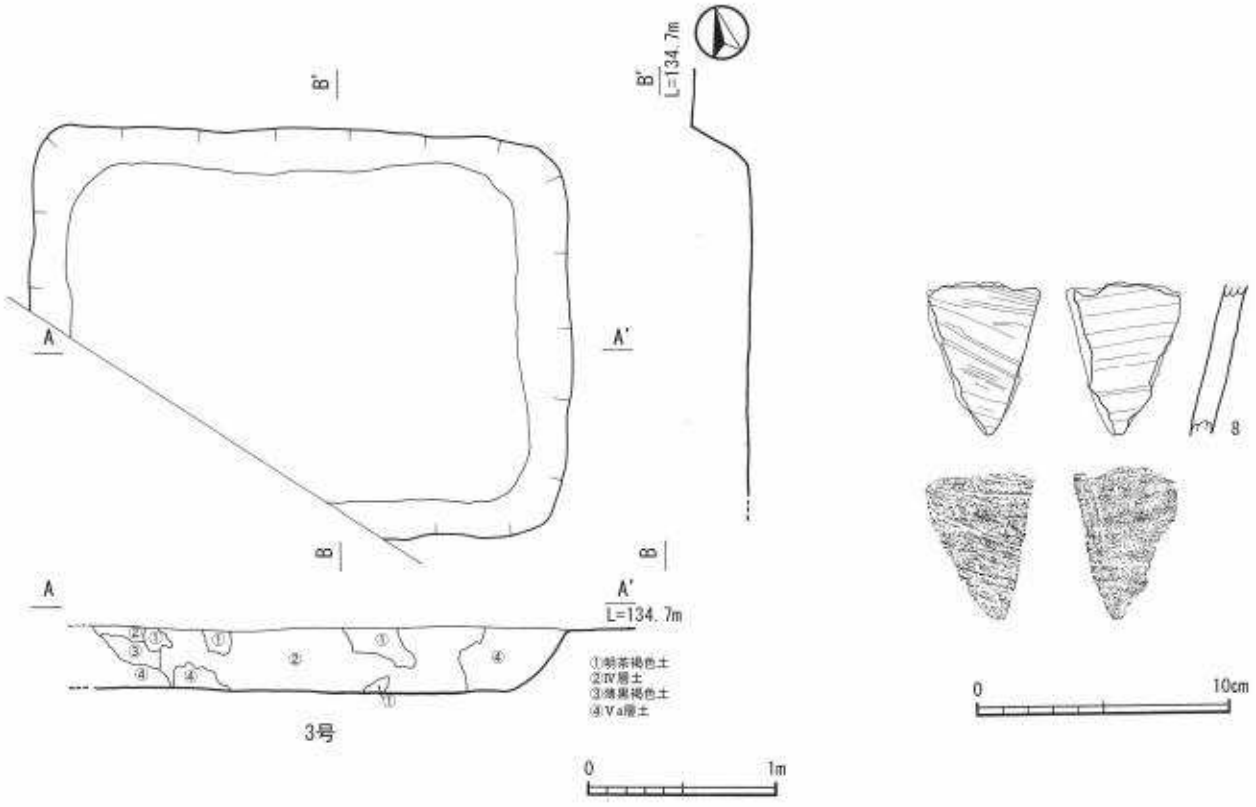
［柱穴等］検出されなかった。

［炉］検出されなかった。

［埋土］茶褐色土主体で，明茶褐色土及び黄橙色火山灰（Vb層）が所々含まれている。

3号竪穴住居跡出土遺物（第12図：8）

遺物は1点出土した。8はやや外反する器形の胴部で，外面には斜位の条痕が施されている。



第12図　3号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物

(2)　土坑

縄文時代晩期～弥生時代に該当すると考えられる土坑は，Va層上面で3基検出した。

1号土坑（第13図）

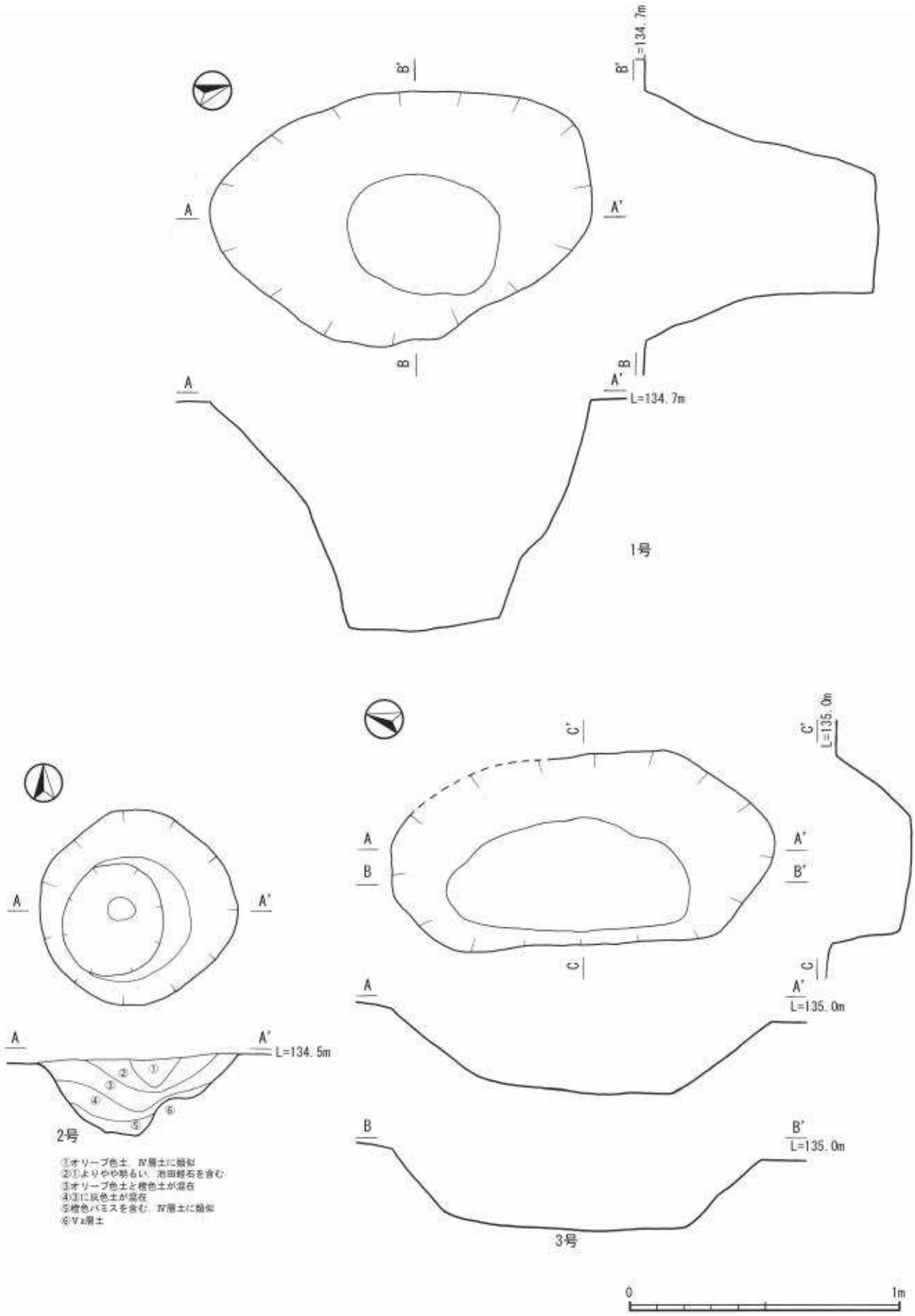
H－13区で検出した。平面プランは長楕円形を呈し，長径約140cm，短径約90cmで，検出面からの深さは85cmである。埋土はⅣ層の暗茶褐色土が主体で，部分的に池田軽石を含み，底はVb層を掘り抜いてⅥ層（縄文早期該当層）まで届いていた。

2号土坑（第13図）

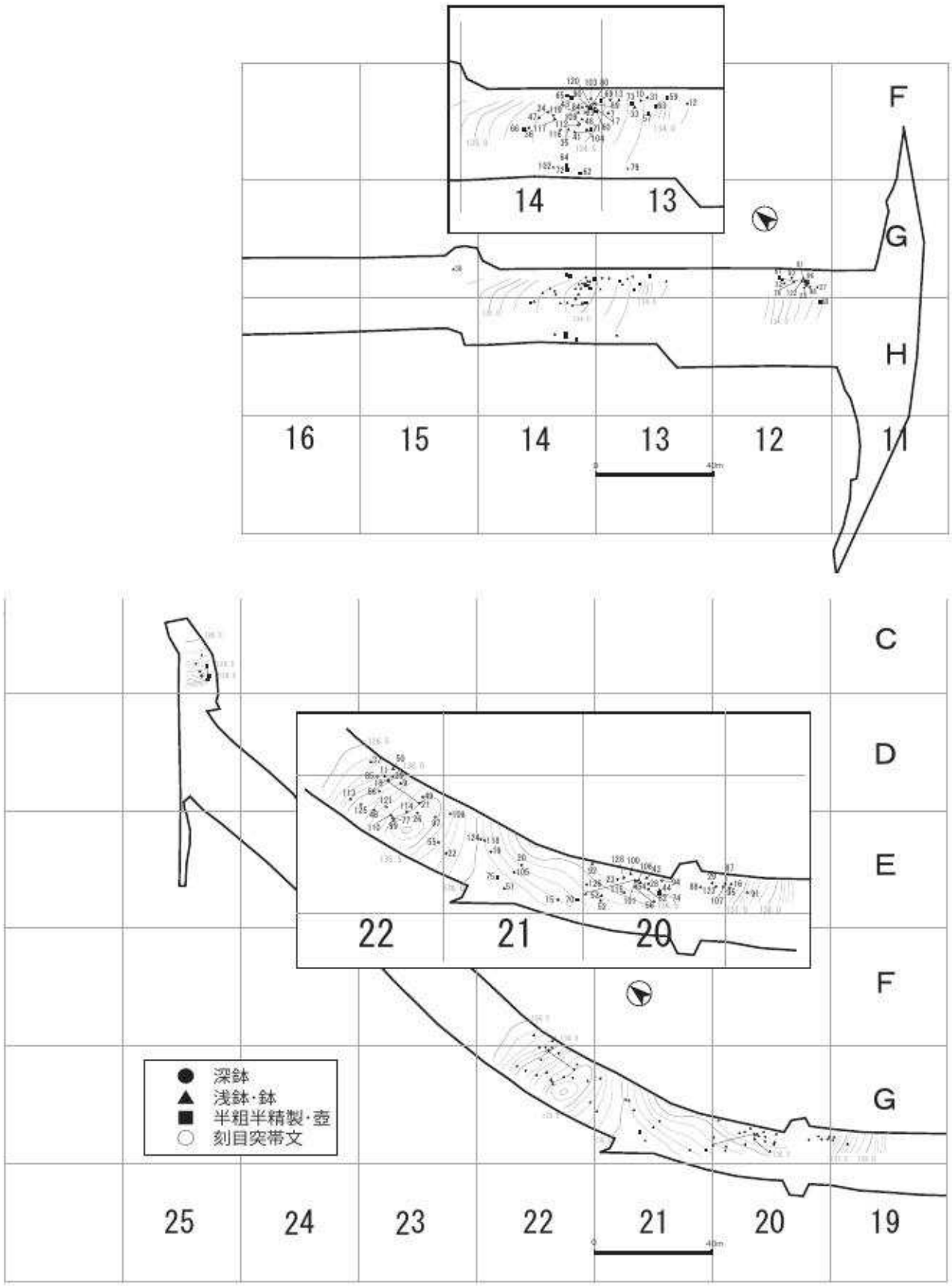
H－14区で検出した。平面プランはほぼ円形を呈し，長径約70cmで，検出面からの深さは28cmである。土坑内の埋土は5層に分層した。

3号土坑（第13図）

H－14区で検出した。平面プランは長楕円形を呈し，長径約140cm，短径約70cmで，検出面からの深さは25cmである。埋土はⅣ層の暗茶褐色が主体で，2㎜大の橙色パミスと2～3㎜大の白色のパミスが少量含まれる。遺物は小破片の土器が数点出土したのみであった。


B'
L=134.7m
B'
A
A'
B
B
A
A'
L=134.7m
1号
C'
L=135.0m
C'
A
A'
B
B'
C
C
A
A'
L=135.0m
B
B'
L=135.0m
3号
A
A'
L=134.5m
2号
①オリーブ色土、Ⅳ層土に類似
②①よりやや明るい、泡田軽石を含む
③オリーブ色土と橙色土が混在
④③に灰色土が混在
⑤橙色パミスを含む、Ⅳ層土に類似
⑥Va層土
0
1m

第13図　1号~3号土坑



第14図　遺物出土状況図（土器）

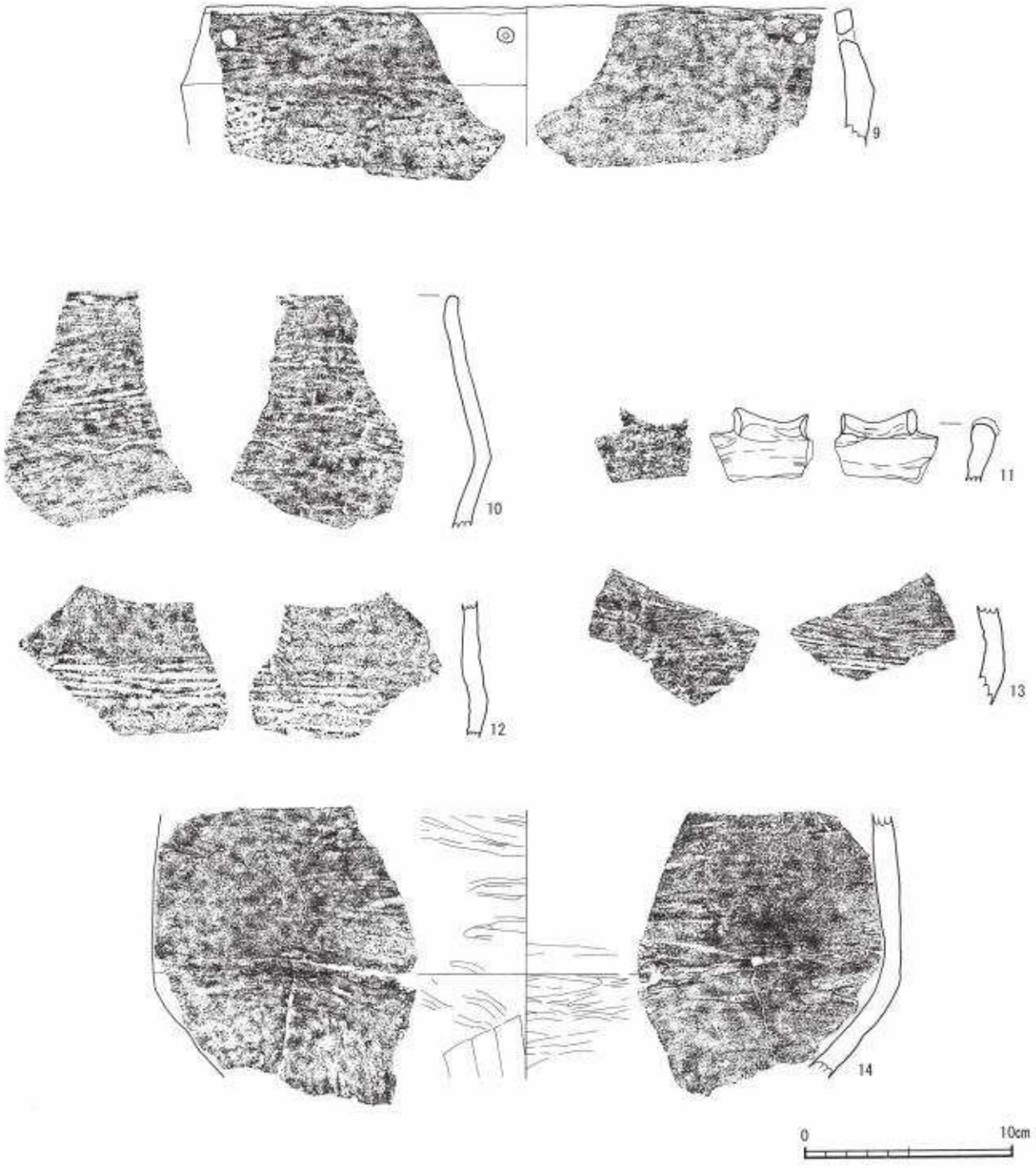
2　遺物

遺物はⅣ層を中心に出土した。土器は，深鉢・浅鉢・半粗半精製土器・刻目突帯文土器が出土した。また，石器は打製石鏃・磨製石鏃・掻器・削器・楔形石器・石核・磨製石斧・打製石斧・磨石・敲石・石皿等が出土した。

(1)　土器

深鉢（第15図：9～14）

9～29は粗製の深鉢で，口縁部，胴部，底部の土器片が出土した。9～11は口縁部である。9・10は胴部が「く」の字状に屈曲し，内傾する口縁部の土器で，口径が胴径を上回らない。9は口径30.6cmを測り，口縁部には一箇所穿孔が見られる。外面の器面調整は条痕後工具ナデ，内面は工具ナデによる調整で，外面には煤の付着が確認できる。11はリボン状突起の口縁部片である。12～14は屈曲部分の胴部片である。12・13は内外面共に条痕調整が行われているが，14はミガキ後ナデ調整が行われている。また，14には内外面共に煤の付着が確認できる。

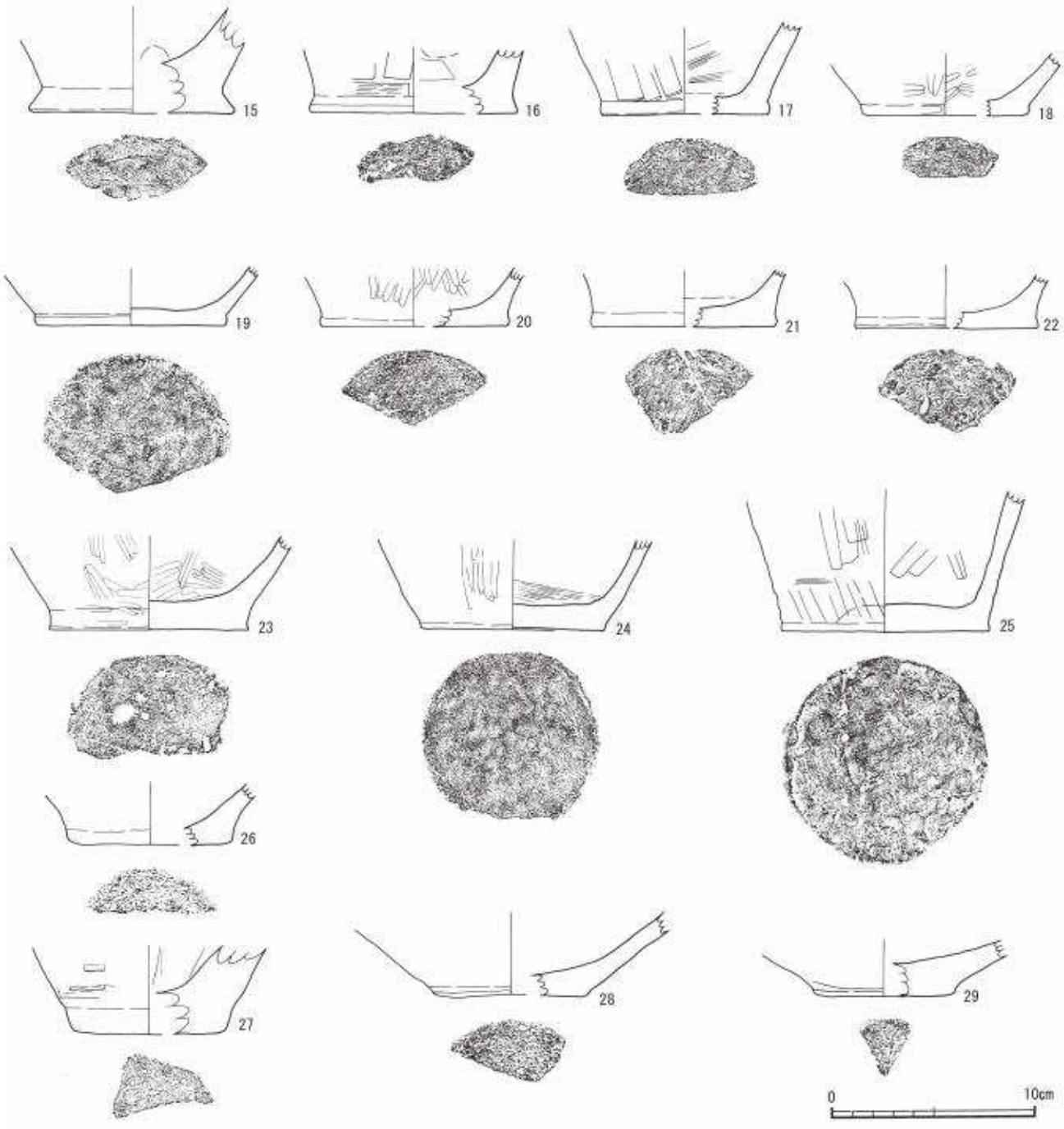


第15図　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器①

深鉢の底部（第16図：15～29）

15～29は深鉢の底部片である。大きな張り出しをもつもの（15），小さな張り出しをもつもの（16～25），張り出しをもたないもの（26），張り出しをもたず厚みのあるもの（27），張り出しをもたず胴部に向かって外開きになるもの（28・29）が見られる。

15は大きな張り出しをもつ安定した平底の底部で，底径10cmを測る。小さな張り出しをもつ底部の底径は平均8～9cm程度である。28・29は外に大きく開く器形をもつ土器で，28はわずかに上げ底気味である。張り出しをもたない27～29は底径がそれぞれ7.4cm，7.4cm，6.8cmで，張り出しをもつ底部に比べて底径が小さいことがわかる。圧痕が見られるような底部片はなかった。器面調整の多くはナデ調整であるが，内外面共にミガキが行われているもの（18・20・23）もあり，精製浅鉢の底部の可能性もある。



第16図　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器②

浅鉢・鉢（第17・18図：30～56）

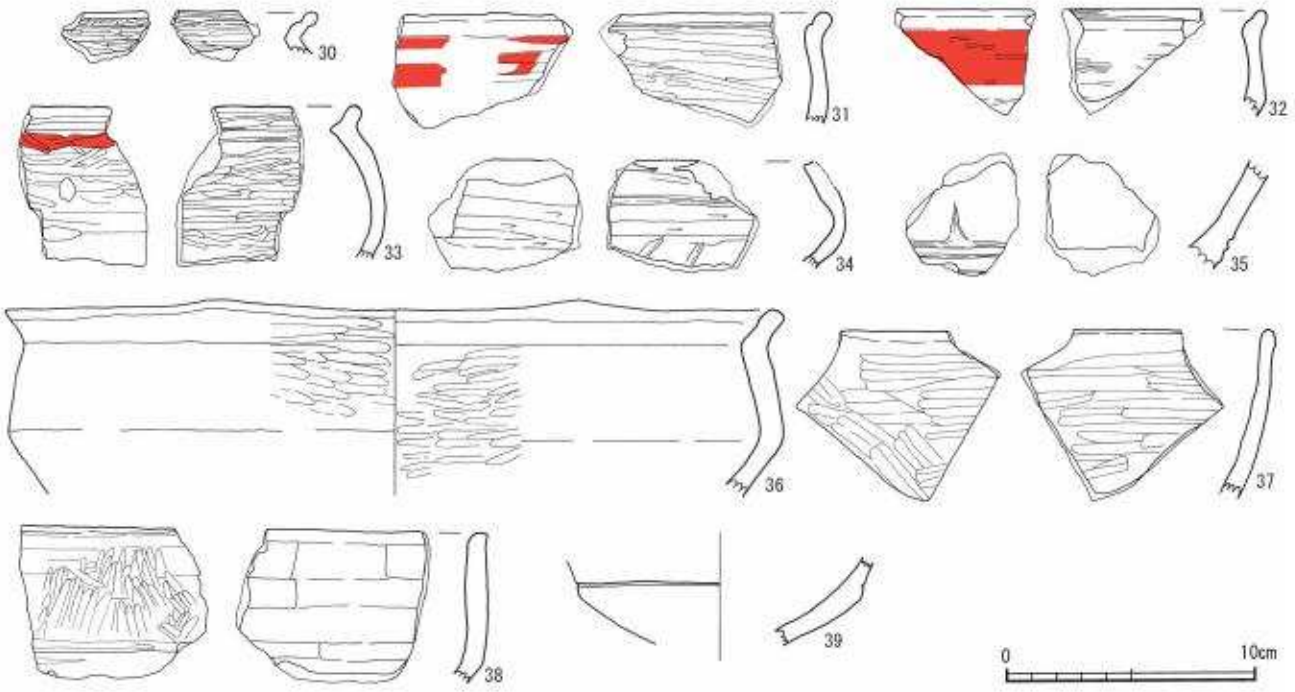
30～50は精製の浅鉢である。

30～33は口縁部内面に沈線をもつ。30・33はわずかに玉縁状の口縁部形態で，口縁部は外反し，口縁部から頸部までが短い。器面調整は内外面共にミガキが行われている。32は「く」の字状に屈曲する胴部から直線的に伸びる器形である。また，31～33の外面には赤色顔料が確認できる。34は丸く屈曲した胴部から内弯しながら口縁部に至る器形で，口唇部は平坦な作りである。器面調整は内外面共にケズリが行われた後に粗くナデ調整が行われている。35は底部に沈線を施し，沈線の一部を抉り込みによってとげ状を呈し，三叉文に近い文様である。36は口径31cmを測り，波状口縁である。口縁部内面に細い沈線をもつ。器面調整は内外面共にミガキが行われており，外面には煤の付着が確認できる。胴部は「く」の字状に屈曲し，器面調整は内外面共にミガキが行われている。37は口縁部から胴部へとやや丸みを帯びる器形である。器面調整は内外面共にミガキが行われている。39は沈線が施された底部である。

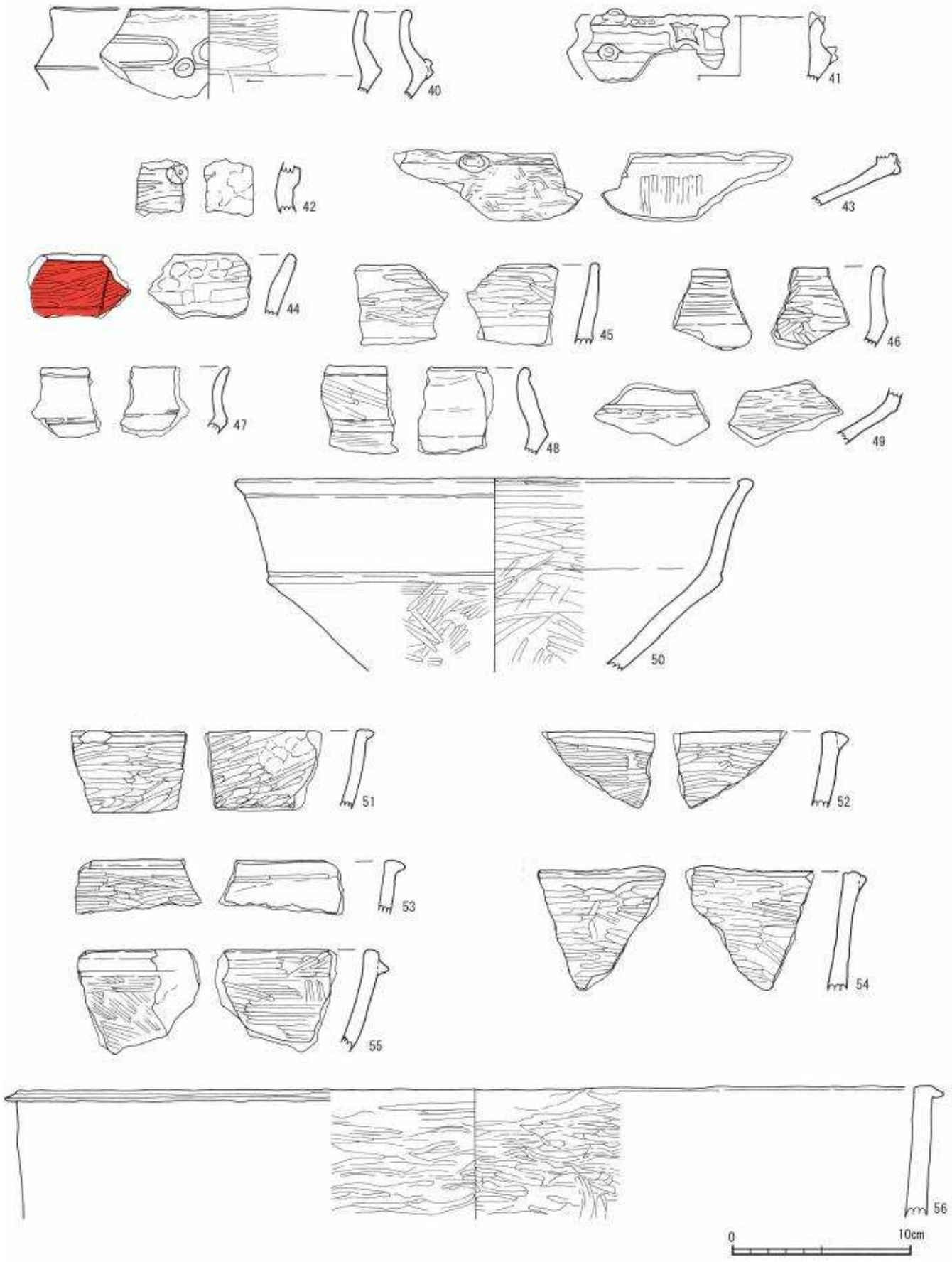
40～43はボタン状の貼り付け文が施されている浅鉢である。40は古墳時代の2号～4号竪穴住居跡周辺から出土した。胴部は「く」の字状に張り出し，張り出し部にボタン状の貼り付け文をもつ。また，張り出し部の上部には，沈線による曲線文様が描かれている。41も胴部が「く」の字状に張り出した器形で，口径13cmを測る。口唇部と胴部の屈曲部分にボタン状の貼り付け文をもち，細い粘土を貼り付けることによって四角形状の区画を作り出している。なお，41と7（第11図）は器形及び文様等から同一個体の可能性がある。43は胴部の下半部で，張り出し部にボタン状の貼り付け文をもつ。

44は外反する口縁部をもつ。外面の口縁部及びその下方に細い沈線が施されている。45はやや直行する口縁部で，口唇部に向かって薄く成形されている。器面調整は内外面共にミガキが行われ，外面には煤の付着が見られる。46～50は「く」の字状に屈曲する胴部をもつタイプである。46は屈曲部から直線的に口縁部へと至る。47は屈曲部から外反しながら口縁部へと，48は屈曲部から内弯気味に立ち上がりながら口縁部へと至る器形である。また，44・48には口縁部の下部に細い沈線が，47には口縁部の下部と胴部の屈曲部に細い沈線が施されている。49の胴部の屈曲部には沈線が施されている。50は胴部で屈曲して立ち上がり，開きながら口縁部へと至る器形である。口縁部下部と胴部の屈曲部にそれぞれ1本の沈線が施されており，口縁部の内面には工具を利用して作出したわずかなくぼみが確認できる。口径は28.2cmを測り，器面調整は内外面共にミガキ後ナデ調整が行われている。

51～56は精製の鉢である。いずれも口縁部片で，詳細な器形については不明である。51～54・56は口縁端部に突帯を貼り付けており，器面調整は内外面共にミガキが行われている。56は口径51cmを測る。55は口縁端部からやや下方に突帯が貼り付けてあり，丸みをもつ器形である。器面調整は内外面共にミガキが行われている。なお，器形及び器面調整等から51・53，52・54はそれぞれ同一個体と思われる。



第17図　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器③



第 18 図　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器④

半粗半精製土器（第19・20図：57～73）

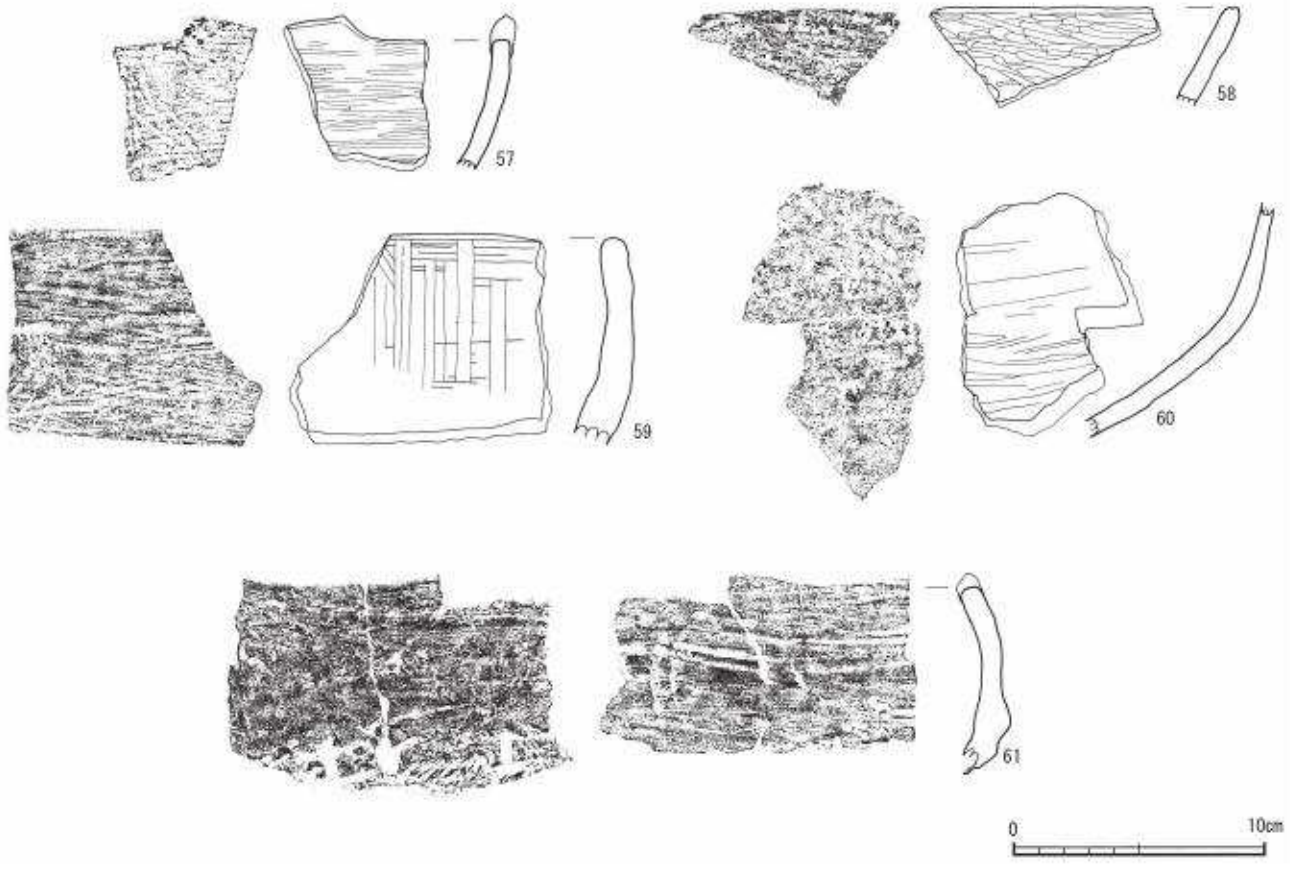
57～73は半粗半精製土器である。

57は外面を条痕調整，内面はミガキが行われている半粗半精製の浅鉢である。ボール状に立ち上がる器形で，口唇部にはリボン状突起をもつ。58・59は口縁部片であり，内面調整は58がミガキ，59は丁寧なナデ調整である。外面には煤の付着が確認できる。60は胴部片で，59と同様に内面は丁寧なナデ調整が行われている。外面は煤の付着が著しい。

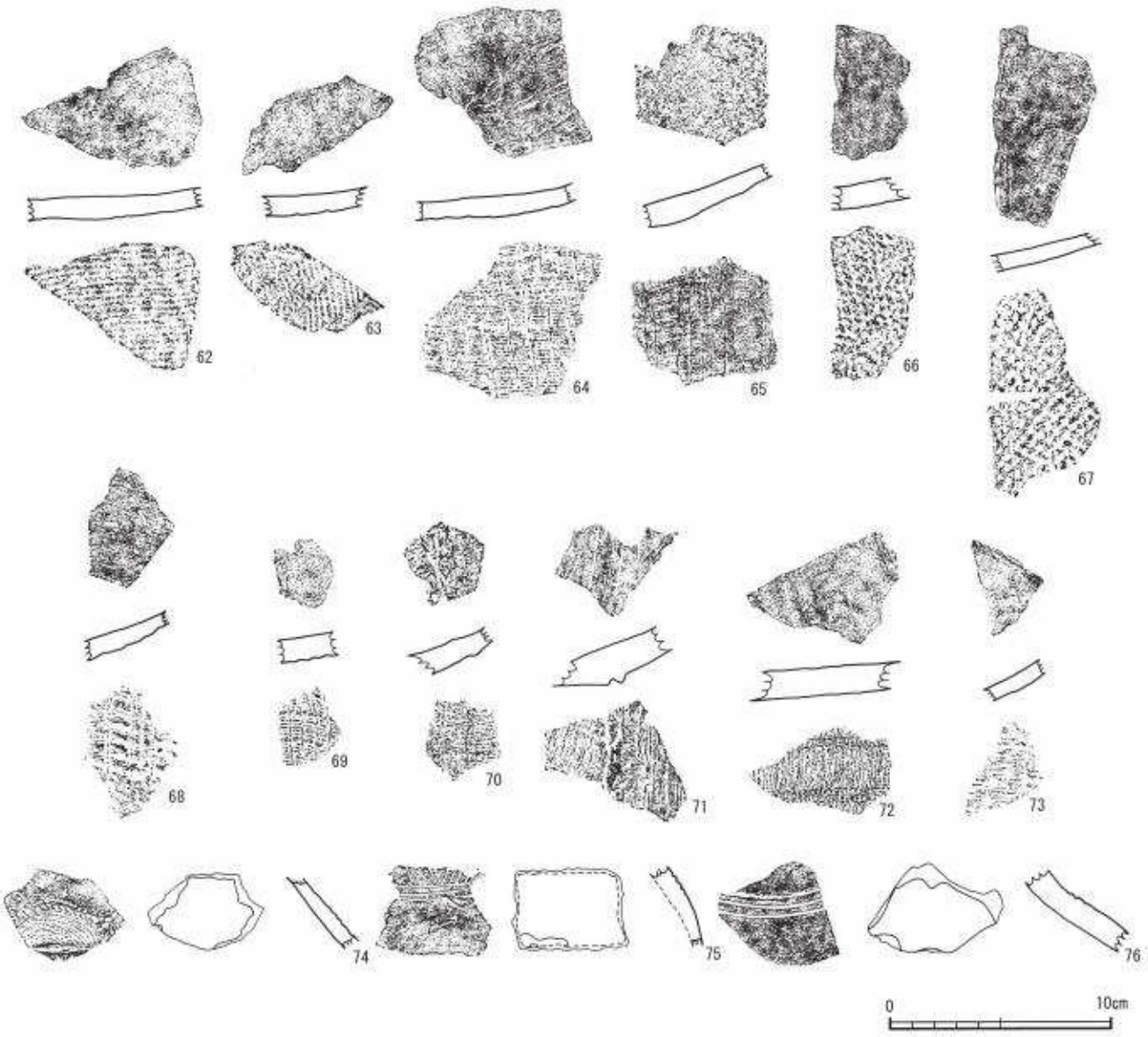
61～73は組織痕土器であり，胴部下半から底部にかけて編布痕などが認められる。61は胴部に組織痕と思われる圧痕が見られる。62～73は胴部下半から底部にかけての土器片であり，組織痕が認められる。本遺跡から出土した組織痕土器はすべて編布圧痕をもつ土器である。経糸間の幅に着目すると大きく3種類見られ，3～5mmの密なもの，9～11mmの中間的なもの，17～21mmの粗いものが見られる。1cm当たりの経糸の本数については6～9本で，大きな違いは見られなかった。62･63は経糸間の幅，経糸の本数ともに同じである。また，65・72については経糸が連続して2～3本入る様子が窺える。なお，経糸間の幅及び1cm当たりの経糸の本数の詳細は，観察表に示した。66・67は約2mmの細かな目をもつ網目痕である。なお，組織痕土器の内面の調整は，丁寧なナデ調整が多く見られる。

壺（第20図：74～76）

3点とも板付Ⅱ式に該当する肩部片である。74は5条のヘラ描き重弧文の上位に2条の連点重弧文を有している。75は3条の沈線上に4条のヘラ描き鋸歯文が描かれている。76は古墳時代の2号～4号竪穴住居跡周辺から出土した。2条の沈線が施され，内外面共にナデである。



第19図　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器⑤



第 20 図　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器⑥

刻目突帯文土器（第 21 ～ 25 図：77 ～ 128）

77 ～ 128 は縄文時代晩期終末期～弥生時代前期に位置づけられる刻目突帯文土器である。大半が口縁部片であり，全体の器形の様相は不明である。

77 ～ 95 は内傾する口縁部をもつ器形である。77 ～ 80 は胴部で屈曲して口縁部に向かって内傾する器形で，口縁部と屈曲部にそれぞれ 1 条の刻目突帯文が貼り付けられている。77 は緩やかに内傾し，口径 19cm を測る。78 ～ 80 は屈曲部が「く」の字状を呈しており，屈曲が強い。器面調整は内外面共に工具ナデによる調整である。82 ～ 85・88・89・95 は口縁部に 2 条の刻目突帯文が貼り付けられているが，口縁部片のみの出土のため屈曲部は不明である。84 の口縁部の突帯下には外面から開けられた 2 つの穿孔があるものの，ともに内面に貫通していない。85 は器面調整が内外面共にミガキが行われており，外面には補修の跡と考えられる粘土の貼り付けが見られる。86 ～ 88 は口縁部上端に突帯を貼り付け，細い工具で刻みが施されている。86・87 の器面調整は内外面共にミガキである。また，87・88 は口縁部が丸みを帯びて内弯する器形で，88 には屈曲部の突帯に刻みを付ける際についたと思われる工具の跡が突帯の上部に残されている。

なお，この 2 点は他の土器片に比べて器壁の作りが厚い。

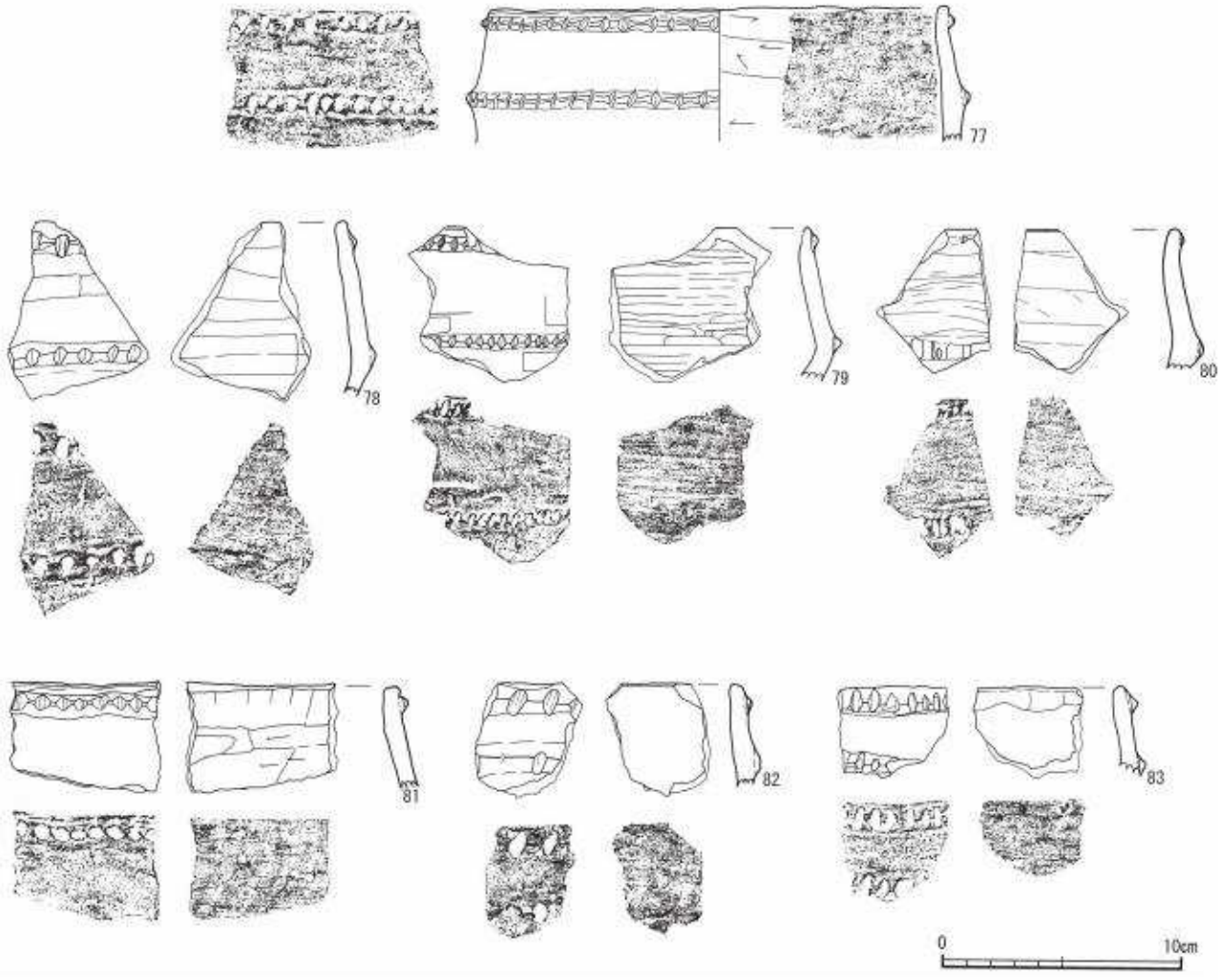
96 ～ 120 は外反する口縁部をもつタイプである。

96・97 は胴部が「く」の字状に屈曲する器形である。96 は口径 34cmを測り，口縁部上端からやや下がった位置と屈曲部分に突帯が貼り付けられている。また，98 と胎土，色調，器面調整が同一であることから，96・98 は同一個体の可能性がある。97 も 99 同様，口縁部上端からやや少し下がった位置と屈曲部分に突帯が貼り付けられており，器面調整は内外面共にミガキが行われている。

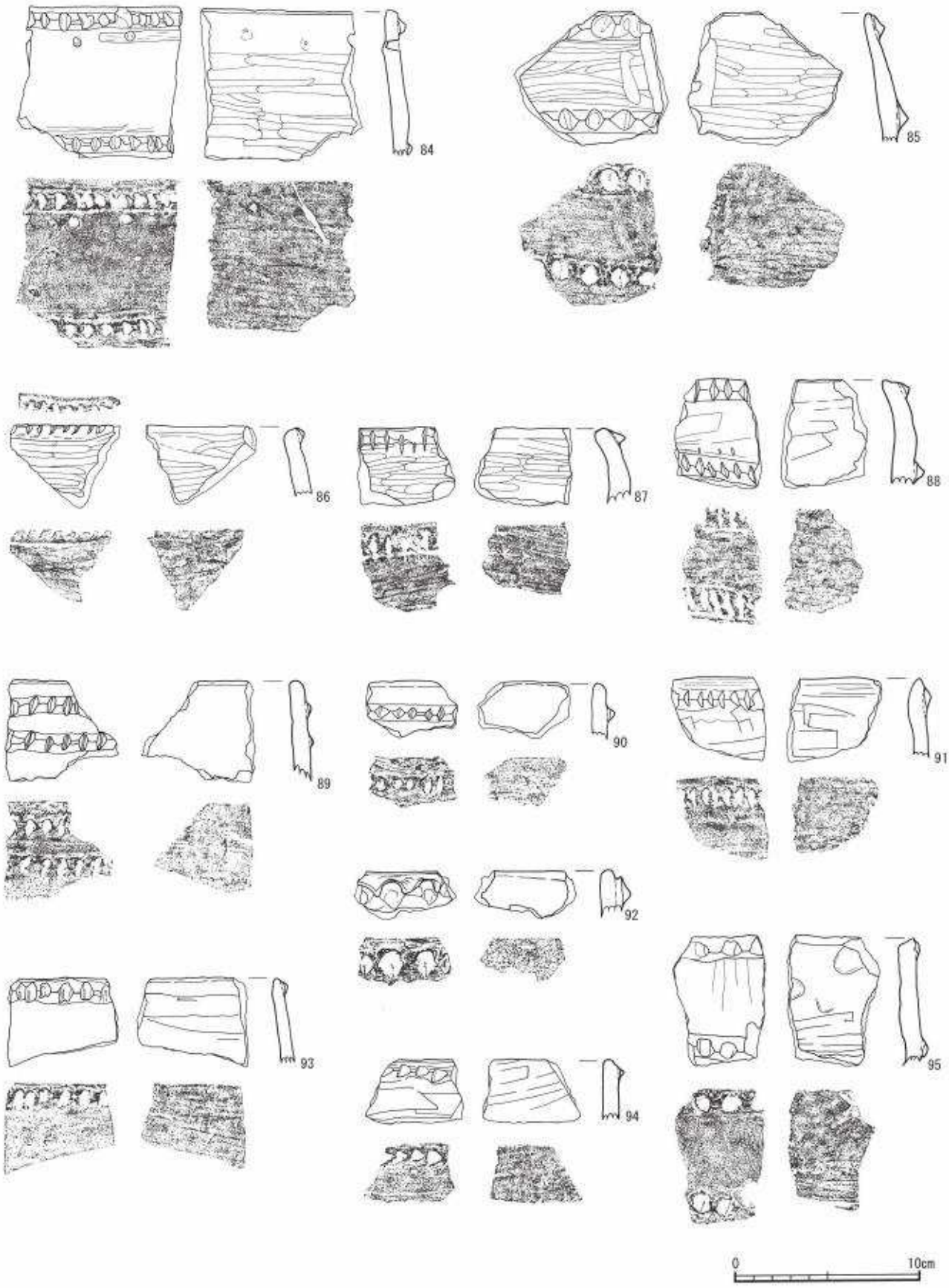
98 ～ 110 は直行気味に外開きになる口縁部をもつ土器であり，多くが口縁部の小破片のみで全体の器形については不明である。99・100・103・106・107・109 は口縁部上端からやや下がった位置に突帯が貼り付けられて，107 には細い工具で刻みが施されている。101・102・104・105・108・110 には口縁端部に突帯が貼り付けられていて，102・104 には穿孔が見られる。102 は外面から内面へと丁寧に開けられており，104 は外面から開けられているが内面へ貫通はしていない。

111 ～ 120 は外反がやや強い土器である。113・115 は口縁端部から約 1 cm下がった位置に突帯が貼り付けられている。その後，細い工具を使用して口唇部から刻みが施されている。113 は刻みではなく，粘土を口唇部に向かって押し上げるようにして突帯を作り上げている。117・120 は口縁部と胴部にそれぞれ 1 条の突帯が貼り付けられており，胴部は屈曲しないバケツ形を呈している。117 は口径 39.4cmを測る。119 は口唇部に粘土を貼り付けてその部分に刻みを施している。外面には全体に煤が付着しており，内面調整はミガキが行われている。

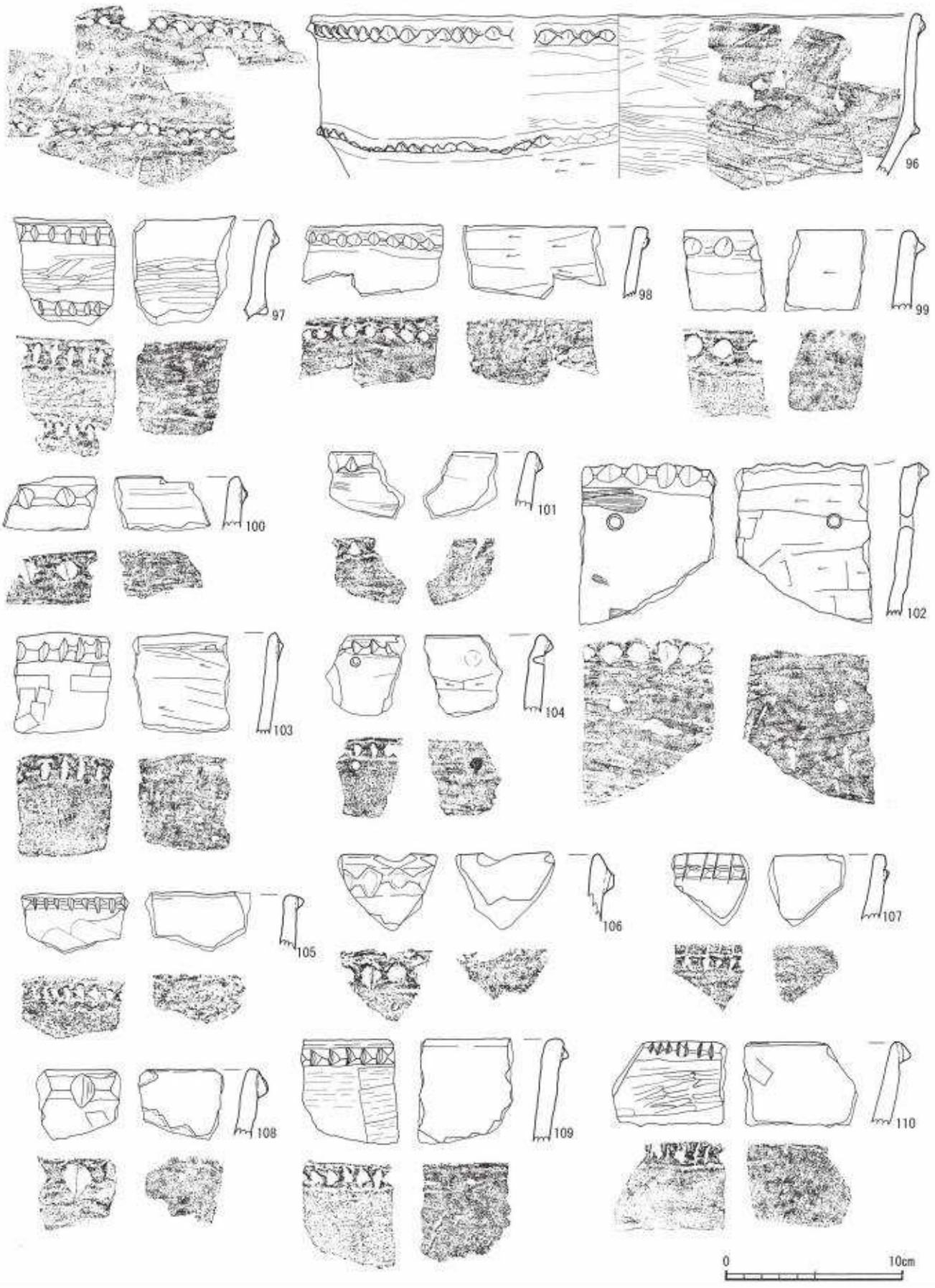
121 ～ 128 は胴部片である。胴部で屈曲するものが多い。122 は口縁部が欠損しているが，胎土や色調，器面調整等から，96・98 と類似しており同一個体の可能性も考えられる。127 の胴部には刻目を施した棒状突帯が貼り付けられており，横方向の突帯と縦方向の突帯が直角に交わる形になっている。



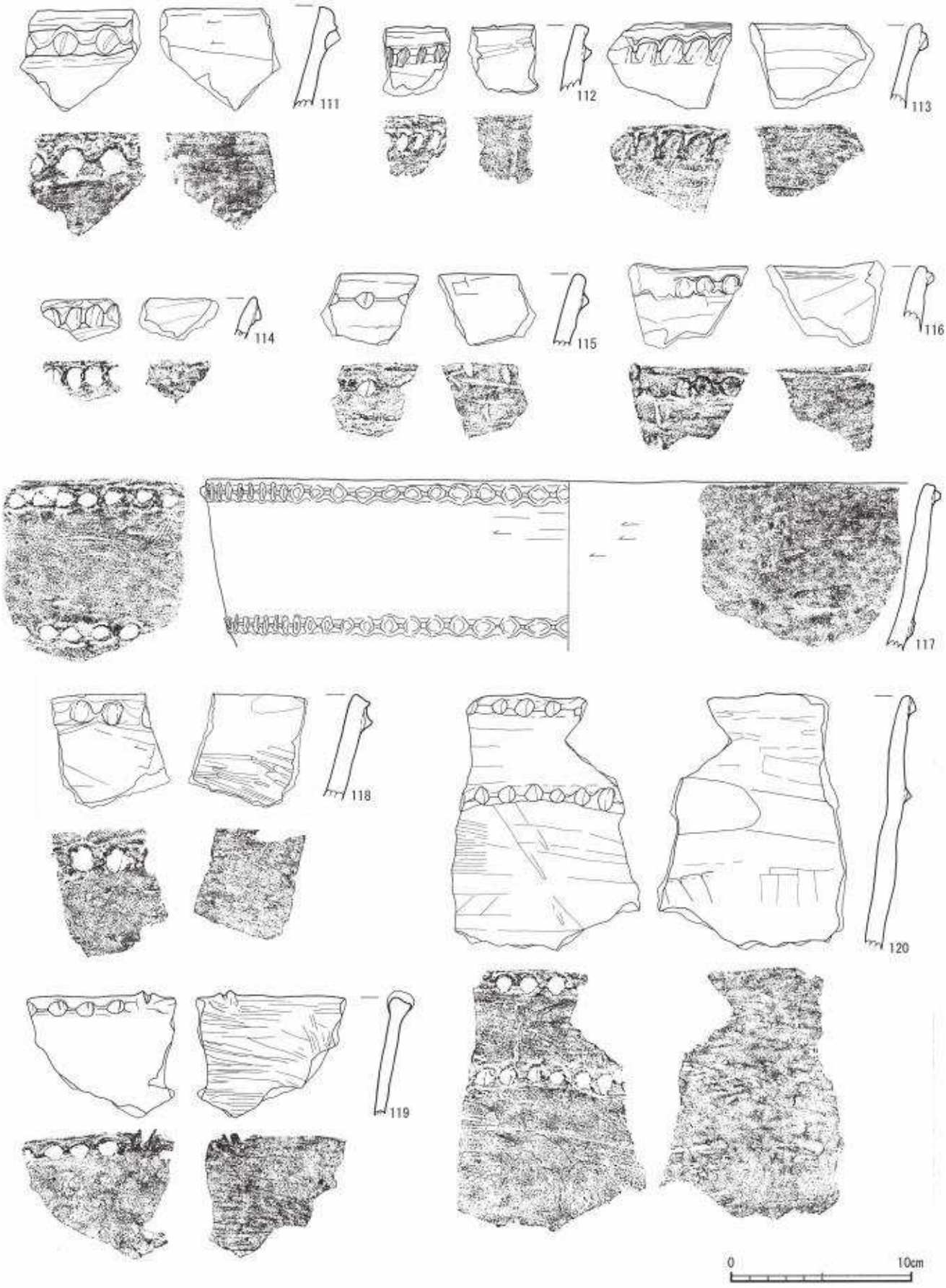
第 21 図　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器⑦



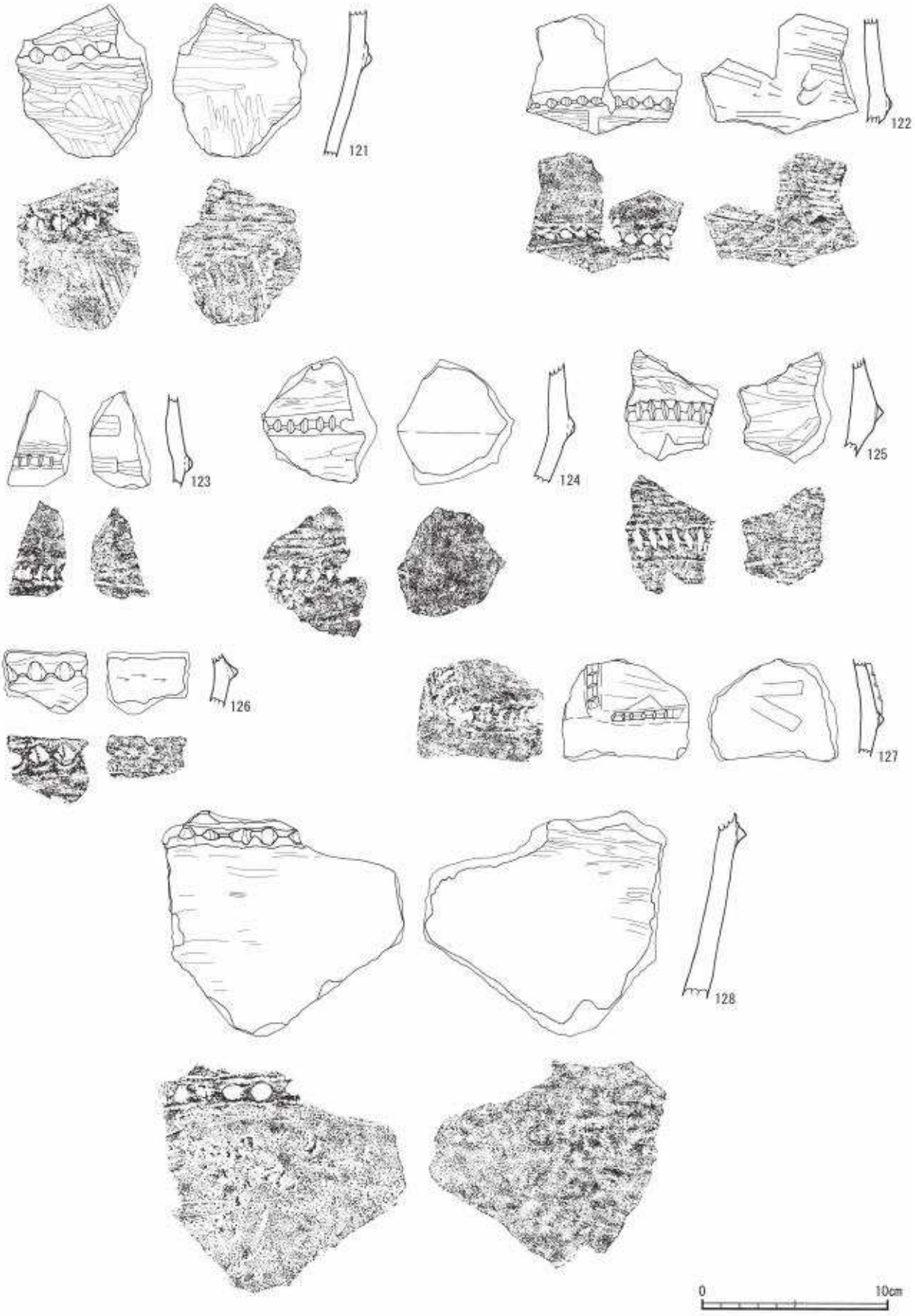
第 22 図　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器⑧



第23図　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器⑨



第 24 図　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器⑩



第 25 図　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器①

(2) 石器

Ⅲ層・Ⅳ層出土の石器については，縄文時代晩期相当の遺物として，器種別に一括して扱うこととする。

なお，石材については肉眼観察によるものである。

打製石鏃（第 27 図：129 ～ 150）

129 ～ 134 は正三角形状を呈し，129 ～ 131 は基部に抉りが見られないものである。また，132 ～ 134 は基部に抉りが見られるものである。135 ～ 139 は二等辺三角形状を呈し，基部にはわずかに抉りが見られる。140 ～ 142 は最大長 2 cm を超える大型のもので，140・142 は基部に深い抉りが見られる。143 ～ 148 は未製品，149・150 は欠損品である。

磨製石鏃（第 27 図：151）

151 は頁岩製で，表裏面とも全面研磨による器面調整，側縁調整が施されている。平面形状は側縁が緩く外弯して，基部は直線を呈する。

掻器（第 28 図：152・153）

152 は黒曜石の剥片を素材とし，分厚くなった部分の縁辺に刃部加工を施している。153 も黒曜石の分厚い剥片を素材とするもので，短辺の一つにスクレイパーエッジを付けたものである。

削器（第 28 図：154 ～ 158）

154 は黒曜石の不定形剥片を素材とし，下縁及び右側縁に刃部調整を施している。155 も黒曜石の不定形剥片を素材とし，右縁辺に刃部調整を施している。156 は礫皮面を残す玉髄の不定形剥片を素材とし，下縁に刃部調整を施している。157 は頁岩製の粗製削器である。横長剥片を素材とし，下縁に刃部調整を施したラフな作りである。158 は頁岩の縦長剥片を素材とし，左右側縁に入念な刃部調整が行われている。

楔形石器（第 29 図：159 ～ 161）

上下に向き合う二辺から対抗する剥離が見られ，上下の辺縁に剥離，または両極打法による使用痕と思われる潰れが確認される剥片を一括した。159 は石英の結晶礫を素材とし，上下両方向からの階段状剥離が顕著である。160・161 は黒曜石を素材としている。

二次加工剥片（第 29 図：162）

162 は黒曜石の縦長剥片を素材とし，左側縁に押圧剥離で器面調整が施されている。

石核（第 29・30 図：163 ～ 167）

163 ～ 166 は黒曜石の残核である。163・164・166 は表裏面にほぼ全周から直接加撃による目的剥辺剥離がなされている。165 は礫皮面打面であり，作業面が表裏面及び右側面にある。167 は玉髄の分割礫である。縁辺部から同一方向に複数枚の剥片を作出している。

磨製石斧（第 31 図：168）

168 は基部の抉りが顕著ではなく，打ち欠き加工部分は残すものの，全体的に研磨が丁寧である。特に，刃部は丁寧な研磨を施している。

打製石斧（第 31 ～ 34 図：169 ～ 187）

169・170 は基部の抉りが顕著で，刃部が幅広い。171 ～ 173 は細身の形状で，171・172 は基部の抉りが顕著である。174 は扁平な剥片を素材とし，基部に抉りは見られない。175 ～ 182 は基部から胴部が残存する破損品である。175・176・178・179・182 は比較的細身の形状である。また，180・181 は基部の抉りが顕著である。183 ～ 186 は刃部が残存する破損品で，187 は胴部が残存する破損品である。

石錘未製品（第 34 図：188）

188 は捻れのある扁平な棒状礫の両側縁から器面調整剥離と周縁剥離，敲打を施してある。この加工の有り様と素材礫の形状から錘形石斧の未製品と判断した。

棒状敲石（第 34 図：189）

189 は表面及び上下面に敲打痕が顕著に見られる。

磨石・敲石（第 35 図：190 ～ 193）

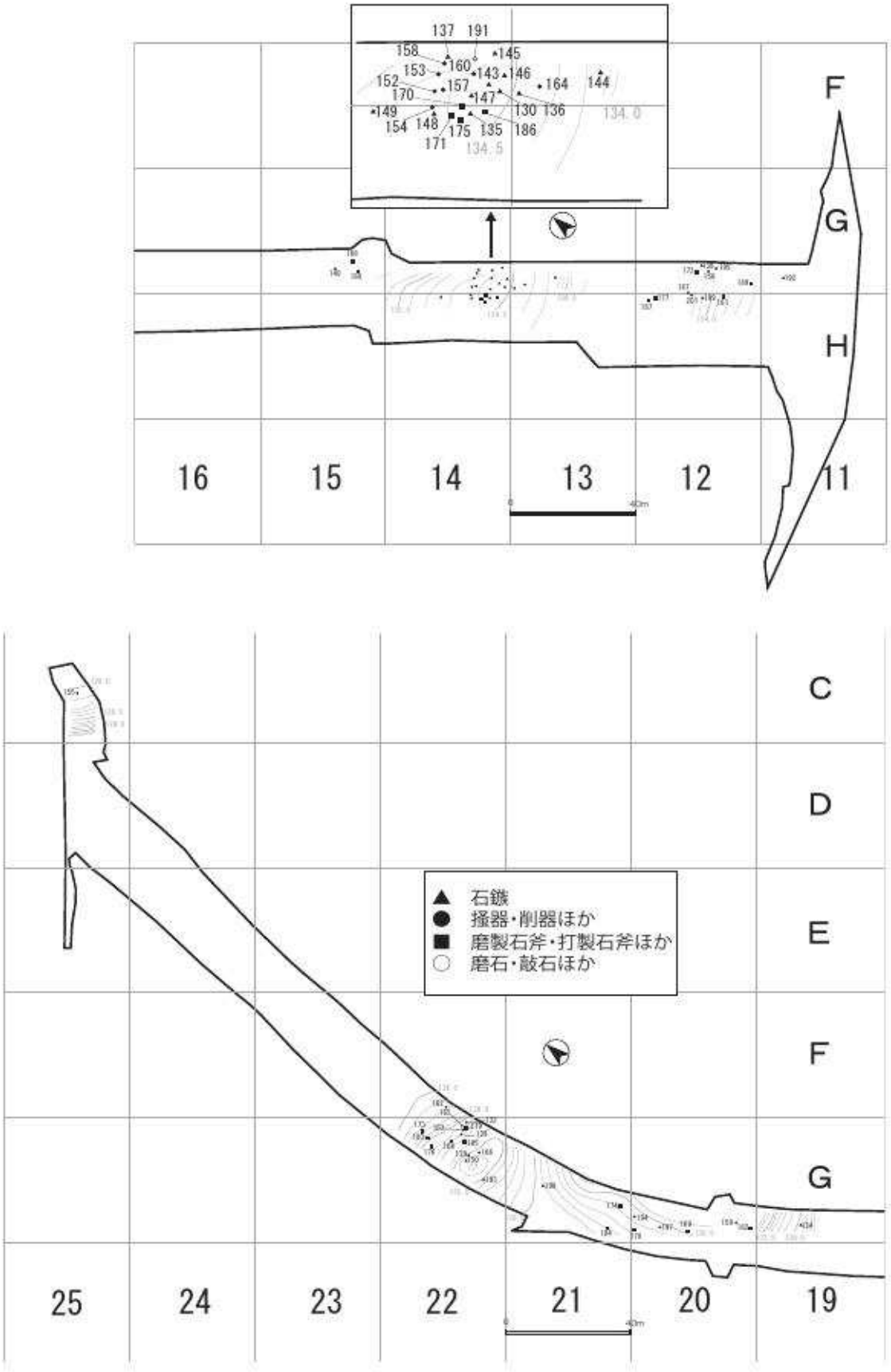
190・193 は磨石・敲石である。190 は表裏面に磨面が見られ，敲打痕も表裏面の中央部，右側面及び下面に見られる。193 は表裏面に磨面，右側面には敲打痕が見られる。また，191・192 は敲石で，上下面に敲打痕が顕著に見られる。

凹石（第 36・37 図：194 ～ 197）

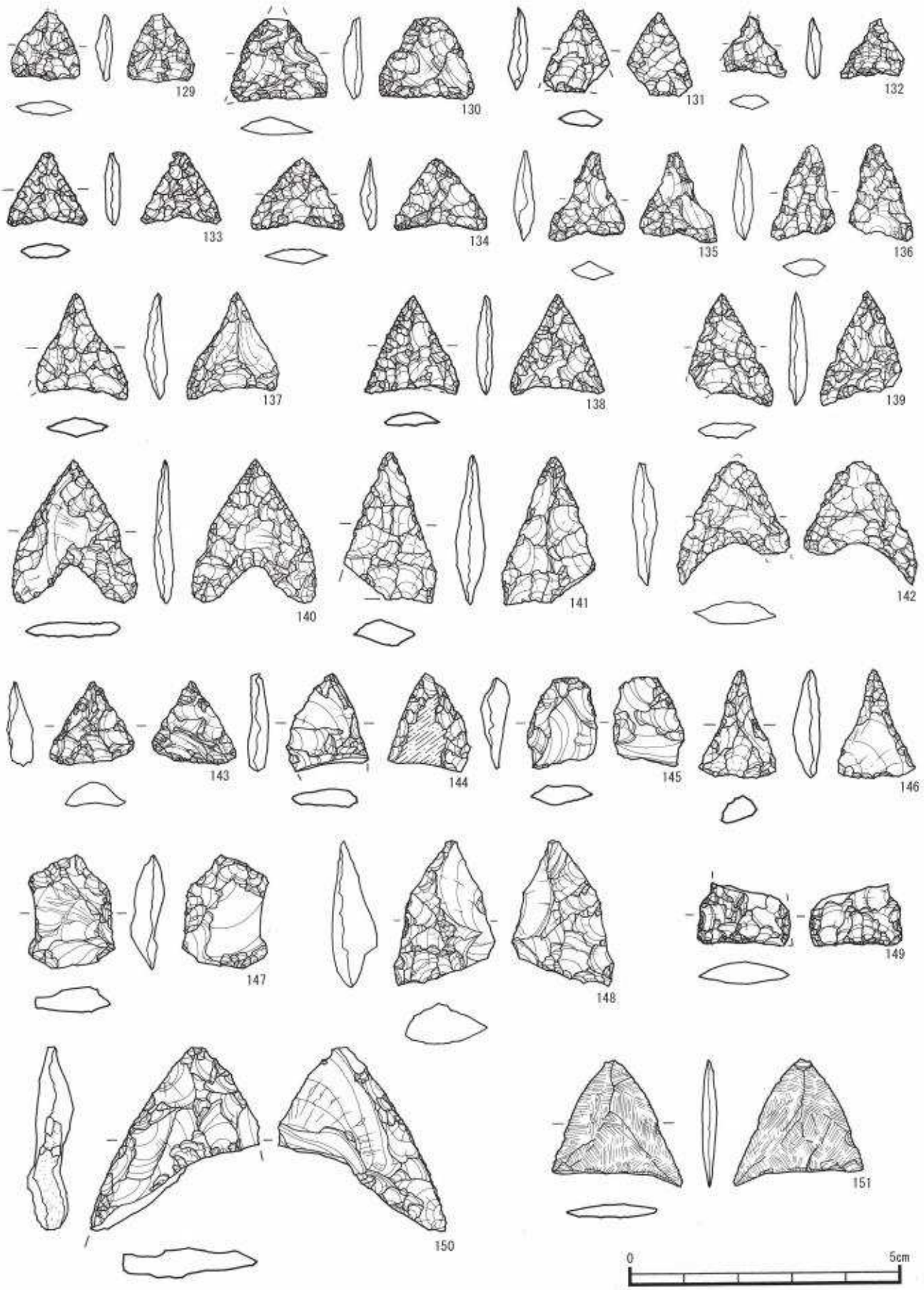
194 には表裏面に敲打による凹みと，上下面に敲打痕が見られる。195 は表面中央に凹みが見られ，側縁部は敲打痕が顕著である。196 は石皿の破損品で表面には敲打による凹みが見られる。197 は石皿の破損品の表裏面に凹みが見られる。

石皿（第 37・38 図：198 ～ 201）

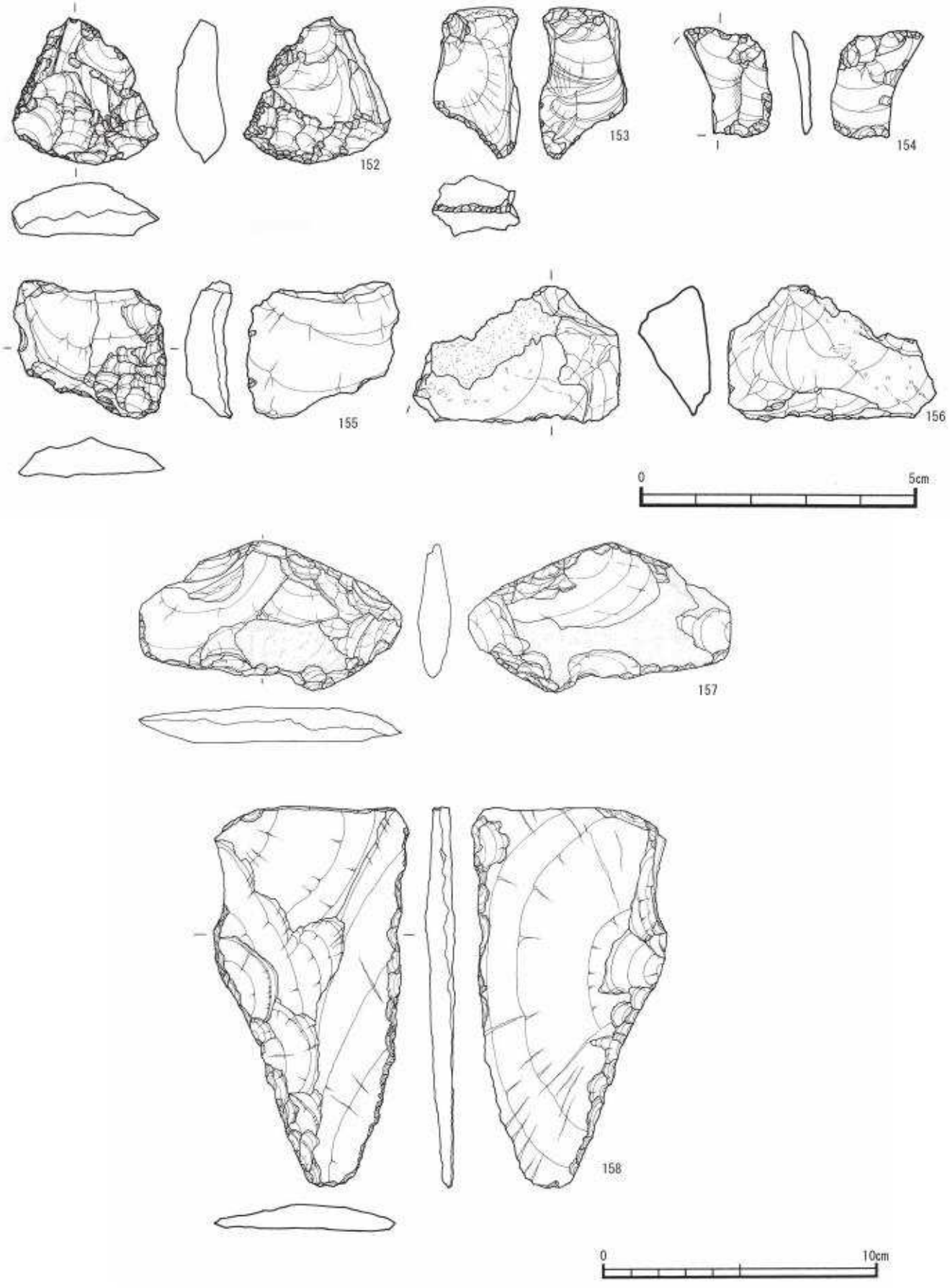
198・201 は表面に，199・200 は表裏面に磨面が顕著に見られる。196・200 は古墳時代の住居跡からの出土であるが，古墳時代の石皿は類例がないため，縄文時代晩期の所産であろうと考えている。



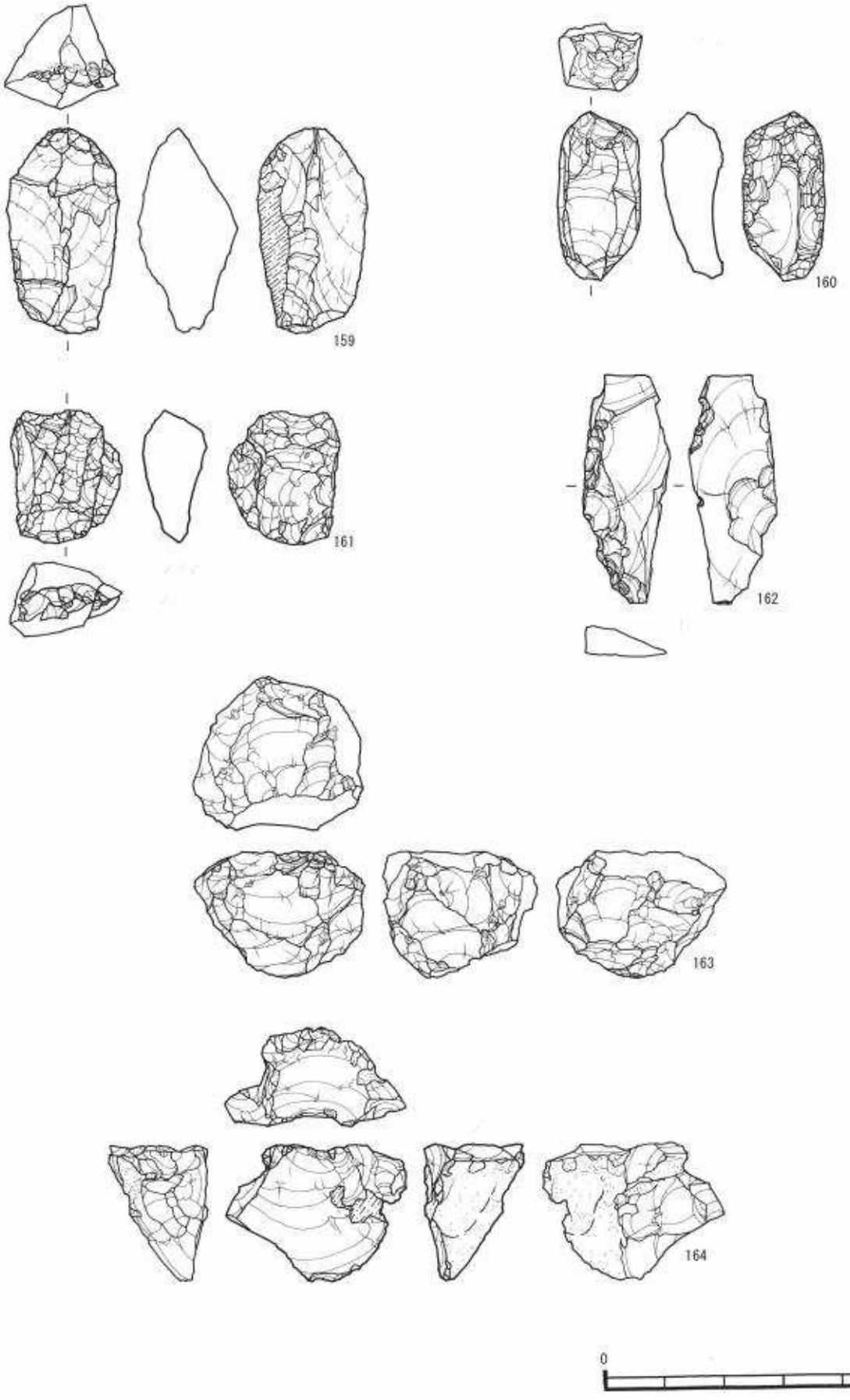
第 26 図　遺物出土状況図（石器）



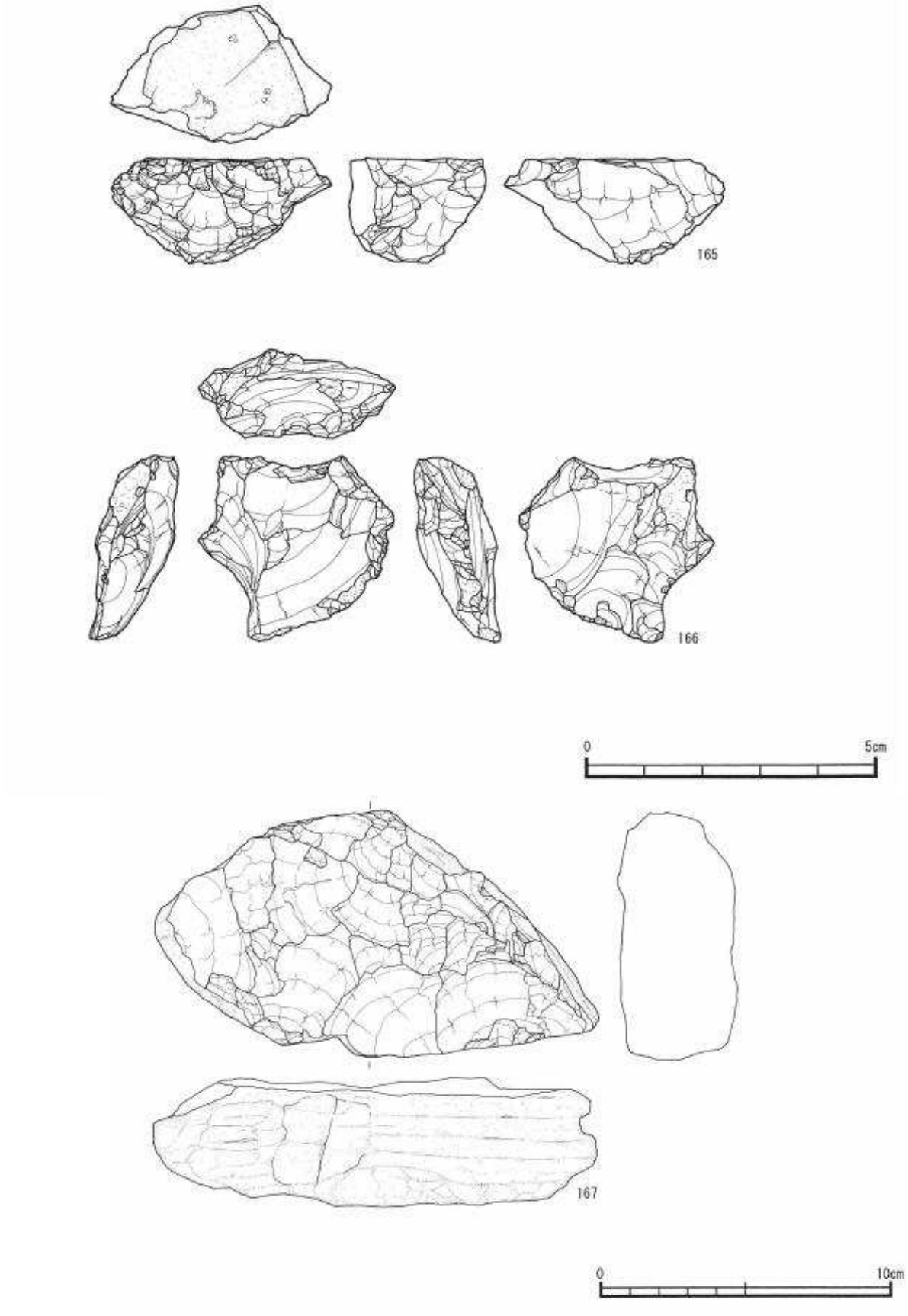
第27図　縄文時代晩期の石器①



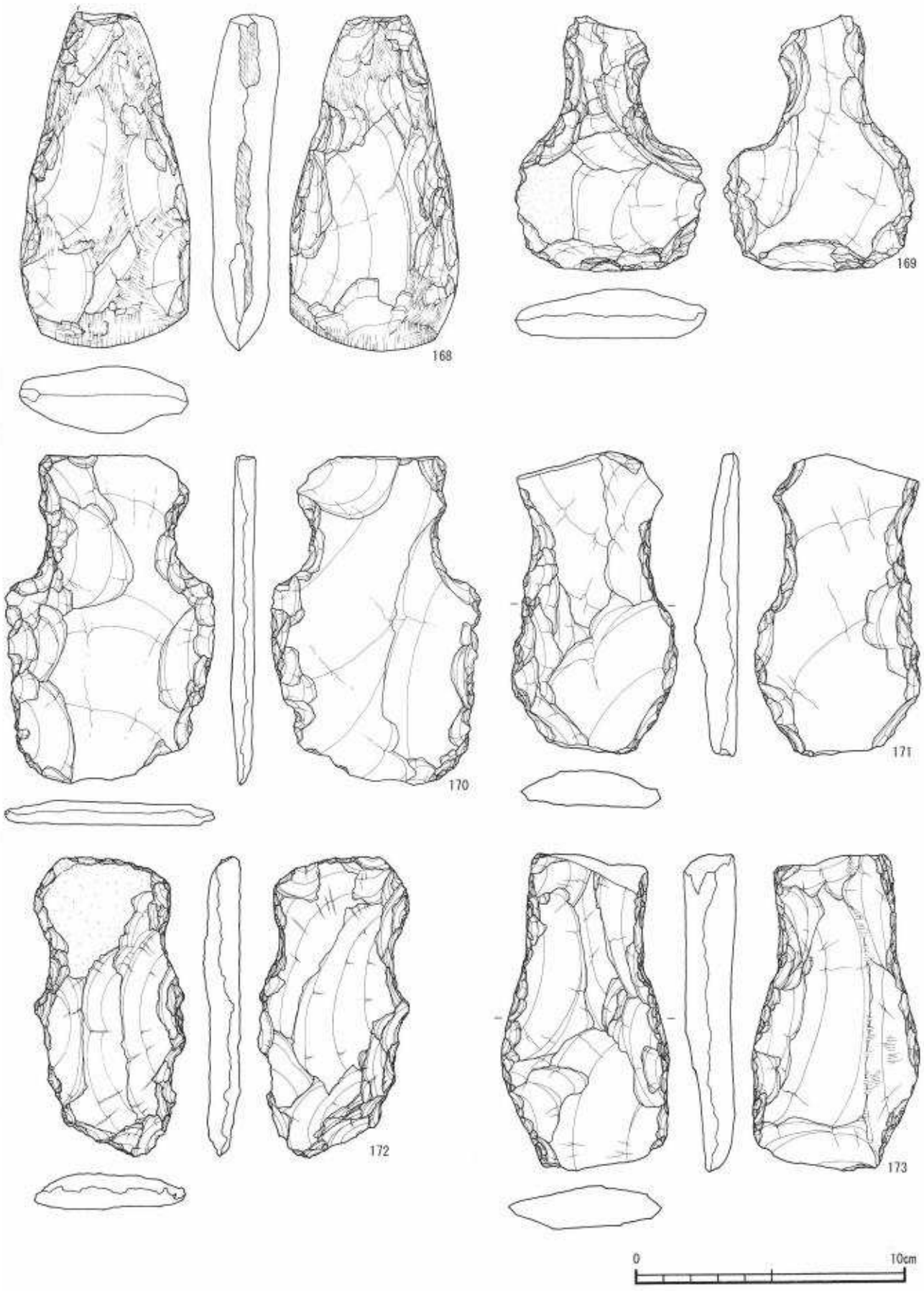
第 28 図　縄文時代晩期の石器②



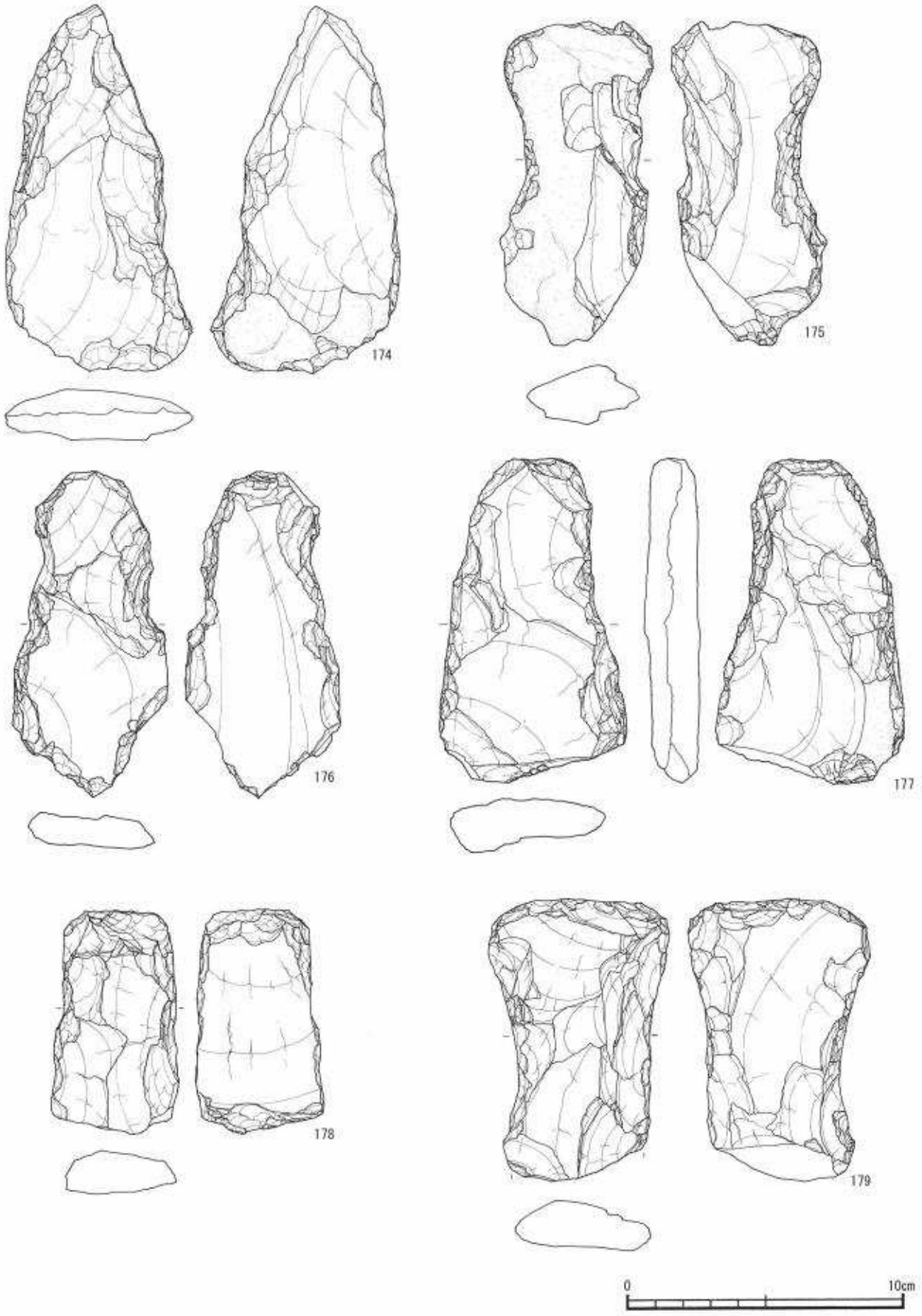
第29図　縄文時代晩期の石器③



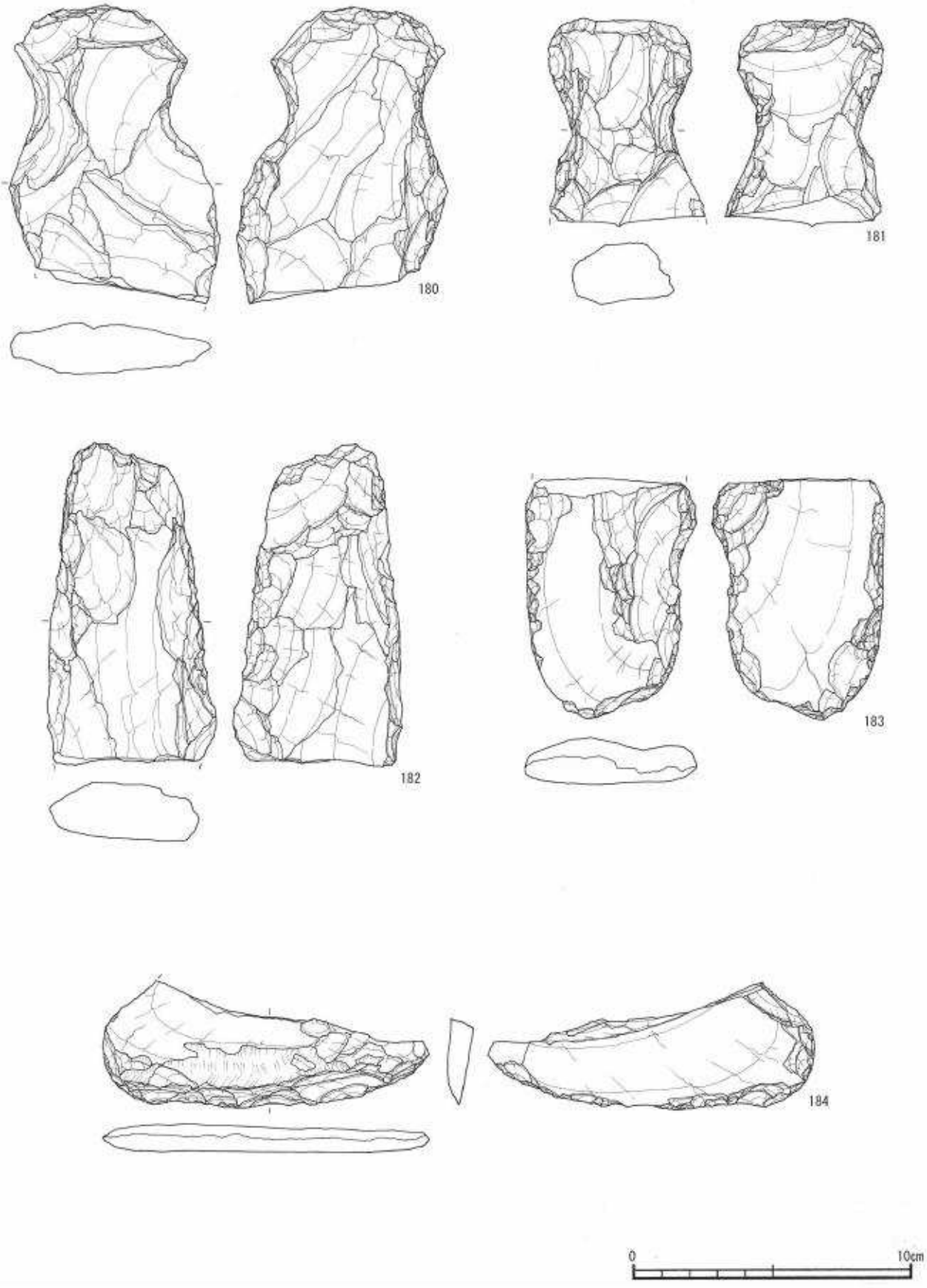
第 30 図　縄文時代晩期の石器④



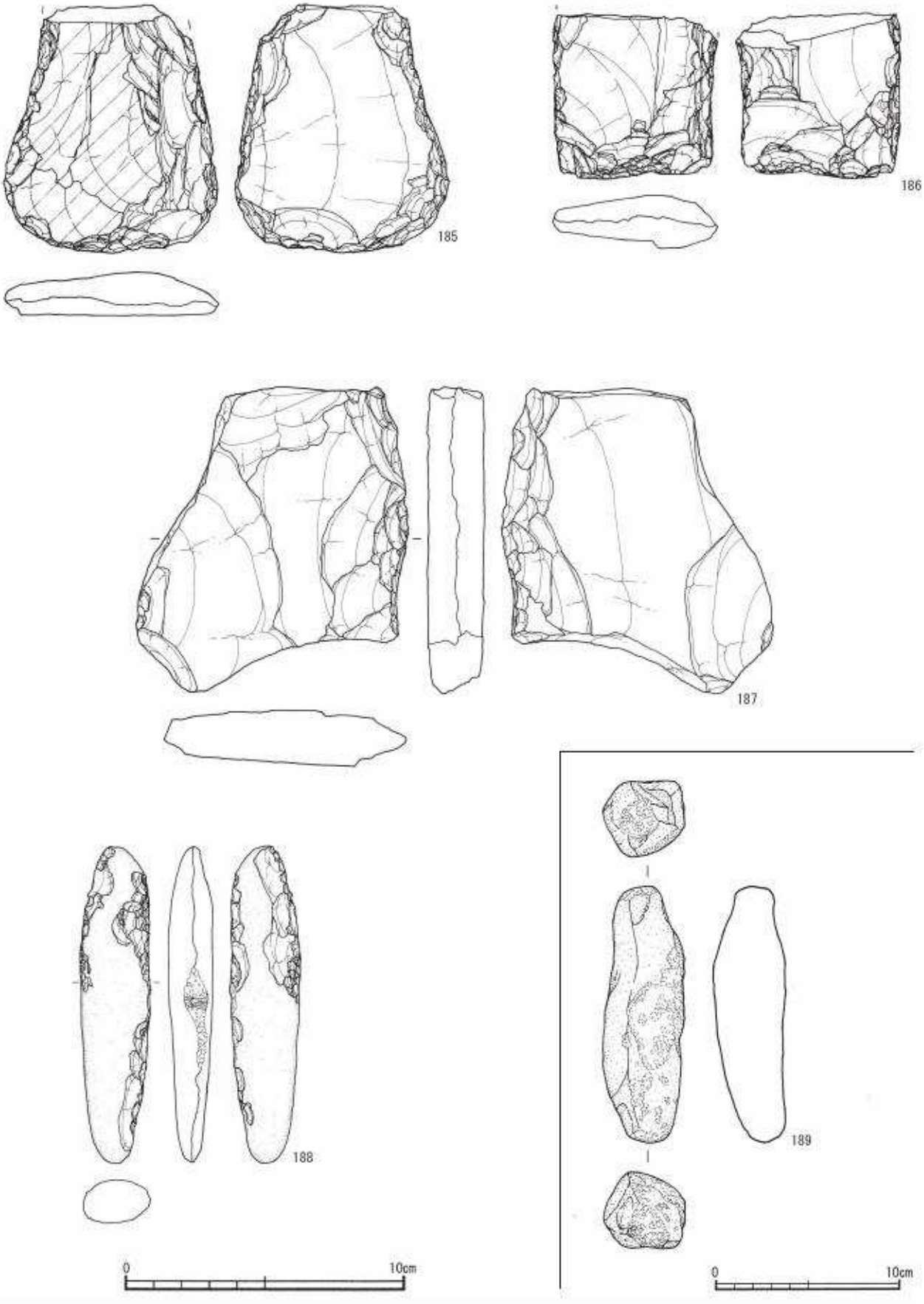
第 31 図　縄文時代晩期の石器⑤



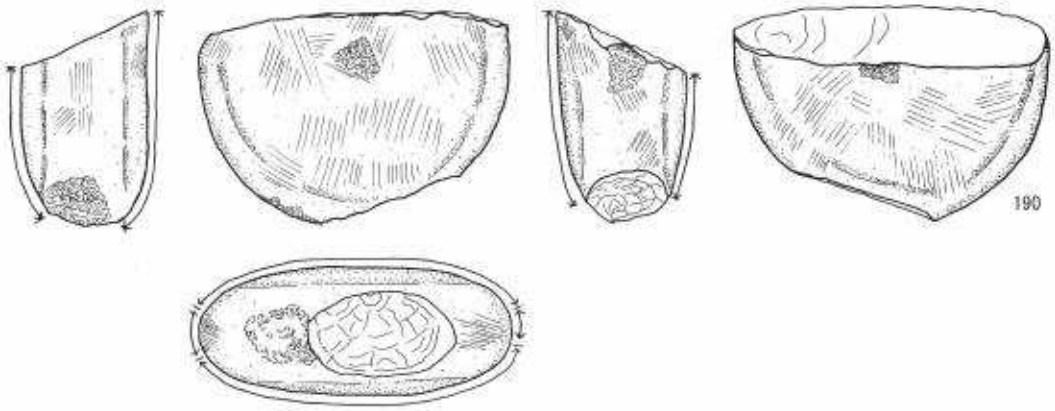
第 32 図　縄文時代晩期の石器⑥

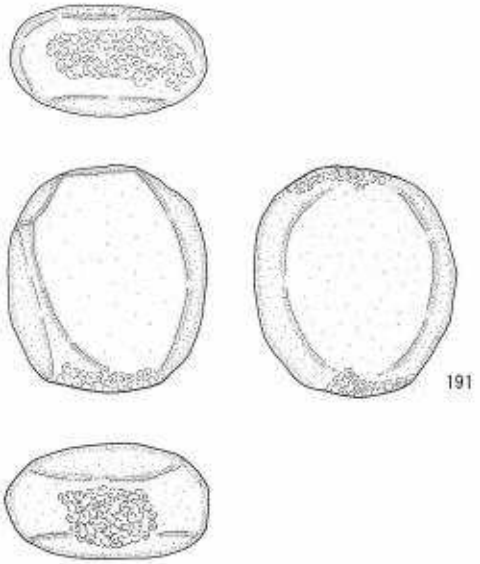


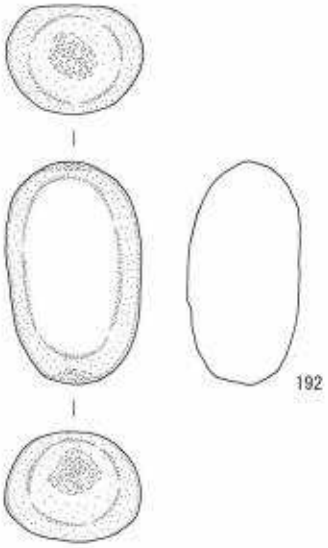
第 33 図　縄文時代晩期の石器⑦

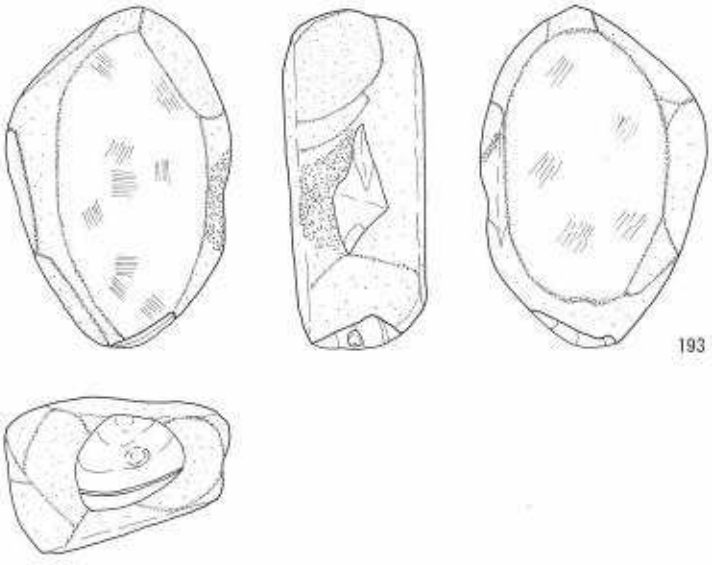


第 34 図　縄文時代晩期の石器⑧

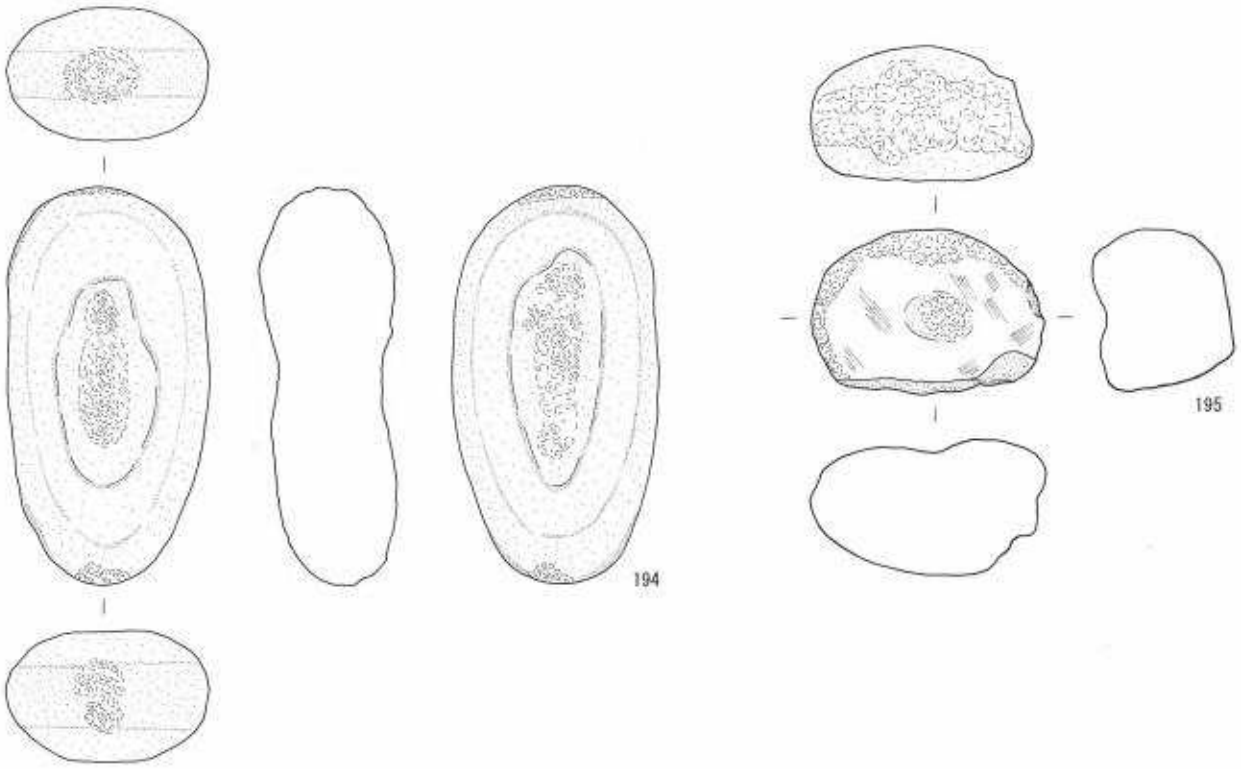


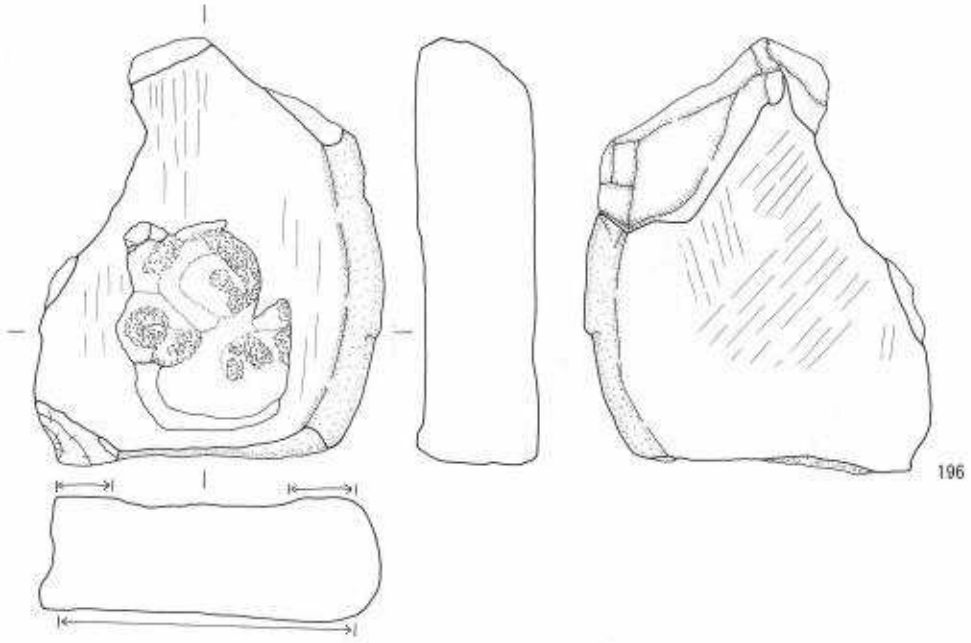




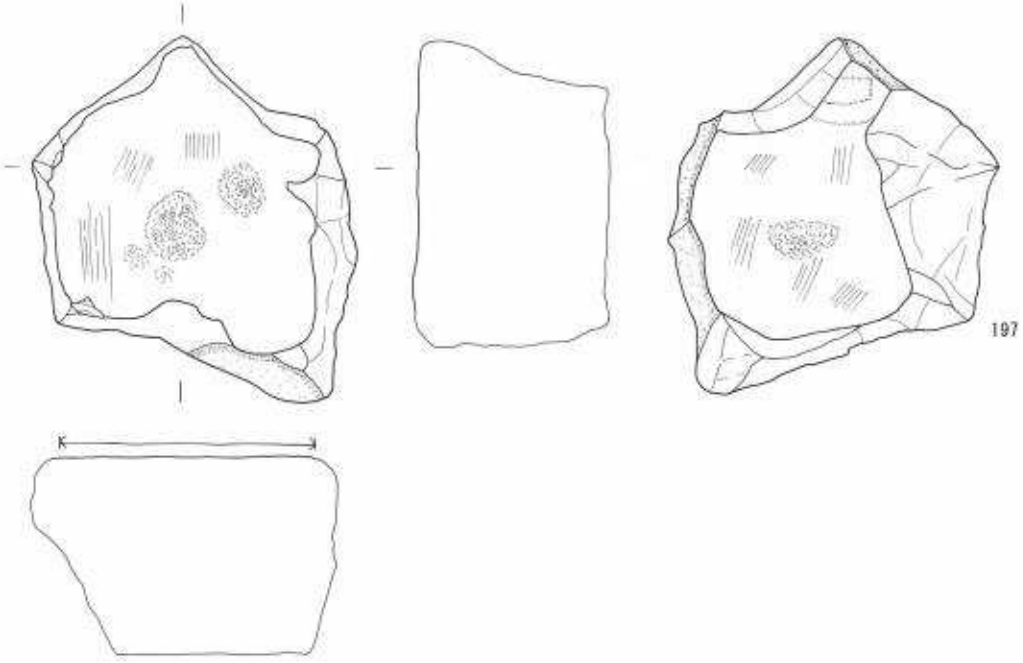


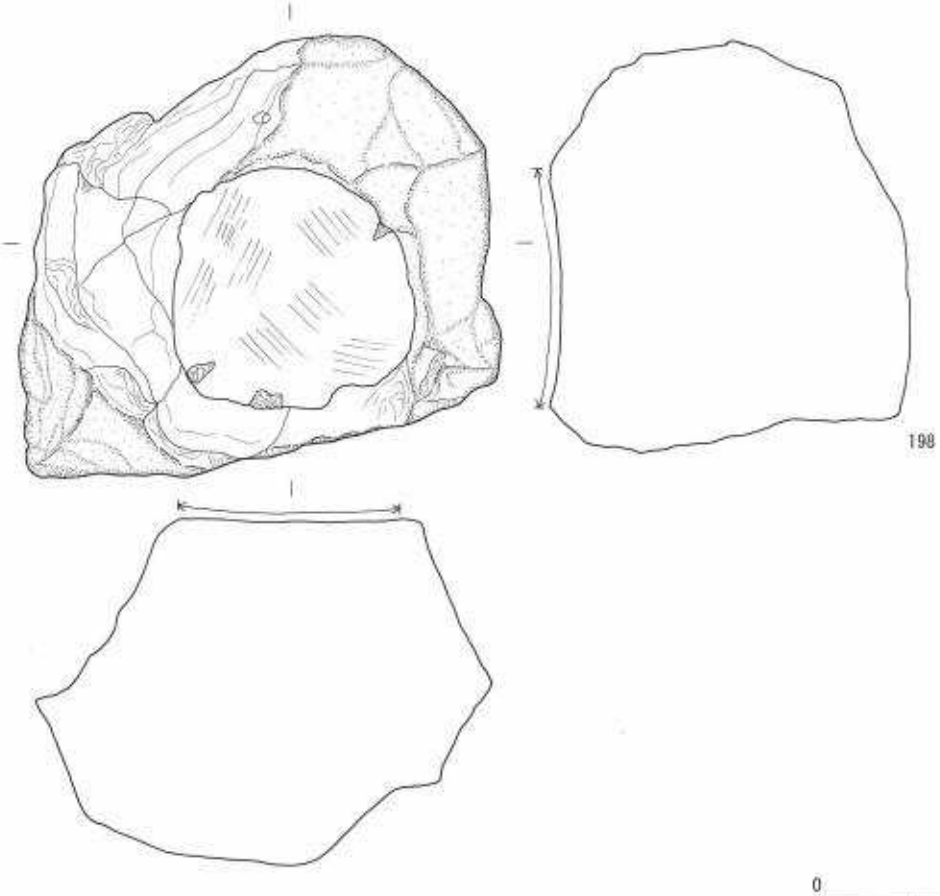
第 35 図　縄文時代晩期の石器⑨



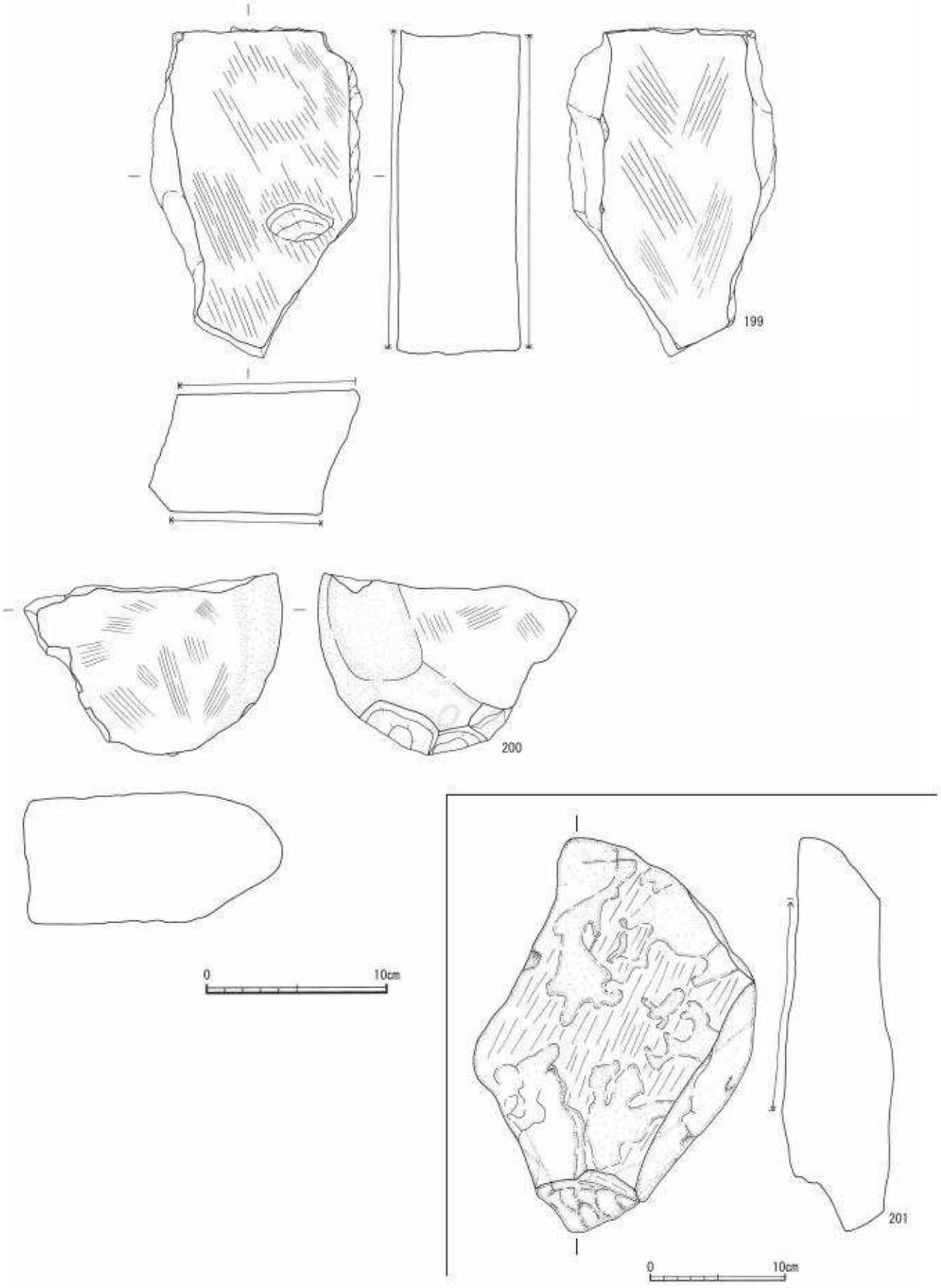


第 36 図　縄文時代晩期の石器⑩





第 37 図　縄文時代晩期の石器①



第 38 図　縄文時代晩期の石器⑫

第５節　弥生時代前期～後期の調査

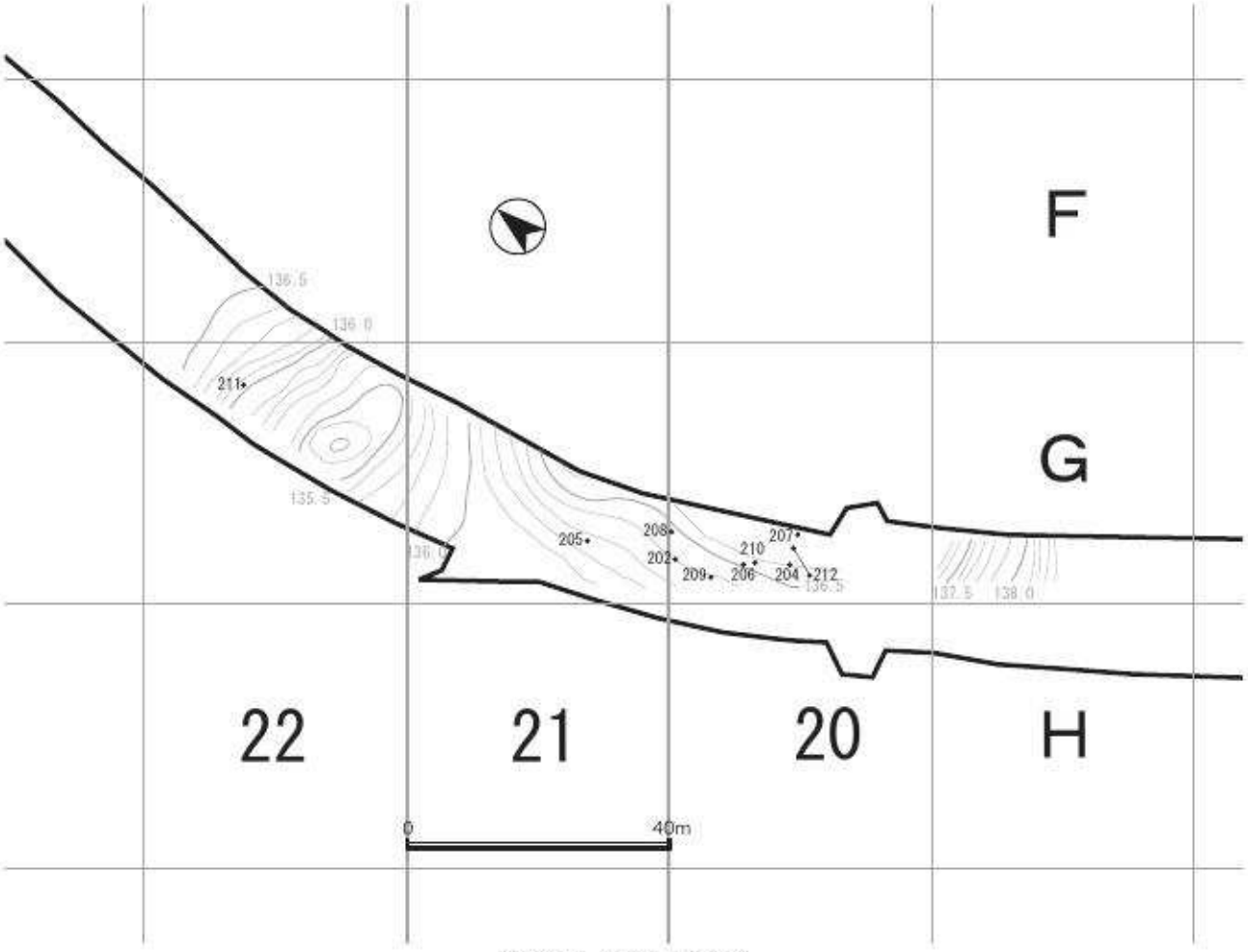
主な包含層はⅣ層である。遺構は検出されなかった。遺物の出土数は比較的少なく，器種は甕及び壺である。

甕（第40図：202～211）

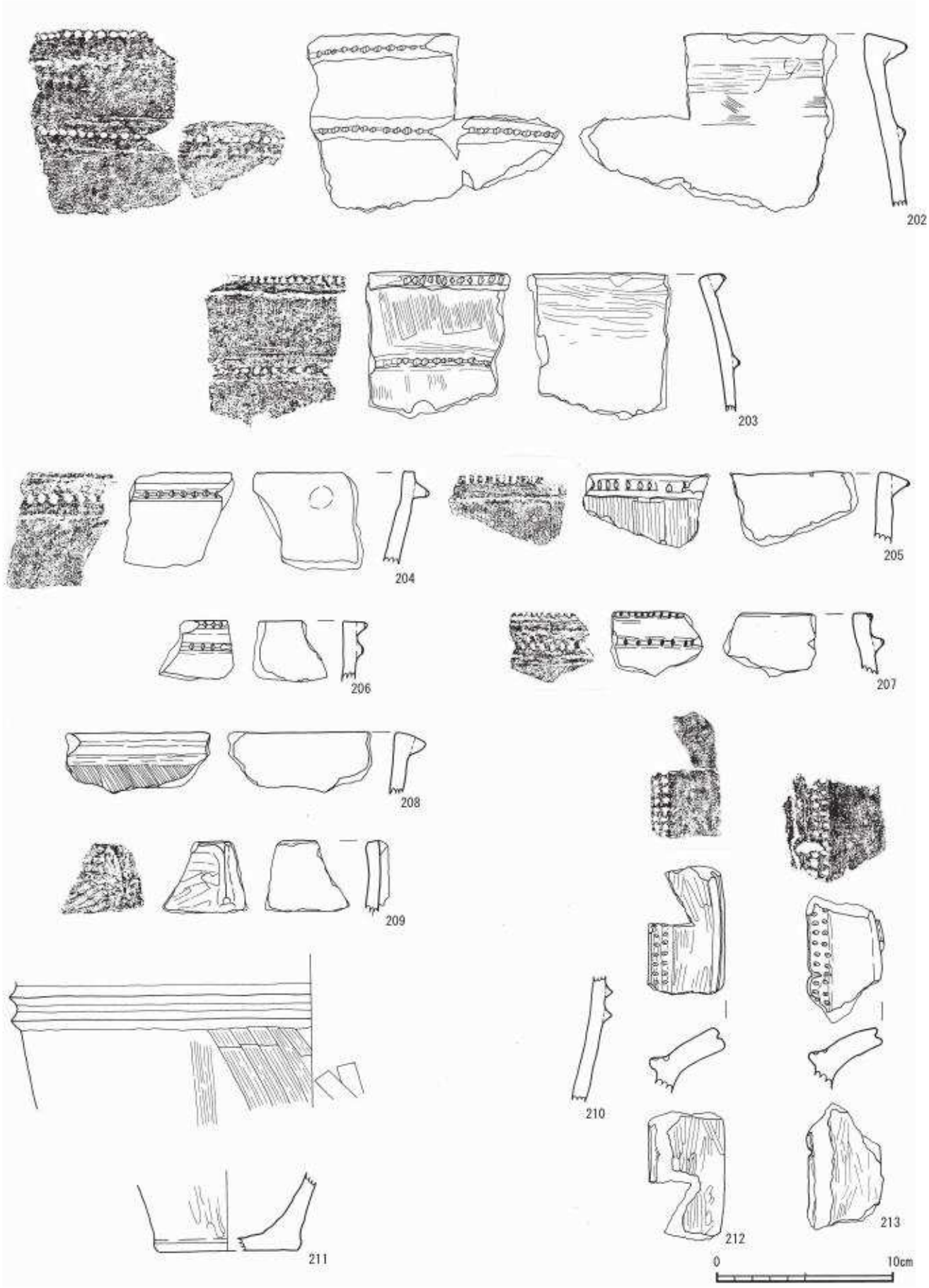
202・203とも口縁端部に刻目の突帯を有し，胴部上位にも刻目の突帯を１条有する。202は外面に煤が付着し，調整は内外面共にナデで内面に指頭痕が残っている。203は古墳時代の２号～４号竪穴住居跡周辺から出土した。流れ込みによるものと思われる。外面はハケメ調整が見られ，内面はミガキ後ナデである。204～209は口縁部片である。204は口縁部のやや下に小さめの刻目を施した突帯が貼り付けられ，内面に指頭痕が残っている。205はやや下向きの口縁部突帯に刻目を有し，外面はハケメ調整が施されている。206は刻目を有した口縁部突帯のやや下に，刻目を有した突帯が貼り付けられている。207は口唇部に刻目を施し，やや下には刻目を有した突帯が貼り付けられている。208の口縁部には幅８mmの突帯が貼り付けられ，外面には煤の付着とハケメ調整が見られる。209には棒状突帯が口縁端部に１条，また口縁部から胴部へ垂直に降りる形で１条，あわせて２条貼り付けられている。外面はナデ調整である。210の胴部片には三角突帯が２条貼り付けられ，外面はハケメ調整が，内面はハケ後ナデ調整が見られる。また，外面に煤の付着が認められる。なお，最大胴径は33cmである。

壺（第40図：212・213）

212は口縁部片で上面には連点文が施され，口唇部には沈線が見られる。調整は内外面共にヘラミガキで，外面はミガキの後にナデが施されている。213は古墳時代の２号竪穴住居跡内から出土した。流れ込みによるものと思われる。内外面共にナデ調整であり，212と同様に口縁部の上面には連点文が施され，口唇部には沈線が見られる。



第39図　遺物出土状況図



第 40 図　弥生時代前期～後期の土器

第６節　古墳時代の調査

中心となる包含層はⅢ，Ⅳ層である。調査の結果，遺構はⅣ層を主として，竪穴住居跡５軒，竪穴遺構１基，土坑２基を検出し，遺物は土師器及び石器等が出土した。

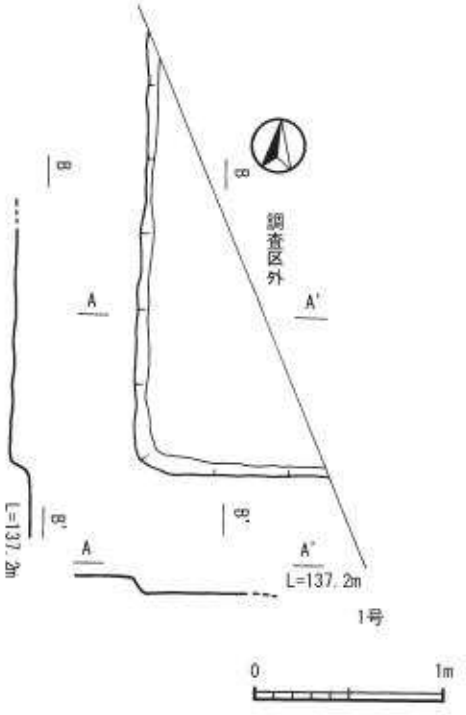
１　遺構

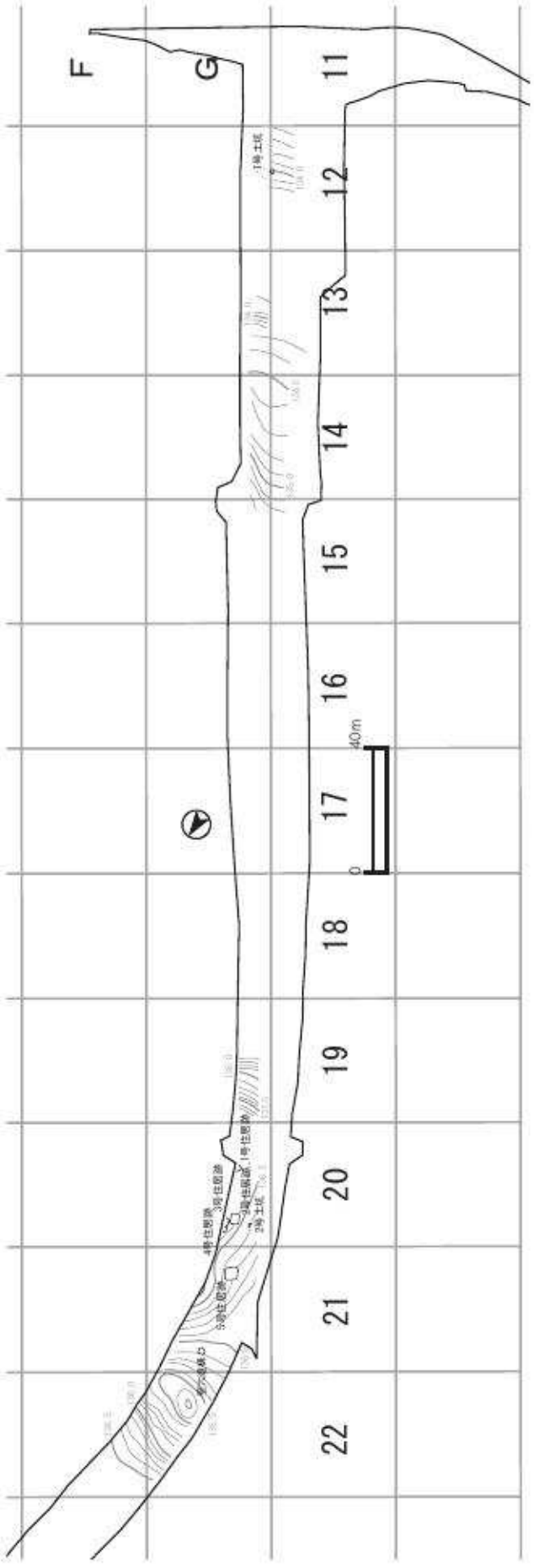
(1) 竪穴住居跡

G－20区で４軒，G－21区で１軒を検出した。住居跡は，①各々が重複しているもの，②住居内に貼り床（硬化面）及び柱穴をもつもの等の特徴をもつ。また，２号と３号，３号と４号は切り合い関係にある。

１号竪穴住居跡（第41図）

［位置と確認］G－20区に位置し，Ⅳ層精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。
［重複］なし
［平面形・規模］住居跡北東側が調査区外のため，全体の平面プランは不明であるが，隅丸方形が予想される。
［床面］床面の硬度は包含層とほぼ同じで，貼り床もなくやや黒色の濁りがあり，砂等も見られた。検出面から床面までの最深部は約10cmである。
［柱穴等］検出されなかった。
［炉］検出されなかった。
［埋土］暗褐色土主体である。
［特記］遺物は成川式土器の小破片数点のみであった。





第41図　遺構位置図，１号竪穴住居跡

2号竪穴住居跡（第43図）

［位置と確認］G－20区に位置し，Ⅳ層精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

［重複］3号と重複し，3号より新しい。

［平面形・規模］隅丸方形で，規模は長軸390cm，短軸340cmである。長軸方向はN -20° - Eである。

［床面］床面に貼り床は見られず，検出面から床面までの最深部は約50cmである。

［柱穴等］北西壁際に土坑1基，床面北側と南側にピット2基を検出した。土坑の規模は約80cm×約50cmの楕円形で，深さ約20cmの掘り込みをもつ。また，ピットは位置，形状及び深さから柱穴と認定した。深さはいずれも約70cmである。

［炉］検出されなかった。

［埋土］暗褐色土主体である。

［特記］本住居跡の検出面では，その周囲数メートルにわたって多量の成川式土器片が出土した。それらの土器片は主に東原式土器段階のものと笹貫式土器段階のものが混在し，埋土中も同様であった。なお，床着で東原式土器段階の土器片が出土していることから，本住居跡の時期は東原式土器段階に帰属すると考えられる。検出面上の土器は，後世になって住居跡が埋まりかけた頃に捨てられたものである可能性がある。

2号竪穴住居跡内出土遺物（第42～48図：214～226）

遺物は，前述したように検出面で多量の成川式土器が出土した。床着の遺物は，接合できたものを含め3点である。その他，埋土中から出土した遺物を図化した。

床着の遺物は，214・215である。

214はやや外反気味の甕の口縁部片である。215は甕の口縁部から胴部である。口径が32cmを測り，緩やかに外反している。頸部には段を持ち，胴部がやや張っている器形である。器面調整は，外面は口縁部にハケによる掻き上げ整形がなされ，胴部はハケ後ナデである。内面もハケ後ナデの調整で，口縁部，胴部に指頭痕が観察される。また，外面には煤が付着している。

216～226は埋土中から出土した土器である。

216・217は甕の口縁部で，216は口径30.6cmを測り，頸部には段をもち，胴部が張る器形である。内外面共に煤が付着し，外面の口縁部には軽いハケメ調整が見られる。217は口径33.0cmを測り，胴部から口縁部へと外へ開く器形である。口唇部は「コ」の字状を呈し，口縁部の外面はハケによる掻き上げ整形がなされ，胴部との境を作っている。胴部は粗いハケメ調整である。内面は全体的にナデであるが，胴部下半には工具によるものと思われる押圧痕も見られる。また，煤が所々に付着している。218は甕の口縁部から胴部片で，やや大きく内弯する器形である。口径30.0cmを測り，内外面共にハケ後ナデの調整で，内面には全体的に煤が付着している。胴部上半に1条の突帯が貼り付けられ，指で連続的に押さえつけている。219は甕の胴部である。器面調整は，外面がハケメ，内面がナデである。また，内面には煤が付着している。220は口径19cm，器高24.2cm，脚部径9.6cm，脚台の高さ3.5cmを測る甕である。内外面共に煤が付着し，外面の突帯は指で押さえ付けてあり，内面の調整はハケ後ナデである。口縁部は緩やかに内弯している。221は口縁部が直行している甕である。口径31cm，器高41.2cm，脚部径9.8cm，脚部の高さ3cmを測る。外面はハケ後ナデ調整，内面はナデ及び指頭痕がみられ，内外面共にそれぞれ上部，下部に煤が付着している。外面の1条の突帯には，指の押さえ付けが約5cm間隔で全周にわたり観察される。222は甕の胴部片で，内外面共にハケ後ナデの調整である。

223・226は甕の胴部から脚部にかけての破片である。223はやや薄手の胴部に高さ3cmの脚部が付き，脚部径10.4cmを測る。内外面共にハケ後ナデの調整で，煤が付着している。226は脚部の高さが2.8cm，脚部径11.4cmを測る。内外面共にハケ後ナデの調整で，脚部の外面には指頭痕が残る。

224・225は甕の底部から脚部である。224は脚部の裾が緩やかに開き，脚部の高さが3cm，脚部径10.8cmを測る。外面はケズリ後ナデ，内面はナデである。225は，底部が若干丸みを帯びており，内面はハケ後ナデである。脚部は「ハ」の字状に広がり，脚部の高さは2.4cm，脚部径9.6cmを測る。

3号竪穴住居跡（第49図）

［位置と確認］G－20区に位置し，Va層精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

［重複］2号及び4号と重複し，2号より古く4号より新しい。

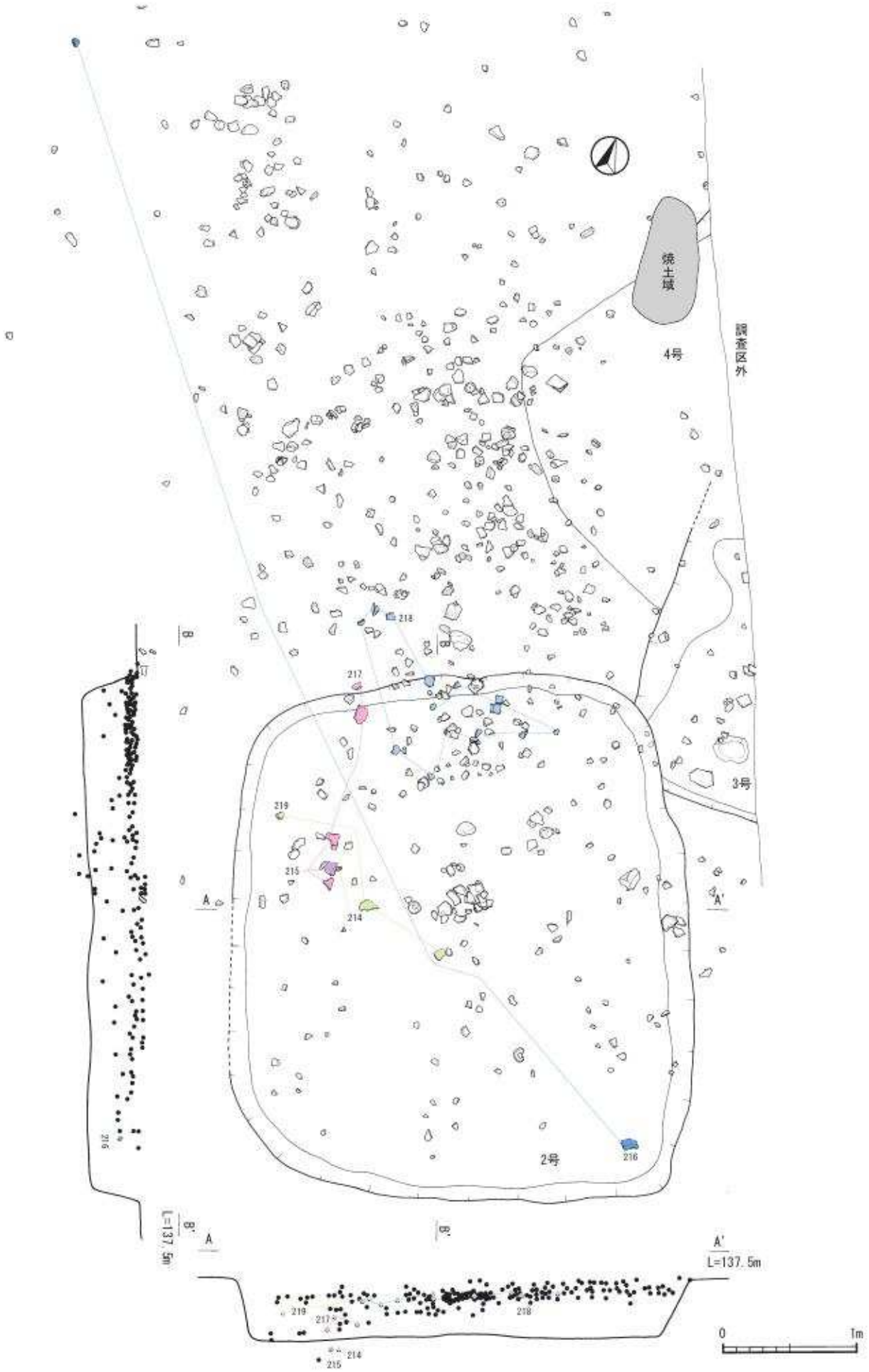
［平面形・規模］住居跡北東側が調査区外のため，全体の平面プランは不明であるが，隅丸方形が予想される。

［床面］検出面から床面までの最深部は約20cmである。貼り床は検出されなかった。

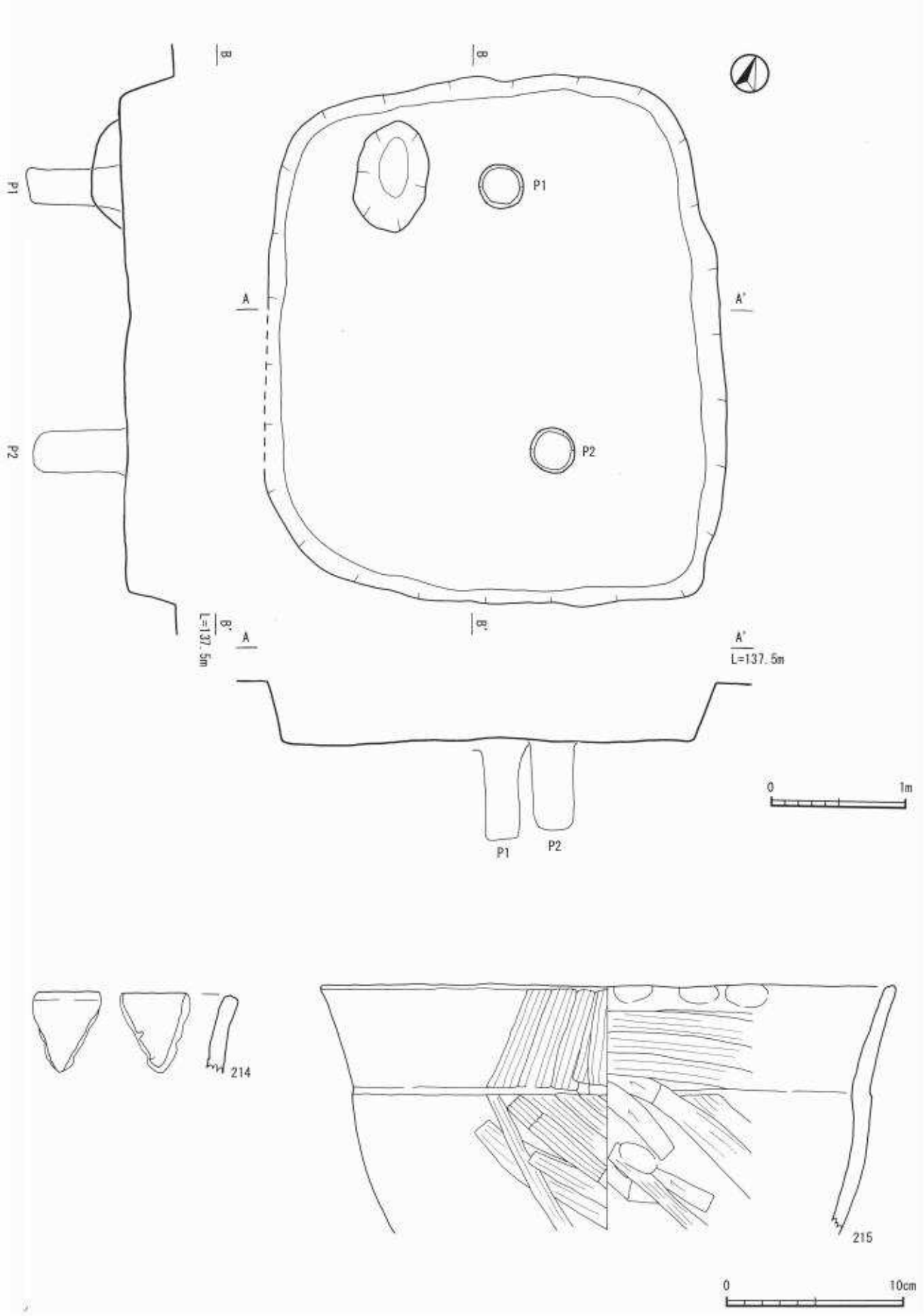
［柱穴等］検出されなかった。

［炉］検出されなかった。

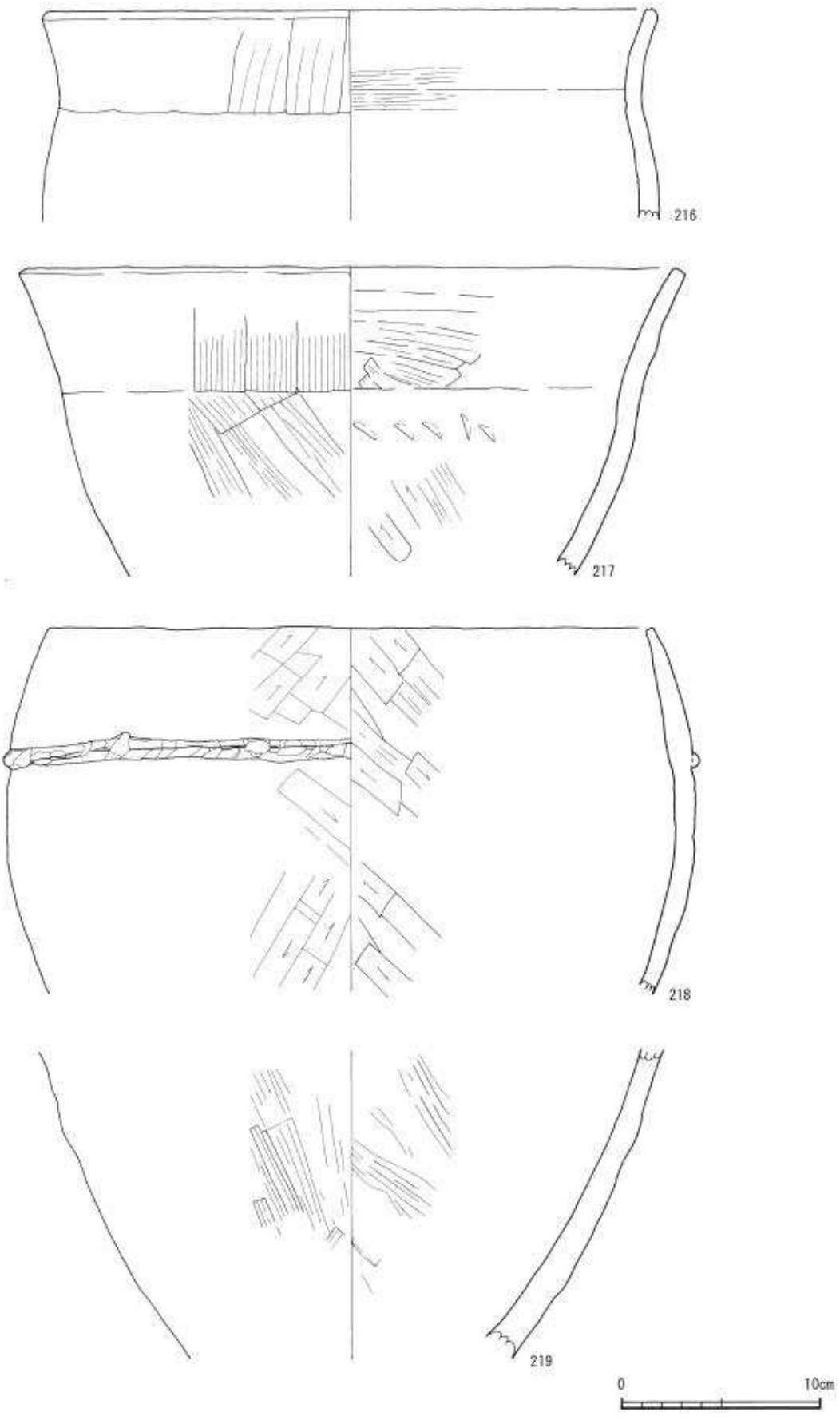
［埋土］暗褐色土主体である。



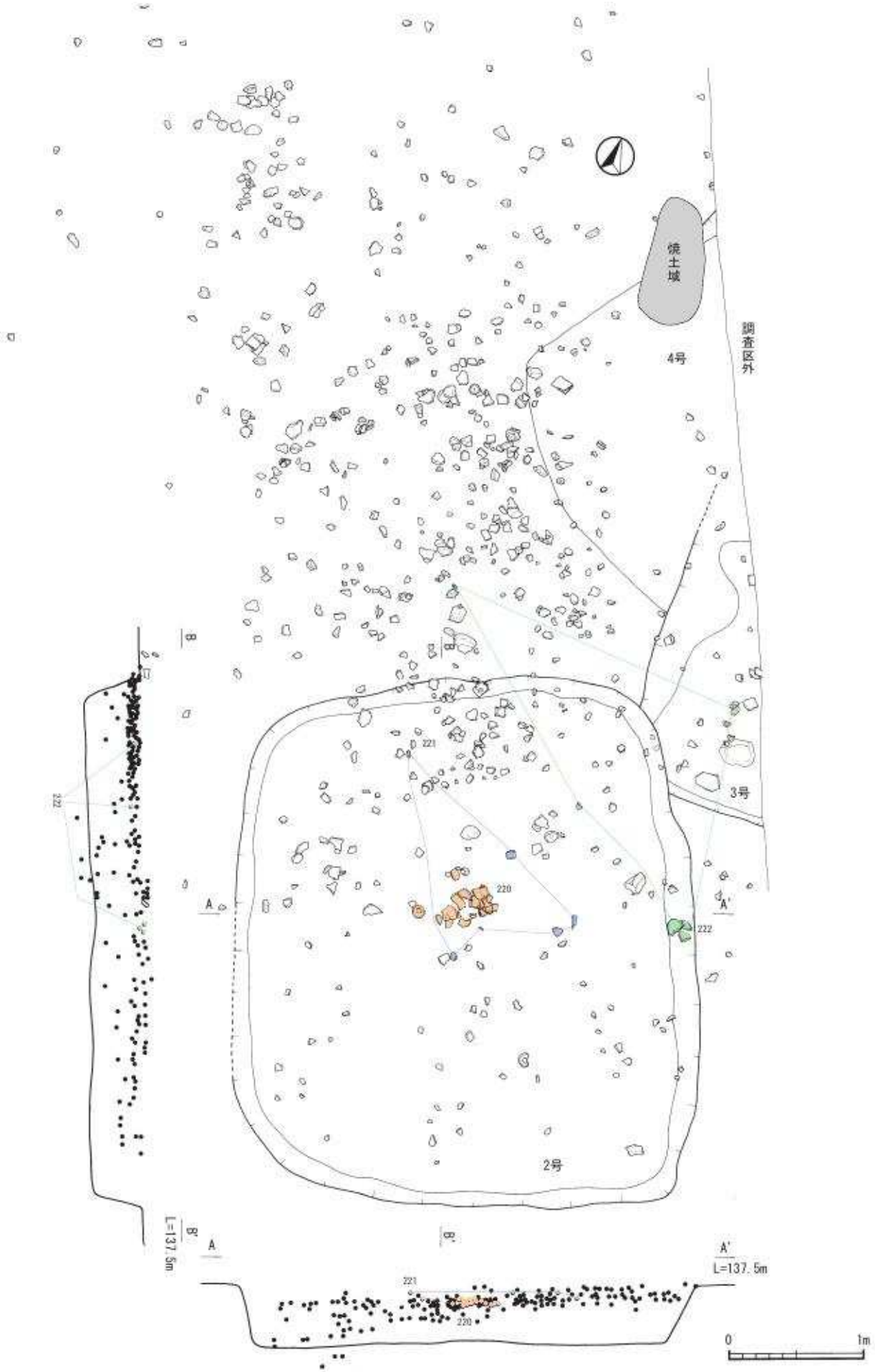
第42図　2号竪穴住居跡内出土遺物状況図①



第43図　2号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物①

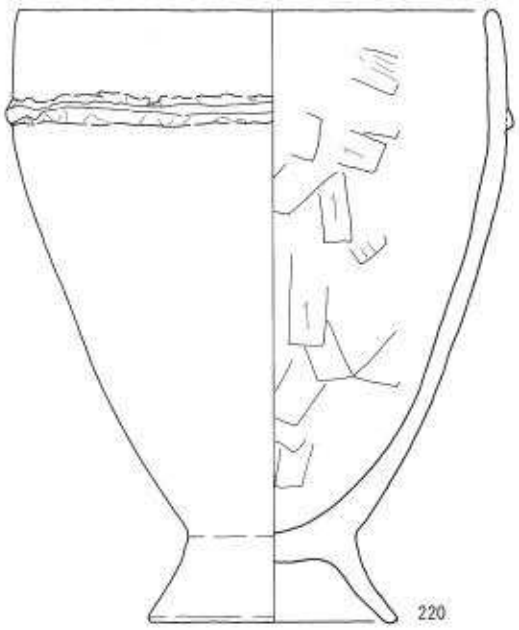


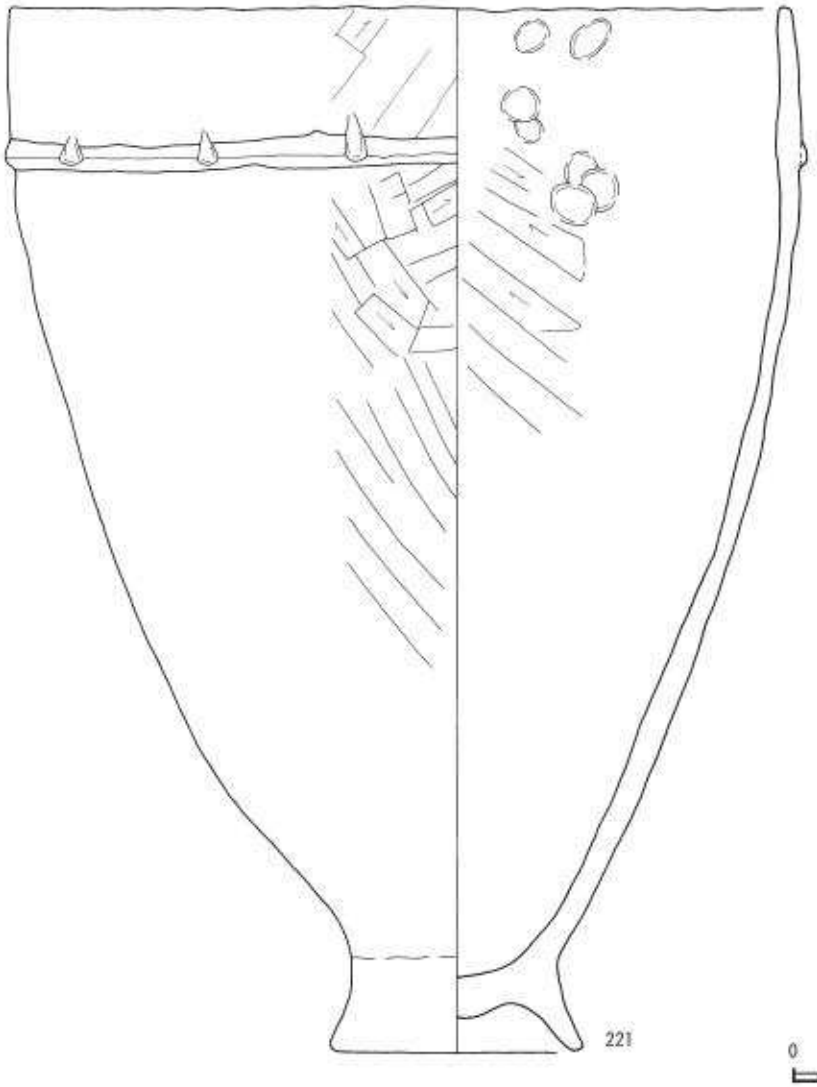
第 44 図　住居跡内出土遺物②



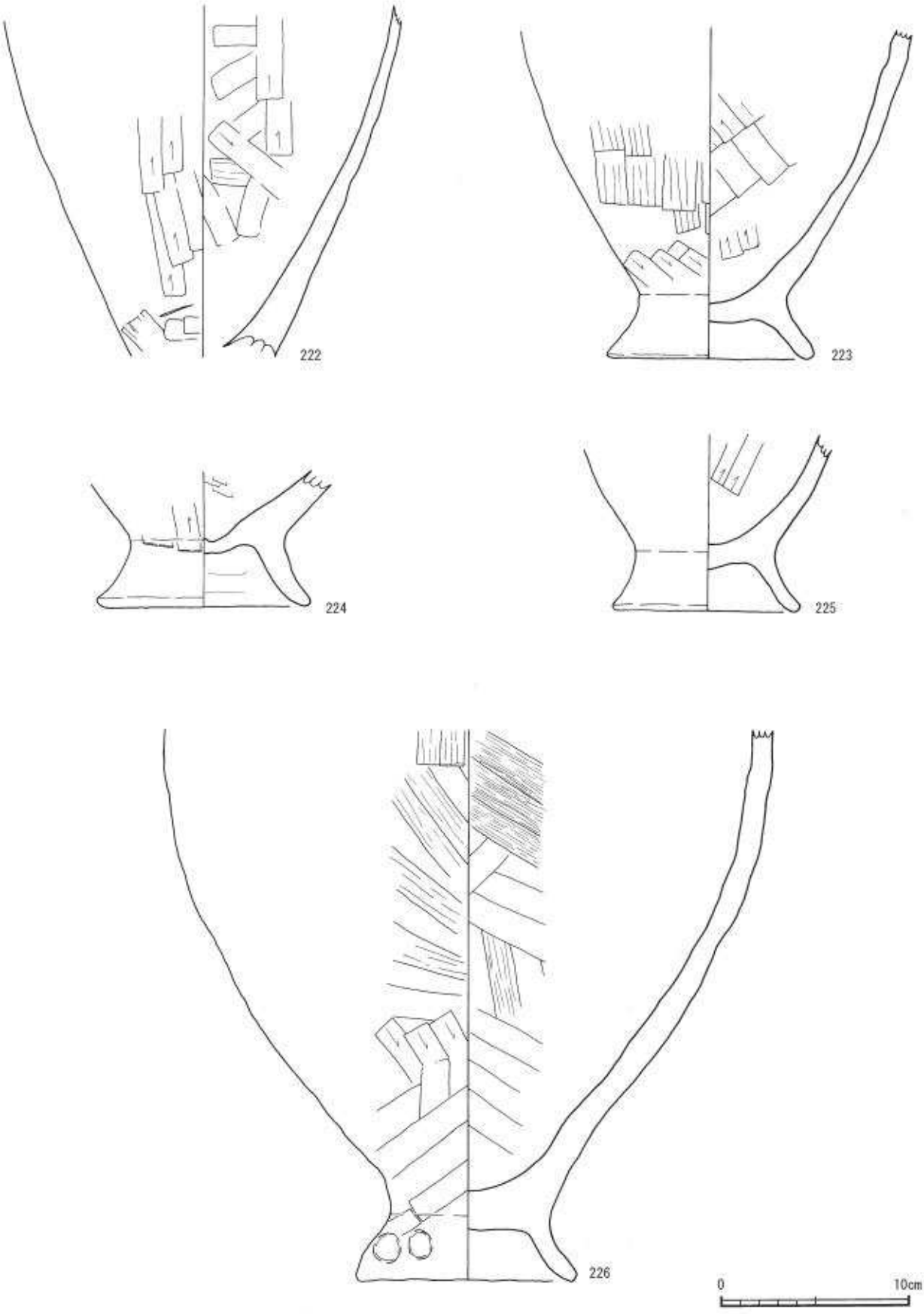
第45図　2号竪穴住居跡内出土遺物状況図②

第46図　2号竪穴住居跡内出土遺物状況図③





第47図　住居跡内出土遺物③



第 48 図　住居跡内出土遺物④

3号竪穴住居跡内出土遺物（第49図：227・228）

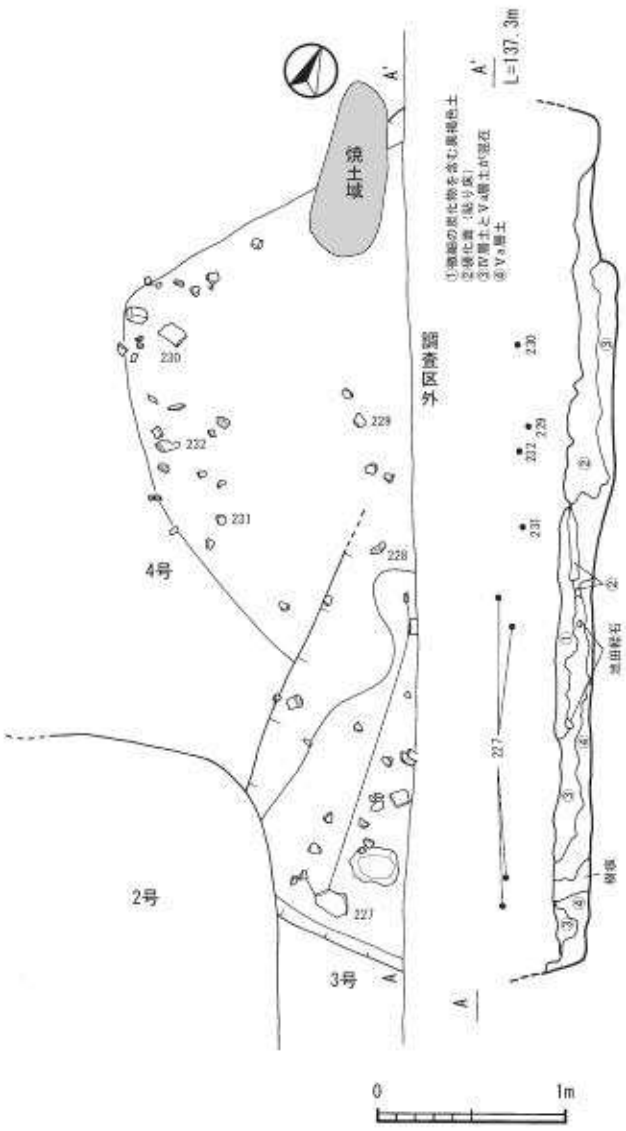
227は埋土から出土した甕で，口縁部から胴部の破片である。口径26cmを測り，胴部の上位部分に1条の刻目突帯を有するものである。内外面共に煤の付着が見られ，内面はハケ後ナデの調整である。228は埋土から出土した軽石製品で，表裏面に磨面が見られる。

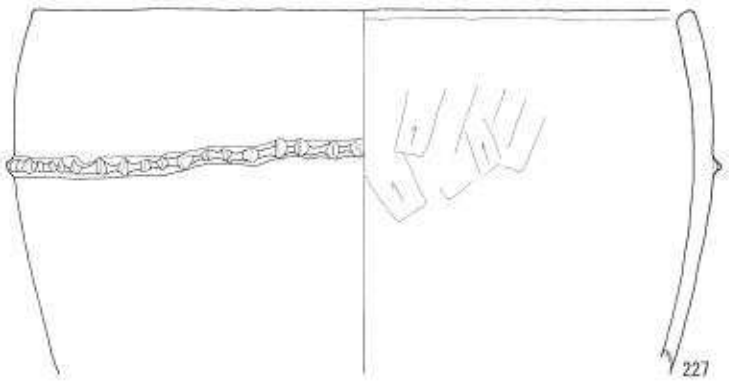
4号竪穴住居跡（第49図）

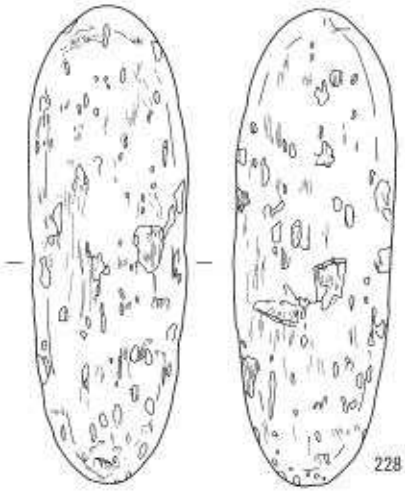
［位置と確認］G－20区に位置し，Va層精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。
［重複］3号と重複し，3号より古い。
［平面形・規模］住居跡北東側が調査区外のため，全体の平面プランは不明であるが，隅丸方形が予想される。
［床面］検出面から床面までの最深部は約20cmである。床面に貼り床を伴う。
［柱穴等］北壁際に焼土跡1基を検出した。規模は約90cm×約40cmで長楕円形を呈している。
［炉］検出されなかった。
［埋土］暗褐色土主体である。

4号竪穴住居跡内出土遺物（第50図：229～232）

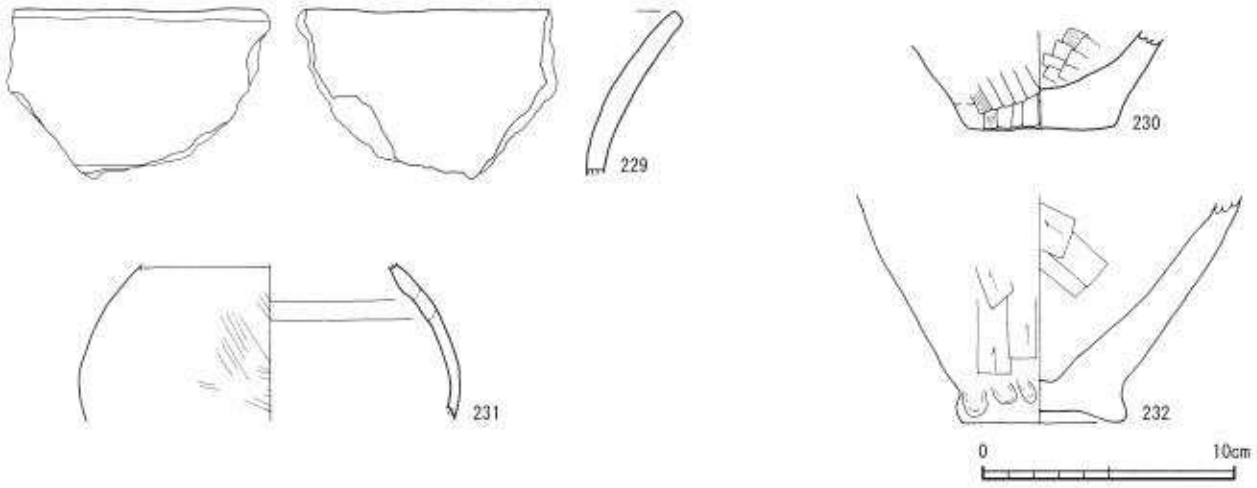
229は甕の口縁部片である。口唇部が「コ」の字状を呈しており，強く外反している。230は甕の底部で，横へ大きく開く。内外面共にハケ後ナデの調整が施されている。231は坩の胴部片で，器壁はやや薄手で，外面にハケメ調整が施されている。232は手づくね風の鉢で，脚部は低い。内外面共にハケ後ナデの調整で，外面底部は指頭痕が顕著である。







第49図　3号・4号竪穴住居跡，3号竪穴住居跡内出土遺物



第50図　4号竪穴住居跡内出土遺物

2号～4号竪穴住居跡周辺出土遺物(第51～55図: 233～258)

第51図で示したように，2号，3号，4号竪穴住居跡が検出された周辺で多量の土器片が集中して出土した。そこで，これら土器片の接合を試みて，完形復元できたもの，口縁部及び底部等を中心に図化して掲載した。

233は口縁部下位に1条の突帯を有する大型の甕である。口縁部が外反する器形で，口径32 cm，器高33.8cmを測る。内外面共にハケ後ナデの調整で，煤が付着している。外面の三角突帯はすれ違い，指で押さえ付けられている。234は甕の口縁部から胴部である。口径30cmを測り，胴部がやや張り，頸部で絞まりながら外反する口縁部をもつ。また，口唇部は「コ」の字状を呈している。外面はハケメ調整で，口縁部はハケによる掻き上げ整形が見られる。内外面共に煤が付着している。

235～238は甕の口縁部片で，口唇部が「コ」の字状を呈しており，235・237はやや強く外反している。237は外面がナデ調整，内面には指頭痕が観察される。236は外面の口縁部下に段をもち，内外面共にナデである。

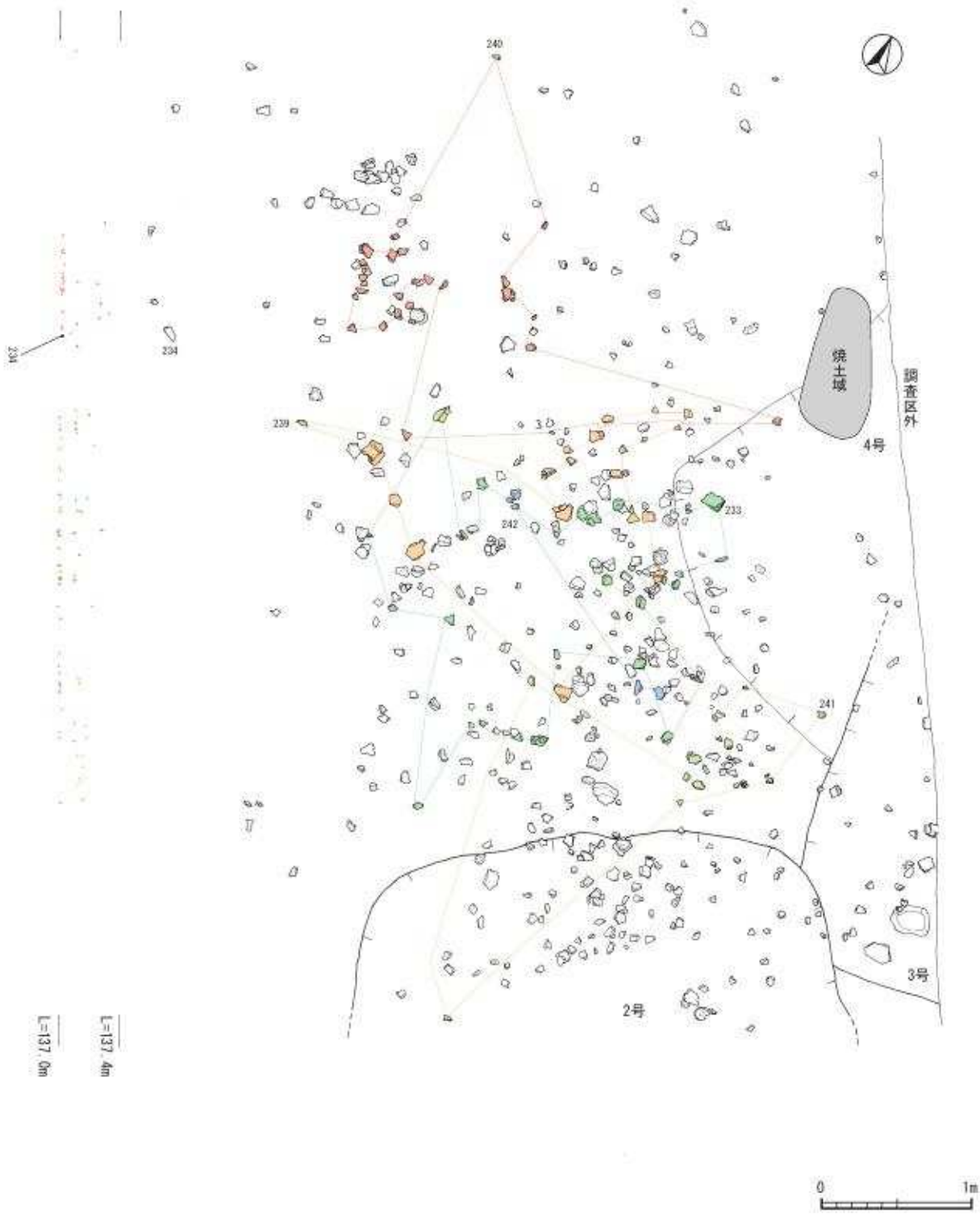
239は口縁部が直行気味に立ち上がり，直径28cm，器高36.5cmを測る。内外面共にハケ後ナデの調整で，脚部付近に指頭痕が見られる。胴部には煤が付着し，すれ違う三角突帯には左下がりの布状の圧痕が見られる。240は口縁部が強く内弯して立ち上がる甕である。口径31cmを測り，口縁下部に三角突帯が貼り付けられている。突帯には約13cm間隔で指の押さえ付けが見られる。内外面共にハケ後ナデの調整で，外面には煤が付着し，内面の口縁部付近に指頭痕が見られる。241は口縁部が緩やかに内弯して立ち上がる。口径28.4cm，器高32.9cmを測る。内外面共にハケ後ナデの調整と口縁部付近に指頭痕が見られる。内外面共に煤が付着し，口縁下部に三角突帯が貼り付けられている。242は胴部に1条の三角突帯を有し，煤が付着している。243はやや幅の広い1条の突帯が貼り付けられ，突帯には左下がりの布状圧痕の刻みが施されている。244～247は甕の底部及び脚部である。244は張り出しをもつタイプで，外面がナデ調整，内面は剥離のため不明である。245は分厚い作りの底部で，脚部径9.4cmを測る。外面はハケメ調整，内面は上部がハケ後ナデ，下部がハケメ調整である。246は厚めの底部に細めの脚部が付いたもので，内外面共にハケ後ナデの調整である。247はやや厚い底部に細めの脚部が付いている。内外面共にナデ調整である。248は鉢の底部で，脚部が低く器壁はやや厚い。

249・250は壺の底部である。249はやや安定さを欠いた底部で，内外面とも指頭痕及びナデ調整である。250は器壁がやや厚めの底部で，内外面共にハケ後ナデの調整である。

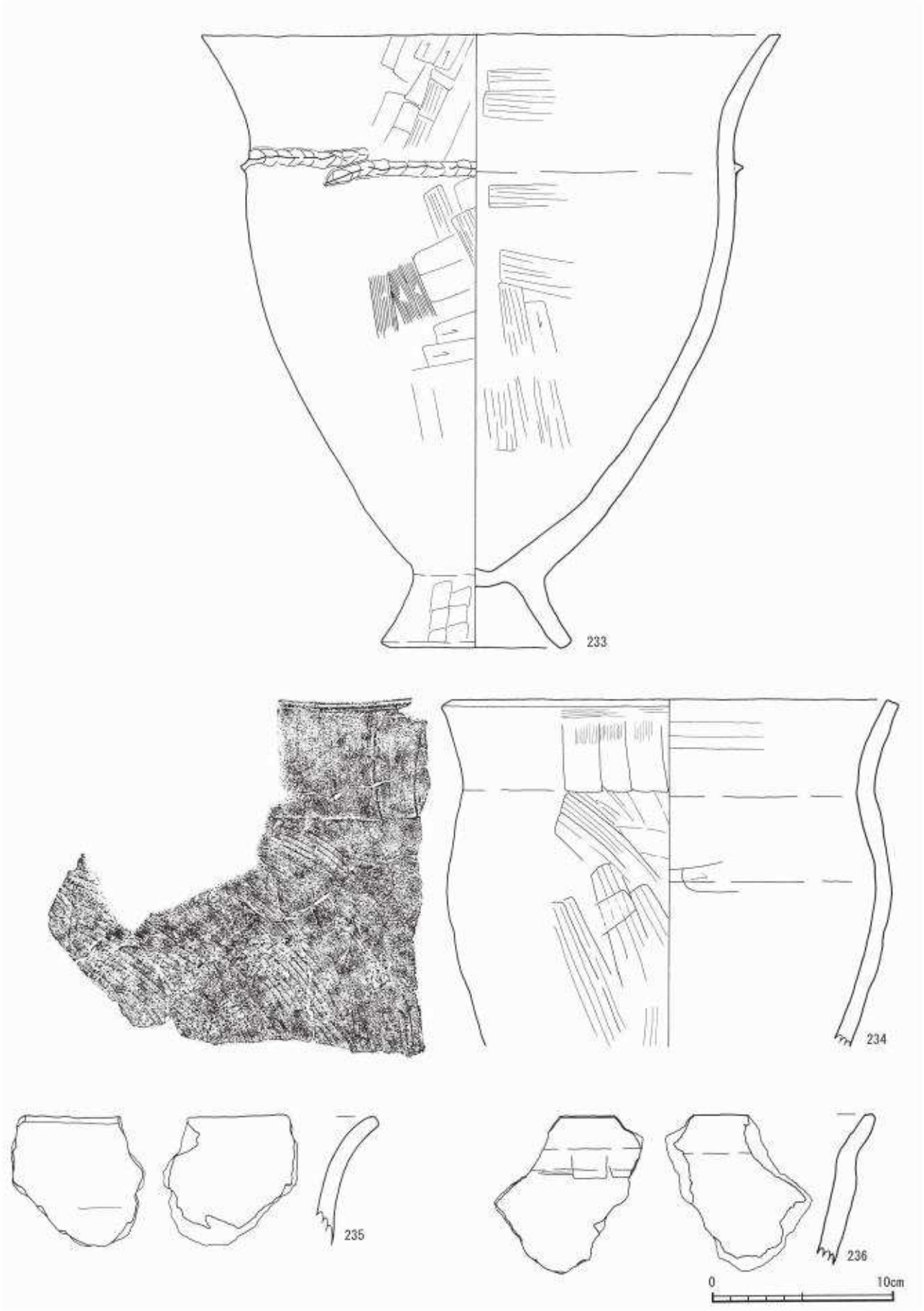
251～253は高坏の脚部である。251は坏部から脚部へ緩やかに広がる。調整は外面がミガキ後ナデ，内面がナデである。252は短い筒部から緩やかに裾に広がる。調整は外面にミガキが施され，内面はナデである。253は脚部径20cmで，端部は「コ」の字状となる。内外面共にハケ後ナデの調整である。

254は丸底の坩で，口径6.4cm，器高10.6cmを測る。口縁部は頸部からやや外反気味に立ち上がり，頸部から底部にかけては緩やかに広がって底部に至る。内外面共にナデ調整で，内面には指頭痕が見られる。255は平底の壺で，胴部から底部にかけてのものである。胴部の最大径が11.2cmで，内外面共にナデ調整である。256は指頭押圧で形を整える手づくね土器である。口径4.8cm，器高5.8cmを測り，内弯気味に立ち上がる。

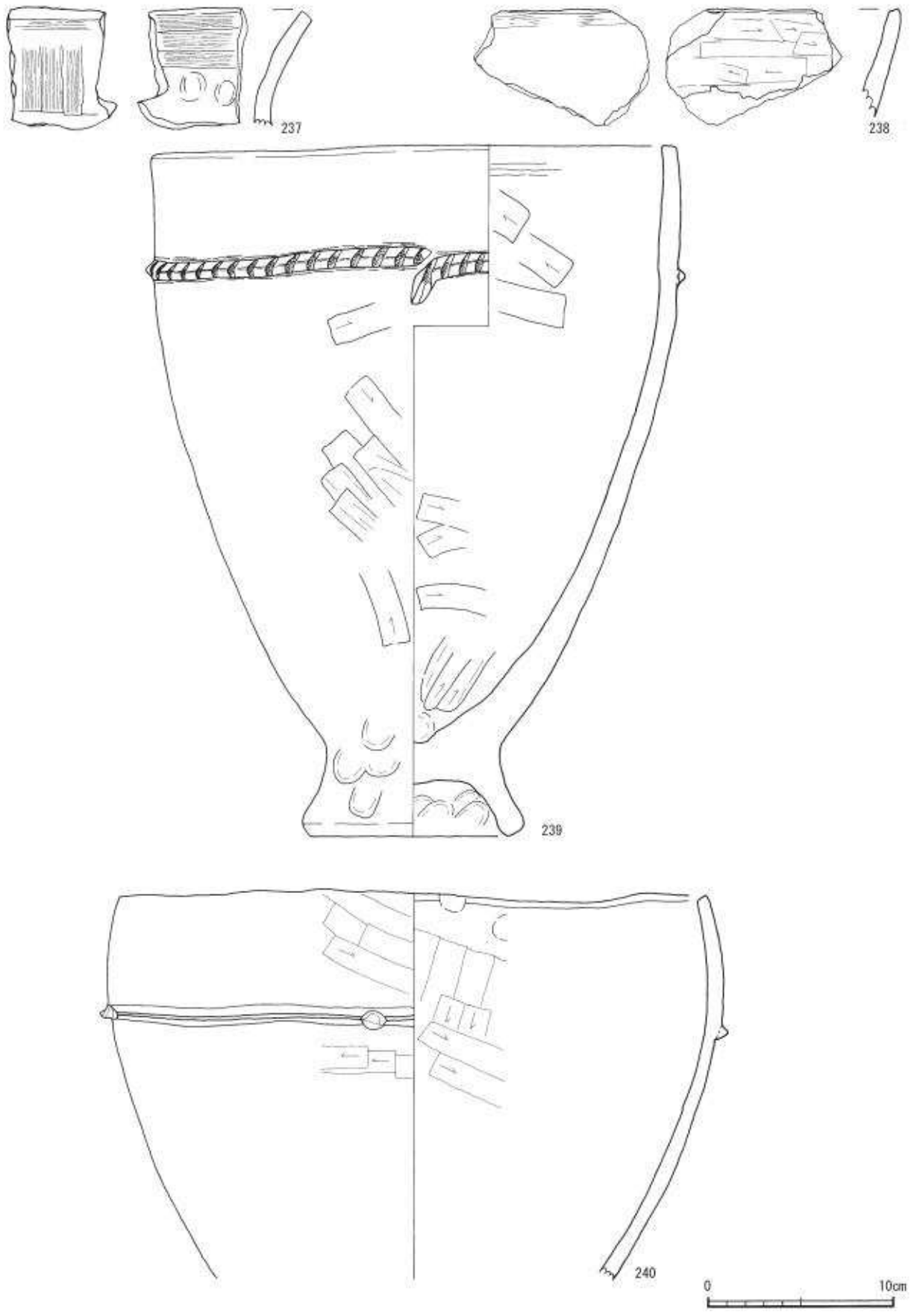
257・258は軽石製品で，表裏面に磨面が見られる。



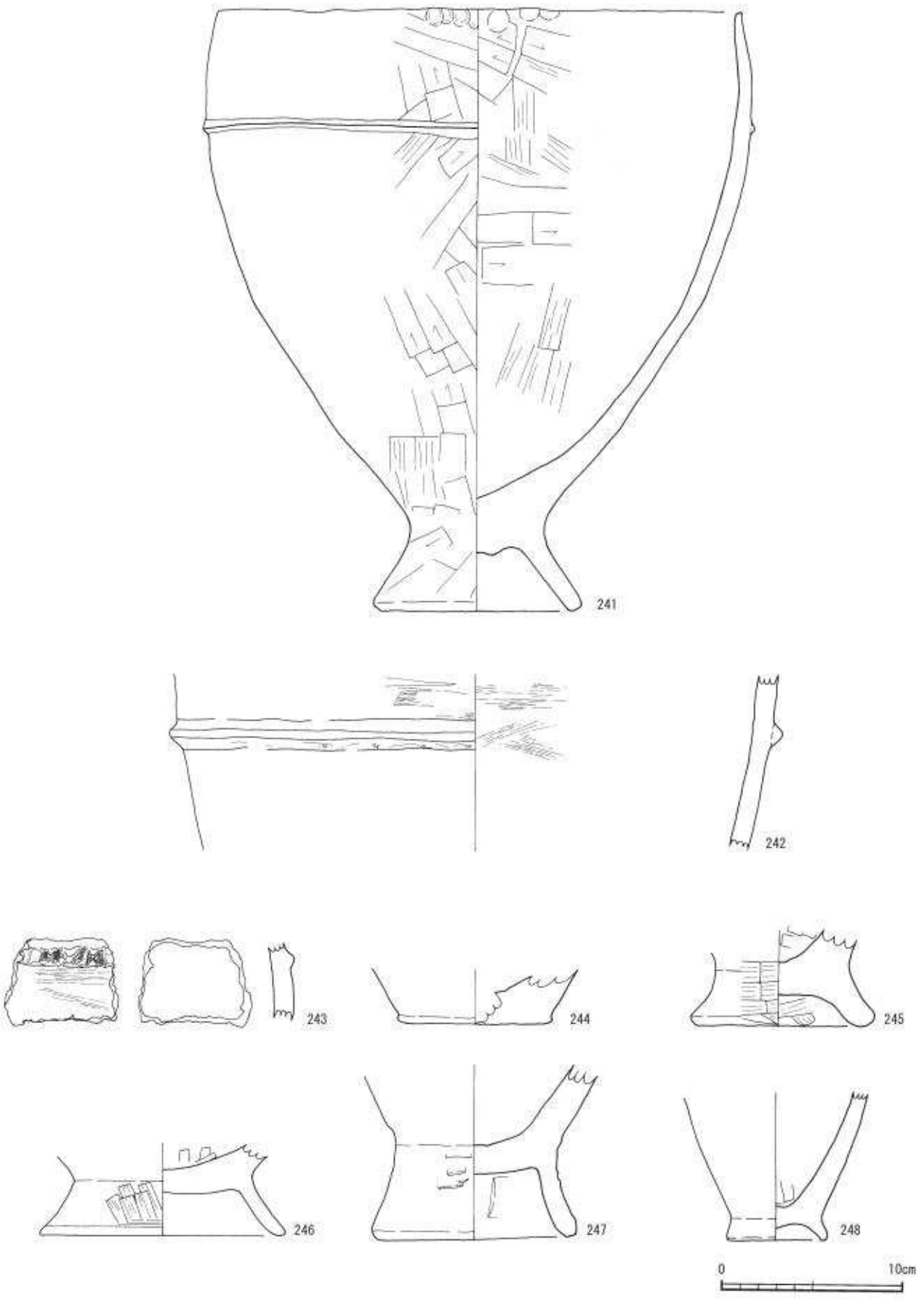
第51図　2号～4号竪穴住居跡周辺出土遺物状況図



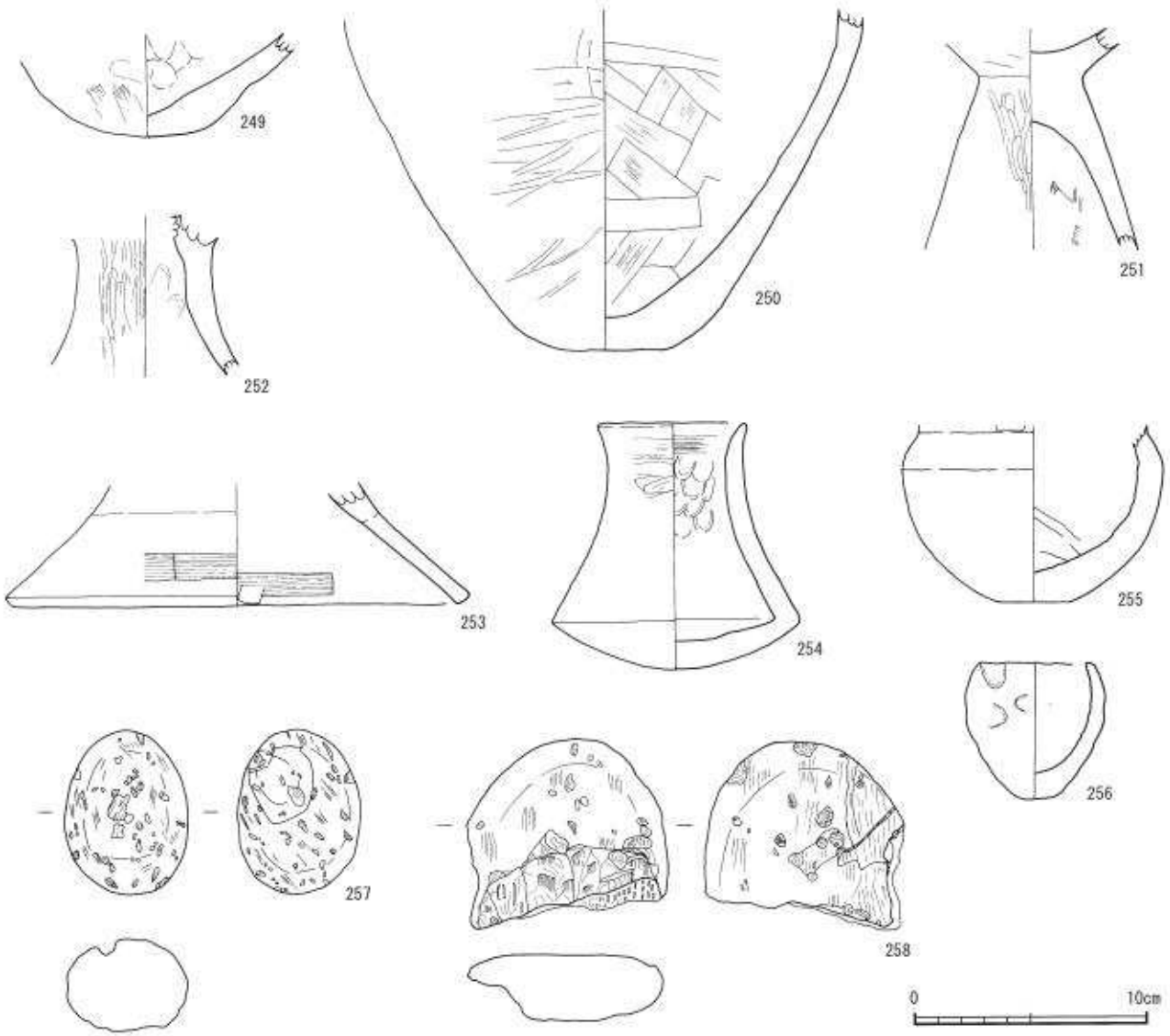
第52図　2号～4号竪穴住居跡周辺出土遺物①



第53図　2号～4号竪穴住居跡周辺出土遺物②



第54図　2号～4号竪穴住居跡周辺出土遺物③



第55図　2号～4号竪穴住居跡周辺出土遺物④

5号竪穴住居跡（第56図）

［位置と確認］G－21区に位置し，Ⅳ層精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

［重複］なし

［平面形・規模］隅丸方形で，規模は長軸，短軸とも4mである。長軸方向はN-50°-Eである。

［床面］床面に貼り床は確認されず，中央に掘り込まれた地山面が当時の床面と思われる。検出面から床面までの深さは，約20cm～40cmである。

［柱穴等］床面でピット3基を検出した。形状及び深さから柱穴と認定した。各柱穴の検出面から最深部までは，P1が65cm，P2が40cm，P3が50cmである。また住居跡中央部の掘り込みは，長径220cm×短径160cmの方形に近い形で検出された。

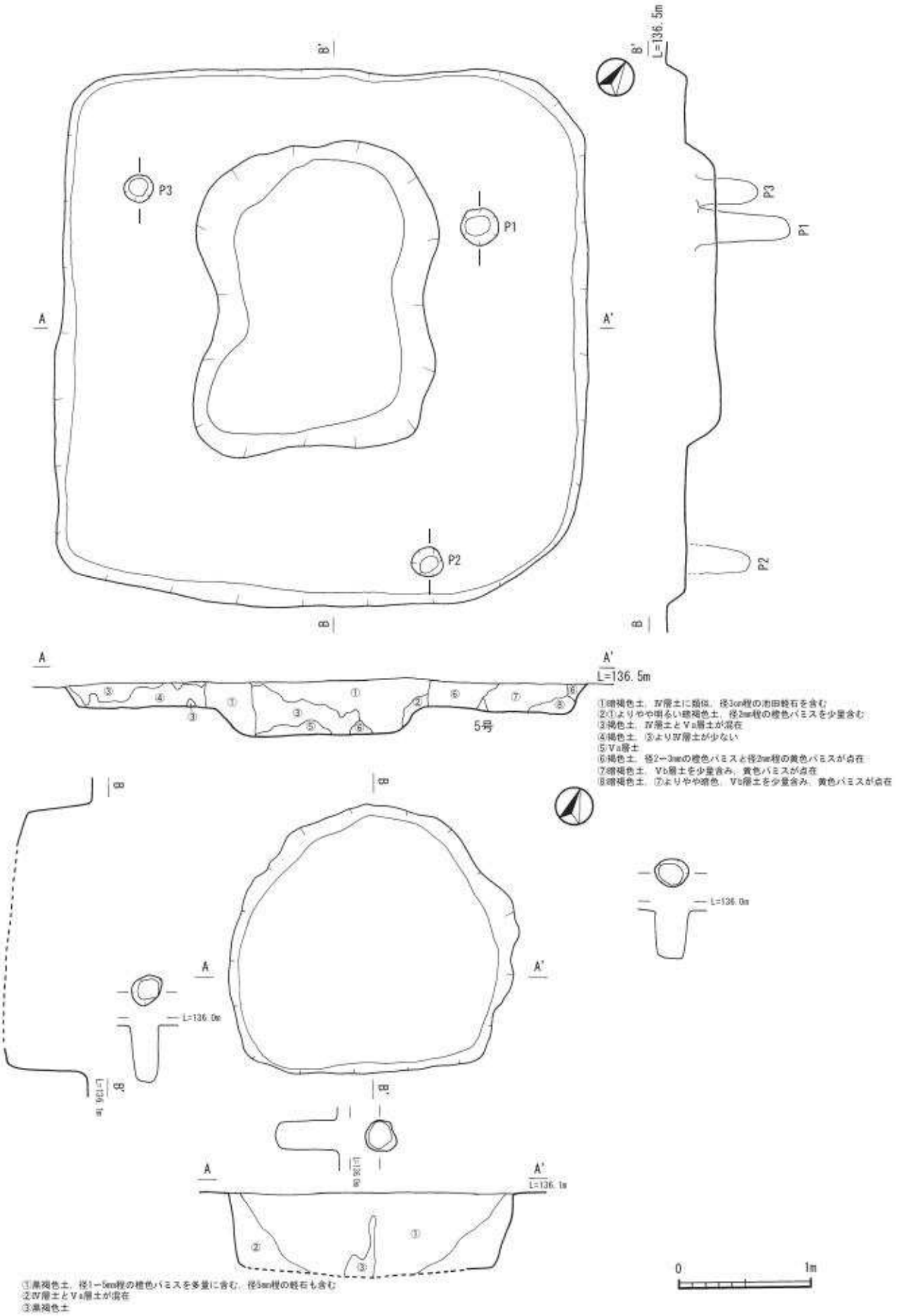
［炉］検出されなかった。

［埋土］暗褐色土主体である。

［特記］住居跡内の埋土を採取し，ウォーターフローテーションによって採集した炭化物の放射性炭素年代測定を行った。その結果は，1,570±30（yrBP）であった。

(2)　竪穴遺構（第56図）

G－21区のⅣ層で検出された。平面プランは216cm×200cmで，ほぼ円形を呈している。検出面からの深さは約50cmである。埋土内からは成川式土器の小破片が1点出土し，遺構上面のⅣ層からは，同破片が多量に出土していることから，本遺構は古墳時代のものと判断した。



第56図　5号竪穴住居跡，竪穴遺構

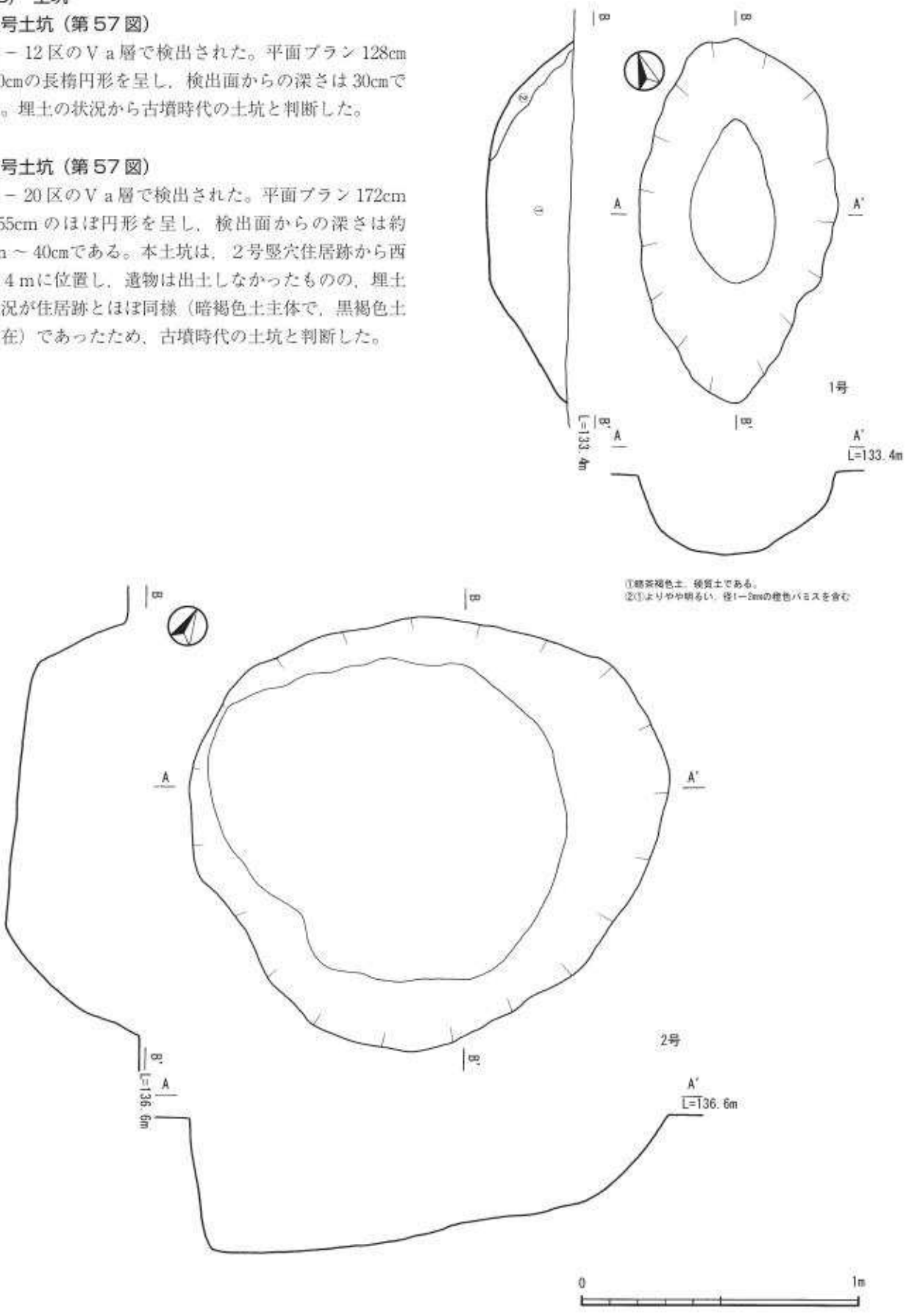
(3) 土坑

1号土坑（第57図）

H－12区のⅤa層で検出された。平面プラン128cm×70cmの長楕円形を呈し，検出面からの深さは30cmである。埋土の状況から古墳時代の土坑と判断した。

2号土坑（第57図）

G－20区のⅤa層で検出された。平面プラン172cm×155cmのほぼ円形を呈し，検出面からの深さは約30cm～40cmである。本土坑は，2号竪穴住居跡から西へ約4mに位置し，遺物は出土しなかったものの，埋土の状況が住居跡とほぼ同様（暗褐色土主体で，黒褐色土が混在）であったため，古墳時代の土坑と判断した。



第57図　1号・2号土坑

2　遺物

遺物はⅣ層を中心に出土した。甕・壺・高坏・坩・土製品・軽石製品等が出土した。

(1) 土器・土製品

甕

底部を欠き，全体の形状が不明なものが多いが，多くは口縁部が広口で脚部をもつタイプと考えられる。口縁部の形状や調整などから２つに分類した。また，突帯をもつ胴部片及び脚部は一括してまとめた。

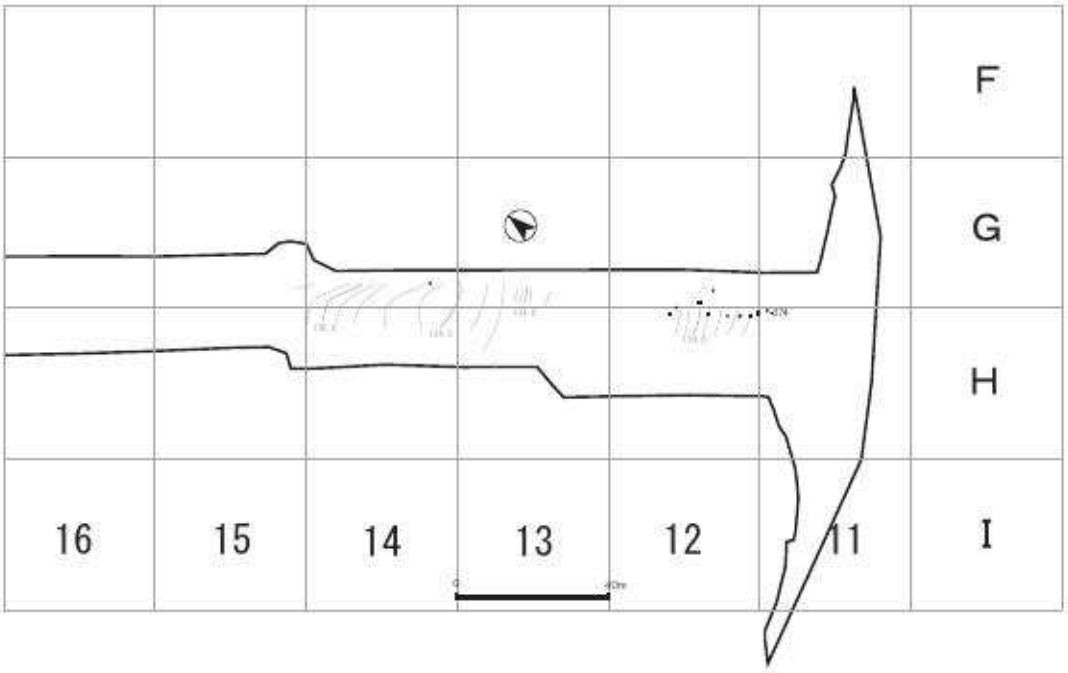
Ⅰ類：口縁部が外反し，内面の稜が明確でないもの。
Ⅱ類：口縁部が直立または内弯するもの。

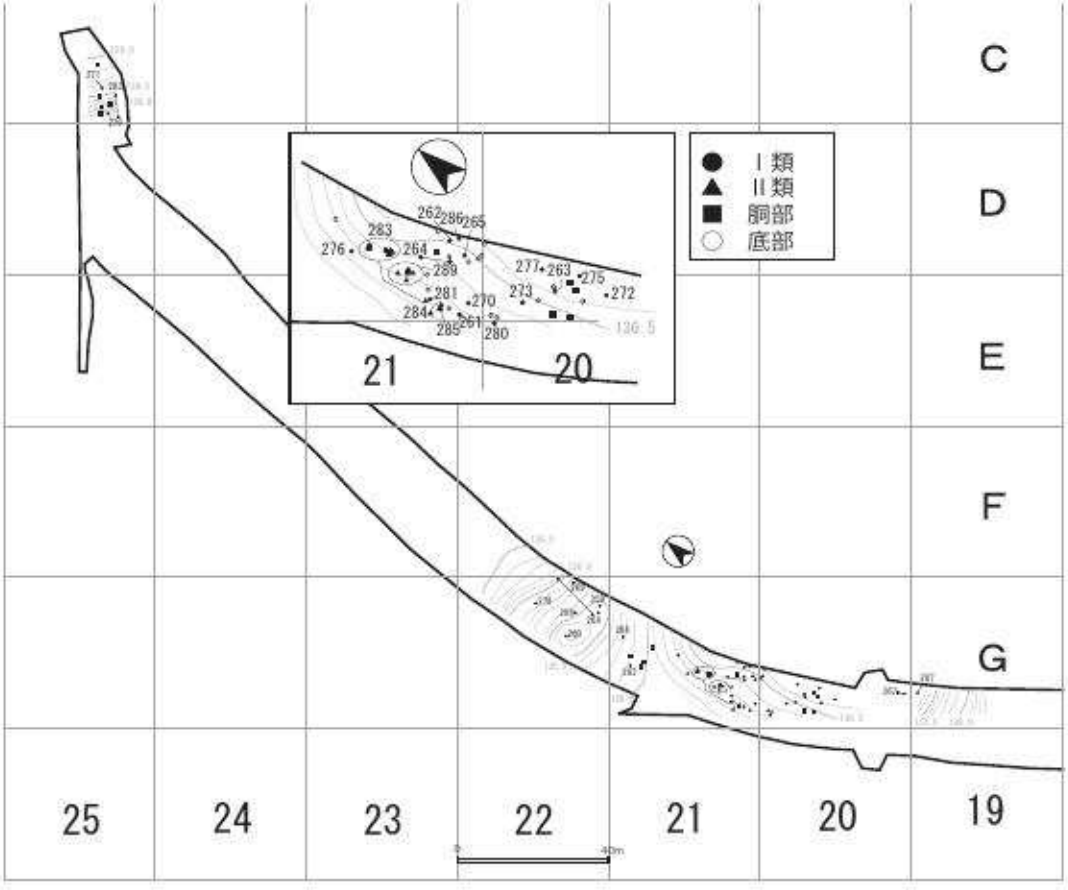
Ⅰ類（第59～61図：259～282）

259は口径26.4cmを測り，緩やかに外反する器形で，口唇部は「コ」の字状を呈している。内外面共にハケ後ナデの調整で，内面の口縁部下位に指頭痕が残っている。また外面には煤が付着している。260は口径30.4cmを測り，口唇部は「コ」の字状を呈し，内外面共にハケ後ナデの調整で，外面には一部にハケメと煤の付着が見られる。261は内外面共にナデ調整で，外面に段を有し，口唇部は「コ」の字状を呈している。口径28cmを測り，やや大きめである。262は口径24.3cmを測り，口縁部が外反する深鉢である。口唇部はやや尖り気味で，外面の口縁下位に段を有し，煤が付着している。内外面共にナデによる調整であるが，内面には部分的に指頭痕が見られる。263は緩やかに外反する口縁部で，口径24.6cmを測る。内外面共にハケ後ナデの調整で，外面には煤が付着し，掻き上げによる段が見られる。264は口径34cmを測り，緩やかに外反する。口唇部は平坦面を有し，外面の口縁下位に段を有し，煤が付着している。内外面共にハケ後ナデの調整である。265は口径30.5cmを測り，頸部には幅がせまい三角断面の突帯が貼り付けられ，突帯には小さな刻目が施されている。また，屈曲部の内側には指頭痕が残る。口唇部は「コ」の字状を呈するが，中央部がややくぼんでいる。外面は口縁部がハケによる掻き上げ整形がなされ，口縁部下位が粗いハケメで仕上げている。外面に煤が付着している。266は内外面共にハケメ調整で仕上げているが，口縁部外面は掻き上げである。外面には煤の付着と指頭痕が一部残っている。267は外面にやや斜位の段を有し，煤も付着している。内面はハケ後ナデの調整で仕上げ，口縁部付近に指頭痕が残っている。268は外へ強く反る口縁部であり，内外面共にナデ調整で，外面に煤の付着も見られる。269は口唇部上面に平坦面を有し，口縁端部の内外面にナデ調整が施されている。内面には指頭痕が残り，煤の付着も見られる。270は頸部外面に段を有し，外面には煤が付着している。内外面共にハケ後ナデの調整である。271は外面に煤が付着し，丸みを帯びた口唇部である。272は内外面共にハケ後ナデの調整であるが，外面には指頭痕が残り，内面にはミガキ調整が見られる。273は内外面共にナデ調整で，煤も両面に付着している。口唇部は，やや細めに丸みを帯びている。274は器壁の厚い口縁部片である。内外面共にナデ調整であるが，外面に指頭痕が残っている。275の口唇部はやや丸みを帯び，277の口唇部はやや細く尖り気味である。また，277の口縁端部は煤が付着し，頸部には段を有している。276は口縁下部に段を有し，胴部に向かって膨らむ器形である。内外面共に煤の付着が見られ，調整はナデで仕上げている。278は外面に明瞭な段を有し，ほぼ全面に煤の付着が見られる。口唇部は「コ」の字状を呈している。279の口唇部はやや丸みを帯びた「コ」の字状を呈し，278と同様にほぼ全面に煤の付着が見られる。280は口唇部が「コ」の字状を呈し，口縁部の器壁の厚さはほぼ一定である。281・282は口縁部が直行気味に立ち上がるものである。281の口唇部は丸みを帯び，口縁端部は内外面共に丁寧なナデ調整が施され，外面はナデで仕上げている。282は内外面共にナデ調整で，外面には煤が付着している。

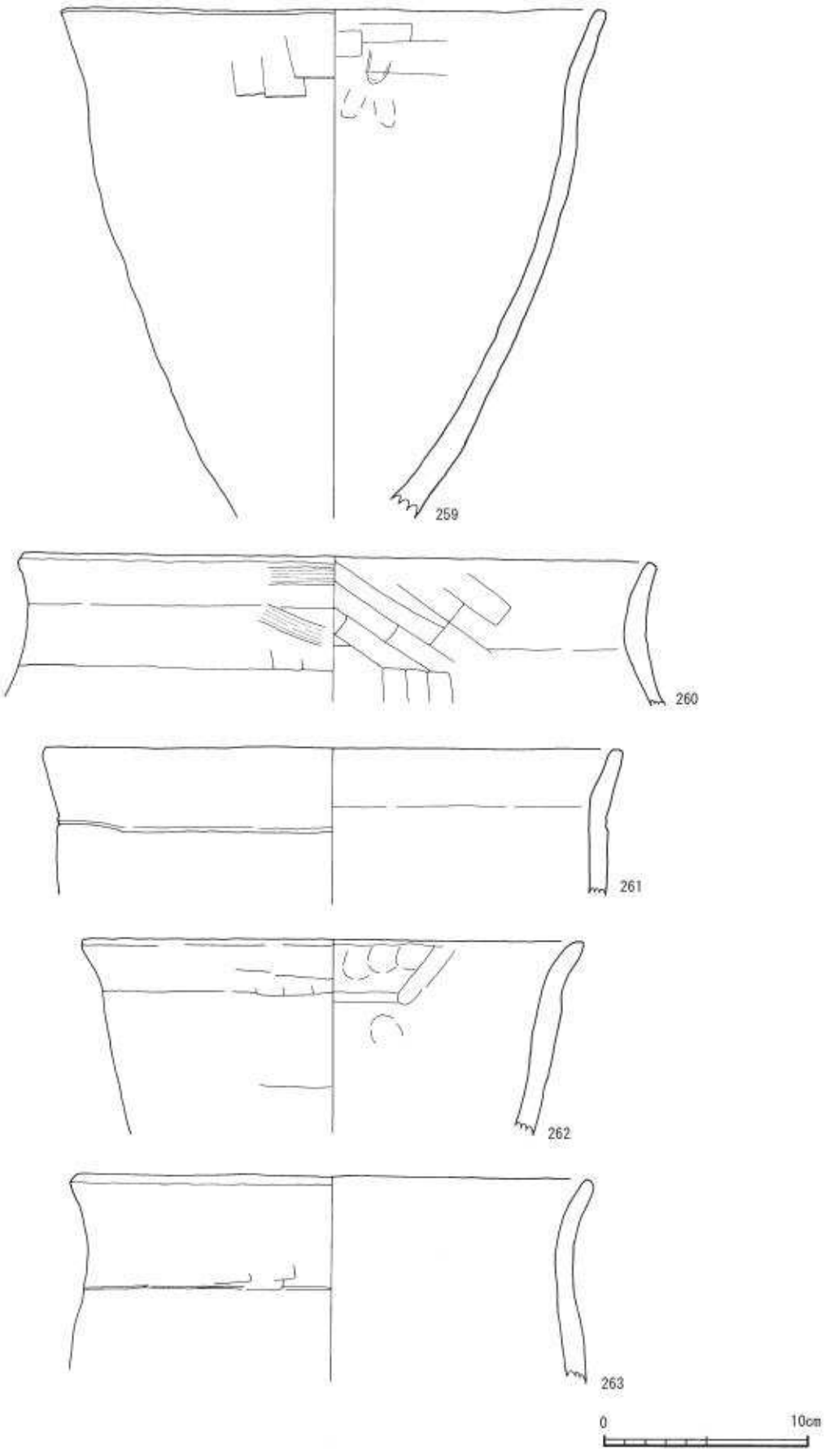
Ⅱ類（第61・62図：283～289）

283～289は口縁部が内弯するものである。283は口径21.6cm，器高32cm，脚部径9.7cmを測る。やや強めに内弯する器形で，胴部に三角突帯が貼り付けられ，内外面共にナデ調整である。284～286も胴部に三角突帯を有するもので，共にナデで仕上げている。285はやや強めに内弯する器形である。286もやや強く内弯する口縁部で，口唇部はやや「コ」の字状を呈し，内外面共にナデ調整である。287は口唇部が丸みを帯び，口縁部が強く内弯する。口縁下部に断面が丸みを帯びた突帯を有し，その上に布状圧痕のある刻みが施されている。内外面共にハケ後ナデの調整で指頭痕も残り，外面には煤が付着している。289は口径27.4cm，器高36.7cm，脚部径11.2cmを測る。内外面共にハケ後ナデの調整で，脚部の外面には指頭痕が残り，胴部には煤の付着が見られる。口縁下部の三角突帯はすれ違い，指で押さえ付けられている。

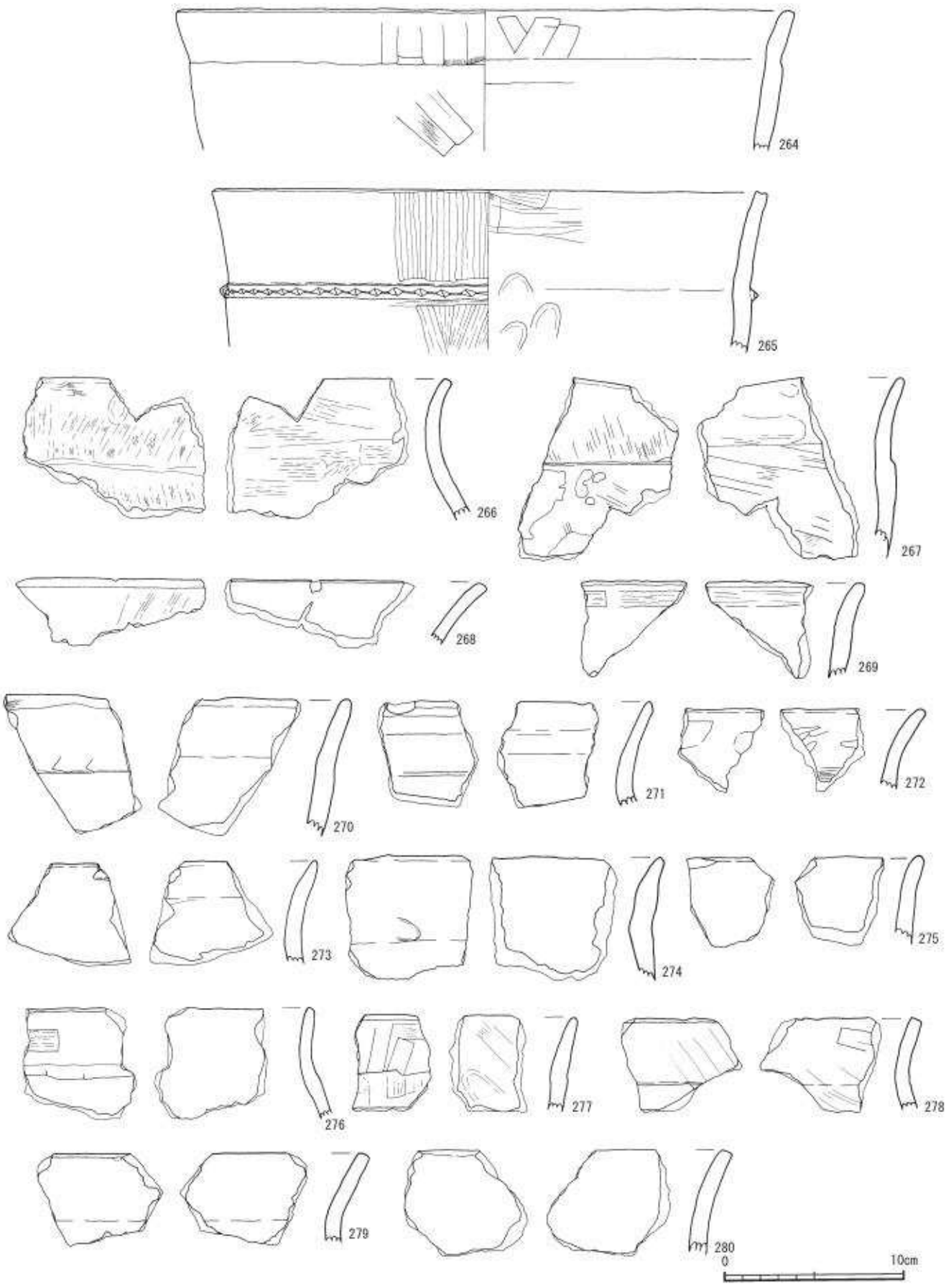




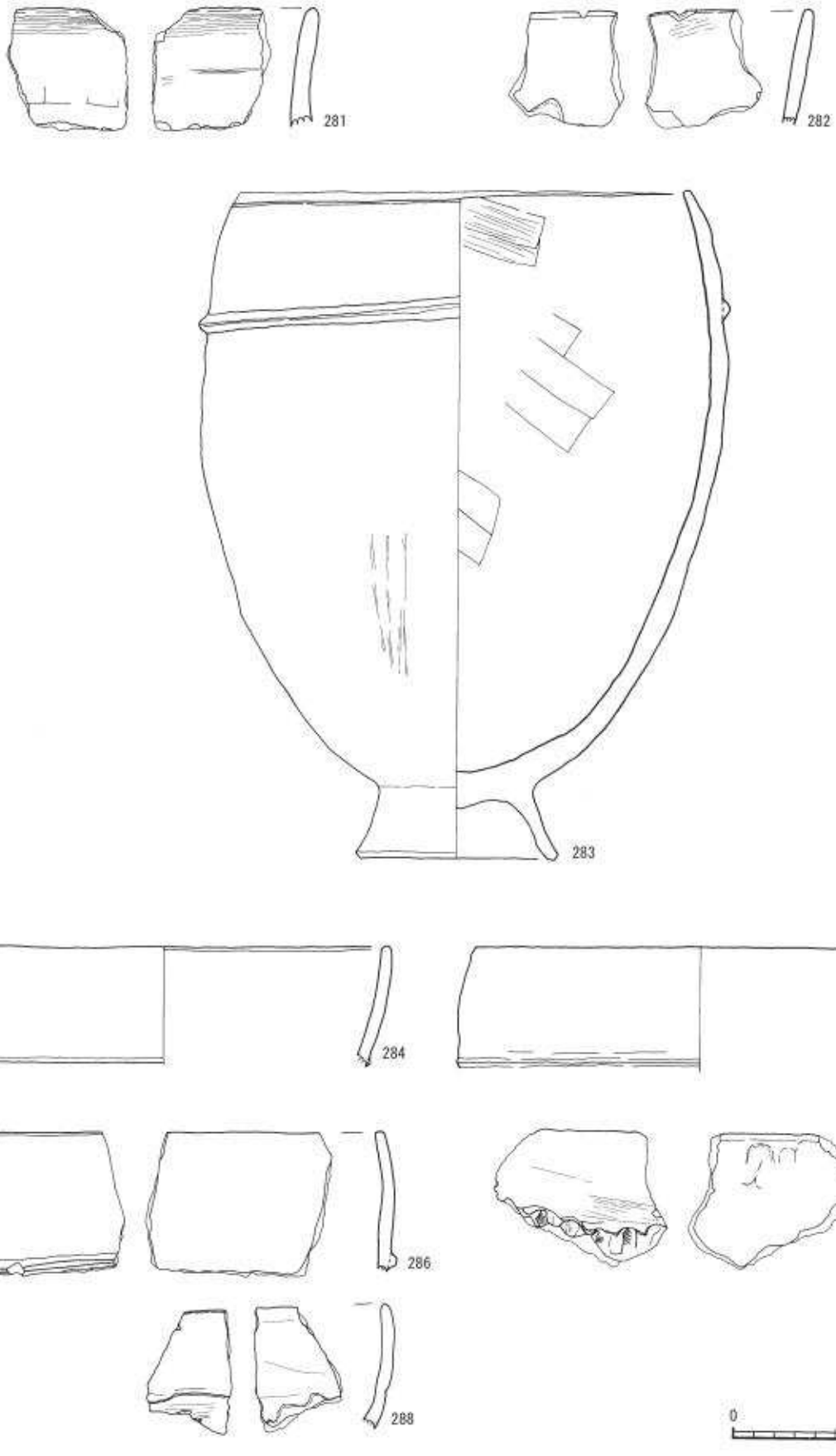
第58図　遺物出土状況図（甕）



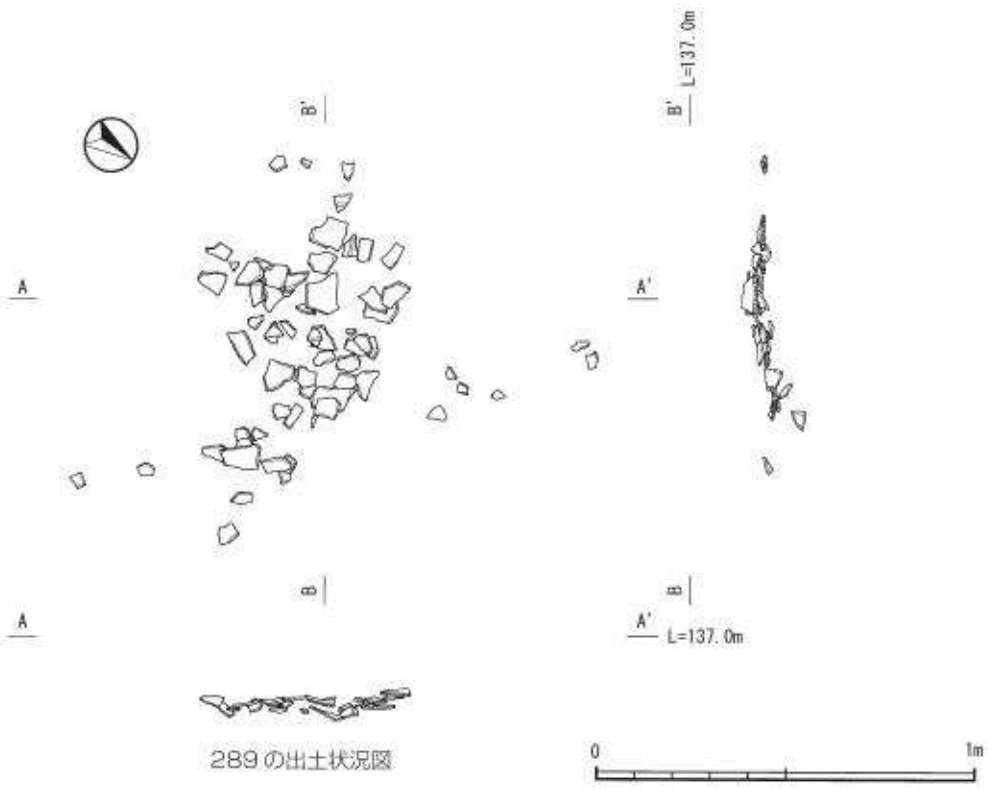
第59図　古墳時代の土器①



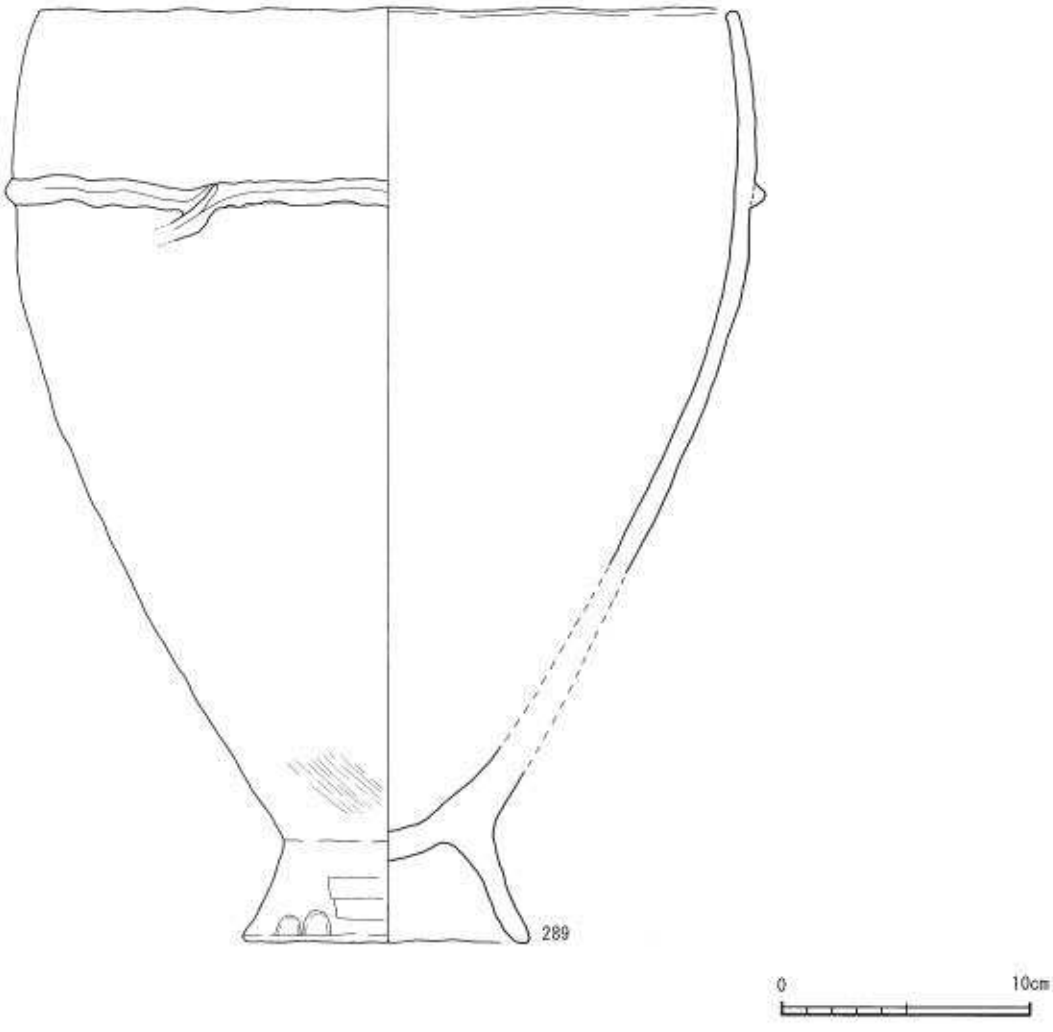
第 60 図　古墳時代の土器②



第61図　古墳時代の土器③



289の出土状況図

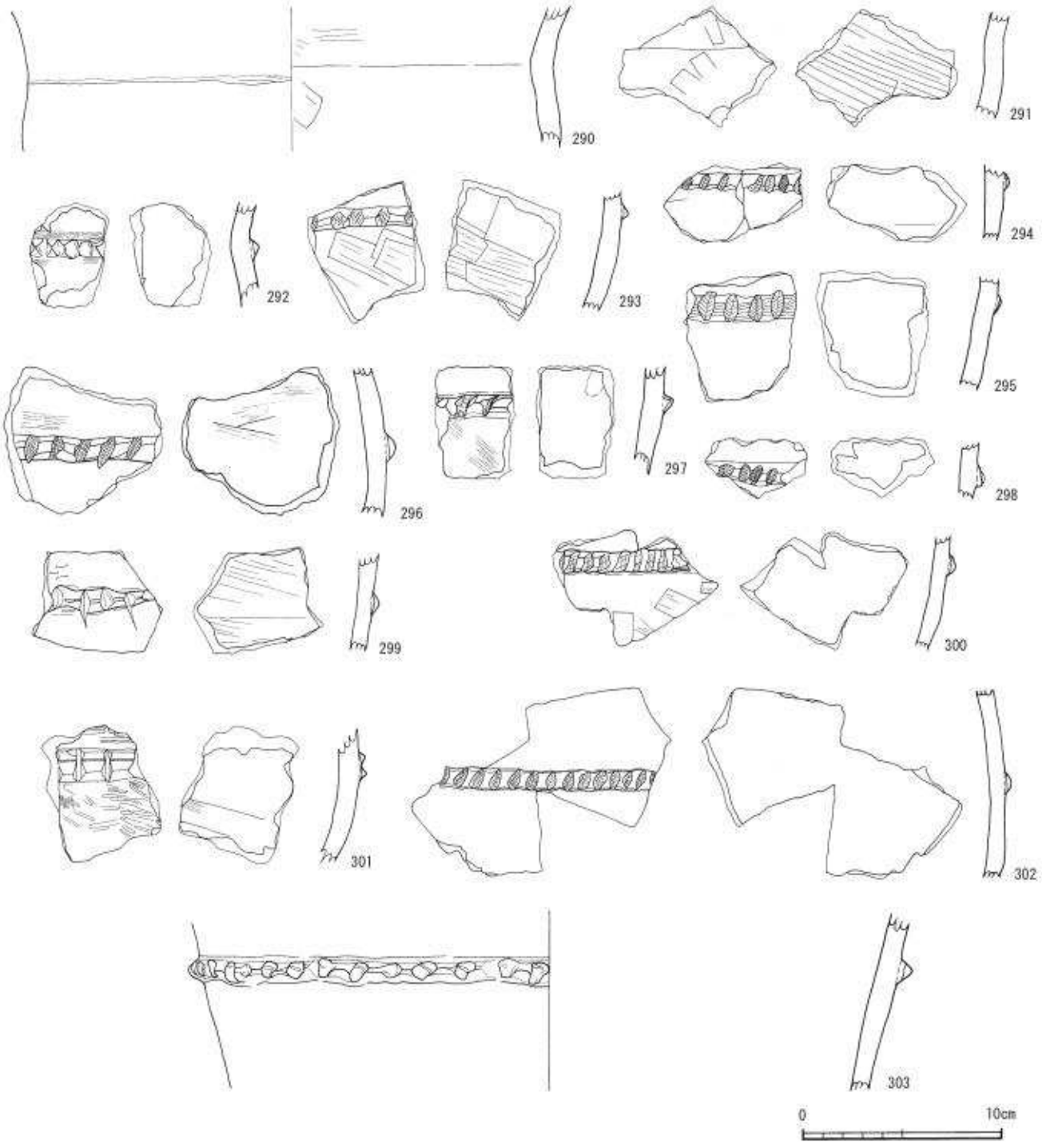


第62図　古墳時代の土器④

甕の胴部（第 63 図：290 ～ 303）

290 は外面に段と煤の付着が見られ，内面はケズリの後にナデで仕上げられている。器壁がやや厚い作りである。291 は口縁下部で，内面にハケメ調整が施され，外面はハケ後ナデの調整が施されている。外面には明瞭な段を有し，煤も付着している。

292 ～ 303 は胴部に突帯が貼り付けられているものを一括した。292 は工具による刻みが施された突帯より上部で外反する器形である。299 は三角突帯の上に右下がりのヘラ刻みが施されている。294 ～ 296・300 は丸みを帯びた突帯の上に，布状圧痕のある刻みが施されている。293 は三角突帯の上に布状圧痕のある刻みが施され，298 の突帯には楕円形を呈した布状の圧痕が見られる。296・302 は共に内弯した胴部の上に丸みを帯びた突帯を有し，その上に布状圧痕のある刻みがやや左下がりに施されている。303 は最大胴径 35.8cm を測り，三角突帯の上にはやや幅の広い，左下がりの刻みが施されている。



第 63 図　古墳時代の土器⑤

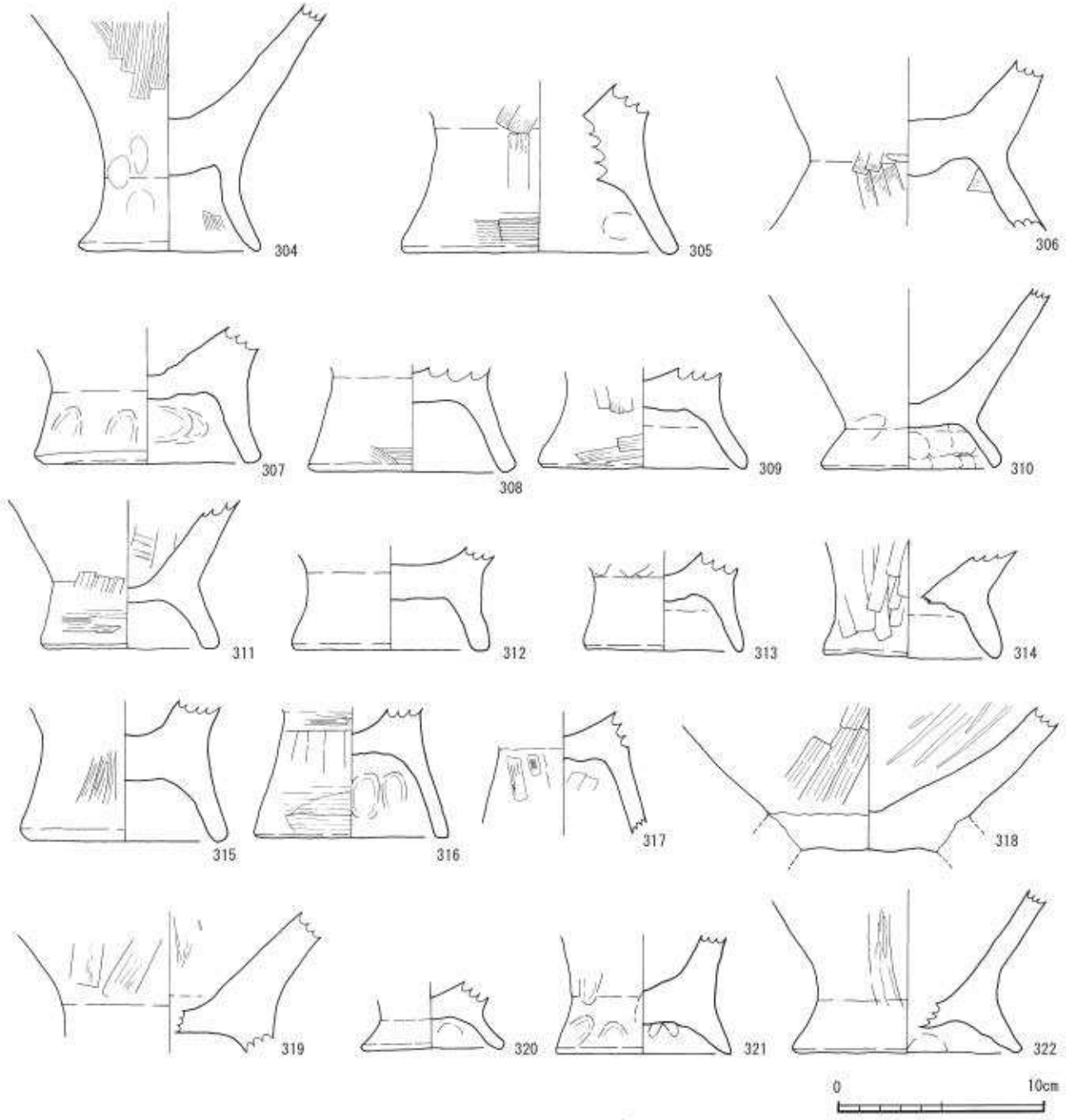
甕の底部（第64図：304～322）

底部を一括して掲載した。

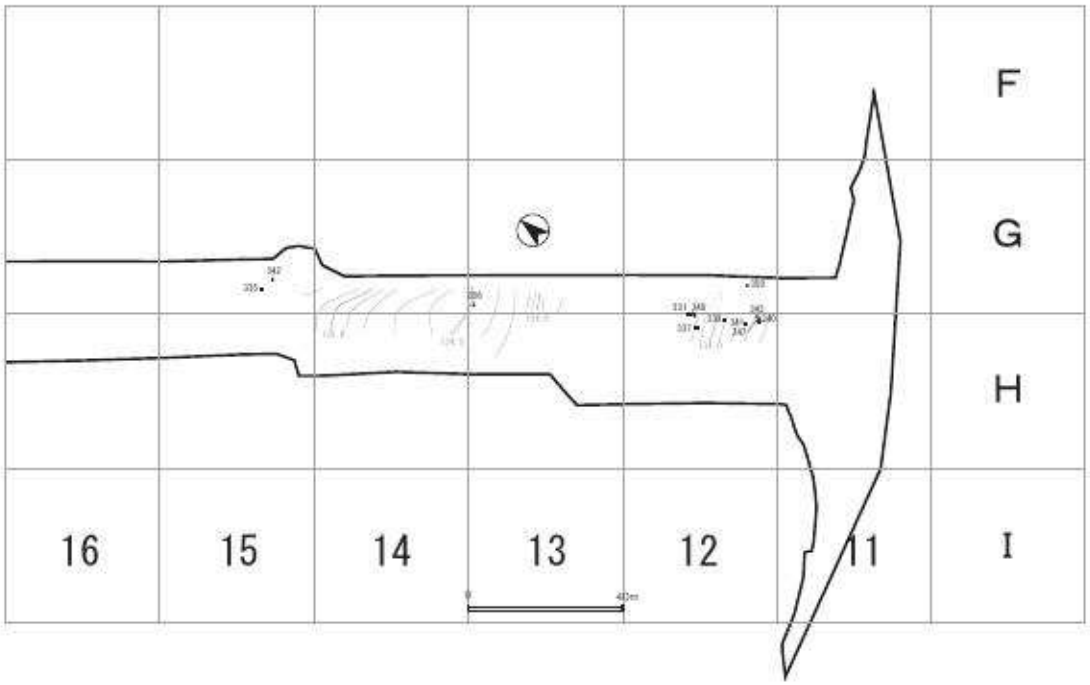
304～319は脚の高い底部である。緩やかに外反するもの（304），直線的に開くもの（305～317）がある。脚内部の天井部の形態に着目すると，天井部が平坦なもの（308～312・315・316・319），天井部が上方にややくぼむもの（317・318），天井部が下方に膨らむもの（304・306・307・313）がある。また，指頭痕が顕著に残るものが多い。

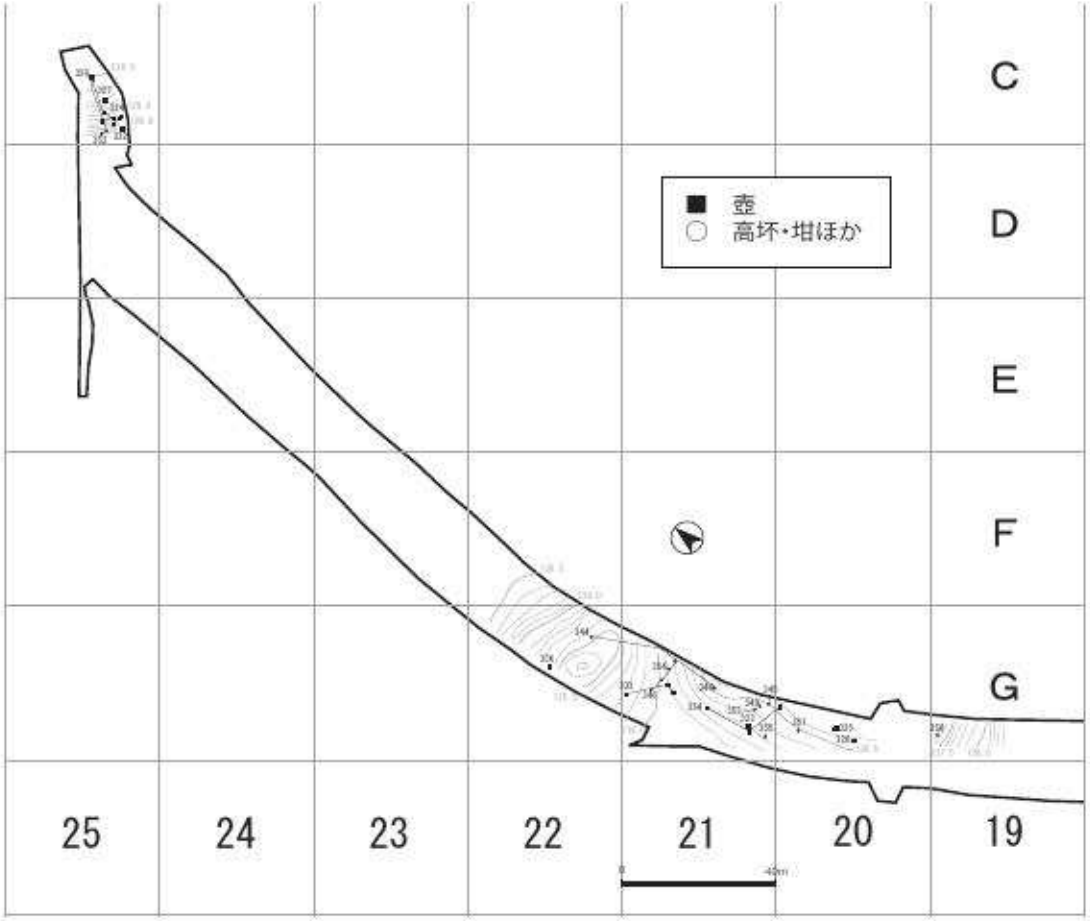
304～306は底部の厚みに対し，やや細めの脚をもつ。311の脚端部は「コ」の字状を呈する。312は脚端部が平坦面を呈し，底部がやや厚めである。313は脚がやや細めで端部が尖り気味である。316は脚端部が平坦面を呈し，脚部径9.4cmを測る。318・319はやや厚めの底部で，脚が欠けている。

320～322は脚の低い底部である。緩やかに外反するもの（320），直線的に開くもの（321・322）がある。脚内部の天井部は3点とも下方に膨らむタイプである。また，指頭痕が顕著に残る。320は脚部径6.9cmを測り，やや小ぶりなものである。321は脚部径8.4cmを測り，底部が厚めである。322は脚端部が平坦で，脚部径11cmを測り，やや大きい。



第64図　古墳時代の土器⑥





第 65 図　遺物出土状況図（壺ほか）

壺（第66～68図：323～341）

323は第66図，324は第67図で示した出土状況であった。2点とも土器片を接合し，復元したものである。

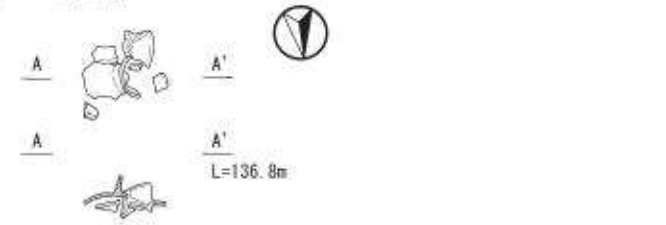
323はくびれた頸部から外へ強く反る口縁部となり，口径29cmを測り，頸部に1条の刻目突帯を有している。調整は，内外面共にナデ調整である。324は胴部上位に幅広の突帯が貼り付けられ，突帯には斜格子状の細かいヘラ押圧が施されている。内外面共にナデ調整であるが，外面にはミガキも確認できる。

325～327は口縁部が直立気味に外反するタイプである。325は口径14cmを測り，頸部に1条の突帯を有している。326は頸部に1条の刻目突帯を有し，内外面共にナデ調整である。327は口径11.8cmを測り，口縁端部は丸みを帯びている。内外面共にナデ調整であるが，一部にハケメも見られる。

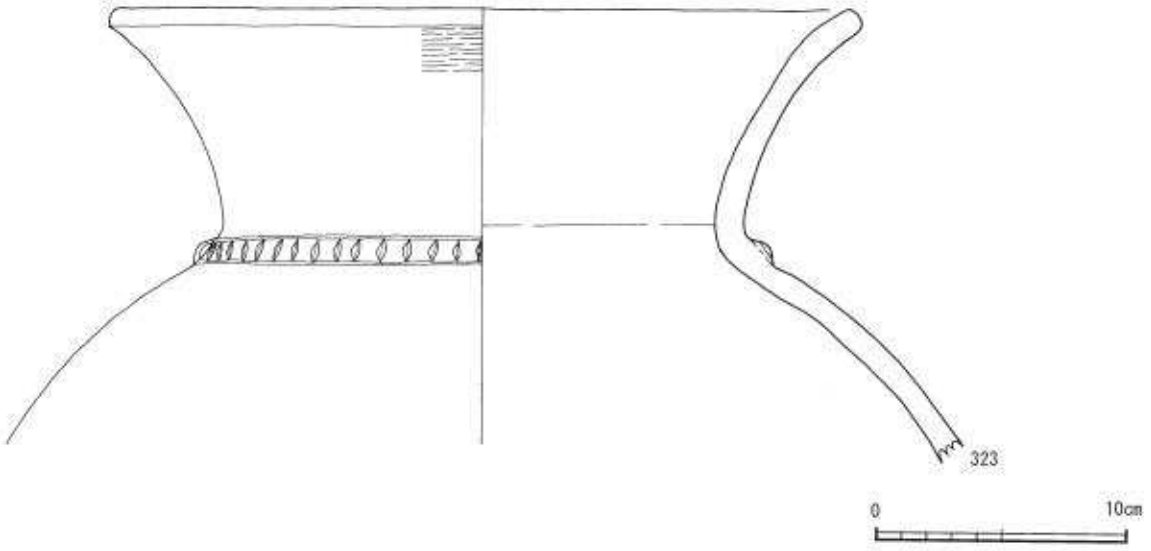
328・329は口縁部が直行するタイプである。328は口径8.4cmを測り，頸部から胴部にかけて膨らむ。外面は横ナデ後にミガキが施され，内面は工具ナデが施されている。329は口径30.6cmを測り，口唇部は丸みを帯びている。頸部に1条の刻目突帯を有し，内外面共にナデ調整で，内面に煤が付着している。

330～334は胴部片である。330には3条の三角突帯が貼り付けられ，突帯には左下がりの布状圧痕のある刻みが施されている。331は頸部から胴部に至るところの破片で，頸部には左下がりと右下がりの細めの刻目が交差した突帯を有している。内面には指頭痕も見られる。332は胴部のやや上部に半円形の突帯が貼り付けられ，細めの刻目が施されている。333は胴部の張り出し部分にやや角張った突帯を有し，その上に左下がりの幅広い工具による刻みが施されている。334は胴部に半円形の突帯が貼り付けられ，その上に左下がりの工具による刻みが見られる。甕の可能性もある。

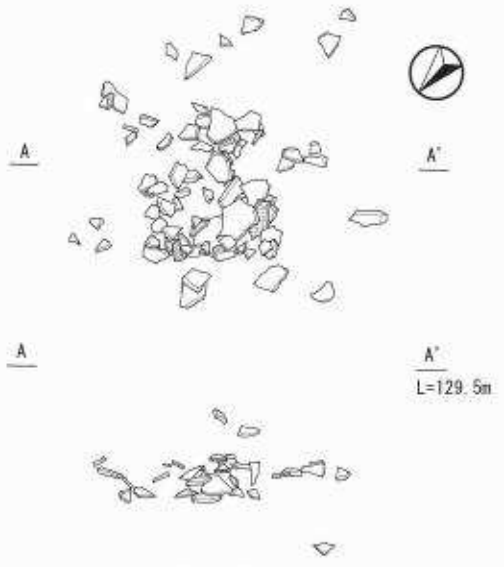
335～341は底部で，器壁は厚めの作りである。335はほぼ平底を呈し，底径7.2cmを測る。外面には指頭痕も残り，煤が付着している。336・337・340はいずれも平底である。336は底径7.4cmを測り，内外面共にハケ後ナデの調整である。337は底径7.7cmを測り，外面がハケメ調整で煤の付着が見られる。340は底径6.8cmを測り，厚く膨らむ作りである。内面はハケ後ナデで仕上げている。338・339はやや丸みを帯びた平底である。338の外面はミガキの後にナデ調整が施され，内面はハケ後ナデ仕上げである。341は丸底で内面にはケズリが見られ，外面はナデ調整である。



323の出土状況図

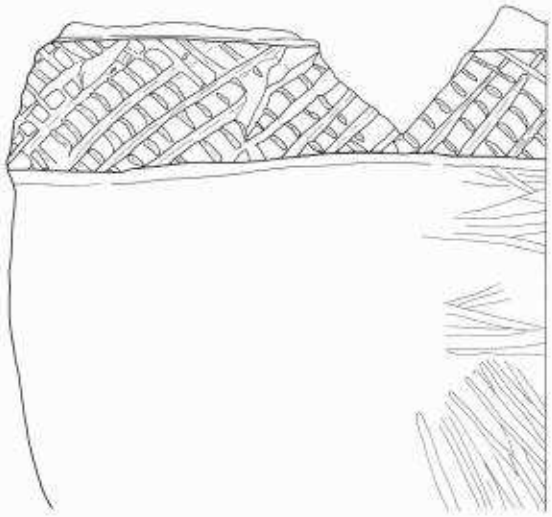


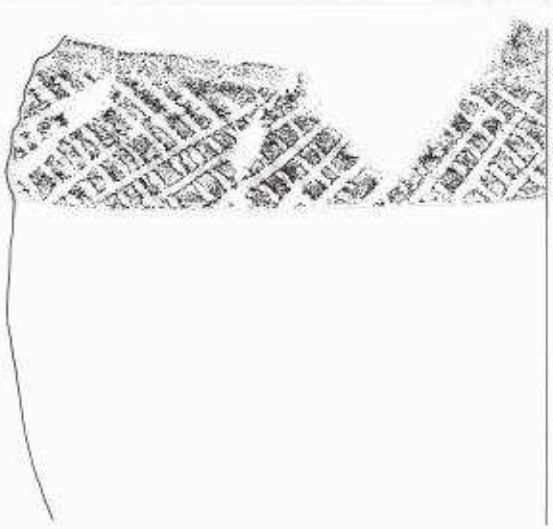
第66図　古墳時代の土器⑦



324の出土状況図

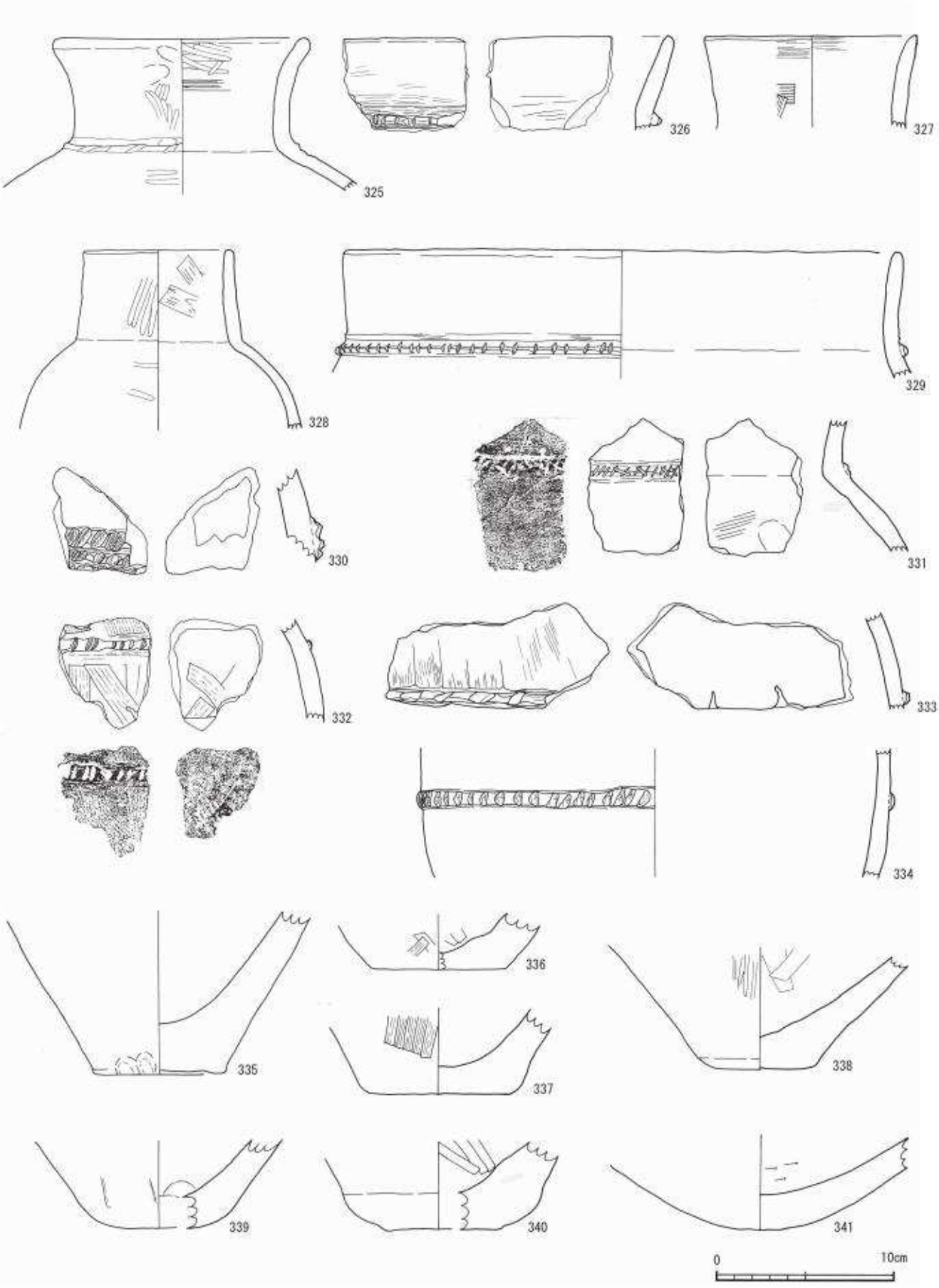
0 1m





0 10cm

第67図　古墳時代の土器⑧



第68図　古墳時代の土器⑨

高坏（第 69 図：342 ～ 346）

342 ～ 345 は坏部から脚部にかけてのもので，346 は脚部のみである。筒部内面は 343・345 が詰まり気味で，342・344 は空洞化している。調整は内外面共にナデ調整であるが，343 は内面にケズリ，344・345 は内面に指頭痕が見られる。また，342・343・345 には外面に煤の付着も見られる。346 は脚部径 11.2cm を測り，調整は外面がハケメ調整で，内面には指頭痕が残る。

坩（第 69・70 図：347 ～ 350）

胴部から底部にかけてのものが 3 点と，底部のみのものが 1 点の 4 点出土した。347 には赤色顔料が施されており，347・348 の胴部の最大径はいずれも中央部分にあり，347 は 13.2cm，348 は 14cm を測る。347 は内面にナデ調整が見られ，348 は外面にミガキ調整と煤の付着があり，内面には指頭痕が見られる。349 の胴部最大径は 11.6cm を測り，内外面共にナデで仕上げており，内面には指頭痕も見られる。350 は底部中央に直径約 2 cmの突起物が貼り付けられ，上下面共にナデが施されている。

土製紡錘車（第 70 図：351）

351 は土製紡錘車である。直径が約 5 cmの円盤形を呈し，中央部分に約 5 mmの穿孔をもつ。上下面共にナデ調整である。

ミニチュア土器（第 70 図：352 ～ 354）

3 点出土した。352 は口径 6.6cm，器高 5 cm，底径 2 cmを測る鉢で，調整は外面がケズリ後ナデ，内面がナデである。353・354 は指頭押圧で形を整える手づくねの鉢である。353 は口径 4.6cm，器高 2.8cm，底径 1.5cmを測り，底部近くの外面に煤が付着している。また，口唇部は「コ」の字形を呈し，厚い平底となっている。354 は口縁部から底部にかけての破片で，口径 7.1cmを測り，口唇部はやや尖り気味である。口縁部下位の外面に煤が付着している。

土製品（第 70 図：355）

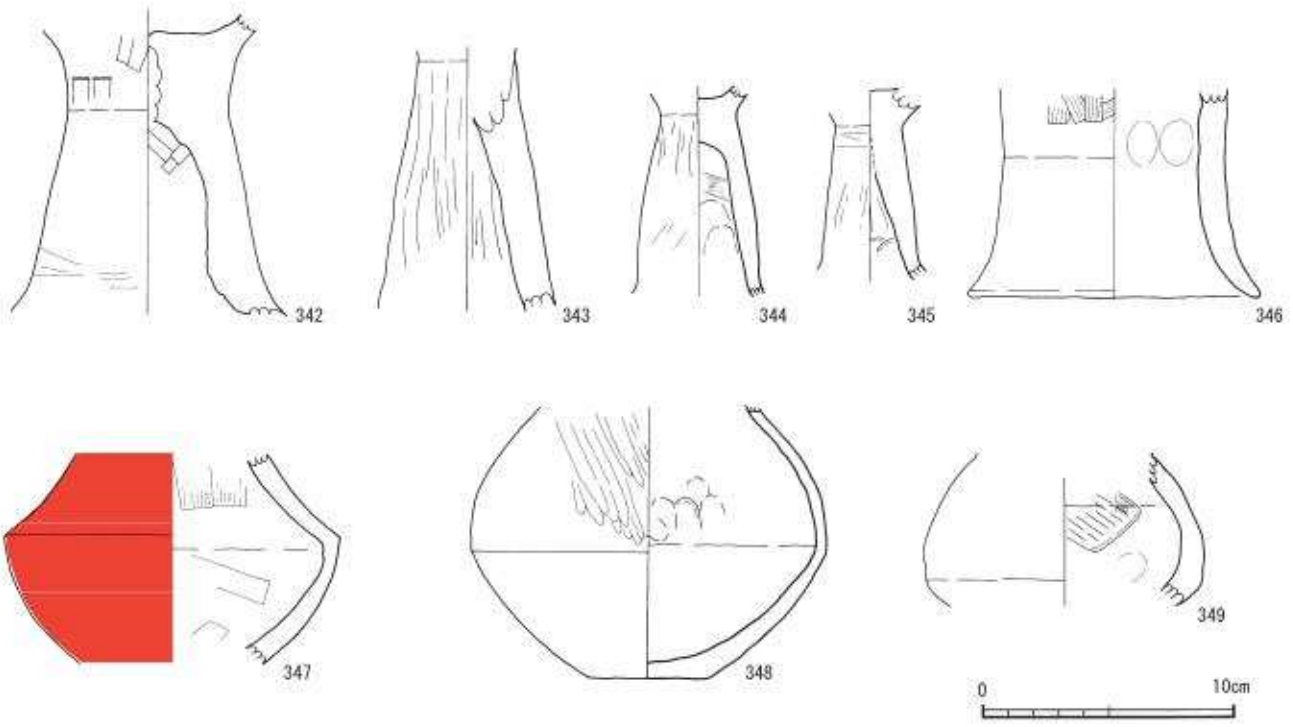
355 は 3.4cm × 2.9cmの楕円形を呈し，厚みが 2.3cmを測る。ナデ調整が施されているが，周辺はやや摩滅している。投げ玉等に利用されたものと思われる。

円盤状土製加工品（第 70 図：356）

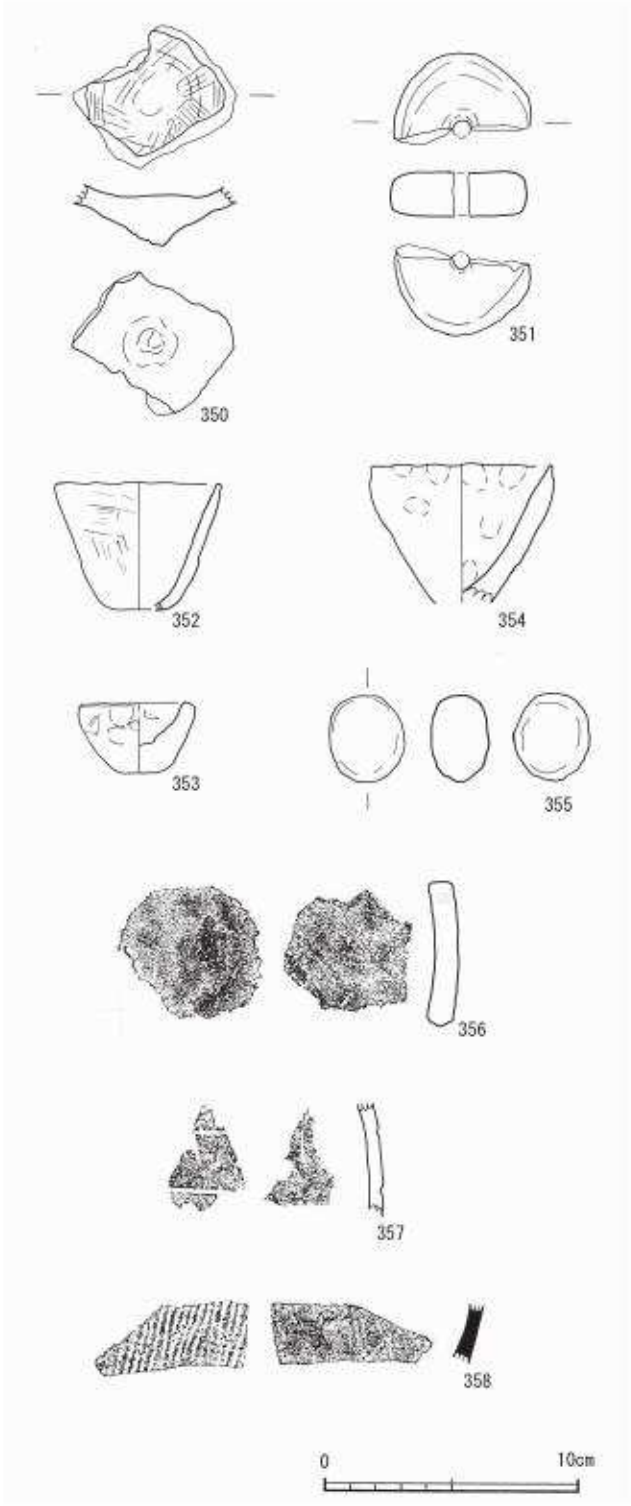
356 は通称メンコと呼ばれる円盤状土製加工品で，土器の胴部片と思われる部分の周縁部を丸く打ち欠いた痕跡が見られる。外面右半分には煤が付着しており，土器として利用した後に加工されたと考えられる。

須恵器（第 70 図：357・358）

357 は椀の胴部片である。外面に 2 条の沈線と櫛目文が施され，内面はナデ調整である。358 は甕の胴部片で，外面は格子目タタキで，内面は平行タタキである。



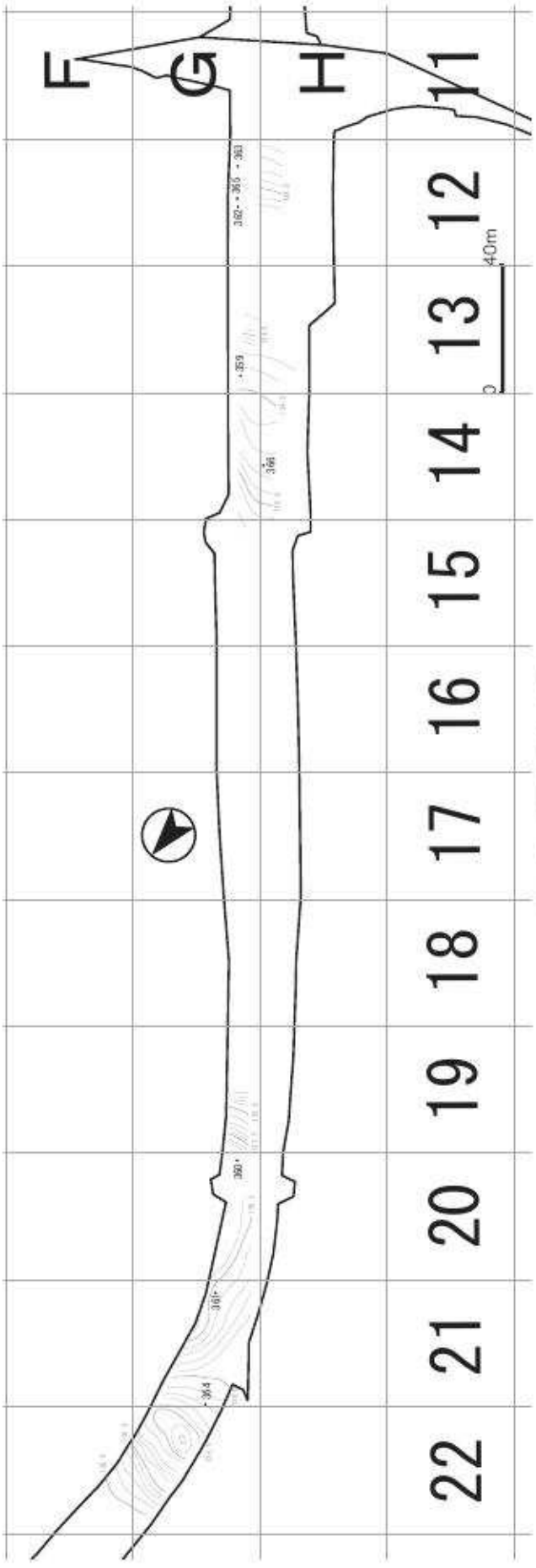
第 69 図　古墳時代の土器⑩



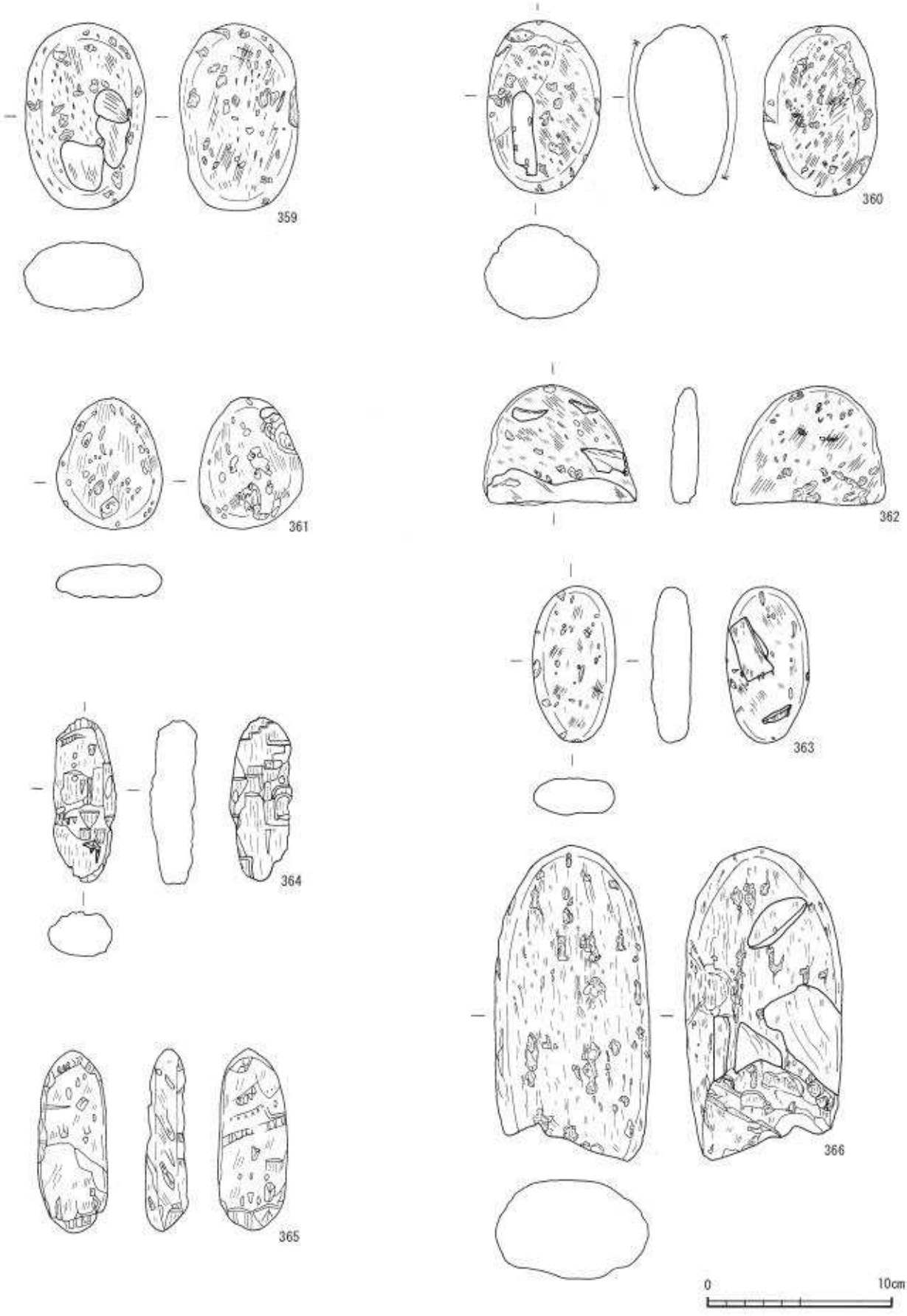
第 70 図　古墳時代の土器⑪

(2)　軽石製品（第 72 図：359 ～ 366）

軽石製品を一括して掲載した。359 ～ 363・365・366 は表裏面に磨面が見られる。形状は楕円または棒状を呈している。



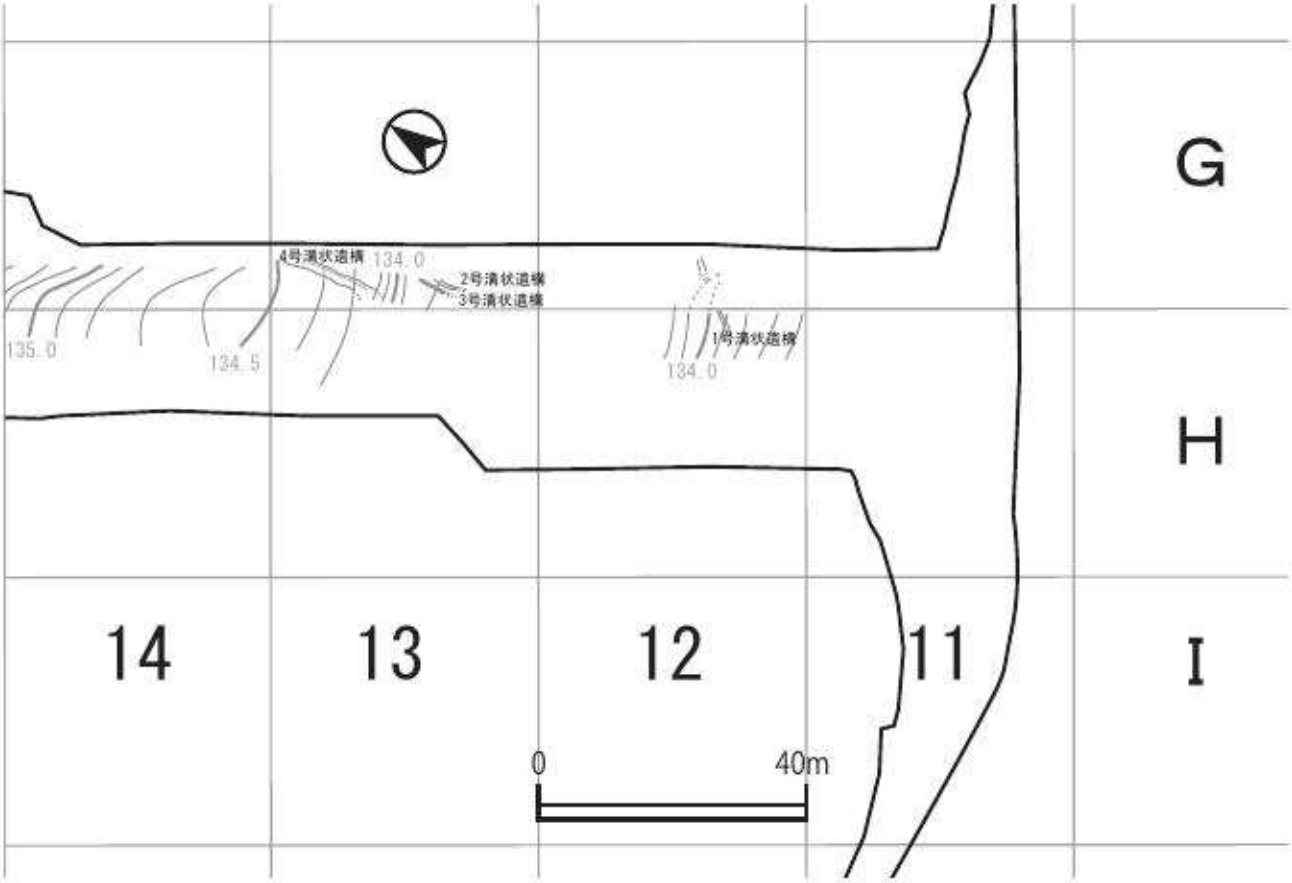
第 71 図　軽石製品出土状況図



第 72 図　軽石製品

第７節　古代・中世の調査

中心となる包含層はⅢ層である。調査の結果，遺構は溝状遺構を４条検出し，遺物は須恵器，鉄製品等が出土した。遺構の認定時期については，埋土状況及び埋土内の出土遺物から判断したが，埋土遺物がなかったものについては，周辺の遺構の状況を勘案して判断した。



第 73 図　遺構位置図

１　遺構

１号溝状遺構（第 74 図）

ＧＨ－ 12 区のⅣ層上面で検出された。遺構の長軸は北東－南西方向に走っており，検出状況の幅は約 40 ～ 65cm，長さは北東側が 2.5 ｍ，南西側は４ｍである。深さは最深部で約 20cm程度の掘り込みが見られる。本遺構は北東側が平成 20 年度の調査で，南西側は平成 21 年度の調査で検出された。空白部分は調査区外であった箇所，または畑灌パイプが通っていたため未調査である。遺構全体の様相については不明であるが，一続きの溝状遺構であると推察できる。遺構内の埋土については，北東側及び南西側とも黒褐色土一様であり，本遺跡層位のⅢ層を主体とするものである。地形は南西側が低く，溝状遺構は南西方向に下っている。

本遺構内では，床着で古墳時代の成川式土器片が出土していたが，埋土であるⅢ層土からは古代に比定される須恵器が出土していることから，古代の遺構と判断した。なお，古墳時代の遺構の可能性も捨て切れないため，遺物は掲載した。

１号溝状遺構内出土遺物（第 74 図：367・368）

367 は高坏の坏部と思われる。外面は丁寧なミガキが施されている。

368 は壺の底部で，内面はヘラナデで仕上げている。

２号溝状遺構（第 75 図）

Ｇ－ 13 区のⅣ層下面から検出された。遺構の長軸は南北方向に走っており，検出状況の幅は約 60cm，長さ約３ｍ，深さは最深部で 16cm程度の掘り込みがある。遺構全体の様相については不明である。遺構内の埋土は一様であり，薄い黒褐色土に１cm未満の茶褐色土が散在していた。本遺跡の層位のⅢ層とⅣ層の混ざりであると考えられる。また，埋土上面には硬化面が見られた。ただし，貼り床的な一定の層厚もしくは粘質土等は確認されず，道跡のような踏みしめられた硬化面ではない。

２号溝状遺構内出土遺物（第 75 図：369）

369 は青磁の椀の底部で，底径 4.8cmを測る。内面中央部に自然釉が残っている。

3号溝状遺構（第75図）

G－13区Ⅳ層下面で検出された。遺構の長軸は南北方向に走っており，2号溝状遺構と並行している。検出状況の幅は約25～30cm，長さは約4.25m，深さは最深部で8cmである。北側の地形が高いため，北側から南側へ下っている。遺構内の埋土は一様であり，薄い黒褐色土に1cm未満の茶褐色土が散在している。本遺跡層位のⅢ層とⅣ層の混ざりであると考えられ，2号溝状遺構と同様の埋土である。また，本遺構の埋土上面でも2号と同様の硬化面が見られた。

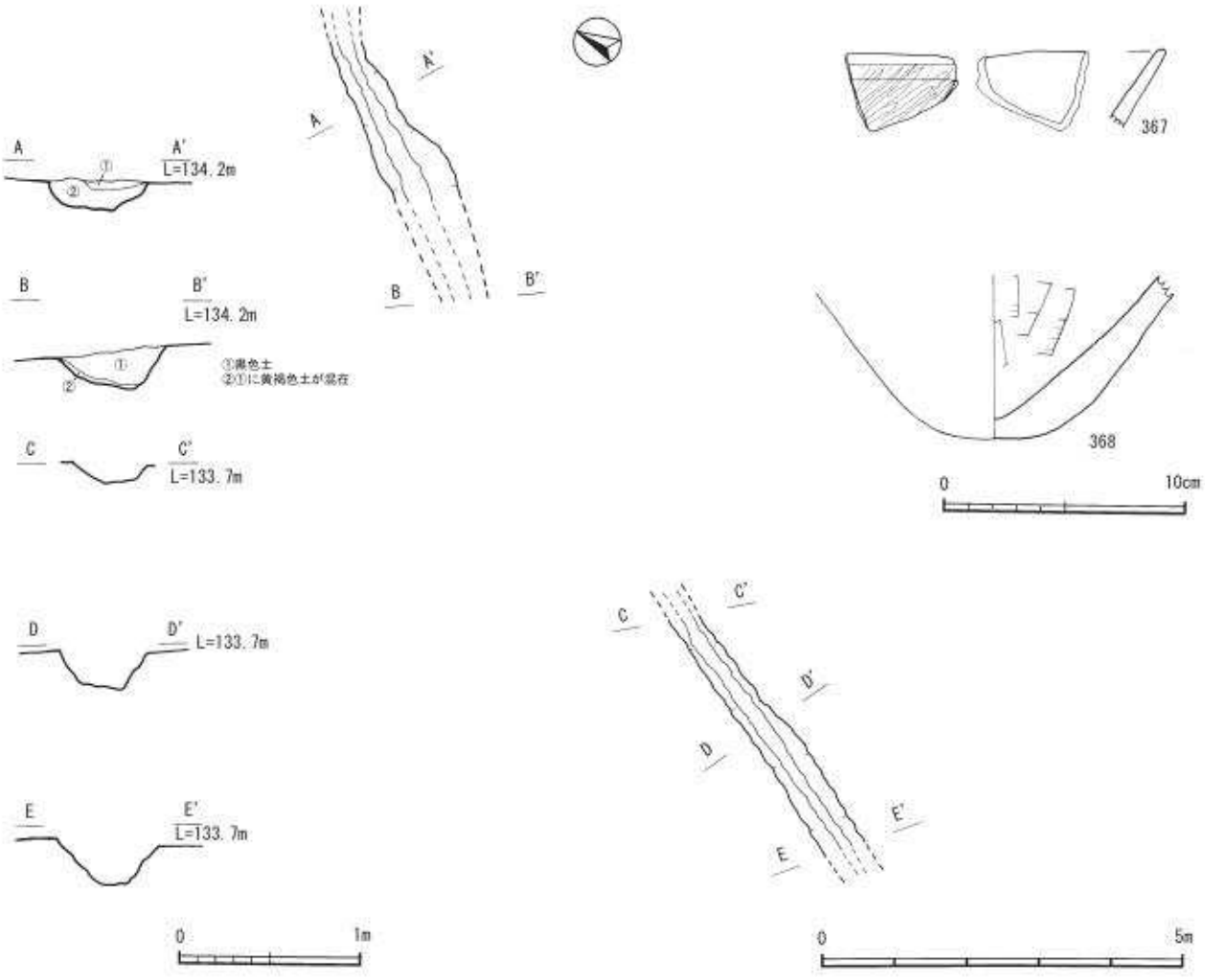
4号溝状遺構（第75図）

G－13区のⅣ層上面で検出された。遺構の長軸は南北方向に走っており，検出状況の幅は約140cm，長さは約10m，深さは最深部で約40cmである。遺構全体の様相については不明である。遺構内の埋土の状況は大部分が黒褐色土であり，Ⅲ層を主体としたものであるが，遺構の床面から10～15cm程度には黒みの強い黒褐色土の堆積が見られた。

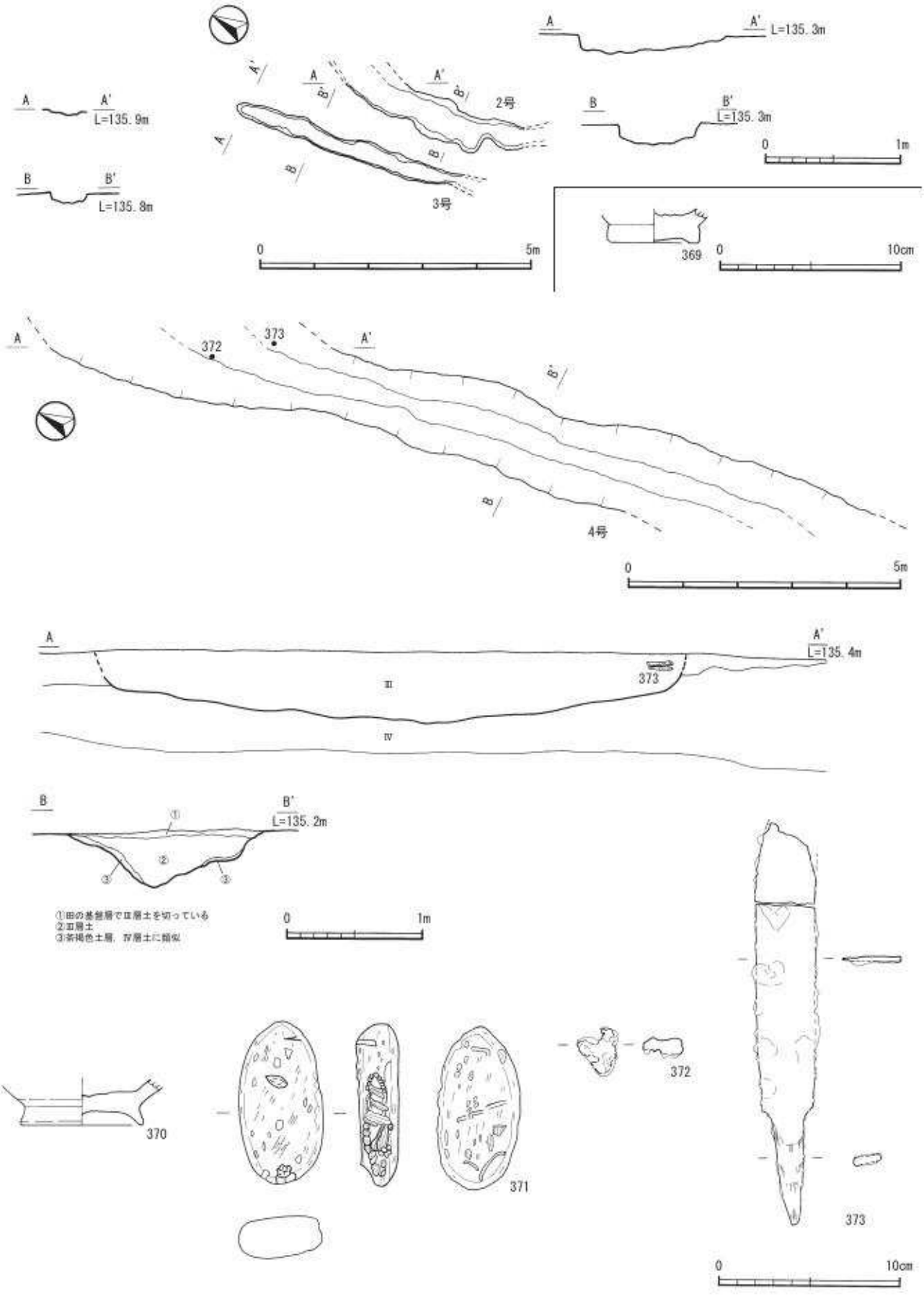
本遺構内では，埋土の上位で鉄刀（373）が出土した。扁平な軽石の礫が被さるようにして平置きで出土した。また，埋土中からは鉄滓が1点と古代に比定される須恵器の椀が1点出土した。さらに，遺構周辺では，鉄片や鉄屑が一定量出土したり，近接のⅢ層からは雁又鏃や鉄塊が出土したりした。

4号溝状遺構内出土遺物（第75図：370～373）

370は須恵器の椀の底部である。371は軽石製品で，扁平な長楕円形を呈し，表裏面にわずかではあるが一定方向の磨面が見られる。372は鉄滓である。表面に小さな気泡が見られる。内部は空洞化していて軽い。残存長2.3cm，最大厚1.2cm，重さ約5gを測る。373は鉄刀である。ほぼ完形品であり，身部の残存長16cm，茎部の残存長6.2cm，重さ約55gを測る。腰刀の可能性がある。



第74図　1号溝状遺構，遺構内出土遺物



第75図　2号～4号溝状遺構，遺構内出土遺物

2　遺物

出土数は少なく，須恵器・土師質土器・鉄製品が出土した。

須恵器（第 77 図：374 ～ 376）

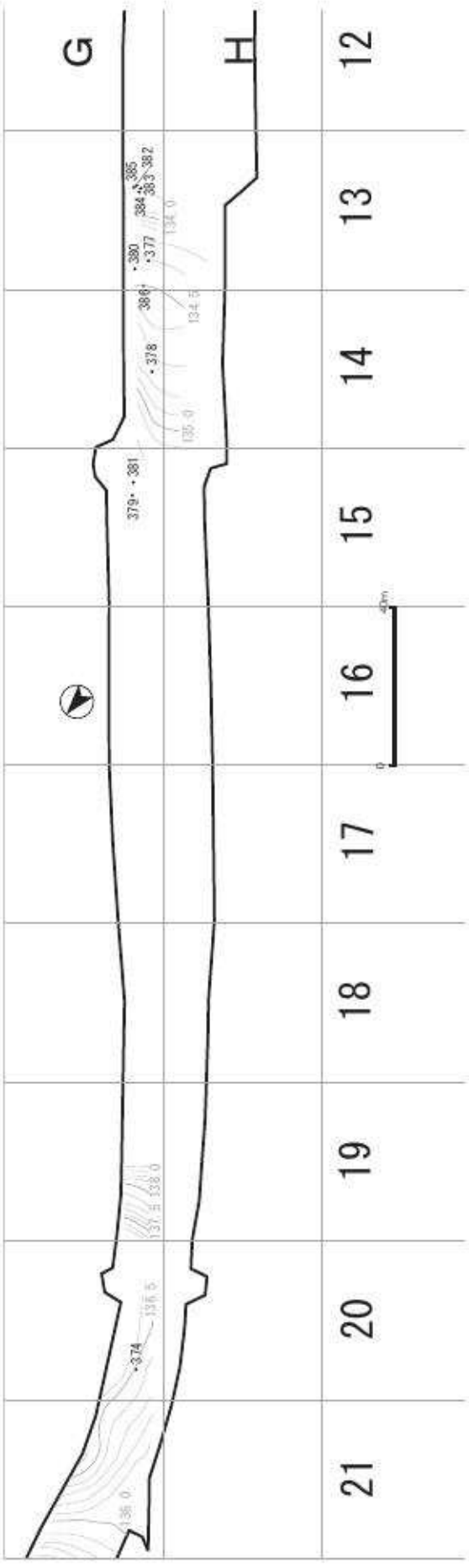
壺及び甕の胴部片で，樽万丈系または東播磨系のものと思われる。374 は外面が格子目タタキで，内面は同心円状タタキと平行タタキが混在する。外面がにぶい黄色で内面が褐色のため，還元焼成ではなく酸化したものと思われる。375 は外面が格子目タタキで，内面は同心円状タタキである。376 は外面が格子目タタキで，内面は平行タタキである。色調は内外面とも灰色である。

土師質土器（第 77 図：377・378）

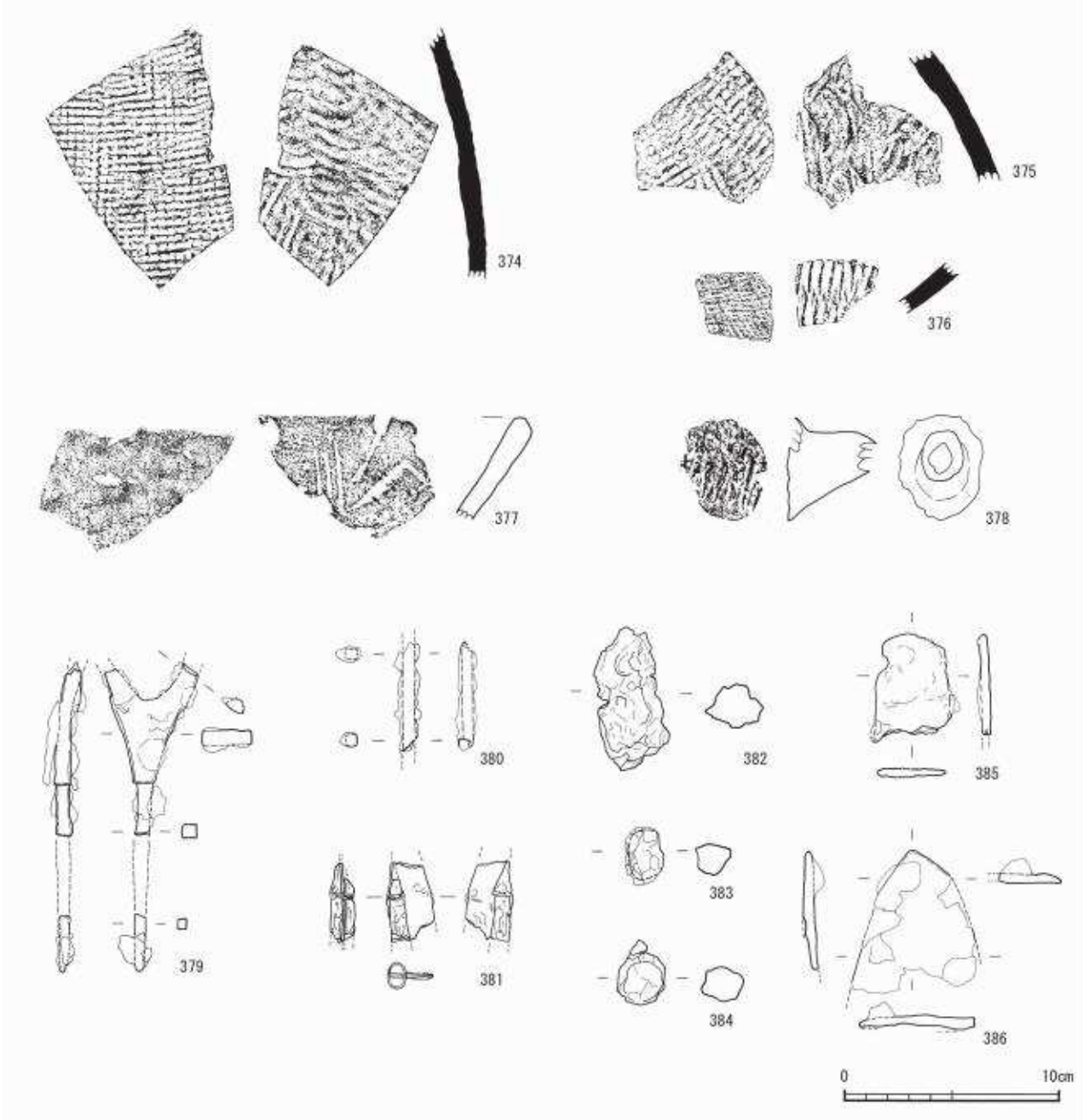
２点出土した。377 は擂鉢の口縁部で，まっすぐ開きながら伸びる器形をし，掻き目は幅が広く，下から上へ掻き上げている。口縁端部は厚みをもち，丸みを帯びた作りとなっている。378 は鍋の把手である。外面に剥がれにくくするための刻みが施してあり，指で押さえ付けた痕跡も見られる。

鉄製品（第 77 図：379 ～ 386）

遺物はⅡ層，Ⅲ層，Ⅳ層から出土したが，形状だけでは時期について判別できなかったためここに掲載した。379 は雁又鏃である。残存長 8.1cm，刃部の最大厚 1.4cm を測る。側面から見ると刃部が上方へ反り上がっていることが確認できる。380 は鏃の柄の可能性がある。381 は無茎鏃の刃部と思われる。木材で刃部を挟んで縛っている痕跡が見られる。382 は鉄滓で，重さ 47.8g を測り，重量感がある。383・384 は鉄塊系遺物で，表面に亀裂が見られる。385 は器種が不明である。386 は三角形状の鏃で，裏面の一部が剥離している。刃部の形成は明瞭ではなく，大きさから異形鉄器の可能性もある。



第 76 図　遺物出土状況図



第77図　古代・中世の土器　鉄製品

表2　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器観察表①

挿図番号	掲載番号	器種	部位	調整		色調		胎土				煤付着	出土区	層	備考
				外	内	外	内	長	石	角	その他				
11	4	刻目突帯文	胴部	ナデ	ナデ	黒褐	褐	○	○	○		－	GH-13	－	内面に圧痕、1号住内
	5	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ナデ	明褐	にぶい黄橙	○	○	○		○	G-14	－	内外面に圧痕、2号住内
	6	刻目突帯文	胴部	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙		○	○		－	G-14	－	
	7	浅鉢	口縁部	ナデ	ナデ	浅黄	明黄褐		○	○		○	G-13	－	赤色顔料
12	8	深鉢	胴部	条痕	ナデ	黒褐	黒褐	○	○	○	砂礫	－	H-13･14	－	
15	9	深鉢	口縁部	条痕	ナデ	黒褐	暗灰黄	○	○	○		○	G-22	Ⅳ	
	10	深鉢	口縁部	条痕	条痕	明褐	明黄褐	○		○		－	G-13	Va	
	11	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	明赤褐	○		○		－	G-22	Ⅳ	
	12	深鉢	胴部	条痕・ナデ	条痕・ナデ	灰黄褐	にぶい褐	○	○	○	小礫	○	G-13	Ⅲ	
	13	深鉢	胴部	条痕	条痕	黒	黒	○	○			○	G-13	Va	
	14	深鉢	胴部	ミガキ後ナデ	ミガキ後ナデ	明赤褐	にぶい黄橙	○	○	○	小礫	○	C-25	Ⅳ	
16	15	深鉢	底部	ナデ	指頭痕・ナデ	赤褐	赤褐	○	○	○	輝石	－	G-21	Ⅳ	
	16	深鉢	底部	ナデ	指頭痕・ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		－	G-19	Ⅳ	
	17	深鉢	底部	ナデ	ナデ	明赤褐	にぶい黄褐	○	○	○		－	G-14	Ⅳ	
	18	深鉢	底部	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	にぶい黄橙	灰	○		○		－	G-22	Ⅳ	
	19	深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	○	○	○	小礫	－	G-21	Ⅳ	
	20	深鉢	底部	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	にぶい赤褐	灰褐	○	○	○		－	G-21	Ⅳ	
	21	深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	○	○	○		－	G-22	Ⅳ	
	22	深鉢	底部	ナデ	ナデ	明赤褐	にぶい黄橙	○	○	○		○	G-21	Ⅳ	
	23	深鉢	底部	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	にぶい黄橙	浅黄	○	○	○		－	G-20	Ⅳ	
	24	深鉢	底部	ミガキ・ナデ	ナデ	黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		－	G-14	Ⅳ	
	25	深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	明赤褐	○	○			－	G-12	Ⅳ	
	26	深鉢	底部	ナデ	ナデ	褐	褐	○	○	○		－	G-22	Ⅳ	
	27	深鉢	底部	ナデ	ナデ	赤褐	赤褐	○	○	○		－	G-11	Ⅳ	
	28	深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	橙	○	○	○	小礫	－	G-20	Ⅳ	
	29	深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい黄褐	○	○	○		－	G-20	Ⅳ	
17	30	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒	黒褐		○	○		－	C-25	Ⅳ	
	31	浅鉢	口縁部	ミガキ後ナデ	ミガキ	明赤褐	ｵﾘｰﾌﾞ黒	○	○			－	G-13	Ⅳ	赤色顔料
	32	浅鉢	口縁部	ミガキ後ナデ	ミガキ	暗褐	黒褐	○	○			－	G-12	Ⅳ	赤色顔料
	33	浅鉢	口縁部	ミガキ後ナデ	ミガキ	にぶい褐	黒褐		○	○		－	G-13	Va	赤色顔料
	34	浅鉢	口縁部	ケズリ後ナデ	ケズリ	暗赤褐	黒褐	○	○			－	C-25	Ⅳ	
	35	浅鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	ｵﾘｰﾌﾞ黒	○	○	○		－	H-14	Ⅳ	
	36	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐	黒褐		○	○		○	H-14	Ⅳ	
	37	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ・ナデ	黒	黒		○			－	F-22	Ⅳ	
	38	浅鉢	口縁部	ミガキ後ナデ	ナデ	黒褐	にぶい黄橙	○	○	○	輝石	－	G-15	Ⅳ	
	39	浅鉢	底部	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄褐	○	○	○	輝石	－	G-22	Ⅳ	
18	40	浅鉢	口縁部	ミガキ・ナデ	ミガキ・ケズリ	にぶい赤褐	にぶい黄褐	○	○	○		○	G-20	－	古墳2号～4号住周辺
	41	浅鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○	○	黒色鉱物	－	H-14	Ⅳ	
	42	浅鉢	胴部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○		－	G-20	Ⅳ	
	43	浅鉢	胴部	ミガキ	ナデ後ミガキ	暗褐	にぶい褐		○	○		○	G-14	Ⅳ	
	44	浅鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	赤褐	にぶい黄橙	○	○	○		－	G-20	Ⅳ	内面に圧痕・赤色顔料
	45	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	明褐	にぶい黄褐	○	○	○	黒色鉱物	○	C-25	Ⅳ	
	46	浅鉢	口縁部	ナデ	ミガキ・ナデ	明褐	橙	○	○	○		－	G-22	Ⅳ	
	47	浅鉢	口縁部	ナデ	ミガキ・ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		－	G-14	Ⅳ	
	48	浅鉢	口縁部	ミガキ後ナデ	ナデ	黒褐	黄褐	○	○	○		－	G-14	Ⅳ	
	49	浅鉢	胴部	ミガキ後ナデ	ミガキ後ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐		○	○	黒色鉱物	－	G-22	Ⅳ	
	50	浅鉢	口縁部～胴部	ミガキ後ナデ	ミガキ後ナデ	黒	ｵﾘｰﾌﾞ褐	○	○	○		－	F-22	Ⅳ	
	51	鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐	にぶい黄褐		○	○		○	G-21	Ⅳ	
	52	鉢	口縁部	ミガキ後ナデ	ミガキ後ナデ	黒暗褐	黒褐		○			－	G-20	Ⅳ	
	53	鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ後ナデ	黒褐	にぶい黄褐	○	○			－	G-20	Ⅳ	
	54	鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	褐	黒褐		○	○		－	G-20	Ⅳ	
	55	鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐	暗赤褐		○	○		－	G-22	Ⅳ	
	56	鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ後ナデ	暗褐	暗赤褐		○	○		－	G-20	Ⅳ	
19	57	半粗半精製	口縁部	条痕	ミガキ	にぶい褐	褐	○	○			－	G-13	Va	
	58	半粗半精製	口縁部	条痕後ナデ	ミガキ	黒褐	黒褐	○				－	C-25	Ⅳ	
	59	半粗半精製	口縁部	条痕	ナデ	黒褐	にぶい黄褐	○	○	○	輝石	○	G-13	Ⅳ	
	60	半粗半精製	胴部～底部	条痕後ナデ	ナデ	黒褐	暗灰黄	○	○			○	G-14	Ⅳ	
	61	半粗半精製	口縁部	組織痕	ケズリ後ナデ	にぶい黄褐	明褐	○	○	○		○	G-12	Ⅳ	
20	62	半粗半精製	底部	組織痕	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		－	H-14	Ⅳ	編布 径8.3cm 直径約8本

表３　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器観察表②

挿図番号	掲載番号	器種	部位	調整		色調		胎土				焼成	出土区	層	備考
				外	内	外	内	長	石	角	その他				
20	63	半粗半精製	底部	組織痕	ナデ	明赤褐	にぶい黄褐	○	○	○		－	G-13	Ⅳ	編布　径糸3mm　撚糸8本
	64	半粗半精製	底部	組織痕	ナデ	明黄褐	黒	○	○			－	H-14	Ⅳ	編布　径糸3mm　撚糸6本
	65	半粗半精製	底部	組織痕	ナデ	にぶい黄橙	暗褐	○	○	○	小礫	○	G-14	Ⅳ	編布　径糸5～12mm　撚糸7本
	66	半粗半精製	底部	網目	ミガキ	にぶい橙	黒	○	○	○		－	H-14	Ⅳ	
	67	半粗半精製	底部	網目	ミガキ	にぶい黄褐	黒	○	○			－	C-25	Ⅳ	
	68	半粗半精製	底部	組織痕	ナデ	明黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		－	H-12	Ⅳ	編布　径糸11mm　撚糸9本
	69	半粗半精製	底部	組織痕	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○		○		－	G-13	Va	編布　径糸3mm　撚糸6本
	70	半粗半精製	底部	組織痕	ナデ	にぶい黄橙	黒	○	○	○		－	G-21	Ⅳ	編布　径糸10mm　撚糸8本
	71	半粗半精製	底部	組織痕	ナデ	にぶい黄褐	黄褐	○		○		－	H-14	Ⅳ	編布　径糸21mm　撚糸8本
	72	半粗半精製	底部	組織痕	ミガキ・ナデ	黄褐	にぶい黄橙		○	○		－	H-14	Ⅳ	編布　径糸20mm　撚糸9本
	73	半粗半精製	底部	組織痕	ナデ	にぶい黄褐	黄褐	○		○		－	G-13	Va	編布　径糸17mm　撚糸8本
	74	壺	肩部	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○	輝石	－	G-20	Ⅳ	
	75	壺	肩部	ナデ	－	灰	明黄褐	○			輝石	－	G-21	Ⅳ	内面剥離
	76	壺	肩部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	○	○	○		－	G-20	－	古墳2号～4号住周辺
21	77	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ケズリ後ナデ	橙	明赤褐	○	○	○	黒色鉱物	○	G-22	Ⅳ	
	78	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ナデ	褐	褐	○	○			○	G-12	Ⅳ	
	79	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ミガキ・ナデ	にぶい褐	にぶい褐		○	○		○	H-13	Ⅳ	
	80	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○		－	G-14	Ⅳ	
	81	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ケズリ後ナデ	赤褐	赤褐	○	○	○	軽石	○	G-12	Ⅳ	
	82	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○	○		－	G-20	Ⅳ	
	83	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐	黒	○				○	G-14	Ⅳ	
22	84	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ミガキ	黒褐	明褐	○	○	○		○	G-14	Ⅳ	未貫通の穿孔有り
	85	刻目突帯文	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい褐	にぶい黄橙	○		○		○	G-22	Ⅳ	
	86	刻目突帯文	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい褐	にぶい褐	○	○			○	G-22	Ⅳ	
	87	刻目突帯文	口縁部	ミガキ	ミガキ・ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐		○			－	G-20	Ⅳ	
	88	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐		○	○		○	G-20	Ⅳ	
	89	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ナデ	明褐	黄褐	○		○		○	G-14	Ⅳ	
	90	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙			○		－	G-14	Ⅳ	
	91	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		○	G-19	Ⅳ	
	92	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ナデ	明赤褐	にぶい黄褐	○		○	軽石	－	G-20	Ⅳ	
	93	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ケズリ	褐	褐	○	○	○		○	G-12	Ⅳ	
	94	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	○	○	○		○	G-20	Ⅳ	
	95	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ケズリ後ナデ	にぶい黄褐	明褐	○	○	○		－	G-19	Ⅳ	
23	96	刻目突帯文	口縁部～底部	ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ	赤褐	赤褐	○	○		軽石	○	G-13	Ⅳ	
	97	刻目突帯文	口縁部	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	にぶい褐	灰黄褐	○	○			○	G-22	Ⅳ	
	98	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ケズリ・ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○	○	軽石	－	G-12	Ⅳ	
	99	刻目突帯文	口縁部	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	暗褐	暗褐	○		○		○	G-22	Ⅳ	
	100	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ケズリ後ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	○	○	○		－	G-20	Ⅳ	
	101	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		－	G-20	Ⅳ	
	102	刻目突帯文	口縁部	条痕後ナデ	ケズリ・ナデ	黒	にぶい褐	○	○	○	小礫	○	H-14	Ⅳ	
	103	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ケズリ後ナデ	にぶい褐	褐		○	○		○	G-14	Ⅳ	
	104	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ケズリ後ナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	○	○			○	H-14	Ⅳ	未貫通の穿孔有り
	105	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい褐	明赤褐	○	○		輝石	－	G-21	Ⅳ	
	106	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐	にぶい黄褐	○		○	黒色鉱物	－	G-20	Ⅳ	
	107	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ナデ	明黄褐	明黄褐	○		○		－	G-20	Ⅳ	
	108	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		－	G-21	Ⅳ	
	109	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○	○		－	G-14	Ⅳ	
	110	刻目突帯文	口縁部	ミガキ・ナデ	ナデ	黒褐	褐	○	○	○		○	G-22	Ⅳ	
24	111	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ケズリ後ナデ	灰オリーブ	にぶい黄	○		○		－	G-21	Ⅰ	
	112	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ミガキ後ナデ	褐灰	にぶい黄橙	○		○		○	H-14	Ⅳ	
	113	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい褐	○		○		○	G-22	Ⅳ	
	114	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい赤褐		○	○		－	G-22	Ⅲ	
	115	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	○	○	○	軽石	○	G-20	Ⅳ	
	116	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄	明黄褐	○	○			－	H-14	Ⅳ	
	117	刻目突帯文	口縁部	ケズリ・ナデ	ケズリ後ナデ	橙	にぶい橙	○	○	○		○	G-14	Ⅳ	
	118	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ミガキ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄	○			小礫	○	G-21	Ⅳ	
	119	刻目突帯文	口縁部	ナデ	ミガキ	褐	にぶい黄褐	○	○	○		○	G-14	Ⅳ	
	120	刻目突帯文	口縁部～胴部	ミガキ後ナデ	ミガキ後ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○		○	G-14	Ⅳ	
25	121	刻目突帯文	胴部	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	橙	にぶい橙	○	○	○	輝石	○	G-22	Ⅳ	

表４　縄文時代晩期～弥生時代前期の土器観察表③

挿図番号	掲載番号	器種	部位	調整		色調		胎土				接合	出土区	層	備考
				外	内	外	内	長	石	角	その他				
25	122	刻目突帯文	胴部	ナデ	ケズリ後ナデ	褐	褐	○	○	○	軽石	○	G-12	Ⅳ	
	123	刻目突帯文	胴部	ミガキ後ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐		○	○	小礫	－	G-20	Ⅳ	
	124	刻目突帯文	胴部	ケズリ・ミガキ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		○	G-21	Ⅳ	
	125	刻目突帯文	胴部	ナデ・ミガキ	ケズリ後ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○			○	G-22	Ⅳ	
	126	刻目突帯文	胴部	ケズリ後ナデ	ケズリ後ナデ	褐	にぶい褐		○	○		－	G-20	Ⅳ	
	127	刻目突帯文	胴部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○			－	G-20	Ⅳ	
	128	刻目突帯文	胴部	ケズリ後ナデ	ミガキ・ナデ	暗赤褐	褐	○	○	○		○	G-20	Ⅳ	

表５　弥生時代前期～後期の土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	部位	調整		色調		胎土				接合	出土区	層	備考
				外	内	外	内	長	石	角	その他				
40	202	甕	口縁部	ナデ	指頭痕・ナデ	にぶい褐	橙	○	○	○	軽石	○	G-20	－	古墳2号～4号住周辺
	203	甕	口縁部	ハケメ・ナデ	ミガキ後ナデ	明褐	黄褐	○		○		－	G-20	－	古墳2号～4号住周辺
	204	甕	口縁部	ナデ	指頭痕・ナデ	橙	橙	○	○	○		－	G-20	Ⅳ	
	205	甕	口縁部	ハケメ後ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○	輝石	○	G-21	Ⅳ	
	206	甕	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐	○	○	○		－	G-20	Ⅳ	
	207	甕	口縁部	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○		輝石	－	G-20	Ⅳ	
	208	甕	口縁部	ハケメ後ナデ	ナデ	橙	赤褐	○	○	○		○	G-20	Ⅳ	
	209	甕	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○	○		－	G-20	Ⅳ	
	210	甕	胴部	ハケメ	ハケメ後ナデ	浅黄橙	浅黄橙	○	○	○	輝石・小礫	○	G-20	Ⅳ	
	211	甕	底部	ミガキ	ナデ	にぶい黄褐	褐	○	○		輝石	－	G-22	Ⅳ	
	212	壺	口縁部	ミガキ後ナデ	ミガキ	明赤褐	赤褐	○	○	○		－	G-20	Ⅳ	
	213	壺	口縁部	ナデ	ナデ	橙	明黄褐	○	○	○		－	G-20	－	古墳2号～4号住周辺

表６　古墳時代の土器観察表（土製品を含む）①

挿図番号	掲載番号	器種	部位	調整		色調		胎土				接合	出土区	層	備考
				外	内	外	内	長	石	角	その他				
43	214	甕	口縁部	ナデ	ナデ	橙	橙	○		○		○	G-20	－	2号住内
	215	甕	口縁部～胴部	ハケメ後ナデ	指頭痕・ハケメ後ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙		○	○		○	G-20	－	2号住内
44	216	甕	口縁部～胴部	ハケメ・ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○	○		○	G-20	－	2号住内
	217	甕	口縁部～胴部	ハケメ後ナデ	ナデ	橙	明黄褐		○	○		○	G-20	－	2号住内
	218	甕	口縁部～胴部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	明赤褐	にぶい黄橙・黒褐		○	○		○	G-20	－	2号住内
	219	甕	胴部	ハケメ	ナデ	明赤褐	にぶい橙	○	○	○	黒色鉱物	○	G-20	－	2号住内
47	220	甕	口縁部～脚部	ナデ	ハケメ後ナデ	暗褐	にぶい黄橙	○	○	○	小礫	○	G-20	－	2号住内
	221	甕	口縁部～脚部	ハケメ後ナデ	指頭痕・ナデ	赤褐	にぶい赤褐					○	G-20	－	2号住内
48	222	甕	胴部～底部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	褐	にぶい褐		○	○		－	G-20	－	2号住内
	223	甕	胴部～脚部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	明赤褐	にぶい赤褐	○		○	小礫	○	G-20	－	2号住内
	224	甕	脚部	ケズリ後ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○	軽石・輝石	－	G-20	－	2号住内
	225	甕	脚部	ナデ	ナデ	明赤褐	にぶい黄橙	○	○	○		－	G-20	－	2号住内
	226	甕	胴部～脚部	指頭痕・ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		－	G-20	－	2号住内
49	227	甕	口縁部～胴部	ナデ	ハケメ後ナデ	暗褐	にぶい黄橙	○	○	○		○	G-20	－	3号住内
50	229	甕	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		－	G-20	－	4号住内
	230	甕	底部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○		○	輝石・軽石	－	G-20	－	4号住内
	231	坩	胴部	ハケメ	ナデ	にぶい橙	橙	○	○	○	赤粒	－	G-20	－	4号住内
	232	鉢	底部	指頭痕・ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい黄	にぶい黄	○	○	○		－	G-20	－	4号住内
52	233	甕	口縁部～脚部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい赤褐	赤褐		○	○		○	G-20	－	2号～4号住周辺
	234	甕	口縁部～胴部	ハケメ後ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	○	○	○		○	G-20	－	2号～4号住周辺
	235	甕	口縁部	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○	小礫	－	G-20	－	2号～4号住周辺
	236	甕	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい褐	橙	○	○	○		○	G-20	－	2号～4号住周辺
53	237	甕	口縁部	ナデ	指頭痕・ナデ	褐	褐	○		○		－	G-20	－	2号～4号住周辺
	238	甕	口縁部	ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい橙	橙	○		○	小礫	－	G-20	－	2号～4号住周辺
	239	甕	口縁部～脚部	指頭痕・ハケメ後ナデ	指頭痕・ハケメ後ナデ	橙	橙	○	○	○		○	G-20	－	2号～4号住周辺
	240	甕	口縁部～胴部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○	○		○	G-20	－	2号～4号住周辺
54	241	甕	口縁部～脚部	指頭痕・ハケメ後ナデ	指頭痕・ハケメ後ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		○	G-20	－	2号～4号住周辺
	242	甕	胴部	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐		○			○	G-20	－	2号～4号住周辺
	243	甕	胴部	ナデ	ナデ	橙	橙		○	○		－	G-20	－	2号～4号住周辺
	244	甕	底部	ナデ	剥離の為不明	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○	輝石・小礫	－	G-20	－	2号～4号住周辺
	245	甕	脚部	ハケメ	ハケメ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○		－	G-20	－	2号～4号住周辺
	246	甕	脚部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		－	G-20	－	2号～4号住周辺

表7　古墳時代の土器観察表（土製品を含む）②

挿図番号	掲載番号	器種	部位	調整		色調		胎土				復元率	出土区	層	備考
				外	内	外	内	長	石	角	その他				
54	247	甕	脚部	ナデ	ナデ	黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		－	G-20	－	2号～4号住周辺
	248	甕	胴部～脚部	ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		○	G-20	－	2号～4号住周辺
55	249	壺	底部	指頭痕・ナデ	指頭痕・ナデ	明褐	黄褐	○	○	○		－	G-20	－	2号～4号住周辺
	250	壺	胴部～底部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい黄褐	橙	○	○	○	黒色鉱物	－	G-20	－	2号～4号住周辺
	251	高坏	脚部	ミガキ後ナデ	ナデ	にぶい黄橙	明褐	○	○	○		－	G-20	－	2号～4号住周辺
	252	高坏	脚部	ミガキ	ナデ	赤褐	にぶい黄褐		○	○		－	G-20	－	2号～4号住周辺
	253	高坏	脚部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	明褐	明黄褐		○	○		－	G-20	－	2号～4号住周辺
	254	坩	口縁部～底部	ナデ	指頭痕・ナデ	にぶい黄橙	橙	○	○	○		－	G-20	－	2号～4号住周辺
	255	坩	胴部～底部	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		－	G-20	－	2号～4号住周辺
	256	ミニチュア土器	口縁部～底部	指頭痕・ナデ	指頭痕・ナデ	にぶい褐	黒褐		○			－	G-20	－	2号～4号住周辺
59	259	甕	口縁部～胴部	ハケメ後ナデ	指頭痕・ハケメ後ナデ	明褐	褐	○	○	○		○	G-22	Ⅳ	
	260	甕	口縁部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	黒	明褐	○	○	○		○	G-22	Ⅳ	
	261	甕	口縁部	ナデ	ナデ	褐	にぶい赤褐	○	○	○		－	G-21	Ⅳ	
	262	甕	口縁部	ナデ	指頭痕・ナデ	にぶい褐	明赤褐	○	○	○		○	G-21	Ⅳ	
	263	甕	口縁部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	褐	にぶい赤褐		○	○		○	G-20	Ⅳ	
60	264	甕	口縁部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	明褐	明黄褐	○	○	○		○	G-21	Ⅳ	
	265	甕	口縁部	ハケメ後ナデ	指頭痕・ナデ	黒褐	にぶい黄橙	○	○	○	小礫	○	G-21	Ⅳ	
	266	甕	口縁部	指頭痕・ハケメ	ハケメ	褐	明褐	○	○	○		○	G-21	Ⅳ	
	267	甕	口縁部	ナデ	指頭痕・ハケメ後ナデ	黒褐	にぶい黄橙	○	○	○		○	G-20	Ⅳ	
	268	甕	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい赤褐		○	○		○	G-22	Ⅳ	
	269	甕	口縁部	ナデ	指頭痕・ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○		○	G-22	Ⅳ	
	270	甕	口縁部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	暗褐	にぶい赤褐		○	○		○	G-21	Ⅳ	
	271	甕	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙		○	○		○	C-25	Ⅳ	
	272	甕	口縁部	指頭痕・ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ・ミガキ	褐	黒褐		○	○		○	G-20	Ⅳ	
	273	甕	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙		○	○		○	G-20	Ⅳ	
	274	甕	口縁部	指頭痕・ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい黄橙		○	○		－	H-11	Ⅳ	
	275	甕	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	橙	○	○	○		－	G-20	Ⅳ	
	276	甕	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐		○	○		○	G-21	Ⅳ	
	277	甕	口縁部	ナデ	指頭痕・ナデ	明黄褐	明赤褐		○	○		○	G-20	Ⅳ	
	278	甕	口縁部	ナデ	ナデ	黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		○	G-22	Ⅳ	
	279	甕	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい褐	橙	○	○	○		○	C-25	Ⅳ	
	280	甕	口縁部	ナデ	ナデ	明褐	明褐		○	○	輝石	－	G-20	Ⅳ	
61	281	甕	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐		○	○	輝石	－	G-21	Ⅳ	
	282	甕	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		○	G-21	Ⅳ	
	283	甕	口縁部～脚部	ナデ	ナデ	橙	明褐	○	○	○		－	G-21	Ⅳ	
	284	甕	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい橙	○	○	○		○	G-21	Ⅳ	
	285	甕	口縁部	ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい黄褐		○	○	輝石	－	G-21	Ⅳ	
	286	甕	口縁部	ナデ	ナデ	明褐	明黄褐	○	○	○		－	G-21	Ⅳ	
	287	甕	口縁部	ハケメ後ナデ	指頭痕・ナデ	明褐	明赤褐	○	○	○		○	G-19	Ⅳ	
	288	甕	口縁部	ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙		○	○		○	G-22	Ⅳ	
62	289	甕	口縁部～脚部	指頭痕・ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	褐	橙	○	○	○	軽石	○	G-21	Ⅳ	
63	290	甕	胴部	ナデ	ケズリ後ナデ	にぶい黄褐	明褐	○	○	○		○	G-21	Ⅳ	
	291	甕	胴部	ハケメ後ナデ	ハケメ	灰褐	にぶい褐	○	○	○	砂礫	○	G-21	Ⅳ	
	292	甕	胴部	ナデ	ナデ	明褐	にぶい褐	○	○			－	C-25	Ⅳ	
	293	甕	胴部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい褐	明黄褐	○	○	○		－	H-12	Ⅳ	
	294	甕	胴部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○		○		○	C-25	Ⅳ	
	295	甕	胴部	ナデ	ナデ	にぶい褐	橙	○	○	○		○	H-12	Ⅳ	
	296	甕	胴部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	○	○	○	輝石	○	H-12	Ⅳ	
	297	甕	胴部	ナデ	指頭痕・ナデ	にぶい黄褐	明褐	○	○	○		－	H-12	Ⅳ	
	298	甕	胴部	ナデ	ナデ	褐	明黄褐		○	○	軽石	○	C-25	Ⅳ	
	299	甕	胴部	ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい黄褐	明褐	○	○	○		○	G-12	Ⅳ	
	300	甕	胴部	ハケメ後ナデ	ナデ	褐	明褐	○	○	○		○	G-21	Ⅳ	
	301	甕	胴部	ミガキ・ナデ	ナデ	褐	明褐		○	○	小礫	○	C-25	Ⅳ	
	302	甕	胴部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○	○		○	G-20	Ⅳ	
	303	甕	胴部	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい赤褐	○	○	○	黒色鉱物	○	G-21	Ⅳ	
64	304	甕	脚部	指頭痕・ハケメ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○		－	G-20	Ⅳ	
	305	甕	脚部	ハケメ後ナデ	指頭痕・ハケメ後ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		－	H-12	Ⅳ	
	306	甕	脚部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○	輝石	－	G-21	Ⅳ	
	307	甕	脚部	指頭痕・ナデ	指頭痕・ナデ	明褐	明赤褐	○	○	○		－	G-21	Ⅳ	

表8　古墳時代の土器観察表（土製品を含む）③

挿図番号	掲載番号	器種	部位	調整		色調		胎土				焼付痕	出土区	層	備考
				外	内	外	内	長	石	角	その他				
64	308	甕	脚部	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○			－	G-21	Ⅳ	
	309	甕	脚部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	橙	にぶい橙	○	○			－	G-14	Ⅳ	
	310	甕	胴部～脚部	指頭痕・ナデ	指頭痕・ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○	○		－	G-21	Ⅳ	
	311	甕	脚部	ナデ	ナデ	浅黄	暗オリーブ褐	○	○	○		○	H-11	Ⅳ	
	312	甕	脚部	ナデ	ナデ	褐	にぶい褐	○	○	○	輝石	－	G-20	Ⅳ	
	313	甕	脚部	ハケメ後ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○			－	H-12	Ⅳ	
	314	甕	脚部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	明赤褐	褐灰	○	○			○	G-20	Ⅳ	
	315	甕	脚部	ハケメ	ナデ	にぶい褐	暗褐	○	○	○		－	G-21	Ⅳ	
	316	甕	脚部	ハケメ	指頭痕・ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○		黒色鉱物	－	G-22	Ⅳ	
	317	甕	脚部	ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○				－	G-20	Ⅳ	
	318	甕	底部	ハケメ	ナデ	にぶい褐	灰黄褐	○	○	○		○	G-20・21	Ⅳ	
	319	甕	底部	ハケメ後ナデ	ナデ	にぶい橙	褐	○	○	○		－	G-20	Ⅳ	
	320	甕	脚部	ナデ	ナデ	橙	明赤褐	○	○	○	輝石	－	H-12	Ⅳ	
	321	甕	脚部	指頭痕・ナデ	指頭痕・ナデ	橙	橙	○	○	○		－	H-12	Ⅳ	
	322	甕	脚部	指頭痕・ミガキ後ナデ	指頭痕・ナデ	にぶい黄褐	明褐	○	○	○	輝石	－	G-21	Ⅳ	
66	323	壺	口縁部～胴部	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	橙	○	○	○	小礫	－	G-21	Ⅳ	
67	324	壺	胴部	ミガキ・ナデ	ナデ	褐	明褐	○	○	○	小礫	－	C-25	Ⅳ	
68	325	壺	口縁部～肩部	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	にぶい橙	にぶい橙		○	○		－	G-20	Ⅳ	
	326	壺	口縁部	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	○	○	○		－	G-20	Ⅳ	
	327	壺	口縁部	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙		○	○		－	C-25	Ⅳ	
	328	壺	口縁部～胴部	ナデ後ミガキ	ナデ	橙	明赤褐	○	○	○		－	C-25	Ⅳ	
	329	壺	口縁部	ナデ	ナデ	橙	明黄褐	○	○	○	黒色鉱物	○	G-20	Ⅰ	
	330	壺	胴部	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○			－	G-21	Ⅰ	
	331	壺	頸部	ナデ	指頭痕・ナデ	橙	橙	○	○	○		－	H-12	Ⅳ	
	332	壺	胴部	ハケメ	ハケメ	橙	橙	○	○	○	輝石・礫石	○	C-25	Ⅳ	
	333	壺	胴部	ハケメ後ナデ	ナデ	にぶい褐	黒褐	○	○	○		－	G-21	Ⅳ	
	334	壺	胴部	ナデ	ナデ	褐	暗褐	○	○	○		－	G-20・21	Ⅳ	
	335	壺	底部	指頭痕・ナデ	ナデ	橙	にぶい黄褐	○	○			○	G-15	Ⅳ	
	336	壺	底部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	橙	橙		○	○		－	G-22	Ⅳ	
	337	壺	底部	ハケメ	ナデ	にぶい黄褐	褐	○	○	○		○	H-12	Ⅳ	
	338	壺	底部	ミガキ・ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい褐	にぶい橙	○	○	○	小礫	－	H-12	Ⅳ	
	339	壺	底部	ナデ	指頭痕・ナデ	褐	赤褐		○	○	火山ガラス	○	H-12	Ⅳ	
	340	壺	底部	ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい黄褐	にぶい赤褐		○	○		－	H-12	Ⅳ	
	341	壺	底部	ナデ	ケズリ	明赤褐	にぶい橙	○	○	○	輝石	－	H-12	Ⅳ	
69	342	高坏	脚部	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○	砂礫	－	G-15	Ⅲ	
	343	高坏	脚部	ナデ	ケズリ・ナデ	明褐	にぶい赤褐	○	○	○		○	H-12	Ⅳ	
	344	高坏	脚部	ナデ	指頭痕・ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐		○	○		○	G-21・22	Ⅳ	
	345	高坏	脚部	ナデ	指頭痕・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		○	G-21	Ⅳ	
	346	高坏	脚部	ハケメ	指頭痕・ナデ	にぶい黄褐	橙	○	○	○		－	G-21	Ⅳ	
	347	坩	胴部	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○	○		－	H-12	Ⅳ	赤色顔料
	348	坩	胴部～底部	ミガキ後ナデ	指頭痕・ナデ	明褐	橙	○		○		○	H-12	Ⅳ・1	
	349	坩	胴部	ナデ	指頭痕・ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐		○	○		○	G-21	Ⅳ	
70	350	坩	底部	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	明赤褐		○	○		－	G-12	Ⅲ	
	351	土製紡錘車	－	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄	○	○	○		－	G-20	Ⅳ	
	352	ミニチュア土器	口縁部～底部	ケズリ後ナデ	ナデ	にぶい褐	にぶい褐		○	○		－	C-25	Ⅳ	
	353	ミニチュア土器	完形	指頭痕・ナデ	指頭痕・ナデ	明褐	明赤褐	○	○	○		○	G-21	Ⅳ	
	354	ミニチュア土器	口縁部～底部	指頭痕・ナデ	指頭痕・ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		○	G-21	Ⅳ	
	355	土製品	完形	ナデ	ナデ	褐	褐	○		○		－	G-21	Ⅳ	
	356	円盤状土製加工品	－	ナデ	ナデ	黒褐	にぶい黄橙	○	○	○		○	G-13	Ⅳ	
	357	須恵器	胴部	－	ナデ	灰	灰オリーブ					－	C-25	Ⅳ	櫛目文
	358	須恵器	胴部	格子目タタキ	平行タタキ	黄灰	黄灰					－	G-19	Ⅳ	
74	367	高坏	口縁部	ミガキ後ナデ	ナデ	橙	橙		○	○		－	GH-12	－	1号溝内
	368	壺	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	明赤褐	○	○	○	黒色鉱物	－	GH-12	－	1号溝内

表9　古代・中世の土器観察表①

挿図番号	掲載番号	器種	部位	調整		色調		胎土				焼付痕	出土区	層	備考
				外	内	外	内	長	石	角	その他				
75	369	青磁	底部	－	－	灰黄	灰黄					－	G-13	－	見込に自然釉・3号溝内
	370	須恵器	底部	－	－	灰オリーブ	灰オリーブ					－	G-13	－	4号溝内

表 10　古代・中世の土器観察表②

挿図番号	掲載番号	器種	部位	調整		色調		胎土				残存率	出土区	層	備考
				外	内	外	内	長	石	角	その他				
77	374	須恵器	胴部	格子目タタキ	同心円タタキ・平行タタキ	にぶい黄	褐					−	G-20・21	表土	
	375	須恵器	胴部	格子目タタキ	同心円タタキ	灰	灰					−	C-25	Ⅳ	
	376	須恵器	胴部	格子目タタキ	平行タタキ	灰	灰					−	G-22	Ⅰ	
	377	土師質土器	口縁部	ナデ	ナデ	暗灰黄	灰黄					−	G-13	Ⅳ	
	378	土師質土器	把手	指頭痕・ナデ	−	にぶい橙	灰					−	G-14	Ⅳ	

表 11　縄文時代晩期の石器観察表①

挿図番号	掲載番号	器種	石材	出土区	層	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
						cm	cm	cm	g	
27	129	打製石鏃	黒曜石	G-22	Ⅳ	1.30	1.20	0.30	0.34	
	130	打製石鏃	黒曜石	G-14	Ⅳ	1.70	1.80	0.35	0.71	
	131	打製石鏃	黒曜石	G-22	Ⅰ	1.50	1.20	0.30	0.40	
	132	打製石鏃	黒曜石	G-22	Ⅳ	1.00	1.10	0.25	0.21	
	133	打製石鏃	黒曜石	G-21	Ⅰ	1.30	1.50	0.30	0.39	
	134	打製石鏃	黒曜石	G-19	Ⅳ	1.20	1.70	0.30	0.42	
	135	打製石鏃	黒曜石	H-14	Ⅳ	1.50	1.40	0.40	0.48	
	136	打製石鏃	黒曜石	G-13	Ⅳ	1.60	1.10	0.30	0.47	
	137	打製石鏃	黒色安山岩	G-14	Ⅳ	1.90	1.70	0.40	0.75	
	138	打製石鏃	黒曜石	G-12	−	1.80	1.70	0.30	0.61	
	139	打製石鏃	黒曜石	G-22	Ⅳ	1.90	1.90	0.30	0.70	
	140	打製石鏃	黒曜石	G-15	Ⅳ	2.60	2.30	0.40	1.24	
	141	打製石鏃	黒色安山岩	G-21	Ⅰ	2.70	1.20	0.50	1.65	
	142	打製石鏃	黒色安山岩	G-20	Ⅳ	1.60	2.00	0.40	1.11	
	143	打製石鏃	黒曜石	G-14	Ⅳ	1.50	1.50	0.40	0.64	
	144	打製石鏃	黒曜石	G-13	Ⅴ	1.80	1.50	0.40	0.79	
	145	打製石鏃	黒曜石	G-14	Ⅳ	1.70	1.30	0.50	0.71	
	146	打製石鏃	黒色安山岩	G-14	Ⅳ	2.00	1.40	0.50	0.83	
	147	打製石鏃	黒曜石	G-14	Ⅳ	2.10	1.60	0.60	1.49	
	148	打製石鏃	黒曜石	H-14	Ⅳ	2.50	1.80	0.75	2.30	
	149	打製石鏃	黒曜石	H-14	Ⅳ	1.20	1.70	0.40	0.79	
	150	打製石鏃	黒曜石	G-22	Ⅳ	3.70	3.20	0.80	4.12	
	151	磨製石鏃	頁岩	G-19	Ⅳ	2.30	2.40	0.20	1.17	
28	152	掻器	黒曜石	G-14	Ⅳ	2.20	2.60	0.90	5.40	
	153	掻器	黒曜石	G-14	Ⅳ	2.80	1.60	1.10	3.14	
	154	削器	黒曜石	H-14	Ⅳ	2.00	1.60	0.30	0.76	
	155	削器	黒曜石	C-25	Ⅳ	2.40	2.70	0.80	4.80	
	156	削器	玉髄	G-12	Ⅳ	2.50	3.80	1.30	9.17	
	157	削器	頁岩	G-14	Ⅳ	4.90	9.60	1.30	61.50	
	158	削器	頁岩	G-14	Ⅳ	14.00	7.20	1.10	115.50	
29	159	楔形石器	石英	G-20	Ⅳ	3.40	1.90	1.80	10.16	
	160	楔形石器	黒曜石	G-14	Ⅳ	2.80	1.40	1.10	4.74	
	161	楔形石器	黒曜石	G-21	Ⅳ	2.20	1.90	1.20	4.33	
	162	二次加工剥片	黒曜石	F-22	Ⅳ	3.90	1.40	0.40	2.43	
	163	石核	黒曜石	G-22	Ⅳ	2.20	2.80	2.40	15.69	
	164	石核	黒曜石	G-13	Ⅳ	2.30	3.10	1.70	6.88	
30	165	石核	黒曜石	G-22	Ⅳ	1.80	3.70	2.20	14.41	
	166	石核	黒曜石	G-22	Ⅲ	3.20	3.40	1.50	11.65	
	167	石核	玉髄	H-12	Ⅳ	8.60	13.20	4.60	666.50	
31	168	磨製石斧	頁岩	G-22	Ⅳ	12.30	6.20	2.50	222.50	
	169	打製石斧	頁岩	G-20	Ⅳ	9.30	7.10	1.80	97.50	
	170	打製石斧	頁岩	H-14	Ⅳ	12.20	7.80	0.90	105.00	
	171	打製石斧	頁岩	H-14	Ⅳ	11.10	6.00	1.40	111.00	
	172	打製石斧	頁岩	G-12	Ⅳ	11.10	5.60	1.40	96.70	
	173	打製石斧	頁岩	G-22	Ⅳ	11.60	6.20	1.60	156.00	
32	174	打製石斧	頁岩	G-21	Ⅳ	13.10	6.20	1.80	154.50	
	175	打製石斧	頁岩	H-14	Ⅳ	11.60	5.40	2.10	137.50	
	176	打製石斧	頁岩	G-22	Ⅳ	11.70	5.50	1.20	90.00	
	177	打製石斧	頁岩	H-12	Ⅳ	11.70	6.70	2.00	157.00	
	178	打製石斧	頁岩	G-20	Ⅳ	8.10	4.50	1.50	74.00	

表 12　縄文時代晩期の石器観察表②

挿図番号	掲載番号	器　種	石　材	出土区	層	最大長	最大幅	最大厚	重　量	備　考
						cm	cm	cm	g	
32	179	打製石斧	頁岩	G-22	Ⅳ	10.10	6.40	1.80	147.50	
33	180	打製石斧	頁岩	G-15	Ⅳ	10.70	7.20	1.80	149.00	
	181	打製石斧	頁岩	H-12	Ⅳ	7.30	5.50	2.20	86.00	
	182	打製石斧	頁岩	G-20	Ⅳ	11.30	6.00	2.10	196.00	
	183	打製石斧	頁岩	G-22	Ⅳ	8.60	6.10	1.70	99.50	
	184	打製石斧	頁岩	G-21	Ⅳ	4.50	11.70	0.90	45.50	
34	185	打製石斧	頁岩	G-22	Ⅳ	8.90	7.70	1.60	133.00	
	186	打製石斧	頁岩	H-14	Ⅳ	5.90	5.90	1.90	71.00	
	187	打製石斧	頁岩	H-12	Ⅳ	10.30	9.30	2.10	298.50	
	188	石鏃未製品	頁岩	G-15	Ⅳ	11.30	2.40	1.60	55.50	
	189	棒状敲石	頁岩	G-12	Ⅳ	13.80	4.40	4.20	330.00	
35	190	磨石・敲石	砂岩	G-20	Ⅳ	8.30	12.30	5.10	739.00	
	191	敲石	安山岩	G-14	Ⅴ	9.00	7.80	4.60	423.00	
	192	敲石	砂岩	G-11	Ⅳ	8.80	5.40	4.50	290.00	
	193	磨石・敲石	安山岩	G-22	Ⅳ	13.60	8.80	5.40	1240.00	
36	194	凹石	安山岩	G-20	Ⅳ	15.80	8.00	5.00	992.00	
	195	凹石	安山岩	G-12	Ⅳ	9.10	6.40	5.30	410.00	
	196	凹石	安山岩	G-20	－	16.50	13.40	4.90	1780.00	2号住内（古墳）
37	197	凹石	安山岩	G-20	Ⅳ	16.90	16.50	10.50	4800.00	
	198	石皿	安山岩	G-21	Ⅳ	21.90	24.20	19.30	13700.00	
38	199	石皿	安山岩	G-12	Ⅳ	18.00	11.40	6.60	2420.00	
	200	石皿	安山岩	G-20	－	9.20	14.30	7.00	1260.00	2号住内（古墳）
	201	石皿	安山岩	H-12	Ⅳ	29.00	20.30	8.10	5100.00	

表 13　古墳時代，古代・中世の石器観察表

挿図番号	掲載番号	器　種	石　材	出土区	層	最大長	最大幅	最大厚	重　量	備　考
						cm	cm	cm	g	
49	228	軽石製品	軽石	G-20	－	19.00	6.30	3.50	150.00	3号住内
55	257	軽石製品	軽石	G-20	－	7.00	5.20	4.00	49.00	2号～4号住周辺
	258	軽石製品	軽石	G-20	－	7.30	8.90	2.90	50.00	2号～4号住周辺
72	359	軽石製品	軽石	G-13	Ⅳ	10.00	6.40	3.70	72.00	
	360	軽石製品	軽石	G-20	Ⅳ	9.20	6.10	5.00	92.00	
	361	軽石製品	軽石	G-21	Ⅳ	7.00	5.60	1.80	31.00	
	362	軽石製品	軽石	G-12	Ⅳ	6.40	8.20	1.50	28.00	
	363	軽石製品	軽石	G-12	Ⅳ	8.40	4.30	2.00	25.00	
	364	軽石製品	軽石	G-21	Ⅳ	9.80	3.30	2.40	24.00	
	365	軽石製品	軽石	G-12	Ⅳ	9.80	3.80	2.10	31.00	
	366	軽石製品	軽石	H-14	Ⅳ	16.00	8.20	5.20	212.00	
75	371	軽石製品	軽石	G-13	－	9.00	4.65	2.20	30.00	

表 14　古代・中世の鉄製品観察表

挿図番号	掲載番号	器　種	部　位	出土区	層	残存長	最大幅	最大厚	重　量	備　考
						cm	cm	cm	g	
75	372	鉄滓	－	G-14	－	2.3	2.3	1.2	5.36	4号溝内
	373	鉄刀	ほぼ完形	G-14	－	22.2	3.7	1.0	55.47	4号溝内
77	379	雁又鏃	刃部・茎	G-15	Ⅳ	8.1	3.4	1.4	29.30	
	380	鉄鏃	茎？	G-13	Ⅱ	5.0	1.2	1.0	5.25	
	381	無茎鏃	刃部	G-15	Ⅲ	3.7	2.3	1.1	6.06	
	382	鉄滓	－	G-13	Ⅲ	6.6	3.2	2.0	47.80	
	383	鉄塊系遺物	－	G-13	Ⅲ	2.7	1.8	1.5	14.17	
	384	鉄塊系遺物	－	G-13	Ⅲ	5.1	4.2	0.9	15.74	
	385	不明	－	G-13	Ⅲ	3.0	2.1	1.6	14.18	
	386	異形鉄器？	刃部	G-13	Ⅲ	6.8	5.4	0.4	22.65	

宇都上遺跡

第５章　宇都上遺跡の調査の方法と成果

第１節　発掘調査の方法と成果

本遺跡の調査範囲はＡＢ－26～29区である。調査は，平成21・22年度に実施した（第１図）。

調査は，基本的には重機によって表土を除去し，遺物包含層（Ⅲ層・Ⅳ層）及びその可能性がある層については人力による掘り下げを行った。検出遺構や出土遺物は実測及び位置の記録，写真撮影を行った。

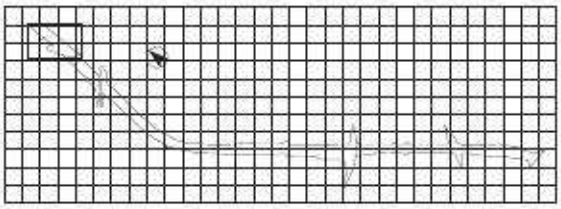
調査の結果，遺構はⅢ層上面で中世以降の道路状遺構１条が，Ⅳ層上面で古墳時代の溝状遺構１条が検出された。また，遺物は主に縄文時代及び古墳時代のものが出土した。

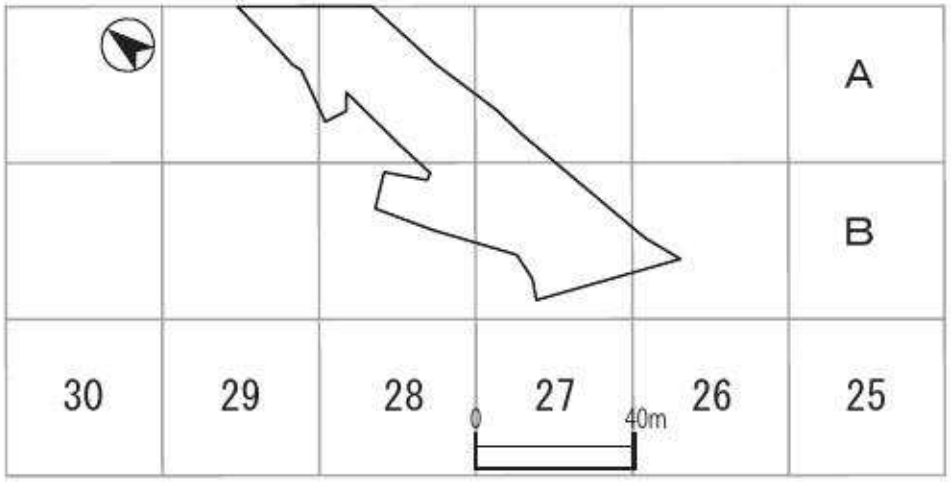
第２節　遺跡の層序

基本的な層序は第３章第２節と同様である。ここでは本遺跡の土層図を第２・３図に示した。

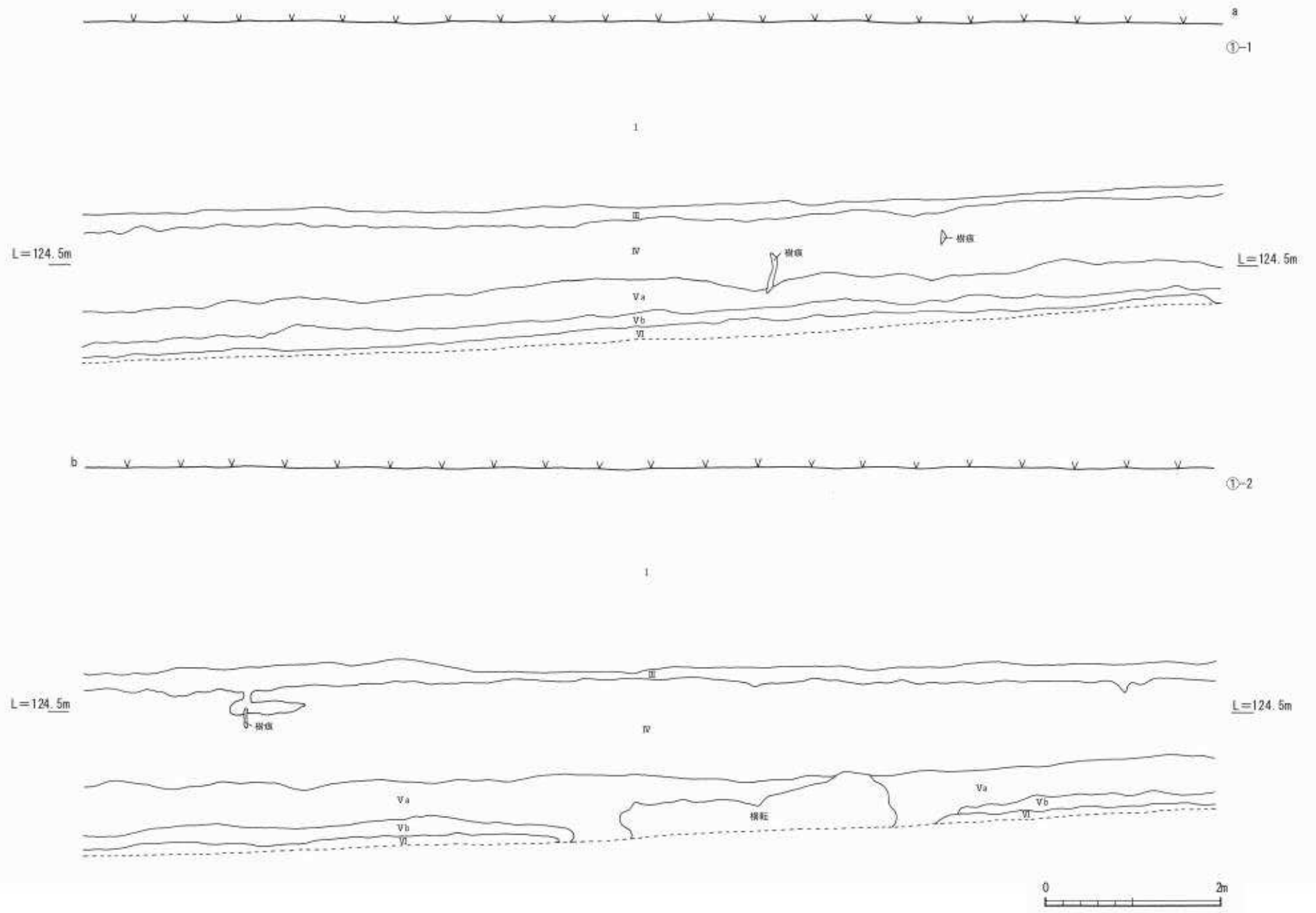
調査区の西側は削平を受けており，縄文時代晩期から古墳時代の包含層であるⅣ層は残存していなかった。一方，東側は削平を受けている箇所が少なく，Ⅲ層・Ⅳ層が確認された。また，火山噴出物の堆積層である鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰層（Vb層）及び桜島起源の薩摩火山灰層（Ⅷ層）も見られたが，薩摩火山灰層は場所によって堆積状況が一様ではなかった。

遺跡遠景（西から東方向を望む）

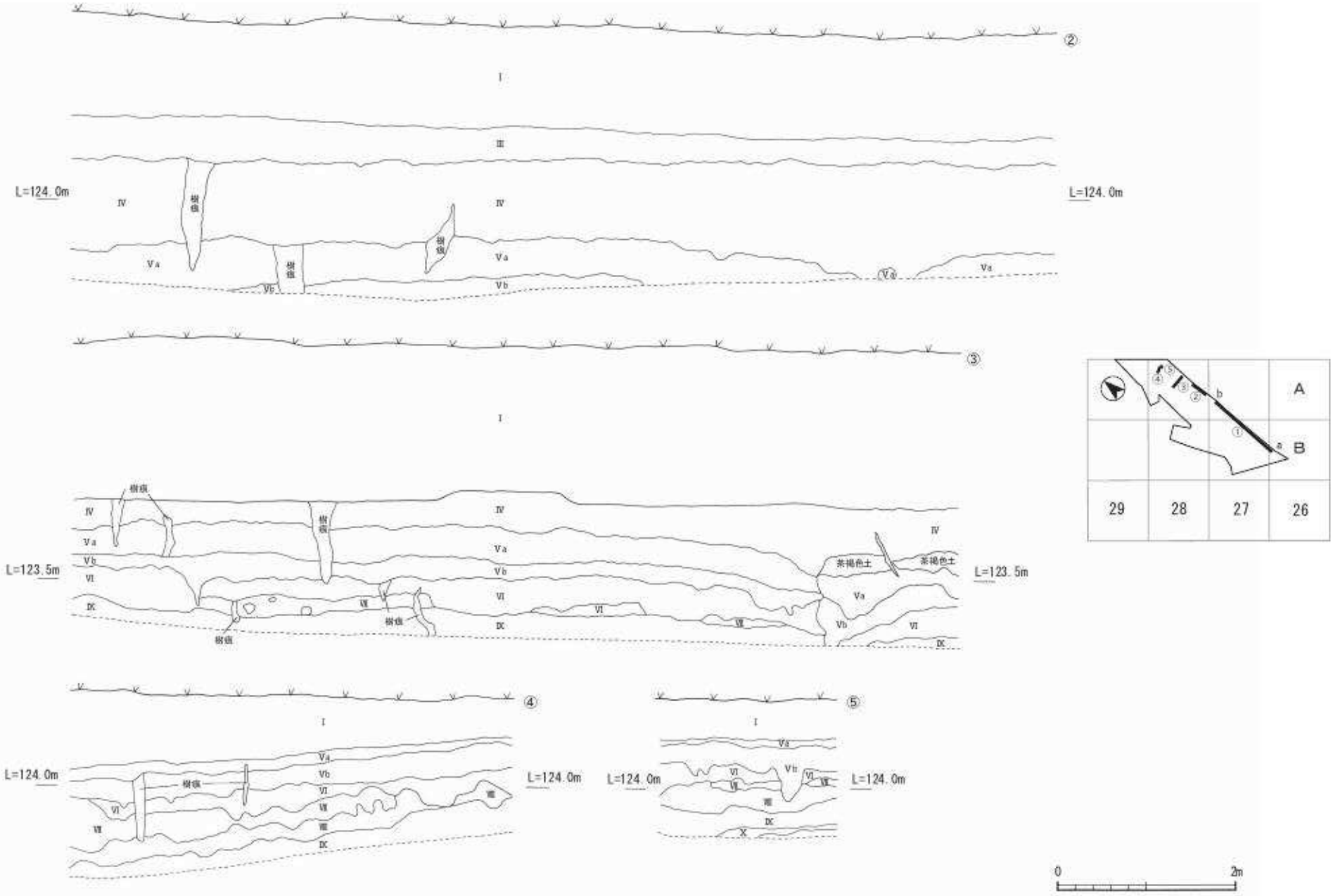




第１図　調査範囲図


a
①-1
L＝124.5m
Ⅲ
Ⅳ
樹痕
樹痕
Va
Vb
Ⅵ
L＝124.5m
b
①-2
L＝124.5m
Ⅲ
樹痕
Ⅳ
Va
Vb
Ⅵ
横転
Va
Vb
Ⅵ
L＝124.5m
0
2m

第２図　土層図①


②
L=124.0m
L=124.0m
③
L=123.5m
L=123.5m
茶褐色土
茶褐色土
④
L=124.0m
L=124.0m
⑤
L=124.0m
L=124.0m
A
B
29
28
27
26
0
2m

第３図　土層図②

第３節　縄文時代の調査

縄文時代該当層はⅣ層・Ⅵ層であり，Ⅳ層が縄文時代晩期，Ⅵ層が縄文時代早期の層である。遺構は検出されなかったが，早期末・前期・後期・晩期の土器及び土製品がⅣ層から出土した。時期の異なる土器が同一層から出土しており，特に，早期末の土器については流れ込みの可能性が考えられる。石器はⅣ層を中心に，打製石鏃・打製石斧・棒状敲石等が出土した。

遺物

(1)　土器の分類

縄文時代の土器は早期末・前期・後期・晩期の土器が出土している。出土量は各時期とも１，２点もしくは少量であった。

以下は，本遺跡で出土した縄文土器の分類である。

Ⅰ類土器

器形:口縁部がやや外側に開く深鉢形土器と考えられる。底部の形状は不明である。

文様：口唇部には刻みが施されている。

器面調整：貝殻条痕調整が行われている。

土器型式：右京西式土器（早期末貝殻条痕文土器）

Ⅱ類土器

器形：破片資料のため全体の器形は不明であるが，胴部から緩やかにすぼまる器形と考えられる。

文様：細かい刺突連点文が施されている。

器面調整：内外面ともにナデ調整が行われている。

土器型式：深浦式土器

Ⅲ類土器

器形：口縁部を断面三角形状に肥厚させて，「く」の字状に屈曲させた形態である。底部形態は不明である。

文様：貝殻腹縁による刺突文が施されている。

器面調整：貝殻条痕調整が行われている。

土器型式：市来式土器

Ⅳ類土器

器形：口縁部が外反する深鉢形土器で，底部は若干上げ底気味の平底である。口縁部形態は波状口縁が見られる。

文様：貝殻腹縁による刺突文が口縁部を中心に連続して施されており，他にも棒状工具を使用した刺突文も見られる。

器面調整：貝殻条痕調整やナデ調整が行われている。

土器形式：丸尾式土器

Ⅴ類土器

器形：破片資料のため定かではないが，丸みのある胴部をもつ深鉢形土器である。底部形態は不明である。

文様：磨消縄文が胴部上半に施されている。

器面調整：外面はナデ調整，内面はナデ調整や貝殻条痕調整が行われている。

土器型式：西平式土器

Ⅵ類土器

Ⅵ類では，型式判別が困難な後期土器及び土製品を一括した。

Ⅶａ類土器

器形：口縁部がやや外反する深鉢形土器である。底部は張り出しをもち安定している。

器面調整：貝殻条痕調整やナデ・ケズリ調整が行われている。

土器型式：黒川式土器（粗製深鉢）

Ⅶｂ類土器

器形：ボール状に立ち上がるもの，胴部上半で屈曲して内傾しながら口縁部に至るものが見られる。底部形態は不明である。

器面調整：ミガキもしくはナデ調整が行われている。

土器型式：黒川式土器（精製浅鉢）

(2)　土器

早期（第６図：１）

１はⅠ類土器であり，１点のみの出土である。口唇部には棒状工具による刻みが施されている。外面は肋が幅広い貝殻で器面調整を行い，条痕が顕著に残る。調整の方向は口縁部が横位に，胴部は縦位と斜位方向である。内面はヘラ状工具を使った条痕調整後にナデ調整が行われている。

前期（第６図：２）

２はⅡ類土器であり，１点のみの出土である。胴部片で，外面には刺突連点文が横方向に施されている。器面調整は内外面共にナデ調整が行われている。

後期（第６図：３～19）

３・４はⅢ類土器である。３は波状口縁を呈する土器で，口縁部に貝殻腹縁による刺突文が連続して施されている。器面調整は外面では二枚貝による調整が行われており，内面では粗いナデ調整が行われている。４は口縁部を断面三角形状に肥厚させて，外形ラインを「く」の字状に屈曲させた土器である。断面三角形の屈曲部の上位に貝殻腹縁による刺突文が連続して施されている。内外面の器面調整は貝殻条痕であり，貝殻の肋の幅などから内外共に同じ貝殻を使用して器面調整を行ったことがわかる。

５～13はⅣ類土器である。５～８は口縁部片で，貝殻腹縁による刺突文が連続して施されている土器である。５は波状口縁を呈する土器で，内外面共に横位の貝殻条痕調整が行われている。６・７では刺突文の下に沈線が見られ，口唇部は若干肥厚している。器面調整は外面ではナデ調整が，内面では貝殻条痕後にナデ調整が行われている。８は棒状工具で刺突文を連続して施した

後，さらにその刺突文の間に貝殻腹縁を使った貝殻刺突文を施した土器である。9～11は口唇部もしくは口縁上半が欠損する口縁部で，貝殻腹縁による刺突文が連続して施されている。12・13は深鉢形土器の底部片である。12は底径6.8cmを測り，上げ底気味である。器面調整は内外面共にナデ調整で，内面は粗い調整である。13は底径8.5cmで12と同様上げ底気味である。器面調整は内外面共にナデ調整が行われている。

14・15はⅤ類土器で，ともに胴部片である。14は磨消縄文が施された土器で，口縁部に近い部位である。内面はナデ調整が行われている。15は無文の土器で，底部に近い部位である。内面は貝殻条痕調整が行われている。

16～19はⅥ類である。16では貝殻腹縁による連続した刺突文が施されており，刺突文の下方には棒状工具を用いた連続刺突文が施されている。内面は粗いナデ調整である。17・18は沈線の間に短い直線文が連続して施されている土器であり，器面調整は内外面共にナデ調整が行われている。19は通称メンコと呼ばれる円盤状土製加工品である。土器の底部を利用しており，周縁部を丸く打ち欠いた痕跡が見られる。上げ底気味の底部を使用しており，胎土には金雲母も大量に含まれていることから，後期の土器片を利用して作られたと考えられる。

晩期（第6図：20～27）

20～24はⅦａ類土器で粗製の深鉢形土器である。20では口縁部がわずかに肥厚している。器面調整は外面では左方向にハケメが行われており，内面では横方向または斜方向にハケメが行われている。21の口縁部もわずかに肥厚している。器面調整は外面では貝殻条痕調整が行われ，内面ではミガキ後に丁寧なナデ調整が行われている。22・23はともに外面全体に煤が付着している。23はヒレ状突起のついた深鉢形土器であり，突起の先端部分は肥厚している。外面は条痕後ナデ調整が行われているが，ナデが粗いため条痕が残る。内面は丁寧なナデ調整が行われている。24は端部が張り出す安定した底部である。器面調整は外面では工具によるナデ調整が，内面ではミガキが行われている。底径は10.6cmを測る。

25～27はⅦｂ類土器で精製の浅鉢形土器である。25はボール状に立ち上がり，口縁部が直行する土器である。口唇部は平坦に作られており，口径19.2cmを測る。外面調整は口縁部では横方向に，胴部下半では縦方向にミガキが施されている。内面はナデ調整が行われている。26は胴部上半で屈曲し，内傾して口縁部へ至るものである。器面調整は外面ではミガキを行った後ナデ調整が，内面ではミガキが行われている。27は平坦な口唇部を呈する土器で，口縁部内面には抉りが施されている。器面調整は内外面共にナデ調整が行われている。

(3) 石器

出土層はⅢ層・Ⅳ層である。形態からいずれも縄文晩期の石器と推定される。打製石鏃・楔形石器・打製石斧・軽石製品・棒状敲石・磨石・凹石の7器種13点を図化した。

打製石鏃（第7図：28～31）

4点を図化した。いずれも二等辺三角形状を呈している。29は脚部が欠損しており，基部に深い抉りが見られる。31は基部に浅い抉りが見られる。30・31は最大長2cmを越える大型のものである。

楔形石器（第7図：32）

32は折れた打製石斧を再利用したものである。上下の周縁部に剥離が認められる。

打製石斧（第7図：33～35）

3点を図化した。33は有肩石斧の基部である。34・35は刃部である。

軽石製品（第7図：36）

上部の両端に抉りがある。表裏面に磨面が認められることから，土器の器面調整具として利用された可能性がある。

棒状敲石（第8図：37・38）

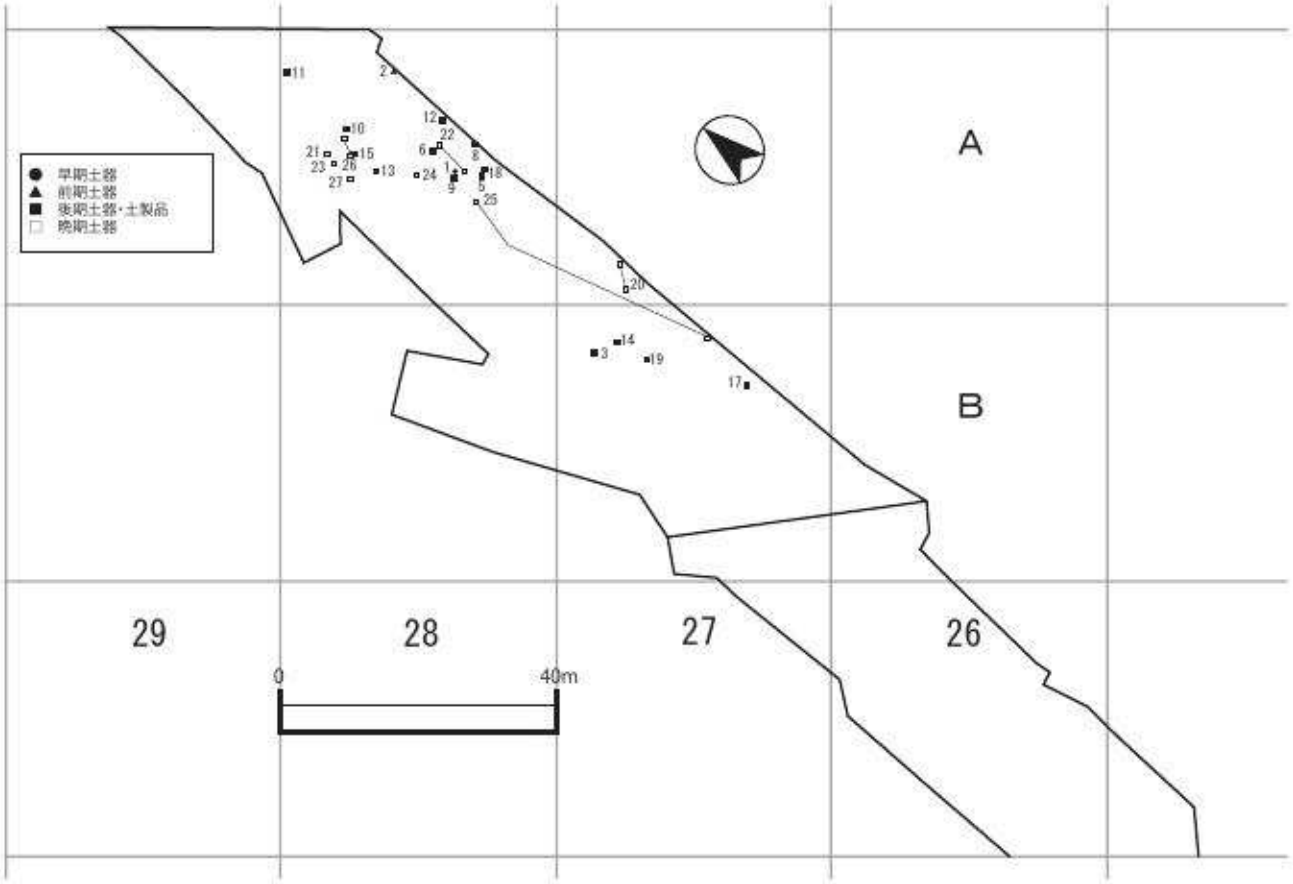
2点を図化した。石材は頁岩である。37は最大長が17cmを超えるもので，上下面の両端部にわずかに敲打痕が見られる。また，裏面には磨面が認められることから，磨石としても利用された可能性がある。38はやや小型のもので，上下面の両端部に敲打痕を有している。また，下面は一部欠損している。

磨石（第8図：39）

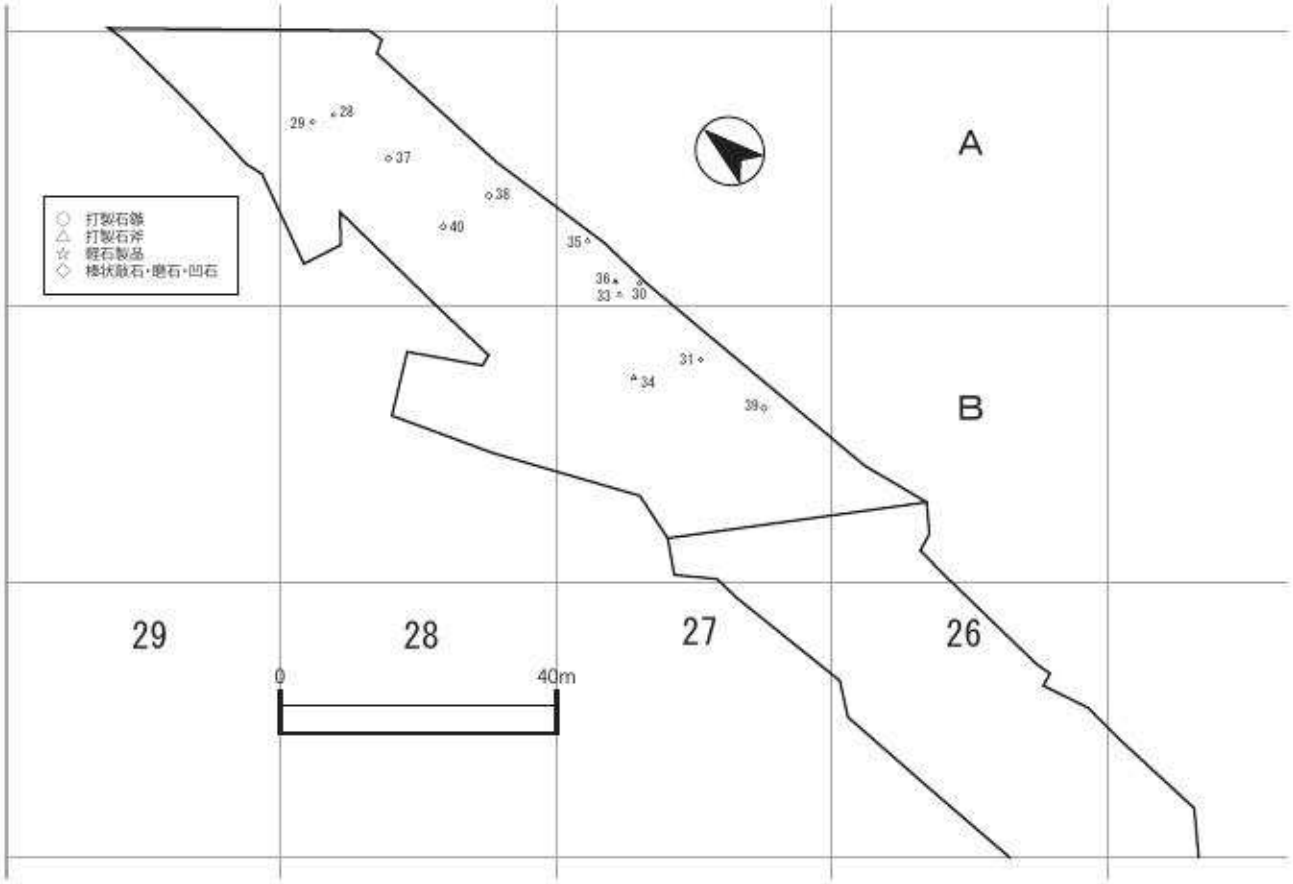
欠損品で，表裏面に使用痕が見られる。石材は安山岩である。

凹石（第8図：40）

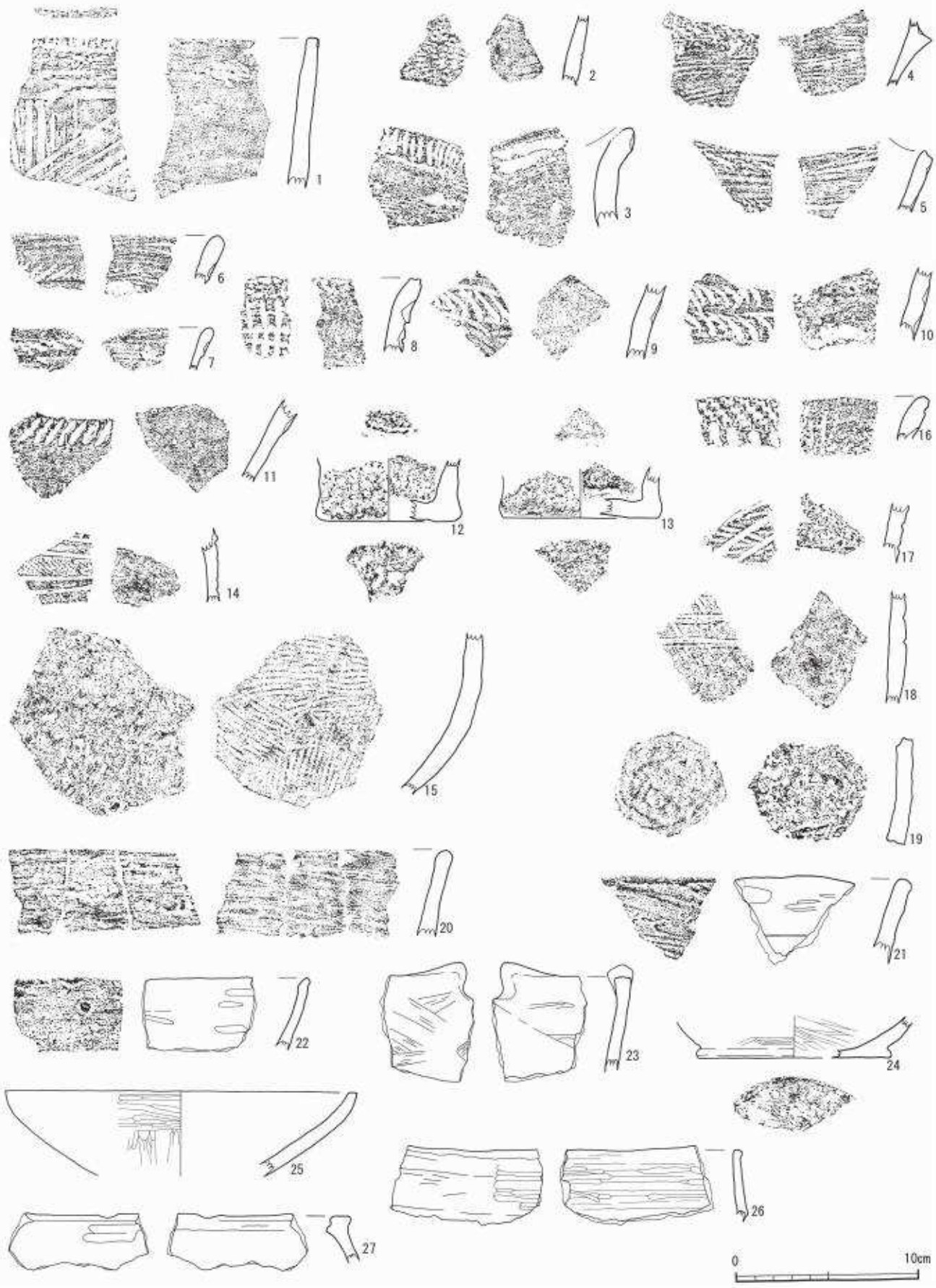
石材は安山岩である。表裏面に敲打による凹みが認められる。また，下面には敲打痕が認められることから，敲石としても利用されたと考えられる。



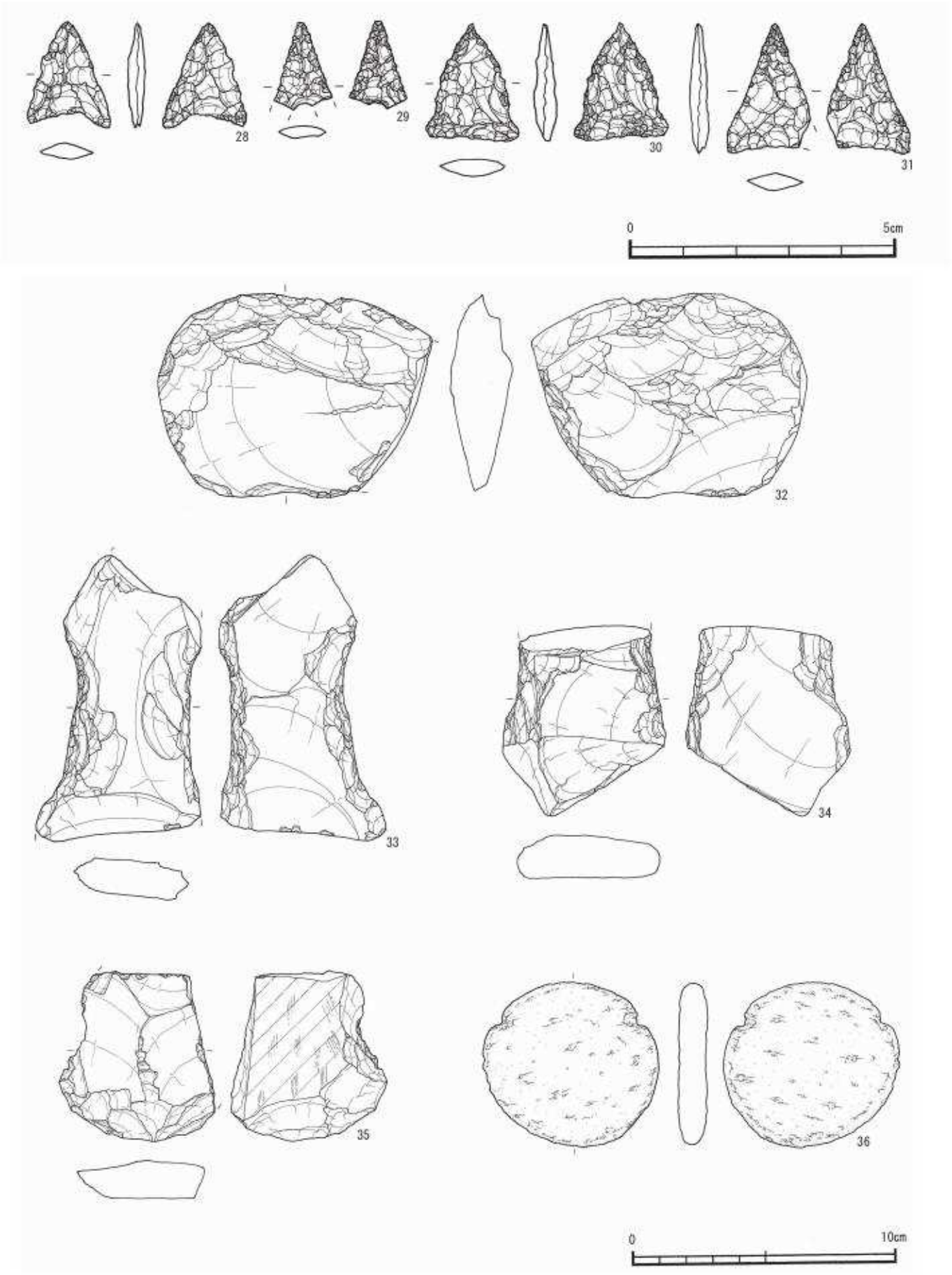
第4図　遺物出土状況図（土器，土製品）



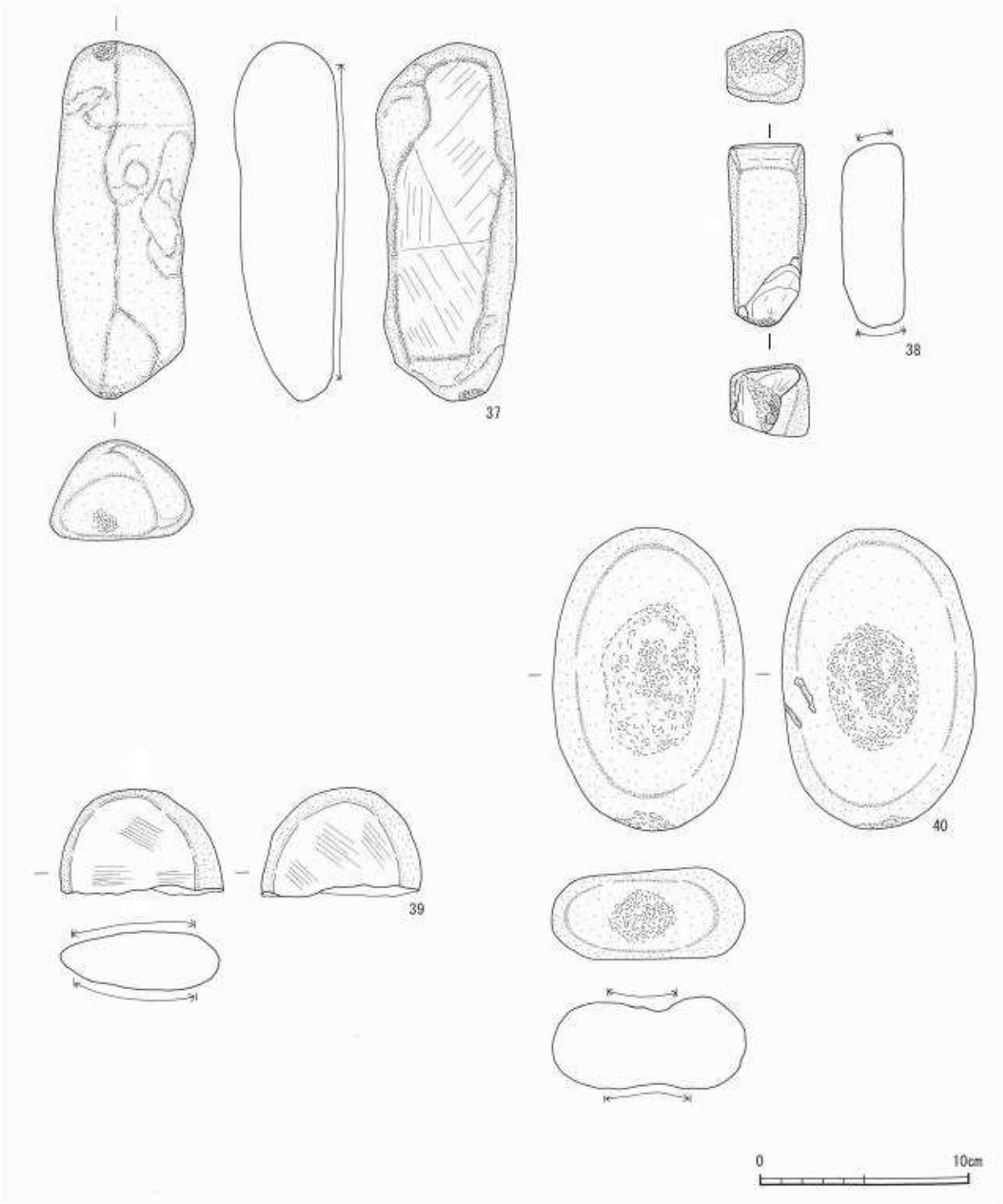
第5図　遺物出土状況図（石器）



第６図　縄文時代の土器、土製品



第７図　縄文時代晩期の石器①



第８図　縄文時代晩期の石器②

第４節　古墳時代の調査

調査の結果，遺構はⅣ層で溝状遺構１条が検出され，遺物はⅣ層を中心に，南九州の在地土器である成川式土器が出土した。

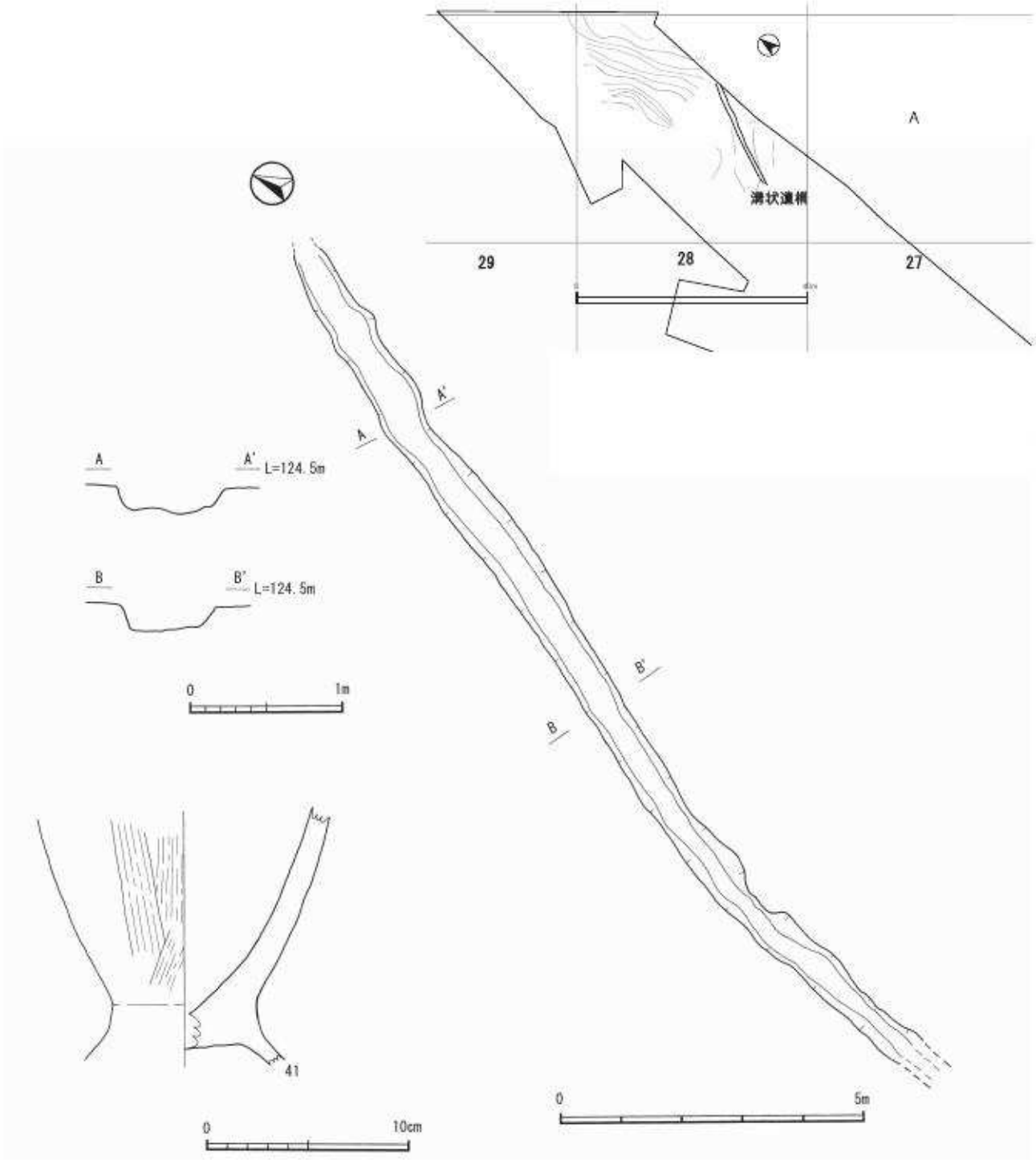
１　遺構

溝状遺構（第９図）

Ａ－28区Ⅳ層上面で検出された。遺構内の埋土の状況は黒褐色土で一様であり，本遺跡の層位のⅢ層と同じ色調であった。遺構は北東－南西方向に走っており，幅約60～75cm，長さは約16.7m，検出面からの深さ約20cmである。遺構は削平されていたり，調査区外へ延びていたりしたことから，全体の様相については不明である。

遺構内遺物（第９図：41）

遺構内からは成川式土器が少量出土し，多くは小破片であった。41は甕の胴部下半～底部である。調整は内外面共にナデで仕上げられている。



第９図　遺構位置図，溝状遺構，遺構内出土遺物

2　遺物

甕

全体の形状が不明なものが多いが，口縁部が広口で脚部をもつタイプと考えられる。口縁部の形状や調整などから２つに分類した。また，突帯の有無で細分した。脚部については一括してまとめた。

Ⅰ類：口縁部が外反し，内面の稜が明確でないもの。
Ⅱ類：口縁部が直立または内弯するもの。

Ⅰ類（無文）（第 11 図：42 ～ 51）

42 は頸部から緩やかに外反し，胴部はやや張りのない器形を呈する土器である。口径 31.8cmを測る。外面の器面調整は，口縁部ではハケによる掻き上げ調整を行っており，上端ではハケ調整の後にナデ調整を行っている。内面調整は口縁部ではケズリ調整，胴部ではナデ調整である。内外面ともに煤の付着が確認できる。43 は胴部に張りをもつ土器で，口径 24.2cmを測る。外面の器面調整は，口縁部ではハケによる掻き上げ調整を行っており，胴部も同様のハケ調整を行っている。胴部下半には煤が付着している。44 は外面では口縁部と胴部との境に明瞭な段差をもつ土器で，口径 26.2cmを測る。器面調整は内外面共にナデ調整を行っている。45 ～ 49 は外反する口縁部片で全体形は不明である。45 は器壁の作りが厚い。46 ～ 49 では器壁が比較的薄く作られている。46 の口唇端部はやや平坦な面を作出している。器面調整は 46・47 では内外面共にナデ調整が行われ，48・49 の外面ではハケによる調整が行われている。51 は外面屈曲部で段差を呈する土器である。器面調整は口縁部に向かってハケによる掻き上げ調整が行われている。

Ⅰ類（有文）（第 11 図：52・53）

52・53 は頸部破片で，52 では刻目突帯が，53 では刻目のない１条の断面三角突帯を横位に貼付する。

Ⅱ類（無文）（第 12 図：54・55）

54 は口径 22cmを測る土器で，外面には煤の付着が確認できる。

Ⅱ類（有文）（第 12 図：56 ～ 61）

56 では口径 28cm を測り，外面は煤の付着が確認でき，特に突帯より上部の煤の付着が著しい。57・58 は胴部上半に布目圧痕が認められる刻目突帯が貼りつけられている。口唇部は平坦面を作出する。内外面共に工具ナデによる調整が行われている。59 ～ 61 は刻目突帯が貼付された胴部片である。

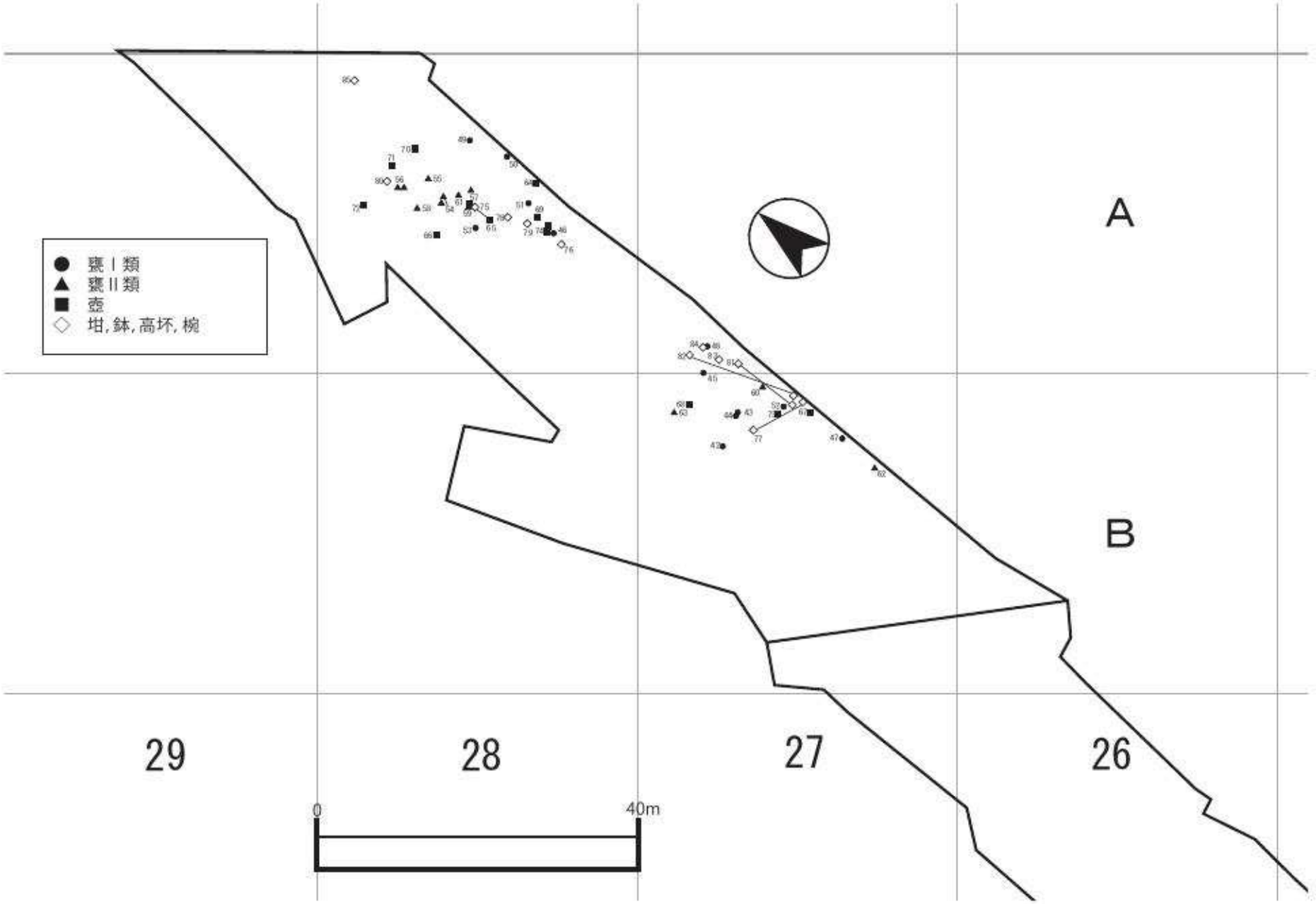
底部（脚部）（第 12 図：62・63）

62 は底部と脚の接合部に断面三角形の突帯が貼り付けられており，脚部の内部形態は天井部が下方に膨らんでいる。63 の脚部は直線的に伸び，脚部径は 8.6cmを測る。脚部の内部形態は平坦な天井部をもつ。器面調整は内外面共にナデ調整が行われている。

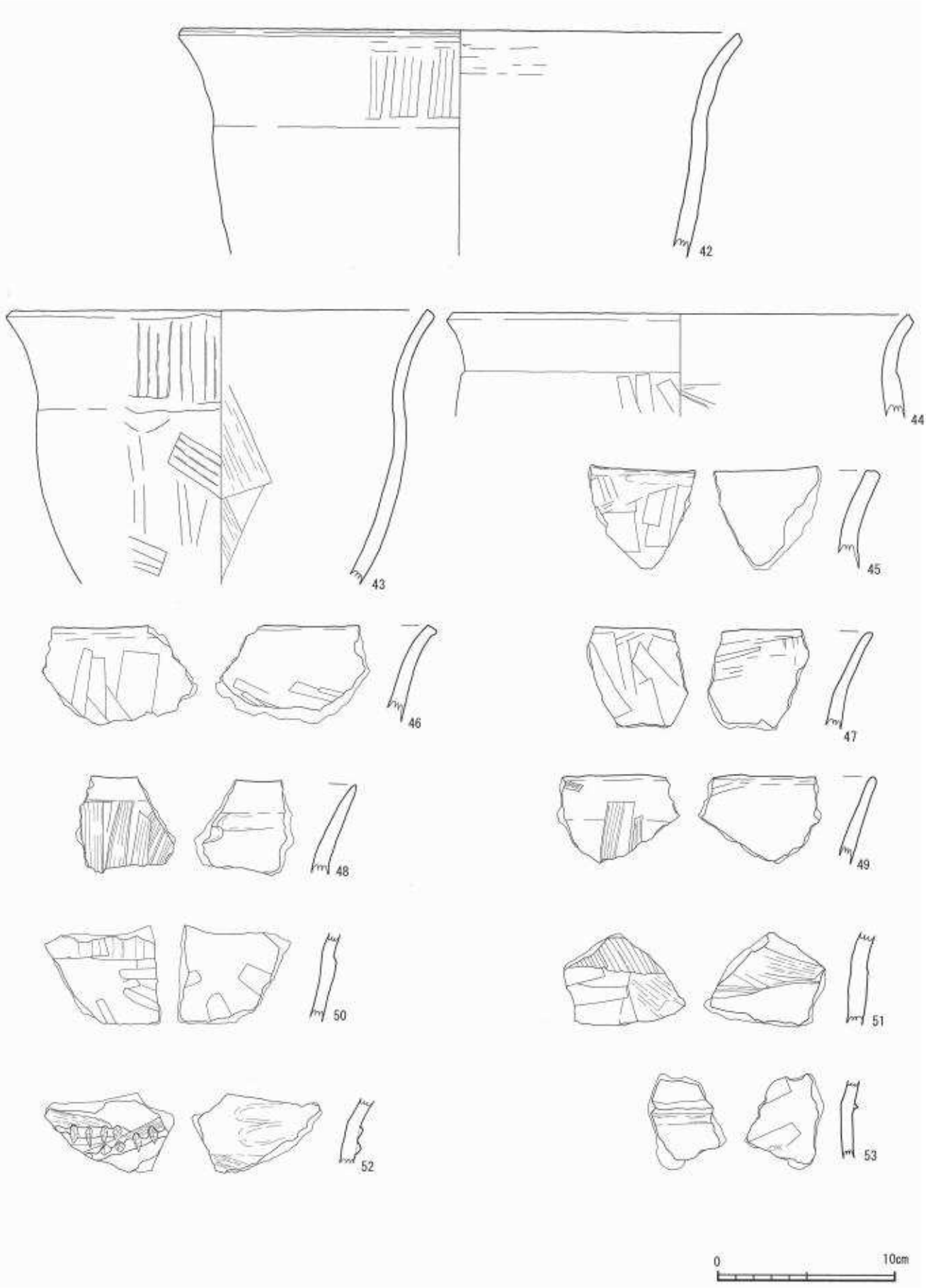
壺（第 12 図：64 ～ 74）

64 は頸部からやや直行して立ち上がり，先端は外反する口縁部で，口径 10cmを測る。器面調整は内外面共にナデ調整が行われている。65 は頸部破片で，器面調整は内外面共にナデ調整である。

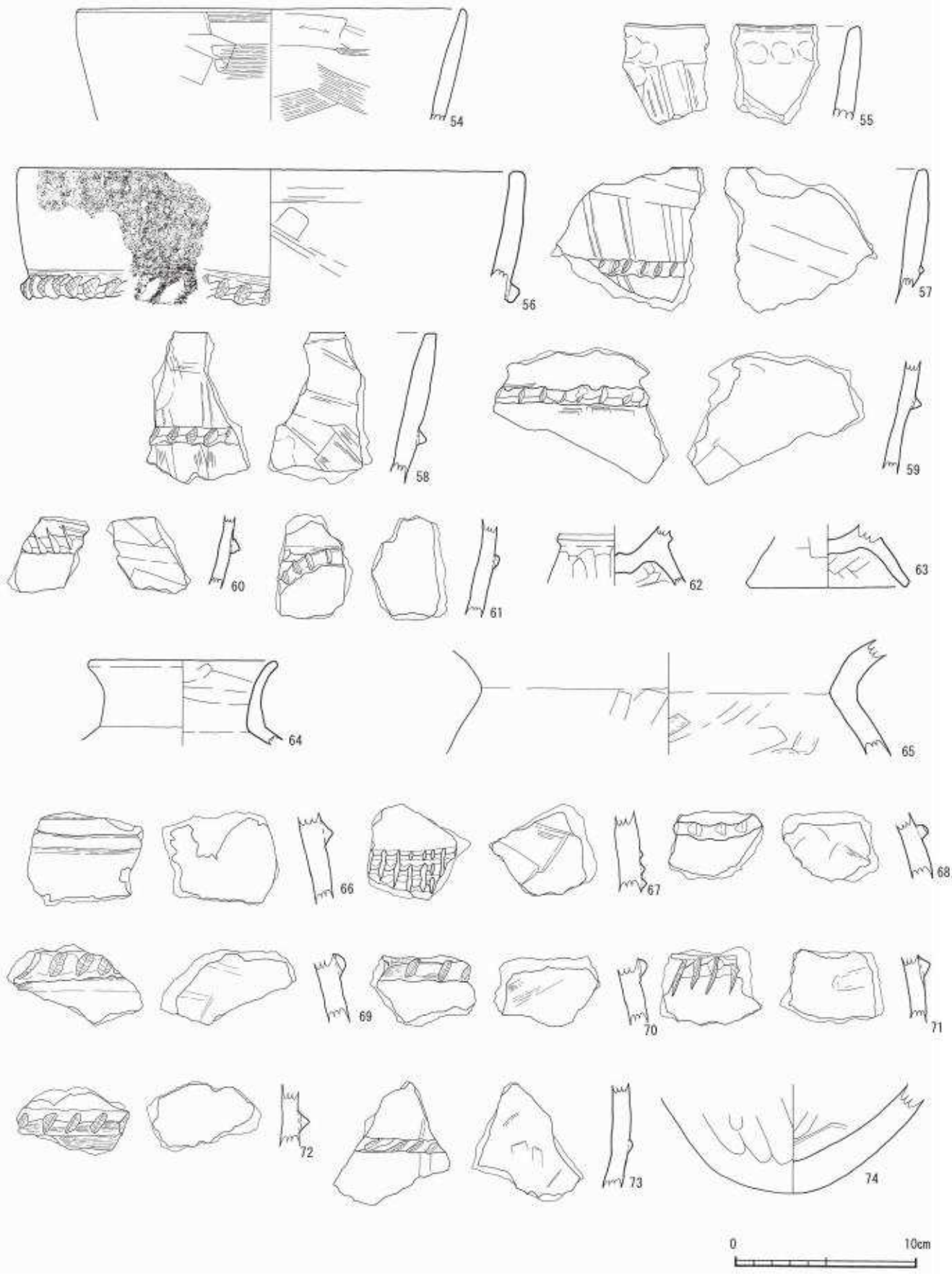
66 ～ 73 は突帯を有する胴部片である。66 は１条の断面三角突帯を貼り付けた胴部片で，内外面共に丁寧なナデ調整が行われている。67 は胴部に３条の突帯を貼り付け，その上から縦位に短絡線を施している。68 ～ 72 は刻目突帯を巡らす胴部片で，68 は外面に微量の煤の付着が確認できる。74 は丸底の底部である。器面調整は内外面共にナデ調整が行われており，内面には煤の付着が確認できる。壺の底部はこの１点のみの出土である。



第 10 図　遺物出土状況図



第 11 図　古墳時代の土器①



第12図　古墳時代の土器②

坩(第13図：75)

75は乳房状の膨らみをもつ底部破片で，器面調整は内外面共にナデ調整が行われている。

鉢(第13図：76～80)

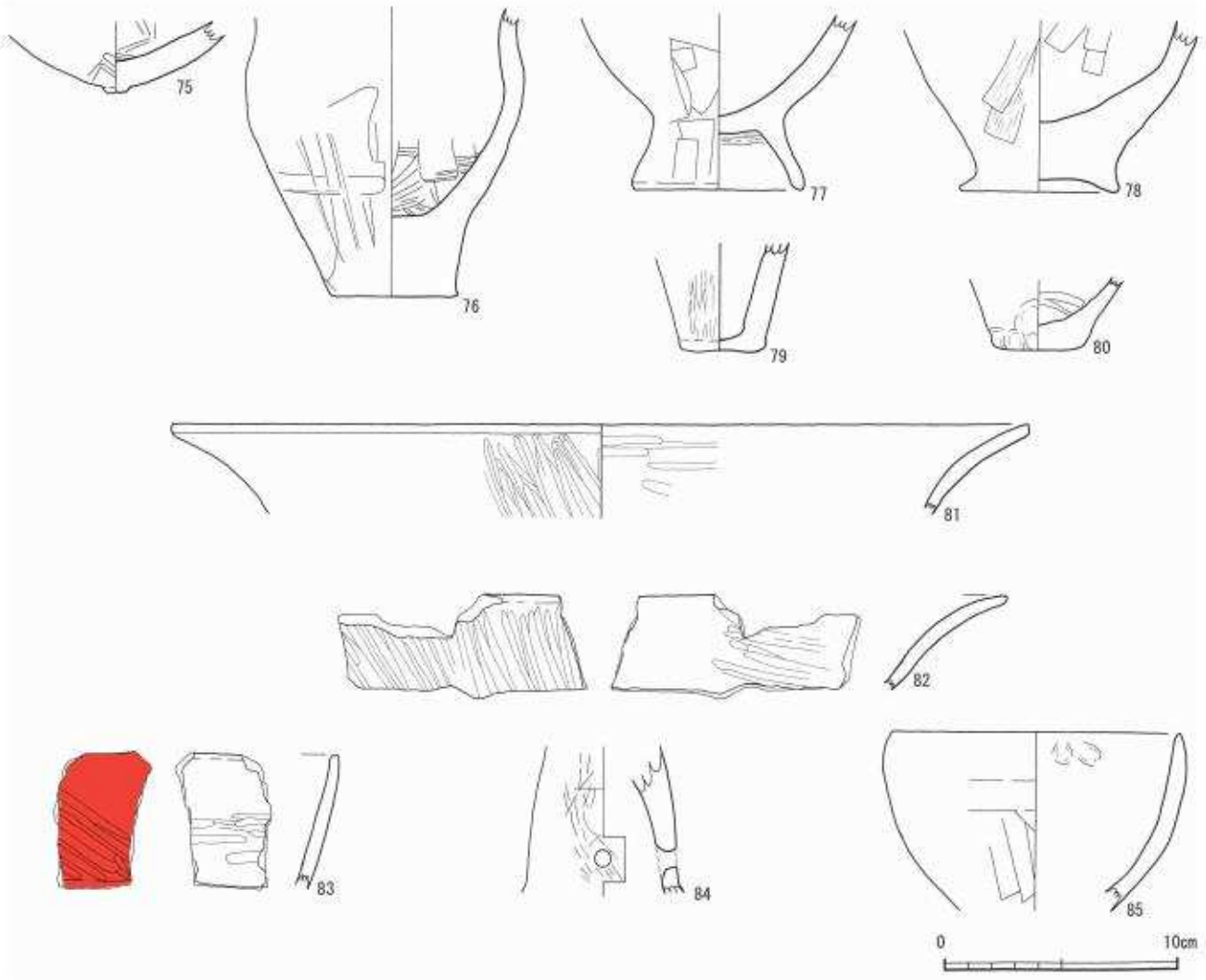
76は胴部が丸みを帯び，胴部下半からすぼまり底部に至る土器である。底部はいわゆる充実した脚台で，やや不安定である。77は端部が直行する脚部で，底径7.2cmを測る。脚部の内部形態は天井部がやや下方に膨らみをもつ。78はわずかに上げ底を呈する。底径6.6cmを測り，器面調整は内外面共にナデ調整であり，内面には煤の付着が確認できる。79・80は平底の底部である。79は底径3.7cmを測り，器面調整は外面ではミガキ後に丁寧なナデ調整，内面ではナデ調整が行われている。80は底径3.9cmを測り，指頭痕が顕著に見られる。

高坏(第13図：81～84)

81・82は大きく外反する坏部形態を呈する土器である。81は口径36.6cmを測り，器面調整は外面ではミガキ，内面ではミガキ後にナデ調整が行われている。また，81・82の外面の色調は，それぞれにぶい黄褐と橙を呈し全く異なる特徴を有するが，傾き及び器壁の厚さ，胎土から同一個体と考えられる。83は内弯する口縁部で，内外面共にミガキが行われている。84は坏部を支える脚部片で，エンタシス状の膨らみをもつ土器である。器面には径6㎜の穿孔が確認できる。

椀(第13図：85)

85は口縁部から胴部下半の破片で，底部形態は不明である。口縁部が内弯し，口径は12.2cmを測る。器面調整は内外面共にナデ調整が行われており，口唇部内面には指頭痕が見られる。外面には煤の付着が確認できる。



第13図　古墳時代の土器③

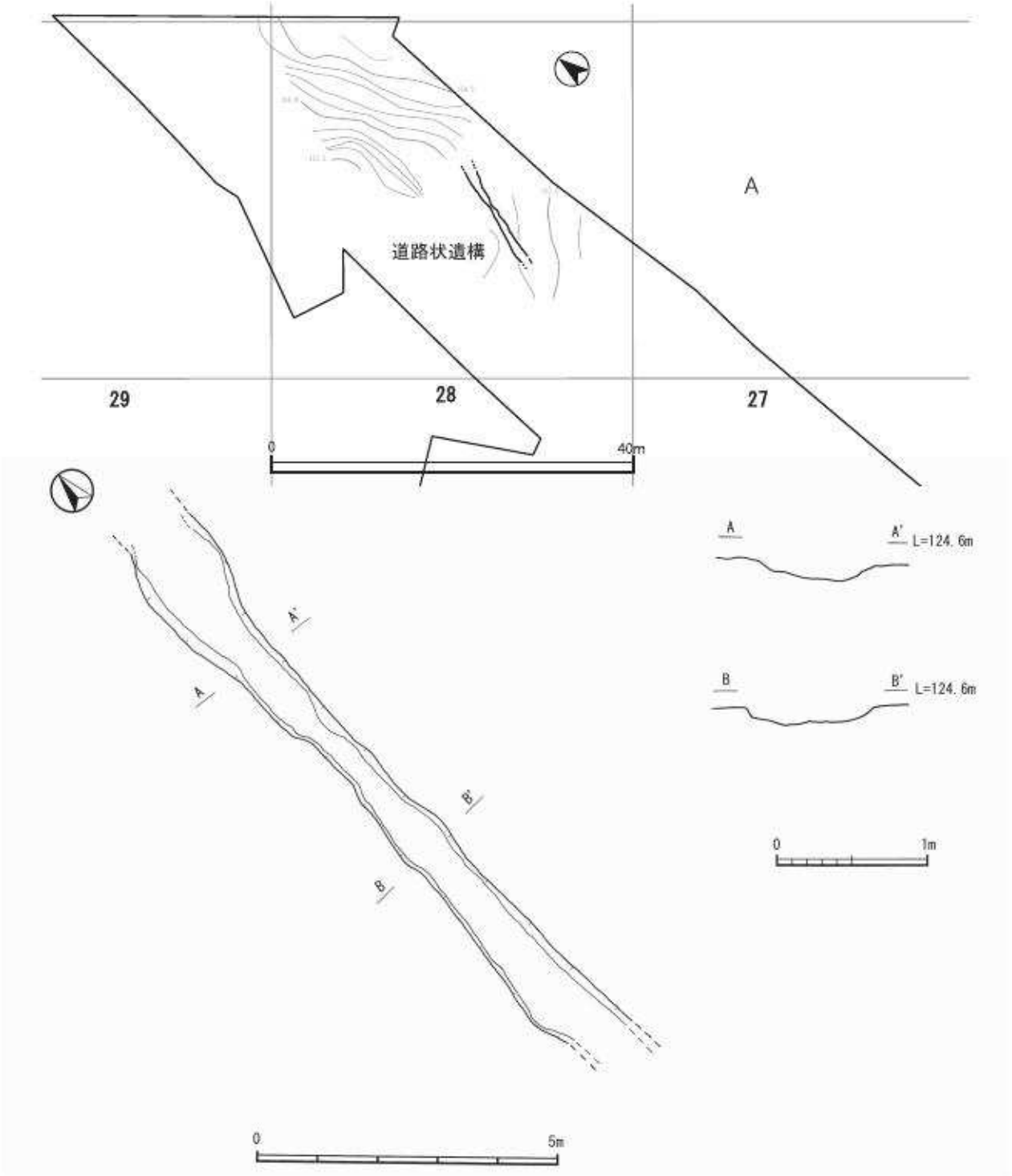
第５節　中世以降の調査

中世以降の該当層はⅡ層・Ⅲ層である。周辺遺跡ではⅡ層で近世の遺物が出土しているが，本遺跡ではⅡ層から遺構・遺物は発見されなかった。Ⅲ層は古墳時代から中世の遺物包含層である。遺構はⅢ層上面で硬化面を伴う道路状遺構１条が検出された。遺物は流れ込みと考えられる古墳時代の成川式土器が少量出土したが，中世以降該当の遺物は出土しなかった。

遺構

道路状遺構（第 14 図）

Ａ－ 28 区のⅢ層上面で検出された。遺構は北東－南西方向に走っており，検出面の幅は約 80-85cm，長さは約 11.5m である。また，遺構の中央部では踏み固められたと思われる硬化面が確認され，厚さは 10cmほどであった。遺構の帰属時期は，遺構に伴う遺物が出土していないため，詳細は不明である。



第 14 図　遺構位置図，道路状遺構

表１　縄文時代の土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	部位	調整		色調		胎土				煤付着	出土区	層	備考
				外	内	外	内	長	石	角	その他				
6	1	深鉢	口縁部	キザミ・条痕	条痕後ナデ	橙	にぶい黄	○	○	○	黒色鉱物		A-28	Ⅳ	
	2	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	浅黄	にぶい黄	○	○		黒色鉱物		A-28	Ⅳ	
	3	深鉢	口縁部	条痕	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	火山ガラス・黒色鉱物	○	B-27	Ⅳ	内面剥離
	4	深鉢	口縁部	条痕	条痕	明赤褐	にぶい褐	○	○		金雲母・黒色鉱物	○	A-28	Ⅳ	
	5	深鉢	口縁部	条痕	条痕	明褐	明褐	○	○		金雲母・輝石		A-28	Ⅳ	
	6	深鉢	口縁部	ナデ	条痕後ナデ	にぶい褐	明赤褐		○	○	金雲母・輝石		A-28	Ⅳ	
	7	深鉢	口縁部	ナデ	条痕後ナデ	明褐	にぶい褐	○		○	金雲母・黒色鉱物		A-28	Ⅳ	
	8	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐	にぶい黄橙		○	○	黒色鉱物		A-28	Ⅳ	
	9	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	褐	にぶい黄	○	○	○	火山ガラス	○	A-28	Ⅳ	
	10	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	灰褐	橙	○	○		黒色鉱物	○	A-28	Ⅳ	
	11	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ・ケズリ	橙	橙	○	○	○			A-28	Ⅳ	
	12	深鉢	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄	黒褐	○	○		金雲母・輝石		A-28	Ⅳ	
	13	深鉢	底部	ナデ	ナデ	橙	橙	○			金雲母		A-28	Ⅳ	
	14	深鉢	胴部	磨消縄文	ナデ	黒	黒	○	○	○	金雲母	○	B-27	Ⅳ	
	15	深鉢	胴部	ナデ	条痕	明黄褐	にぶい黄褐	○	○	○			A-28	Ⅳ	
	16	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐	にぶい赤褐	○			金雲母		A-28	Ⅳ	
	17	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙	○	○	○	金雲母・黒色鉱物	○	B-27	Ⅳ	
	18	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄	○	○	○			A-28	Ⅳ	
	19	円盤状土製品	－	ナデ	ナデ	にぶい褐	明赤褐	○	○		金雲母・鉄鋼物		B-27	Ⅳ	
	20	粗製深鉢	口縁部	ハケメ	ハケメ	明赤褐	明赤褐	○	○	○	火山ガラス・黒色鉱物		A-27	Ⅳ	
	21	粗製深鉢	口縁部	条痕	ミガキ後ナデ	黒褐	褐灰	○	○			○	A-28	Ⅳ	
	22	粗製深鉢	口縁部	条痕	ミガキ後ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○		○		○	A-28	Ⅳ	
	23	粗製深鉢	口縁部	条痕後ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		○	A-28	Ⅳ	
	24	粗製深鉢	底部	ナデ	ミガキ	橙	にぶい黄褐		○	○			A-28	Ⅳ	
	25	精製浅鉢	口縁部～胴部	ミガキ	ナデ	にぶい黄褐	橙	○		○			A-28B-27	Ⅳ	
	26	精製浅鉢	口縁部	ミガキ後ナデ	ミガキ	にぶい黄褐	黒褐	○	○	○	金雲母・鉄鋼物		A-28	Ⅳ	
	27	精製浅鉢	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	暗灰黄	○		○			A-28	Ⅳ	内面剥離

表２　古墳時代の土器観察表①

挿図番号	掲載番号	器種	部位	調整		色調		胎土				煤付着	出土区	層	備考
				外	内	外	内	長	石	角	その他				
9	41	甕	胴部～底部	ナデ	ナデ	明褐	明赤褐	○	○				A-28	－	溝内
11	42	甕	口縁部～胴部	ハケメ・ナデ	ケズリ・ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○	○		○	B-27	Ⅳ	
	43	甕	口縁部～胴部	ハケメ・ナデ	ナデ	明褐	明赤褐	○	○		鉄鋼物	○	B-27	Ⅳ	
	44	甕	口縁部	ナデ	ナデ	明黄褐	明黄褐	○		○	輝石・黒色鉱物		B-27	Ⅳ	
	45	甕	口縁部	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○	黒色鉱物		A・B-27	Ⅳ	
	46	甕	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	○	○	○			A-28	Ⅳ	
	47	甕	口縁部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい赤褐	○	○	○			B-27	Ⅳ	
	48	甕	口縁部	ハケメ	ナデ	橙	橙	○	○	○	鉄鋼物	○	A-27	Ⅳ	
	49	甕	口縁部	ハケメ	ナデ	明赤褐	橙		○	○			A-28	Ⅳ	
	50	甕	胴部	ハケメ・ナデ	ナデ	明赤褐	橙	○	○			○	A-28	Ⅳ	
	51	甕	胴部	ハケメ・ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	○	○	○		○	A-28	Ⅳ	
	52	甕	胴部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙		○	○			B-27	Ⅳ	
	53	甕	胴部	ナデ	ナデ	灰黄褐	橙	○	○				A-28	Ⅳ	
12	54	甕	口縁部	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄褐		○		黒色鉱物	○	A-28	Ⅳ	
	55	甕	口縁部	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙		○	○		○	A-28	Ⅳ	
	56	甕	口縁部～胴部	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	○	○	○		○	A-28	Ⅳ	
	57	甕	口縁部～胴部	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	○	○	○		○	A-28	Ⅳ	
	58	甕	口縁部～胴部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	○	○	○		○	A-28	Ⅳ	
	59	甕	胴部	ナデ	ナデ	黄褐	橙	○	○	○	砂粒	○	A-28	Ⅳ	
	60	甕	胴部	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐		○			○	B-27	Ⅳ	
	61	甕	胴部	ナデ	ナデ	明赤褐	黒褐	○		○			A-28	Ⅳ	内面剥離
	62	甕	脚部	ナデ	ナデ	明赤褐	褐灰	○	○				B-27	Ⅳ	
	63	甕	脚部	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐		○	○			B-27	Ⅳ	
	64	壺	口縁部	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	○	○	○			A-28	Ⅳ	
	65	壺	頸部	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○			A-28	Ⅳ	
	66	壺	胴部	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○	○		○	A-28	Ⅳ	

表３　古墳時代の土器観察表②

挿図番号	掲載番号	器種	部位	調整		色調		胎土				煤付着	出土区	層	備考
				外	内	外	内	長	石	角	その他				
12	67	壺	胴部	ナデ	ナデ	明赤褐	にぶい赤褐	○	○	○			B-27	Ⅳ	
	68	壺	胴部	ナデ	ナデ	橙	明黄褐		○	○		○	B-27	Ⅳ	内面に爪痕
	69	壺	胴部	ナデ	ナデ	橙	橙		○	○			A-28	Ⅳ	
	70	壺	胴部	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	○	○	○	金雲母		A-28	Ⅳ	
	71	壺	胴部	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○			A-28	Ⅳ	
	72	壺	胴部	ナデ	ナデ	橙	明黄褐	○	○	○		○	A-28	Ⅳ	
	73	壺	胴部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			B-27	Ⅳ	
	74	壺	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		○	A-28	Ⅳ	
13	75	坩	底部	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○		○	A-28	Ⅳ	
	76	鉢	胴部～底部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	橙	○	○	○		○	A-28	Ⅳ	
	77	鉢	胴部～脚部	ナデ	ナデ	明赤褐	にぶい褐	○	○	○		○	B-27	Ⅳ	
	78	鉢	底部	ナデ	ナデ	赤	橙		○	○		○	A-28	Ⅳ	
	79	鉢	底部	ミガキ後ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			A-28	Ⅳ	つまみ部径3.7cm
	80	鉢	底部	指頭痕・ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○	A-28	Ⅳ	
	81	高坏	口縁部	ミガキ	ミガキ後ナデ	にぶい黄褐	灰黄褐・明黄褐	○	○	○			AB-27	Ⅳ	82と同一個体
	82	高坏	口縁部	ナデ後ミガキ	ミガキ・ナデ	橙	明黄褐	○	○	○			A-27	Ⅳ	81と同一個体
	83	高坏	口縁部	ミガキ	ミガキ	赤褐	明黄褐			○			A-27	Ⅳ	赤色顔料
	84	高坏	脚部	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○			A-27	Ⅳ	穿孔有
	85	椀	口縁部～胴部	ナデ	指頭痕・ナデ	橙	にぶい黄褐		○	○		○	A-28	Ⅳ	

表４　縄文時代晩期の石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	石材	出土区	層	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考
						cm	cm	cm	g	
7	28	打製石鏃	黒色安山岩	A-28	Ⅳ	2.00	1.10	0.30	0.65	
	29	打製石鏃	黒曜石	A-28	Ⅳ	1.70	0.90	0.25	0.33	
	30	打製石鏃	黒色安山岩	A-27	Ⅳ	2.15	1.30	0.30	1.29	
	31	打製石鏃	黒色安山岩	B-27	Ⅳ	2.50	1.10	0.30	0.91	
	32	楔形石器	頁岩	B-27	－	7.50	10.10	2.40	222.00	
	33	打製石斧	頁岩	A-27	Ⅳ	10.60	5.20	1.60	113.00	
	34	打製石斧	頁岩	B-27	Ⅳ	7.00	6.10	1.70	91.00	
	35	打製石斧	頁岩	A-27	Ⅲ	6.30	5.80	1.40	69.00	
	36	軽石製品	軽石	A-27	Ⅳ	6.10	6.70	1.10	18.50	
8	37	棒状敲石	頁岩	A-28	Ⅳ	17.20	6.50	5.00	770.00	
	38	棒状敲石	頁岩	A-28	Ⅳ	8.90	3.70	3.40	199.60	
	39	磨石	安山岩	B-27	Ⅳ	5.20	7.70	2.70	162.00	
	40	凹石	安山岩	A-28	Ⅲ	14.70	9.30	4.40	990.00	

早　山　遺　跡

第６章　早山遺跡の調査の方法と成果

第１節　発掘調査の方法と成果

本遺跡の調査範囲はＢ～Ｅ－25～27区である。調査は，平成20年度から平成21年度にかけて実施した（第１図）。

早山遺跡は，これまでに鹿屋市教育委員会が昭和60年度と平成18・19年度に発掘調査を実施している。

昭和60年度は農地保全整備事業に伴う発掘調査が実施され，遺構は古墳時代の竪穴住居跡２軒及び土坑４基が検出された。また，遺物は縄文時代晩期の黒川式土器，古墳時代の成川式土器などが出土した（『早山遺跡・宮の脇遺跡』1986.3　鹿屋市教育委員会）。

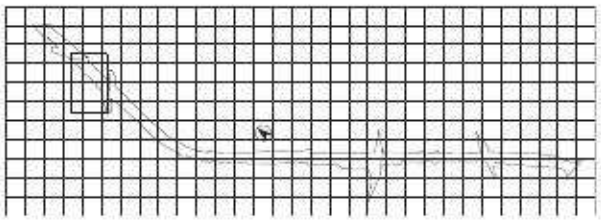
平成18・19年度は西部公園整備事業に伴う発掘調査が実施され，調査の結果，縄文時代早期の集石遺構４基，土坑４基及び石器製作場１基が検出され，遺物は主に縄文時代晩期及び古墳時代の土器片・石器が出土した（『早山遺跡』2009.3　鹿屋市教育委員会）。

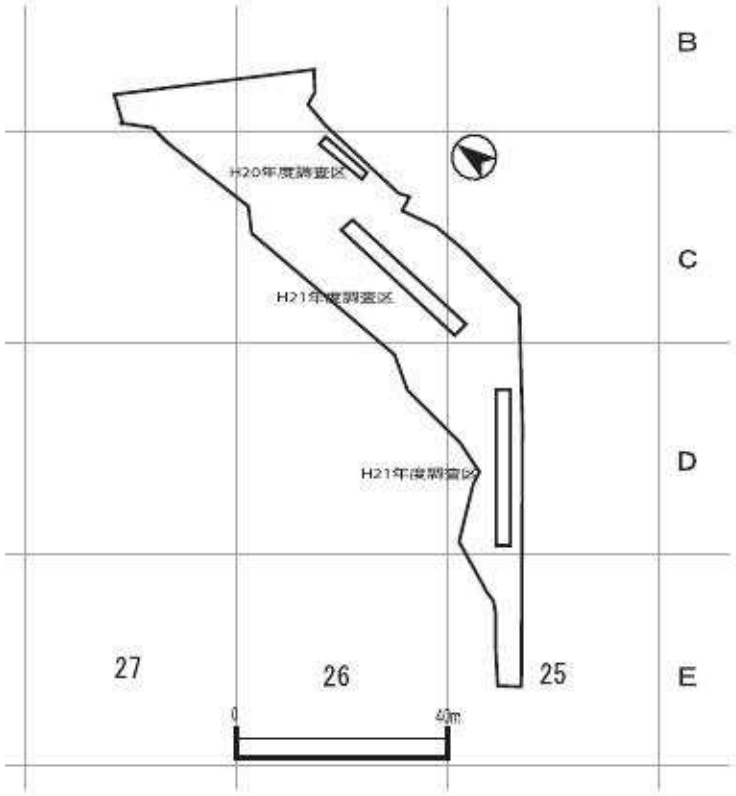
今回の調査では，その東側に位置する部分の調査を行った。まず平成20年度の調査では，Ｃ－26区に２ｍ×10ｍの調査区を設定して，表土を重機で剥いだところ，表土下は主にシラスであり，遺構及び遺物は発見されなかった。その後，調査区の東壁及び北壁の土層図を作成して埋め戻しを行い，調査を終了した。

次に平成21年度の調査では，前年度の調査結果を踏まえて，Ｃ－25・26区及びＤ－25区に４ｍ×30ｍの調査区を設定して，表土を重機で剥いだところ，表土下は主にシラス及び大隅降下軽石であり，遺構及び遺物は発見されなかった。

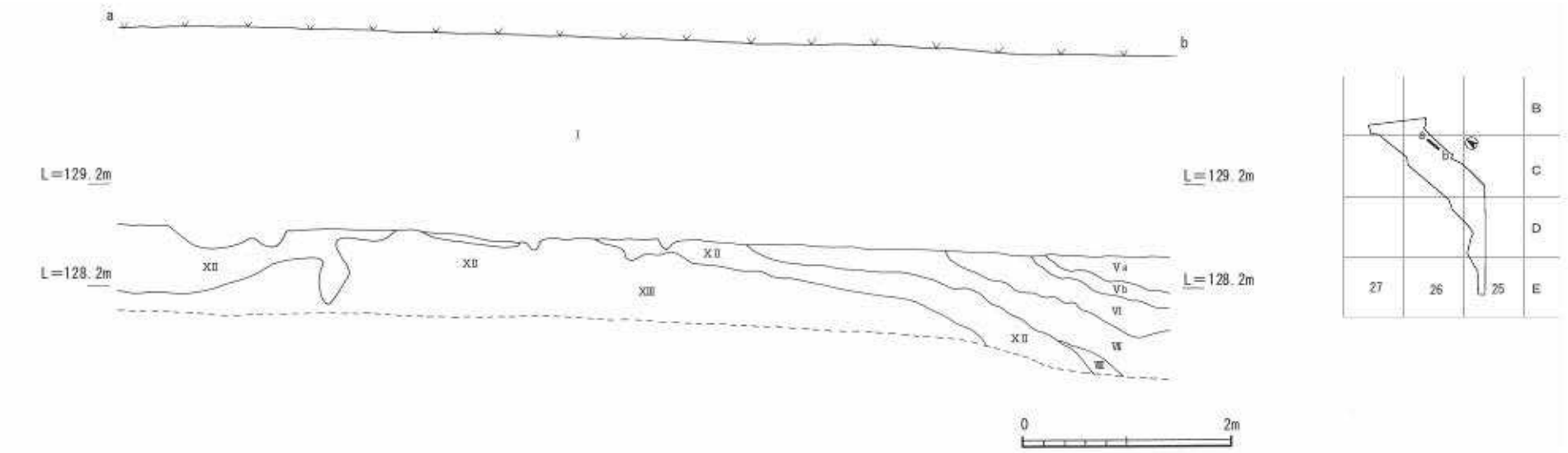
第２節　遺跡の層序

早山遺跡の具体的な層序を第２図に示した。平成20年度調査区では表土の厚さが約２ｍあり，表土を剥ぐと主にシラスが現れ，全体的に南から北へ緩傾斜している。





第１図　調査範囲図



平成 21 年度調査範囲完掘

平成 20 年度調査範囲完掘

第２図　土層図，調査区完掘状況

鎮　守　山　遺　跡

第７章　鎮守山遺跡の調査の方法と成果

第１節　発掘調査の方法と成果

本遺跡の調査範囲はＦ～Ｉ－０～11区である。調査は，平成20年度から平成22年度にかけて実施した（第１図）。

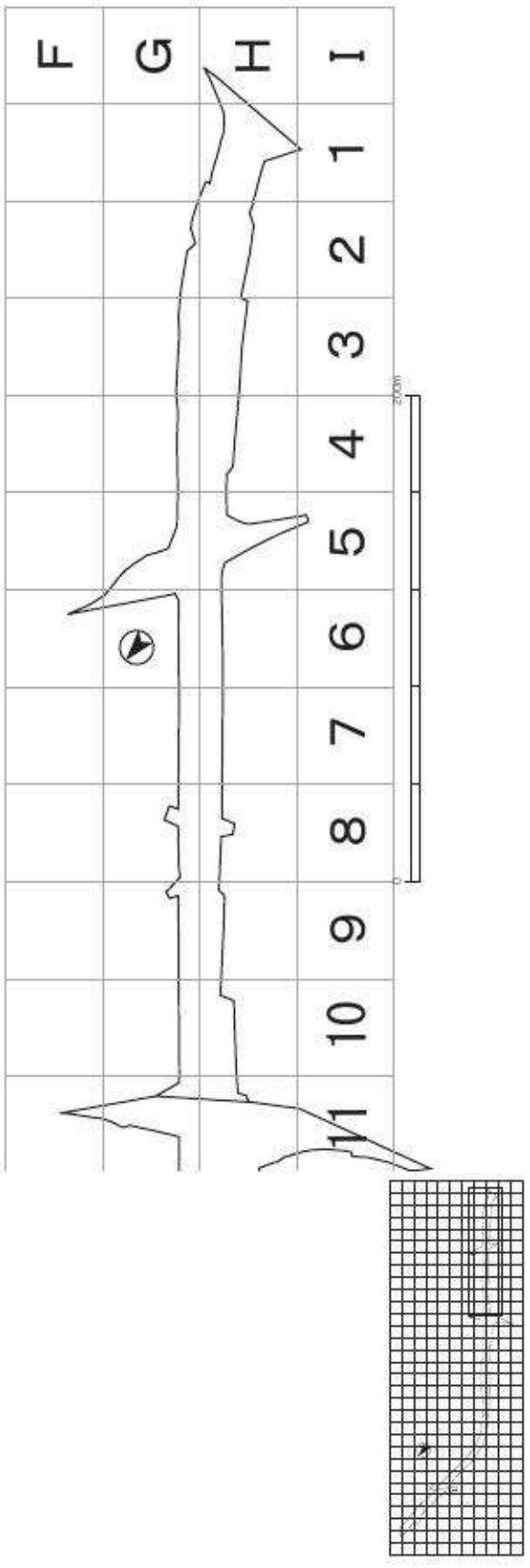
調査の基本的な方法は，まず草払いや竹藪の伐採等を行った後，重機（バックホー）によって表土を除去した。そして，遺物包含層（Ⅲ層・Ⅳ層）及びその可能性がある層については，人力（山鍬・ジョレン・移植ゴテ等を利用）により掘り下げを行った。

具体的には，Ⅲ層→Ⅳ層→Ⅴａ層上面の順に，段階的に調査を進めた。また，一部箇所ではⅫ層（シラス）上面まで掘り下げ，遺構及び遺物の確認を行った。検出遺構及び出土遺物は写真撮影，位置の記録及び実測作業を行い，遺構内で出土した炭化物等は自然科学分析を実施した。

平成20年度は，Ｈ－２～５区の一部箇所及びＧ－９･10区の本調査を実施した。調査の結果，遺構は検出されなかったが，縄文時代の石器，古墳時代の土器及び軽石製品等の遺物が出土した。

平成21年度は平成20年度の調査結果に基づき，Ｈ－１区，ＧＨ－２･３区の未調査箇所，同５･６区及びＨ－８区の本調査を実施した。Ｈ－１区は，地表面から約４ｍ超の深度にⅢ層の遺物包含層が確認され，主に古墳時代の遺物が出土した。Ｈ－６区では，地表面から約１ｍの深度にⅣ層の遺物包含層が確認され，縄文時代晩期及び古墳時代の遺物が出土した。また，遺構は古墳時代の竪穴住居跡12軒を検出した。このことから，当時の地形はＧＨ－６区周辺部が遺跡地内で最も標高の高い尾根上に当たり，Ｈ－０区及びＧＨ－11区に向かって下り傾斜になっていることが想定される。

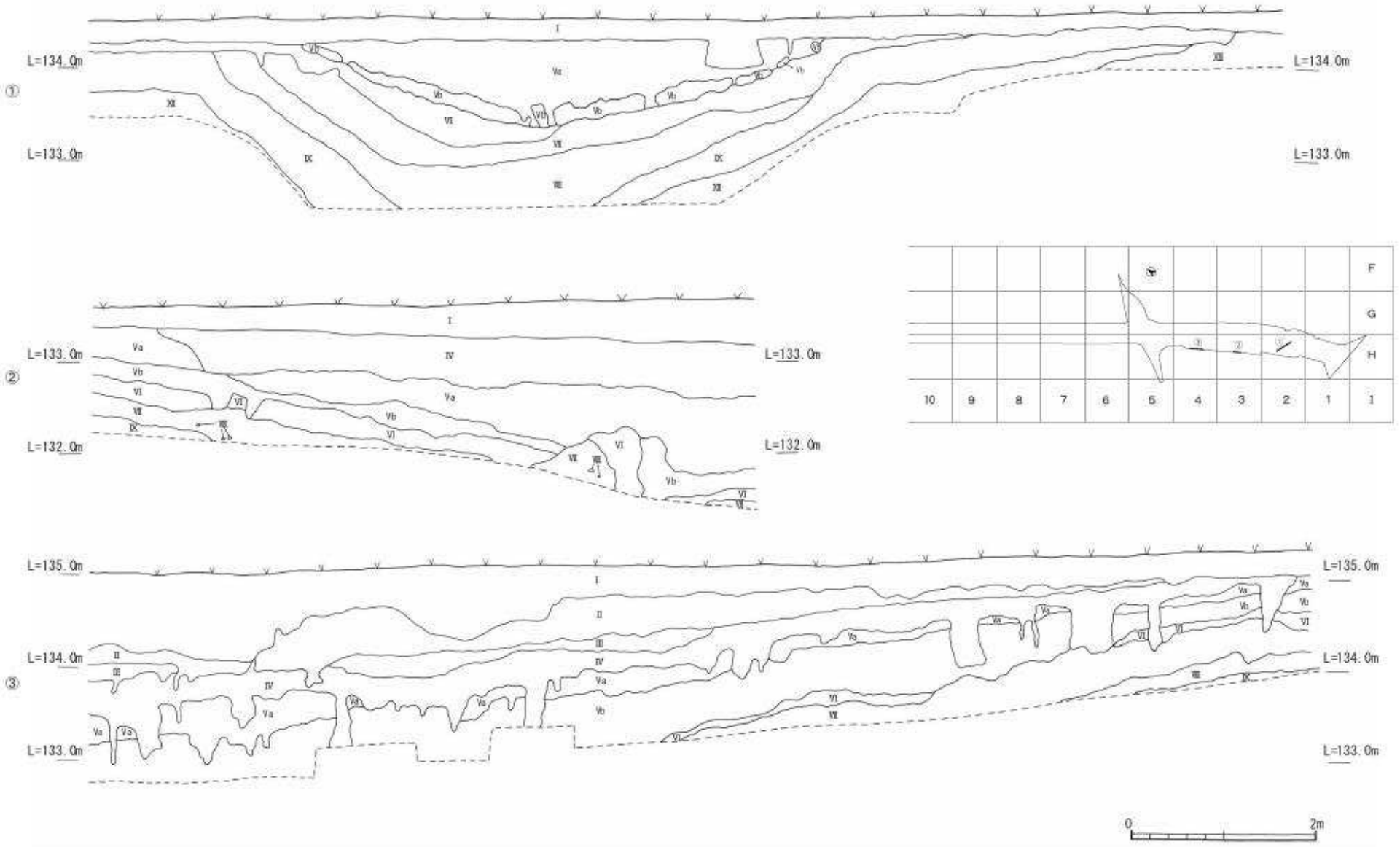
平成22年度はＧＨ－３･４区，ＧＨ－５区の未調査箇所及びＧＨ－７区の本調査を実施した。平成21年度の調査で，古墳時代の竪穴住居跡を検出したため，ＧＨ－５･７区においても同様の遺構群の検出が期待されるなかでの調査であった。調査の結果，Ｇ－５区で古墳時代の竪穴住居跡４軒，ＧＨ－７区で同４軒を検出した。平成21年度の調査で検出した12軒と合わせて合計20軒となり，本遺跡は古墳時代の集落遺跡であることが確認された。



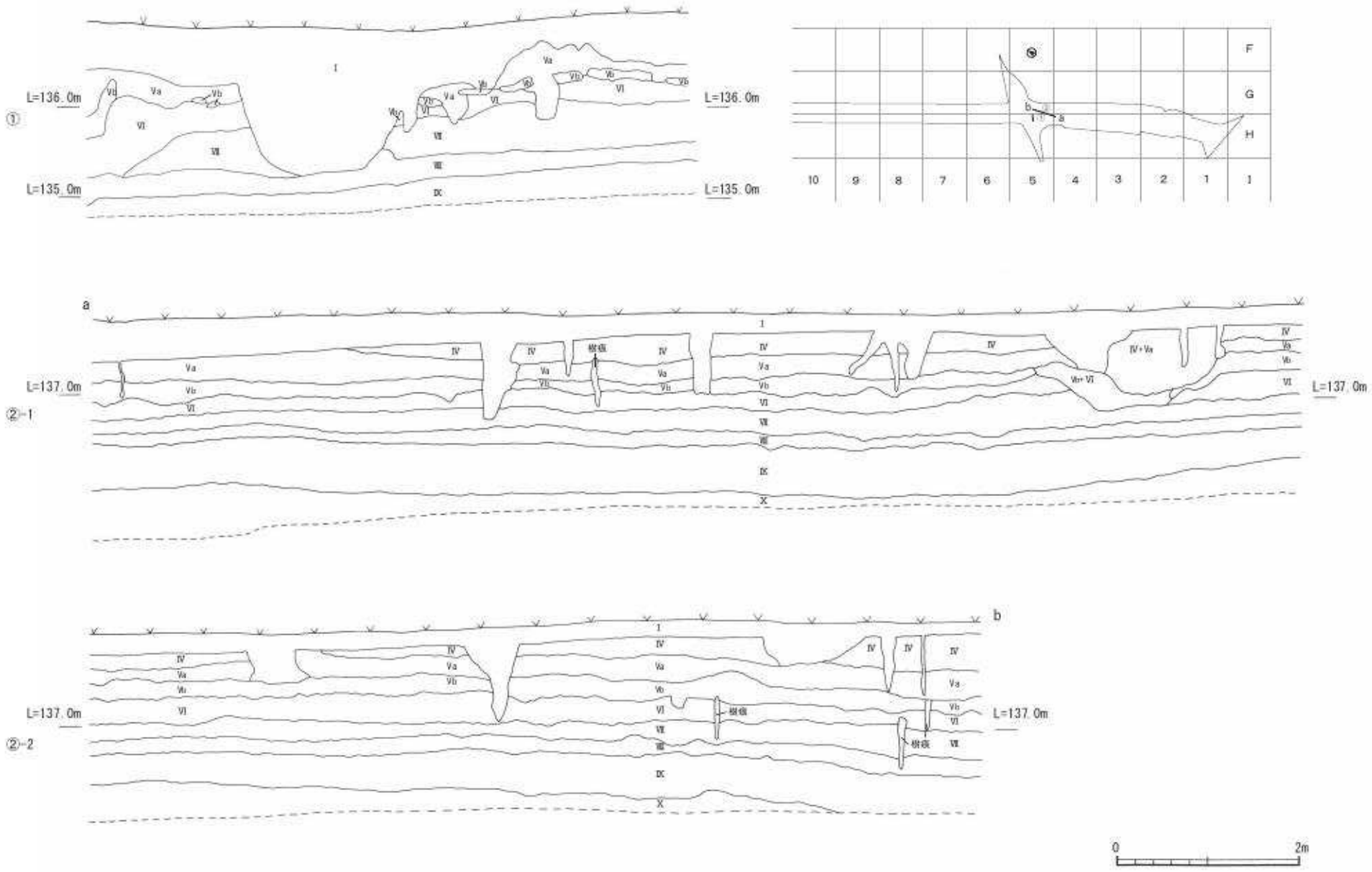
第１図　調査範囲図

第２節　遺跡の層序

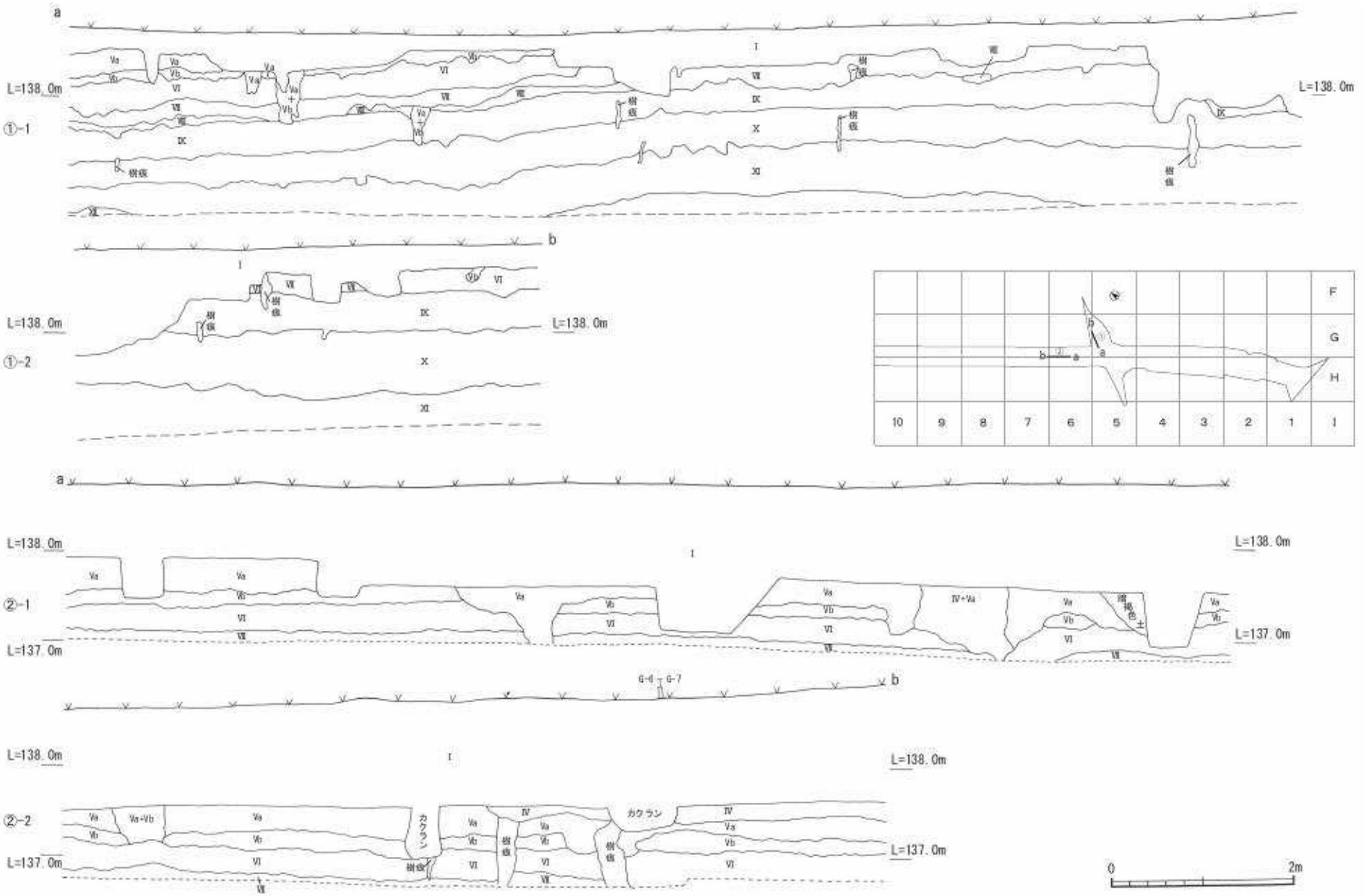
基本的な層序については，第３章第２節と同様である。ここでは具体的な層序を第２～５図に示した。場所によって層の堆積状況が異なり，Ⅰ層の下はⅢ層またはⅣ層であった。


①
L=134.0m
L=133.0m
L=134.0m
L=133.0m
②
L=133.0m
L=132.0m
L=133.0m
L=132.0m
③
L=135.0m
L=134.0m
L=133.0m
L=135.0m
L=134.0m
L=133.0m
F
G
H
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
1
0
2m

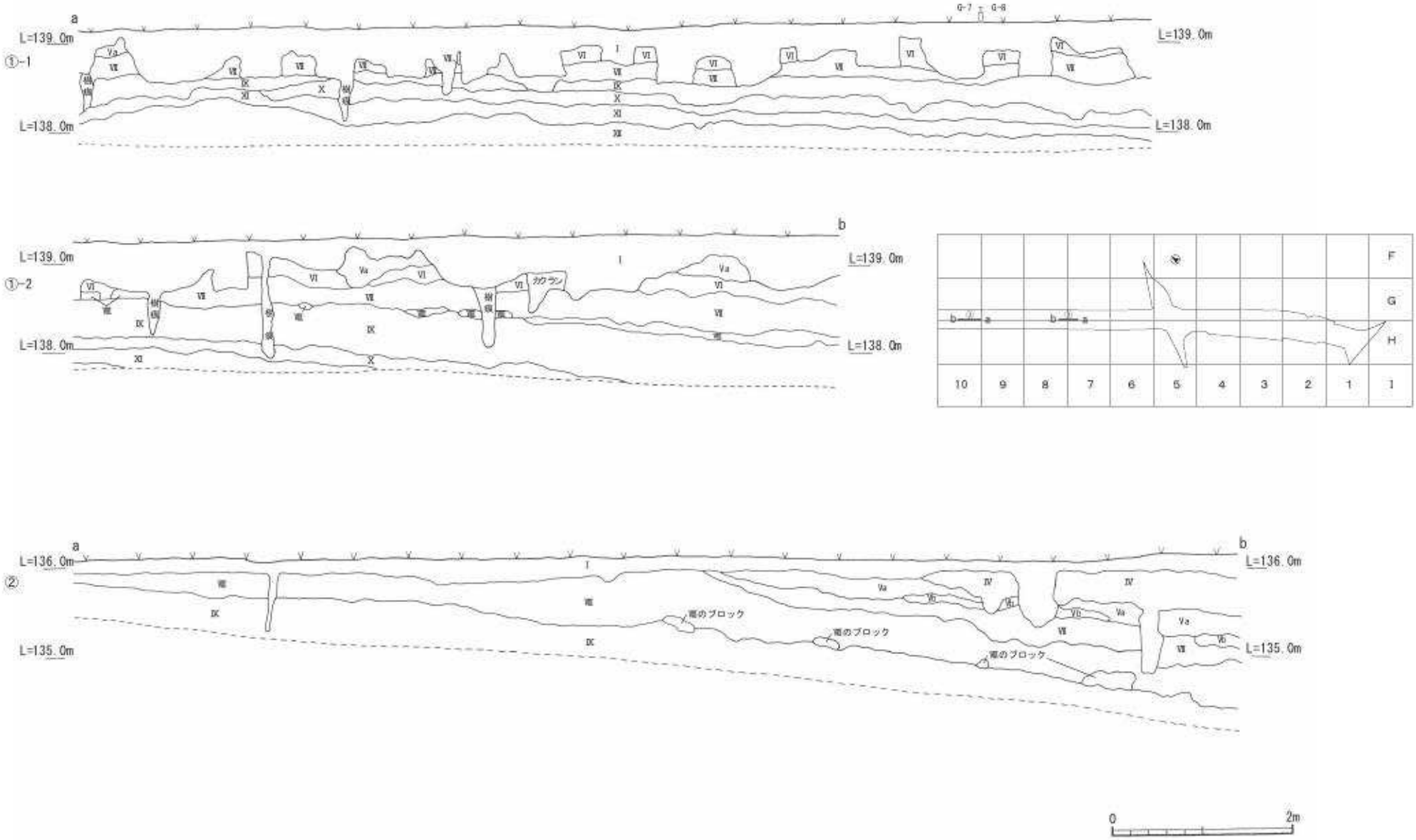
第2図　土層図①


①
L=136.0m
L=135.0m
L=136.0m
L=135.0m
F
G
H
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
1
②-1
a
L=137.0m
L=137.0m
②-2
b
L=137.0m
0
2m

第３図　土層図②



第4図　土層図③


a
L=139.0m
①-1
L=138.0m
G-7
G-8
L=139.0m
L=138.0m
b
L=139.0m
①-2
L=138.0m
カクラン
L=139.0m
L=138.0m
F
G
H
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
1
a
L=136.0m
②
L=135.0m
南のブロック
南のブロック
南のブロック
b
L=136.0m
L=135.0m
0
2m

第5図　土層図④

第３節　縄文時代早期の調査

中心となる包含層はⅥ層である。調査の結果，遺構は集石遺構２基を検出した。遺物の出土は少なく，押型文土器３点と石鏃１点のみであった。

１　遺構

Ｇ－５区のⅥ層上面で集石遺構２基を検出した。１号と２号は約 30cm しか離れていないため，２号は１号の廃棄礫の可能性がある。なお，遺構内から遺物は出土しなかった。

１号集石（第７図）

約 140cm × 120cm の範囲に被熱した礫が 345 個集中していた。礫の内訳は，安山岩 317 個，頁岩 19 個，砂岩９個である。また，緩やかな２段の掘り込みを検出した。掘り込みの平面形は，おおむね円形を呈し，長径 1m10cm，短径 1m，礫上面からの深さは 48cm である。

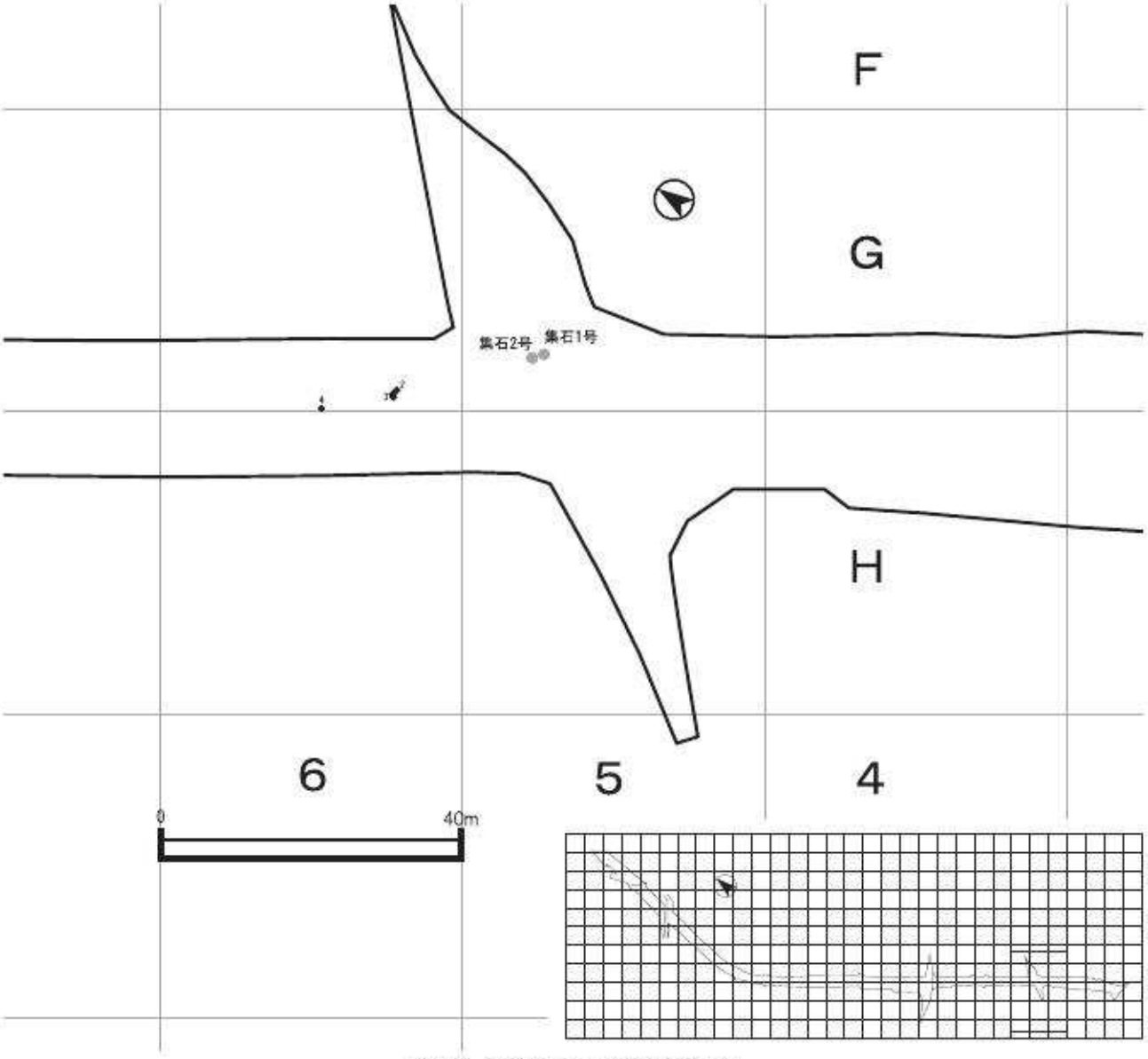
なお，遺構内の埋土から出土した炭化物の放射性炭素年代測定の結果は，8,425 ± 30（yrBP）である。

２号集石（第７図）

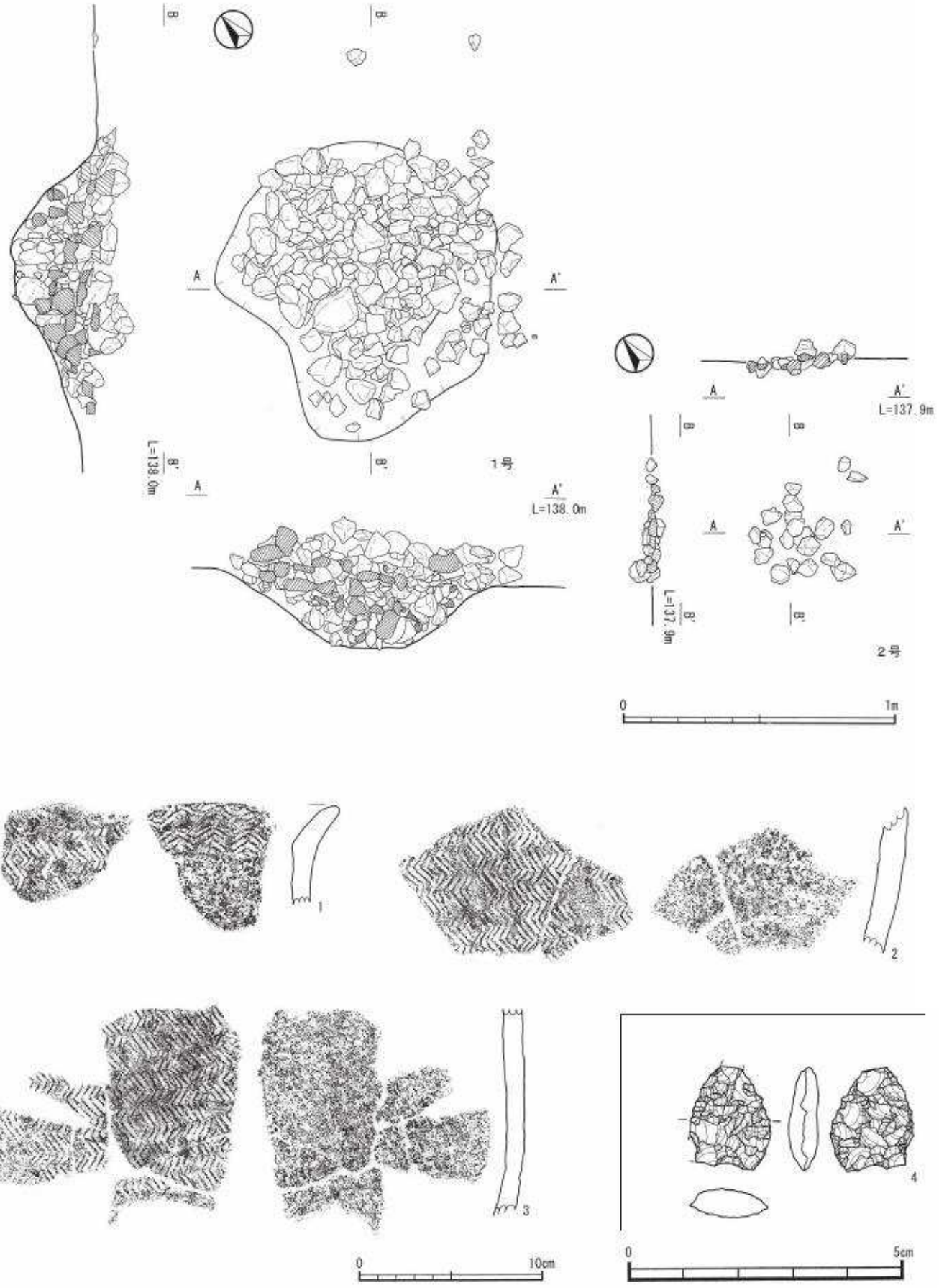
約 50cm × 50cm の範囲に礫が 20 個集中していた。礫は全て安山岩で多くは被熱していた。なお，掘り込みは見られなかった。

２　遺物（第７図：１～４）

土器はＧ－６区から３点出土した。１は外反する口縁部で，内外面に山形押型文が施されている。外面は縦位方向に，内面は横位方向に回転させている。２・３は胴部片で，外面には縦位方向に回転させた山形押型文が施されている。１～３は押型文土器に比定される。４は打製石鏃である。基部にわずかな抉りが確認できる。



第６図　遺構位置図，遺物出土状況図



第7図　1号・2号集石，縄文時代早期の遺物

第４節　縄文時代前期及び晩期の調査

中心となる包含層はⅣ層である。調査の結果，縄文時代前期の遺物は土器片１点が出土した。また，縄文時代晩期の遺物は深鉢，浅鉢及び石器等が出土した。

なお，遺構は検出されなかった。

遺物

１　土器

(1)　前期土器（第９図：５）

１点出土した。５は内外面ともに貝殻腹縁部による斜位及び横位の条痕を施している。轟Ａ式土器に比定される。

(2)　晩期土器

21 点を図化した。器形，文様等から黒川式土器に比定される。

深鉢（第９・10 図：６～14）

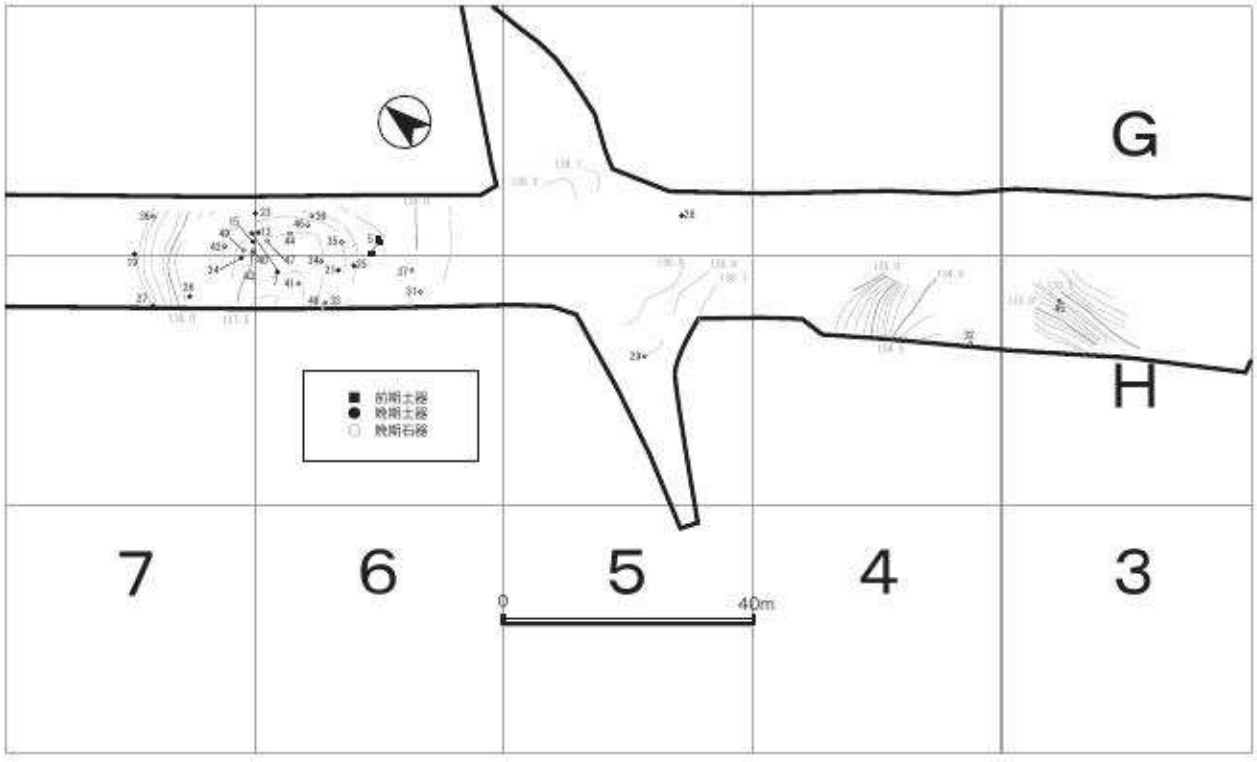
６～14 は深鉢である。６・７は口縁部が外反する器形である。２点とも内外面は貝殻腹縁部による調整である。10・12 は古墳時代の 19 号竪穴住居跡の埋土中から出土した。10 はやや張った胴部から外反しながら口縁部へ至る器形である。12 は弱い屈曲をもつ口縁部で，口径は 28cm を測る。11 は口縁部が内弯する器形である。口唇部から少し下がった位置に，つまみ出してナデ成形した突帯をもつ。

浅鉢（第 10 図：15～23）

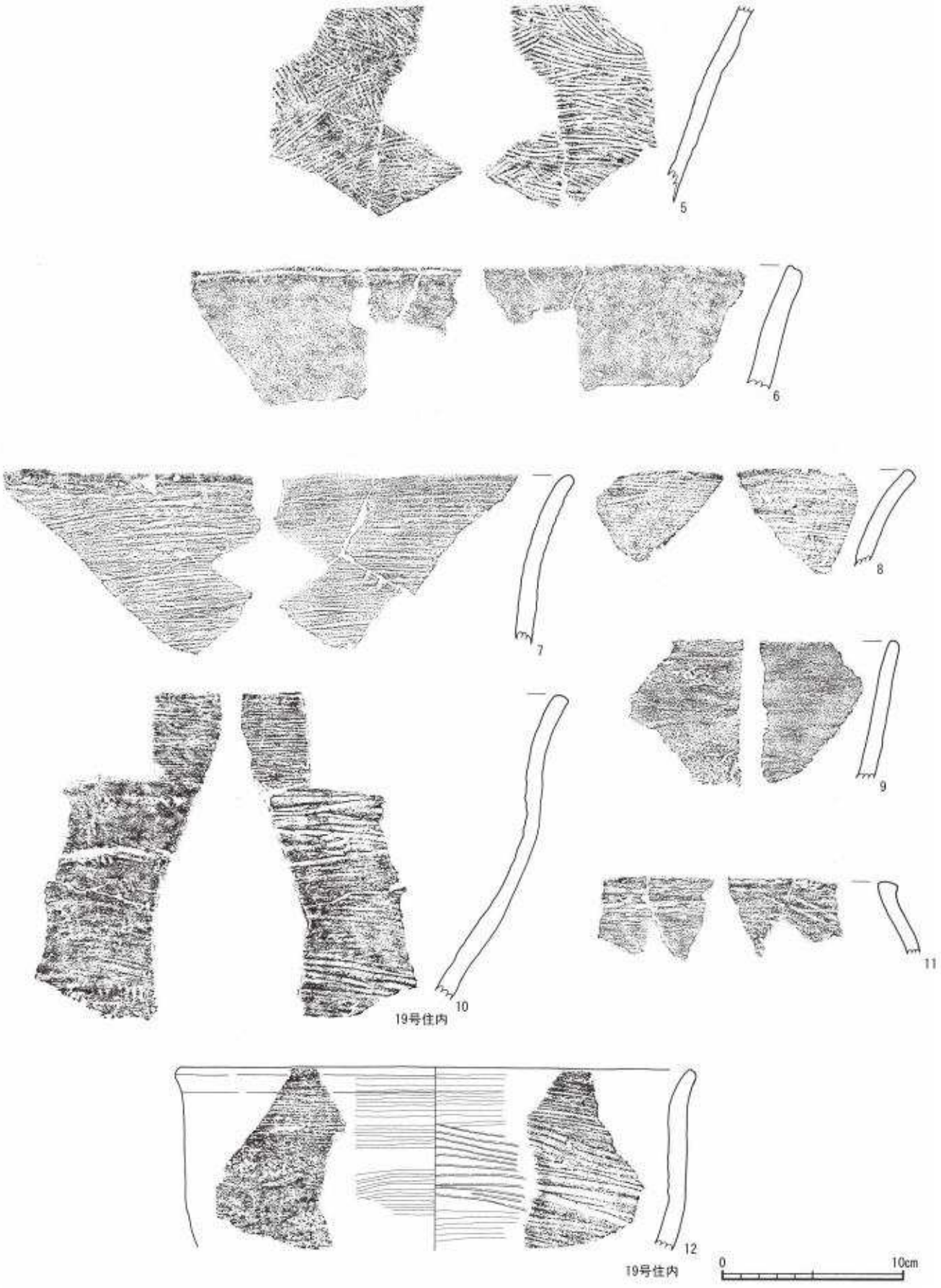
15～23 は浅鉢である。15 は胴部につまみ出してナデ成形した突帯をもつ。内外面に煤の付着が認められる。16 の口縁部外面の沈線は浅く，胴部は丸みをもつ。内外面とも全面に煤の付着が認められる。17 は器壁が比較的薄く，胴部から口縁部が緩やかに内弯する器形である。外面はミガキ及び煤の付着が認められるが，内面はナデ調整で口唇部のみ煤の付着が認められる。18 は縁を注口状に変形させており，特異な形状をしている。外面は全体的にミガキが認められるが，内面は口縁部付近のみにミガキが認められ，下方はナデ調整が施されている。外面にわずかに煤の付着が認められる。19 は胴部上部で内側へ「く」の字状に屈曲し，口縁部が緩やかに立ち上がる。21 は胴部から稜をもって屈曲し，さらに口縁部へ外反する。22 は山形を呈する口縁部で，内外面ともミガキ調整を行っている。

半粗半精製土器（第 10・11 図：24～28）

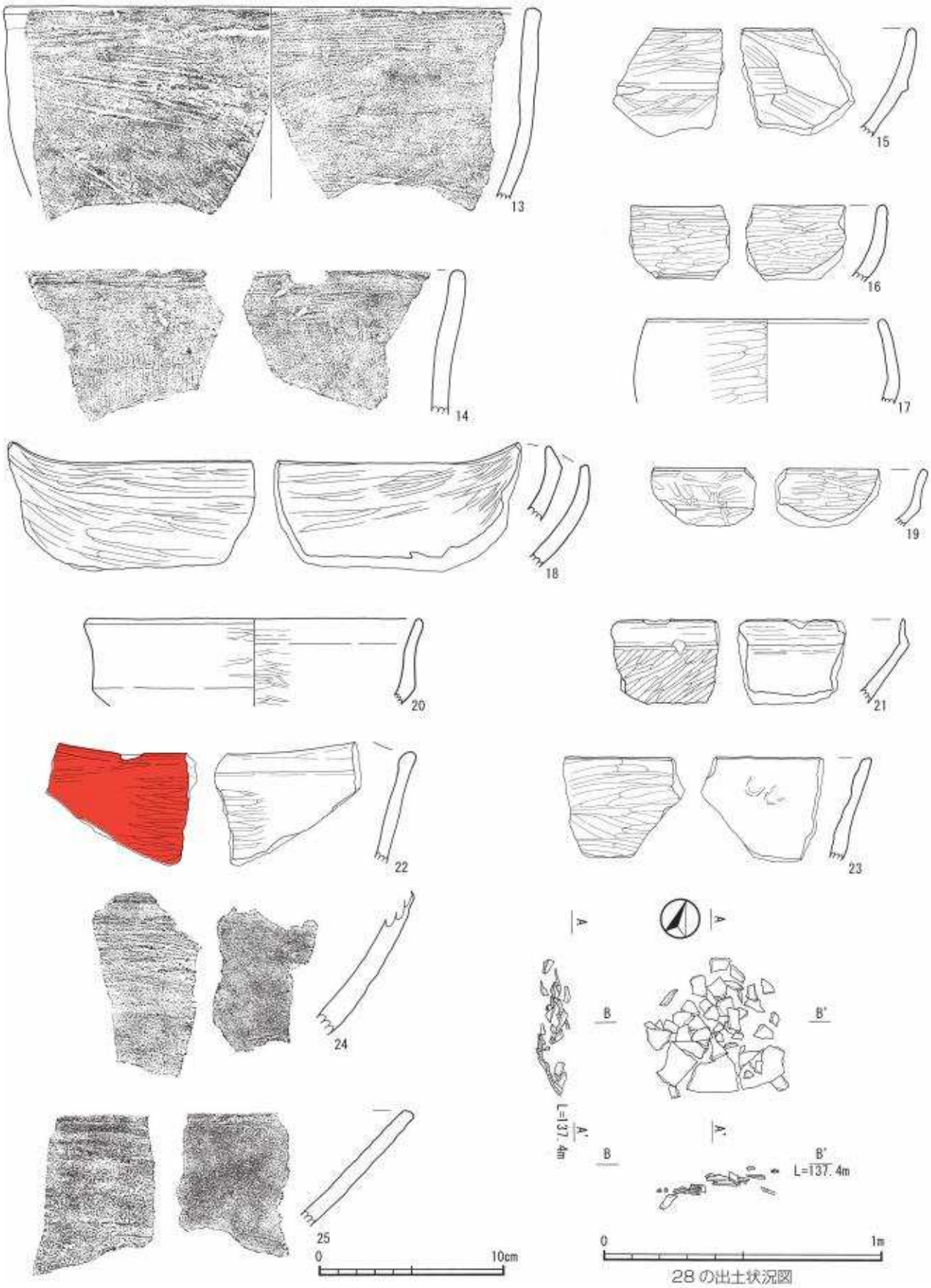
内面は丁寧なミガキにより平滑であるが，外面はナデによる粗い調整である。５点とも浅鉢である。23～25 は口縁部で，26 の内面は貝殻腹縁部による調整痕が残る。28 は口径 45.2cm，器高 16.2cm を測る。内面は横位にミガキ調整を行い，外面は口縁部から胴部にかけては粗いナデ調整を，胴部から底部にかけては貝殻腹縁部による調整を行っている。



第８図　遺物出土状況図

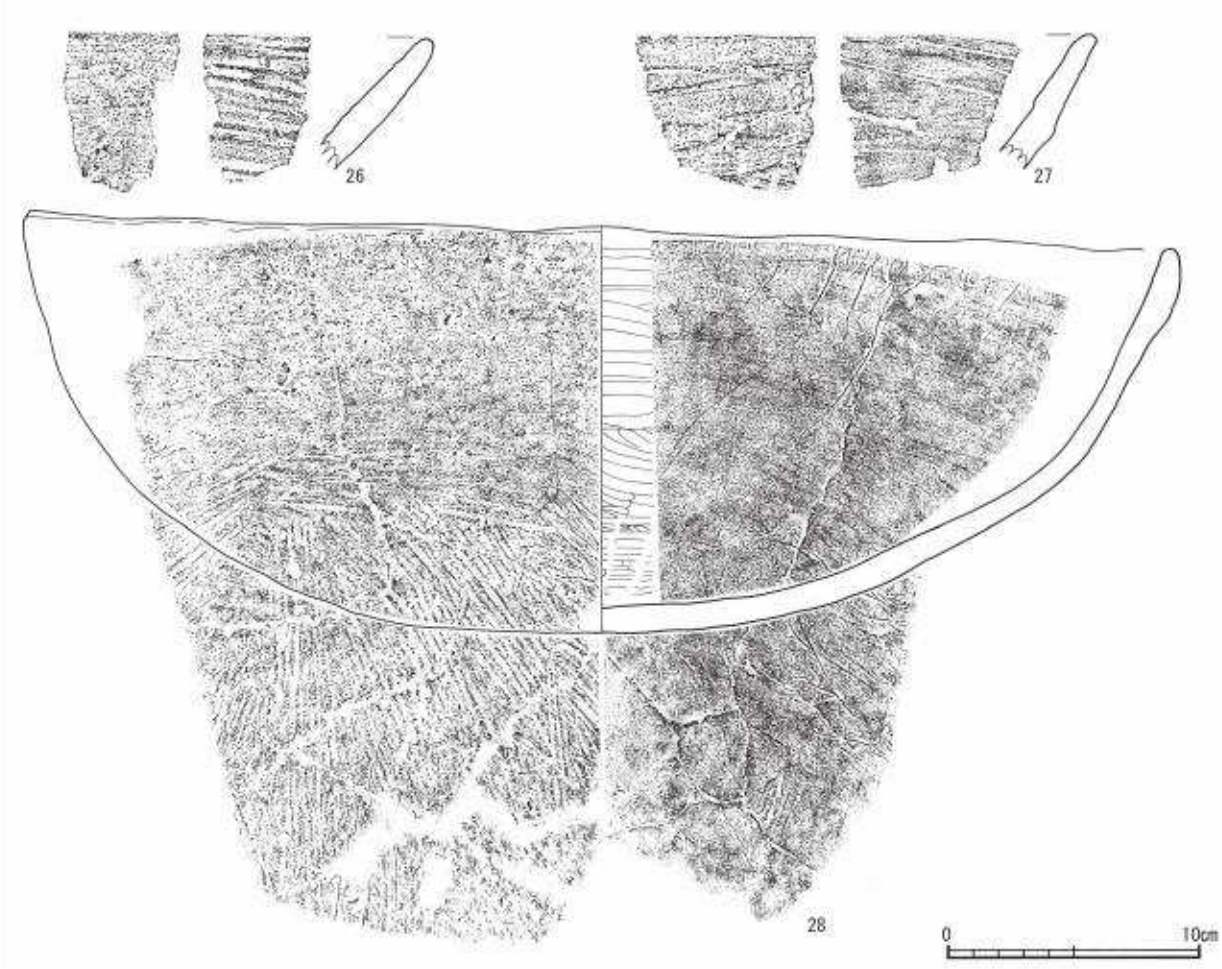


第９図　縄文時代前期の土器，縄文時代晩期の土器①



28の出土状況図

第10図　縄文時代晩期の土器②



第 11 図　縄文時代晩期の土器③

2　石器

縄文時代晩期土器と共伴して出土していることから，縄文時代晩期相当の石器と判断した。出土した石器は，打製石鏃・削器・打製石斧・敲石・凹石・石皿である。

なお，石材については肉眼的観察によるものである。

打製石鏃（第 12 図：29 ～ 32）

4 点を図化した。29・30 は正三角形状を呈し，基部が浅く凹む。31 は二等辺三角形状を呈し，明確に脚部が作出された深い抉りが見られる。32 はⅢ層で出土し，長さ 3.1cm，幅 1cm，厚さ 0.6cm を測り，基部は欠損している。また茎を柄状に作出している。

削器（第 12 図：33）

33 は黒色安山岩の縦長剥片を素材とし，右側縁に入念な刃部調整が施されている。

打製石斧（第 12 図：34 ～ 36）

いわゆる有肩石斧と称される。34 は肩の張りが強く，刃部は曲刃を呈する。35 は扁平な剥片を素材として，肩の部分の抉りが強い。36 は基部で，全体的に細身の形状を呈し，肩部の抉りが浅い。

敲石・凹石（第 13 ～ 15 図：37 ～ 48）

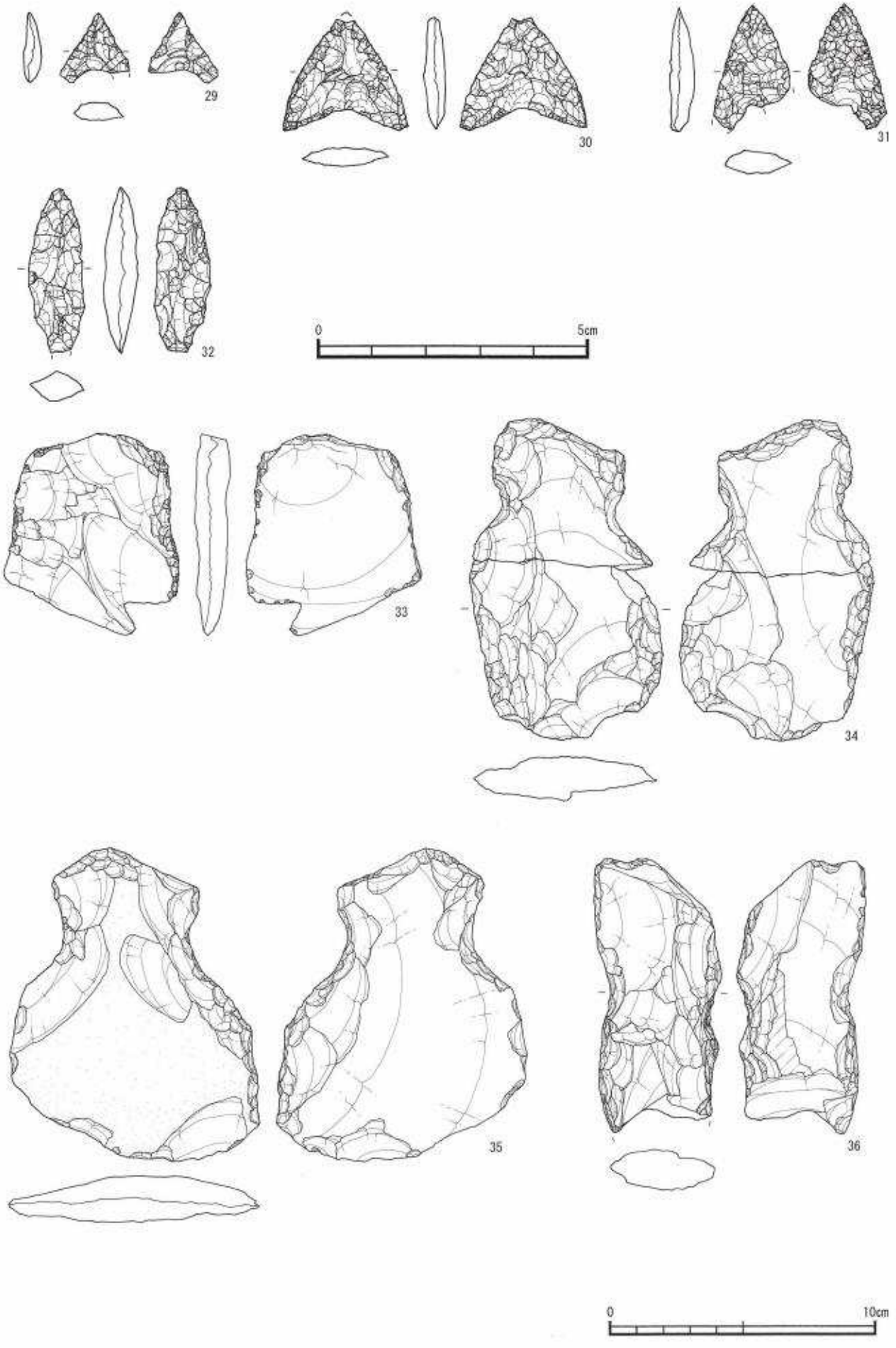
敲打痕が認められるものを一括して取り扱った。使用により凹石状に凹んでいるものは凹石とした。

37 ～ 44 は敲石である。37 は図示のような剥離面が認められたため，敲打具と判断した。38 は磨製石斧を転用した敲石である。39 ～ 41 は楕円礫を素材としている。40 は主に表面に敲打痕が，41 は主に裏面と周縁部に敲打痕が集中している。42 ～ 44 は棒状の楕円礫を素材としている。表裏面及び周縁部に敲打痕が認められる。

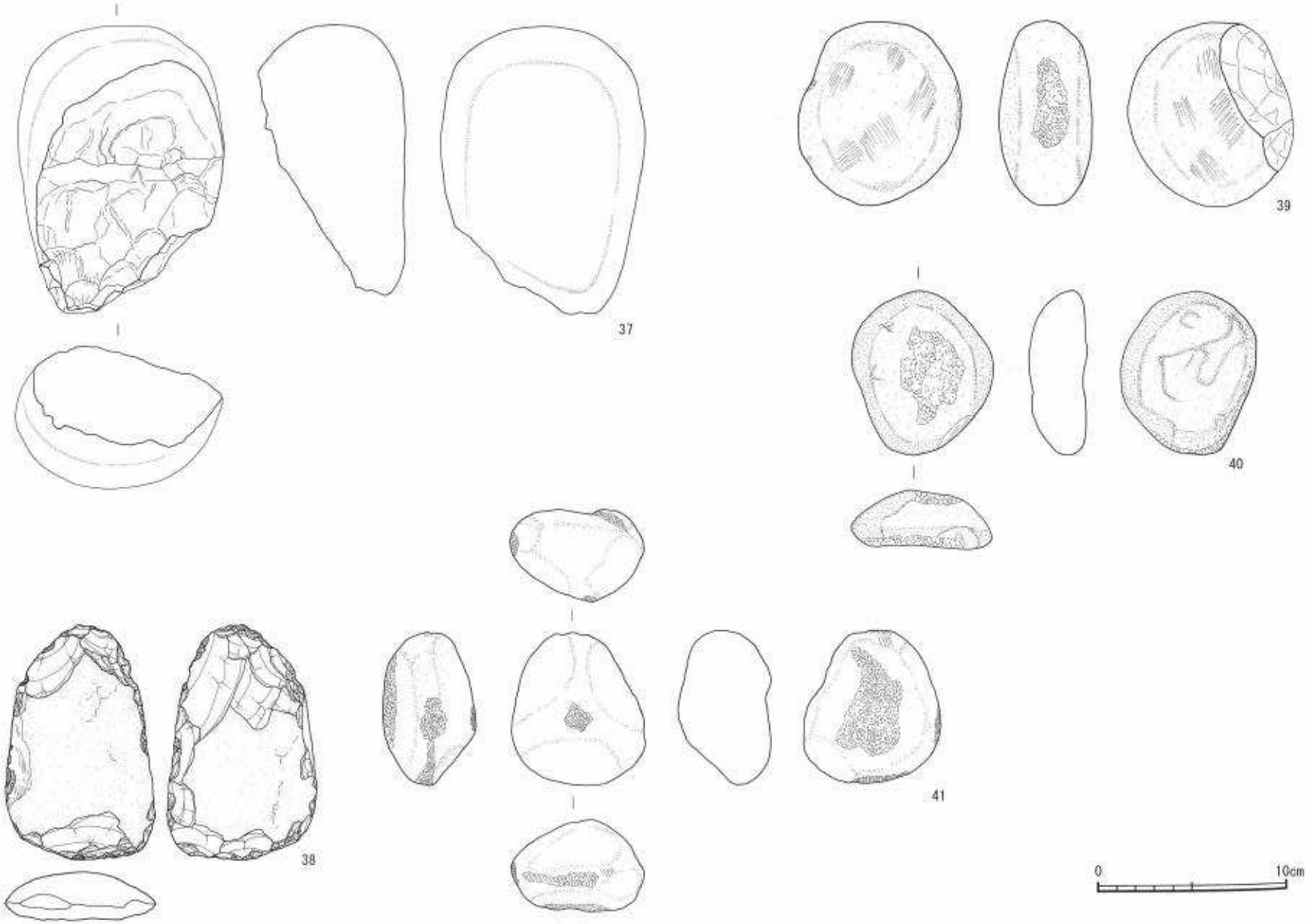
45 ～ 48 は凹石である。礫の平坦部は敲打による深い凹みが認められる。45・46 は表裏面の，47 は裏面の凹みが顕著である。48 は厚手の楕円礫を素材としている。表面に深い凹みが 1 箇所，浅い凹みが 3 箇所認められる。

石皿（第 15 図：49）

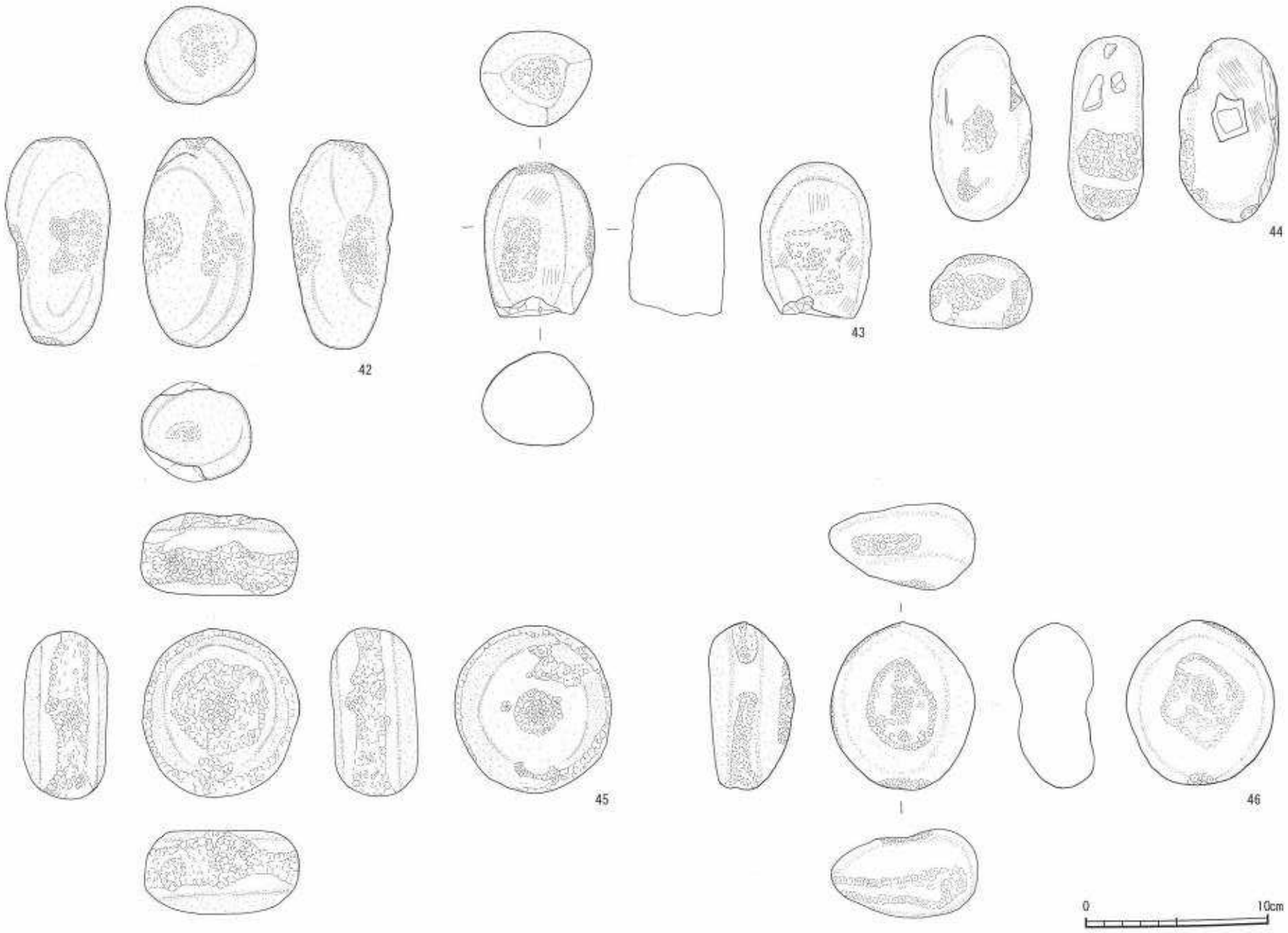
49 は厚手の角礫を素材とし，表面で作業をしているものである。よく使いこなされたもので作業面の凹みが著しい。



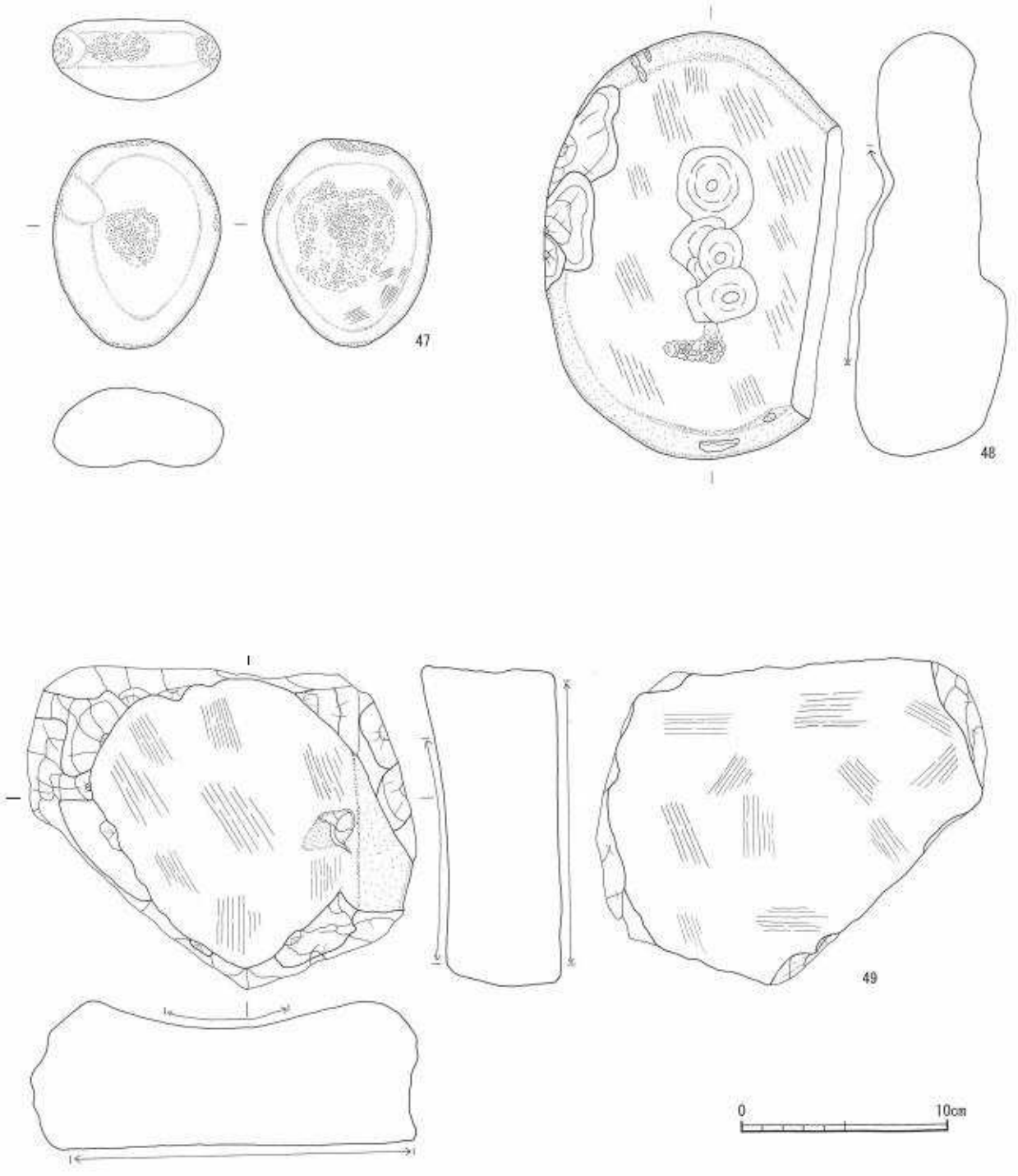
第12図　縄文時代晩期の石器①



第13図　縄文時代晩期の石器②



第14図　縄文時代晩期の石器③



第 15 図　縄文時代晩期の石器④

第５節　古墳時代の調査

中心となる包含層はⅢ層・Ⅳ層である。調査の結果，遺構はⅣ層で竪穴住居跡 20 軒，溝状遺構２条及び土坑１基を検出し，遺物は土師器，土製品及び石器等が出土した。

１　遺構

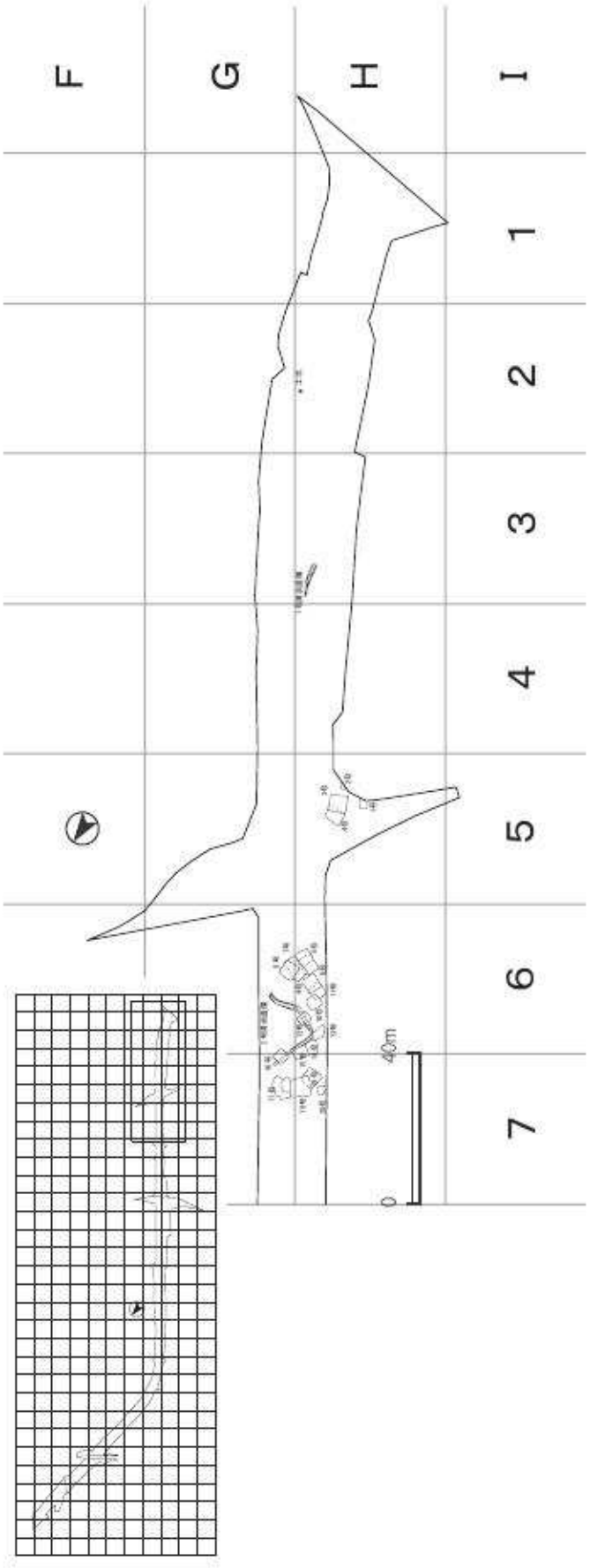
(1)　竪穴住居跡

Ｈ－５区で４軒（１号～４号），ＧＨ－６・７区で 16 軒（５号～ 20 号）を検出した。以下に，竪穴住居跡の調査過程について簡単に述べる。

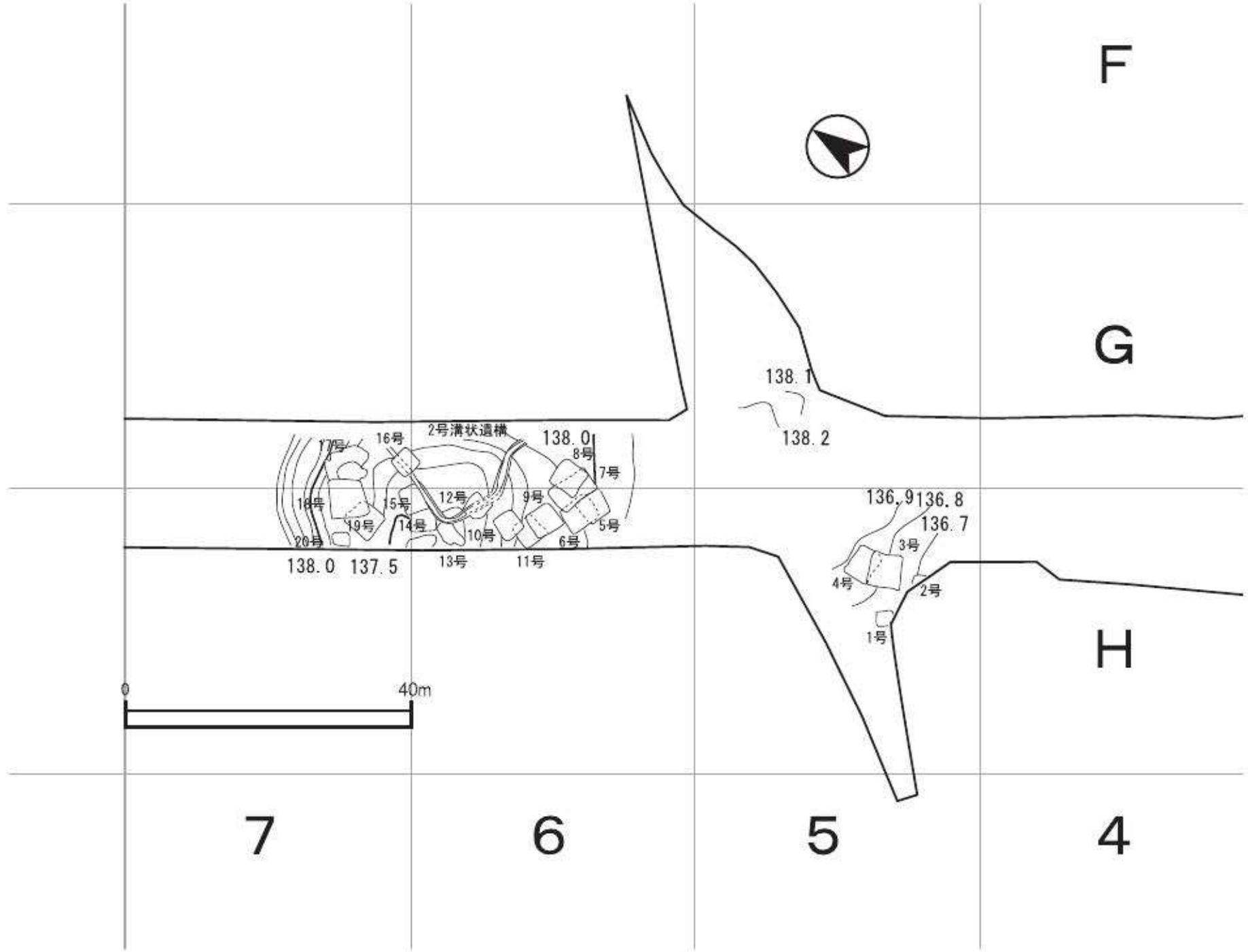
まず，Ｈ－５区の４軒は，平成 22 年度の調査で検出した。検出面は４軒ともⅣ層である。１号及び２号は平面形の一部が調査区外に延びていたため全体形を確認することができなかった。また，３号及び４号については検出時に重複を確認したものの，先後関係が不明であった。そこで，重複した箇所に幅 15cm のサブトレンチを入れて掘り下げを行ったところ，３号の貼り床が４号の貼り床を切っていることを確認した。したがって，３号が４号より新しいと判断して３号の完掘を先行した。

一方，ＧＨ－６区及びＧＨ－７区の一部箇所は平成 21 年度に調査を行い，Ⅳ層で 12 軒（５号～ 16 号）を検出した。ＧＨ－６区では，表土を剥いだところ東南側は削平を受けており，Ⅲ層及びⅣ層が残存していないことが分かった。また，Ⅲ層及びⅣ層が残存している箇所でも多くが攪乱を受けていた。そこで，攪乱の多い箇所での住居跡検出及び重複の先後関係の確定は，丁寧な精査を行ったり，攪乱箇所の土を除去した後の断面等を手がかりにしたりして行った。

さらに，ＧＨ－７区の未調査箇所は平成 22 年度に調査を行い，Ⅳ層で４軒（17 号～ 20 号）を検出した。17 号～ 19 号の３軒は平面形を検出した時点で重複していることを確認した。ここでも，重複した箇所にサブトレンチ等を入れて掘り下げを行い，貼り床の切り合い関係を確認して先後関係の判断を行った。



第 16 図　遺構位置図①


F
G
H
7
6
5
4
138.1
138.2
2号溝状遺構
138.0
8号
7号
16号
17号
18号
19号
20号
15号
14号
12号
9号
10号
6号
5号
13号
11号
138.0 137.5
136.9
136.8
136.7
3号
4号
2号
1号
0
40m

第17図　遺構位置図②

1号竪穴住居跡（第18図）

［位置と確認］H－5区に位置し，Ⅳ層精査中に隅丸方形の暗褐色土の落ち込みを確認した。
［重複］なし
［平面形・規模］住居跡南側は調査区外へ延びるが，隅丸方形と推定される。規模は長軸2m80cm，推定短軸2m60cmである。長軸方向はN-50°-Eである。
［床面］床面はほぼ平坦で貼り床を伴う。貼り床は床面の中央部に広がっており，3cm～5cmの厚みがある。検出面から床面までの最深部は約30cmである。
［柱穴等］住居跡北東側に土坑1基を検出した。規模は60cm×50cmの楕円形で，深さが約10cmの浅い掘り込みをもつ。埋土は一様で，約1cm大の黄色軽石及び約5mm大の炭化物が点在する。
［炉］検出されなかった。
［埋土］暗褐色土主体である。埋土内には約1mm～1cm大の白色パミスが点在していた。

1号竪穴住居跡内出土遺物（第18図：50～52）

50は甕の脚部である。「ハ」の字状に外反し，脚部内面の天井部は下方に膨らむ。

51・52は壺である。51は頸部から口縁部へと外に開きながらまっすぐに伸びている。また，頸部下部に1条の三角突帯が貼り付けられている。52は胴部に幅広の突帯が貼り付けられている。突帯の文様は，左下がり方向のヘラ押圧後，右下がり方向のヘラ押圧を行う斜格子状である。

2号竪穴住居跡（第19図）

［位置と確認］H－5区に位置し，Ⅳ層精査中に住居跡の一角を確認した。
［重複］なし
［平面形・規模］住居跡北側のみ検出で，全体の形は不明である。
［床面］床面はほぼ平坦で，検出面から最深部は約25cmである。貼り床は確認されず，掘り込んだ地山面が当時の床面と考えられる。
［柱穴等］検出されなかった。
［炉］検出されなかった。
［埋土］暗褐色土主体で，柔らかめの土質である。埋土内には約1mm～1cm大の橙色パミスが点在していた。

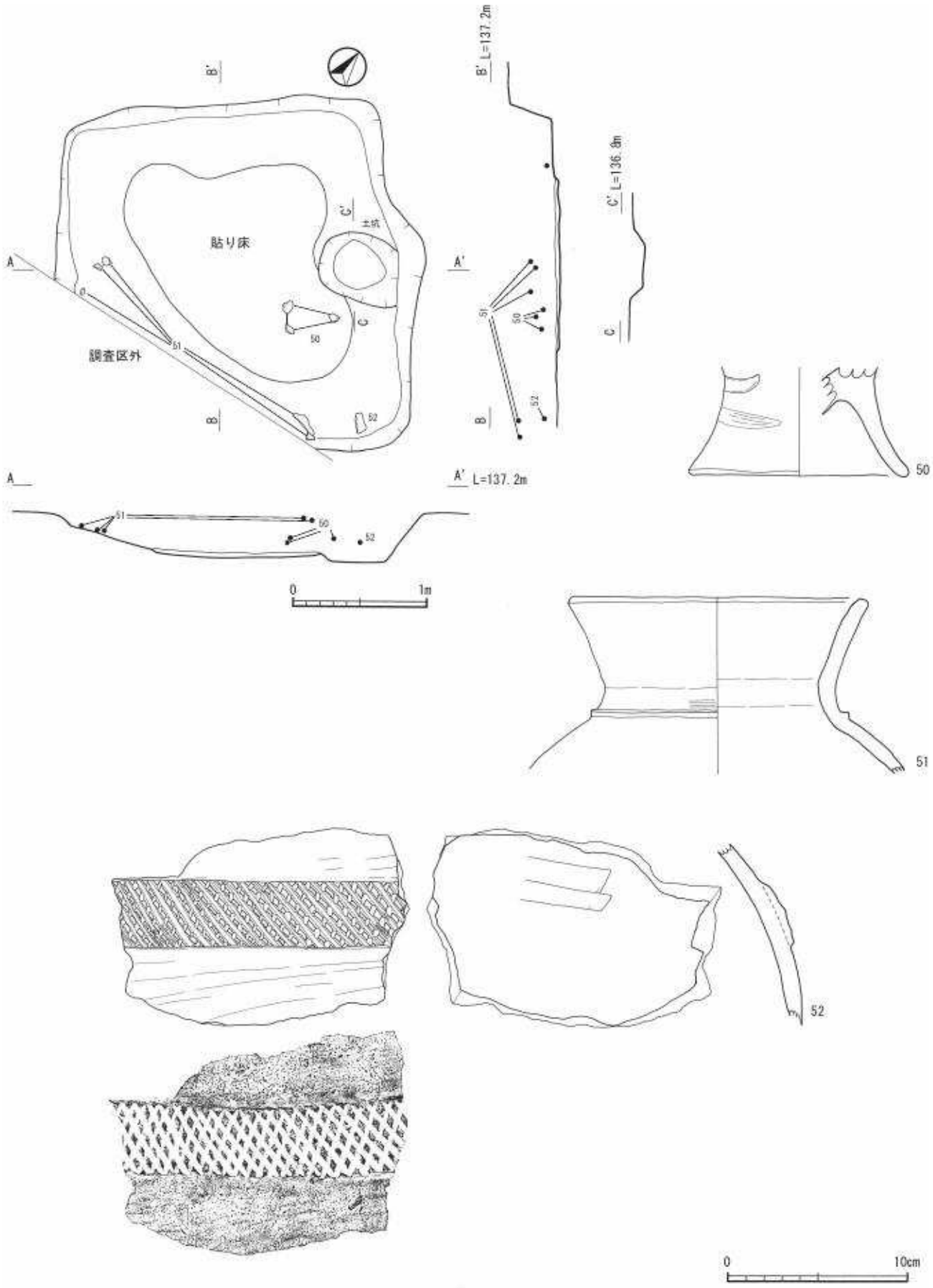
2号竪穴住居跡内出土遺物（第19図：53～58）

53～55は甕である。53は肥厚口縁で，口縁部はほぼ直行した器形である。54は口縁部がほぼ直行した器形で，指頭押圧を施した三角突帯が貼り付けられている。55は脚部で「ハ」の字状に外反する。脚部内面の天井部は下方に膨らむ。

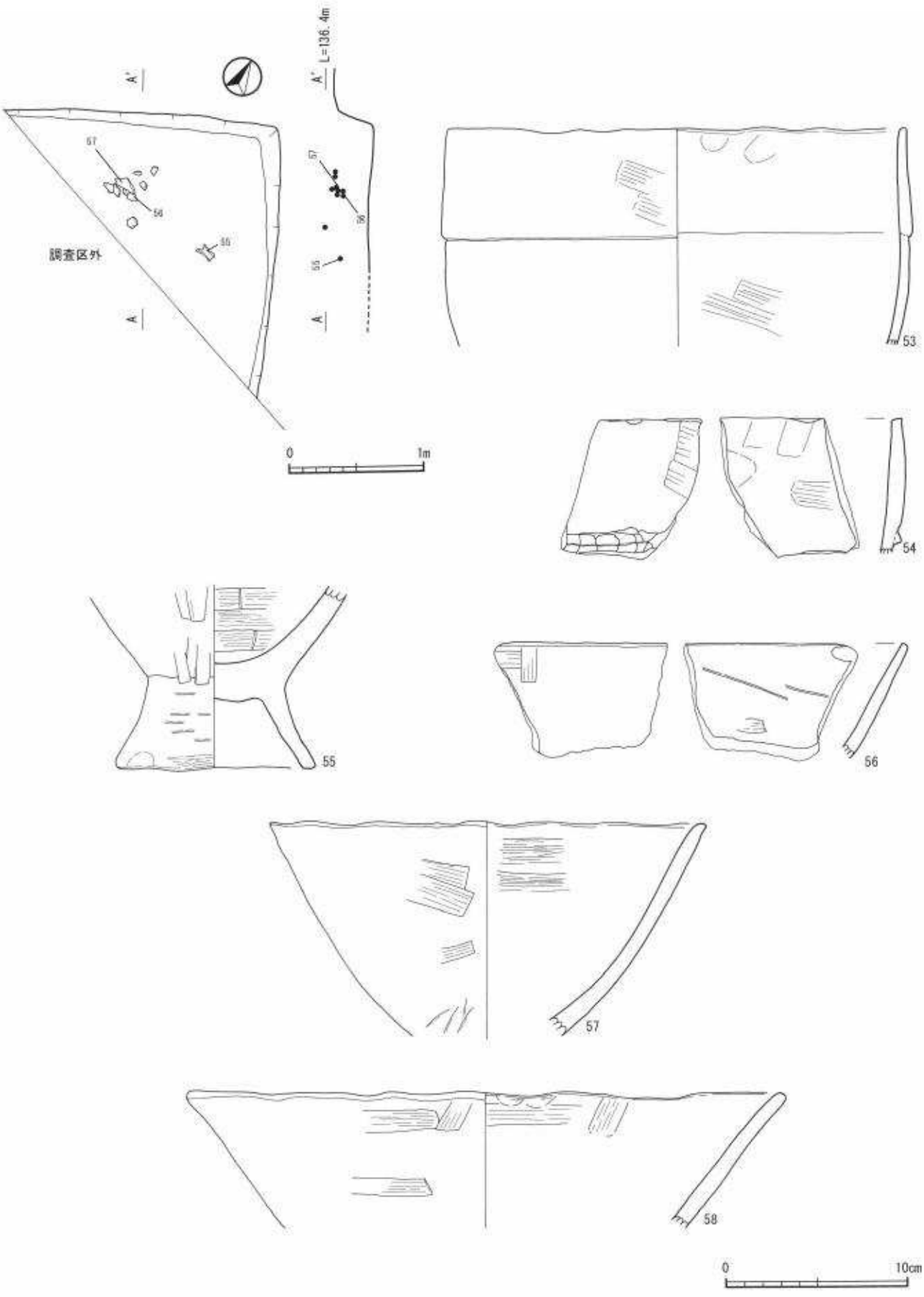
56～58は鉢である。57は椀状の器形をもつ。内外面とも煤付着及び赤化が認められ被熱を窺わせる。

3号竪穴住居跡（第20図）

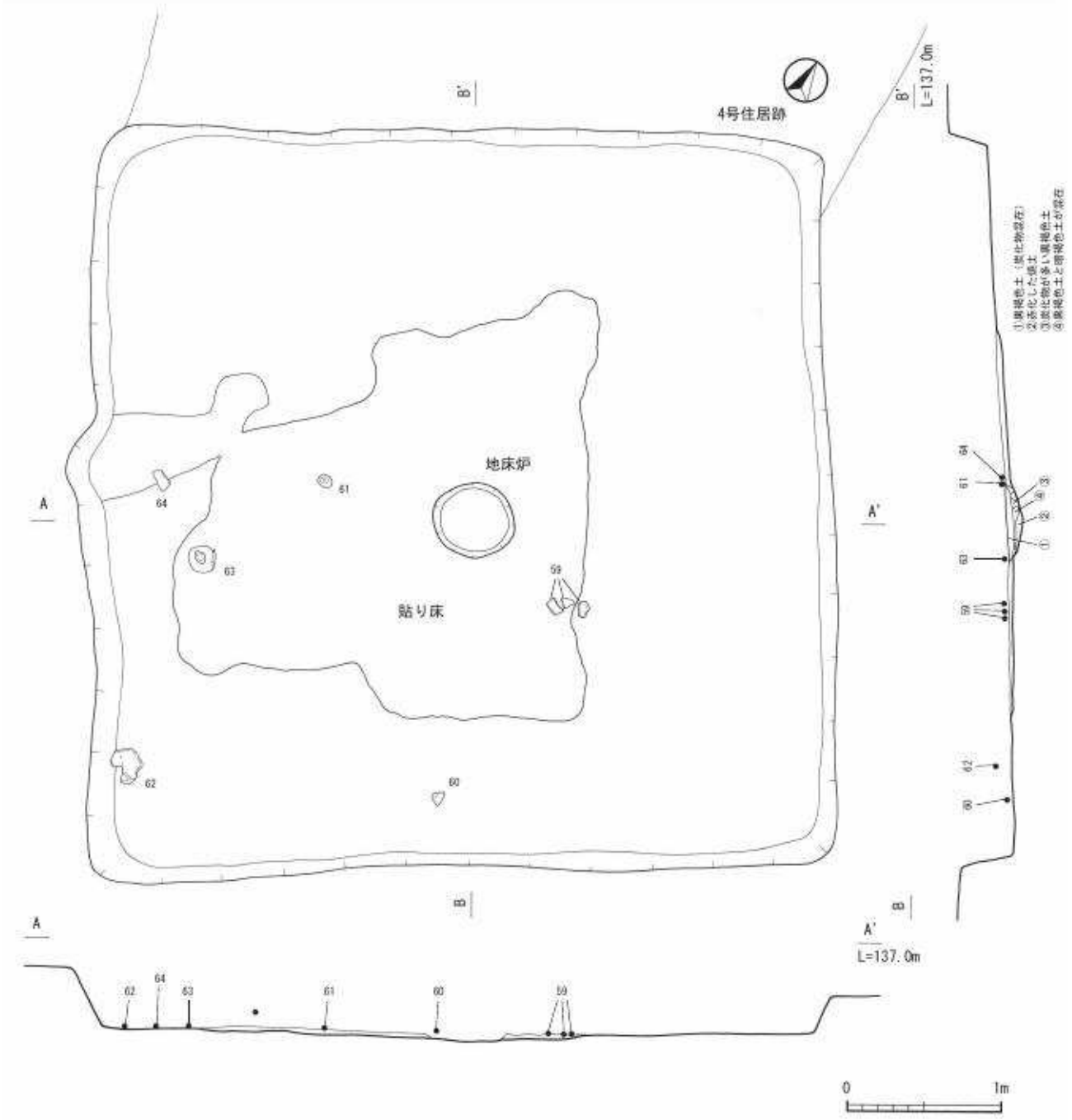
［位置と確認］H－5区に位置し，Ⅳ層精査中に隅丸方形の暗褐色土の落ち込みを確認した。検出時に4号と重複していたため，掘り下げを行いつつ，重複箇所にはサブトレンチを設定して先後関係を探った。その結果，3号の貼り床が4号の貼り床を切っていることを確認した。
［重複］4号と重複し，4号より新しい。
［平面形・規模］隅丸方形で，規模は長軸4m90cm，短軸4m70cmである。長軸方向はN-60°-Eである。
［床面］床面はほぼ平坦で貼り床を伴う。貼り床は3cm～5cmの厚みがあり，中央部から南西方向に広がっている。検出面から床面までの最深部は約40cmである。また，南西側壁面で貼り床とは別の硬化面を検出した。この硬化面の性格は不明である。
［柱穴等］検出されなかった。
［炉］床面ほぼ中央部に地床炉を検出した。規模は52cm×50cmの円形で，約5cmの浅い掘り込みをもつ。炉内の埋土の上面は炭が混じった黒褐色土で，炉の検出面から約2cm下からは赤化した焼土を確認した。
［埋土］暗褐色土主体である。埋土内には約1mm～1cm大の白色パミスが点在していた。
［特記］地床炉内の埋土を採取し，ウォーターフローテーションによって採集した炭化物の放射性炭素年代測定を行った。その結果は，1,580±30（yrBP）であった。



第18図　1号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物



第19図　2号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物



第20図　3号竪穴住居跡

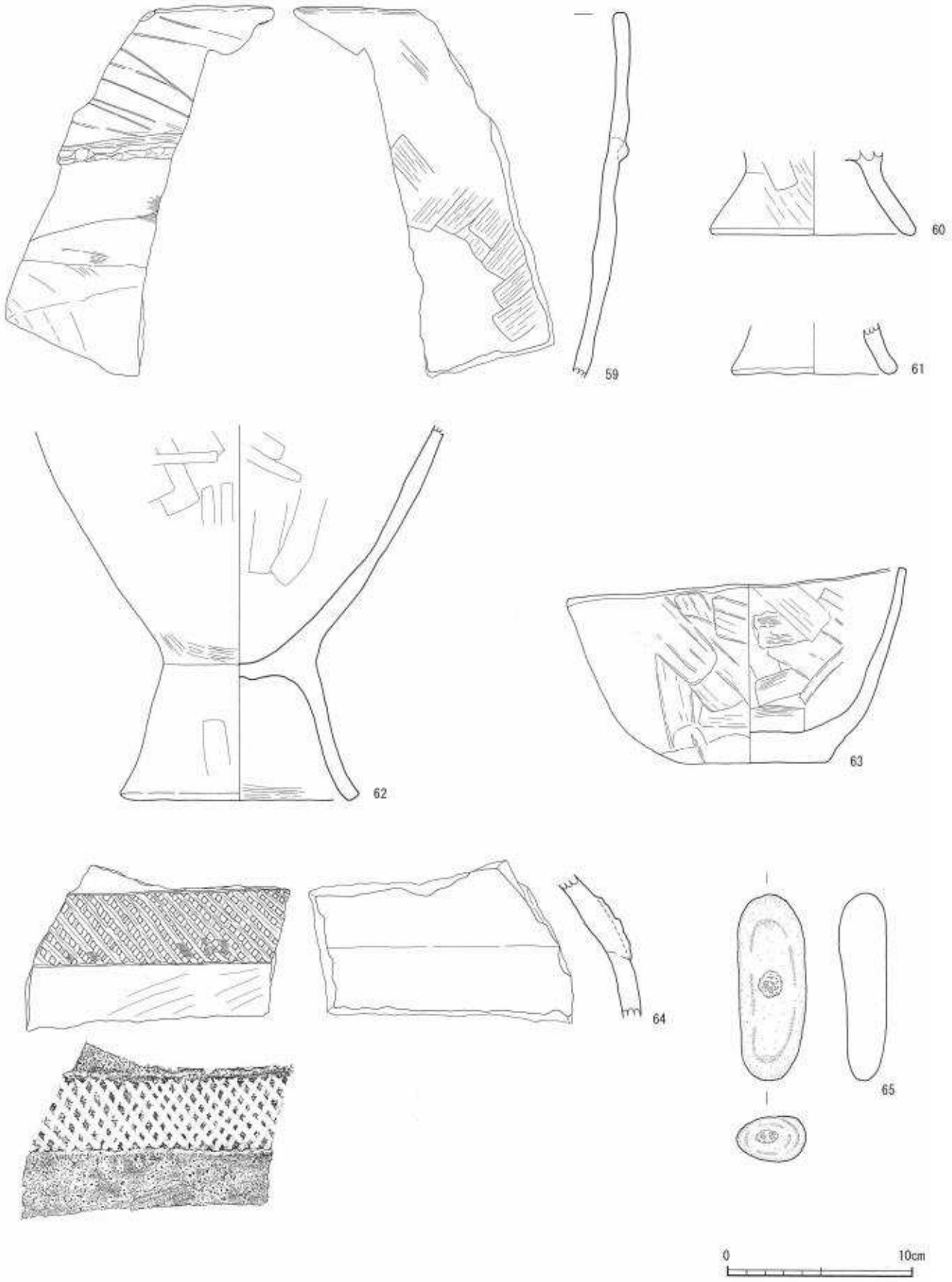
3号竪穴住居跡内出土遺物（第21図：59～65）

59～62は甕である。59は口縁部から胴部で，口縁下部には指頭押圧を施した三角突帯が貼り付けられている。また，口縁部と三角突帯の間に工具を用いた条線が斜方向に施されている。60・61は脚部で「ハ」の字状に外反する。62は胴部から脚部である。脚部は緩やかに開き，高さは6.8cmを測る。内面の天井部は，わずかに下方に膨らむ。なお，器形及び焼成から59と同一個体の可能性がある。

63は椀状の器形をした鉢である。ヒビ割れを補修する際の粘土の貼り付けが所々に見られる。また，指頭痕が全体に残る粗い作りである。

64は壺である。胴部には幅広の突帯が貼り付けられている。突帯には，左下がり方向のヘラ押圧後，右下がり方向のヘラ押圧を行い，斜格子状の文様が施されている。1号竪穴住居跡内遺物の52と器形，文様，焼成等が類似しており同一個体の可能性がある。

65は棒状敲石である。表面中央部と下面に敲打痕が観察される。



第21図　3号竪穴住居内出土遺物

４号竪穴住居跡（第 22 図）

［位置と確認］Ｈ－５区に位置し，Ⅳ層精査中に隅丸方形の暗褐色土の落ち込みを確認した。検出時に３号と重複していたため，重複箇所以外の掘り下げを先行した。重複箇所の調査の結果，３号に切られていることが判明したため，３号完掘ののち４号の完掘を行った。

［重複］３号と重複し，３号より古い。

［平面形・規模］住居跡南側は３号に切られているため残存していないが，隅丸方形と推定される。規模は長軸４m50cm，残存短軸２m80cm である。長軸方向は N-87° -E である。

［床面］床面はほぼ平坦で貼り床を伴う。貼り床は２cm ～５cm の厚みがあり，中央から南側への広がりが推定される。検出面から床面までの最深部は約 35cm である。

［柱穴等］検出されなかった。

［炉］床面ほぼ中央部に地床炉を検出した。50cm × 50cm の円形で，10cm の浅い掘り込みをもつ。炉内の埋土は，上面は炭が混じった黒色土で，その下からは黒色土及び暗褐色土の混ざりが一様に堆積していた。

［埋土］暗褐色土主体である。埋土内には約１mm ～１cm 大の白色パミスが点在していた。また，床面で出土した炭化木材周辺の埋土には，多量の炭化物が含まれていた。

［特記］上記のように本住居跡の埋土内には，多量の炭化物が含まれ，床面では炭化木材が出土した。これらの状況から，本住居跡は焼失住居跡と推定される。また，地床炉内の埋土を採取し，ウォーターフローテーションによって採集した炭化物の放射性炭素年代測定を行った。その結果は，1,610 ± 30（yrBP）であった。

４号竪穴住居跡内出土遺物（第 22 図：66・67）

66 は口縁部が内弯する甕である。口縁下部に軽く指頭押圧を施した三角突帯が貼り付けられている。

67 は高坏の口縁部で，三角突帯が貼り付けられている。また，外面には赤色顔料が施されている。

５号竪穴住居跡（第 23 図）

［位置と確認］Ｈ－６区に位置し，Ⅳ層精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。５号～８号は攪乱が多い箇所で検出したため，平面形プラン及び重複の確定が大変困難であった。そこで，先述のとおり，移植ゴテ等で丁寧な精査を行ったり，攪乱箇所の土を除去した後の断面状況を手がかりにしたりして平面形プランを推定し，ロープで推定プランを囲んだ後に掘り下げを行った。

［重複］６号及び７号と重複し，６号より新しく７号より古い。

［平面形・規模］６号及び７号と重複したり，攪乱を受けたりしているために全体形は確定できなかったが，推定線のような隅丸方形と考えられる。規模は推定長軸約３m90cm，推定短軸約３m70cm である。長軸方向は N-18° -E である。

［床面］床面はほぼ平坦で貼り床を伴う。貼り床も攪乱を受け残存が少ない。貼り床は２cm ～４cm の厚みがあり，中央から西側への広がりが推定される。検出面から床面までの最深部は約 35cm である。

［柱穴等］ピット１基を検出した。検出面からの深さは約 60cm である。ピット内の埋土は灰褐色土と茶褐色土が混在している。

［炉］検出されなかった。

［埋土］暗褐色土主体である。

５号竪穴住居跡内出土遺物（第 23 図：68 ～ 70）

68 は「ハ」の字状に外反する甕の脚部である。

69･70 は壺の胴部である。69 はヘラ押圧の刻目突帯が，70 は布目痕が認められる刻目突帯が貼り付けられている。

６号竪穴住居跡（第 24 図）

［位置と確認］Ｈ－６区に位置し，Ⅳ層精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

［重複］５号及び７号と重複し，５号及び７号より古い。

［平面形・規模］５号及び７号と重複したり，攪乱を受けたりしているため全体形は確定できなかったが，隅丸方形と推定される。規模は推定長軸約３m70cm で，短軸は不明である。長軸方向は N-20° -E である。

［床面］床面はほぼ平坦である。検出面から床面までの最深部は約 25cm である。

［柱穴等］床検出面から約 20cm の深さでピット１基を検出した。ピットの深さは 65cm である。

［炉］検出されなかった。

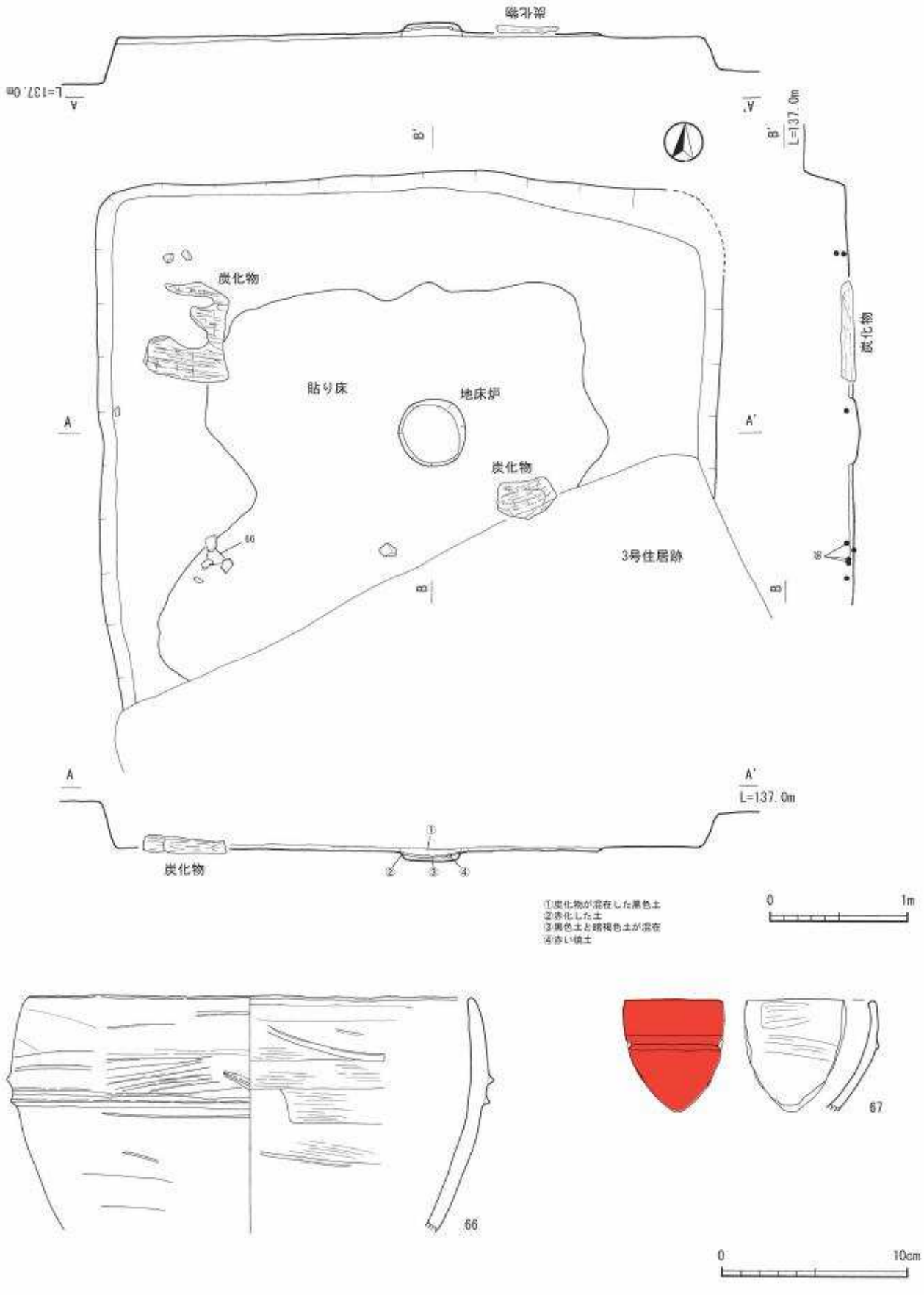
［埋土］暗褐色土主体である。

６号竪穴住居跡内出土遺物（第 24 図：71 ～ 73）

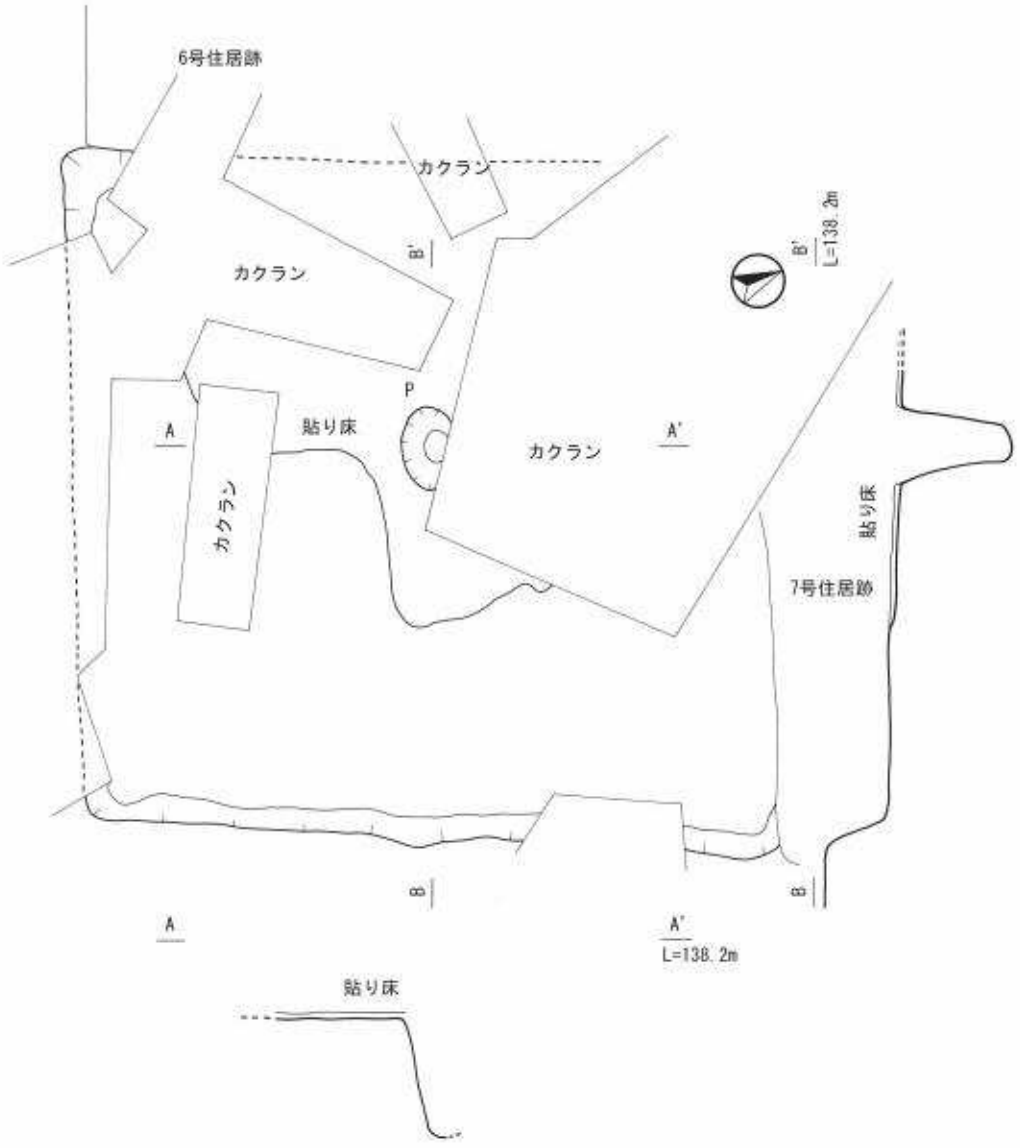
71 は甕の脚部である。

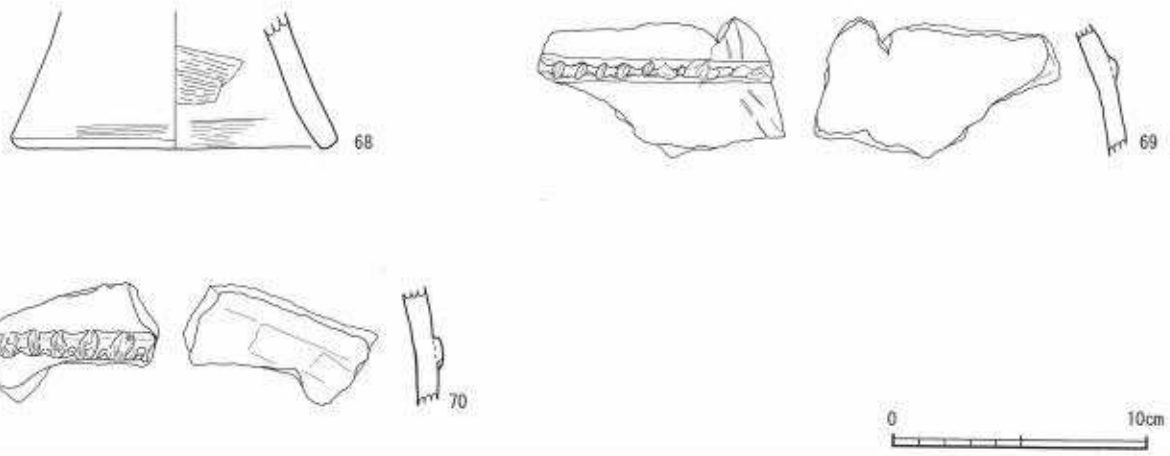
72 は壺の胴部で，布目痕が認められる刻目突帯が貼り付けられている。

73 は鉢の底部で，脚部が残存しない。

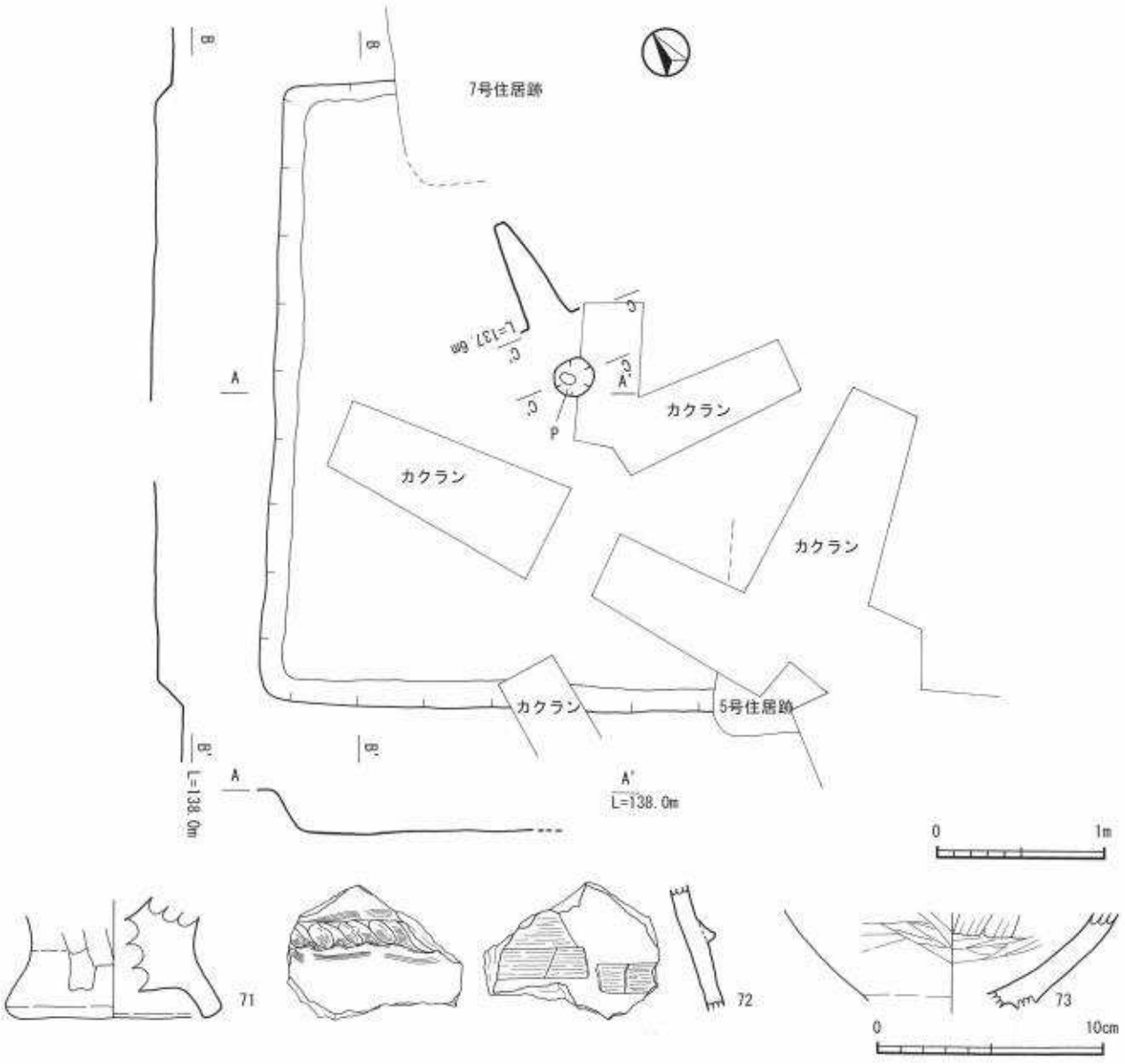


第22図　4号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物





第23図　5号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物



第24図　6号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物

7号竪穴住居跡（第25図）

［位置と確認］ＧＨ－６区に位置し，Ⅳ層精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

［重複］５号，６号及び８号と重複し，５号及び６号より新しく，８号より古い。

［平面形・規模］８号と重複しているため全体形は確定できなかったが，隅丸長方形と推定される。規模は長軸６m，推定短軸約３m50cmである。長軸方向はＳ-70°-Eである。

［床面］床面はほぼ平坦である。検出面から床面までの最深部は約35cmである。また，床面西側には貼り床と思われる硬化面の一部を検出した。

［柱穴等］床面で柱穴３基を検出した。検出面から深さは，P1が55cm，P2が58cm，P3が45cmである。

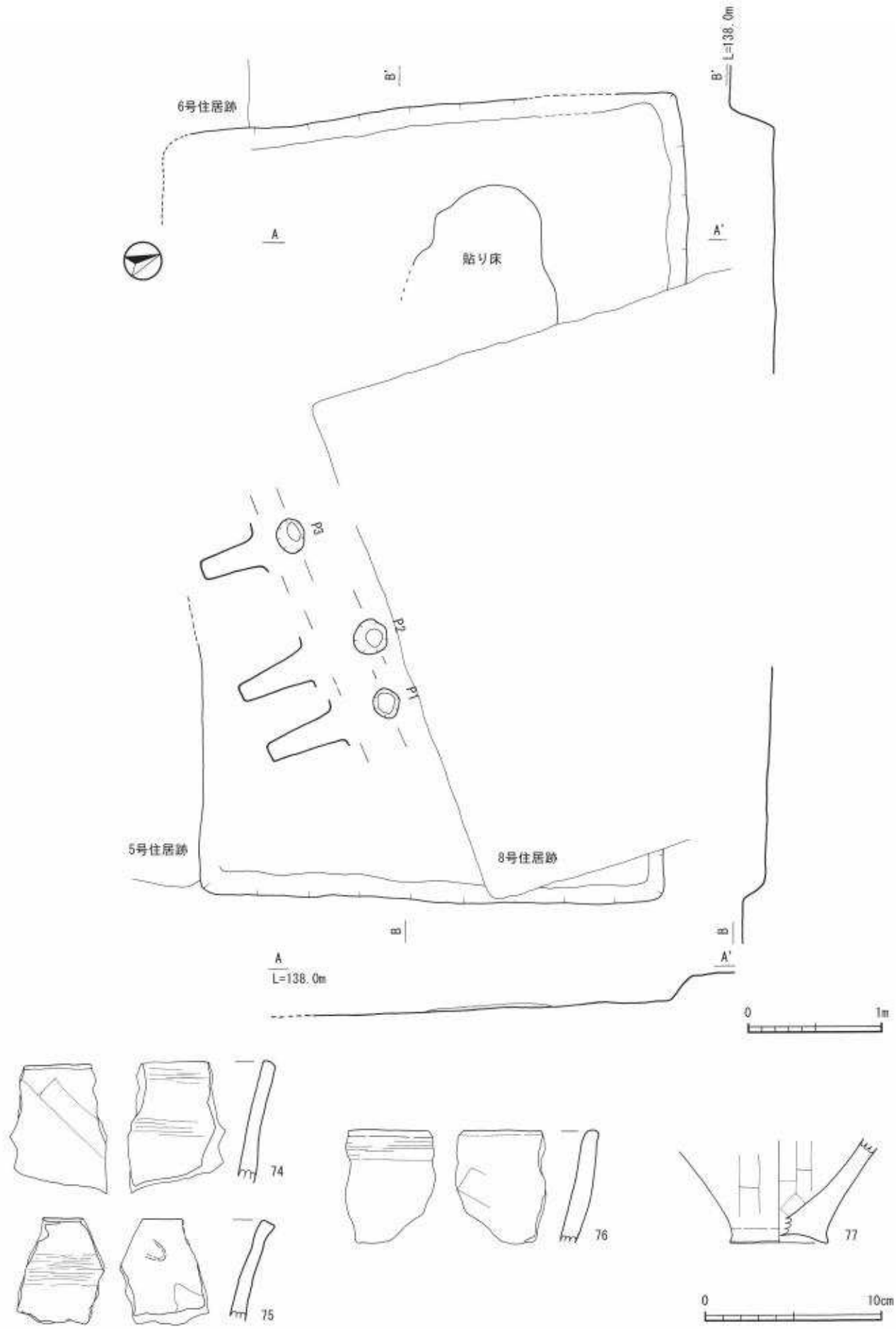
［炉］検出されなかった。

［埋土］暗褐色土主体である。

7号竪穴住居跡内出土遺物（第25図：74～77）

74～76は甕の口縁部である。74・75は外反して開く器形で，74は口縁下部で段をもつ。また，75の口唇部は平らな作りをしている。

77は鉢の底部で，胴部へと緩やかに開く形状をしている。



第25図　7号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物

8号竪穴住居跡（第26図）

［位置と確認］ＧＨ－６区に位置し，Ⅳ層精査中に隅丸方形の暗褐色土の落ち込みを確認した。

［重複］７号と重複し，７号より新しい。

［平面形・規模］隅丸方形で，規模は長軸４m10cm，短軸３m90cmである。長軸方向は真北方向である。

［床面］床面はほぼ平坦で貼り床を伴う。貼り床は床面中央部に広がっており，２cm～５cmの厚みがある。検出面から床面までの最深部は約35cmである。

［柱穴等］床面で柱穴２基を検出した。地床炉の両側に位置する。検出面からの深さは，P1が30cm，P2が45cmである。

［炉］床面のほぼ中央部で地床炉を検出した。規模は45cm×45cmの円形で，約５cmの浅い掘り込みをもつ。地床炉周辺の床面が焼けた状況は確認できなかった。また，地床炉の中心から約90cm離れた所にP1が，約70cm離れた所にP2が位置する。

［埋土］暗褐色土主体である。

［特記］住居跡内の埋土を採取し，ウォーターフローテーションによって採集した炭化物の放射性炭素年代測定を行った。その結果は，1,540±30（yrBP）であった。

8号竪穴住居跡内出土遺物（第26図：78～83）

78・79は甕である。79は口縁部が内弯する器形で，78は布目痕が認められる刻目のある三角突帯が貼り付けられた胴部である。

81・82は壺である。81は外反する口縁部で，口唇部は平坦な作りである。82は胴部で，布目痕が認められる刻目の三角突帯が貼り付けられている。

80は高坏の脚部で筒部をもたずに緩やかに広がる。

83は鉢の底部で平底である。

9号竪穴住居跡（第27図）

［位置と確認］Ｈ－６区に位置し，Ⅳ層精査中に隅丸方形の暗褐色土の落ち込みを確認した。

［重複］11号と重複し，11号より新しい。

［平面形・規模］隅丸方形で，規模は長軸４m20cm，短軸３m90cmである。長軸方向はS -70° -Eである。

［床面］床面はほぼ平坦で貼り床を伴う。貼り床は攪乱を受けており南側の一部しか残存していない。検出面から床面までの最深部は約60cmである。

［柱穴等］床面にピット４基を検出した。形状及び深さから内２基（P1，P2）を柱穴と認定した。検出面からの深さはP1が43cm，P2は55cmである。また，P3は18cm，P4は12cmである。

［炉］検出されなかった。

［埋土］暗褐色土主体である。

［特記］住居跡内の埋土を採取し，ウォーターフローテーションによって採集した炭化物の放射性炭素年代測定を行った。その結果は，1,610±30（yrBP）であった。

9号竪穴住居跡内出土遺物（第27図：84～86）

84・85は甕である。84は突帯を貼り付けた胴部で，85は「ハ」の字状に外反する脚部である。脚部内面の天井部は下方に膨らむ。

86は胴部がやや丸みを帯びた器形の鉢である。

10号竪穴住居跡（第28図）

［位置と確認］Ｈ－６区に位置し，Ⅳ層精査中に隅丸方形の暗褐色土の落ち込みを確認した。

［重複］11号と重複し，11号より新しい。

［平面形・規模］隅丸方形で，規模は長軸３m50cm，短軸３m15cmである。長軸方向はN -20° -Eである。

［床面］床面はほぼ平坦で貼り床を伴う。貼り床は床面の中央部から南側に広がっており，３cm～６cmの厚みがある。検出面から床面までの最深部は約40cmである。

［柱穴等］南壁際に土坑１基，床面に柱穴５基を検出した。柱穴のP1とP4は地床炉の両側で検出した。土坑の規模は85cm×70cmの楕円形で，深さ約30cmの掘り込みをもつ。柱穴の検出面からの深さは，P1が43cm，P2が45cm，P3が35cm，P4が40cm，P5が50cmである。

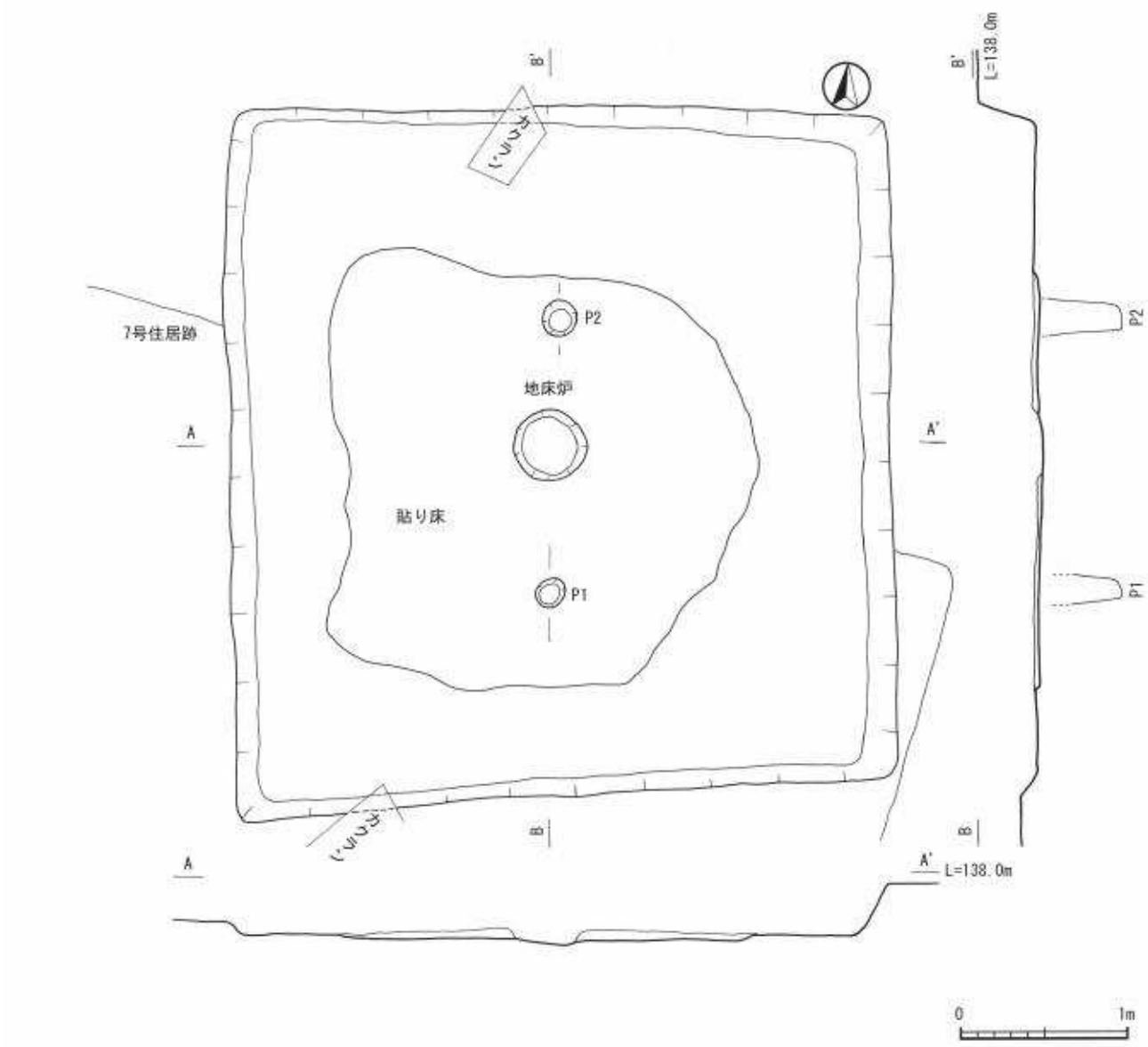
［炉］床面の中央部に地床炉を検出した。規模は65cm×45cmの楕円形で，10cmの浅い掘り込みをもつ。埋土は一様で，灰褐色土主体である。また，地床炉の中心から約１m離れた所にP1及びP4が位置する。

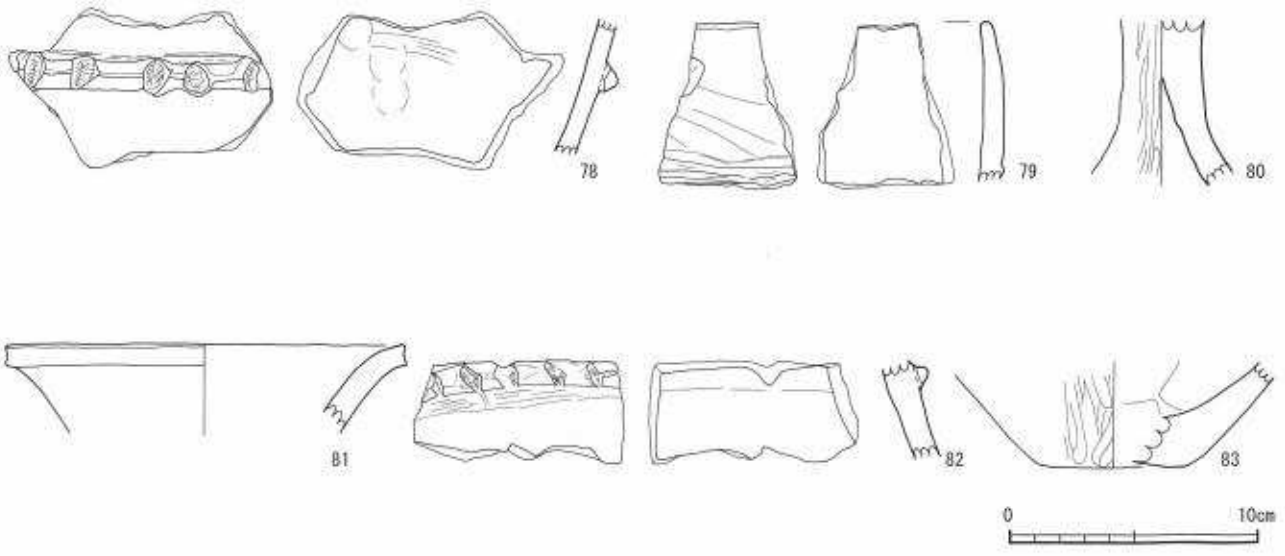
［埋土］暗褐色土主体である。

［特記］住居跡内の埋土を採取し，ウォーターフローテーションによって採集した炭化物の放射性炭素年代測定を行った。その結果は，1,520±30（yrBP）であった。

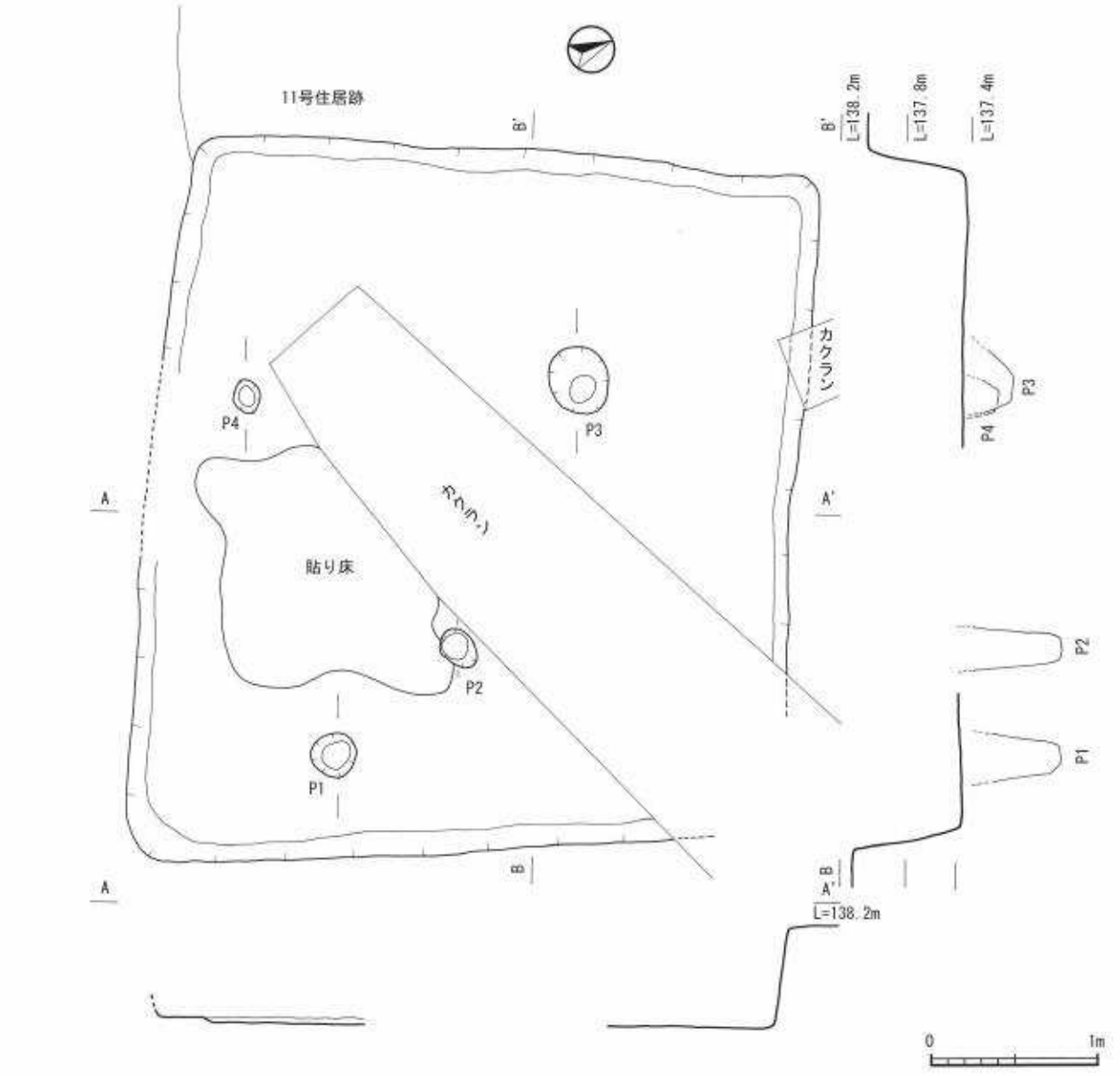
10号竪穴住居跡内出土遺物（第28図：87・88）

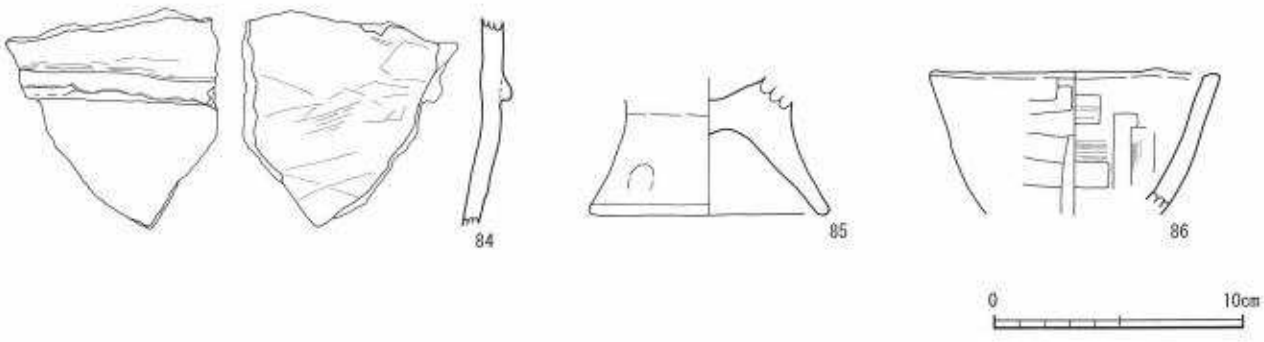
87・88は甕である。87はやや内弯した器形で，ヘラ押圧の施された三角突帯が貼り付けられている。88もやや内弯した器形で，三角突帯が貼り付けられている。



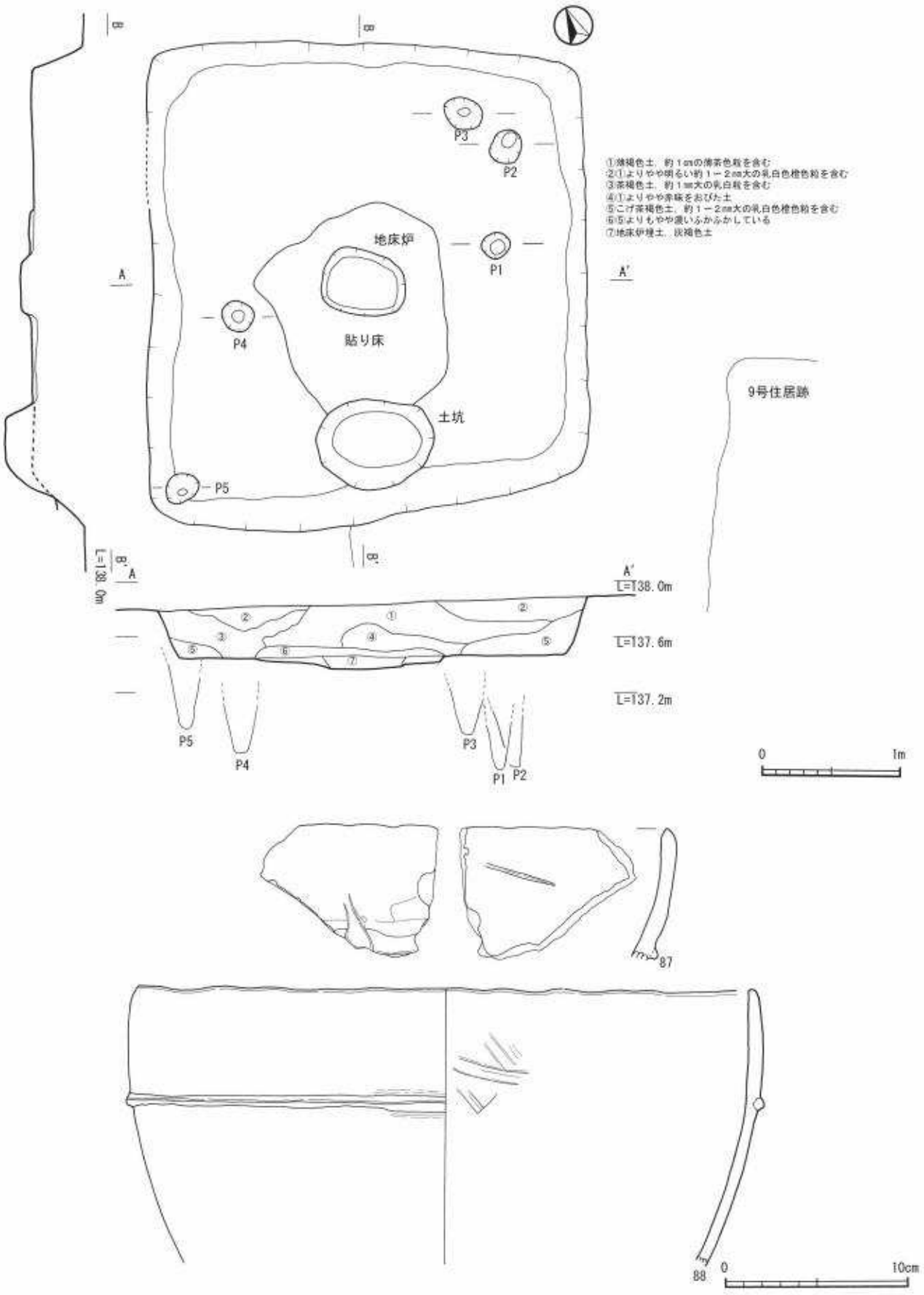


第26図　8号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物





第27図　9号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物



第28図　10号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物

11号竪穴住居跡（第29図）

［位置と確認］H－6区に位置し，Ⅳ層精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

［重複］9号及び10号と重複し，9号及び10号より古い。

［平面形・規模］9号及び10号に切られているため完全な平面形は確定できなかったが，隅丸方形と推定される。

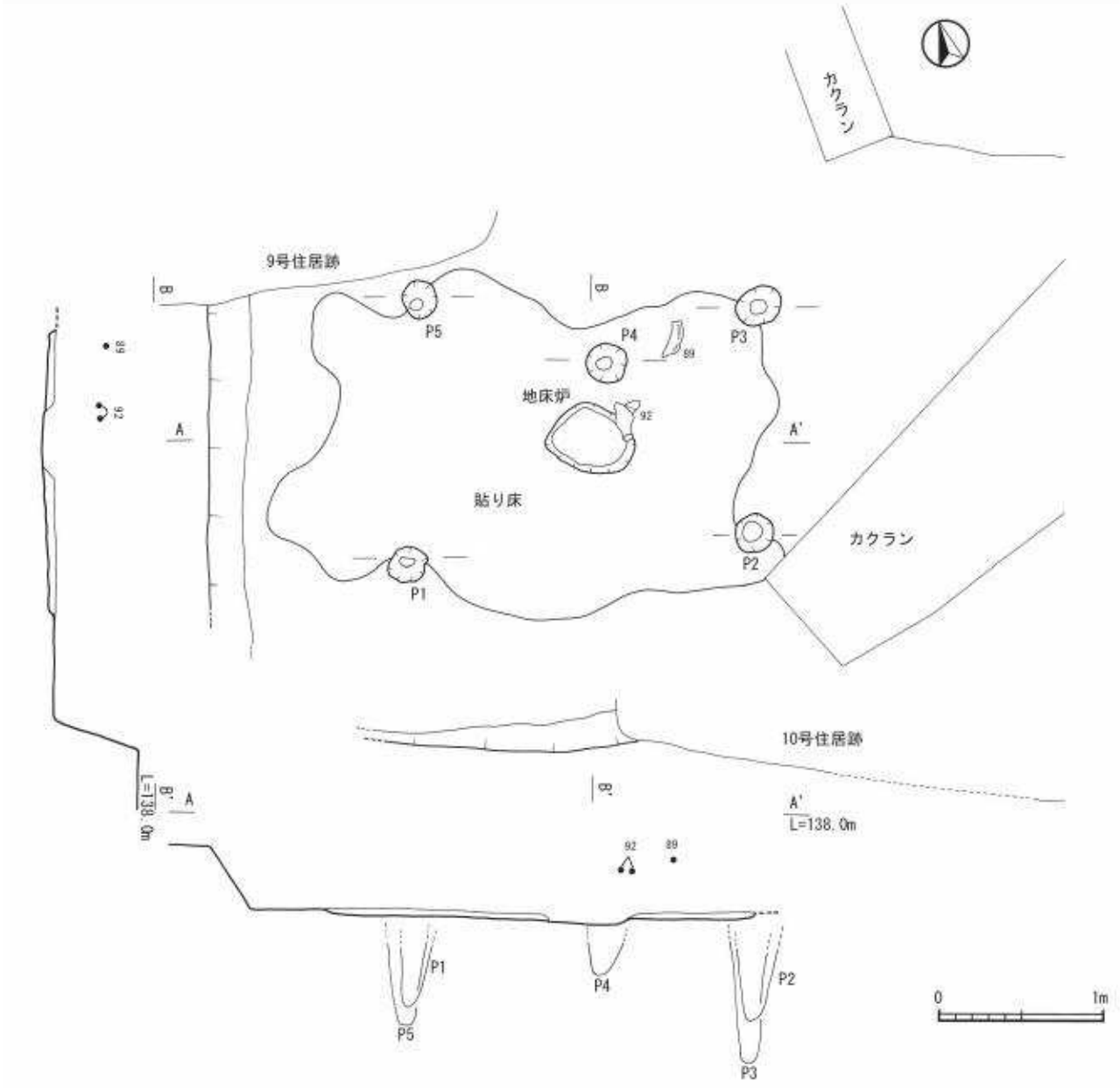
［床面］床面はほぼ平坦で貼り床を伴う。貼り床は床面の中央部から広がっており，4cm～6cmの厚みがある。検出面から床面までの最深部は約50cmである。

［柱穴等］床面に柱穴5基を検出した。検出面からの深さは，P1が42cm，P2が50cm，P3が75cm，P4が22cm，P5が53cmである。

［炉］貼り床のほぼ中央部で地床炉を検出した。炉の規模は50cm×40cmの楕円形で，7cmの浅い掘り込みをもつ。

［埋土］暗褐色土主体である。

［特記］地床炉内の埋土を採取し，ウォーターフローテーションによって採集した炭化物の放射性炭素年代測定を行った。その結果は，1,670±20（yrBP）であった。

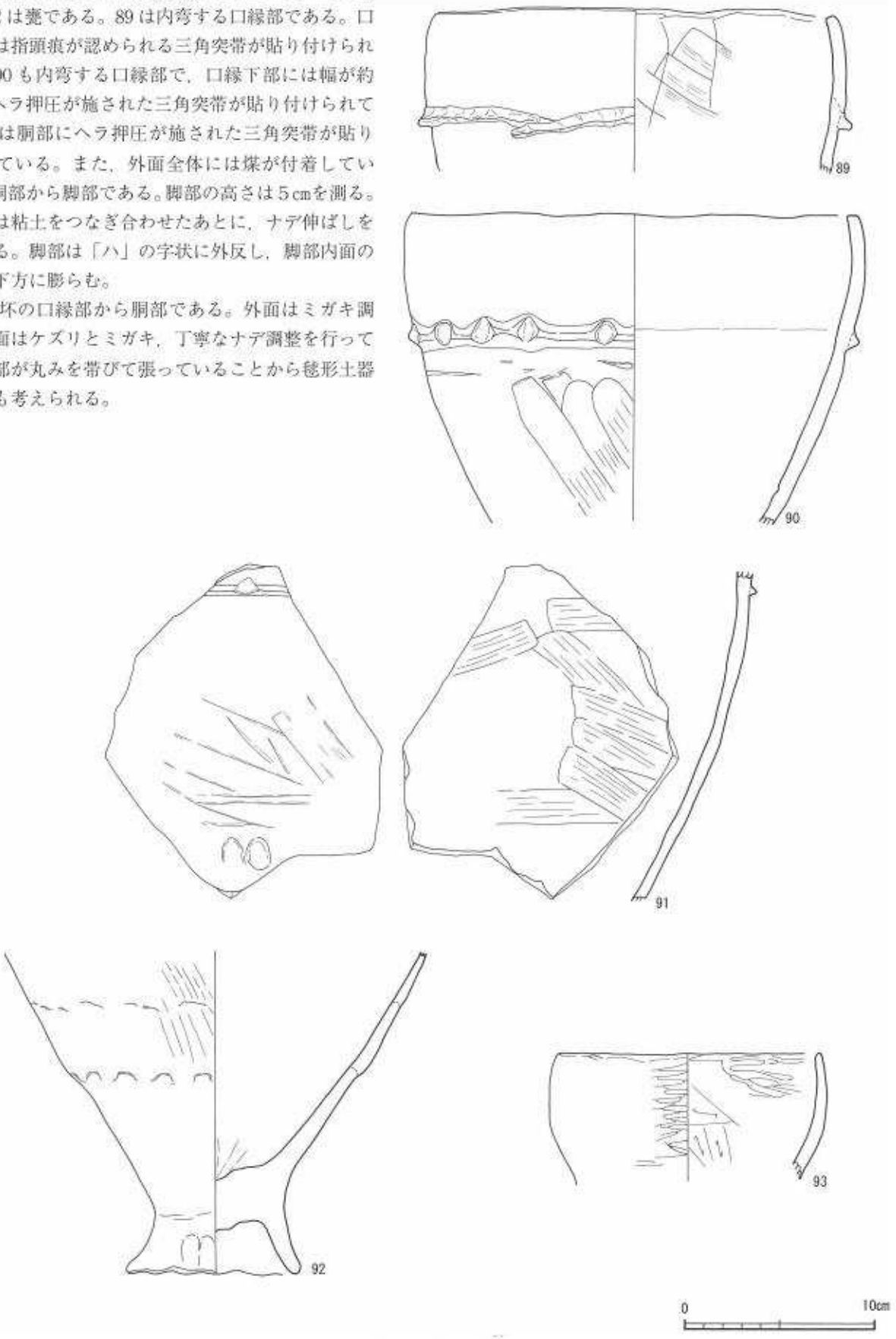


第29図　11号竪穴住居跡

11 号竪穴住居跡内出土遺物（第 30 図：89 ～ 93）

89 ～ 92 は甕である。89 は内弯する口縁部である。口縁下部には指頭痕が認められる三角突帯が貼り付けられている。90 も内弯する口縁部で，口縁下部には幅が約 1.5cm のヘラ押圧が施された三角突帯が貼り付けられている。91 は胴部にヘラ押圧が施された三角突帯が貼り付けられている。また，外面全体には煤が付着している。92 は胴部から脚部である。脚部の高さは 5 cmを測る。胴部外面は粘土をつなぎ合わせたあとに，ナデ伸ばしを行っている。脚部は「ハ」の字状に外反し，脚部内面の天井部は下方に膨らむ。

93 は高坏の口縁部から胴部である。外面はミガキ調整を，内面はケズリとミガキ，丁寧なナデ調整を行っている。胴部が丸みを帯びて張っていることから毬形土器の可能性も考えられる。



第 30 図　11 号竪穴住居跡内出土遺物

12号竪穴住居跡（第31図）

［位置と確認］H－6区に位置し，Ⅳ層精査中に不定形の暗褐色土の落ち込みを確認した。

［重複］2号溝と重複し，溝より古い。

［平面形・規模］東側は攪乱を受けて残存していないが，隅丸方形と推定される。規模は推定長軸3m25cm，短軸3m15cmである。長軸方向はS -86° -Eである。

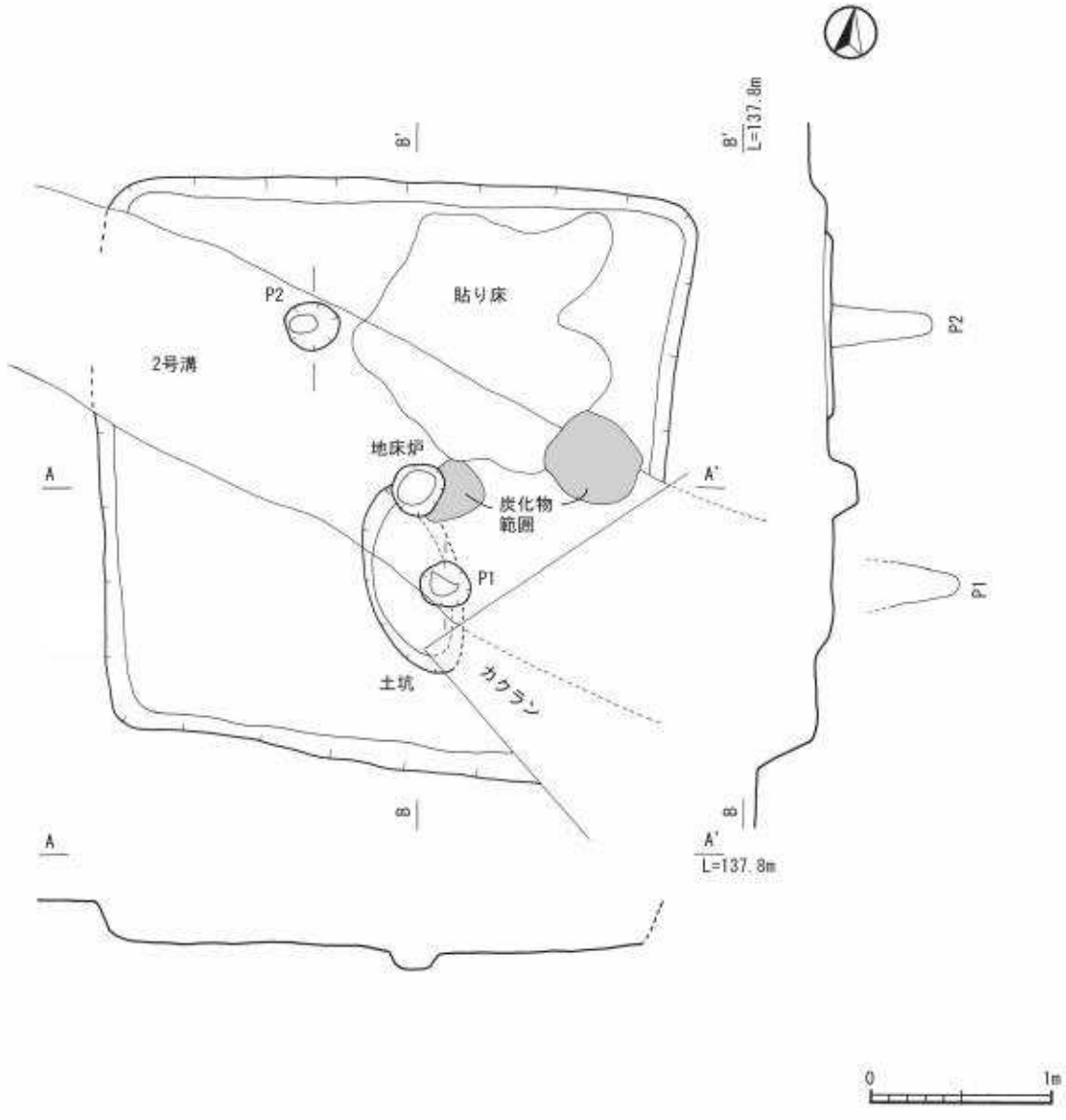
［床面］床面はほぼ平坦で，北東側に貼り床を伴う。貼り床の厚さは3cm～5cmで，検出面から床面までの最深部は約15cmである。

［柱穴等］住居内に土坑1基，柱穴2基を検出した。土坑及び住居内の柱穴は溝の完掘後の精査で検出した。また，P1は土坑完掘後に検出した。土坑の東側は2号溝に切られたり，攪乱を受けたりして残存していなかった。土坑の埋土は暗褐色土主体で，2mm～3mm大の黄色パミスが散在している。柱穴の検出面からの深さは，P1が45cm，P2が62cmである。

［炉］溝の完掘後の精査で地床炉を検出した。規模は30cm×27cmの楕円形で，10cmの浅い掘り込みをもつ。

［埋土］暗褐色土主体である。

［特記］住居跡内の埋土を採取し，ウォーターフローテーションによって採集した炭化物の放射性炭素年代測定を行った。その結果は，1,800±20（yrBP）であった。



第31図　12号竪穴住居跡

13 号竪穴住居跡（第 32 図）

［位置と確認］H－6区に位置し，Ⅳ層精査中に不定形の暗褐色土の落ち込みを確認した。
［重複］2号溝と重複し，溝より古い。
［平面形・規模］不定形で，規模は長軸 4 m10cm，短軸 2 m40cm である。長軸方向は N-9°-E である。
［床面］床面は南から北へ，東から西へ緩やかに下り傾斜している。また，床面のほぼ全面に貼り床を伴う。貼り床は二重に貼られ，1枚目の厚さは 2 cm ～ 9 cm，2枚目の厚さは 2 cm ～ 6 cm である。検出面から床面までの最深部は約 15cm である。
［柱穴等］住居跡のほぼ中央部に土坑 1 基を，壁際にピット 3 基を検出した。土坑の規模は 1 m30cm × 1 m の楕円形で，約 40cm の掘り込みをもつ。また，ピットの検出面からの深さは，P1 が 25cm，P2 が 22cm，P3 が 15cm である。
［炉］検出されなかった。
［埋土］暗褐色土主体である。

13 号竪穴住居跡内出土遺物（第 32 図：94）

94 は甕の口縁部から胴部である。口縁の外反は弱く，布目痕が認められる 1 条の刻目突帯が貼り付けられている。

14 号竪穴住居跡（第 33 図）

［位置と確認］H－6・7区に位置し，Ⅳ層精査中に方形に近い暗褐色土の落ち込みを確認した。
［重複］2号溝及び 15 号と重複し，溝より古い。15 号との先後関係は不明である。
［平面形・規模］北東側は残存していないが，隅丸方形と推定される。規模は長軸 3 m60cm，短軸 3 m（＋α）である。長軸方向は S-36°-E である。
［床面］床面はほぼ平坦で貼り床を伴う。貼り床は床面の中央部から南西側に広がっており，2 cm ～ 5 cm の厚みがある。検出面から床面までの最深部は約 10cm である。
［柱穴等］住居跡の南側に土坑 1 基，床面に柱穴 2 基を検出した。土坑の規模は 45cm × 45cm の円形で，約 30cm の掘り込みをもつ。また，2基の柱穴は円形で，地床炉の両側に位置する。検出面からの深さは，P1 が 76cm，P2 が 70cm である。
［炉］床面ほぼ中央部に地床炉を検出した。規模は 50cm × 42cm のほぼ円形で，約 10cm の掘り込みをもつ。地床炉の中心から約 60cm 離れた所に P1，約 50cm 離れた所に P2 が位置する。
［埋土］暗褐色土主体である。
［特記］地床炉内の埋土を採取し，ウォーターフローテーションによって採集した炭化物の放射性炭素年代測定を行った。その結果は，1,560 ± 30（yrBP）であった。

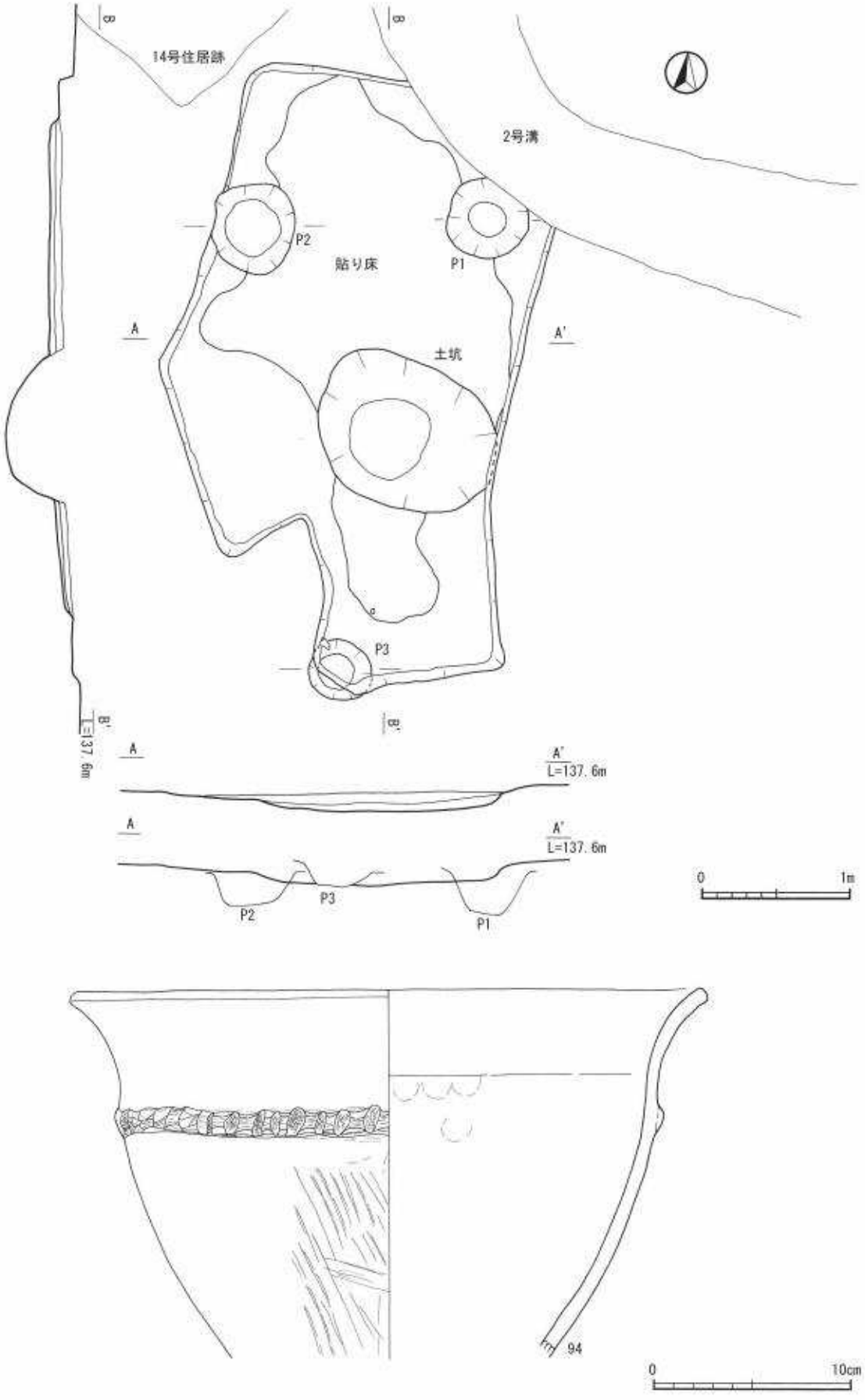
14 号竪穴住居跡内出土遺物（第 33 図：95 ～ 98）

95 ～ 97 は甕である。95 は口縁部から胴部で，口縁下部に 1 条の三角突帯が貼り付けられている。突帯下部には段が認められ，あまり丁寧な作りではない。また，外面全面に煤が付着している。96 はやや内弯する口縁部で，口縁下部に三角突帯が貼り付けられている。97 は脚部で，端部は完形で残存している。端部から高さ 3 cm のところを意図的に割って，地床炉近くに置いたことが推定される。

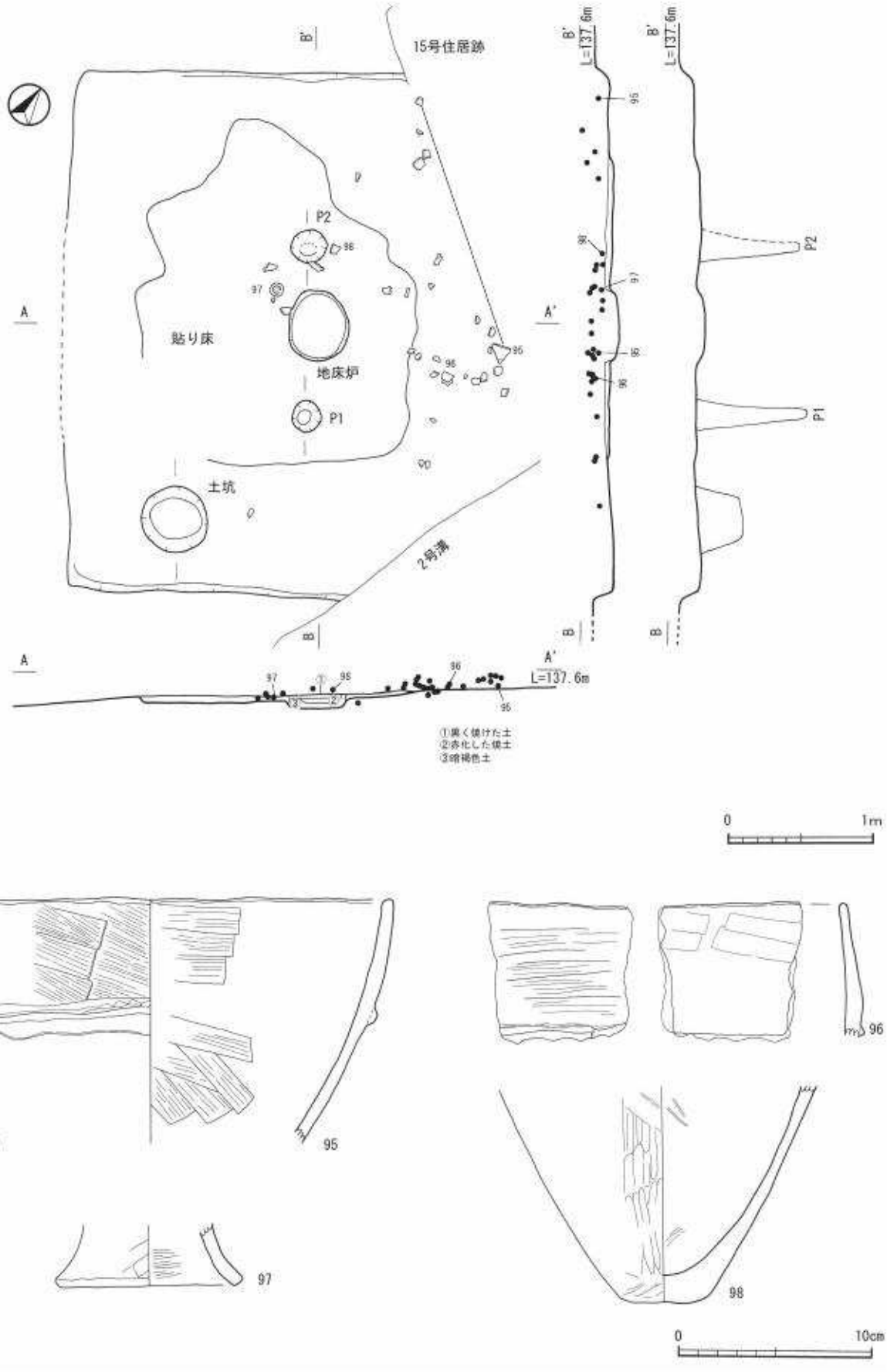
98 は壺の胴部から底部である。底部はやや厚みをもった平底である。外面はミガキ調整である。

15 号竪穴住居跡（第 34 図）

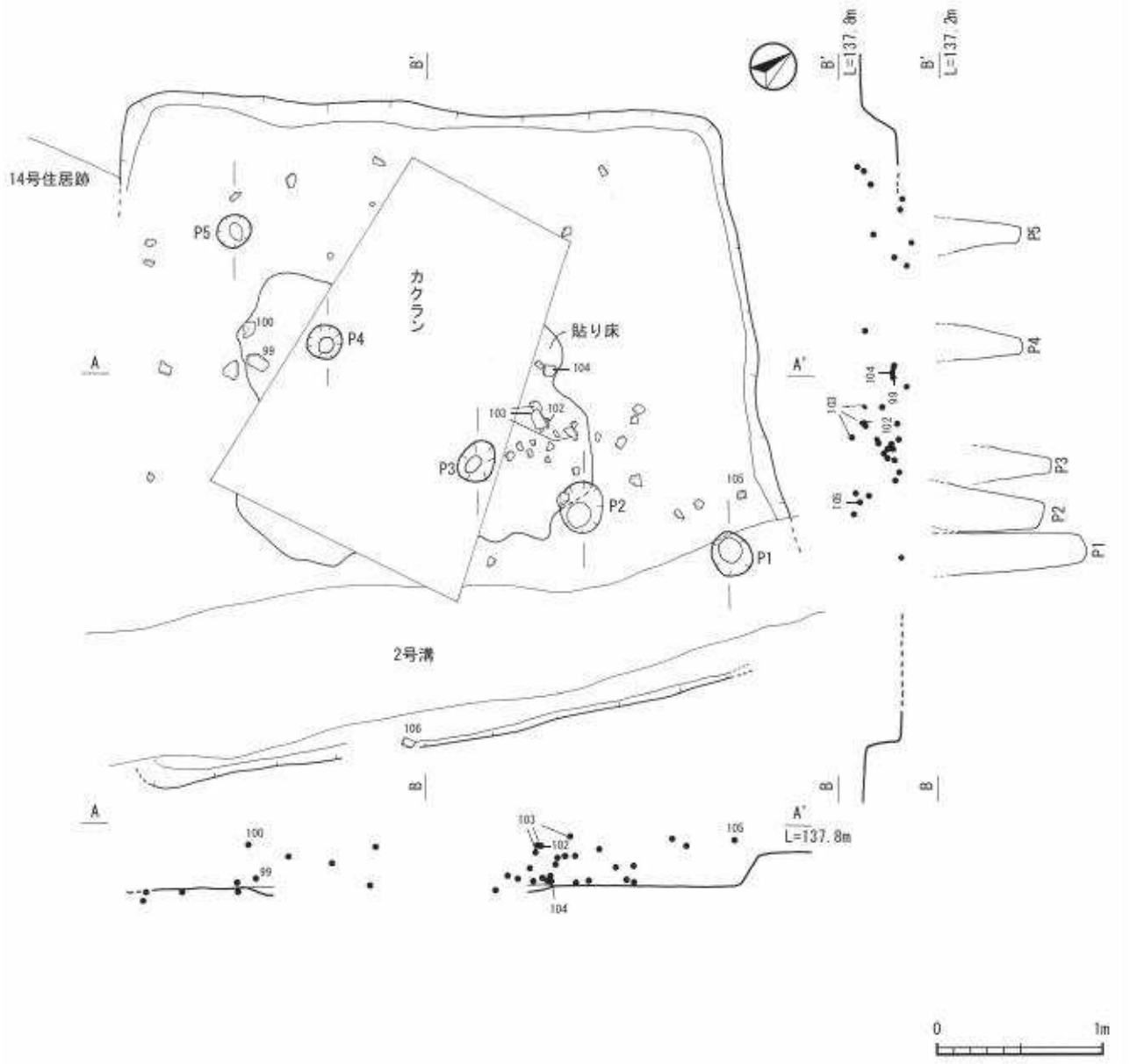
［位置と確認］H－6・7区に位置し，Ⅳ層精査中に方形に近い暗褐色土の落ち込みを確認した。
［重複］2号溝及び 14 号と重複し，溝より古い。14 号との先後関係は不明である。
［平面形・規模］南側は残存していないが，隅丸方形と推定される。規模は推定長軸約 4 m，短軸約 3 m80cm である。長軸方向は N-30°-E である。
［床面］床面はほぼ平坦で貼り床を伴う。貼り床は床面のほぼ中央部に貼られているが，攪乱を受けており一部しか残存していない。検出面から床面までの最深部は約 20cm である。
［柱穴等］床面に柱穴 5 基を検出した。柱穴は東西方向へほぼ一直線に並ぶ。P1 は 2 号溝内を精査中に，P3 及び P4 は攪乱箇所を精査中に検出した。P2 及び P5 は貼り床を剥がした後の床面精査中に検出した。柱穴の検出面から深さは，P1 が 80cm，P2 が 55cm，P3 が 36cm，P4 が 40cm，P5 が 40cm である。
［炉］検出されなかった。
［埋土］暗褐色土主体である。



第 32 図　13 号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物



第33図　14号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物



第34図　15号竪穴住居跡

15号竪穴住居跡内出土遺物（第35図：99～106）

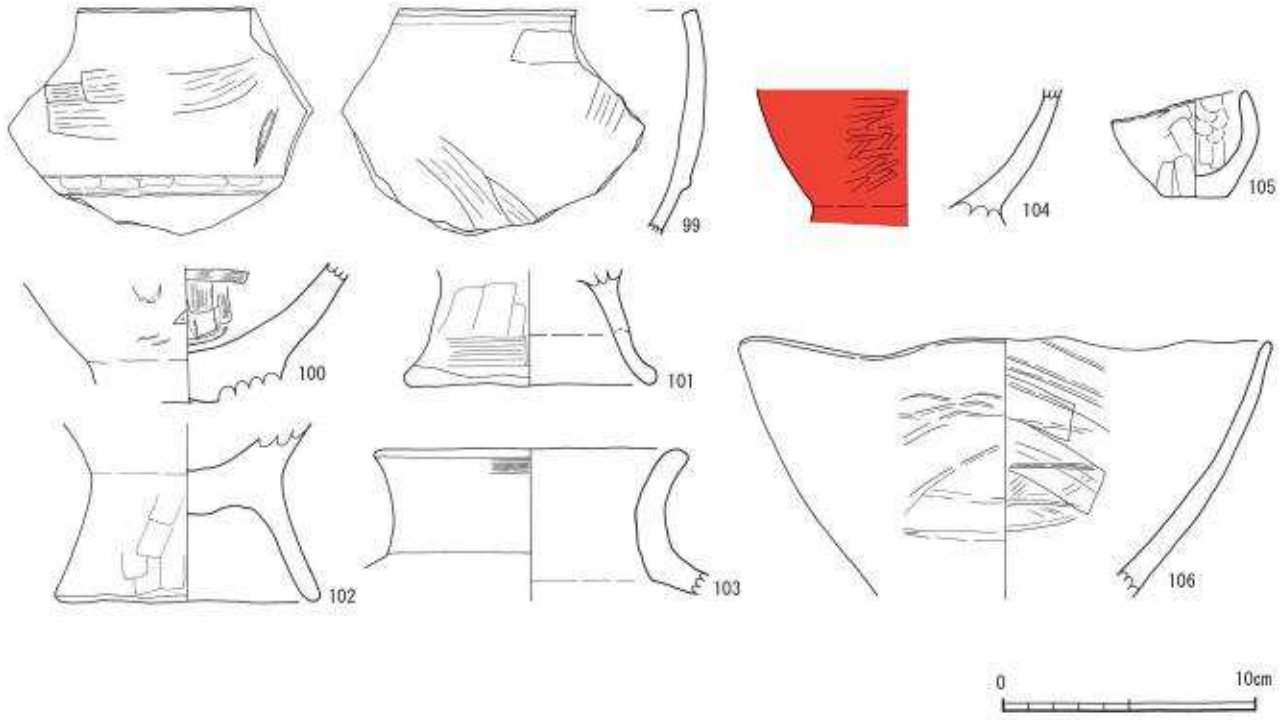
99～102は甕である。99は口縁部でやや内弯する器形である。工具痕を有した突帯が貼り付けられている。100は脚部が残存しない底部である。101・102は脚部で「ハ」の字状に外反する。102の端部は外を向き丸くおさまる。

103は壺の口縁部である。頸部はあまりきつくない折れ曲がりで，口縁部へと緩く外反する。また，口唇部は丸みをもつ。

104は高坏の胴部から底部で，外面に赤色顔料が施されている。

105は指頭押圧で形を整える手づくね土器で，平底の鉢である。

106は鉢で，内面のハケメ調整痕が横方向，斜方向にはっきり確認できる。



第35図　15号竪穴住居跡内出土遺物

16号竪穴住居跡（第36図）

［位置と確認］G－6・7区に位置し，Ⅳ層精査中に隅丸方形の暗褐色土の落ち込みを確認した。当初は，2号溝の掘り下げを先行していたが，溝が貼り床に切られていることが判明したため，途中から本住居跡の掘り下げを先行した。

［重複］2号溝と重複し，溝より新しい。

［平面形・規模］隅丸方形で，規模は長軸，短軸とも3m20cmである。長軸方向はN-10°-Eである。

［床面］床面はほぼ平坦で，中央部に貼り床を伴う。貼り床の厚さは2cm～5cmである。検出面から床面までの最深部は約10cmである。

［柱穴等］検出されなかった。

［炉］床面ほぼ中央部に地床炉を検出した。規模は50cm×40cmの楕円形で，15cmの掘り込みをもつ。掘り込み内からは脚部が残存しない鉢が出土した。土器の内外面には強い焼成を受けた痕跡がないこと，炉周辺には炭化物の散布が少ないことから，他の場所で煮炊きに若干使用された後，炉の廃棄時に埋設された可能性が考えられる。

［埋土］暗褐色土主体である。

［特記］住居跡内の埋土を採取し，ウォーターフローテーションによって採集した炭化物の放射性炭素年代測定を行った。その結果は，1,570±30（yrBP）であった。

16号竪穴住居跡内出土遺物（第36図：107～112）

107は胴部が肥厚した小形の甕である。胴部は段をもち，なだらかに底部へつながる器形である。

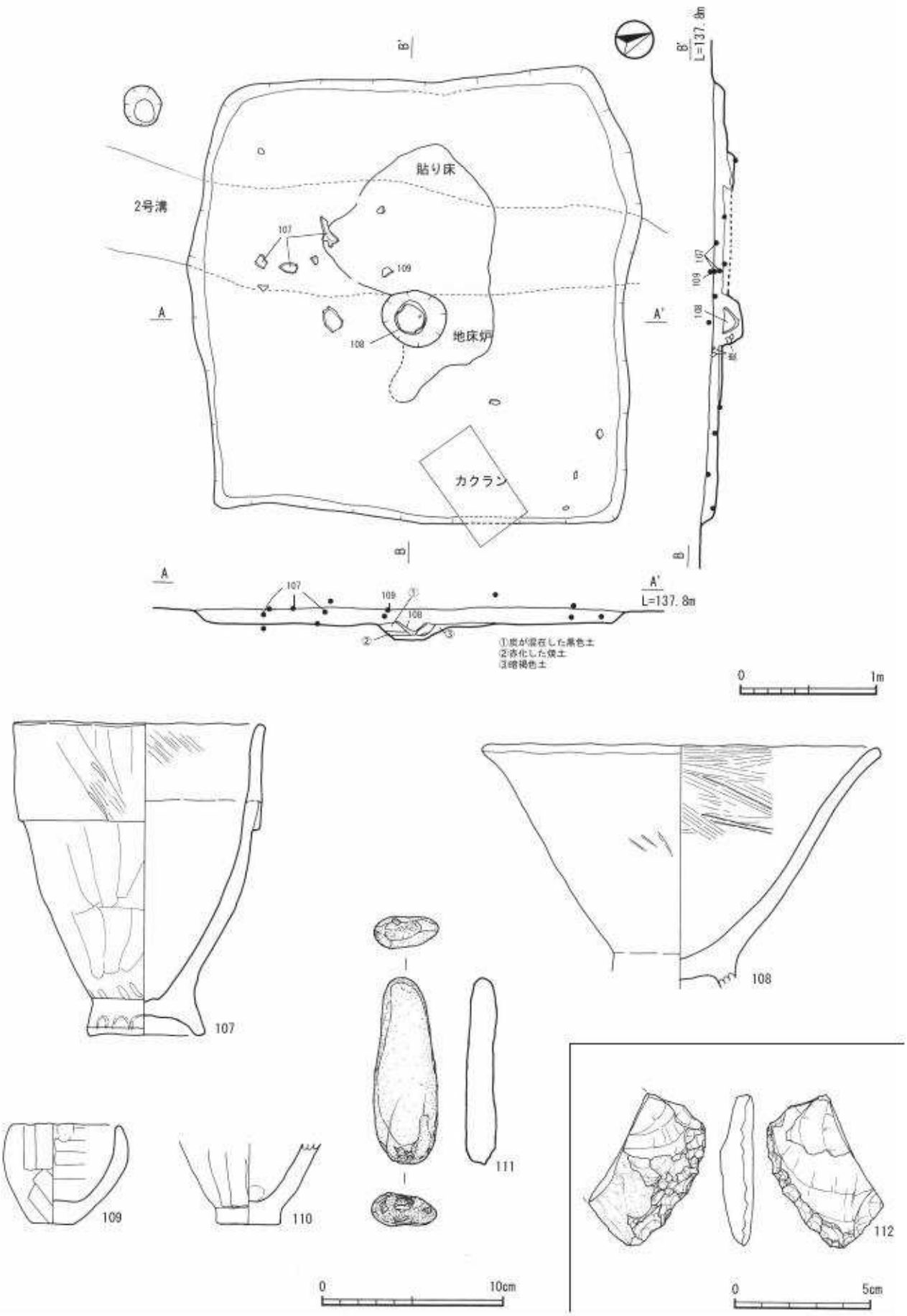
108は鉢である。地床炉内に据え置かれた状態で出土した。底部から口縁部へ向けて外弯気味に大きく開く器形をしている。また，口縁部の外面は赤化が確認された。

109は指頭押圧で形を整える手づくね土器で，厚い平底の鉢形である。

110は底部直径3.6cmの平底である。小形土器の底部と推定される。

111は棒状敲石で，上下面に敲打痕がみられる。

112は削器で，両面調整によって刃部をつけている。



第 36 図　16 号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物

17号竪穴住居跡（第37図）

［位置と確認］G－7区に位置し，Ⅳ層精査中に縁辺部に張り出しを伴う暗褐色土の落ち込みを確認した。検出時に18号と重複していたため，重複箇所以外の掘り下げを行いつつ，重複箇所にはサブトレンチを設定して先後関係を探った。その結果，17号の貼り床が18号に切られていることが判明したため，18号の完掘後，17号の完掘を行った。

［重複］18号と重複し，18号より古い。

［平面形・規模］住居跡南西側は18号に切られているため残存していないが，花弁状住居跡と推定される。規模は長軸が6m15cmで，短軸は不明である。長軸方向はS-20°-Eである。

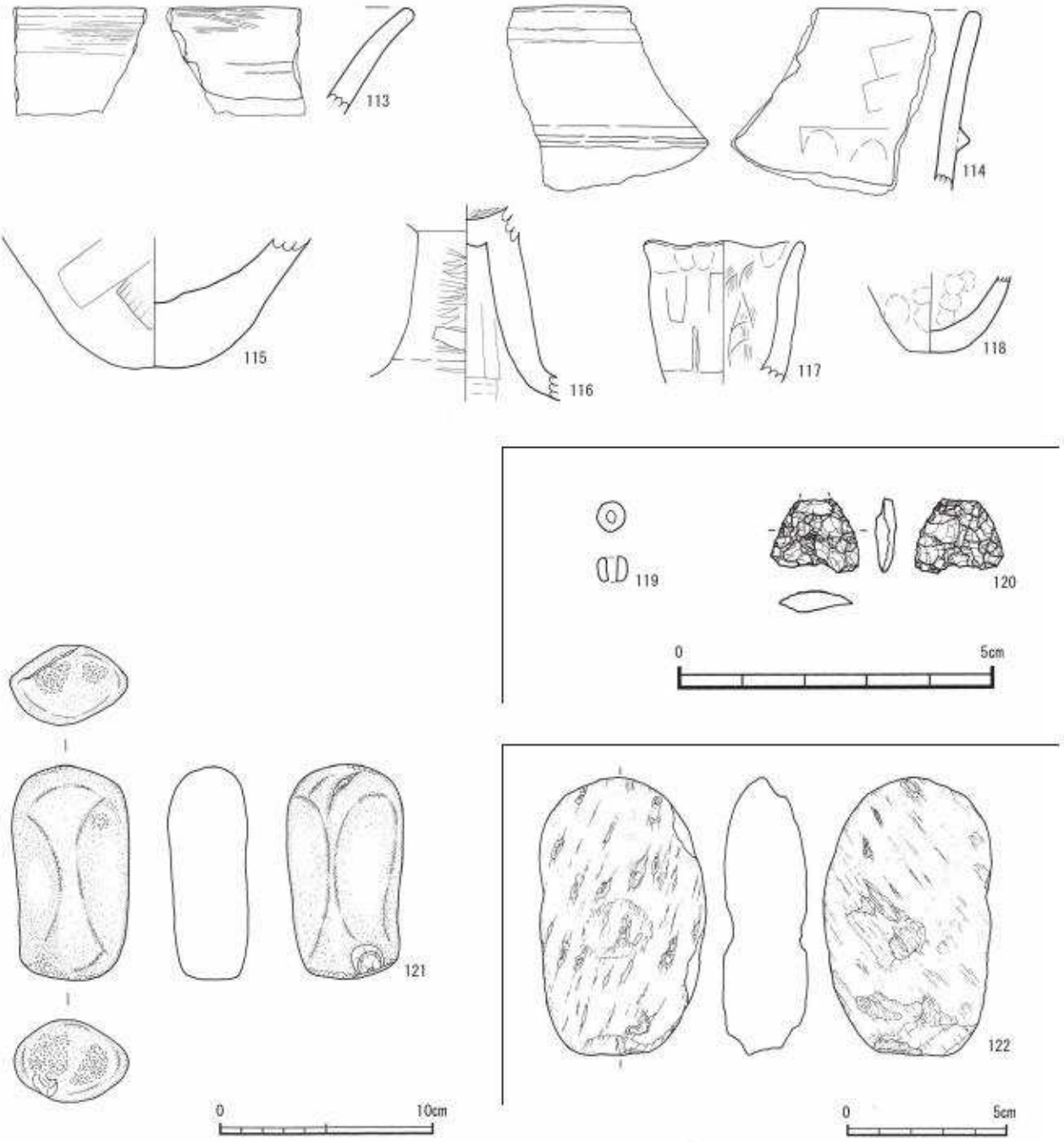
［床面］検出面から深さ約15cmに張り出し部の掘り込み底面があり，その底面から深さ約25cmに床面と，二段掘りの構造になっている。床面は円形に近い形を呈し，ほぼ平坦で貼り床を伴う。貼り床は床全面に貼られ，3cm～6cmの厚みがある。

第37図　17号竪穴住居跡

［柱穴等］柱穴と思われるピットを３基検出したが，調査の結果，樹痕と判明した。
［炉］床面ほぼ中央部に地床炉を検出した。30cm × 30cm の円形で，約５cm の浅い掘り込みをもつ。
［埋土］暗褐色土主体である。埋土内には約５mm ～１cm 大の橙色パミス，又は橙色パミスを含んだブロックが点在していた。
［特記］地床炉内の埋土を採取し，ウォーターフローテーションによって採集した炭化物の放射性炭素年代測定を行った。その結果は，1,770 ± 30（yrBP）であった。

17 号竪穴住居跡内出土遺物（第 38 図：113 ～ 122）

113・114 は甕の口縁部で，114 は三角突帯が貼り付けられている。
115 は壺で，丸底を呈する。
116 は高坏の脚部で，脚部上部は筒状を呈する。
117・118 は指頭押圧で形を整える手づくね土器で，118 は丸底の鉢である。
119 はガラス小玉で，埋土中から１点出土した。濃い紺色のガラスを素材としている。
120 は石鏃の欠損で，縄文時代晩期のものと思われ，流れ込みの可能性がある。
121 は敲石で，上下面に敲打痕が見られる。
122 は軽石製品で，表面に凹みが見られる。



第 38 図　17 号竪穴住居跡内出土遺物

18号竪穴住居跡（第39図）

［位置と確認］H－7区に位置し，Ⅳ層精査中に暗褐色土の落ち込みを確認した。

［重複］17号及び19号と重複し，17号及び19号より新しい。

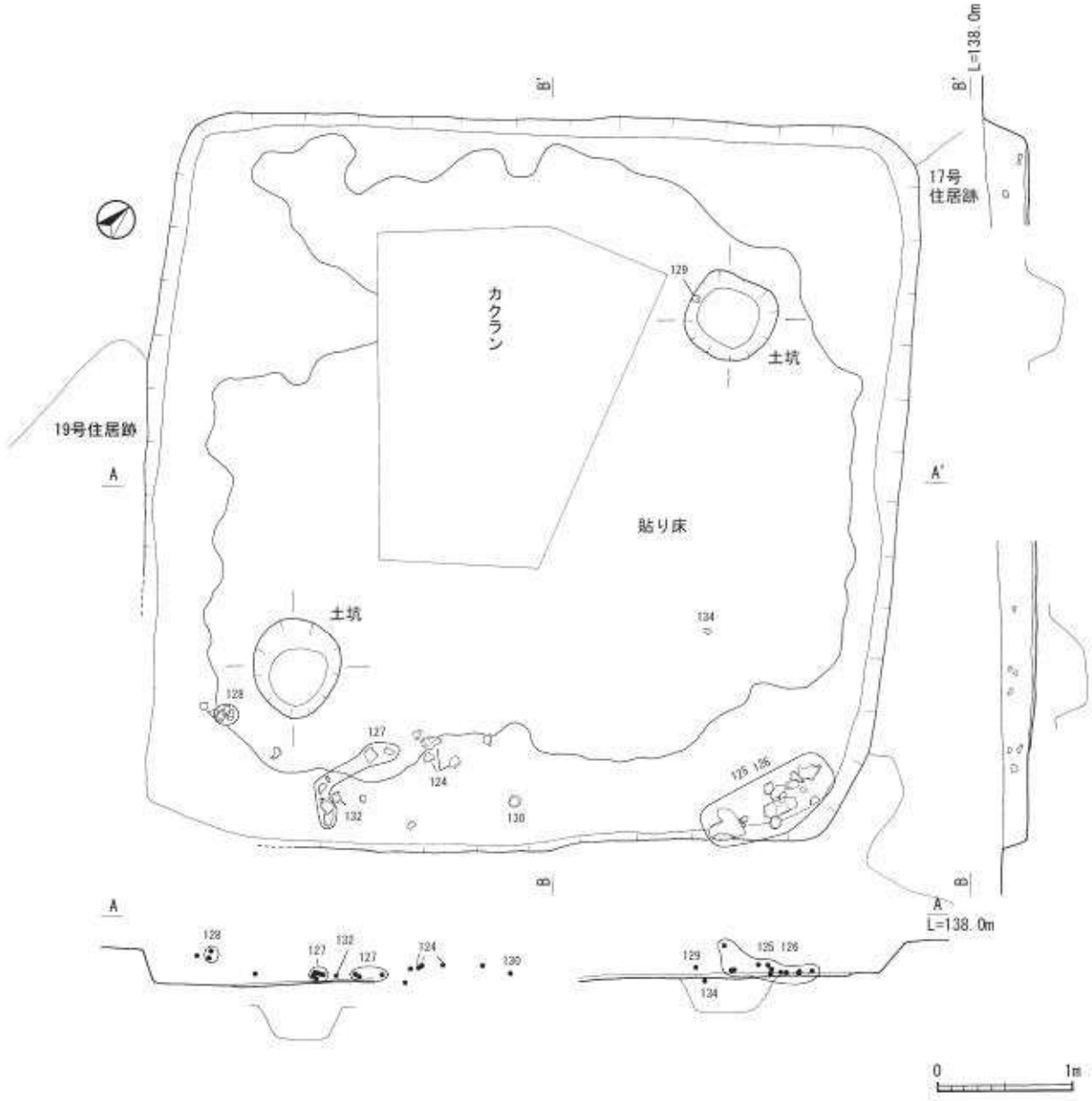
［平面形・規模］隅丸方形で，規模は長軸5m65cm，短軸5m40cmである。長軸方向はN-46°-Eである。

［床面］床面はほぼ平坦で，ほぼ全面に厚さが2cm～4cmの貼り床を伴う。検出面から床面までの最深部は30cmである。

［柱穴等］南側及び北側に土坑を各1基検出した。南側の土坑の規模は70cm×65cmのほぼ円形で，約30cmの掘り込みをもつ。北側の土坑の規模は73cm×65cmのほぼ円形で，約25cmの掘り込みをもつ。また，北側の土坑内からは鉢の脚部片（129）が出土した。

［炉］検出されなかった。

［埋土］暗褐色土主体である。埋土内に約1mm～3mm大の橙色パミスが多く点在する。



第39図　18号竪穴住居跡

［特記］住居跡の埋土内から種子と思われる炭化物片が40点出土した。種実同定の結果，40点は接合して1個体となり，モモの核（内果皮）と判明した。また，住居跡内の埋土を採取して，ウォーターフローテーションによって採集した炭化物の放射性炭素年代測定を行った。その結果は，1,550 ± 30（yrBP）であった。

18号竪穴住居跡内出土遺物（第40・41図：123～136）

123～126は甕である。123はやや内弯した器形の口縁部で，突帯を貼り付けた後，指でつまみ上げて三角突帯を作っている。124は脚部で，直線的に伸び脚高は4.8cmある。125・126は住居跡内の東側隅で，割れた破片が重ねられた状態で出土した。125は底部を欠いているが，高さが26cm残っている。123と同様な三角突帯が貼り付けられている。126は胴部に3か所の孔を有し，孔は外面から開けられている。土器使用後の廃棄の印として孔を開けたことが推察されるが，はっきりした用途及び性格は不明である。また，口縁部から突帯にかけて吹きこぼれの痕跡を確認した。

127は壺である。口縁部は直立気味に外反し，頸部には1条の突帯が貼り付けられている。

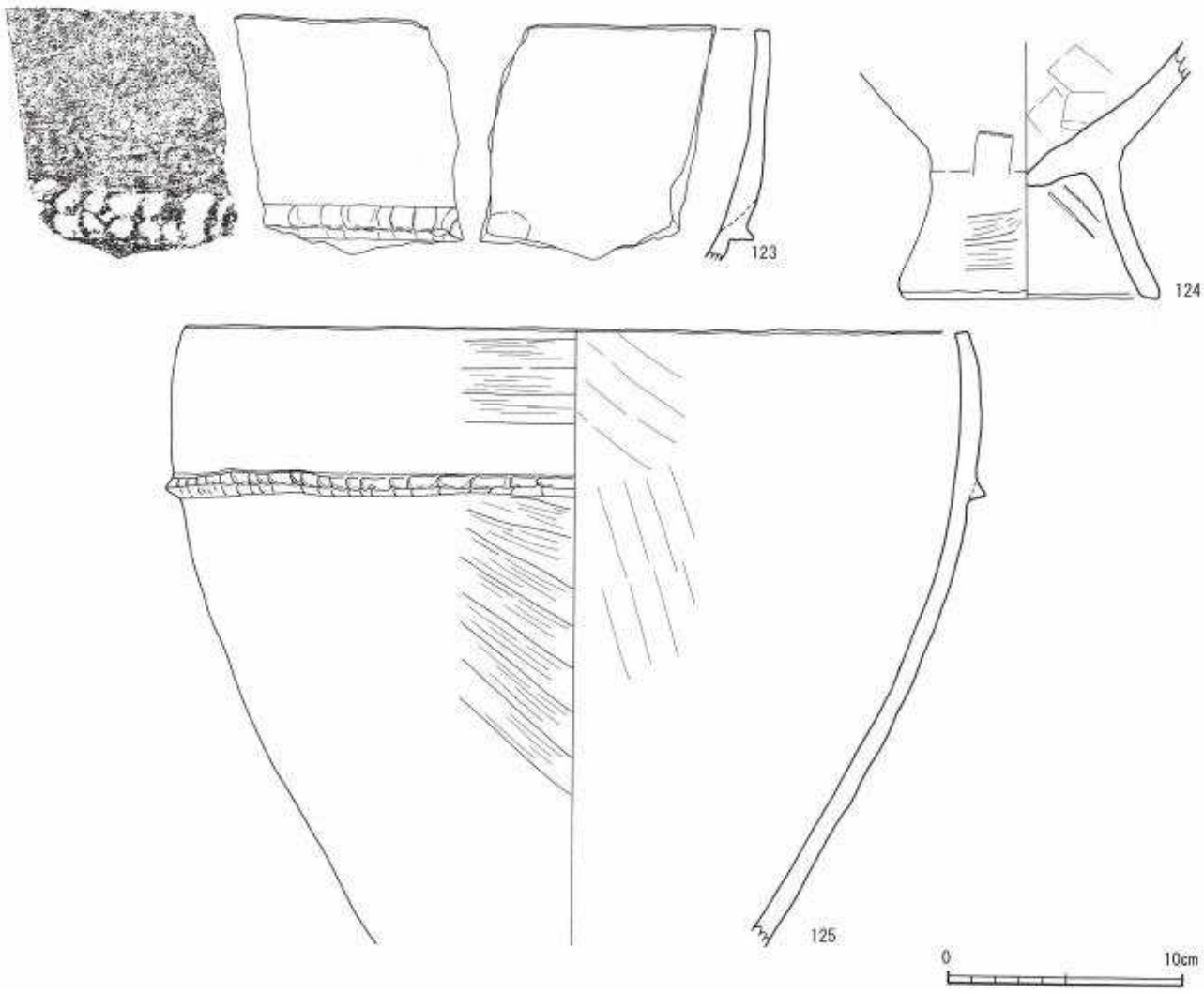
128～130は鉢である。128・129は胴部から脚部で，脚部は指頭押圧で形を整え，脚部内面の天井部が下方に膨らむ。130は平底で，外面の一部にミガキ調整が行われている。

131・132は高坏である。脚部は筒部をもたず緩やかに広がる。内外面とも黒色を呈する。

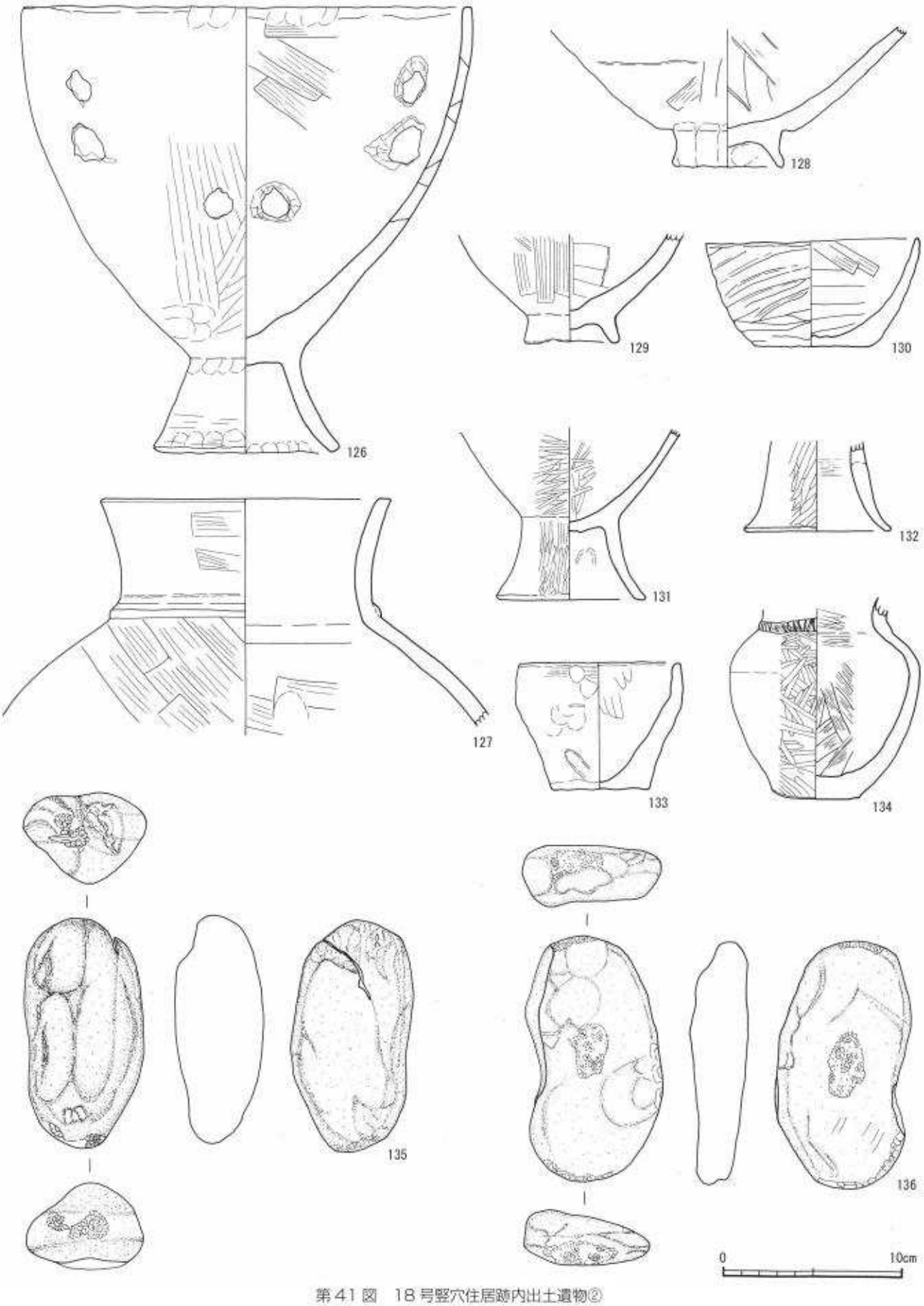
133は指頭押圧で形を整える手づくね土器で，平底の鉢である。

134は内外面とも黒色を呈する平底壺で，頸部から口縁部へ緩く外反する。また，頸部には刻目突帯が施されている。

135・136は敲石で，埋土内から出土した。135は上下面に，136は表裏上下面に敲打痕が観察される。石材は2点ともホルンフェルスである。



第40図　18号竪穴住居跡内出土遺物①



第41図　18号竪穴住居跡内出土遺物②

19号竪穴住居跡（第42図）

［位置と確認］H－7区に位置し，Ⅳ層精査中に隅丸方形の暗褐色土の落ち込みを確認した。

［重複］18号と重複し，18号より古い。

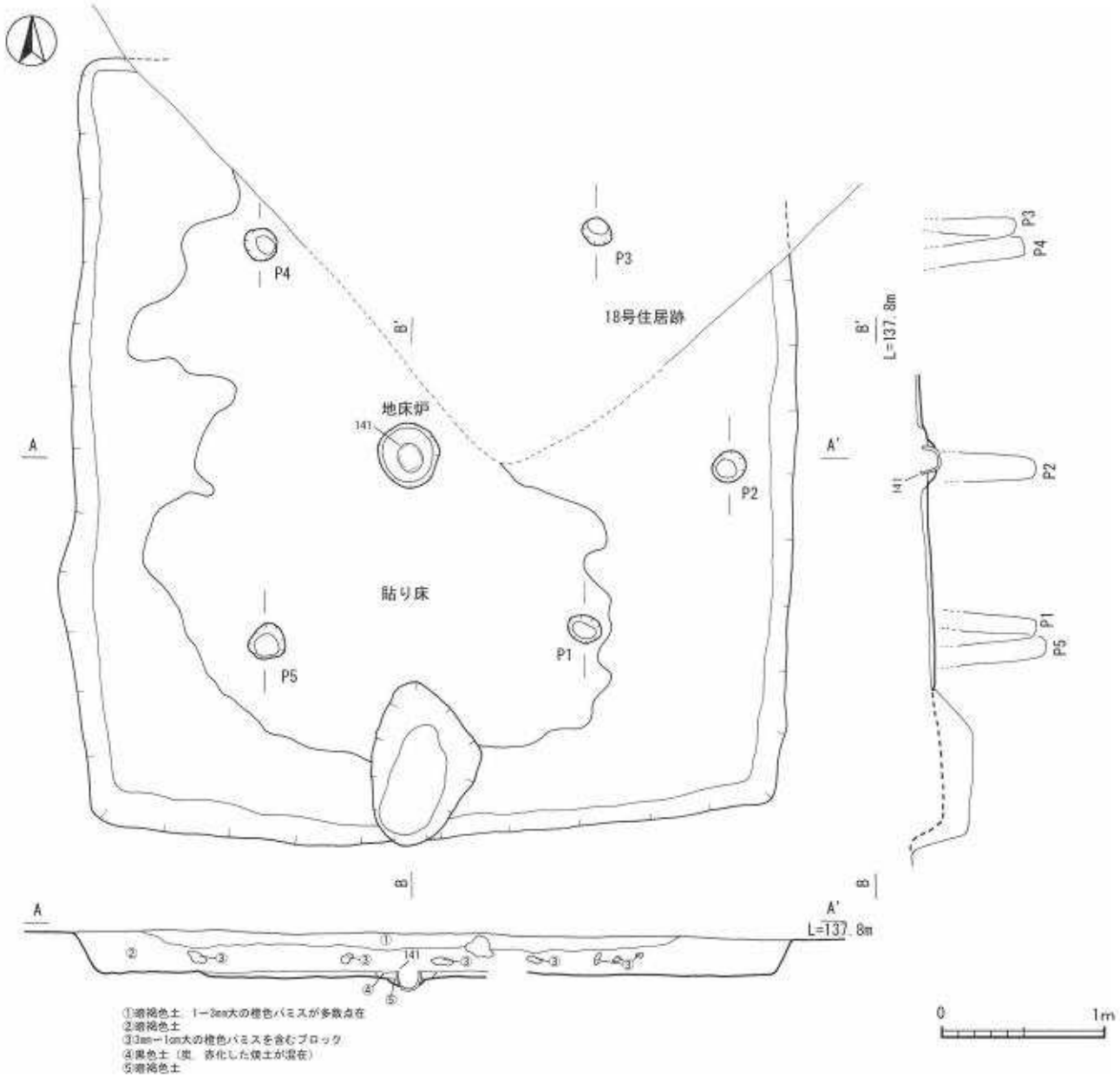
［平面形・規模］住居跡北側は18号に切られているため残存していないが，隅丸方形と推定される。規模は推定長軸4m70cm，短軸4m40cmである。長軸方向は真北である。

［床面］床面はほぼ平坦で貼り床を伴う。貼り床の北側は18号に切られているが，床面のほぼ全面に貼られていたことが推定される。貼り床の厚さは，3cm～5cmである。検出面から床面までの最深部は約25cmである。

［柱穴等］南壁際に土坑1基検出した。規模は1m×70cmの楕円形で，約25cmの掘り込みをもつ。また，床面に柱穴5基を検出した。柱穴の検出面から深さは，P1が50cm，P2が55cm，P3が48cm，P4が55cm，P5が60cmである。

［炉］床面ほぼ中央部に地床炉を検出した。規模は40cm×38cmのほぼ円形で，約10cmの掘り込みをもつ。掘り込み内からは完形の鉢形土器が出土した。炉内の埋土からは強い被熱の痕跡が観察されなかったため，煮炊きに利用された土器が，炉の廃棄時に埋設された可能性が考えられる。

［埋土］暗褐色土主体である。埋土内に約3mm～1cm大の橙色パミスを含む。



第42図　19号竪穴住居跡

［特記］住居跡の埋土内から種子と思われる炭化物片4点と完形1点が出土した。種実同定の結果，炭化物片4点は接合して1個体になり，モモの核（内果皮）と判明した。完形1点はモモの種子と判明した。また，住居跡内の埋土を採取し，ウォーターフローテーションによって採集した炭化物の放射性炭素年代測定を行った。その結果は，1,550 ± 30（yrBP）であった。

19号竪穴住居跡内出土遺物（第43図：137～145）

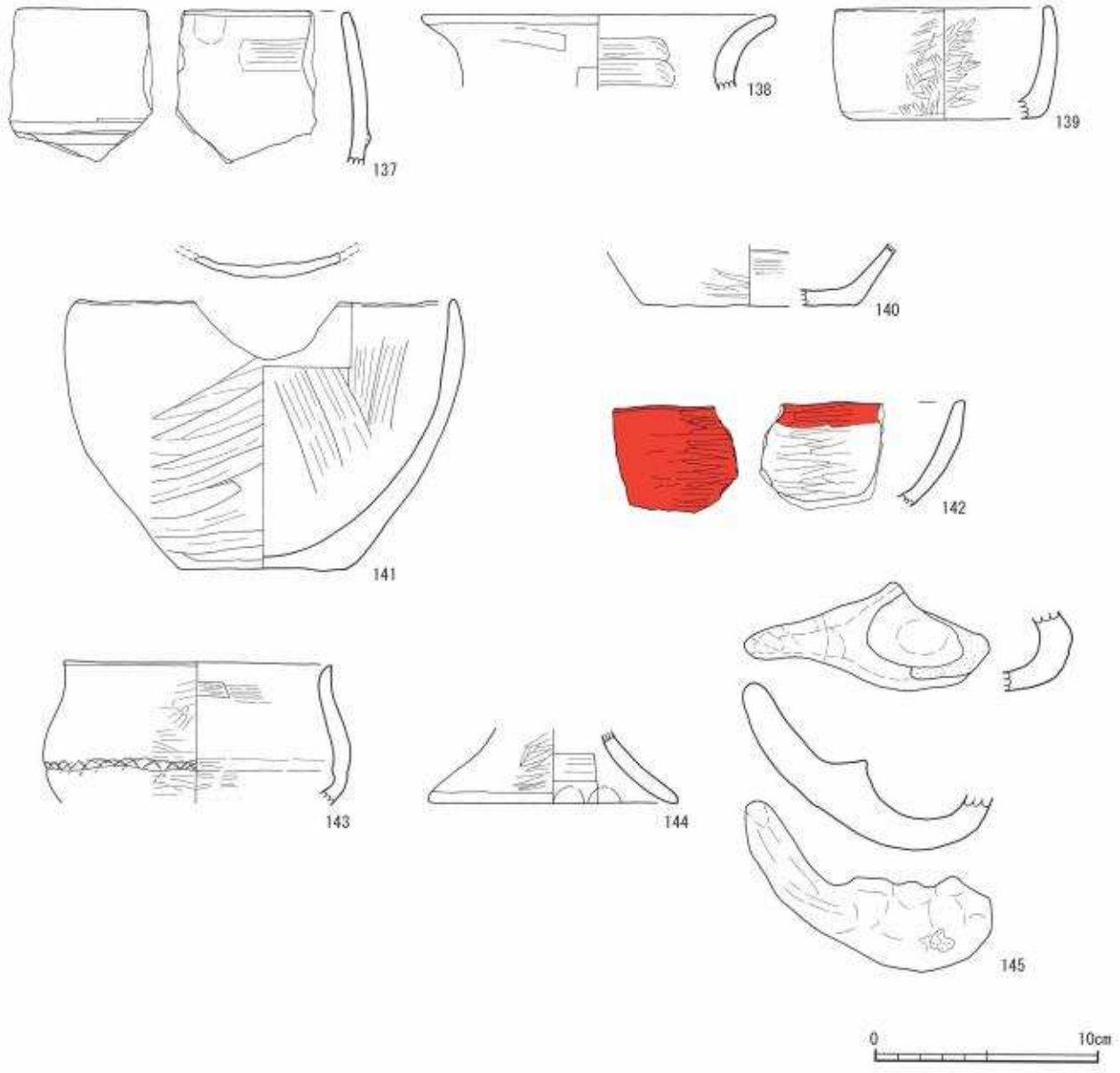
137は甕の口縁部である。口縁下部に三角突帯が貼り付けられている。

138は壺の口縁部で，大きく外反する器形である。

139～141は鉢である。141は地床炉内に据え置かれた状態で出土した。口縁部はやや内弯した器形で，胴部は丸みをおびた平底の鉢である。口縁部の内外面は煤が付着しており，被熱を窺わせる。また，口縁部の一部が欠けた状態で出土した。欠けた破片が周辺に出土しなかったことや割れ口がシャープだったことから，意図的に欠いた可能性も考えられる。139は底部が平底の小形の鉢である。

142～144は高坏である。142は口縁部で，外面には赤色顔料が施されている。143は口縁部がわずかに外反する。また頸部には条線が施文されている。143・144とも外面にミガキ，内面にナデ調整がなされている。なお，143・144は器面調整，胎土等から同一個体の可能性がある。

145は匙形土製品である。匙部の先端を欠くがほぼ完形品である。



第43図　19号竪穴住居跡内出土遺物

20号竪穴住居跡（第44図）

［位置と確認］H－7区に位置し，Ⅳ層精査中に隅丸方形の暗褐色土の落ち込みを確認した。

［重複］なし

［平面形・規模］隅丸方形で，規模は長軸2m70cm，短軸2m65cmである。長軸方向はN-45°-Eである。

［床面］床面はほぼ平坦で貼り床を伴う。貼り床はほぼ中央部に広がり，2cm～3cmの厚みである。検出面から床面までの最深部は約30cmである。

［柱穴等］検出されなかった。

［炉］床面のほぼ中央部に地床炉を検出した。規模は45cm×50cmのほぼ円形で，約5cmの浅い掘り込みをもつ。炉内の埋土を2層に分層した。

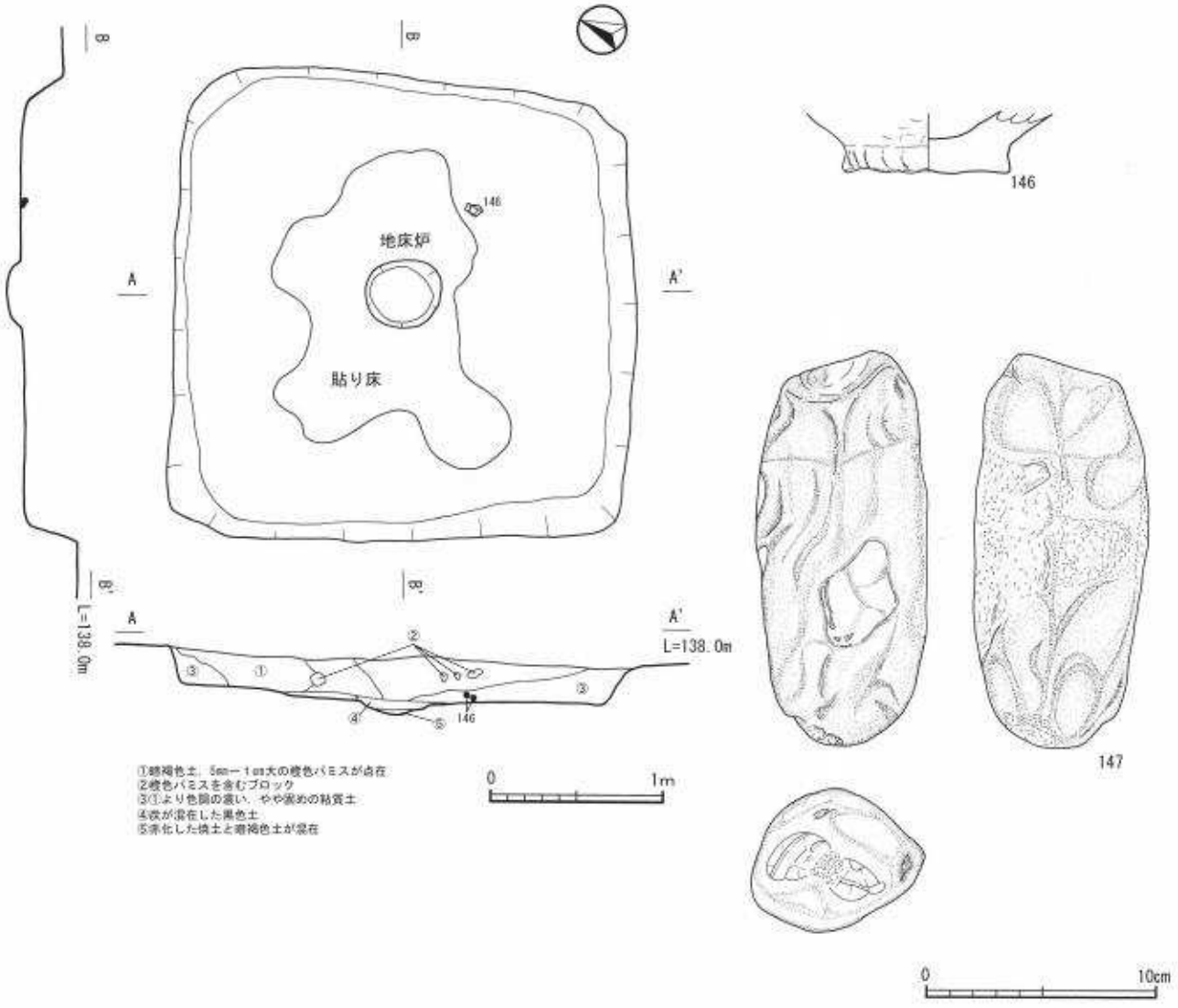
［埋土］暗茶褐色土及び暗褐色土主体である。

［特記］住居跡の埋土内から種子と思われる炭化物片が5点出土した。種実同定の結果，5点は接合して1個体になり，モモの核（内果皮）と判明した。また，住居跡内の埋土を採取し，ウォーターフローテーションによって採集した炭化物の放射性炭素年代測定を行った。その結果は，1,550±30（yrBP）であった。

20号竪穴住居跡内出土遺物（第44図：146・147）

146は鉢の底部である。指頭押圧で調整を行っているため作りが粗い。

147は敲石である。裏面及び下面に敲打痕が見られる。石材は頁岩である。



第44図　20号竪穴住居跡，住居跡内出土遺物

(2) 土坑（第45図）

G－2区のⅣ層で1基を検出した。この土坑は緩やかな傾斜面に掘り込まれ，東側の一部は調査区外に延びる。土坑内でピット2基と硬化面を検出した。P1は，平面プラン約23cm×約23cmの円形で，深さは約48cmであった。埋土は暗褐色土が主体である。P2は，わずかに掘り込みを検出した。硬化面は5cm～7cmの厚さがあり，色調は青灰色土である。硬化面を剥がすと赤褐色土を確認した。被熱跡と考えられるが，炭化物等は出土しなかった。なお，土坑内から遺物は出土しなかった。

(3) 溝状遺構

H－5区Ⅳ層で1条，GH－6・7区Ⅳ層で1条の計2条を検出した。溝は途中で切れていたり，調査区外へ延びていたりしていた。

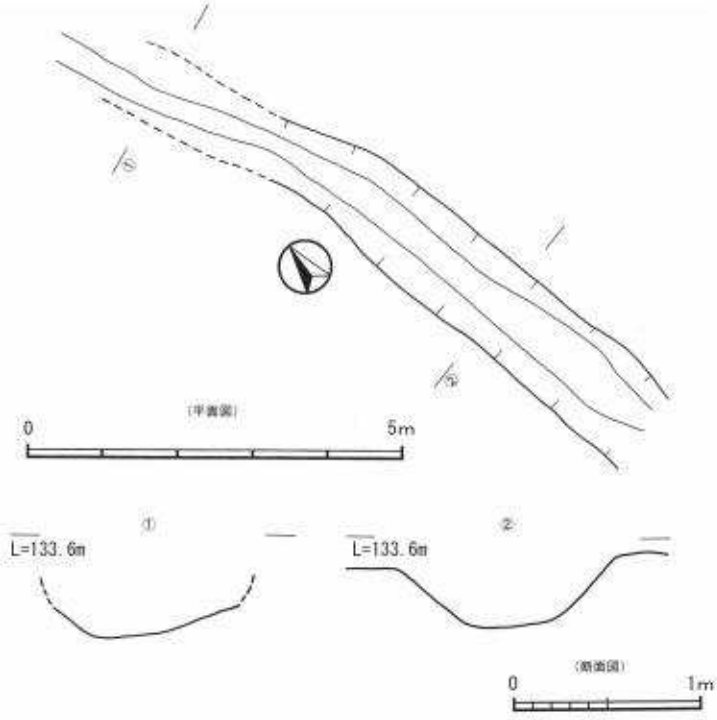
1号溝状遺構（第45図）

H－5区で検出した。最大幅約1m10cm，検出面からの深さが約35cmの掘り込みをもつ。北西－南東方向に約9m50cmの長さが残存する。埋土は暗茶褐色土が主体である。溝内からは古墳時代の甕の土器片が17点出土したが，全て胴部の細片であった。

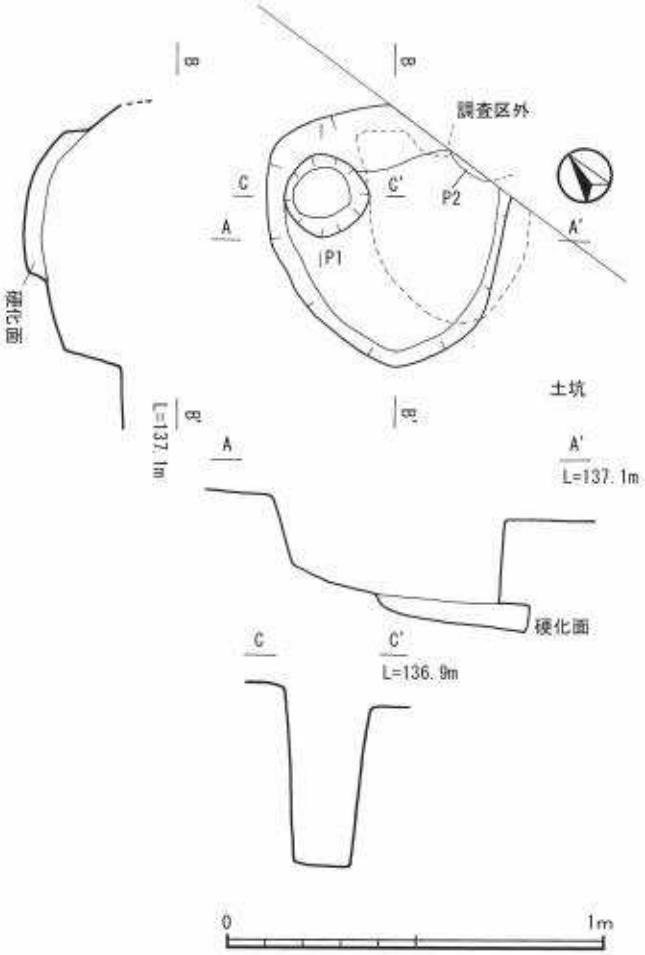
2号溝状遺構（第46図）

GH－6・7区で検出した。最大幅約1m40cm，検出面からの深さが約40cmの掘り込みをもつ。12号～16号竪穴住居跡と重複しながら約33mの長さが残存する。先後関係は12号～15号より新しく，16号より古い。

なお，溝の性格は不明である。



第45図　土坑，1号溝状遺構



2号溝状遺構内出土遺物（第47図：148～165）

148～150は甕の口縁部で，151～155は脚部である。

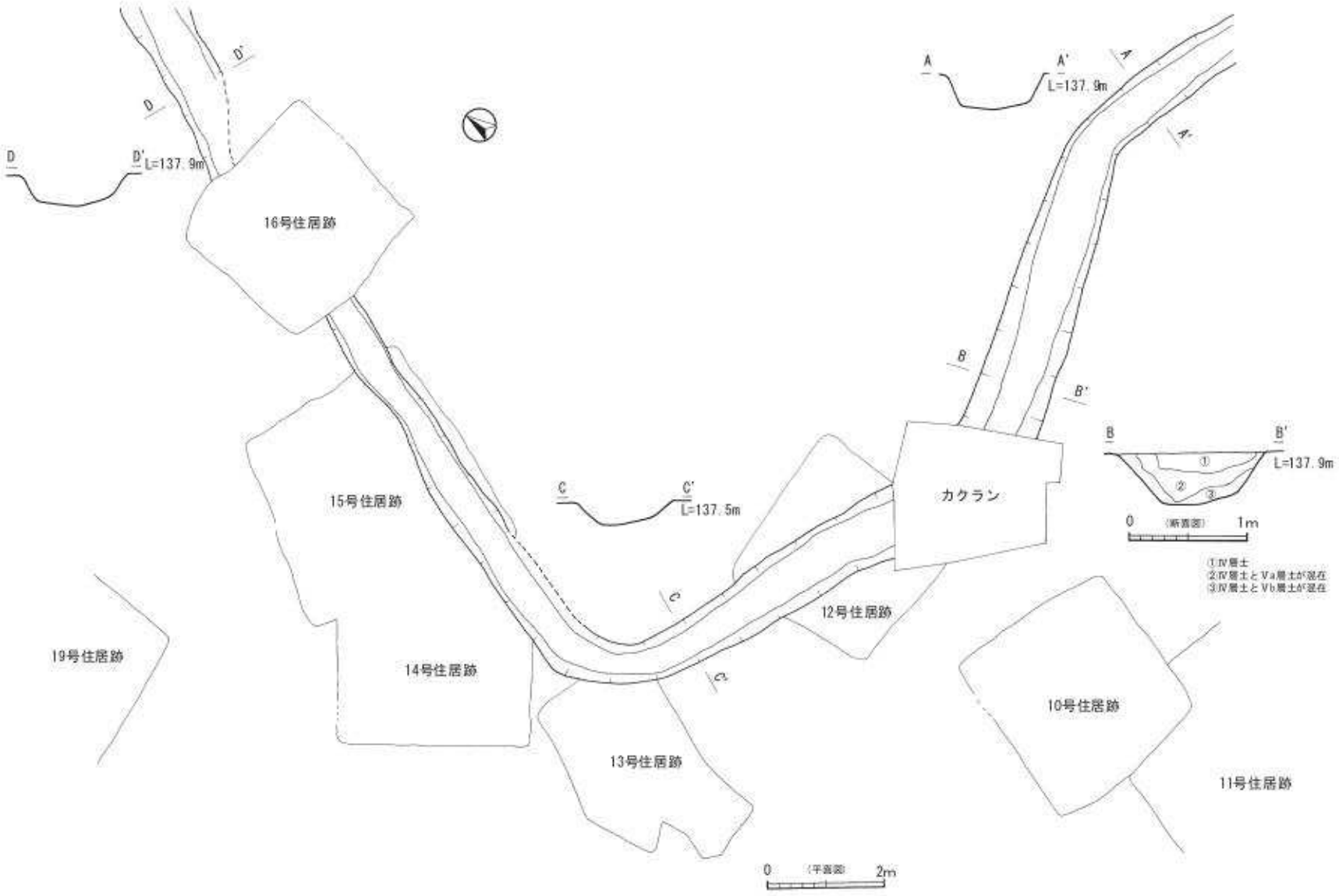
148・149は緩やかに外反するもの，150は内弯気味のものである。151～153の脚部は直線的に伸びるもの，154・155は脚部の端部が緩く弯曲するものである。また，154・155の脚部内面の天井部は平坦な作りになっている。

156～158は壺である。156は折れ曲がりがきつくなく，緩く外反する口縁部形態である。157は直線的に斜め上に向かって外反する口縁部で，158は刻目に布目痕が認められる突帯が貼り付けられている。

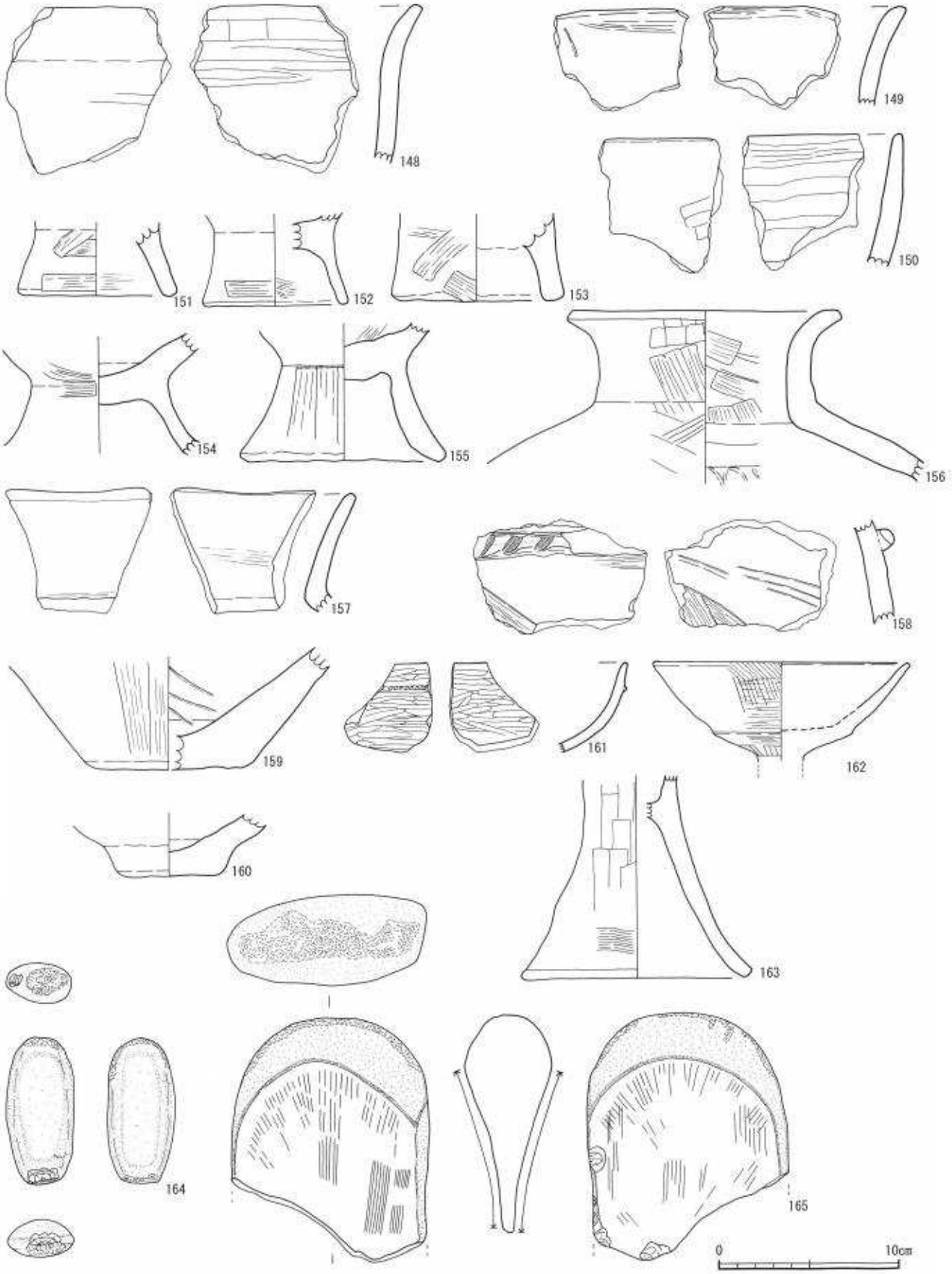
159・160は鉢の底部である。平底で厚みがある。

161～163は高坏である。162は坏部形態が中途で屈折し斜め上方に直線的に伸びている。外面は木目がシャープなハケメ調整が施されている。また，赤く発色する土を表面に使用している。163は筒部をもたずに緩やかに広がる。

164は棒状敲石で上下面に敲打痕が観察される。石材はホルンフェルスである。165は砥石で表裏面に研磨面が，上面には敲打痕が観察される。


D
D'
D
D'
L=137.9m
16号住居跡
A
A'
L=137.9m
A
A'
B
B'
B
B'
L=137.9m
①
②
③
0 (断面図) 1m
①IV層土
②IV層土とVa層土が混在
③IV層土とVb層土が混在
C
C'
L=137.5m
15号住居跡
カクラン
C
C'
12号住居跡
19号住居跡
14号住居跡
13号住居跡
10号住居跡
11号住居跡
0 (平面図) 2m

第46図　2号溝状遺構



第47図　2号溝状遺構内出土遺物

2　遺物

(1)　土器

甕

底部を欠き，全体の形状が不明なものが多いが，多くは口縁部が広口で脚部をもつタイプと考えられる。口縁部の形状や調整などから２つに分類した。さらに，突帯の有無等から無文と有文に細分した。また，脚部を一括してまとめた。

Ⅰ類：口縁部が外反し，内面の稜が明確でないもの。
Ⅱ類：口縁部が直立または内弯するもの。

Ⅰ類（無文）（第 49・50 図：166 ～ 176）

166・167 は胴部があまり張らず，直線的に底部へ至るタイプである。166 は口径 40.4cm を測る。屈曲部から口唇部の内外面はナデ調整，屈曲部から胴部下半部の内外面はハケメ調整が施されている。また，口唇部から胴部上半部まで煤の付着が著しい。167 は口径 23.6cm を測り，屈曲部から胴部下半部の外面はハケメ調整及びヘラによるナデ調整が施されている。168 は口径 23.0cm を測り，胴部が張るタイプである。口縁部外面に粉瘤と思われる５mm 大の痕跡が認められる。169 は口径 19.0cm を測り，口唇部は平坦な作りである。内外面とも煤が付着している。170 は口径 22.4cm を測り，内外面ともハケメ調整が施されている。外面全体に煤が付着している。

171 ～ 176 は口縁部片である。171 ～ 175 は胴部があまり張らないタイプ，176 は胴部が張るタイプである。174・176 の口唇部は平坦な作りである。

Ⅰ類（有文）（第 50 図：177 ～ 182）

177 ～ 182 は屈曲部付近に絡縄突帯や刻目突帯が施されている口縁部片及び胴部片である。178・181 はヘラ状工具により斜方向に刻目が施された絡縄突帯をもつ。また，178 の口唇部は平坦な作りである。177・179・180・182 は刻目に布目圧痕が認められる。

Ⅱ類（有文）（第 50 ～ 53 図：183 ～ 202）

183 ～ 187 は口縁部が直立するタイプである。184 は口径 30.0cm，底径 10.5cm，器高 34.2cm を測る。胴部に絡縄突帯を一周させて，指で成形をしている。186 は最大幅が 1.8cm を測る比較的大きい刻目突帯が貼り付けられている。ヘラ状工具により斜方向に刻目が施され，布目圧痕が認められる。183 ～ 185・187 は胴部に絡縄突帯が貼り付けられている。また，183 は突帯にヘラ状工具による押圧が認められる。

188 ～ 201 は口縁部が内弯し，胴部に突帯をもつタイプである。188・189・192・201 は突帯にヘラ状工具による押圧が認められ，191・193・199 は刻目に布目圧痕が認められる。

底部（第 54 図：203 ～ 229）

底部を一括して掲載した。

203 ～ 213 は脚の高い底部である。外反しながら開くもの（204・205・207・208・211・212），弯曲の度合いは緩く直線的なもの（206・209・213），直線的に伸びるもの（210）がある。また，脚部内部の天井部の形態に着目すると，天井部が平坦なもの（211），天井部が上方にくぼむもの（203・206・209），天井部が下方に膨らむもの（204・205・207・208・210）がある。

214 ～ 229 は脚の低い底部である。外反するもの（216・218・219・220・221・226），直線的に開くもの（214・215・217・222・224・229），端部が内弯するもの（223・225）がある。226 は底部に刻目のある突帯を１条貼り付けている。227 は張り出しを呈し，上げ底の底部である。228 は高台状の底部である。

壺

甕に比べ出土数が少ない。胴部に刻目突帯や幅の広い突帯が巡るタイプが多い。部位ごとに分けてまとめた。

口縁部～頸部（第 56 図：230 ～ 237）

230 ～ 234 は屈曲部に突帯をもたないタイプである。230 は口縁部が「く」の字状に折れて外反するものである。231 ～ 234 は折れ曲がりがきつくなく，外反する口縁部である。235 ～ 237 は屈曲部に刻目突帯をもつタイプである。235・237 はヘラ状工具による刻目，236 は半竹管文の刻目である。

胴部（第 56 ～ 58 図：238 ～ 250）

238・241 は口縁部を欠く頸部から胴部である。240 は２条の突帯に施された刻目が１つの工具により同時に施文されている。241 は断面三角形の刻目突帯が１条巡る。242・244 ～ 246 はヘラ押圧による斜格子状の文様を施した幅広突帯を，243 はヘラ押圧による右下がり方向の斜文様を施した幅広突帯をもつ。247 は突帯に斜方向の沈線と竹管文を組み合わせた文様を施している。248 は突帯に横方向，右下がり方向，左下がり方向の順にヘラ押圧を行い格子状の文様を施している。249・250 は断面が正方の突帯に，横方向の沈線を巡らした後，斜方向にヘラ押圧を施している。

底部（第 58 図：251 ～ 262）

底部形態は，丸底のもの（251），平底のもの（252 ～ 260），わずかに丸みを帯びたもの（261），高台状のもの（262）がある。

鉢（第59図：263～267・278）

甕のように口縁部が直行しているもの（263・265・266），やや内弯しながら口縁部に至るもの（264・267）がある。278は蓋である。

台付鉢（第59図：268～277）

ミガキの有無で2つに大別した。268～270はミガキのないタイプである。268は外反しながら口縁部に至る。271～277はミガキを有するタイプである。271は竹管文が胴部を一周巡る。外面には煤の付着が顕著に認められる。272の胴部は丸みをもち，内弯しながら口縁部に至る。273～277は脚部で主に外面にミガキが認められる。また，内外面に煤の付着も見られる。

坩（第60図：279～282）

279は口縁部で口径8cmを測る。280は胴部から底部である。底部は平底に近い。281は頸部から胴部で，頸部に刻目を施している。282は胴部に1条の刻目突帯を巡らしている。外面には黒斑が顕著に見られる。

ミニチュア土器（第60図：283～287）

この土器類は，鉢を簡単に模倣して小型に作ったものである。284～287は底部が平底の土器である。

土製品（第60図：288・289）

288は匙形土製品である。口縁部の一部を欠くがほぼ完形品である。289は把手である。

鞴の羽口（第60図：290）

高坏の脚部を再利用したものである。一端がガラス化しており，この部分を鍛冶炉に直接向けて送風を行っていたであろうことが推察される。

高坏（第61図：291～303）

291・292は坏部下半に段を有する。292の外面には赤色顔料が施され，ミガキ調整で仕上げられている。293・294は器形が椀形の坏部である。293は内外面とも，294は外面に赤色顔料が施されている。また，293の外面には煤の付着が，294の内面には指頭痕が認められる。295～297は坏部の胴部に稜を有する。295は内外面ともミガキ調整で仕上げられ，外面の色調は黒褐色である。296の内外面には煤の付着が認められ，297の外面には赤色顔料が施されている。298は坏部から脚部，299～303は脚部である。300～303は筒状のタイプで，302・303は上部から大きく広がりながら接地面に向かう。また，301は外面に赤色顔料が施されている。

(2) 石器

Ⅲ層・Ⅳ層から出土しているが，Ⅳ層から縄文時代晩期及び古墳時代の土器が共に出土しており，時代を層位で明らかにすることはできなかった。そのため，これまでの研究成果をもとに砥石を古墳時代相当とした。

砥石（第62・63図：304～307）

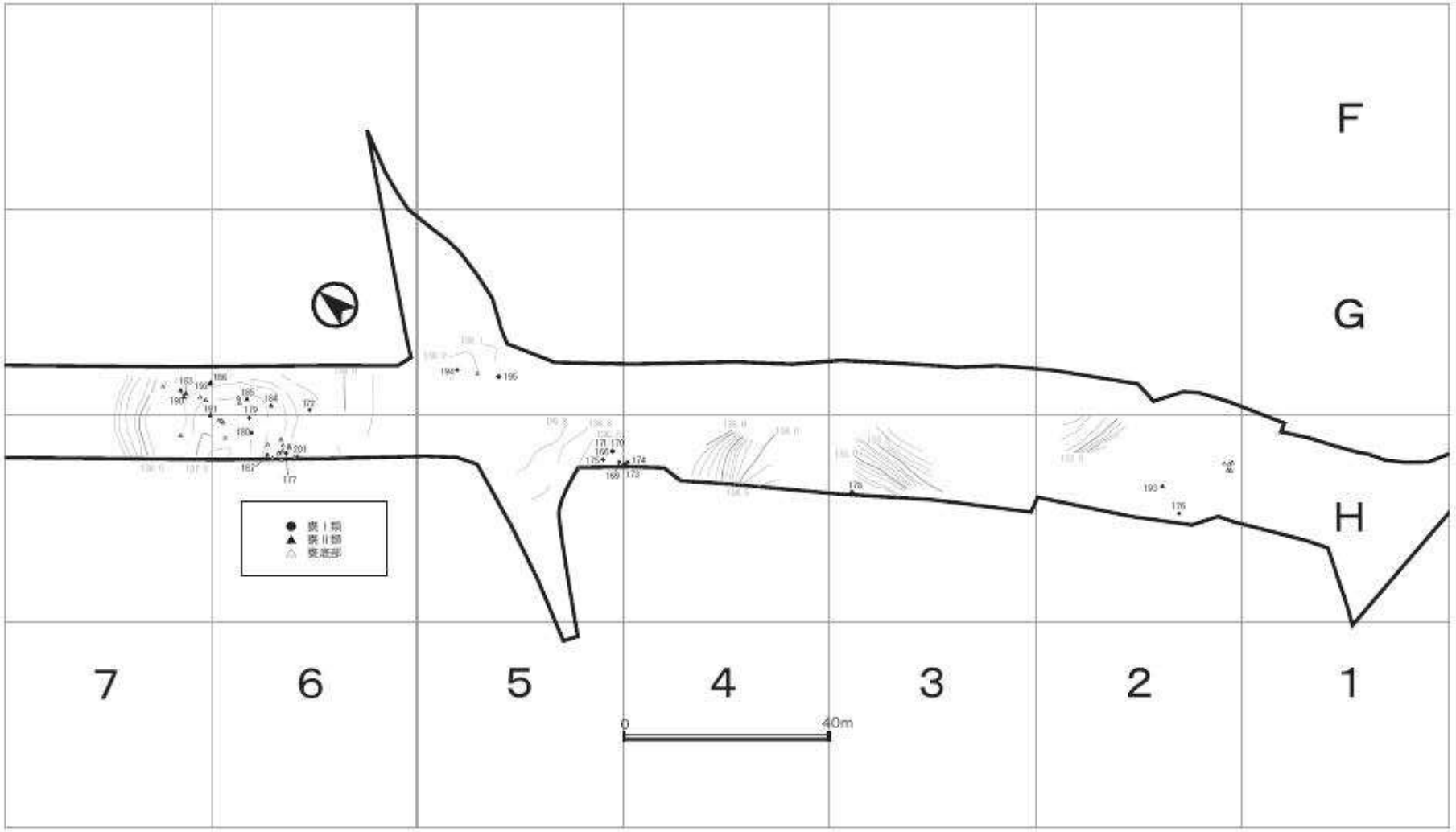
304～307は，主に鉄器の整形に利用されたと思われる。304・305は破損品ではあるが，一定方向の線状痕が観察される。また，305の裏面には敲打痕も見られる。306・307は棒状の石材を素材としている。表裏面及び側面に一定方向の線状痕が観察される。また，306は下面に，307は上面に敲打痕が見られることから，敲石としても併用されていた可能性がある。なお，4点とも石材は砂岩である。

石製紡錘車（第63図：308）

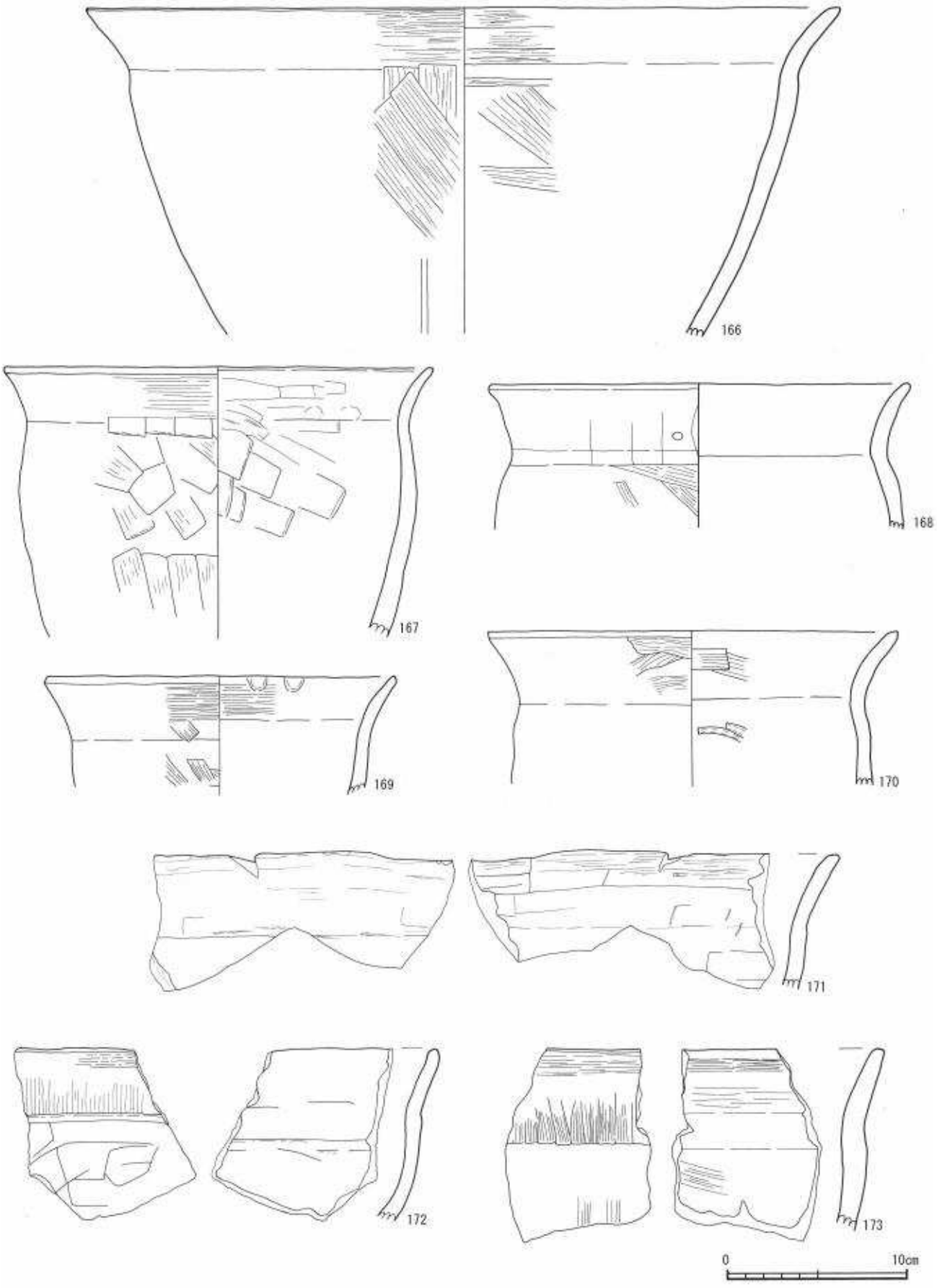
Ⅳ層で出土した。円形を呈し，厚さが0.6cmと薄い。重さは22gである。表裏面ともミガキによって丁寧に整形されている。

(3) 鉄製品（第63図：309・310）

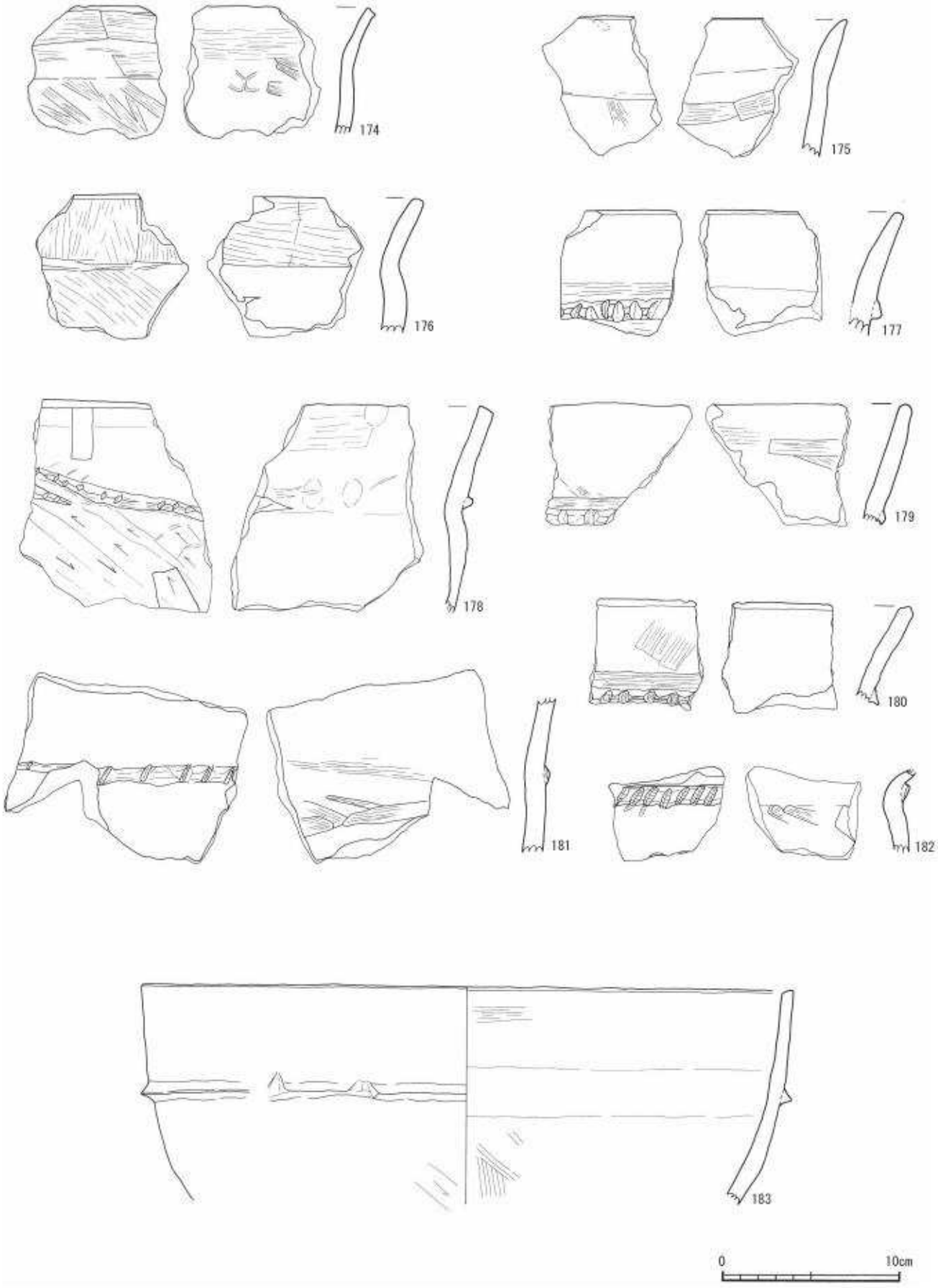
309は鉄鏃である。残存長10.3cmで茎が欠損している。刃部と茎の境に，鍛接痕らしき痕跡が見られる。310は鉄製利器の刃部先端である。下面から見ると，刃部が弯曲しているのが確認できる。



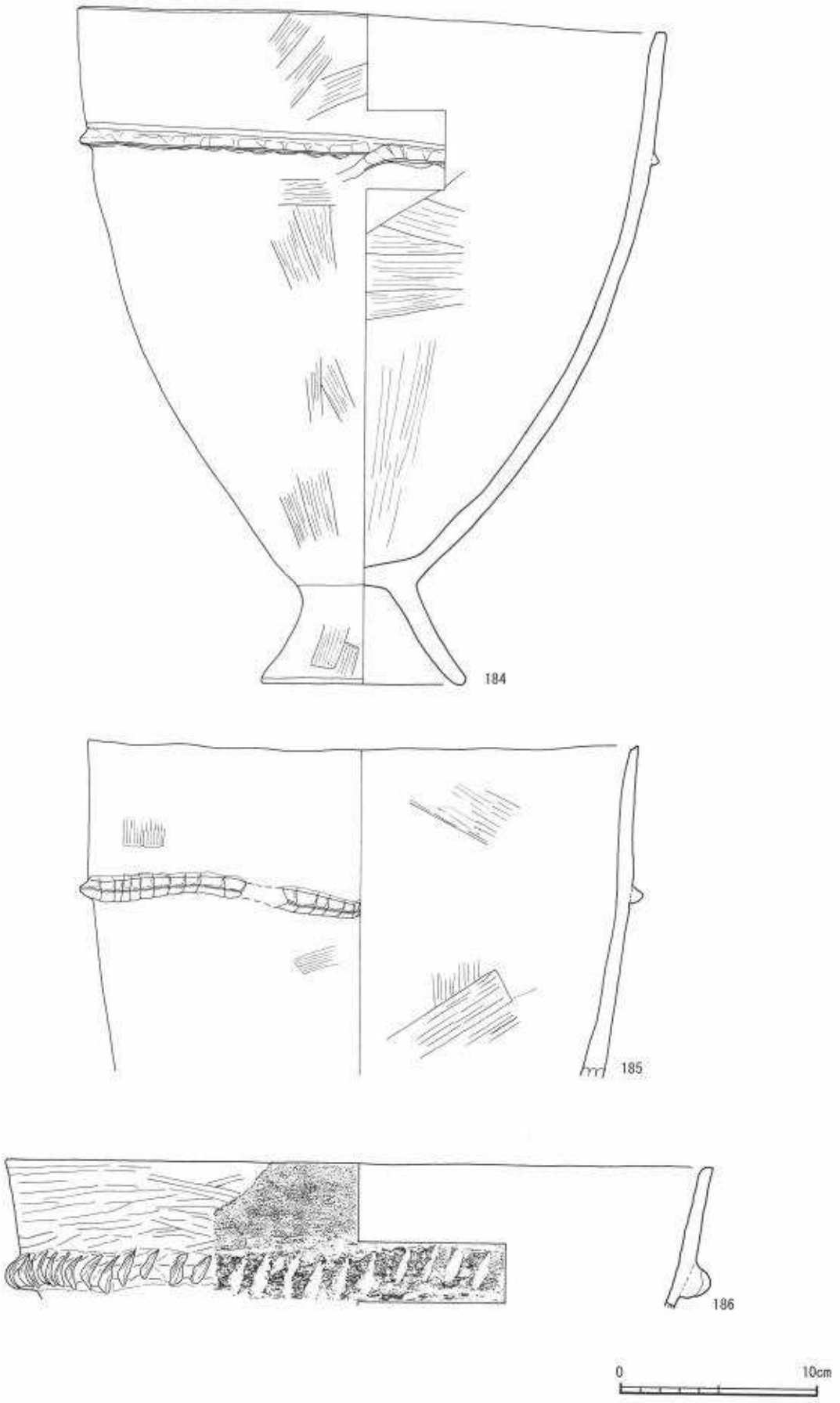
第 48 図　遺物出土状況図（甕）



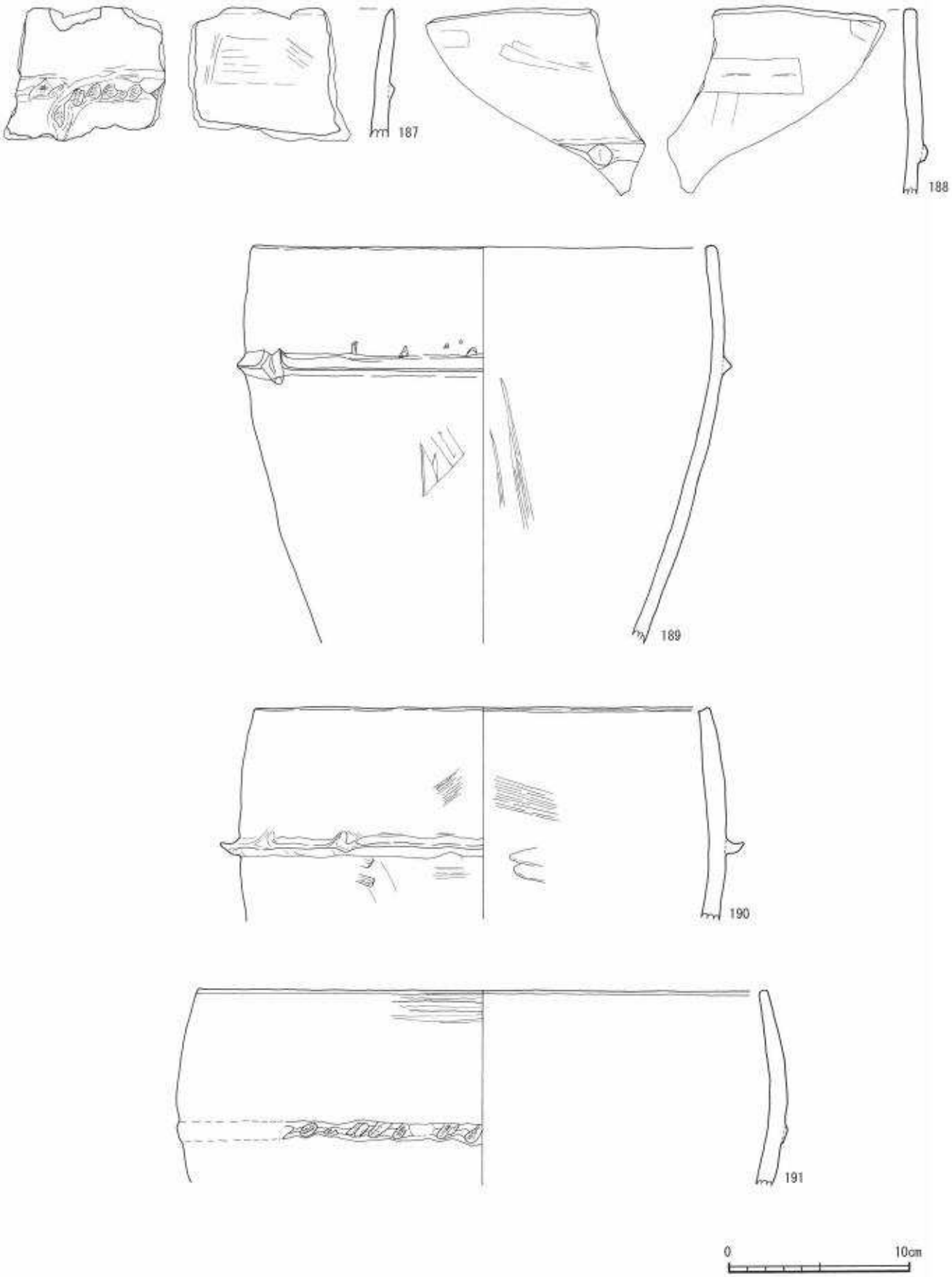
第49図　古墳時代の土器①



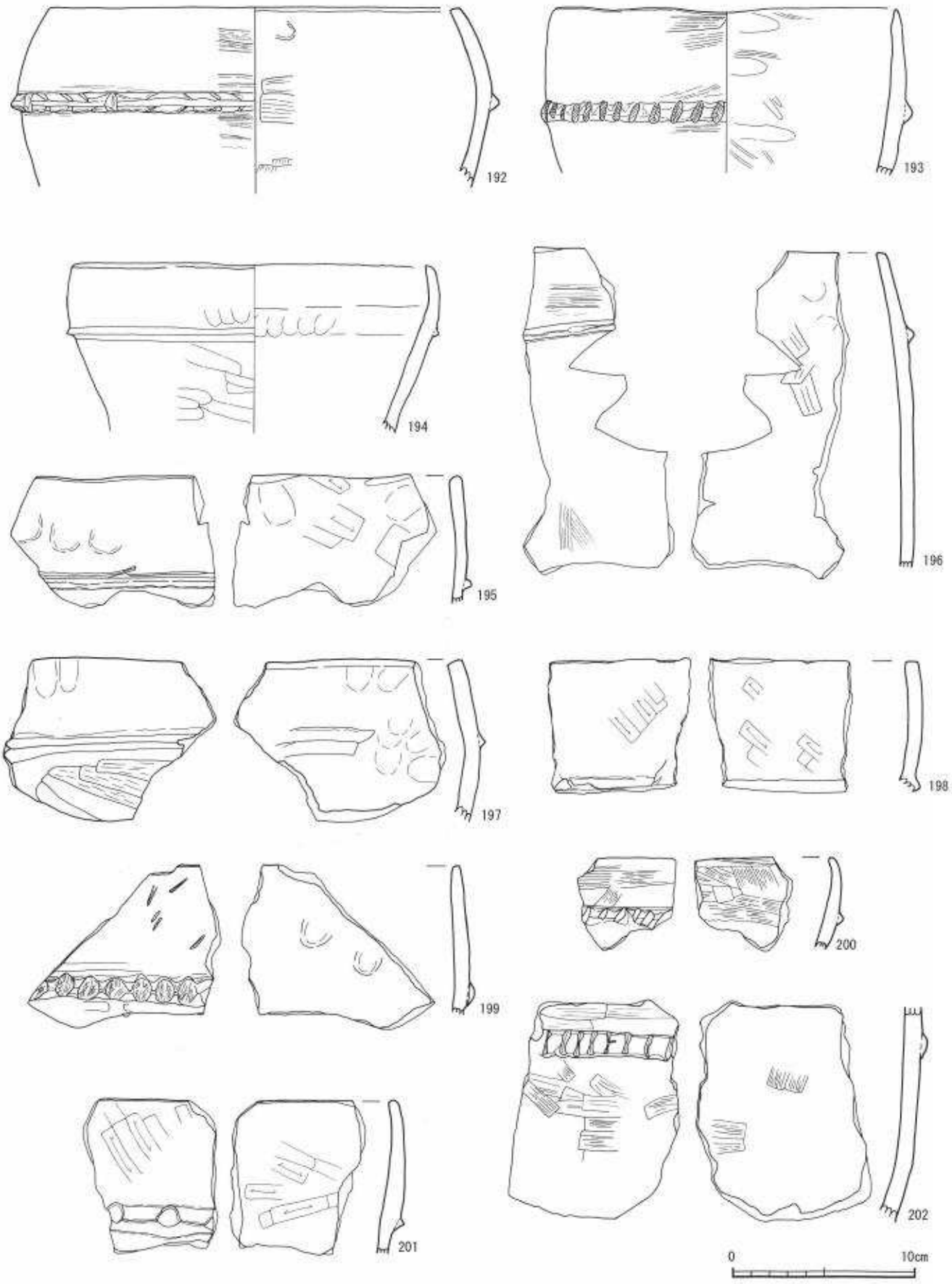
第50図　古墳時代の土器②



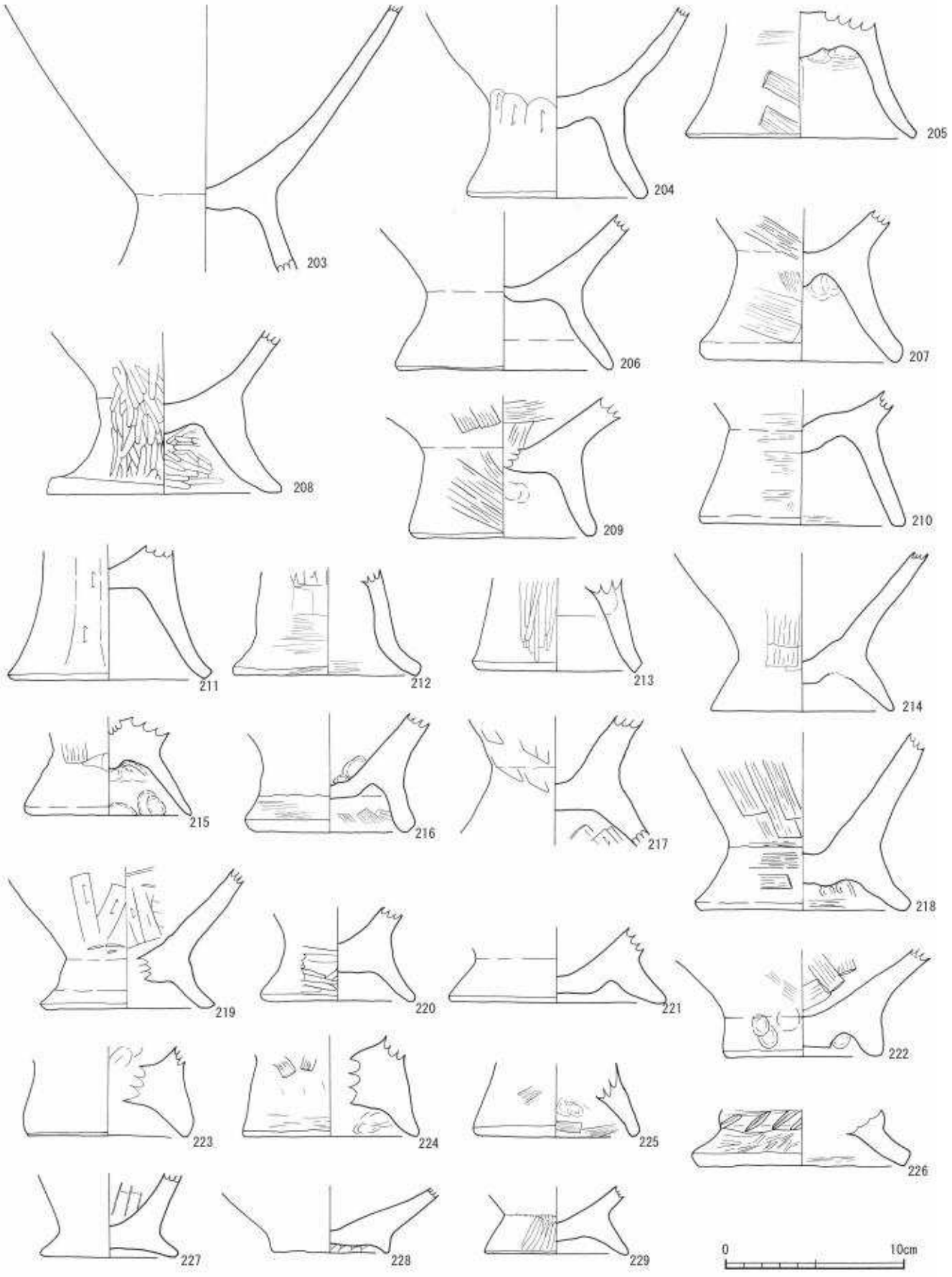
第51図　古墳時代の土器③



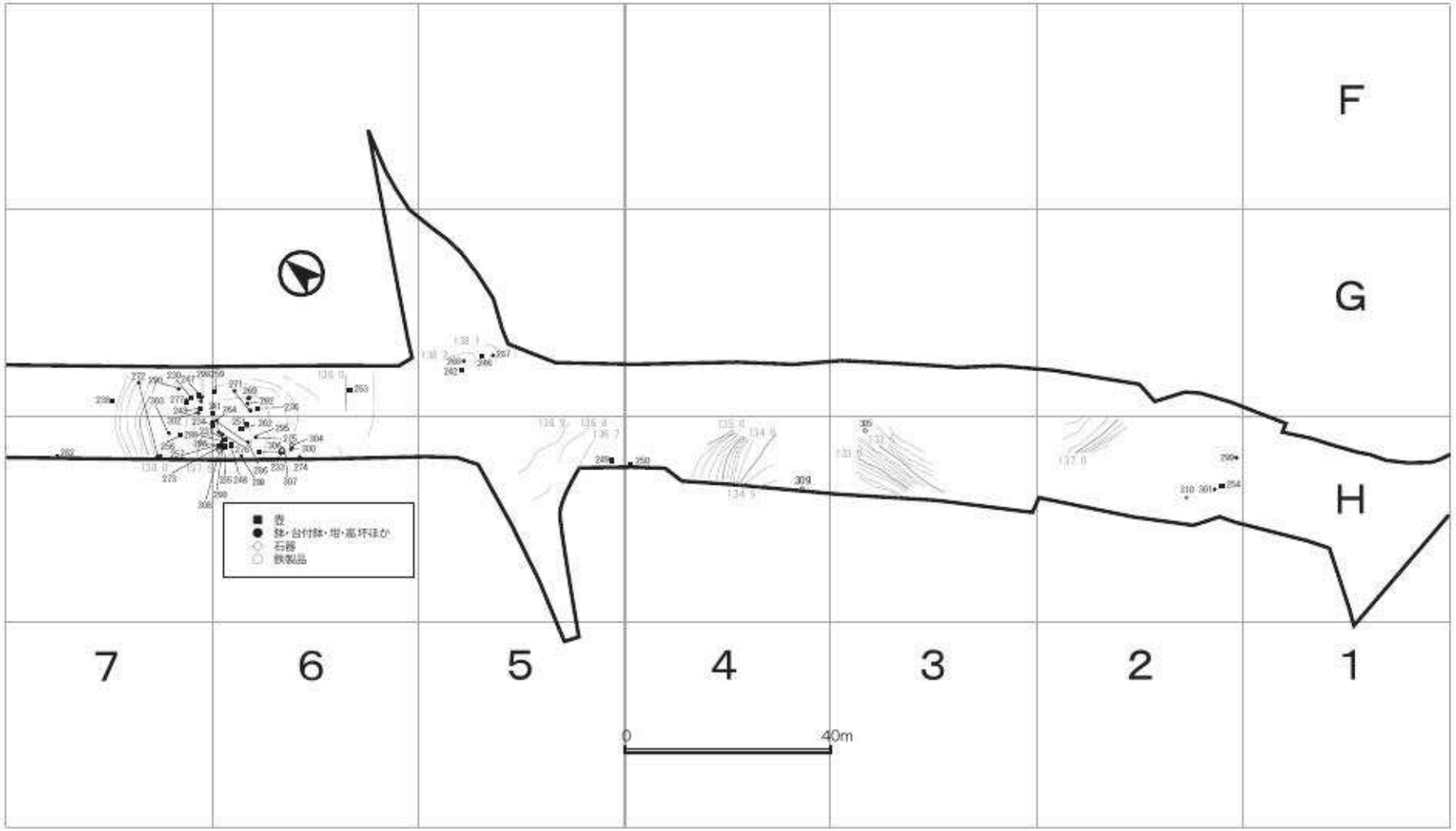
第52図　古墳時代の土器④



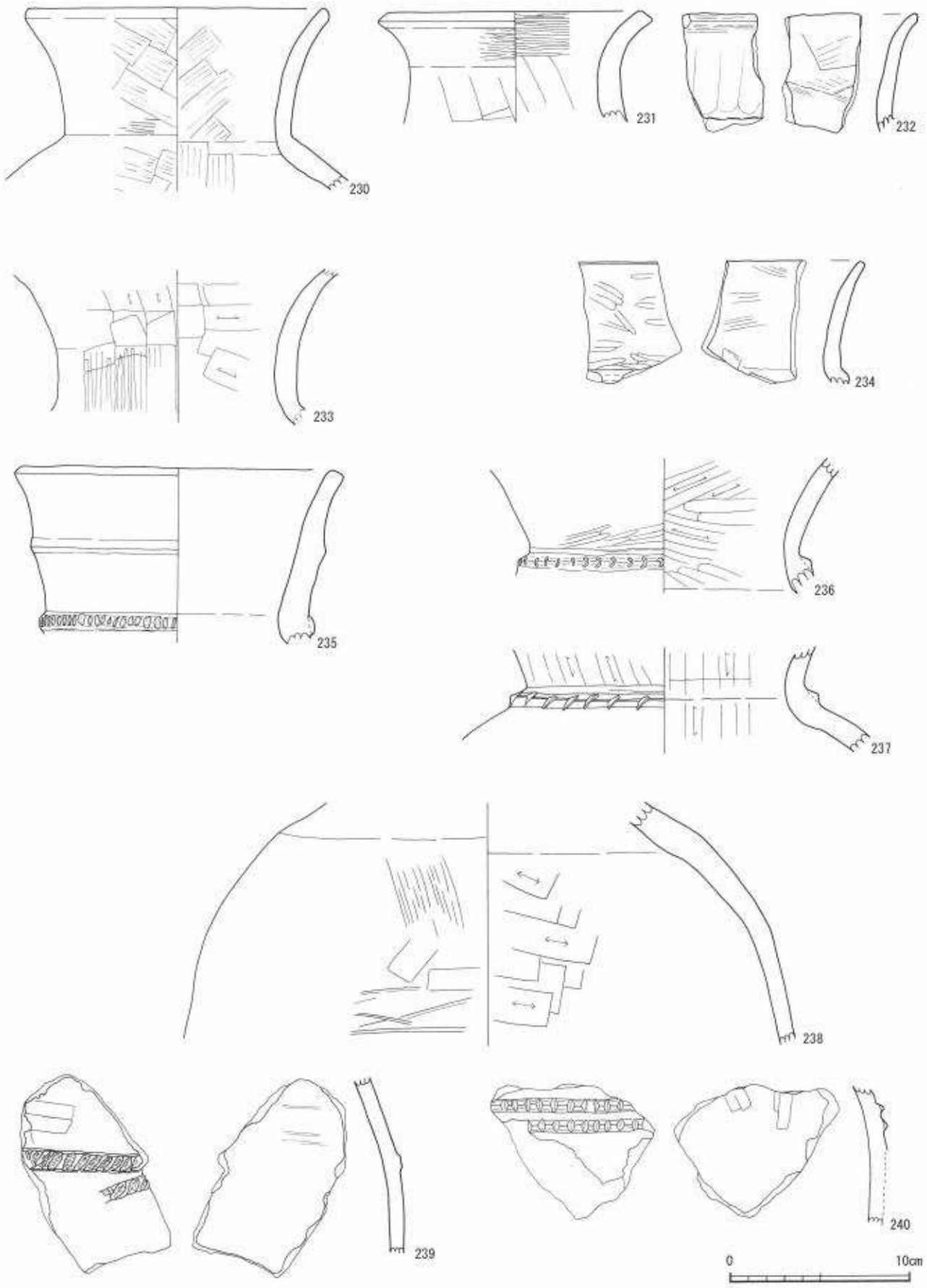
第53図　古墳時代の土器⑤



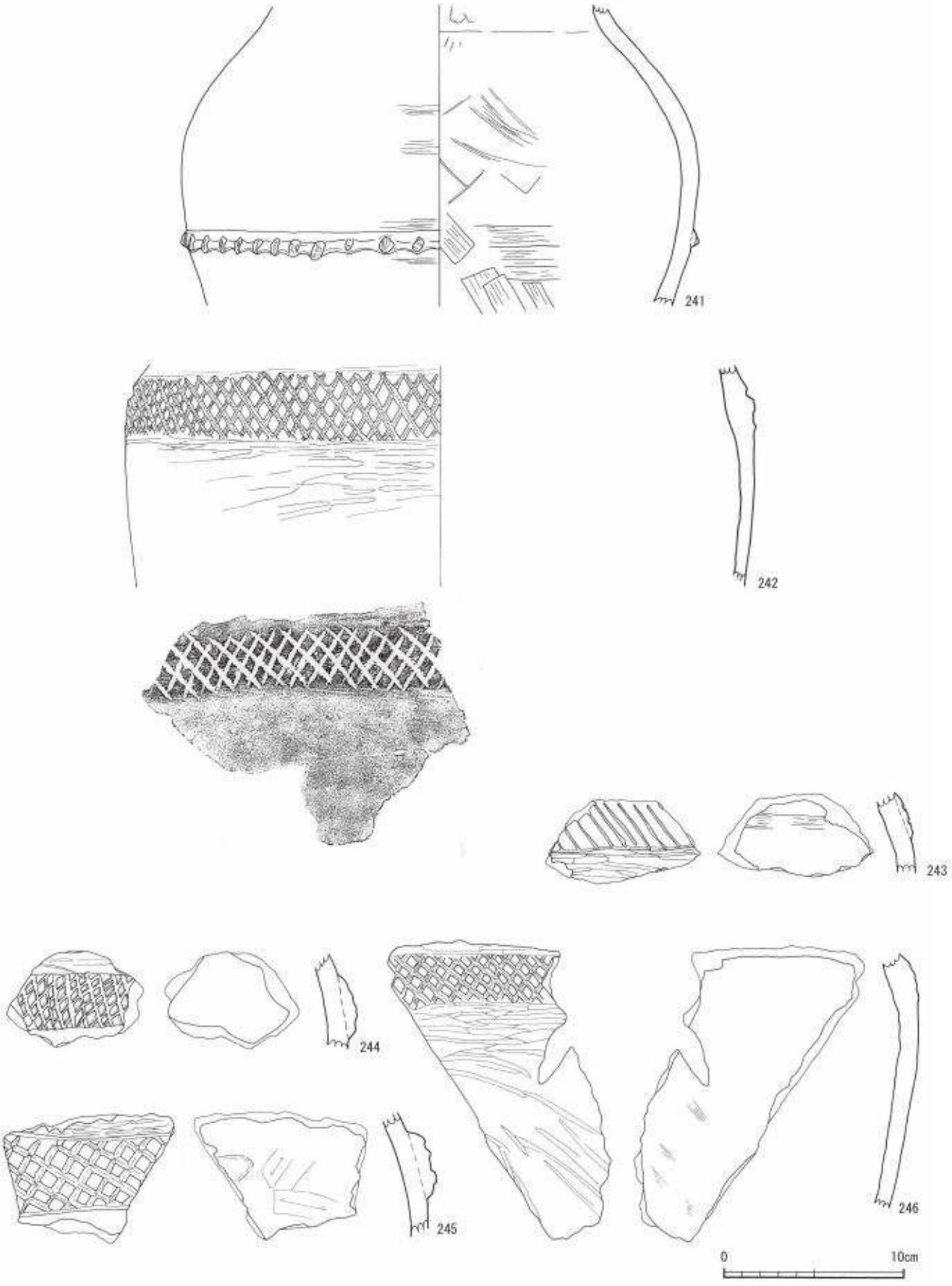
第54図　古墳時代の土器⑥



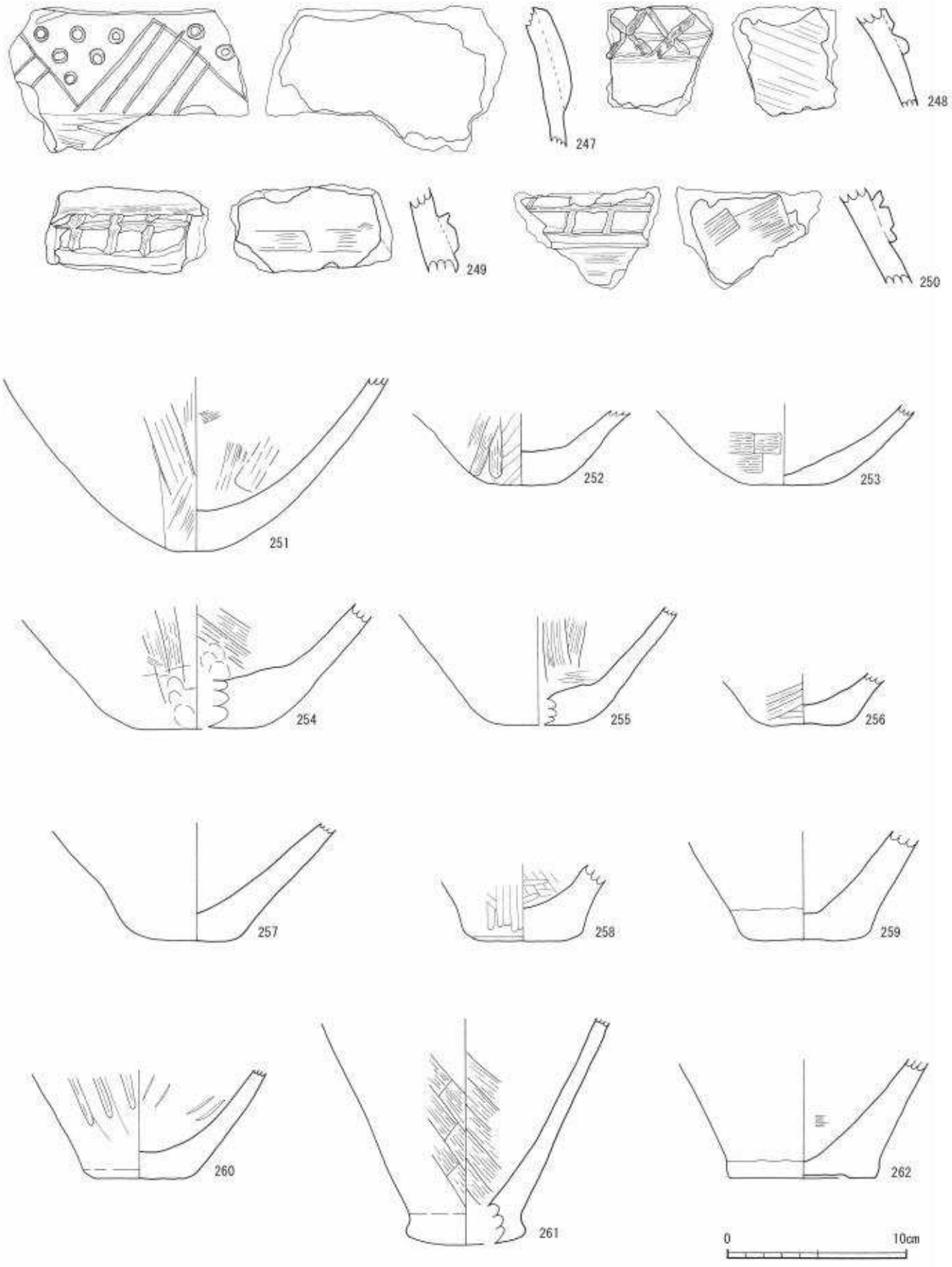
第55図　遺物出土状況図（壺ほか，石器）



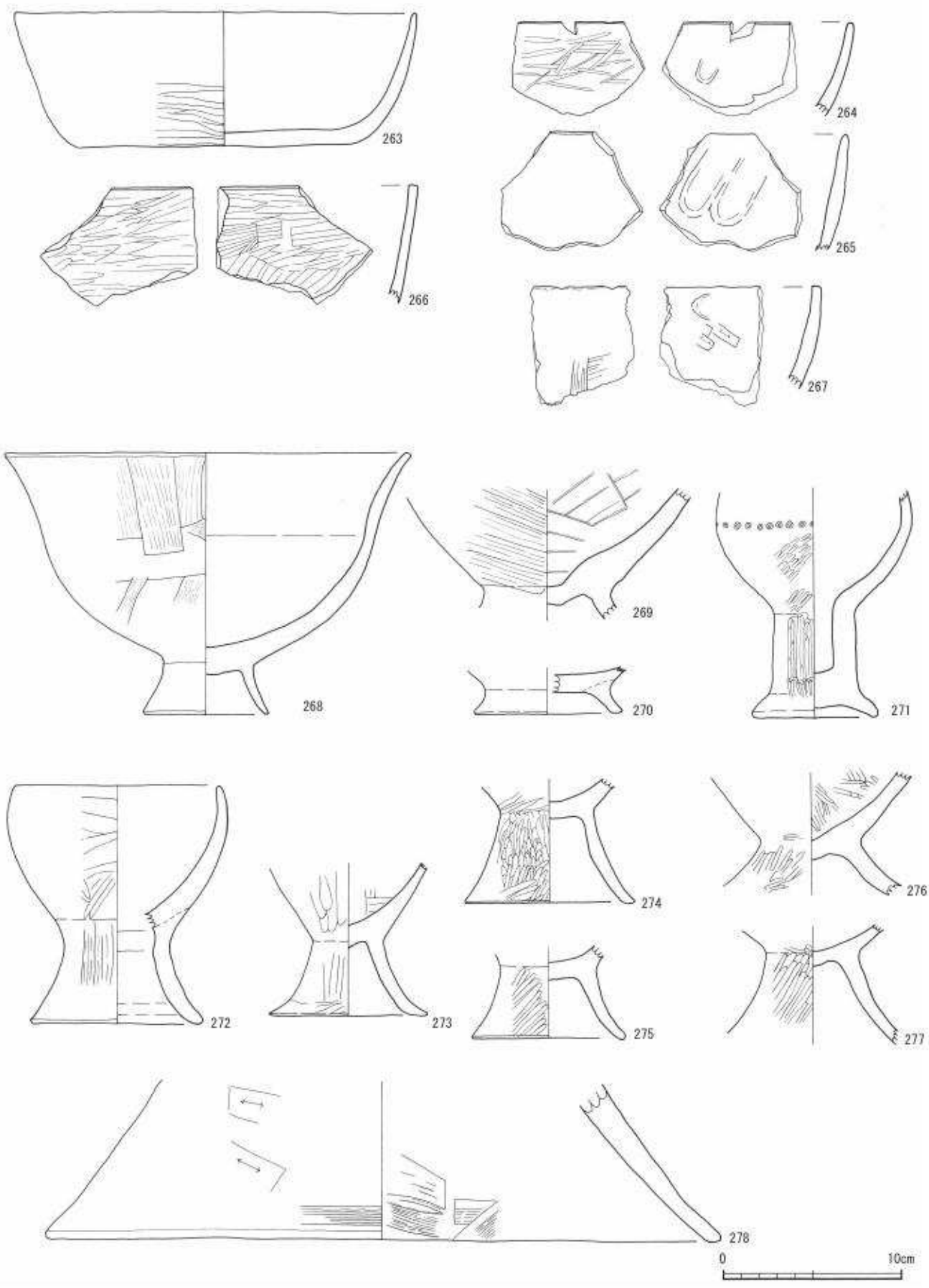
第56図　古墳時代の土器⑦



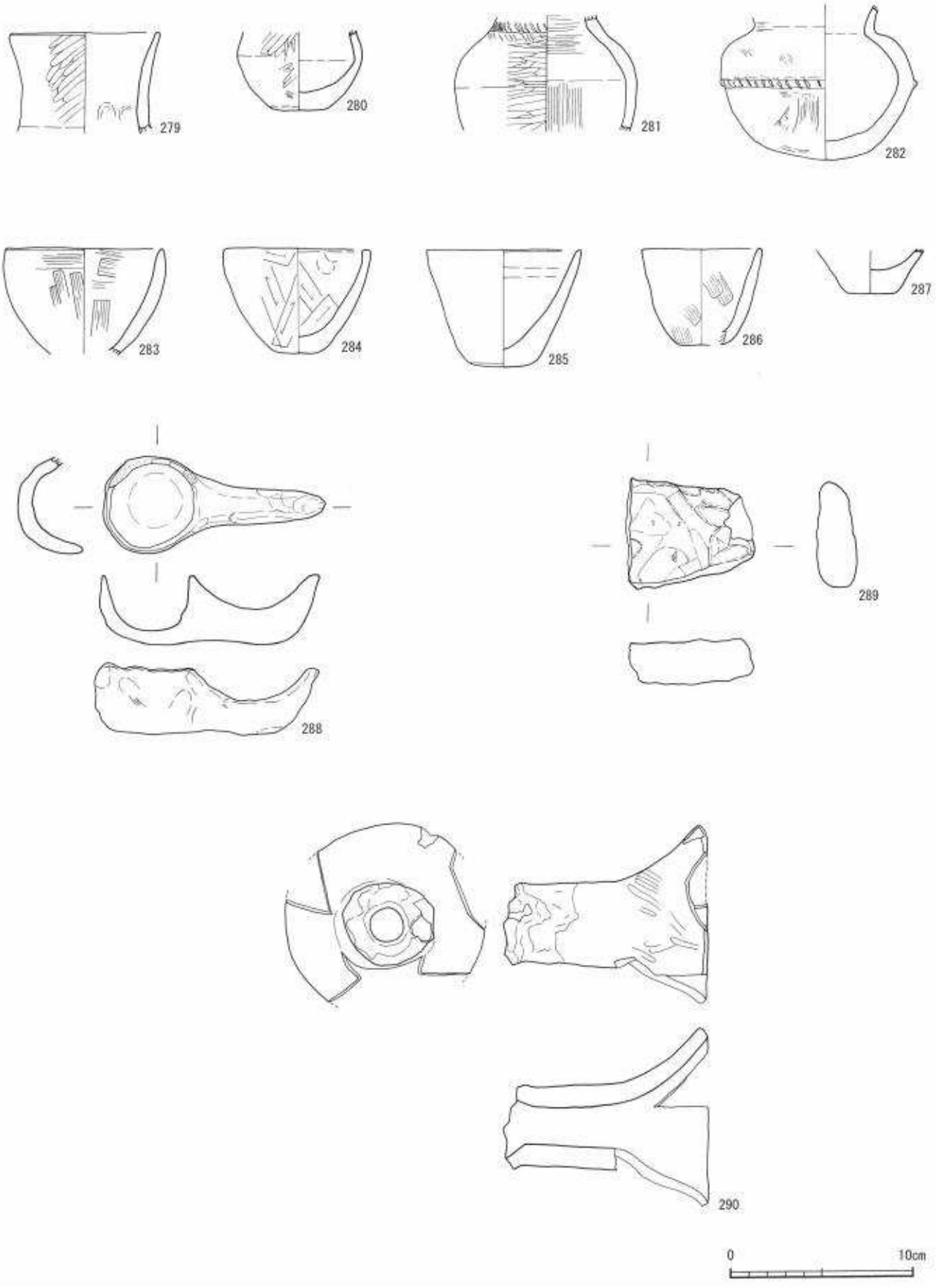
第57図　古墳時代の土器⑧



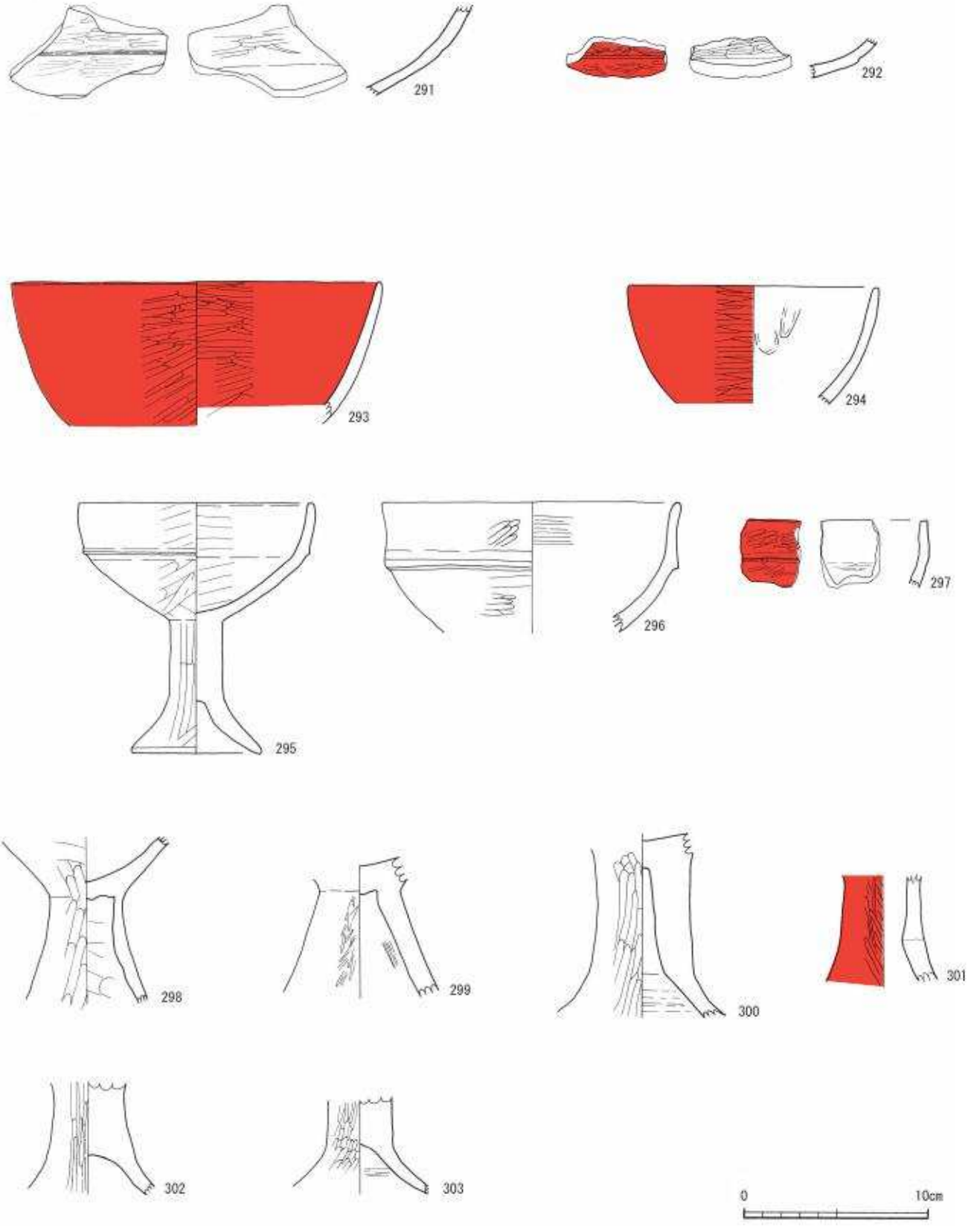
第58図　古墳時代の土器⑨



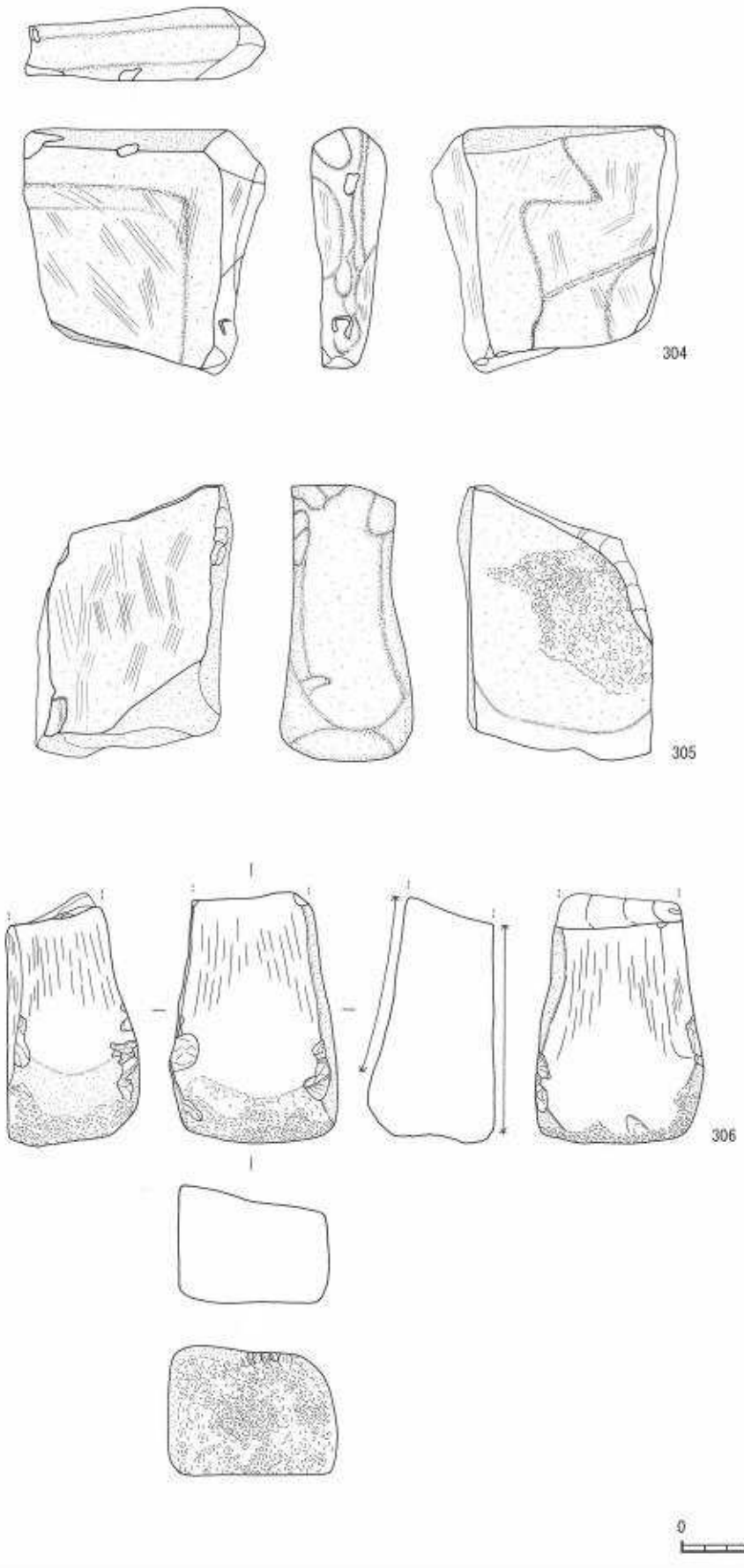
第59図　古墳時代の土器⑩



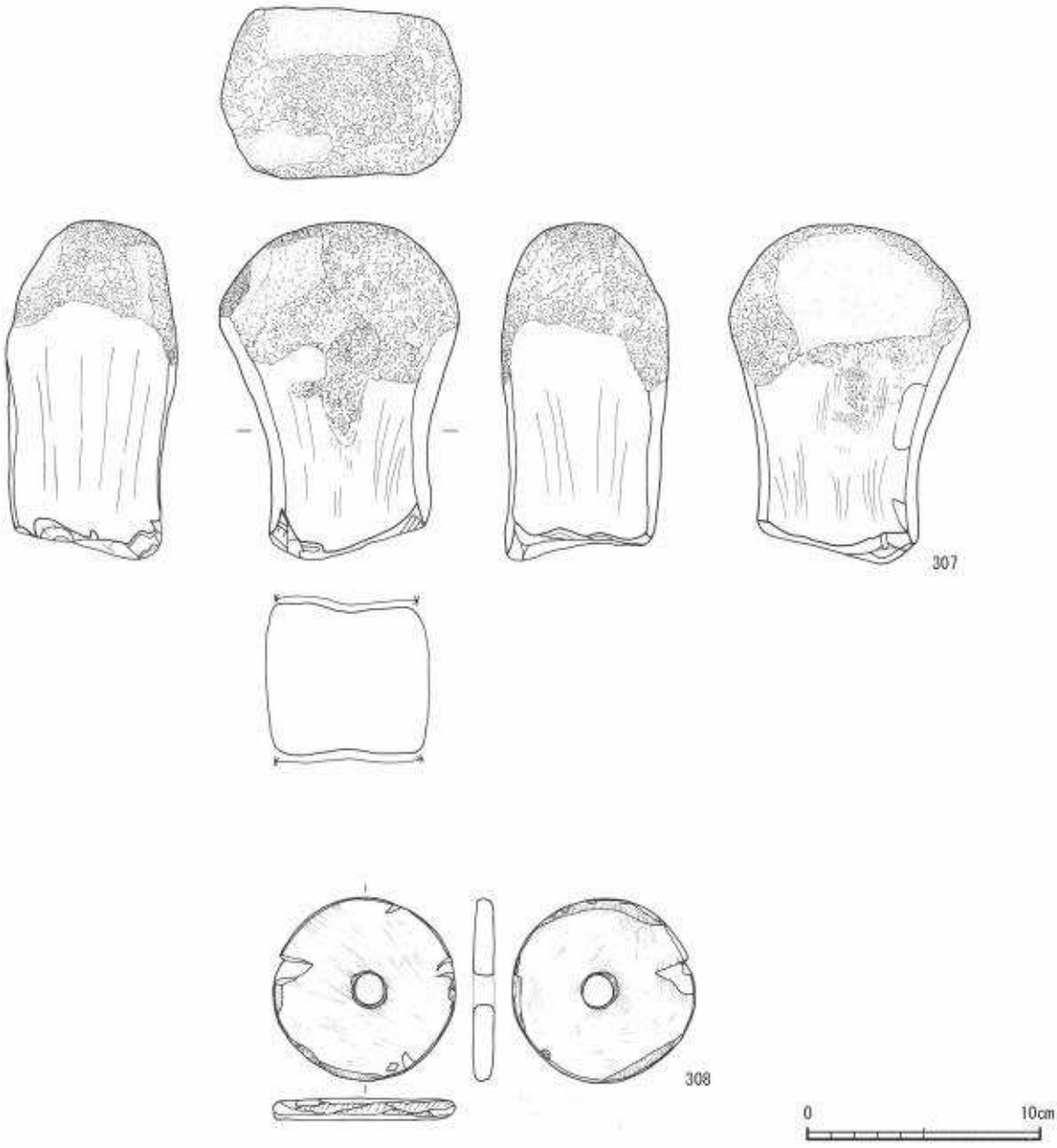
第60図　古墳時代の土器⑬



第61図　古墳時代の土器⑫



第62図　古墳時代の石器①



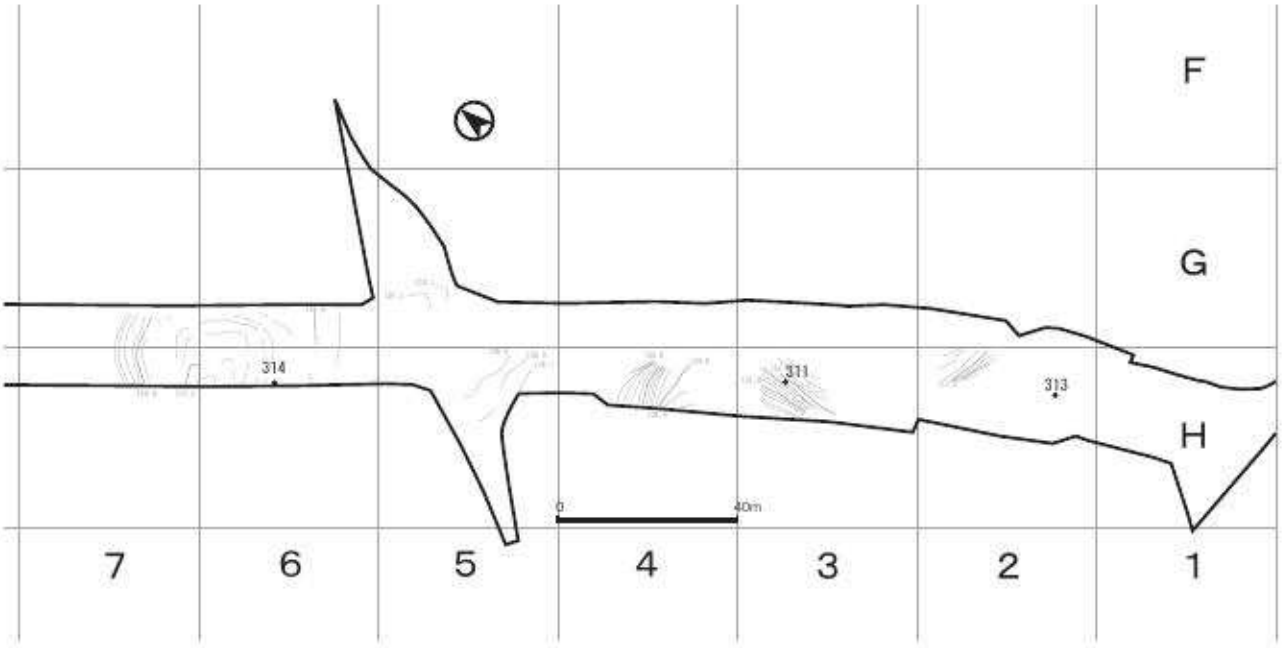
第63図　古墳時代の石器②，鉄製品

第6節　古代の調査

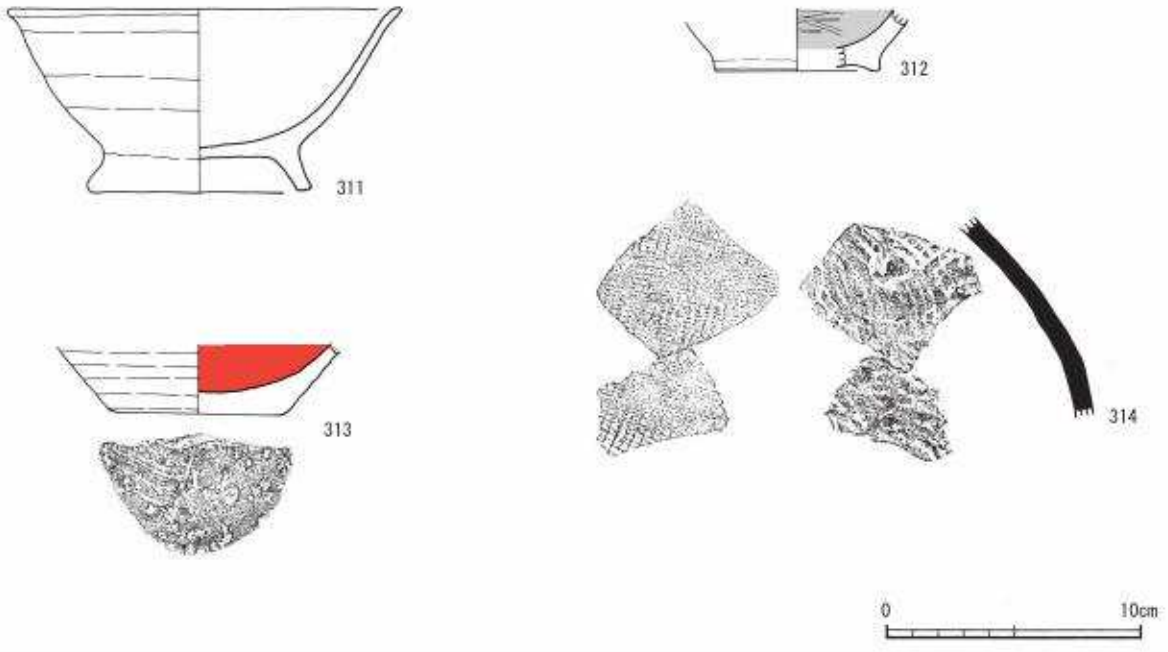
中心となる包含層はⅢ層・Ⅳ層である。調査の結果，遺物の出土は少なく，土師器が3点，須恵器1点が出土した。なお，遺構は検出されなかった。

遺物（第65図：311～314）

311・312は土師器椀である。311はほぼ完形で出土した。ヘラ切り離しの後，細い半円断面の高台をつけている。312は内面にミガキが見られ，色調は黒色である。313は土師器坏である。底部はヘラ切り離しの後，ナデ調整を行っている。胴部は直行して立ち上がる。また内面は朱色の部分が残っている。314は須恵器である。壺の胴部片で，外面は格子目タタキ痕が，内面には同心円状当て具痕が見られる。



第64図　遺物出土状況図



第65図　古代の遺物

表１　縄文時代早期の土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	部位	調整		色調		胎土				残存率	出土区	層	備考
				外	内	外	内	長	石	角	その他				
7	1	深鉢	口縁部	押型文	押型文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			H-5	－	古墳３号住内
	2	深鉢	胴部	押型文	ナデ	橙	にぶい黄橙	○	○	○	砂礫	○	G-6	Ⅵ	
	3	深鉢	胴部	押型文	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○	○	砂礫		G-6	Ⅵ	

表２　縄文時代前期の土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	部位	調整		色調		胎土				残存率	出土区	層	備考
				外	内	外	内	長	石	角	その他				
9	5	深鉢	胴部	条痕	条痕	明赤褐	橙	○				○	G-6	Ⅳ	

表３　縄文時代晩期の土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	部位	調整		色調		胎土				残存率	出土区	層	備考
				外	内	外	内	長	石	角	その他				
9	6	深鉢	口縁部	条痕	条痕	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○		○	H-4	Ⅳ	
	7	深鉢	口縁部	条痕	条痕	黒褐	灰黄褐	○	○	○			H-6･G-7	Ⅳ	
	8	深鉢	口縁部	条痕	条痕	黄褐	暗灰黄	○	○				H-7	Ⅳ	
	9	深鉢	口縁部	ナデ	ミガキ	黒褐	にぶい赤褐	○	○				H-2	Ⅳ	
	10	深鉢	口縁部～胴部	条痕	条痕	にぶい黄橙	暗灰黄	○	○	○		○	H-7	－	古墳19号住内
	11	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	黒	黒褐		○				H-6	Ⅳ	
	12	深鉢	口縁部	条痕	条痕	暗灰黄	暗灰黄	○	○	○		○	H-7	－	古墳19号住内
10	13	深鉢	口縁部	条痕・ハケメ	ハケメ後ナデ	褐	にぶい黄褐		○	○		○	G-6	Ⅳ	
	14	深鉢	口縁部	ナデ	ナデ	赤黒	暗褐		○				H-7	Ⅳ	
	15	浅鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒褐	明赤褐		○			○	G-7	Ⅳ	
	16	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒	黒褐	○				○	G-6	Ⅳ	
	17	浅鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒褐	赤褐	○				○	GH-3･4	Ⅳ	
	18	浅鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒褐	にぶい褐	○	○	○		○	H-1	Ⅳ	
	19	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒	黄灰		○				GH-7	Ⅳ	
	20	浅鉢	口縁部	ナデ	ミガキ	橙	橙		○	○			GH-3･4	Ⅳ	
	21	浅鉢	口縁部	ミガキ	ナデ	黒褐	黒褐		○	○			H-6	Ⅳ	
	22	浅鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	黒褐	にぶい黄褐	○	○	○		○	H-7	－	古墳19号住内・赤色顔料
	23	浅鉢	口縁部	ミガキ	指頭痕・ナデ	暗褐	にぶい褐	○	○	○		○	G-6･7	Ⅳ	
	24	半粗半精製	口縁部	ナデ	ミガキ	黒褐	黒褐	○	○	○			H-7	Ⅳ	
	25	半粗半精製	口縁部	ナデ	ミガキ	黒	黒褐	○	○	○		○	H-6	Ⅳ	
11	26	半粗半精製	口縁部	ハケメ	条痕	黒	黒褐	○	○	○	赤色粒・砂礫		H-7	Ⅳ	
	27	半粗半精製	口縁部	ハケメ	ミガキ	黒褐	黒褐	○	○	○			H-7	Ⅳ	
	28	半粗半精製	完形	条痕・ナデ	ミガキ	明赤褐	明赤褐	○	○		砂礫	○	G-5	Ⅳ	

表４　古墳時代の土器観察表（土製品を含む）①

挿図番号	掲載番号	器種	部位	調整		色調		胎土				残存率	出土区	層	備考
				外	内	外	内	長	石	角	その他				
18	50	甕	脚部	ハケメ	ナデ	にぶい黄橙	明赤褐	○		○		○	H-5	－	１号住内
	51	壺	口縁部～頸部	ナデ	ナデ	明褐	褐	○	○	○		○	H-5	－	１号住内
	52	壺	胴部	ナデ	ハケメ後ナデ	暗褐	暗赤褐		○	○			H-5	－	１号住内
19	53	甕	口縁部～胴部	ハケメ	指頭痕・ハケメ	暗赤褐	にぶい赤褐	○	○			○	H-5	－	２号住内
	54	甕	口縁部	ハケメ	指頭痕・ハケメ	黄褐	にぶい黄褐	○	○		赤色粒		H-5	－	２号住内
	55	甕	脚部	指頭痕・ハケメ	ハケメ	にぶい黄	にぶい黄褐	○	○	○	砂礫		H-5	－	２号住内
	56	鉢	口縁部	ハケメ	ハケメ	にぶい褐	明褐	○			白色粒		H-5	－	２号住内
	57	鉢	口縁部～胴部	ハケメ	ハケメ	明赤褐	明赤褐	○			砂礫	○	H-5	－	２号住内
	58	鉢	口縁部	ハケメ	指頭痕・ハケメ	明黄褐	にぶい黄橙	○	○		砂礫	○	H-5	－	２号住内
21	59	甕	口縁部～胴部	ナデ	ハケメ	橙	橙	○	○				H-5	－	３号住内
	60	甕	脚部	指頭痕・ハケメ	ナデ	赤褐	にぶい黄褐	○	○				H-5	－	３号住内
	61	甕	脚部	ナデ	ナデ	浅黄	にぶい黄橙	○	○				H-5	－	３号住内
	62	甕	胴部～脚部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	橙	橙	○	○				H-5	－	３号住内
	63	鉢	完形	ハケメ	ハケメ	橙	橙	○	○	○		○	H-5	－	３号住内
	64	壺	胴部	ナデ	ナデ	褐	褐	○	○	○			H-5	－	３号住内
22	66	甕	口縁部～胴部	ハケメ	ハケメ	明褐	褐	○	○			○	H-5	－	４号住内
	67	高坏	口縁部～胴部	ミガキ	ハケメ	にぶい黄褐	黄褐	○	○				H-5	－	４号住内・赤色顔料
23	68	甕	脚部	ナデ	ハケメ	赤褐	明褐		○	○			H-6	－	５号住内
	69	壺	胴部	ナデ	ハケメ後ナデ	明赤褐	明黄褐	○	○	○	砂粒		H-6	－	５号住内
	70	壺	胴部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			H-6	－	５号住内

表５　古墳時代の土器観察表（土製品を含む）②

挿図番号	掲載番号	器種	部位	調整		色調		胎土				煤付着	出土区	層	備考
				外	内	外	内	長	石	角	その他				
24	71	甕	脚部	ハケメ後ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい赤褐	○	○	○			H-6	－	6号住内
	72	壺	胴部	ナデ	ハケメ	にぶい黄	黄灰		○	○			H-6	－	6号住内
	73	鉢	底部	ハケメ後ナデ	ハケメ	暗赤褐	赤黒	○	○	○	砂粒		H-6	－	6号住内
25	74	甕	口縁部	ハケメ後ナデ	ハケメ	明褐	明褐	○	○			○	GH-6	－	7号住内
	75	甕	口縁部	ハケメ	指頭痕・ナデ	橙	明黄褐	○	○	○		○	GH-6	－	7号住内
	76	甕	口縁部	ナデ	ハケメ後ナデ	橙	橙	○	○	○		○	GH-6	－	7号住内
	77	鉢	底部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	褐	明黄褐		○	○		○	GH-6	－	7号住内
26	78	甕	胴部	ナデ	指頭痕・ナデ	黒	にぶい赤褐		○	○		○	GH-6	－	8号住内
	79	甕	口縁部	ハケメ後ナデ	ナデ	褐	灰褐	○	○				GH-6	－	8号住内
	80	高坏	脚部	ミガキ	ナデ	黒褐	橙	○		○		○	GH-6	－	8号住内
	81	壺	口縁部	ナデ	ナデ	浅黄橙	橙	○	○	○			GH-6	－	8号住内
	82	壺	胴部	ナデ	ナデ	にぶい黄	橙	○	○	○			GH-6	－	8号住内
	83	鉢	底部	ミガキ	ハケメ後ナデ	黒褐	灰黄褐		○	○		○	GH-6	－	8号住内
27	84	甕	胴部	ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい赤褐	にぶい黄褐	○	○	○			H-6	－	9号住内
	85	甕	脚部	指頭痕・ナデ	ナデ	橙	褐		○	○		○	H-6	－	9号住内
	86	鉢	口縁部～胴部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	にぶい黄褐	にぶい橙	○	○	○		○	H-6	－	9号住内
28	87	甕	口縁部	ナデ	ナデ	橙	橙		○	○		○	H-6	－	10号住内
	88	甕	口縁部～胴部	ナデ	ハケメ後ナデ	黒褐	明赤褐	○	○	○	軽石		H-6	－	10号住内
30	89	甕	口縁部～胴部	ハケメ	ナデ	橙	明赤褐	○	○	○			H-6	－	11号住内
	90	甕	口縁部～胴部	ナデ	ハケメ	褐	明褐	○	○	○		○	H-6	－	11号住内
	91	甕	胴部	指頭痕・ハケメ	ハケメ	赤褐	にぶい赤褐		○	○	軽石	○	H-6	－	11号住内
	92	甕	胴部～脚部	ハケメ	ナデ	明黄褐	明褐	○	○			○	H-6	－	11号住内
	93	高坏	口縁部～胴部	ミガキ	ケズリ・ミガキ	明黄褐	明黄褐	○			砂礫	○	H-6	－	11号住内
32	94	甕	口縁部～胴部	ハケメ後ナデ	指頭痕・ナデ	褐	にぶい黄褐	○	○	○		○	H-6	－	13号住内
33	95	甕	口縁部～胴部	ハケメ	ハケメ	黒褐	にぶい橙	○	○	○		○	H-6	－	14号住内
	96	甕	口縁部	ハケメ	ハケメ後ナデ	褐	にぶい褐		○	○		○	H-6	－	14号住内
	97	甕	脚部	ハケメ後ナデ	ハケメ	浅黄	にぶい褐	○	○	○		○	H-6	－	14号住内
	98	壺	胴部～底部	ミガキ	ハケメ後ナデ	橙	橙	○		○		○	H-6	－	14号住内
35	99	甕	口縁部	ハケメ	ハケメ	黒	赤褐		○	○		○	H-6･7	－	15号住内
	100	甕	底部	指頭痕・ナデ	ハケメ	橙	赤褐		○			○	H-6･7	－	15号住内
	101	甕	脚部	ハケメ	ナデ	にぶい橙	赤褐	○	○	○		○	H-6･7	－	15号住内
	102	甕	脚部	ハケメ後ナデ	ナデ	明褐	赤明褐		○	○		○	H-6･7	－	15号住内
	103	壺	口縁部	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○		○	H-6･7	－	15号住内
	104	高坏	底部	ミガキ	ナデ	明褐	赤	○	○				H-6･7	－	15号住内・赤色顔料
	105	小型土器	完形	指頭痕・ハケメ後ナデ	指頭痕・ハケメ後ナデ	橙	橙		○	○			H-6･7	－	15号住内
	106	鉢	口縁部～胴部	ハケメ後ナデ	ハケメ	明褐	明褐	○	○			○	H-6･7	－	15号住内
36	107	小型甕	完形	指頭痕・ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	橙	橙	○	○			○	G-6･7	－	16号住内
	108	鉢	口縁部～底部	ナデ	ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○		○	G-6･7	－	16号住内
	109	小型土器	完形	ハケメ後ナデ	指頭痕・ハケメ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○		○	G-6･7	－	16号住内
	110	小型土器	胴部～底部	ハケメ後ナデ	指頭痕・ハケメ後ナデ	明赤褐	赤褐		○	○		○	G-6･7	－	16号住内
38	113	甕	口縁部	ハケメ	ハケメ	橙	橙	○		○		○	G-7	－	17号住内
	114	甕	口縁部	ナデ	指頭痕・ハケメ後ナデ	橙	橙	○	○	○		○	G-7	－	17号住内
	115	壺	底部	ハケメ後ナデ	ナデ	にぶい黄	にぶい赤褐	○	○	○			G-7	－	17号住内
	116	高坏	脚部	ミガキ	ハケメ後ナデ	明黄褐	にぶい黄	○		○		○	G-7	－	17号住内
	117	小型土器	口縁部～胴部	指頭痕・ハケメ後ナデ	指頭痕・ハケメ後ナデ	黒褐	にぶい黄橙	○	○	○		○	G-7	－	17号住内
	118	小型丸底鉢	底部	指頭痕・ナデ	指頭痕・ナデ	黄褐	明黄褐	○		○	鉱石	○	G-7	－	17号住内
40	123	甕	口縁部	ナデ	ナデ	褐	明褐		○			○	GH-7	－	18号住内
	124	甕	脚部	ハケメ	ハケメ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい褐	○	○			○	GH-7	－	18号住内
	125	甕	口縁部～胴部	ハケメ	ハケメ後ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○	○		○	GH-7	－	18号住内
41	126	甕	完形	指頭痕・ハケメ	指頭痕・ハケメ	にぶい黄橙	灰黄褐	○		○	赤色粒	○	GH-7	－	18号住内・孔穴有
	127	壺	口縁部～胴部	ハケメ	指頭痕・ハケメ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○			GH-7	－	18号住内
	128	鉢	胴部～脚部	指頭痕・ハケメ	指頭痕・ハケメ後ナデ	赤褐	褐	○	○	○		○	GH-7	－	18号住内
	129	鉢	胴部～脚部	指頭痕・ハケメ	ハケメ後ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		○	GH-7	－	18号住内
	130	鉢	完形	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	橙	橙	○	○	○		○	GH-7	－	18号住内
	131	高坏	胴部～脚部	ミガキ	指頭痕・ミガキ	黒	褐	○					GH-7	－	18号住内
	132	高坏	脚部	ミガキ	ハケメ後ナデ	にぶい橙	橙	○				○	GH-7	－	18号住内
	133	小型平底鉢	完形	指頭痕・ナデ	指頭痕・ハケメ後ナデ	橙	明黄褐	○	○	○		○	GH-7	－	18号住内
	134	小型平底壺	頸部～底部	ミガキ	ミガキ・ハケメ	黒褐	黄褐	○	○	○			GH-7	－	18号住内
43	137	甕	口縁部	ナデ	ハケメ後ナデ	灰黄褐	にぶい褐	○	○	○		○	H-7	－	19号住内

表6　古墳時代の土器観察表（土製品を含む）③

挿図番号	掲載番号	器種	部位	調整		色調		胎土				遺存率	出土区	層	備考
				外	内	外	内	長	石	角	その他				
43	138	壺	口縁部	ハケメ後ナデ	ハケメ	橙	にぶい橙	○	○	○			H-7	−	19号住内
	139	小型平底鉢	口縁部～底部	ミガキ	ミガキ	褐	黒褐	○	○				H-7	−	19号住内
	140	鉢	底部	ミガキ・ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○				H-7	−	19号住内
	141	鉢	完形	ハケメ後ナデ	ハケメ	にぶい黄橙	褐	○	○			○	H-7	−	19号住内
	142	高坏	口縁部	ミガキ	ミガキ	赤	明赤褐		○				H-7	−	19号住内・赤色顔料
	143	高坏	口縁部～胴部	ミガキ	ナデ	黒褐	黒褐	○	○				H-7	−	19号住内
	144	高坏	脚部	ミガキ	ナデ	黒褐	黄褐	○	○	○			H-7	−	19号住内
	145	勾形土製品	−	指頭痕・ナデ	指頭痕・ナデ	浅黄	浅黄	○	○	○		○	H-7	−	19号住内
44	146	鉢	底部	指頭痕・ナデ	ナデ	明黄褐	黒褐	○		○			H-7	−	20号住内
47	148	甕	口縁部	ナデ	ハケメ後ナデ	褐	赤褐	○	○	○			−	−	2号溝内
	149	甕	口縁部	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○			−	−	2号溝内
	150	甕	口縁部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	褐	赤褐	○	○			○	−	−	2号溝内
	151	甕	脚部	ハケメ	ハケメ後ナデ	暗赤褐	暗赤褐	○	○				−	−	2号溝内
	152	甕	脚部	ハケメ	ハケメ後ナデ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○				−	−	2号溝内
	153	甕	脚部	ハケメ	ナデ	暗赤褐	暗赤褐	○	○			○	−	−	2号溝内
	154	甕	脚部	ハケメ	ナデ	明赤褐	にぶい黄褐	○	○			○	−	−	2号溝内
	155	甕	脚部	ハケメ	ハケメ後ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○				−	−	2号溝内
	156	壺	口縁部～頸部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	浅黄	○	○		小礫		−	−	2号溝内
	157	壺	口縁部	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○			−	−	2号溝内
	158	壺	胴部	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	○	○				−	−	2号溝内
	159	鉢	底部	ハケメ	ハケメ後ナデ	橙	明黄褐	○	○				−	−	2号溝内
	160	鉢	底部	ミガキ	ナデ	にぶい黄褐	褐	○	○				−	−	2号溝内
	161	高坏	口縁部～胴部	ミガキ	ミガキ	黒褐	黒	○					−	−	2号溝内
	162	高坏	口縁部～底部	ケズリ後ハケメ	ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○	○		○	−	−	2号溝内
	163	高坏	脚部	ハケメ後ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○	○		○	−	−	2号溝内
49	166	甕	口縁部～胴部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○			○	H-5	Ⅳ	
	167	甕	口縁部～胴部	ハケメ後ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○	○	雲母・砂礫		H-8	Ⅳ	
	168	甕	口縁部	ハケメ後ナデ	ナデ	にぶい褐	橙	○	○	○	雲母・砂礫		H-4	Ⅳ	
	169	甕	口縁部	ナデ	指頭痕・ナデ	黒	暗褐	○	○			○	H-5	Ⅲ	
	170	甕	口縁部	ハケメ	ハケメ	黒褐	橙	○	○				H-5	Ⅳ	
	171	甕	口縁部	ハケメ	ハケメ	にぶい褐	明褐		○	○		○	H-5	Ⅳ	
	172	甕	口縁部	ナデ	ナデ	黒明褐	橙	○	○			○	G-6	Ⅳ	
	173	甕	口縁部	ナデ	ナデ	黒褐	明褐	○	○			○	H-4・5	Ⅲ	
50	174	甕	口縁部	ハケメ	指頭痕・ハケメ	明褐	明褐	○				○	H-4	Ⅲ	
	175	甕	口縁部	ナデ	ハケメ	黒	赤褐	○	○			○	H-5	Ⅲ	
	176	甕	口縁部	ハケメ	ハケメ	橙	にぶい黄橙	○	○	○			H-2	Ⅳ	
	177	甕	口縁部	ナデ	ナデ	赤褐	橙		○				H-6	Ⅳ	
	178	甕	口縁部	指頭痕・ハケメ・ケズリ	指頭痕・ハケメ	にぶい橙	明黄褐	○	○	○			H-3	Ⅳ	
	179	甕	口縁部	ナデ	ナデ	橙	黄橙	○	○		鉄鉱物		H-6	Ⅳ	
	180	甕	口縁部	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○		鉄鉱物		H-6	Ⅳ	
	181	甕	胴部	ハケメ	ハケメ	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○			○	H-4	Ⅳ	
	182	甕	胴部	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい橙	○	○				GH-3・4	Ⅳ	
	183	甕	口縁部～胴部	ナデ・ケズリ	ハケメ	黒褐	にぶい褐	○	○	○	砂礫		G-7	Ⅳ	
51	184	甕	完形	ハケメ	ハケメ	明黄褐	明黄褐	○	○	○		○	G-6	Ⅳ	
	185	甕	口縁部～胴部	ナデ	ナデ	にぶい黄	明黄褐	○	○	○		○	G-6	Ⅳ	
	186	甕	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい褐	にぶい褐	○	○				G-7	Ⅳ	
52	187	甕	口縁部	ナデ	ナデ	褐	褐	○	○	○		○	H-6	Ⅳ	
	188	甕	口縁部	ハケメ	ハケメ	橙	明赤褐	○	○	○	白色粒		GH-6	Ⅳ	
	189	甕	口縁部～胴部	ナデ	ナデ	にぶい黄褐	明黄褐	○	○	○		○	H-1	Ⅳ	
	190	甕	口縁部～胴部	ナデ	ナデ	にぶい橙	黄褐	○	○	○		○	G-7	Ⅳ	
	191	甕	口縁部～胴部	ナデ	ナデ	明黄褐	橙	○	○	○		○	G-7	Ⅳ	
53	192	甕	口縁部～胴部	ナデ	ハケメ	黒	黒褐	○	○			○	G-7	Ⅳ	
	193	甕	口縁部～胴部	ナデ	ナデ	褐	明褐	○	○	○		○	H-2	Ⅲ	
	194	甕	口縁部～胴部	指頭痕	指頭痕・ナデ	褐	赤褐	○	○			○	G-5	Ⅳ	
	195	甕	口縁部	指頭痕・ナデ	指頭痕・ナデ	にぶい橙	橙	○	○			○	G-5	Ⅳ	
	196	甕	口縁部～胴部	ナデ	指頭痕・ナデ	褐	褐	○	○	○		○	H-6	Ⅳ	
	197	甕	口縁部	指頭痕・ケズリ	指頭痕・ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	○	○		鉄鉱物	○	G-5	Ⅳ	
	198	甕	口縁部	ミガキ	ミガキ	橙	にぶい橙	○	○	○			H-6	Ⅳ	
	199	甕	口縁部	ナデ	指頭痕・ナデ	橙	にぶい黄橙	○	○			○	GH-3・4	Ⅳ	

表7　古墳時代の土器観察表（土製品を含む）④

挿図番号	掲載番号	器種	部位	調整		色調		胎土				焼成	出土区	層	備考
				外	内	外	内	長	石	角	その他				
53	200	甕	口縁部	ハケメ	ミガキ	褐灰	にぶい褐		○			○	GH-3･4	Ⅳ	
	201	甕	口縁部	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐	橙	○	○	○		○	H-6	Ⅳ	
	202	甕	胴部	ナデ	ハケメ	明赤褐	にぶい黄褐	○	○				H-8	Ⅳ	
54	203	甕	胴部～脚部	ナデ	ナデ	浅黄	にぶい橙	○	○	○		○	H-6	Ⅳ	
	204	甕	脚部	ナデ	ナデ	明赤褐	橙	○	○	○			H-6	Ⅳ	
	205	甕	脚部	ハケメ後ナデ	指頭痕・ナデ	にぶい黄橙	黄橙	○	○		砂礫・赤色粒		H-6	Ⅳ	
	206	甕	脚部	ナデ	ナデ	明赤褐	にぶい黄橙	○	○	○	砂礫		H-4	Ⅳ	
	207	甕	脚部	ハケメ後ナデ	指頭痕・ナデ	にぶい黄褐	にぶい赤褐	○	○				H-6	Ⅳ	
	208	甕	脚部	ミガキ	ミガキ	赤褐	明赤褐	○	○				G-7	Ⅳ	
	209	甕	脚部	ハケメ	指頭痕・ハケメ	明赤褐	にぶい赤褐	○	○			○	G-5	Ⅳ	
	210	甕	脚部	ナデ	ナデ	黄褐	明黄褐	○	○				G-7	Ⅳ	
	211	甕	脚部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	明黄褐	○	○				H-6	Ⅳ	
	212	甕	脚部	ナデ・ケズリ	ナデ	暗赤褐	赤褐	○	○	○			H-8	Ⅳ	
	213	甕	脚部	ミガキ	ナデ	橙	明褐	○	○		白色粒		H-6	Ⅳ	
	214	甕	脚部	ハケメ	ハケメ	明赤褐	明赤褐	○	○	○	砂礫		H-2	Ⅲ	
	215	甕	脚部	ハケメ	指頭痕・ナデ	にぶい黄橙	灰黄褐	○	○			○	G-7	Ⅳ	
	216	甕	脚部	ナデ	指頭痕・ハケメ	にぶい橙	にぶい褐	○	○				G-6	Ⅳ	
	217	甕	脚部	指頭痕・ナデ	ナデ	明褐	黒	○	○				G-6	Ⅳ	
	218	甕	脚部	ハケメ後ナデ	指頭痕・ナデ	褐	暗褐	○	○	○			H-1	Ⅳ	
	219	甕	脚部	ナデ	ナデ	明赤褐	赤褐	○	○				H-2	Ⅳ	
	220	甕	脚部	ナデ	ナデ	黄褐	にぶい黄橙	○	○				H-6	Ⅳ	
	221	甕	脚部	ハケメ	ハケメ	浅黄	にぶい黄	○					H-6	Ⅳ	
	222	甕	脚部	指頭痕・ナデ	ハケメ	橙	にぶい黄橙	○	○				H-6	Ⅳ	
	223	甕	脚部	指頭痕・ハケメ	指頭痕・ハケメ	橙	にぶい橙	○	○				GH-3･4	Ⅳ	
	224	甕	脚部	ハケメ・ナデ	指頭痕・ナデ	橙	明赤褐	○	○	○	砂礫		GH-3･4	Ⅳ	
	225	甕	脚部	ハケメ	ハケメ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○				GH-3･4	Ⅳ	
	226	甕	脚部	ミガキ	ナデ	赤褐	にぶい赤褐	○	○				GH-3･4	Ⅳ	
	227	甕	脚部	ミガキ	ミガキ	にぶい橙	橙	○	○				GH-3･4	Ⅳ	
	228	甕	脚部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	黄褐	○	○				H-7	Ⅳ	
	229	甕	脚部	ミガキ	ミガキ	暗褐	灰黄褐	○	○				GH-7	Ⅳ	
56	230	壺	口縁部～頸部	ナデ・ミガキ	ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○	○			G-7	Ⅳ	
	231	壺	口縁部	ナデ	ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄	○	○	○	砂礫		H-6	Ⅳ	
	232	壺	口縁部	ナデ	ナデ	褐	褐	○		○			G-7	Ⅳ	
	233	壺	頸部	ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	○	○	○		○	H-6	Ⅳ	
	234	壺	口縁部	ミガキ	ナデ	褐	にぶい赤褐	○	○				H-6	Ⅳ	
	235	壺	口縁部	ナデ	ナデ	明赤褐	赤褐	○	○				H-6	Ⅳ	
	236	壺	頸部	ミガキ	ナデ	明赤褐	黒褐	○	○	○			G-6	Ⅳ	
	237	壺	頸部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			H-6	Ⅳ	
	238	壺	胴部	ナデ	ナデ	明黄褐	橙	○	○				G-7	Ⅳ	
	239	壺	胴部	ナデ	ナデ	にぶい褐	明褐	○	○			○	GH-3･4	Ⅳ	
	240	壺	胴部	ナデ	ナデ	黄褐	オリーブ	○	○	○			H-3	Ⅳ	
57	241	壺	胴部	ナデ	ハケメ	橙	橙	○	○				G-6･7	Ⅳ	
	242	壺	胴部	指頭痕・ミガキ	ナデ	黒褐	明赤褐	○	○				G-5	Va	
	243	壺	胴部	ミガキ	ハケメ	灰黄褐	明黄褐	○	○				G-7	Ⅳ	
	244	壺	胴部	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい橙	○	○	○		○	GH-3･4	Ⅳ	
	245	壺	胴部	ミガキ	指頭痕・ナデ	橙	橙	○	○	○			GH-3･4	Ⅳ	
	246	壺	胴部	ミガキ	ナデ	黒褐	橙	○	○		砂礫		G-5	Va	
58	247	壺	胴部	ミガキ	ナデ	黒褐	明褐	○	○	○	砂礫		G-7	Ⅳ	
	248	壺	胴部	ナデ	ハケメ	明黄褐	明褐	○	○				H-6	Ⅳ	
	249	壺	胴部	ナデ	ハケメ	黒褐	明褐			○			H-5	Ⅳ	
	250	壺	胴部	ナデ	ハケメ	褐	にぶい褐	○	○				H-4	Ⅲ	
	251	壺	底部	ハケメ後ナデ	ハケメ後ナデ	赤褐	橙	○	○				H-6	Ⅳ	
	252	壺	底部	ナデ	ハケメ	にぶい赤褐	赤褐	○	○	○			GH-3･4	Ⅳ	
	253	壺	底部	ハケメ	ハケメ	褐	黄灰	○	○				G-6	Ⅳ	
	254	壺	底部	指頭痕・ナデ	指頭痕・ナデ	赤褐	明赤褐	○	○	○			H-2	Ⅲ	
	255	壺	底部	ナデ	ナデ	橙	黒褐	○	○		砂礫		GH-3･4	Ⅳ	
	256	壺	底部	ミガキ	ミガキ	黒褐	明赤褐	○	○	○			H-7	Ⅳ	
	257	壺	底部	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	にぶい黄橙	○	○	○			H-6	Ⅳ	
	258	壺	底部	ミガキ	ミガキ	赤褐	明赤褐	○	○				H-4	Ⅲ	

表8　古墳時代の土器観察表（土製品を含む）⑤

挿図番号	掲載番号	器種	部位	調整		色調		胎土				遺存度	出土区	層	備考
				外	内	外	内	長	石	角	その他				
58	259	壺	底部	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	明赤褐	○	○	○			G-6	Ⅳ	
	260	壺	底部	ミガキ	ミガキ	明赤褐	にぶい橙	○	○				H-6	Ⅳ	
	261	壺	胴部～底部	ナデ	ナデ	にぶい橙	灰黄褐	○	○				H-1	Ⅳ	
	262	壺	底部	ナデ	ナデ	明褐	明黄褐	○	○	○			H-6	Ⅳ	
59	263	鉢	完形	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○			H-1	Ⅳ	
	264	鉢	口縁部	ミガキ	指頭痕・ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○					H-6	Ⅳ	
	265	鉢	口縁部	ナデ	指頭痕・ナデ	黒褐	にぶい黄橙	○	○				GH-3･4	Ⅳ	
	266	鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ・ハケメ	明褐	明褐		○	○			GH-3･4	Ⅳ	
	267	鉢	口縁部	ナデ	指頭痕・ナデ	明褐	にぶい黄橙	○	○	○			GH-3･4	Ⅳ	
	268	台付鉢	完形	ミガキ	ナデ	暗褐	褐	○	○				G-5	Ⅳ	
	269	台付鉢	胴部～脚部	ミガキ	ミガキ	明赤褐	にぶい橙	○	○	○			G-6	Ⅳ	
	270	台付鉢	脚部	ナデ	ナデ	浅黄	にぶい黄	○	○	○			H-4	Ⅳ	
	271	台付鉢	胴部～脚部	ミガキ	ミガキ	黒褐	にぶい黄橙	○	○	○		○	G-6	Ⅳ	
	272	台付鉢	口縁部～脚部	ミガキ・ハケメ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			GH-7	Ⅳ	
	273	台付鉢	胴部～脚部	ミガキ	ナデ	灰黄	にぶい赤褐	○				○	H-6	Ⅳ	
	274	台付鉢	脚部	ミガキ	ミガキ	暗褐	浅黄	○	○				H-6	Ⅳ	
	275	台付鉢	脚部	ミガキ	ミガキ	褐	にぶい褐		○				H-6	Ⅳ	
	276	台付鉢	胴部～脚部	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい褐	○				○	H-6	Ⅳ	
	277	台付鉢	胴部～脚部	ミガキ	ナデ	にぶい赤褐	灰黄褐		○				G-7	Ⅳ	
	278	鉢	蓋	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○		砂礫		H-8	Ⅳ	
60	279	坩	口縁部	ミガキ	指頭痕・ナデ	暗赤褐	赤褐	○	○	○			GH-3･4	Ⅳ	
	280	坩	胴部～底部	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○			GH-3･4	Ⅳ	
	281	坩	頸部～胴部	ミガキ	ナデ	黒褐	暗灰黄		○				G-7	Ⅳ	
	282	坩	頸部～底部	ハケメ	ナデ	明赤褐	にぶい赤褐	○	○				H-7	Ⅳ	
	283	ミニチュア土器	口縁部～胴部	ナデ	ナデ	にぶい赤褐	赤褐	○		○			H-7	Ⅳ	
	284	ミニチュア土器	完形	ミガキ	指頭痕・ナデ	明赤褐	赤褐	○	○			○	H-8	Ⅳ	
	285	ミニチュア土器	完形	ナデ	指頭痕・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		○	GH-6	Ⅳ	
	286	ミニチュア土器	口縁部～底部	ハケメ	ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○	H-6	Ⅳ	
	287	ミニチュア土器	底部	ナデ	ナデ	褐	褐	○	○				G-5	Ⅳ	
	288	塊形土製品	ほぼ完形	指頭痕・ナデ	ナデ	明褐	明褐	○	○			○	H-6	Ⅳ	
	289	土製品	把手	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	橙	橙	○	○				H-6	Ⅳ	
	290	鞴の羽口	－	ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			G-7	Ⅳ	
61	291	高坏	胴部	ミガキ	指頭痕・ミガキ	赤褐	赤褐	○	○	○			GH-3･4	Ⅳ	
	292	高坏	胴部	ミガキ	ミガキ	赤	赤褐	○	○				G-6	Ⅳ	赤色顔料
	293	高坏	口縁部～胴部	ミガキ	ミガキ	暗赤褐	赤	○	○	○		○	GH-3･4	Ⅳ	赤色顔料
	294	高坏	口縁部～胴部	ミガキ	指頭痕・ナデ	赤褐	にぶい黄橙	○	○	○			GH-3･4	Ⅳ	赤色顔料
	295	高坏	口縁部～脚部	ミガキ	ミガキ	黒褐	にぶい黄橙			○			H-6	Ⅳ	
	296	高坏	口縁部～胴部	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○			○	H-6	Ⅳ	
	297	高坏	口縁部	ミガキ	ナデ	赤	明黄褐	○	○	○			H-6	Ⅳ	赤色顔料
	298	高坏	脚部	ミガキ	ミガキ	黒褐	明黄褐						G-7	Ⅳ	
	299	高坏	脚部	ミガキ	ナデ	明褐	にぶい黄橙		○				H-2	Ⅲ	
	300	高坏	脚部	ミガキ	ナデ	にぶい黄橙	黄橙	○					H-6	Ⅳ	
	301	高坏	脚部	ミガキ	ナデ	暗褐	にぶい黄褐	○	○	○		○	H-2	Ⅲ	赤色顔料
	302	高坏	脚部	ミガキ	ナデ	黒褐	黒褐	○		○			G-7	Ⅳ	
	303	高坏	脚部	ミガキ	ナデ	黒褐	にぶい黄褐		○	○		○	H-7	Ⅳ	

表9　古代の土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	部位	調整		色調		胎土				遺存度	出土区	層	備考
				外	内	外	内	長	石	角	その他				
65	311	椀	完形	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○	○			H-3	Ⅳ	
	312	椀	底部	ナデ	ミガキ	にぶい黄橙	黒		○				H-1	Ⅲ	
	313	坏	底部	ナデ	ナデ	橙	橙	○	○				H-2	Ⅲ	赤色顔料
	314	須恵器	胴部	格子目タタキ	同心円タタキ	灰	灰	○	○				H-6	1･3	

表 10　縄文時代早期の石器観察表

挿図番号	掲載番号	器　種	石　材	出土区	層	最大長	最大幅	最大厚	重　量	備　考
						cm	cm	cm	g	
7	4	打製石鏃	黒曜石	G-6	Ⅵ	1.90	1.50	0.60	1.33	

表 11　縄文時代晩期の石器観察表

挿図番号	掲載番号	器　種	石　材	出土区	層	最大長	最大幅	最大厚	重　量	備　考
						cm	cm	cm	g	
12	29	打製石鏃	黒曜石	H-5	Ⅳ	1.10	1.40	0.40	0.28	
	30	打製石鏃	黒色安山岩	G-6	Ⅳ	1.80	2.20	0.30	1.25	
	31	打製石鏃	黒曜石	H-6	Ⅳ	2.00	1.20	0.50	1.09	
	32	有茎石鏃	黒色安山岩	H-4	Ⅲ	3.10	1.00	0.60	1.59	
	33	削器	黒色安山岩	H-6	Ⅳ	7.50	6.60	1.30	62.50	
	34	打製石斧	頁岩	H-6	Ⅳ	11.80	6.90	1.70	167.00	
	35	打製石斧	頁岩	G-6	Ⅳ	11.40	9.20	1.70	172.00	
	36	打製石斧	頁岩	G-7	Ⅳ	10.20	4.40	1.70	97.00	
13	37	敲打具	ホルンフェルス	H-6	Ⅳ	15.00	10.60	7.30	1530.00	
	38	敲石	ホルンフェルス	H-6	Ⅳ	12.40	7.80	2.80	341.50	
	39	敲石	砂岩	GH-6	Ⅳ	9.80	8.70	4.80	580.00	
	40	敲石	安山岩	G-7	Ⅳ	8.70	7.40	2.80	270.00	
	41	敲石	頁岩	H-6	Ⅳ	8.10	7.00	4.90	360.00	
14	42	敲石	頁岩	G-7	Ⅳ	11.40	6.00	5.70	500.00	
	43	敲石	安山岩	GH-7	Ⅳ	8.40	6.00	5.20	410.00	
	44	敲石	頁岩	G-6	Ⅳ	10.20	5.40	4.10	350.00	
	45	凹石	安山岩	H-3	Ⅳ	9.10	8.50	4.30	540.00	
	46	凹石	安山岩	G-6	Ⅳ	9.20	8.10	4.90	420.00	
15	47	凹石	安山岩	G-6	Ⅳ	9.90	8.20	3.70	450.00	
	48	凹石	ホルンフェルス	H-6	Ⅳ	20.60	14.10	7.20	2680.00	
	49	石皿	安山岩	G-7	Ⅳ	15.20	18.20	7.10	2910.00	
36	112	削器	黒色安山岩	G-7	−	5.70	3.20	1.30	24.00	16 号住居跡内
38	120	打製石鏃	黒色安山岩	G-7	−	1.10	1.40	0.40	0.43	17 号住居跡内

表 12　古墳時代の石器等観察表

挿図番号	掲載番号	器　種	石　材	出土区	層	最大長	最大幅	最大厚	重　量	備　考
						cm	cm	cm	g	
21	65	棒状敲石	頁岩	H-5	−	10.20	3.80	2.50	145.00	3 号住居跡内
36	111	棒状敲石	頁岩	G-7	−	10.04	3.60	1.90	97.40	16 号住居跡内
38	119	ガラス小玉	カリ石灰	G-7	−	0.50	0.50	0.40	0.12	17 号住居跡内
	121	敲石	頁岩	G-7	−	10.00	5.50	3.80	317.00	17 号住居跡内
	122	軽石製品	軽石	G-7	−	8.80	5.30	2.70	48.00	17 号住居跡内
41	135	敲石	ホルンフェルス	H-7	−	13.50	7.00	3.00	433.00	18 号住居跡内
	136	敲石	ホルンフェルス	H-7	−	12.80	6.40	4.80	565.00	18 号住居跡内
44	147	敲石	頁岩	H-7	−	16.70	7.30	6.30	960.00	20 号住居跡内
47	164	棒状敲石	ホルンフェルス	H-6	−	8.00	3.70	2.00	88.00	2 号溝内
	165	砥石	砂岩	H-6	−	13.30	10.90	4.80	672.00	2 号溝内
62	304	砥石	砂岩	H-6	Ⅳ	11.00	11.00	3.40	420.00	
	305	砥石	砂岩	H-3	Ⅳ	11.10	8.40	6.00	910.00	
	306	砥石	砂岩	H-6	Ⅳ	11.00	7.50	5.90	595.00	
63	307	砥石	砂岩	H-6	Ⅳ	14.50	7.30	10.30	1530.00	
	308	紡錘車	頁岩	H-6	Ⅳ	5.30	5.30	0.60	22.00	

表 13　古墳時代の鉄製品観察表

挿図番号	掲載番号	器　種	部　位	出土区	層	残存長	最大幅	最大厚	重　量	備　考
						cm	cm	cm	g	
63	309	鉄鏃	ほぼ完形	H-4	Ⅲ	10.3	3.0	0.7	22.50	
	310	不明	刃部	H-2	Ⅲ	4.0	1.6	0.7	5.30	

第８章　自然科学分析

稲荷山遺跡，鎮守山遺跡における放射性炭素年代測定（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

1　測定対象試料

稲荷山遺跡は鹿児島県鹿屋市花岡町（北緯31° 24′ 00″，東経130° 46′ 48″），鎮守山遺跡は鹿児島県鹿屋市古里町（北緯31° 23′ 44″，東経130° 47′ 03″）に所在する。両遺跡とも北東側に高隈山系の峰々がそびえ，その扇状地にあたる丘陵上に立地する。稲荷山遺跡の標高は約130m，鎮守山遺跡は約140m，いずれも西側眼下に鹿児島湾を一望できる。測定対象試料は，竪穴住居跡の埋土や地床炉内から出土した炭化物で，稲荷山遺跡１点（No.1:IAAA-101388），鎮守山遺跡13点（No.2:IAAA-101389～No.14:IAAA-101401）の合計14点である（表1）。No.1～11は採取した土壌の中からウォーターフローテーションで取り出された。

2　測定の意義

住居跡の時期を明らかにする。

3　化学処理工程

(1)　メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。

(2)　酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」，1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。

(3)　試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

4　測定方法

3MVタンデム加速器（NEC Pelletron 9SDH-2）をベースとした^{14}C-AMS専用装置を使用し，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$），^{14}C濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

(1)　δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

(2)　^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に，補正していない値を参考値として表2に示した。^{14}C年代と誤差は，下1桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±1σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3)　pMC (percent Modern Carbon) は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため，補正した値を表1に，補正していない値を参考値として表2に示した。

(4)　暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，1標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは2標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C補正を行い，下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal09（Reimer et al. 2009）を用い，OxCalv4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は，^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6　測定結果

稲荷山遺跡５号住居跡出土試料の ^{14}C 年代は 1570 ± 30yrBP である。暦年較正年代（1 σ）は，５世紀中葉から６世紀前半頃の範囲で，古墳時代中期から後期頃に相当する。

鎮守山遺跡出土試料の ^{14}C 年代を，古い方から順にまとめながら検討する。

12 号住居跡出土の No.5 が 1800 ± 20yrBP，17 号住居跡出土の No.11 が 1770 ± 30yrBP で，２点は誤差（± 1 σ）の範囲で重なり合い，近い年代を示す。暦年較正年代（1 σ）は，No.5 が２世紀中葉から４世紀前葉頃，No.11 が３世紀中葉から４世紀前葉頃の範囲で，古墳時代前期か，若干遡る年代となっている。

次に 11 号住居跡出土の No.8 は 1670 ± 20yrBP で，暦年較正年代（1 σ）は４世紀後半から５世紀前葉頃の範囲となり，古墳時代中期頃に当たる。

上記以外では８号住居跡出土の No.2 が 1540 ± 30yrBP，９号住居跡出土の No.3 が 1610 ± 30yrBP，10 号住居跡出土の No.4 が 1520 ± 30yrBP，14 号住居跡出土の No.6 が 1560 ± 30yrBP，16 号住居跡出土の No.7 が 1570 ± 30yrBP，３号住居跡出土の No.9 が 1580 ± 30yrBP，４号住居跡出土の No.10 が 1610 ± 30yrBP，19 号住居跡出土の No.12 が 1550 ± 30yrBP，18 号住居跡出土の No.13 が 1550 ± 30yrBP，20 号住居跡出土の No.14 が 1550 ± 30yrBP である。多くは誤差（± 1 σ）の範囲で相互に重なる部分を持ち，おおむね近い年代を示す。暦年較正年代（1 σ）は，最も古い No.3 が５世紀前葉から６世紀前葉頃，最も新しい No.4 が６世紀中葉から後葉頃となり，古墳時代中期から後期頃に相当する。

試料の炭素含有率はすべて 60％を超える十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

表１　放射性炭素年代測定暦年較正（δ ^{13}C 補正あり）の結果

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C (‰) (AMS)	δ ^{13}C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-101388	No.1	稲荷山遺跡 遺構：５号住居跡　層位：埋土中	炭化物	AAA	-25.05 ± 0.60	1,570 ± 30	82.25 ± 0.27
IAAA-101389	No.2	鎮守山遺跡 遺構：８号住居跡　層位：埋土中	炭化物	AaA	-23.85 ± 0.76	1,540 ± 30	82.58 ± 0.27
IAAA-101390	No.3	鎮守山遺跡 遺構：９号住居跡　層位：埋土中	炭化物	AaA	-27.86 ± 0.52	1,610 ± 30	81.89 ± 0.27
IAAA-101391	No.4	鎮守山遺跡 遺構：10 号住居跡　層位：地床炉内	炭化物	AaA	-24.84 ± 0.41	1,520 ± 30	82.80 ± 0.26
IAAA-101392	No.5	鎮守山遺跡 遺構：12 号住居跡　層位：埋土中	炭化物	AAA	-22.83 ± 0.33	1,800 ± 20	79.96 ± 0.24
IAAA-101393	No.6	鎮守山遺跡 遺構：14 号住居跡　層位：地床炉内	炭化物	AAA	-18.91 ± 0.58	1,560 ± 30	82.40 ± 0.27
IAAA-101394	No.7	鎮守山遺跡 遺構：16 号住居跡　層位：埋土中	炭化物	AAA	-25.32 ± 0.49	1,570 ± 30	82.26 ± 0.26
IAAA-101395	No.8	鎮守山遺跡 遺構：11 号住居跡　層位：地床炉内	炭化物	AAA	-23.05 ± 0.46	1,670 ± 20	81.21 ± 0.25
IAAA-101396	No.9	鎮守山遺跡 遺構：３号住居跡　層位：地床炉内	炭化物	AAA	-24.20 ± 0.38	1,580 ± 30	82.16 ± 0.26
IAAA-101397	No.10	鎮守山遺跡 遺構：４号住居跡　層位：地床炉内	炭化物	AAA	-30.65 ± 0.39	1,610 ± 30	81.84 ± 0.26

IAAA-101398	No.11	鎮守山遺跡 遺構：17 号住居跡　層位：地床炉内	炭化物	AAA	-24.01 ± 0.68	1,770 ± 30	80.25 ± 0.26
IAAA-101399	No.12	鎮守山遺跡 遺構：19 号住居跡　層位：埋土中	炭化物	AAA	-24.36 ± 0.57	1,550 ± 30	82.44 ± 0.26
IAAA-101400	No.13	鎮守山遺跡 遺構：18 号住居跡　層位：埋土中	炭化物	AaA	-25.74 ± 0.56	1,550 ± 30	82.49 ± 0.27
IAAA-101401	No.14	鎮守山遺跡 遺構：20 号住居跡　層位：埋土中	炭化物	AAA	-26.09 ± 0.58	1,550 ± 30	82.47 ± 0.27

表2　放射性炭素年代測定暦年較正（δ^{13}C 補正なし）の結果

測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC （%）			
IAAA-101388	1,570 ± 30	82.24 ± 0.25	1,569 ± 26	435calAD - 492calAD (49.3%) 507calAD - 520calAD (10.4%) 527calAD - 537calAD (8.5%)	423calAD - 550calAD (95.4%)
IAAA-101389	1,520 ± 20	82.77 ± 0.24	1,537 ± 26	440calAD - 486calAD (33.0%) 532calAD - 567calAD (35.2%)	432calAD - 591calAD (95.4%)
IAAA-101390	1,650 ± 30	81.41 ± 0.25	1,605 ± 26	415calAD - 441calAD (24.3%) 485calAD - 532calAD (43.9%)	407calAD - 537calAD (95.4%)
IAAA-101391	1,510 ± 20	82.83 ± 0.25	1,515 ± 25	539calAD - 592calAD (68.2%)	435calAD - 490calAD (14.8%) 510calAD - 517calAD (0.8%) 530calAD - 611calAD (79.8%)
IAAA-101392	1,760 ± 20	80.31 ± 0.24	1,796 ± 24	140calAD - 154calAD (7.4%) 167calAD - 195calAD (16.1%) 209calAD - 255calAD (41.4%) 306calAD - 312calAD (3.3%)	132calAD - 260calAD (84.5%) 294calAD - 323calAD (10.9%)
IAAA-101393	1,460 ± 20	83.43 ± 0.25	1,555 ± 26	435calAD - 491calAD (47.7%) 509calAD - 518calAD (6.8%) 529calAD - 545calAD (13.8%)	428calAD - 564calAD (95.4%)
IAAA-101394	1,570 ± 20	82.21 ± 0.25	1,568 ± 25	435calAD - 492calAD (49.4%) 507calAD - 520calAD (10.3%) 527calAD - 537calAD (8.5%)	425calAD - 549calAD (95.4%)
IAAA-101395	1,640 ± 20	81.53 ± 0.24	1,672 ± 24	347calAD - 372calAD (25.3%) 377calAD - 412calAD (42.9%)	261calAD - 280calAD (5.7%) 326calAD - 425calAD (89.7%)
IAAA-101396	1,570 ± 20	82.29 ± 0.25	1,578 ± 25	434calAD - 466calAD (26.0%) 483calAD - 533calAD (42.2%)	422calAD - 543calAD (95.4%)

IAAA-101397	1,700 ± 30	80.89 ± 0.25	1,610 ± 25	411calAD - 441calAD (28.6%) 485calAD - 532calAD (39.6%)	403calAD - 536calAD (95.4%)
IAAA-101398	1,750 ± 20	80.42 ± 0.24	1,767 ± 26	235calAD - 261calAD (27.4%) 281calAD - 325calAD (40.8%)	140calAD - 155calAD (1.6%) 165calAD - 195calAD (3.7%) 209calAD - 347calAD (89.8%) 373calAD - 376calAD (0.3%)
IAAA-101399	1,540 ± 20	82.54 ± 0.24	1,551 ± 25	436calAD - 490calAD (45.9%) 510calAD - 517calAD (5.0%) 529calAD - 549calAD (17.3%)	429calAD - 565calAD (95.4%)
IAAA-101400	1,560 ± 20	82.37 ± 0.25	1,546 ± 25	437calAD - 489calAD (42.1%) 513calAD - 516calAD (1.8%) 530calAD - 558calAD (24.3%)	430calAD - 571calAD (95.4%)
IAAA-101401	1,570 ± 20	82.29 ± 0.25	1,547 ± 26	437calAD - 489calAD (42.6%) 512calAD - 516calAD (2.8%) 530calAD - 557calAD (22.8%)	430calAD - 571calAD (95.4%)

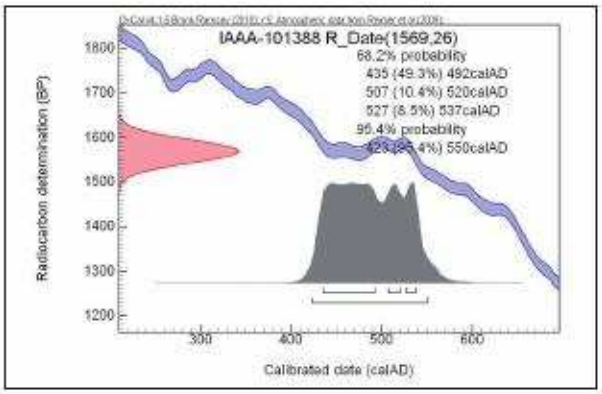
[参考値]

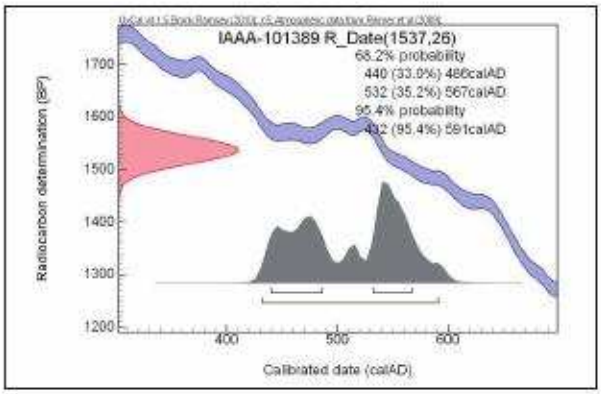
文献

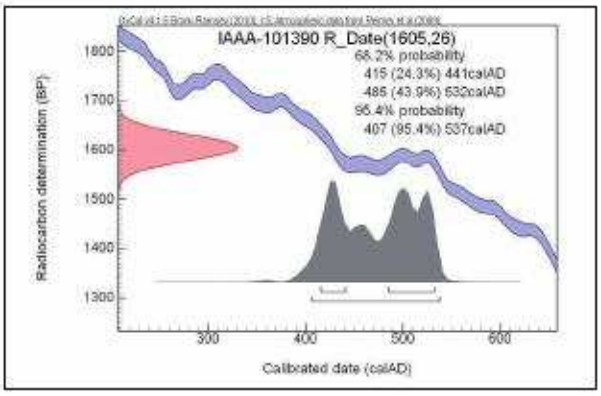
Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

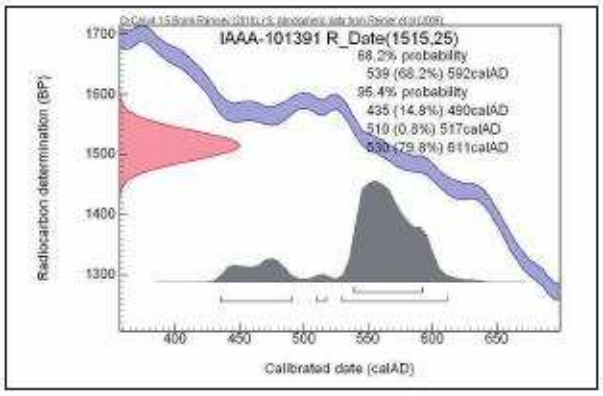
Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

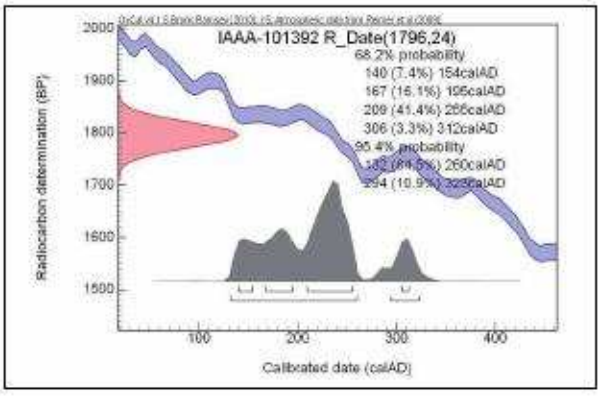
Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150

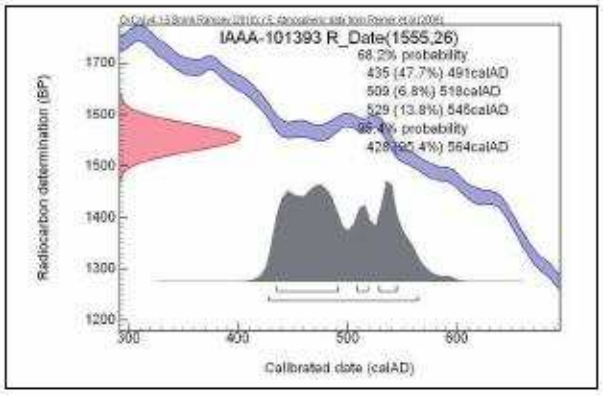


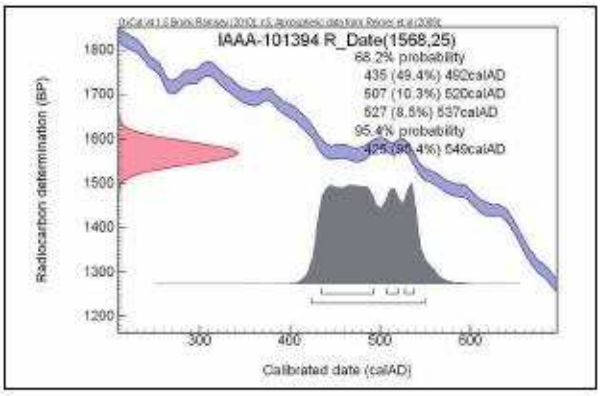


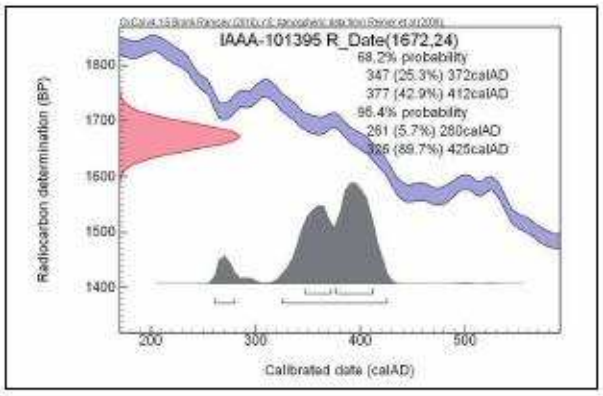

IAAA-101390 R_Date(1605,26)
68.2% probability
415 (24.3%) 441calAD
485 (43.9%) 532calAD
95.4% probability
407 (95.4%) 537calAD
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)

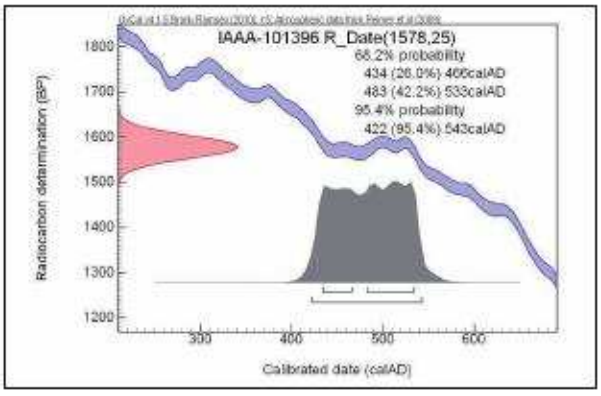

IAAA-101391 R_Date(1515,25)
68.2% probability
539 (68.2%) 592calAD
95.4% probability
435 (14.8%) 490calAD
510 (0.8%) 517calAD
530 (79.8%) 611calAD
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)

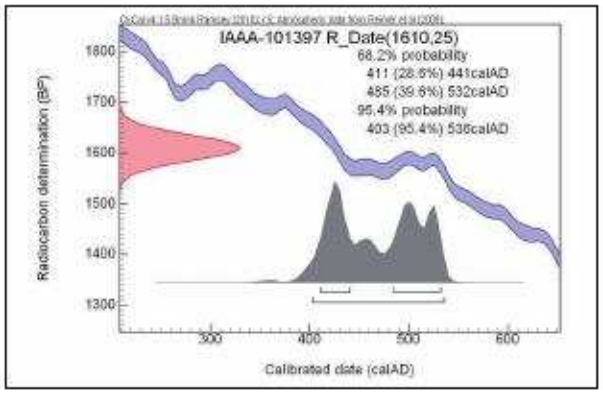

IAAA-101392 R_Date(1796,24)
68.2% probability
140 (7.4%) 154calAD
167 (16.1%) 195calAD
209 (41.4%) 255calAD
306 (3.3%) 312calAD
95.4% probability
132 (84.5%) 260calAD
294 (10.9%) 323calAD
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)

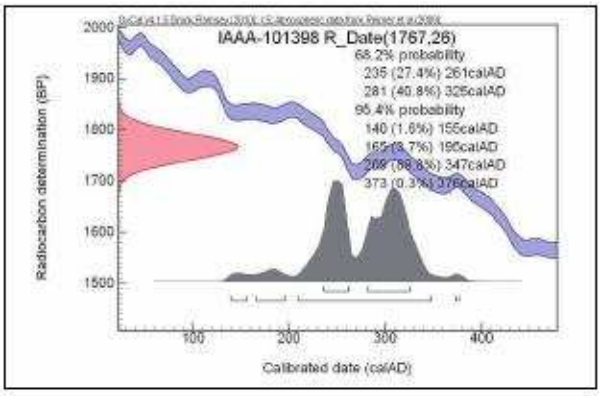

IAAA-101393 R_Date(1555,26)
68.2% probability
435 (47.7%) 491calAD
509 (6.8%) 518calAD
529 (13.8%) 546calAD
95.4% probability
428 (95.4%) 564calAD
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)

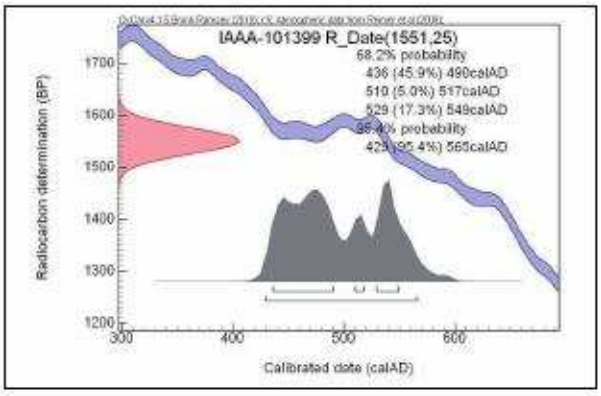

IAAA-101394 R_Date(1568,25)
68.2% probability
435 (49.4%) 492calAD
507 (10.3%) 520calAD
527 (8.5%) 537calAD
95.4% probability
426 (95.4%) 549calAD
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)

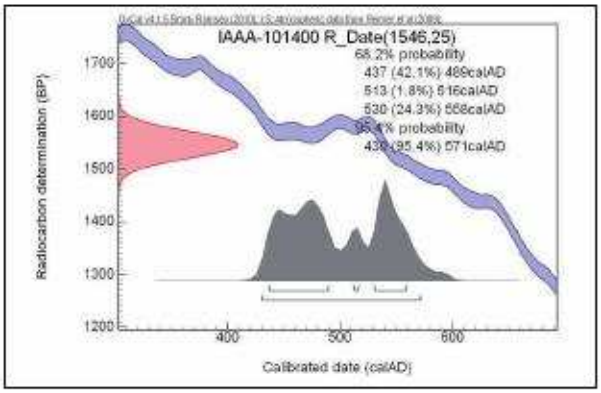

IAAA-101395 R_Date(1672,24)
68.2% probability
347 (25.3%) 372calAD
377 (42.9%) 412calAD
95.4% probability
261 (5.7%) 280calAD
325 (89.7%) 425calAD
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)

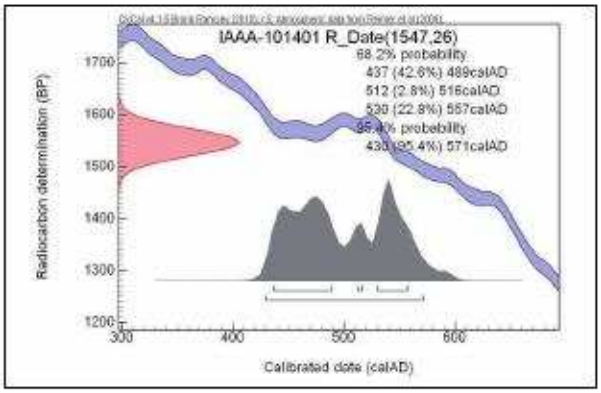

IAAA-101396 R_Date(1578,25)
68.2% probability
434 (26.0%) 466calAD
483 (42.2%) 533calAD
95.4% probability
422 (95.4%) 543calAD
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)


IAAA-101397 R_Date(1610,25)
68.2% probability
411 (28.6%) 441calAD
485 (39.6%) 532calAD
95.4% probability
403 (95.4%) 536calAD
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)









[参考] 暦年較正年代グラフ

鎮守山遺跡の種実同定

（株）加速器分析研究所

はじめに

本分析調査では，鎮守山遺跡（鹿児島県鹿屋市古里町所在）の暗茶褐色土（Ⅳ層）を検出面とした住居跡より出土した種実遺体の同定を実施し，当時の植物利用に関する資料を得る。

1　試料

試料は，19 号住居跡 (試料 No.12)，18 号住居跡 (試料 No.13)，20 号住居跡 (試料 No.14) の埋土に含まれていた種実遺体 3 点である。

2　分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川 (1994)，中山ほか (2000) 等との対照から，種実遺体の種類と部位を同定する。

3　結果

栽培種のバラ科サクラ属モモ (Prunus persica Batsch) の核に同定された (表 1)。炭化しており黒色，長さ 15.49mm，幅 13.73mm，厚さ 12.63mm のやや偏平な広楕円体 (試料 No.12)。基部は切形で中央部に湾入した臍がある。1 本の明瞭な縦の縫合線上が発達し，背面正中線上に細い縦隆条が，腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く，表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり，全体として粗いしわ状に見える。核の内側表面は平滑で，種子 1 個が入る楕円状の窪みが見られる。種子は炭化しており黒色，長さ 7.93mm，幅 5.91mm，厚さ 3.9mm 程度の偏平な楕円体 (試料 No.12)。種皮表面はやや平滑で発泡している。

表 1　種実同定結果

試料名		遺構	分類群	部位	状態		個数	備考
試料No. 12	# 3796-12	19 号住居跡	モモ	核（内果皮）	破片	炭化	4	接合し完形 1 個体
				種子	完形	炭化	1	
試料No. 13	# 3796-13	18 号住居跡	モモ	核（内果皮）	破片	炭化	40	接合し完形 1 個体
試料No. 14	# 3796-14	20 号住居跡	モモ	核（内果皮）	破片	炭化	5	接合し完形 1 個体

4　考察

モモは，古くから栽培のために中国から持ち込まれた渡来種とされ，観賞用の他，果実や核の中にある種子 (仁) などが食用，薬用，祭祀等に広く利用される。モモの遺跡出土例は，弥生～古墳時代以降から多数報告されている (南木，1991; 粉川，1988 など)。鎮守山遺跡の住居跡より炭化したモモの核が出土したことから，当時の住居内および周辺域で利用されていたことと，火を受け炭化残存したことが推定される。

引用文献

石川茂雄，1994，原色日本植物種子写真図鑑．石川茂雄図鑑刊行委員会，328p.

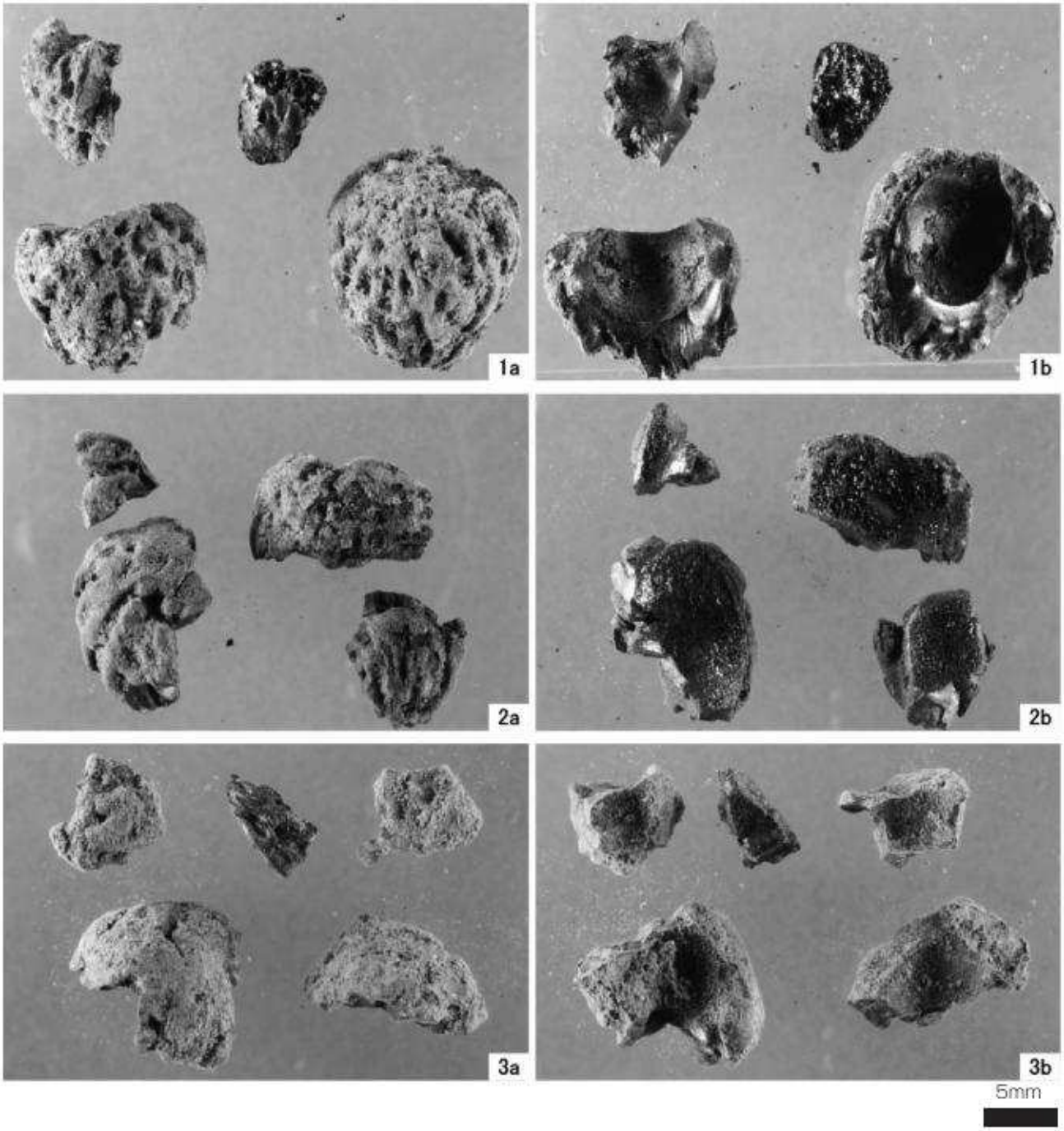
粉川昭平，1988，穀物以外の植物食．弥生文化の研究 2 生業，金関　恕・佐原　真編，雄山閣，112-115.

南木睦彦，1991，栽培植物．古墳時代の研究　4　生産と流通Ⅰ，石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編，雄山閣，165-174.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志，2000，日本植物種子図鑑．東北大学出版会，642p.

※）本分析は，パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

図版1　種実遺体



1．モモ　核・種子（試料No.12）
2．モモ　核（試料No.13）
3．モモ　核（試料No.14）

放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤茂・尾寄大真・丹生越子・廣田正史
山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtatidze
Ineza Jorjoliani・中村賢太郎

1　はじめに

鹿児島県鹿屋市に位置する稲荷山遺跡と鎮守山遺跡より検出された試料について，加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。なお，試料 No.② については樹種同定も行っている（樹種同定の報告参照）。

2　試料と方法

測定試料の情報，調製データは表 1 のとおりである。稲荷山遺跡の試料 No.①（PLD-17467）は，古墳時代とされる 2 号住居から出土した甕形土器の胴部外面に付着した炭化物である。

鎮守山遺跡では 3 試料を測定した。試料 No.②（PLD-17468）は，古墳時代とされる竪穴住居跡 18 号から出土した炭化した木製品である。木製品は加工されており，部位は最外年輪ではない。樹種はツバキ属である。試料 No.③（PLD-17469）は，縄文時代早期の層準から検出された集石遺構 1 号埋土から出土した炭化材である。部位は不明である。試料 No.④（PLD-17470）は，古墳時代とされる竪穴住居跡の土器埋土内から出土した植物遺体である。部位は不明である。

試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C 年代，暦年代を算出した。

表 1　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-17467	試料 No.① 遺跡名：稲荷山遺跡 遺構：2 号竪穴住居跡	試料の種類：土器付着炭化物 付着部位：胴部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :0.2N, 塩酸 :1.2N)
PLD-17468	試料 No.② 遺跡名：鎮守山遺跡 遺構：18 号竪穴住居跡 その他：木製品	試料の種類：炭化材 (ツバキ属) 試料の性状：最外年輪以外で部位不明 (残る中で一番外側 5 年輪) 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :0.5N, 塩酸 :1.2N)
PLD-17469	試料 No.③ 遺跡名：鎮守山遺跡 遺構：1 号集石遺構 層位：埋土	試料の種類：炭化材 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1N, 塩酸 :1.2N)
PLD-17470	試料 No.④ 遺跡名：鎮守山遺跡 遺構：19 号竪穴住居跡 層位：土器埋土内	試料の種類：植物遺体 試料の性状：部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :0.2N, 塩酸 :1.2N)

3　結果

表 2 に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（$\delta^{13}C$），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲，慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代，1950 年における大気の ^{14}C 濃度を 1 として計算した試料の ^{14}C 濃度を表す $F^{14}C$ 値を，図 1 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C 年代（yrBP）の算出には，^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また，付記した ^{14}C 年代誤差（± 1 σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が 68.2% であることを示す。

なお，暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは，大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された ^{14}C 年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動，及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して，より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線デー

タ：Intcal09，1950 年以降の試料については Post-bomb atmospheric NH2）を使用した。なお，1 σ暦年代範囲は，OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり，同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表２　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C（‰）	暦年較正用年代（yrBP ± 1 σ）	^{14}C 年代（yrBP ± 1 σ）	F^{14}C	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-17467 試料 No.①	− 26.40 ± 0.11	1628 ± 19	1630 ± 20	−	395AD(62.8%)434AD 495AD(5.4%)504AD	385AD(73.9%)465AD 481AD(21.5%)533AD
PLD-17468 試料 No.②	− 27.48 ± 0.18	1459 ± 19	1460 ± 20	−	591AD(68.2%)636AD	567AD(95.4%)644AD
PLD-17469 試料 No.③	− 30.91 ± 0.23	8425 ± 32	8425 ± 30	−	7537BC(68.2%)7488BC	7575BC(94.8%)7457BC 7389BC(0.6%)7384BC
PLD-17470 試料 No.④	− 30.60 ± 0.18	− 538 ± 19	− 540 ± 20	1.0693 ± 0.0025	Bomb04NH2: 1956AD(68.2%)1957AD	Bomb04NH2: 1956AD(78.8%)1957AD 1998AD(16.6%)...

4　考察

以下，2 σ暦年代範囲（確率 95.4％）に着目して，結果を整理する。なお，縄文時代については，小林謙一による暦年較正結果と縄文土器編年との対応関係（小林，2008）と総覧縄文土器における各土器群に伴う ^{14}C 年代の集成（小林編，2008）を参照して，考古学編年との対応関係を整理した。

稲荷山遺跡２号住居の甕形土器胴部外面付着炭化物（試料 No.①：PLD-17467）は，385-465 cal AD(73.9%) および 481-533 cal AD(21.5%) の暦年代範囲を示した。これは古墳時代中～後期に相当する。

鎮守山遺跡の竪穴住居跡 18 号から出土した木製品（試料 No.②：PLD-17468）は 567-644 cal AD(95.4%) の暦年代範囲を示した。これは６世紀後半～７世紀中頃で古墳時代後期に相当する。ただし，木材の場合，最外年輪部分を測定すると枯死・伐採年代が得られるが，内側の年輪を測定すると最外年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料は，最外年輪ではないため，原料となった木材の伐採年は，６世紀後半～７世紀中頃よりも幾分新しい可能性はある。

鎮守山遺跡の集石遺構１号埋土から出土した炭化材（試料 No.③：PLD-17469）は，7575-7457 cal BC(94.8%) および 7389-7384 cal BC(0.6%) の暦年代範囲を示した。これは縄文時代早期中葉に相当する。

鎮守山遺跡の竪穴住居跡 19 号の土器埋土内から出土した植物遺体（試料 No.④:PLD-17470）は，現代（1956～1957 年あるいは 1998 年以降）の暦年代範囲を示した。おそらくは上層から侵入した植物の根と思われる。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

Hua, Q. and Barbetti, M. (2004) Review of Tropospheric Bomb ^{14}C Data for Carbon Cycle modeling and Age Calibration Purposes. Radiocarbon, 46, 1273-1298.

小林謙一（2008）縄文時代の暦年代．小杉康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学２　歴史のものさし」：257-269, 同成社．

小林達雄編（2008）総覧縄文土器．1322p, アム・プロモーション．

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」：3-20, 日本第四紀学会．

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

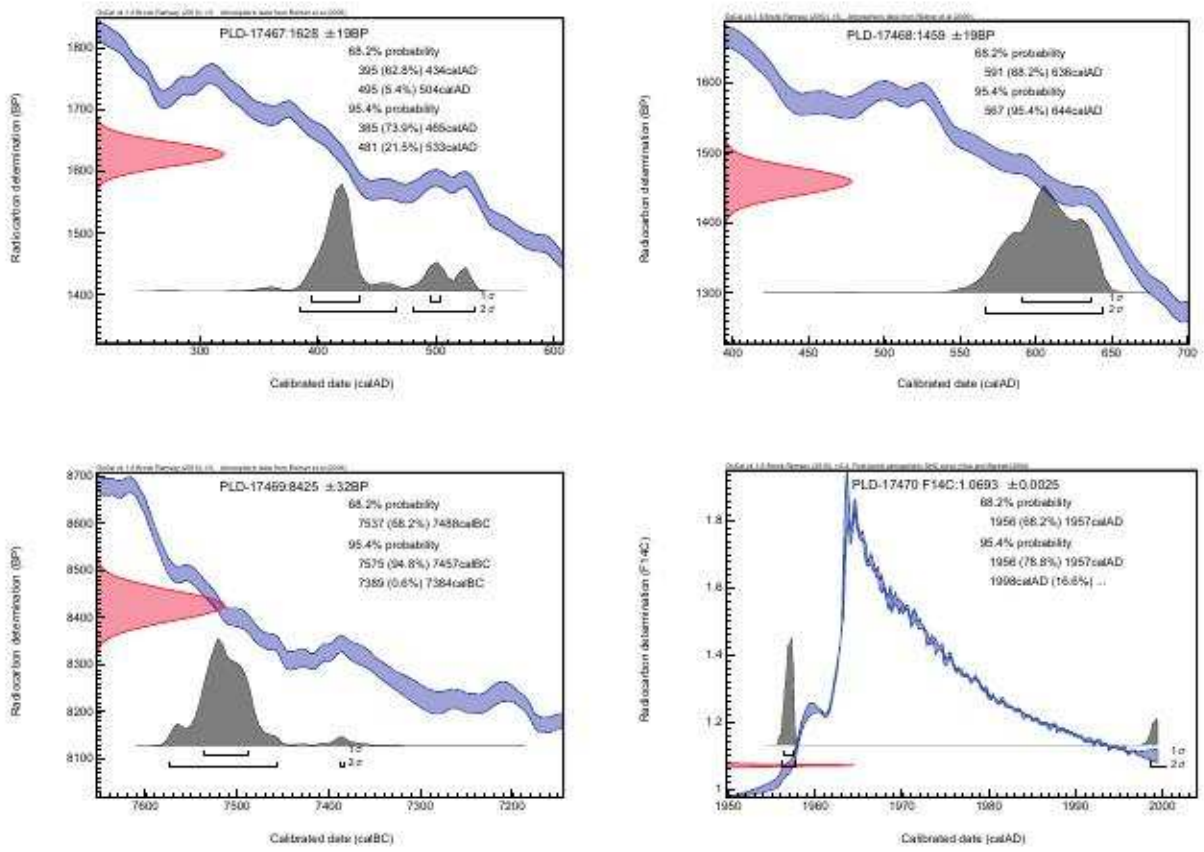

PLD-17467:1628 ±19BP
68.2% probability
395 (62.8%) 434calAD
495 (5.4%) 504calAD
95.4% probability
385 (73.9%) 465calAD
481 (21.5%) 533calAD
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)
PLD-17468:1459 ±19BP
68.2% probability
591 (68.2%) 638calAD
95.4% probability
567 (95.4%) 644calAD
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)
PLD-17469:8425 ±32BP
68.2% probability
7537 (68.2%) 7488calBC
95.4% probability
7575 (94.8%) 7457calBC
7389 (0.6%) 7384calBC
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calBC)
PLD-17470 F14C:1.0693 ±0.0025
68.2% probability
1956 (68.2%) 1957calAD
95.4% probability
1956 (78.8%) 1957calAD
1998calAD (16.6%) ...
Radiocarbon determination (F14C)
Calibrated date (calAD)

図１　暦年較正結果

鎮守山遺跡出土炭化材の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

1　はじめに

鎮守山遺跡は，鹿屋市古里町に所在する遺跡である。ここでは，古墳時代の竪穴住居跡 18 号から出土した炭化材 1 点の樹種同定結果を報告する。なお，同じ試料を用いて AMS 法による年代測定も行い，古墳時代後期に相当する結果を得ている（放射性炭素年代測定の報告参照）。

2　試料と方法

試料は，竪穴住居 18 号内から出土した炭化材 1 点（試料 No.②）である。なお，加工痕があることから，木製品が炭化したものと推測される。

方法は，手あるいはカッターナイフを用いて 3 断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し，試料を作製した。直径 1 cm の真鍮製試料台に試料を両面テープで固定し，銀ペーストを塗布して乾燥させた後，金蒸着して走査型電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-5900LV 型）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3　結果と考察

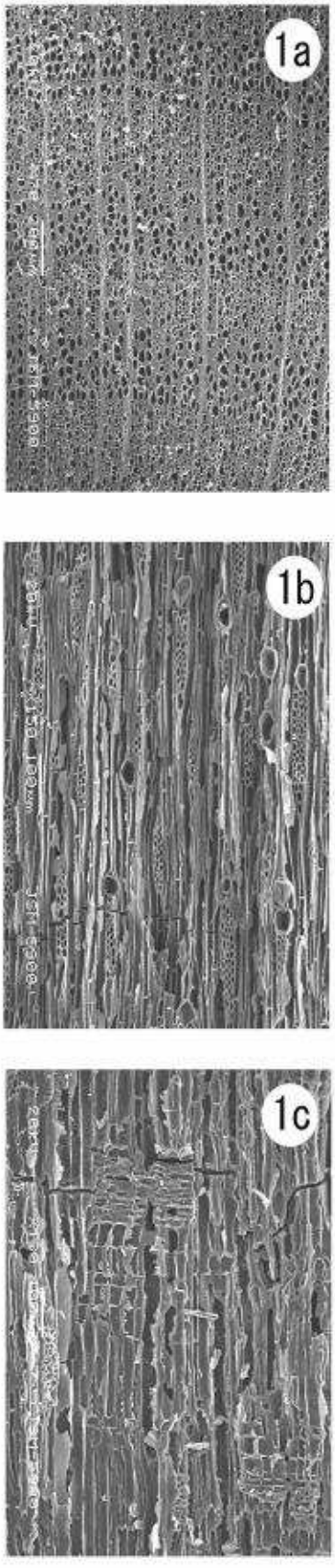
樹種同定の結果，広葉樹のツバキ属であった。形状は約 3 cm 角で厚さ 0.7cm の柾目取りである。ツバキ属は常緑広葉樹林帯の代表的な樹種のひとつである。材は切削加工および割裂は困難であるが，強靱で耐朽性は大きく，重硬・緻密な有用材である。しかし大径にはならないため，器具や小物の建築部材などに利用されることが多い。

以下に，同定根拠となった木材組織の特徴を記載し，顕微鏡写真を図版に示す。

（1）ツバキ属　*Camellia*　ツバキ科　図版 1a-1c

小径でほぼ単独の道管が晩材に向けてやや径を減じながら均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は 10 本程度の横棒からなる階段状である。放射組織は方形細胞が上下に 2 ～ 4 細胞連なる異性で，細胞幅は 1 ～ 4 列である。多列部が単列部とほぼ同じ大きさで，円形に著しくふくれた大型の結晶が単列部に認められる。

ツバキ属は温帯から亜熱帯に生育する常緑高木もしくは低木である。ヤブツバキ，サザンカ，チャノキがある。



図版　炭化材の顕微鏡写真 1a-1c. ツバキ属（a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面）

鎮守山遺跡ガラス小玉の分析について

鹿児島県立埋蔵文化財センター
南の縄文調査室　中村幸一郎

本遺跡出土のガラス玉について，双眼実体顕微鏡による形状視察とエネルギー分散型蛍光X線分析装置による成分分析を行った。

1　試料

17号竪穴住居跡内出土（紺色玉）

2　観察・分析方法

(1)　形状観察

双眼実体顕微鏡による8～10倍観察を，透過光及び反射光のもとで行った。

(2)　蛍光X線分析

エネルギー分散型蛍光X線分析装置（堀場製作所製 XGT-1000，X線管球ターゲット：ロジウム，X線照射径100 μm）を使用し，次の条件により分析を行った。

X線管電圧：15/50kV	電流：自動設定
測定時間：200 S	X線フィルタ：なし
試料セル：なし	パルス処理時間：P 3
定量補正法：スタンダードレス	

3　結果

(1)　形状観察

光をほとんど通さない，濃い紺色のガラスである（写真1）。

エタノールに浸し，透過光により撮影したものである。内部には気泡が見られる。表面の凹凸と同様，きれいな円形をしている（写真2）。このことから，延伸して成型されたものではなく，鋳型を用いて製作されたものと思われる。

(2)　蛍光X線分析

分析結果にはスペクトル，質量濃度，蛍光X線強度を示した。ここでいう質量濃度は，標準試料を用いないFPM定量による値であり，ひとつの目安とする。

①ガラスの種類

スペクトルを見ると，微量の鉛（Pb）のピークも見られるもののけい素(Si)が7割を超え，カリウム（K），カルシウム（Ca）も顕著であり，カリ石灰ガラス（K_2O-CaO-SiO_2系）であると判断した。

②着色剤

試料は，鉄(Fe)，銅（Cu）のピークも見られる。発色は鉄及び銅によるもので，それぞれを添加したものと思われる。

写真1

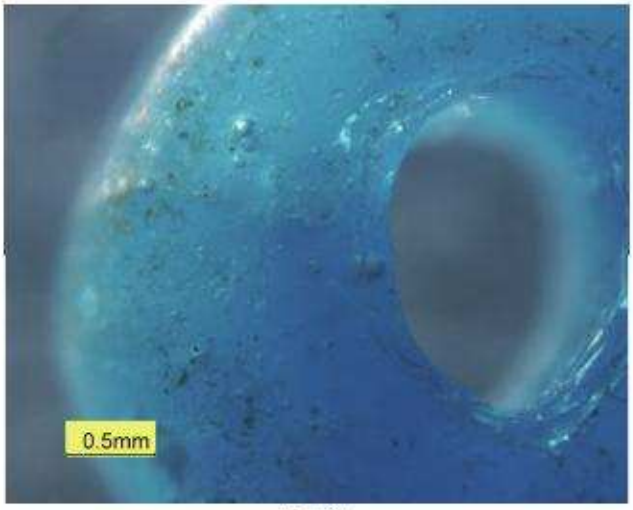


写真2

表　判定量結果

元　素	ラ イ ン	質量濃度	強　度
		[%]	[cps/mA]
Al　アルミニウム	K	6.89	8.54
Si　けい素	K	72.47	168.72
K　カリウム	K	8.09	31.84
Ca　カルシウム	K	4.76	21.79
Ti　チタン	K	1.15	20.68
Fe　鉄	K	2.37	111.81
Cu　銅	K	3.24	202.07
Sr　ストロンチウム	K	0.14	14.24
Pb　鉛	L	0.89	20.18

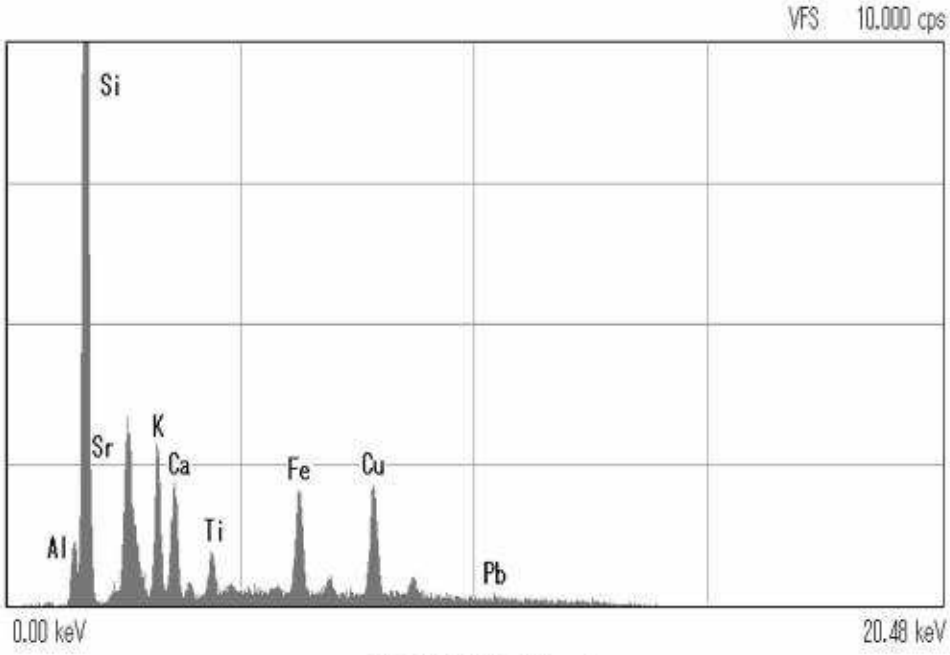


図　スペクトルチャート

※　参考

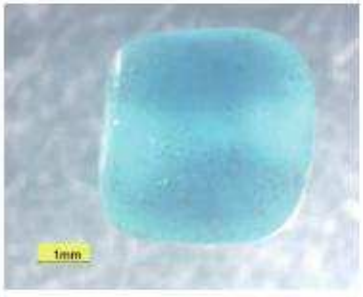


写真３（横から）

第９章　総括

稲荷山遺跡，宇都上遺跡，鎮守山遺跡からは，縄文時代，弥生時代，古墳時代，古代，中世とそれぞれの時代に相当する遺構が検出され，遺物が出土している。ここでは，遺跡毎に特徴的な遺構や遺物について，各時代・時期に分けて述べる。

第１節　稲荷山遺跡

１　縄文時代早期

遺構はⅥ層で集石遺構が２基検出され，遺物は石器が３点出土しただけであった。２基の集石は約 30 m離れていて，１基は礫集中（２号）で，もう１基は散礫（１号）で構成されていた。今回の調査では縄文時代早期の遺構・遺物の発見は以上であるが，調査区域外に遺構・遺物が残存している可能性もあり，バイパス開通後の周辺開発には注意を要する。

２　縄文時代晩期～弥生時代前期

遺構は竪穴住居跡３軒，土坑３基が検出された。遺構で注目されるのは，埋土中から刻目突帯文土器が出土した１号・２号竪穴住居跡である。１号住居跡内からは胴部片が１点，２号住居跡内からは口縁部片１点と胴部片１点が出土した。

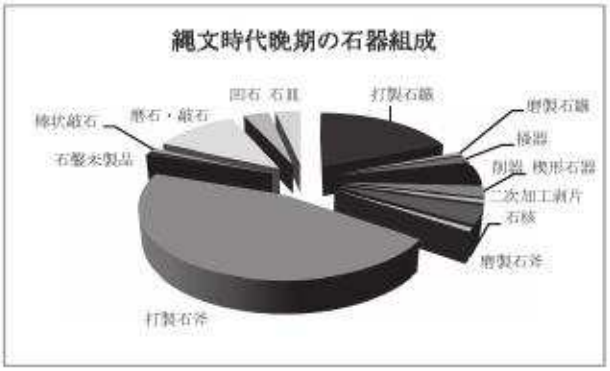
１号住居跡内の胴部片は，床面から約 10cm 上面で出土した。２号住居跡内の２点は，床面から約 10cm と約 20cm 上面で出土した。なお，３号住居跡内からは突帯文土器は出土しなかったが，検出状況や住居跡周辺から突帯文土器が出土していることなどから，１号・２号同様に突帯文期の住居跡であると想定される。

本遺跡では，平成 20 年度の本調査でも刻目突帯文土器が多く出土したことから，集落が近辺にあると予想されたが，突帯文期の住居跡が検出されたことで，遺跡の中心地の一角を確認したことにつながったとの所見を得た。（註１）

次に，包含層から出土した遺物はⅣ層出土が主体を占める。出土区域に着目すると，ＧＨ－12 ～ 15 区，Ｇ－20 ～ 22 区及びＣ－25 区に集中している。遺物の内，土器は次の３つに大別できる。第１は縄文時代晩期の黒川式土器である。器種は粗製深鉢（９～ 29），精製浅鉢・鉢（30 ～ 56），半粗半精製土器（57 ～ 73）で構成される。第２は弥生時代前期に該当する板付Ⅱ式土器で，器種は壺（74 ～ 76）で構成される。第３は縄文時代晩期末から弥生時代前期の刻目突帯文土器（77 ～ 128）である。なかでも本遺跡では，刻目突帯文土器の出土が顕著であった。刻目突帯文土器が主体を占める遺跡は，大隅半島では垂水市宮下遺跡，鹿屋市吾平町中尾遺跡，志布志市志布志町稲荷迫遺跡など数えるほどしかなく，貴重な資料を得ることができた。

本遺跡で出土した刻目突帯文土器は，完形復元できた個体はなく口縁部片が主であった。口縁部形態に着目すると，内傾するタイプと外反するタイプの大きく２つのタイプに分けられる。貼り付けられている突帯も１条のもの，または２条のものである。

一方，石器は縄文時代晩期の打製石鏃をはじめ 14 器種 116 点が出土した。下に出土石器の組成をグラフで表した。器種別の出土割合では，打製石斧（石製土掘具）が 46％と最も多く，ついで打製石鏃の 19％である。



また，本遺跡からは加工具である石錘の未製品が出土した。石錘の体部上半両側縁にみられる器面調整剥離は，捻れを解消するために施されたもので，その側縁は幅を決め込むために丁寧に敲打されている。表面の下半右側縁に加えられた器面調整剥離は，右側縁の曲がりだけを解消している。また，同側縁裏面には擦痕面があるため，刃部を予定している部分の幅は極端に狭くなるとともに全体が短くなり，さらに左側縁との捻れがよりひどくなることが予見される。よって，体部下半左側縁からの調整，頭部調整及び刃部の研出しの前に製作を放棄したと思われる。

３　古墳時代

遺構は竪穴住居跡５軒，竪穴遺構１基，土坑２基が検出された。ここでは，竪穴住居跡の時期及び２号～４号住居跡周辺で集中して出土した土器群と住居跡との関係について検討を行う。

(1) 竪穴住居跡の時期について

①　１号・５号住居跡

１号住居跡内の出土遺物は成川式土器の小破片で，出土数も少なく，型式比定は困難であった。また，５号住居跡内からの出土遺物はなかった。そのため，１号・５号住居跡の時期は不明である。

② 2号住居跡

床面直上で出土した甕の口縁部2点（214・215）は，器形が緩やかに外反する特徴から，成川式土器の東原式土器段階であると考えられる。次に，埋土から出土した甕に着目すると，埋土の中位～下位では東原式土器段階（216・217）のものが出土し，埋土の中位～検出面では口縁部の器形が内弯する特徴をもつ成川式土器の笹貫式土器段階（218・220・221）のものが出土した。このように，2号住居跡内では2つの段階の甕が混在して出土したが，床面直上及び埋土の下位から東原式土器段階の甕が出土したことから，2号住居跡はこの時期であると考えられる。

③ 3号・4号住居跡

3号住居跡の埋土からは笹貫式土器段階（227）が，4号住居跡の埋土からは東原式土器段階（229）が出土した。しかし，切り合いの先後関係に着目すると，4号→3号→2号の順に建てられおり，2軒とも2号住居跡より前に建てられたことがわかる。このことから，3号・4号住居跡は東原式土器段階の時期と考えられる。

(2) 土器群と住居跡との関係について

ここでは，2号～4号住居跡周辺出土の土器群と住居跡との関連について検討する。

第51図（P.67）では，甕の口縁部～胴部片及び完形復元のものを取り上げて，接合状況と出土レベルを示している。図から読み取れることを以下にまとめた。

○ 出土レベルは，137.4 ～ 137.0 mの範囲内である。
○ 東原式土器段階（233 ～ 238）と笹貫式土器段階（239 ～ 241）の2時期の土器が混在して出土している。
○ 周辺出土の土器群は，2号住居跡の埋土中位～上位で出土した土器（241：笹貫式土器段階）や4号住居跡の埋土上位で出土した土器（233：東原式土器段階・241）と接合している。

また，土器の割れ口に着目すると，割れ口はシャープであまり摩滅を受けていないことから，流れ込みではなく人為的に廃棄した可能性が考えられる。

以上のことから，2号～4号住居跡周辺は，2号～4号住居跡（東原式土器段階の時期）が廃絶された後に，笹貫式土器段階の時期の人々が土器の廃棄場として利用したと考えられる。

(3) 包含層の出土遺物について

遺物は主にⅣ層で出土した。成川式土器の甕のⅠ類は東原式土器段階，Ⅱ類は笹貫式土器段階に比定される。器種は甕のほかに，壺・鉢・高坏・坩など多種であった。その他，土製紡錘車・須恵器・軽石製品等が出土した。

4 古代・中世

遺構は溝状遺構が4条検出された。2号～4号は並行しており，北から南方向へ下る。4号溝の埋土上位では鉄剣が出土した。鉄剣は本文で述べたように扁平な軽石の礫を被せるようにして平置きで出土しており，溝廃絶を意識した埋納の可能性も考えられる。

また，2～4号溝周辺（G－13区）の包含層では，雁又鏃・鉄鏃・鉄滓などの鉄製品が出土した。出土地点は急傾斜地の谷部に当たることから，これら鉄製品は出土地点の上位の高台，若しくは傾斜地からの流れ込みの可能性がある。遺物は鉄製品の他に，須恵器3点と土師質土器2点が出土したのみである。須恵器の出土がほとんどない理由については，「大隅半島において須恵器窯跡の発見例が報告されておらず，この地域で須恵器の生産がなされていなかったことを示唆しているのではないか」との所見を得た。（註2）

（園師　洋之）

第2節 宇都上遺跡

1 縄文時代

本遺跡は，平成17・18年度にA－28・29区より北側区域の本調査を実施し，その調査結果は報告書（県埋文センター2008）に掲載されている。それによると，縄文時代の調査成果として，後期の集石遺構2基の検出と，市来式土器・丸尾式土器等の後期土器及び石鏃・石斧・敲石等の石器の出土が報告されている。

今回の縄文時代の調査では，遺構は検出されなかったが，遺物は早期末・前期・後期・晩期の土器が出土した。中でも後期及び晩期の土器が多くを占めていた。

後期土器ではⅢ類の市来式土器，Ⅳ類の丸尾式土器などの後期後半の土器が多く出土している。先述のとおり前回の調査でも後期土器が出土していること，また，南側に隣接する早山遺跡では昭和60年度に鹿屋市教育委員会が実施した発掘調査で後期土器が出土していること，さらに，本遺跡の北側に位置する領家西遺跡・天神平溝下遺跡でも後期土器が出土していることから，早山遺跡から領家西遺跡周辺は縄文時代後期の生活跡が窺える。

晩期土器はⅦ類の粗製深鉢と精製浅鉢が出土し，未掲載遺物も含めて全て黒川式土器である。前回の調査では晩期土器は出土しなかったが，本遺跡と近接する領家西遺跡・稲荷山遺跡・鎮守山遺跡では黒川式土器が出土している。

石器は，Ⅲ層・Ⅳ層から縄文時代晩期のものが出土した。出土数は少なく，石器は未掲載遺物も含め17点であった。器種は，打製石鏃・楔形石器・打製石斧・棒状敲石・磨石・凹石・軽石製品の7器種であった。

平成17・18年度の調査でも石器の出土数は少なく，打製石鏃・スクレイパー・磨製石斧など9器種23点が報告されている。また，本遺跡の東側に隣接する天神平溝下遺跡では打製石鏃・スクレイパーなど8器種8点のみの出土であり，本遺跡を含め周辺遺跡では石器の出土数が少ない。

2　古墳時代

遺構は溝状遺構が1条検出された。遺構の性格については，削平を受けたり，調査区外へ延びたりしていることから，詳細は不明である。

遺物は成川式土器が出土した。甕の1類は東原式土器段階，Ⅱ類は笹貫式土器段階に比定される。器種は甕のほかに，壺・高坏・鉢等が出土した。

3　中世以降

遺構は道路状遺構が1条検出された。Ⅲ層上面で検出されたが，遺構に伴う遺物の出土はなく，周辺からもⅢ層該当の遺物は出土しなかった。よって，遺構の帰属時期は不明である。

前回の調査では，硬化面が顕著に見られる古代・中世の道跡が6条検出されている。今回の調査で検出された道路状遺構も同時期の可能性が考えられる。

また，今回検出された遺構を道路状遺構と呼称した理由としては，硬化面の広がりが疎らであったことが挙げられる。硬化面が顕著に見られる箇所では約10cmの厚さが確認されたが，場所によっては硬化面が見られないところもあった。よって道跡とは断定せずに，道路状遺構という名称を用いることとした。

一般国道220号古江バイパス建設に伴い，過年度に調査を実施した北原中遺跡・領家西遺跡・天神平溝下遺跡など，宇都上遺跡周辺の遺跡では古代・中世の遺構や遺物が発見されている。これらの遺構や遺物との関係性を考えていくことが今後の課題である。

（原　栄子）

第3節　早山遺跡

今回の調査では，表土直下の層が主にシラスまたは大隅降下軽石の堆積層であることが確認され，遺構・遺物は発見されなかった。

しかし，今回の調査範囲区より西側の箇所を昭和60年度及び平成18・19年度に鹿屋市教育委員会が発掘調査を実施しており，調査の結果，遺構・遺物が発見されている（鹿屋市教委1986・2009）。主な遺構・遺物は表1のとおりである。

表1　年度別の発掘調査の結果一覧

調査年度	時代	遺構	遺物
昭和60	縄文後期	なし	深鉢
	縄文晩期	なし	黒川式土器
	弥生	なし	甕・壺
	古墳	住居跡2軒 土坑4基	成川式土器（甕・壺・高坏・坩等），須恵器，軽石製品
平成18・19	縄文早期	集石遺構2基 土坑4基 石器製作場1基	打製石斧・磨石・敲石等
	古墳	なし	成川式土器（甕）

今回の調査区域では，区画整理及び造成により遺物包含層が削平されており，遺跡の性格を把握することは困難な状態であった。しかし，過年度の発掘調査では，近隣区域で縄文時代から古墳時代の遺構・遺物が発見されたことから，当時の人々がこの台地上で生活を営んでいたことが想定される。

（園師　洋之）

第4節　鎮守山遺跡

1　縄文時代早期

遺構はⅥ層で集石遺構が2基検出され，遺物は押型文土器が3点，打製石鏃が1点出土しただけであった。今回の調査では縄文時代早期の遺構・遺物の発見は以上であるが，調査区域外に遺構・遺物が残存している可能性もあり，バイパス開通後の周辺開発には注意を要する。

2　縄文時代晩期

遺構は検出されなかったが，遺物はⅢ層・Ⅳ層から出土した。土器は深鉢・浅鉢・半粗半精製土器が出土し，黒川式土器に比定される。石器は出土数が少なく，未掲載物も含めて23点であった。器種は，打製石鏃・有茎石鏃・削器・打製石斧・敲石・凹石・石皿が出土した。

3　古墳時代

遺構は竪穴住居跡20軒，溝状遺構2条，土坑1基が検出された。なかでも注目されるのが，住居跡20軒中14軒が切り合い関係をもつことと，2軒の住居跡内（16号・19号）の地床炉に鉢が埋設されていたことである。また，竪穴住居跡の平面プランは多くが隅丸方形で，不定形を呈しているのは2軒であった。住居跡内部の構造は，貼り床を行い，地床炉・柱穴・土坑などの付帯構造を伴う住居跡が見られた。

ここでは，竪穴住居跡について以下の３つの観点で検討する。

(1) 竪穴住居跡の分類について

20 軒の竪穴住居跡について，

- 形状
- 内部の付帯構造（貼り床・地床炉・土坑）の有無
- 床面積

の３つの要素で分類を行った。

なお，完全な形状で検出されなかった住居跡の床面積は推定値で表した。また，柱穴の本数及び位置も，竪穴住居跡の構造から看過できないが，20 軒すべての竪穴住居跡で柱穴は検出されなかったため，今回は分類の要素に含めない。

表２　鎮守山遺跡検出の竪穴住居跡の分類

住居番号	形　状	貼り床	地床炉	土坑	床面積（㎡）
1	隅丸方形	有	無	有	(5.75)
2	—	無	無	無	—
3	隅丸方形	有	有	無	20.70
4	隅丸方形	有	有	無	—
5	隅丸方形	有	無	無	—
6	隅丸方形	無	無	無	—
7	隅丸方形	有	無	無	—
8	隅丸方形	有	有	無	14.04
9	隅丸方形	有	無	無	(14.04)
10	隅丸方形	有	有	有	8.70
11	隅丸方形	有	有	無	—
12	隅丸方形	有	有	有	(8.41)
13	不定形	有	無	有	(7.46)
14	隅丸方形	有	有	有	—
15	隅丸方形	有	無	無	(12.66)
16	隅丸方形	有	有	無	9.30
17	不定形	有	有	無	(7.06)
18	隅丸方形	有	無	有	27.56
19	隅丸方形	有	有	有	(18.04)
20	隅丸方形	有	有	無	6.00

※　床面積の（　）内の値は，推定値を表す。

表２の結果から，本遺跡で検出された住居跡についてまとめると，次のようになる。

① 住居跡の形状の多くは隅丸方形で，不定形は２軒のみである。

② 貼り床が伴うものは 18 軒，地床炉が伴うものは 11 軒，土坑が伴うものは７軒であった。貼り床及び地床炉を伴う住居跡が多い。

③ 貼り床・地床炉・土坑の３つ全てを伴っているのは，10 号・12 号・14 号・19 号住居跡の４軒であった。一方，３つ全てを伴っていないのは２号・６号住居跡の２軒のみであった。

④ 床面積は，10㎡未満が７軒，10㎡以上は６軒であった。

(2) 竪穴住居跡の時期について

切り合い関係をもつ 14 軒の住居跡を含めた 20 軒の住居跡が建てられた時期についてである。切り合いの先後関係，住居内の出土遺物及び自然科学分析の結果をもとに，住居跡が建てられた時期の復元を試みる。

下記の表３は，各住居跡内で出土した炭化物の放射性年代測定の結果をもとに，年代の古い順に表記したものである。各住居内から出土した土器も併せて表記した。

表３　住居跡内出土炭化物の放射性年代測定

No.	試料採集箇所	14C 年代	年代	時代	主な遺構内遺物
12 号	埋土中	1,800 ± 20	2C 中～ 4C 前	古墳前期	—
17 号	地床炉内	1,770 ± 30	3C 中～ 4C 前	古墳前期	東原
11 号	地床炉内	1,670 ± 20	4C 後～ 5C 前	古墳中期	笹貫
4 号	地床炉内	1,610 ± 30	5C 前～ 6C 前	古墳中期～後期	笹貫
9 号	埋土中	1,610 ± 30	5C 前～ 6C 前	古墳中期～後期	—
3 号	地床炉内	1,580 ± 30	5C 中～ 6C 前	古墳中期～後期	笹貫
16 号	埋土中	1,570 ± 30	5C 中～ 6C 前	古墳中期～後期	笹貫
14 号	地床炉内	1,560 ± 30	5C 中～ 6C 前	古墳中期～後期	笹貫
18 号	埋土中	1,550 ± 30	5C 中～ 6C 前	古墳中期～後期	笹貫
19 号	埋土中	1,550 ± 30	5C 中～ 6C 前	古墳中期～後期	笹貫
20 号	埋土中	1,550 ± 30	5C 中～ 6C 前	古墳中期～後期	—
8 号	埋土中	1,540 ± 30	5C 中～ 6C 前	古墳中期～後期	笹貫
10 号	地床炉内	1,520 ± 30	6C 中～後	古墳中期～後期	笹貫

表３から，今回の調査で検出された 20 軒の住居跡のうち，最も早い時期に建てられた可能性があるのは 12 号住居跡と 17 号住居跡であることがわかる。

17 号住居跡の埋土内からは，口縁部が外反する特徴をもつ東原式土器段階と思われる甕が出土していることから，２軒はこの時期に建てられたと想定される。

また，13 号住居跡の埋土内からは 17 号住居跡と同じく東原式土器段階の甕が出土し，５号・６号住居跡の埋土内からは刻目が細かくてシャープな作りをしている東原式土器段階と思われる壺（69・70・72）が出土した。

さらに，７号住居跡の埋土内からも東原式土器段階の甕（74 ～ 76）が出土していることから，５号～７号住居跡もこの時期に建てられたと思われる。なお，この３軒は切り合いの先後関係から，６号住居跡→５号住居跡→７号住居跡の順に建て替えられたことがわかる。

以上のことから，12 号住居跡・13 号住居跡・17 号住居跡・（６号住居跡→５号住居跡→７号住居跡）の６軒は，東原式土器段階に建てられたことが想定される。

次に建てられたと想定されるのは，11 号住居跡と２号住居跡である。11 号住居跡は表３の結果及び埋土内から出土した笹貫式土器段階の甕（89・90）から判断した。

また，２号住居跡の埋土内からは口縁部が直行気味の甕（53・54）が出土している。この器形の土器は，辻堂

原式土器段階～笹貫式土器段階のものと思われる。

よって，11号住居跡と2号住居跡の2軒は，この時期に建てられたことが想定される。

その後に建てられたと想定されるのは，表3及び住居跡内の土器から，4号住居跡・3号住居跡・1号住居跡・9号住居跡・14号住居跡・15号住居跡であると思われる。

4号住居跡と3号住居跡は，切り合いの先後関係から，4号住居跡→3号住居跡の順に建て替えられたことがわかる。また，両住居跡内の床直上からは，笹貫式土器段階の甕・壺（59・64・66）が出土している。さらに，1号住居跡の埋土内から出土した壺（52）は，3号住居跡の床直上で出土した壺（64）と同一個体であると思われることから，1号住居跡も笹貫式土器段階の範疇に入ると考えられる。

9号住居跡の時期については，埋土内の土器から型式判断はできなかったが，表3の結果からの笹貫式土器段階範疇に入ると判断した。14号・15号住居跡は，切り合いの先後関係は不明であるが，埋土内から笹貫式土器段階の甕が出土している。

以上のことから，（4号住居跡→3号住居跡）・1号住居跡・9号住居跡・14号住居跡・15号住居跡の6軒は笹貫式土器段階の時期に建てられたことが想定される。

16号住居跡の埋土内からは，辻堂原式土器段階～笹貫式土器段階と思われる，口縁部が直行気味の甕（107）が出土した。一方，数軒の住居跡と切り合い関係にある2号溝に着目すると，この溝は16号住居跡に切られているものの，12号～15号住居跡を切っている。つまり，16号住居跡は笹貫式土器段階の14号・15号住居跡より後に建てられたことが分かる。

よって，16号住居跡も笹貫式土器段階の時期に建てられたことが想定される。

また，8号住居跡・10号住居跡・18号～20号住居跡も表3または住居内の出土土器から，笹貫式土器段階の時期に建てられたことが想定される。

以上，本遺跡で検出された住居跡の時期を整理すると，次のようになる。

＜時　期＞	＜住居跡番号＞
古　い：東原式土器段階	12号・13号・17号 6号・5号・7号
↓ 辻堂原式土器段階～ 笹貫式土器段階	11号・2号
新しい：笹貫式土器段階	4号・3号・1号 9号・14号・15号 16号・8号・10号 18号・19号・20号

このように，本遺跡で検出された住居跡は，①東原式土器段階の時期，②辻堂原式土器段階～笹貫式土器段階，③笹貫式土器段階，の3時期に分けられ，各時期に人々が繰り返し住居を建て直して，集落を営んでいた様子が窺い知れる。

(3) 住居内の炉埋設土器について

まず，16号住居跡内の埋設土器は，底部から口縁部に向けて外弯気味に大きく開く器形をした鉢で，底部の脚は欠損した状態で炉内に据え置かれていた（図版28を参照）。炉内の断面に着目すると，鉢の底部付近には焼土層の広がりがあり，底部より上位は炭が混在した堆積土が確認された。また，鉢の内外面には強い焼成を受けた痕跡は見られなかった。

以上のような状況を踏まえ，中村氏からは次のような所見を得た。

① 土器内で焼成を行った痕跡があまり認められない。
② 炉断面にある炭層は，土器の外側にほぼ水平に堆積し，土器に切られている。
③ 土器内には炭化物もなく，土器内面も強い焼成を受けた痕跡がない。
④ 炉周辺の炭化物の散布も少ない。
⑤ 以上のことから，埋設土器は炉の廃棄時に埋められた可能性を指摘しておきたい。

（註3）

また，大西氏からは次のような所見を得た。

① 土器の煤付着状況は，この土器が煮炊きに利用されたものの，あまり強い火や熱を受けることなく，しかも，それほど長期に使用されたのではないことを示している。
② ①から，この土器は，煮炊き用に数回使用されたものが，最終的にこの場所に設置されたが，そこでは火熱にさらされることはなかったと考えられる。

（註4）

次に，19号住居跡内の埋設土器である。平底で口縁部が内弯気味の器形をした鉢が，炉内に据え置かれていた。炉内の断面状況は，鉢の胴部より上位には黒色土（炭や赤化した焼土が混在）が堆積し，胴部より下位には暗褐色土が堆積していた。

この点に関して，大西氏からは次のような所見を得た。

① 土器のすぐ外側の土が変色していないことから，土器内で火が焚かれた可能性は少ないと言える。
② 土器がこの場所に埋設された後に，強い火熱にさらされた状況が窺えない。
③ よって，煮炊きに使用された土器が住居もしくは炉の廃絶に伴い，この場所に埋設されたと考えられる。

（註5）

以上のような所見を踏まえ，本遺跡で出土した16号・19号住居跡の炉内の土器は，住居もしくは炉の廃棄の際に埋設されたものとここでは報告したい。

なお，今後の課題としては先述のような解釈をとった場合，民俗風習などとの関連性を考証していく必要性が挙げられる。

(4) 包含層の出土遺物について

遺物は主にⅣ層から出土した。土器は成川式土器が出土し，甕はⅠ類が東原式土器段階，Ⅱ類は笹貫式土器段階に比定される。器種は甕のほかに，壺・鉢・高坏・坩など多種であった。出土区は，竪穴住居跡が多く検出されたＧＨ－６・７区に集中している。

また，石器は砥石が未掲載のものも含めて７点と石製紡錘車が１点出土したのみであった。

4 古代

遺構は検出されず，出土遺物は土師器３点と須恵器１点のみであった。また，１グリッドに１点出土という散在した出土状況であった。

（園師 洋之）

第５節 まとめ

ここまで，遺跡毎に特徴的な遺構・遺物について述べた。今回の調査で特筆されるのは，稲荷山遺跡と鎮守山遺跡で検出された古墳時代の竪穴住居跡である。

稲荷山遺跡で検出された５軒の住居跡のうち３軒は，東原式土器段階の時期に帰属することが分かった。今回の調査では，この時期以降の住居跡は検出されなかったが，笹貫式土器段階の範疇に入る土器が多数出土したことから，調査区外にこの時期の住居跡が残存している可能性が窺える。

一方，鎮守山遺跡で検出された住居跡は，①東原式土器段階，②東原式土器段階～笹貫式土器段階，③笹貫式土器段階の３つの時期に帰属することが分かった。なかでも，半数以上は笹貫式土器段階の時期に帰属している。

鎮守山遺跡の住居跡が集中して検出されたＧＨ－６・７区の南東側及び北西側は，緩やかに傾斜しながら下る地形になっている。つまり，このＧＨ―６・７区は遺跡の中でも標高が一番高いところに位置する。このような地形条件も，住居が集中したり，繰り返し建て替えられたりした要因の一つであろう。

（園師 洋之）

註１ 本田道輝氏（鹿児島大学法文学部教授）

註２ 上村俊雄氏（鹿児島国際大学国際文化学部教授）

註３ 中村直子氏（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター准教授）

註４・５ 大西智和氏（鹿児島国際大学国際文化学部教授）

<引用・参考文献>

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004 『中野西遺跡 松山田西遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(76)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008 『鷺ヶ迫遺跡 北原中遺跡 宇都上遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(132)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2009 『下ノ原Ｂ遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(137)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2009 『領家西遺跡 天神平溝下遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(141)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012 『稲荷迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(169)

鹿児島県鹿屋市教育委員会 1986 『早山遺跡 宮の脇遺跡』鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(4)

鹿児島県鹿屋市教育委員会 2009 『早山遺跡』鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(85)

中摩浩太郎 1999 「南部九州古墳時代の竪穴住居類型の変異に関する一考察」『人類史研究』第11号 人類学研究会

中村直子 1987 「成川式土器再考」『鹿大考古』第６号

中村直子 2006 「居住遺跡からみた南九州弥生・古墳時代の人口変動」『鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集』鹿児島大学考古学研究室25周年記念論集刊行会

写　真　図　版